

一般国道9号（東伯中山道路）の改築に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ

鳥取県東伯郡琴浦町

# 上伊勢第1遺跡 三保第1遺跡

2005

財団法人 鳥取県教育文化財団  
国土交通省 倉吉河川国道事務所



1. 上伊勢第1遺跡・三保第1遺跡 調査後風景（北東から）



2. 上伊勢第1遺跡 畠完掘状況（南から）





1. 上伊勢第1遺跡 畠1完掘状況（北東から）



2. 三保第1遺跡 弥生時代集石群検出状況（北東から）

# 序

近年、鳥取県では妻木晩田遺跡、青谷上寺地遺跡をはじめとする古代の重要な遺跡の発見が相次いでおり、当時の集落の姿や暮らしの様子が具体的に語られるようになりつつあります。

先人が残した素晴らしい遺産を後世に伝承することは、現在に生きる私たちの重要な責務です。

ところで、県内においては、現在、山陰自動車道の整備が着々と進められているところではありますが、当財団は、国土交通省からの委託を受け、この事業に係わる一般国道9号（東伯中山道路・名和淀江道路）の改築に先立つ埋蔵文化財の発掘調査を実施してきました。

そのうち、琴浦町にある上伊勢第1遺跡では古代～中世の畠跡、三保第1遺跡では弥生時代の集石遺構を確認するなど、この地域の歴史を解明するための重要な資料を確認することができました。発掘調査終了直前には、現地説明会を開催し多くの方々の御来場をいただいたところですが、このたび、調査結果を報告書としてまとめることができました。

この報告書が、今後、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財に対する理解がより深まることを期待しております。

本書をまとめるにあたり、国土交通省倉吉河川国道事務所、地元関係者の方々には、一方ならぬ御指導、御協力を頂きました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成17年3月

財団法人 鳥取県教育文化財団  
理事長 有田博充



# 序 文

一般国道9号は、起点の京都府京都市から山口県下関市にいたる、総延長約691kmの幹線道路であり、西日本日本海沿岸地域の産業・経済活動の大動脈として、地域住民の生活と密着し大きな役割を果たしています。

このうち、国土交通省倉吉河川国道事務所は、東伯郡湯梨浜町から米子市（鳥取－島根県境）までの76.6kmを管轄しており、時代の要請に沿った各種の道路整備事業を実施しているところです。

東伯中山道路は、東伯郡琴浦町から西伯郡中山町にかけての、国道9号の渋滞緩和、荒天時の交通障害の解消、また、災害時の緊急輸送の代替道路確保、などを目的として計画された高規格幹線道路（自動車専用道路）であり、鋭意事業に着手しているところです。

このルートには、多数の埋蔵文化財包蔵地がありますが、鳥取県教育委員会と協議を行い、文化財保護法第57条の3の規定に基づき、鳥取県教育委員会教育長に通知した結果、事前に発掘調査を実施し、記録保存を行うこととなりました。

平成16年度は、「上伊勢第1遺跡」、「三保第1遺跡」、「久蔵谷遺跡」、「化粧川遺跡」、「八幡遺跡」、「中道東山西山遺跡」、「福留遺跡」、「湯坂遺跡」、「南原千軒遺跡」の9遺跡について財団法人鳥取県教育文化財団と発掘調査の委託契約を締結し、同埋蔵文化財センターによって発掘調査が行われました。

本書は、上記の「上伊勢第1遺跡」、「三保第1遺跡」の調査成果をまとめたものです。この貴重な記録が、文化財に対する認識と理解を深めるため、ならびに、教育および学術研究のために広く活用されることを願うと同時に、国土交通省の道路事業が、文化財保護に深い関心を持ち、記録保存に努力していることをご理解いただければ幸いです。

事前の協議をはじめ、現地での調査から報告書の編集にいたるまで御尽力いただいた財団法人鳥取県教育文化財団の関係者に対して、心から感謝申し上げます。

平成17年3月

国土交通省 倉吉河川国道事務所  
所 長 嘉 本 昭 夫

# 例 言

1. 本書は、一般国道9号（東伯中山道路）の改築に伴い、財団法人鳥取県教育文化財団が国土交通省倉吉河川国道事務所の委託を受け、同埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した上伊勢第1遺跡<sup>かみいせだいいちいせき</sup>ならびに三保第1遺跡<sup>みほだいいちいせき</sup>の発掘調査報告書である。
2. 本書に収載した遺跡の所在地・調査面積は以下のとおりである。なお、東伯町は赤碕町と平成16年9月1日に合併し、琴浦町となっている。

**上伊勢第1遺跡** 所在地：鳥取県東伯郡琴浦町大字上伊勢字東松山377ほか  
調査面積：7,253㎡

**三保第1遺跡** 所在地：鳥取県東伯郡琴浦町大字三保字一本木293-1ほか  
調査面積：1,071.5㎡
3. 本書で使用した標高値は海拔高であり、2級基準点H10-2-5、3級基準点H10-3-8を基点としたものである。また、座標値は世界測地系に準拠した公共座標第V系のものであり、方位は公共座標北を示している。
4. 本書で使用した地図は、国土地理院発行の1/25,000地形図「赤碕」「伯耆浦安」、東伯町地形図1/5,000を複製・加筆したものである。
5. 出土遺物や土壌の分析を下記の諸氏に依頼し、有益な御教示をいただいた。また、そのうちのいくつかについては玉稿を賜った。記して感謝の意を表す。
  - ・石材鑑定 赤木三郎（鳥取大学）
  - ・炭化材の樹種同定 古川郁夫、船橋 晃（鳥取大学）
  - ・胎土分析 白石 純（岡山理科大学自然科学研究所）
  - ・軟X線分析 高橋 学（立命館大学）
  - ・土壌分析 宮路淳子（奈良文化財研究所）
  - ・花粉分析 金原正明（奈良教育大学）、金原正子、岡山邦子（古環境研究所）
6. 調査前・調査後空中写真撮影、炭化材の<sup>14</sup>C年代測定、粒度・円磨度分析、花粉分析・プラントオパール分析、打製石器の実測・浄写を業者に委託した。
7. 本書に使用した遺物の実測や実測図の浄写、遺構図の浄写などは、委託したものを除き、文化財主事・調査員の指導のもと整理作業員が行った。
8. 本書に使用した遺構・遺物写真は、委託したものを除き、文化財主事・調査員が撮影した。
9. 本書の作成および編集は玉木秀幸・浅田康行・前島ちかが行った。また、執筆は牧本哲雄・玉木・浅田・前島が分担して行い、文責を文末に記した。
10. 本書に関連する出土遺物および図面・写真等は、鳥取県埋蔵文化財センター（鳥取市国府町宮下1260）に保管している。
11. 発掘調査中に、高橋 学氏、宮路淳子氏、深瀬亜紀氏から畠について現地指導を仰いだ。記してお礼申し上げる。



# 凡 例

1. 出土遺物に用いた遺跡の略号は以下のとおりである。

上伊勢第1遺跡：上イセ1

三保第1遺跡：ミホ1

2. 本書の遺構全体図中などにおいて、遺構名を次のとおり省略して表記している。

竪穴住居：住 掘立柱建物：建 土坑：土 方形土坑：方 集石：集

また、本書に掲載した遺物は、土器・土製品・石器・金属製品に分類し、遺跡ごとにそれぞれを連番とし、土製品・石器・金属製品・玉類については、番号の前に次のとおり記号を冠している。

土製品：C 石器：S 金属製品：M 玉類：J

3. 本書に掲載した遺構・遺物の縮尺は明記しているが、おもなものについては次のとおり統一している。

遺構 竪穴住居：1/40・1/80 掘立柱建物：1/80 土坑：1/40

集石：1/40 墓：1/40

遺物 土器・土製品：1/4 石器：1/1・1/4・1/5・1/10

金属製品：1/1・1/4 玉類：1/1

4. 本書に掲載した遺物実測図のうち、縄文土器・弥生土器・土師器・陶磁器の断面を白抜き、須恵器の断面を黒塗り、土製品・石器・金属製品などの断面を斜線で表現している。

5. 遺物観察表の法量記載における数値は最大値を表している。なお、口径の推定復元値には数値の前に\*を付している。

6. 本書で掲載した遺構図中の地山や貼り床範囲、被熱範囲、土器に塗布された赤彩を下記のとおり表現している。



7. 図中における出土遺物の表記は、土器：●、石器：■、金属製品：▲、ガラス製品：★である。

8. 本書で使用した遺構名は調査時のものと異なっており、その対照表は11、96頁に示している。

9. 本書に用いた遺構・遺物の時代区分については、一般的な政治史区分に準拠しているが、それを補うために文化史区分・世紀を併用している。古墳時代は7世紀前半まで、古代は7世紀後半から12世紀中頃までとし、中世は12世紀後半から16世紀中頃を指し、近世は16世紀後半以降として捉えている。弥生時代から中世の土器類の編年・年代観については、以下の文献を参考とした。

巽淳一郎 1983 「古代窯業生産の展開—西日本を中心として—」『文化財論叢』  
清水真一 1992 「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年—山陽・山陰編』木耳社  
八峠 興 1998 「山陰における中世土器の変遷について」『中世土器の基礎研究Ⅻ』日本中世土器研究会  
牧本哲雄 1999 「古墳時代の土器について」『長瀬高浜遺跡Ⅷ・園第6遺跡』鳥取県教育文化財団  
小口英一郎 2003 「八橋第8・9遺跡における6～7世紀の土器編年」『八橋第8・9遺跡』鳥取県教育文化財団

# 目 次

巻頭カラー  
序  
序文  
例言  
凡例  
目次

<b>第1章 調査の経緯</b> ..... (牧本哲雄)	1
第1節 調査に至る経緯 .....	1
第2節 調査の経過 .....	2
1. 上伊勢第1遺跡 .....	2
2. 三保第1遺跡 .....	3
第3節 調査の体制 .....	4
<b>第2章 地理的・歴史的環境</b> ..... (玉木秀幸)	5
第1節 地理的環境 .....	5
第2節 歴史的環境 .....	6
<b>第3章 上伊勢第1遺跡</b> .....	9
第1節 調査の概要 .....	9
1. 遺跡の概要 .....	9
2. 基本層序 .....	12
第2節 縄文時代の遺構・遺物 .....	15
1. 概要 .....	15
2. たわみ .....	17
3. 遺構に伴わない遺物 .....	17
第3節 弥生時代の遺構・遺物 .....	18
1. 概要 .....	18
2. 竪穴住居 .....	20
3. 掘立柱建物 .....	24
4. たわみ .....	25
5. 遺構に伴わない遺物 .....	26
第4節 古墳時代の遺構・遺物 .....	27
1. 概要 .....	27
2. 竪穴住居 .....	30
3. 掘立柱建物 .....	39
4. 土坑 .....	42
5. 方形土坑 .....	44
6. 硬化面 .....	44
7. 焼土面 .....	46
8. 溝 .....	46



9. 畦畔状遺構	55
10. 遺構に伴わない遺物	56
第5節 古代以降の遺構・遺物 (玉木、浅田)	57
1. 概要	57
2. 掘立柱建物	63
3. 土坑	63
4. 墓	66
5. 溝	69
6. 水田	71
7. 畠	72
8. 遺構に伴わない遺物	84
第6節 小結 (玉木)	85
(遺物観察表)	
<b>第4章 三保第1遺跡</b>	95
第1節 調査の概要 (浅田)	95
1. 遺跡の概要	95
2. 基本層序	97
第2節 縄文時代の遺物 (浅田)	99
1. 概要	99
2. 遺構に伴わない遺物	99
第3節 弥生時代の遺構・遺物 (浅田)	100
1. 概要	100
2. 土坑	100
3. 集石	102
4. 遺構に伴わない遺物	107
第4節 古墳時代の遺構・遺物 (浅田、前島)	108
1. 概要	108
2. 竪穴住居	108
3. 土坑	112
4. 集石	112
5. 溝	113
6. 遺構に伴わない遺物	118
第5節 その他の時期の遺構 (浅田)	119
1. 概要	119
2. 土坑	119
3. 溝	119
4. 畠	120
第6節 小結 (浅田)	121
(遺物観察表)	
<b>第5章 自然科学分析</b>	126
第1節 放射性炭素年代測定 (株式会社 加速器分析研究所)	126
第2節 上伊勢第1遺跡焼失住居跡から出土した炭化材の樹種 (古川郁夫、船橋 晃)	128

第3節	上伊勢第1遺跡の植物珪酸体	（株式会社 パレオ・ラボ）	131
第4節	上伊勢第1遺跡の花粉化石群集	（株式会社 パレオ・ラボ）	137
第5節	上伊勢第1遺跡の自然科学分析	（パリノ・サーヴェイ株式会社）	141
第6節	上伊勢第1・三保第1遺跡出土土器の胎土分析	（白石 純）	154
第7節	上伊勢第1遺跡における花粉分析	（金原正明、金原正子、岡山邦子）	160
第8節	上伊勢第1遺跡の軟X線分析	（高橋 学）	168
第9節	上伊勢第1遺跡から検出された古耕作土の土壌微細形態について	（宮路淳子）	173
<b>第6章</b>	<b>まとめ</b>		179
第1節	調査の成果	（玉木）	179
第2節	三保第1遺跡の弥生時代前期の遺構について	（浅田）	182

写真図版  
抄録

## 挿 図 目 次

<b>第1章</b>	<b>調査の経緯</b>		
第1図	琴浦町内一般国道9号（東伯中山道路） 関連遺跡位置図	1	
第2図	上伊勢第1遺跡・三保第1遺跡位置図	2	
<b>第2章</b>	<b>地理的・歴史的環境</b>		
第1図	琴浦町位置図	5	
第2図	周辺遺跡分布図	7	
<b>第3章</b>	<b>上伊勢第1遺跡</b>		
第1図	上伊勢第1遺跡位置図	9	
第2図	グリッド設定図	10	
第3図	調査区内土層断面図	13	
第4図	縄文時代遺構配置図	15	
第5図	たわみ1	16	
第6図	たわみ1出土遺物	17	
第7図	縄文時代遺構外出土遺物	17	
第8図	弥生時代遺構配置図	18	
第9図	竪穴住居1	19	
第10図	竪穴住居1出土遺物	20	
第11図	竪穴住居2	21	
第12図	竪穴住居1・2出土遺物	22	
第13図	竪穴住居3・出土遺物	23	
第14図	竪穴住居3出土遺物	24	
第15図	掘立柱建物1・出土遺物	24	
第16図	たわみ2・出土遺物	25	
第17図	たわみ3	25	
第18図	弥生時代遺構外出土遺物	26	
第19図	古墳時代遺構配置図	27	
第20図	古墳時代主要遺構配置図	28	
第21図	竪穴住居4・出土遺物	29	
第22図	竪穴住居5	31	
第23図	竪穴住居5出土遺物	32	
第24図	竪穴住居6・出土遺物	33	
第25図	竪穴住居7	35	
第26図	竪穴住居7出土遺物①	36	
第27図	竪穴住居7出土遺物②	37	
第28図	竪穴住居8・出土遺物	38	
第29図	竪穴住居9	39	
第30図	掘立柱建物2	39	
第31図	掘立柱建物3	40	
第32図	掘立柱建物4	41	
第33図	掘立柱建物5	41	
第34図	土坑1～7	43	
第35図	土坑8・出土遺物	44	
第36図	土坑9	44	
第37図	方形土坑1～5・出土遺物	45	
第38図	硬化面	46	
第39図	焼土面	46	
第40図	溝1	46	
第41図	溝2	47	
第42図	溝2出土遺物①	48	
第43図	溝2出土遺物②	49	
第44図	溝2出土遺物③	50	
第45図	溝3～6	51	
第46図	溝4・5出土遺物	52	
第47図	溝7・出土遺物	52	
第48図	溝8～10・出土遺物	53	
第49図	溝11・出土遺物	54	
第50図	畦畔状遺構・出土遺物	55	
第51図	古墳時代遺構外出土遺物	56	
第52図	古代以降遺構配置図①	57	
第53図	古代以降遺構配置図②	58	
第54図	古代以降遺構配置図③	59	
第55図	古代以降遺構配置図④	60	
第56図	古代以降遺構配置図⑤	61	
第57図	古代以降遺構配置図⑥	62	
第58図	掘立柱建物6	64	
第59図	掘立柱建物7	65	



第60図	土坑10	66
第61図	土坑11・出土遺物	66
第62図	土坑12	66
第63図	墓1・出土遺物	67
第64図	墓2・出土遺物	67
第65図	墓3・出土遺物	67
第66図	溝12	68
第67図	溝12出土遺物	69
第68図	溝13・出土遺物	69
第69図	溝14・出土遺物	70
第70図	溝15・出土遺物	71
第71図	水田土層断面図	72
第72図	畠変遷図	73
第73図	耕作痕1	74
第74図	畠1	75
第75図	耕作痕2	77
第76図	畠2	80
第77図	耕作痕3	81
第78図	畠1・2、耕作痕2・3土層断面図	83
第79図	古代以降遺構外出土遺物	84
<b>第4章 三保第1遺跡</b>		
第1図	三保第1遺跡位置図	95
第2図	土層断面位置図	97
第3図	1～3区土層断面図	98
第4図	4区土層断面図	99
第5図	縄文時代遺構外出土遺物	99
第6図	弥生時代遺構配置図	100
第7図	土坑1	101
第8図	土坑2・出土遺物	101
第9図	集石1・出土遺物	102
第10図	集石2～7・出土遺物	103
第11図	弥生時代遺構外出土遺物①	105
第12図	弥生時代遺構外出土遺物②	106
第13図	古墳時代遺構配置図	108
第14図	竪穴住居1・出土遺物	109
第15図	竪穴住居2・出土遺物	110
第16図	土坑3～7・出土遺物	111
第17図	集石8・出土遺物	112
第18図	溝1	113
第19図	溝2・出土遺物	114
第20図	溝3	115
第21図	溝3出土遺物	116
第22図	古墳時代遺構外出土遺物	118

第23図	遺構配置図	119
第24図	土坑8	120
第25図	溝4～6	120
第26図	畠土層断面図	120

## 第5章 自然科学分析の成果

第1図	基本層序土層・遺構面試料採取地点概略図	131
第2図	基本層序試料の機動細胞珪酸体分布図	134
第3図	遺構面試料の機動細胞珪酸体分布図	134
第4図	円磨度印象図	145
第5図	No.1 赤碓町(海砂)の粒度分布加積曲線	146
第6図	No.2 北条町(飛砂)の粒度分布加積曲線	146
第7図	No.3 加勢蛇川(川砂)の粒度分布加積曲線	147
第8図	No.4 溝12埋砂の粒度分布加積曲線	147
第9図	No.5 溝2～黒ボク間の砂質土の粒度分布加積曲線	148
第10図	No.6 畝間埋砂上層の粒度分布加積曲線	148
第11図	No.7 畝間埋砂下層の粒度分布加積曲線	149
第12図	No.8 調査区東壁上部砂層の粒度分布加積曲線	149
第13図	円磨度のヒストグラム	150
第14図	弥生時代前期甕の口縁形態による胎土の比較(K-Ca)	157
第15図	弥生時代前期甕の口縁形態による胎土の比較(Rb-Sr)	157
第16図	古墳時代初頭～後期の器種別による胎土の比較(K-Ca)	158
第17図	古墳時代後期(須恵器)の胎土比較(K-Ca)	158
第18図	上伊勢第1・三保第1遺跡出土須恵器の産地推定(K-Ca)	159
第19図	上伊勢第1遺跡における主要珪藻ダイアグラム	164
第20図	縄文時代後期以降における微地形変化	172
第21図	耕作土の画像解析	177
第22図	非耕作土の画像解析	177
第23図	土壌粒子の配列と孔隙率	177
第24図	土壌構造の形状	177

## 第6章 まとめ

第1図	条里復元図	181
-----	-------	-----

# 挿 表 目 次

## 第3章 上伊勢第1遺跡

表1	新旧遺構対照表	11
----	---------	----

## 第4章 三保第1遺跡

表1	新旧遺構対照表	96
----	---------	----

## 第5章 自然化学分析の成果

表1	放射性炭素年代測定結果	127
表2	上伊勢第1遺跡 竪穴住居3出土炭化材の樹種	129

表3	試料1g当たりの機動細胞珪酸体個数	133
表4	花粉化石産出一覧表	138
表5	粒度分析結果	144
表6	石英の円磨度の頻度分布	144
表7	上伊勢第1遺跡出土土器分析値一覧表	156
表8	三保第1遺跡出土土器分析値一覧表	156
表9	花粉分析結果	161
表10	珪藻分析結果	162

## 第6章 まとめ

表1	集落の変遷	179
----	-------	-----

# 文中写真目次

## 第3章 上伊勢第1遺跡

写真図版1	畠1表面剥ぎ取り風景	11
写真図版2	現地説明会風景	11
写真図版3	竪穴住居7遺物出土状況	34
写真図版4	永楽通寶出土状況	67
写真図版5	畠検出状況	73
写真図版6	畠の上面の様子	79
写真図版7	耕作痕2の底面の状況	79

## 第4章 三保第1遺跡

写真図版1	4区調査風景	96
写真図版2	東伯小学校児童見学風景	96

## 第5章 自然化学分析の成果

写真図版1	上伊勢第1遺跡竪穴住居3出土炭化材	130
-------	-------------------	-----

写真図版2	上伊勢第1遺跡の植物珪酸体	136
写真図版3	産出した花粉化石	140
写真図版4	砂分の偏光顕微鏡写真	151
写真図版5	石英粒の電子顕微鏡写真①	152
写真図版6	石英粒の電子顕微鏡写真②	153
写真図版7	上伊勢第1遺跡の花粉	166
写真図版8	上伊勢第1遺跡の珪藻	167
写真図版9	畝の土壌微細形態	178
写真図版10	下層および黒ボク土の微細形態	178
写真図版11	耕作土の微細形態①	178
写真図版12	耕作土の微細形態②	178
写真図版13	黒ボク土の微細形態①	178
写真図版14	黒ボク土の微細形態②	178

## 第6章 まとめ

写真図版1	調査区外溝検出状況	181
-------	-----------	-----

# 写真図版目次

## 巻頭カラー図版

巻頭図版1	1. 上伊勢第1遺跡・三保第1遺跡 調査後風景（北東から）
	2. 上伊勢第1遺跡畠完掘状況（南から）
巻頭図版2	1. 上伊勢第1遺跡 畠1完掘状況（北東から）
	2. 三保第1遺跡 弥生時代集石群検出状況（北東から）

## 第3章 上伊勢第1遺跡

PL.1	1. 上伊勢第1遺跡・三保第1遺跡 調査前遠景（南西から）
	2. 上伊勢第1遺跡縄文時代～古墳時代 完掘状況（上空から）
PL.2	1. たわみ1遺物出土状況（北東から）
	2. 竪穴住居1完掘状況（北西から）
	3. 竪穴住居2完掘状況（南西から）
	4. 竪穴住居3完掘状況（南から）
	5. 竪穴住居3炭化材検出状況（南から）
	6. 掘立柱建物1完掘状況（西から）
PL.3	1. 竪穴住居4遺物出土状況（東から）
	2. 竪穴住居5完掘状況貼り床除去前（西から）
	3. 竪穴住居6完掘状況貼り床除去前（北から）
	4. 竪穴住居7完掘状況（南から）
	5. 竪穴住居8完掘状況（北から）
	6. 竪穴住居9完掘状況（北西から）
PL.4	1. 掘立柱建物2完掘状況（東から）
	2. 掘立柱建物3完掘状況（北から）
	3. 掘立柱建物4完掘状況（南東から）
	4. 掘立柱建物5完掘状況（北西から）
	5. 土坑1完掘状況（東から）
	6. 土坑2完掘状況（南から）
PL.5	1. 土坑3完掘状況（東から）
	2. 土坑4完掘状況（北から）

	3. 土坑5完掘状況（北から）
	4. 土坑6完掘状況（西から）
	5. 土坑8完掘状況（西から）
	6. 土坑9完掘状況（西から）
PL.6	1. 方形土坑1～4完掘状況（西から）
	2. 調査区西側溝群完掘状況（南東から）
PL.7	1. 溝2遺物出土状況（南西から）
	2. 溝2遺物出土状況細部（南西から）
PL.8	1. 溝5～7完掘状況（南から）
	2. 溝4遺物出土状況（北から）
	3. 溝5遺物出土状況（北東から）
PL.9	1. 溝11杭跡検出状況（南西から）
	2. 溝11完掘状況（北西から）
	3. 掘立柱建物6完掘状況（北西から）
	4. 掘立柱建物7完掘状況（北から）
	5. 掘立柱建物7 Pit内礎板石検出状況
PL.10	1. 土坑10完掘状況（北から）
	2. 土坑11完掘状況（北から）
	3. 土坑12完掘状況（北西から）
	4. 墓1検出状況（北西から）
	5. 墓2検出状況（北東から）
	6. 墓3完掘状況（北から）
PL.11	1. 溝12完掘状況（南から）
	2. 溝13完掘状況（南から）
	3. 溝14完掘状況（南から）
	4. 溝15完掘状況（東から）
PL.12	1. 耕作痕1・2完掘状況（東から）
	2. 畠1完掘状況（北西から）
	3. 畠2完掘状況（東から）
PL.13	1. たわみ1出土遺物
	2. 竪穴住居1出土遺物
PL.14	1. 竪穴住居2出土遺物
	2. 竪穴住居3出土遺物
	3. 弥生時代遺構外出土遺物
PL.15	1. 竪穴住居1～3・遺構外出土遺物



- 2. たわみ2・縄文・弥生時代遺構外出土遺物
- PL.16 1. 竪穴住居4出土遺物  
2. 竪穴住居5出土遺物
- PL.17 1. 竪穴住居5出土遺物  
2. 竪穴住居7出土遺物
- PL.18 1. 竪穴住居7出土遺物
- PL.19 1. 竪穴住居7出土遺物  
2. 竪穴住居8出土遺物  
3. 溝2出土遺物
- PL.20 1. 竪穴住居7出土土師器  
2. 溝2出土土師器
- PL.21 1. 溝2出土遺物
- PL.22 1. 溝2出土遺物
- PL.23 1. 溝2出土遺物
- PL.24 1. 溝2出土遺物  
2. 溝4出土遺物  
3. 溝5出土遺物  
4. 溝7出土遺物  
5. 溝8出土遺物
- PL.25 1. 溝8出土遺物  
2. 溝10出土遺物  
3. 溝11出土遺物  
4. 溝2・古墳時代遺構外出土遺物
- PL.26 1. 溝12・古代遺構外出土遺物  
2. 溝13出土遺物  
3. 溝14出土遺物  
4. 溝15出土遺物
- PL.27 1. 墓1出土遺物  
2. 墓2出土遺物  
3. 古代遺構外出土遺物

#### 第4章 三保第1遺跡

- PL.28 1. 土坑1完掘状況(南から)  
2. 土坑2遺物出土状況(南から)  
3. 集石1検出状況(南西から)  
4. 集石2検出状況(南東から)  
5. 集石3検出状況(北から)  
6. 集石4検出状況(北から)
- PL.29 1. 集石5検出状況(南東から)  
2. 集石6・7検出状況(南東から)  
3. 集石群検出状況(東から)  
4. 溝1・竪穴住居1検出状況(西から)  
5. 竪穴住居1完掘状況(南東から)  
6. 竪穴住居2完掘状況(南から)
- PL.30 1. 土坑3完掘状況(南から)  
2. 土坑4完掘状況(北から)  
3. 土坑5完掘状況(南から)  
4. 土坑6完掘状況(南から)  
5. 土坑7完掘状況(南から)  
6. 集石8検出状況(北から)
- PL.31 1. 溝1底面検出状況(北西から)

- 2. 溝2遺物出土状況(東から)  
3. 溝2完掘状況(南東から)
- PL.32 1. 溝3甕出土状況(南から)  
2. 溝3甕出土状況(東から)  
3. 溝3坏蓋出土状況(北から)  
4. 溝3玉出土状況(南西から)  
5. 溝3完掘状況(南西から)
- PL.33 1. 溝4完掘状況(南東から)  
2. 溝6完掘状況(東から)  
3. 溝4・5完掘状況(北東から)  
4. 畠耕作土上面の様子(南から)  
5. 畠土層断面(北から)
- PL.34 1. 集石1出土遺物  
2. 土坑2出土遺物  
3. 集石4出土遺物  
4. 土坑2出土遺物
- PL.35 1. 竪穴住居1出土遺物  
2. 竪穴住居2出土遺物  
3. 溝2出土遺物
- PL.36 1. 溝3出土遺物
- PL.37 1. 溝3出土遺物
- PL.38 1. 1区遺構外出土遺物(暗褐灰色土)
- PL.39 1. 2区遺構外出土遺物(暗褐灰色土)  
2. 2区遺構外出土遺物(黒褐色土)
- PL.40 1. 2区遺構外出土遺物(黒褐色土)  
2. 溝3・遺構外出土遺物
- PL.41 1. 土坑2・溝3・3区遺構外出土遺物  
2. 3区遺構外出土遺物
- PL.42 1. 3区遺構外出土遺物  
2. 竪穴住居2出土直刃鎌

#### 第5章 自然科学分析の成果

- PL.43 上伊勢第1遺跡地域概念図
- PL.44 上伊勢第1遺跡立体図
- PL.45 上伊勢第1遺跡地質断面
- PL.46 上伊勢第1遺跡第7地点
- PL.47 上伊勢第1遺跡  
軟X線写真(第7地点断面)
- PL.48 上伊勢第1遺跡第8地点
- PL.49 上伊勢第1遺跡  
軟X線写真(第8地点平面)
- PL.50 上伊勢第1遺跡  
畝状遺構表面の生痕軟X線写真  
(第8地点平面)
- PL.51 上伊勢第1遺跡  
畝状遺構表面の生痕軟X線写真  
(第8地点平面)
- PL.52 上伊勢第1遺跡第9地点
- PL.53 上伊勢第1遺跡  
軟X線写真(第9地点断面)

# 第1章 調査の経緯

## 第1節 調査に至る経緯

本発掘調査は、一般国道9号（東伯中山道路）の改築に伴い、東伯郡<sup>ことうら</sup>琴浦町上伊勢地区および三保地区内の工事予定地に存在する埋蔵文化財包蔵地である上伊勢第1遺跡、三保第1遺跡の記録保存を目的としたものである。

当該地は、旧東伯町に所在するが、平成16年9月1日をもって西隣の旧赤碕町と合併し、新町名である琴浦町となった。

さて、山陰地方では、国道9号線の交通混雑緩和および将来の国土幹線道路整備として、山陰自動車道の整備事業が進められ、鳥取県中部地域では、東伯中山道路、北条道路、青谷羽合道路が自動車専用の高規格道路として計画・施工されている。

東伯中山道路の計画地内のうち、旧東伯町地内では<sup>なかお</sup>中尾第1遺跡、<sup>かみいせ</sup>上伊勢第1遺跡、<sup>みほ</sup>三保第1遺跡、<sup>いずちがしら</sup>井岡地頭遺跡、<sup>いずちなか</sup>井岡地中ソネ遺跡、<sup>さんばやし</sup>三林遺跡、<sup>かさみ</sup>笠見第3遺跡、<sup>なかみちひがしやまにしま</sup>中道東山西山遺跡、<sup>きゅうぞうだに</sup>久蔵谷遺跡、<sup>きゅうぞう</sup>久蔵峰北遺跡、<sup>みねきた</sup>蝮谷遺跡、<sup>まむしだに</sup>岩本遺跡、<sup>いわもと</sup>松谷中峰遺跡、<sup>やばせ</sup>八幡第8・9遺跡の多数の遺跡があり（第1図参照）、建設に先立



◆調査済 ◇16年度調査 ○本報告書収載遺跡

- |              |            |            |             |
|--------------|------------|------------|-------------|
| 1. 中尾第1遺跡    | 2. 上伊勢第1遺跡 | 3. 三保第1遺跡  | 4. 井岡地頭遺跡   |
| 5. 井岡地中ソネ遺跡  | 6. 三林遺跡    | 7. 笠見第3遺跡  | 8. 中道東山西山遺跡 |
| 9. 久蔵谷遺跡     | 10. 久蔵峰北遺跡 | 11. 蝮谷遺跡   | 12. 岩本遺跡    |
| 13. 八幡第8・9遺跡 | 14. 別所中峯遺跡 | 15. 松谷中峰遺跡 | 16. 化糞川遺跡   |
| 17. 福留遺跡     | 18. 八幡遺跡   | 19. 南原千軒遺跡 | 20. 湯坂遺跡    |

第1図 琴浦町内一般国道9号（東伯中山道路）関連遺跡位置図

## 第1章 調査の経緯

ち計画地内の遺跡および遺構の広がりを確認する必要性が生じた。このため、東伯町教育委員会が平成11年度から15年度にかけて、国庫補助事業として断続的に試掘調査を行うこととなった。当該地の試掘調査は、平成15年度に行われた。

この結果を受け、国土交通省中国地方整備局倉吉河川国道事務所は、鳥取県教育委員会事務局文化課と協議し、文化財保護法第57条の3に基づく発掘通知を行った上、鳥取県教育委員会事務局教育長の指示により財団法人鳥取県教育文化財団に記録保存のための事前調査を委託した。これにより、当財団が文化財保護法第57条に基づく発掘調査届を提出し、平成16年度に当財団埋蔵文化財センターが発掘調査を担当することとなった。

上伊勢第1遺跡は加勢蛇川<sup>かせいち</sup>左岸の微高地上にあり、その約1km西側の微高地上に三保第1遺跡が立地するという位置関係である（第2図参照）。（牧本哲雄）

## 第2節 調査の経過

### 1. 上伊勢第1遺跡

当遺跡は路体盛土部分の調査で、調査に先立ち平成16年3月に調査前航空写真撮影を行い、基準杭設置を4月8日、方眼杭設置を重機表土剥ぎ後、検出作業と併行して同年4月27日に業者委託し、調



第2図 上伊勢第1遺跡・三保第1遺跡位置図



査区内に10m間隔のグリッドを設けた。その結果、東西（X）軸を北からA～H、南北（Y）軸を東から1～8とした。グリッド名は、東西南北軸交点の北東側杭の名称をとって呼称し、座標値はD 2杭（X：-56800.000m、Y：-57290.000m）、G 8杭（X：-56830.000m、Y：-57350.000m）などとなった。標高値は、2級基準点H10-2-5の42.592m等を基準にした。

調査区内には農業用水路があり、調査区外へ迂回させる必要があったため、国土交通省倉吉河川国道事務所と協議し、仮設用水路を設置した後に重機による表土剥ぎ作業を4月15日から開始した。人力による遺構検出および完掘作業は4月26日から始め、途中調査区内南側にあった電柱の移設を待つて、農業用進入路部分の調査を行わなければならなかったこと、当初、遺構面は試掘調査の結果1面とされていたが、全面の調査を進めていくうちに、黒ボク上層または黒ボク中で遺構面が確認され、全面が2面、一部3面の遺構面の存在が確認されたことから、当初の計画を延長して9月10日まで行った。廃土は、用地内に仮置きした後、国土交通省によって場外搬出した。

検出作業の結果、弥生時代前期の竪穴住居3棟、掘立柱建物1棟、古墳時代の竪穴住居6棟、掘立柱建物4棟、土坑9基、溝11条、古代から中世の掘立柱建物2棟、土坑3基、墓3基、溝4条、畠2面および耕作痕3面などを調査した。

上伊勢第1遺跡の発掘調査面積は、1面が3,424㎡の2面、一部3面の計7,253㎡となった。

## 2. 三保第1遺跡

当遺跡は橋脚部分のみの調査で、東から1～4区に分けて調査を行った。3区では、町試掘調査によるT3で竪穴住居が検出されていた。

4月8日に基準杭の設置を業者委託し、座標値は、TB1（X：-56952.940m、Y：-58144.017m）、TB2（X：-56965.930m、Y：-58208.450m）などとなった。標高値は、2級基準点H10-3-8の39.201m等を基準とした。4月14日に重機による表土剥ぎ作業を行ったが、途中各橋脚の工事範囲が拡大したことから、4月28・29日に再度重機による表土剥ぎを行った。人力による遺構検出および完掘作業は4月20日から行った。当初遺構面は1面と考えられていたが、調査を進めるうちに黒ボク土中にもさらに1面の遺構面の存在が判明し、当初の計画を変更し6月30日まで行った。各地区の廃土は、用地内に仮置きした。

検出作業の結果、1区では、古墳時代中期の竪穴住居1棟、溝1条、古墳時代中期以前の自然河川1条を調査した。2区では、弥生時代前期の集石1基、古墳時代中期の溝1条、土坑5基、集石1基を調査した。3区では、弥生時代前期の集石6基、古墳時代中期の竪穴住居1棟、土坑1基を調査した。4区は、精査の結果遺構がないことが判明し、調査区平面図および土層断面の記録にとどめた。

三保第1遺跡の発掘調査面積は、1区1面171㎡の2面342㎡、2区230.5㎡の2面461㎡、3区1面116.3㎡の2面232.6㎡、4区35.9㎡、計1071.5㎡となった。

現地調査終了後、整理作業および報告書作成に取り掛かり、3月末をもって発掘調査報告書を刊行した。

（牧本）



### 第3節 調査の体制

調査は、以下の体制で実施した。

#### ○調査主体

財団法人鳥取県教育文化財団

理事長 有田 博充

事務局長 中村 登

埋蔵文化財センター

所長 田中 弘道（兼・県埋蔵文化財センター所長）

次長（事務） 竹内 茂

次長（専門） 加藤 隆昭

調査課

課長（兼次長） 加藤 隆昭

企画調整班長 山根 雅美

文化財主事 大野 哲二、下江 健太

庶務課

課長（兼次長） 竹内 茂

主幹 福田 高之

事務職員 大川 秋子、谷垣真寿美、山根 美代、小谷 有里

#### ○調査担当 東伯調査事務所

所長 佐治 孝弑

班長 牧本 哲雄

文化財主事 家塚 英詞、小山浩和（福留遺跡・湯坂遺跡担当）

君嶋 俊行（南原千軒遺跡担当）

高尾 浩司、小口英一郎（中道東山西山遺跡担当）

野口 良也、濱本 利幸（八幡遺跡・久蔵谷遺跡担当）

玉木 秀幸、浅田 康行（上伊勢第1遺跡・三保第1遺跡担当）

恩田 智則、小谷 郁夫（化粧川遺跡・中道東山西山遺跡担当）

調査員 西川 雄大（南原千軒遺跡担当）

岩井 美枝、福井 流星（中道東山西山遺跡担当）

前島 ちか（上伊勢第1遺跡・三保第1遺跡担当）

阪上志緒里（八幡遺跡・久蔵谷遺跡担当）

調査補助員 野 浩一、山根 雅美、吉田由香里、山根 航、石水 健一

事務補助員 真山 葉子

#### ○調査指導 鳥取県教育委員会事務局文化課

#### ○調査協力 琴浦町、琴浦町教育委員会、上伊勢地区、三保地区

## 第2章 地理的・歴史的環境

### 第1節 地理的環境

報告する遺跡は、鳥取県東伯郡琴浦町に所在する。琴浦町は、平成16年9月に東伯郡東伯町と赤碕町が合併して誕生した町である。ここは県中部西側に位置し、西伯郡との郡境にあたる。町の東側は倉吉市、東伯郡大栄町、西側は西伯郡中山町・大山町、南側は日野郡江府町に接し、北は日本海に面している。町域は東西15.2km、南北18.5km、総面積139.9km<sup>2</sup>を測り、ここには約20,500人が生活している。

琴浦町の地形・地質は、県の南西部に位置する大山（標高1,729m）の影響を強く受けている。地形は、町の南西端において、大山の前峰あたる烏ヶ山、矢筈ヶ山をはじめとする標高600～1,300mの山々が位置しており、そこから日本海へ向かって山麓台地が広がっている。また、町内には東から順に加勢蛇川、洗川、倉坂川、勝田川などの河川が流れており、その流域において沖積平地ないしは扇状地が形成されている。

地質は、1万数千年前まで活動していた大山の噴火堆積物によって、町のほぼ全域が厚く覆われている。琴浦町内の基本層序についてみると、丘陵や平野部では若干異なっているが、おおむね上から順に黒ボク、弥山軽石層、ソフトローム層、ホーキ層、A T層（始良Tn火山灰）、ハードローム層、大山倉吉火山灰層（DKP）となっている。

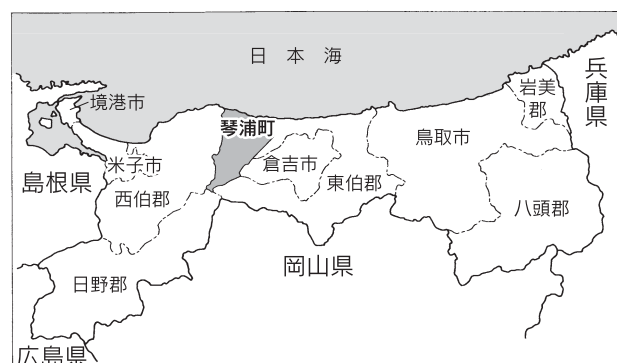
ここで遺跡の状況をより理解するために、町東部の地形を中心にもう少し詳しく述べておきたい。

町の東部は、山麓台地と扇状地で構成されている。この西側では、山麓台地が河川などの浸食によって大小様々な谷部が形成されており、比較的起伏に富んだ地形となっている。現在、ここでは鳥取県の主要産業の一つである二十世紀梨の生産が行われているが、弥生時代中期後半～古墳時代にかけては、大小様々な集落が開発されていた。

これに対して東側は、加勢蛇川や洗川などの河川によって扇状地が形成され、比較的なだらかな地形となっている。この扇状地は、低丘陵地域や沖積平地で構成されている。低丘陵地域は、現在、圃場整備がなされており、整然とした耕地が広がっている。しかし、ここには古代の律令的行政区分である伯耆国八橋郡の郡衙推定地があり、古代の官衙遺跡や集落、寺院などが展開していた。

沖積平地は、加勢蛇川や洗川、さらにその支流などによって形成されたものである。現在では圃場整備がなされており、旧地形の状況を明確に捉えることはできないが、これらの河川やその支流の間には、幾つかの微高地が形成されていたものと考えられる。当該遺跡もこのような微高地上に立地していると考えられる。

（玉木秀幸）



第1図 琴浦町位置図

## 第2節 歴史的環境

琴浦町内には、多くの遺跡の存在が知られており、そのうち、幾つかの遺跡で調査がなされてきた。とりわけ近年では、一般国道9号（東伯中山道路）の改築に伴う大規模な遺跡の発掘調査が行われており、縄文時代～中世に至るまでの基礎資料が着々と蓄積されている。以下では、これらの調査成果に基づいて、当該遺跡周辺における人々の活動を素描していく。

### 旧石器～縄文時代

旧石器時代～縄文時代までの遺跡数は少ない。旧石器では松ヶ丘や槻下で尖頭器が数点、三林遺跡でスクレイパー、笠見第3遺跡で舟底形細石刃石核が採集されているにすぎず、また、縄文時代早期～前期では松ヶ丘遺跡や森藤第1・2遺跡など、中期では井岡地中ソネ遺跡や井岡地頭遺跡などで土器片が出土しているにすぎない。なお、琴浦町との町境に位置する大栄町西高尾谷奥遺跡では、押型文土器とともに住居や住居状遺構が確認されている。

縄文時代後期になっても遺跡の少ないことに変わりはないが、定住的な集落が認められるようになる。森藤第2遺跡では、中央に石囲炉をもつ竪穴住居が確認されており、そこからは、後期前半頃の精製・粗製土器とともに土偶なども出土している。また、後期～晩期にかけては、落とし穴状遺構が中尾第1遺跡や笠見第3遺跡、福留遺跡などで確認されており、この時期には、微高地や丘陵上が狩猟場として利用されていたことがわかる。

### 弥生時代

弥生時代前期～中期前半頃までは、縄文時代と同様、遺跡数が少ない。前期～中期前半頃の遺構は中尾第1遺跡や別所女夫岩遺跡などで確認されている。このうち中尾第1遺跡では、前期後半頃の列状に配置された礫石使用墓や木棺墓群が確認されている。また、中期前葉～中葉頃の竪穴住居や貯蔵穴なども確認されている。貯蔵穴からは中期中葉の土器とともに打製石鍬や炭化米などが出土しており、遺跡の周辺である沖積平地において稲作が行われていた可能性が推察される。

中期後半になると、丘陵上に集落が展開されるようになり、古墳時代初頭にかけて大幅に増加していく。これらは森藤第1・2遺跡、水溜り・駕籠据場遺跡、大峰遺跡、井岡地中ソネ遺跡、三保遺跡、笠見第3遺跡、三林遺跡、久蔵峰北遺跡、蝮谷遺跡、福留遺跡などで確認されている。

また、八橋地区内を中心とする地区では、銅剣・銅矛・銅鐸がみついている。田越の丘陵上では、出土状況が不明であるが、中細形銅剣が4口、久蔵峰では銅矛が1口、八橋の南方の丘陵上では、銅鐸が1口出土している。

### 古墳時代

古墳時代になっても、引き続き丘陵上に集落が営まれているが、微高地上でも再び集落が営まれるようになる。丘陵上に営まれる集落としては、三保遺跡、井岡地中ソネ遺跡、笠見第3遺跡、三林遺跡、久蔵峰北遺跡、蝮谷遺跡、八橋第8・9遺跡、松谷中峰遺跡、別所中峯遺跡などがある。また、微高地上に営まれる集落としては、中尾第1遺跡や逢東第2遺跡などがある。中尾第1遺跡では、中





1. 中尾第1遺跡 2. 上伊勢第1遺跡 3. 三保第1遺跡 4. 井岡地頭遺跡 5. 井岡地中ソネ遺跡 6. 三林遺跡 7. 笠見第3遺跡
8. 中道東山西山遺跡 9. 久蔵谷遺跡 10. 久蔵峰北遺跡 11. 蛭谷遺跡 12. 岩本遺跡 13. 八橋第8・9遺跡 14. 別所中峯遺跡 15. 松谷中峰遺跡 16. 墓ノ上遺跡 17. 笠取塚古墳 18. 別所2号墳 19. 松谷遺跡 20. 別所古墳群 21. 八橋狐塚古墳 22. 八橋城跡 23. 八橋銅鐸出土地 24. 笠見1号墳 25. 田越第1遺跡 26. 逢塚第2遺跡 27. 逢塚1・2号墳 28. 中尾古墳 29. 槻下豪族居館 30. 向山遺跡 31. 槻下古墳群 32. 金屋経塚 33. 伊勢野遺跡 34. 斎尾廃寺跡 35. 斎尾古墳群 36. 大高野遺跡 37. 水溜り・駕籠据場遺跡 38. 塚本古墳群 39. 大高野古墳群 40. 松ヶ丘遺跡 41. 田越第3遺跡(銅剣出土地) 42. 田越第2遺跡 43. 三保古墳群 44. 三保遺跡群 45. 竜ヶ崎古墳群 46. 山田1・2号墳 47. 妙見山城跡 48. 福永1号墳 49. 福永2号墳 50. 福永3号墳 51. 森藤遺跡群 52. 古瓦出土地(大法廃寺跡) 53. 大法古墳群 54. 大峰遺跡 55. 西高尾経塚 56. 法万経塚 57. 西高尾谷奥遺跡 58. 宮場遺跡 59. 矢下古墳 60. 古長古墳

第2図 周辺遺跡分布図



期の竪穴住居1棟や溝などが確認されている。逢束第2遺跡では後期の竪穴住居1棟が確認されている。両遺跡ともに小規模なものとなっている。

ところで、古墳時代に入ると各地で古墳がつくられるようになる。町内に所在する前方後円墳のうち、明確に前期に属するものはない。その可能性があるものとして、前方後方墳であるが、別所1号墳がある。その他の前方後円墳は中期～後期にかけて築かれたものであり、八橋狐塚古墳、笠見1号墳、竜ヶ崎3号墳などがある。また、円墳であるが、中期～後期にかけて小・中規模のものが群集して築かれるようになる。大高野古墳群、塚本古墳群、斎尾古墳群、槻下古墳群、竜ヶ崎古墳群、三保古墳群などの古墳群が丘陵・低丘陵上に展開している。

### 古代～中世

古代になると、加勢蛇川の東岸の低丘陵地域、上伊勢第1遺跡から東方約1kmのところに斎尾廃寺が建立される。斎尾廃寺は、初期の仏教文化の様相を残すものである。県内の古代寺院の多くが法起寺式伽藍配置を採用するのに対して、ここでは法隆寺式伽藍配置が採用されている。ここからは塑像片、仏頭、鴟尾、鬼瓦、軒丸瓦、軒平瓦などが出土している。このうち、創建期の軒丸瓦には紀寺式、また、軒平瓦には法隆寺系統の瓦当文様が確認されている。

この斎尾廃寺の東側は、伯耆国八橋郡の郡衙推定地となっている。ここには、総柱礎石建物群や大量の炭化米が検出され、官衙関連の遺跡と考えられる大高野遺跡が所在している。また、この付近には、伊勢野遺跡や水溜り・駕籠据場遺跡、この南方2kmには森藤第1遺跡といった掘立柱建物を中心とする集落が所在し、さらに南側の大法には古瓦散布地が確認されている。このため、加勢蛇川東岸が郡の中心地となっていたものと考えられる。

ところで、加勢蛇川と洗川によって形成された沖積平地では、圃場整備前まで条里の地割の痕跡が残っていたようである。この地割りは若干西に振るがほぼ南北に主軸をとるとの研究報告がある。しかし、この形成期については調査が行われておらず、不明瞭なものである。

中世になると、その調査例が少なく不明瞭な点が多い。遺構を確認した遺跡としては、中尾第1遺跡や井岡地頭遺跡などが存在する程度である。中尾第1遺跡は集落遺跡であり、「コ」の字状の溝に区画された空間の中に、掘立柱建物を確認している。また、この建物から離れた場所には、勝間田焼の甕が骨蔵器として使用された墓や、時期が異なるが茶毘墓も確認されている。

井岡地頭遺跡では、11世紀末葉～12世紀初頭の方形居館の可能性が考えられる方形区画遺構が確認されている。また、このような方形区画遺構は、槻下にも存在している。これは、大溝によって囲まれた方形連郭を呈した館跡と考えられるものである。ここは、『伯耆国民談記』において「岩野禅正坊居す」と記されていることから地頭の館であったものと推定される。 (玉木)

### 参考文献

- 岩永 実, 1978, 「鳥取県における条里地域の研究 (第Ⅱ報)」『鳥取県地誌考』岩永實先生記念論文集刊行会  
東伯町編, 1968, 『東伯町誌』  
坂本嘉和, 2003, 「第2節 歴史的環境」『鳥取県教育文化財団調査報告書80』鳥取県教育文化財団

## 第3章 上伊勢第1遺跡

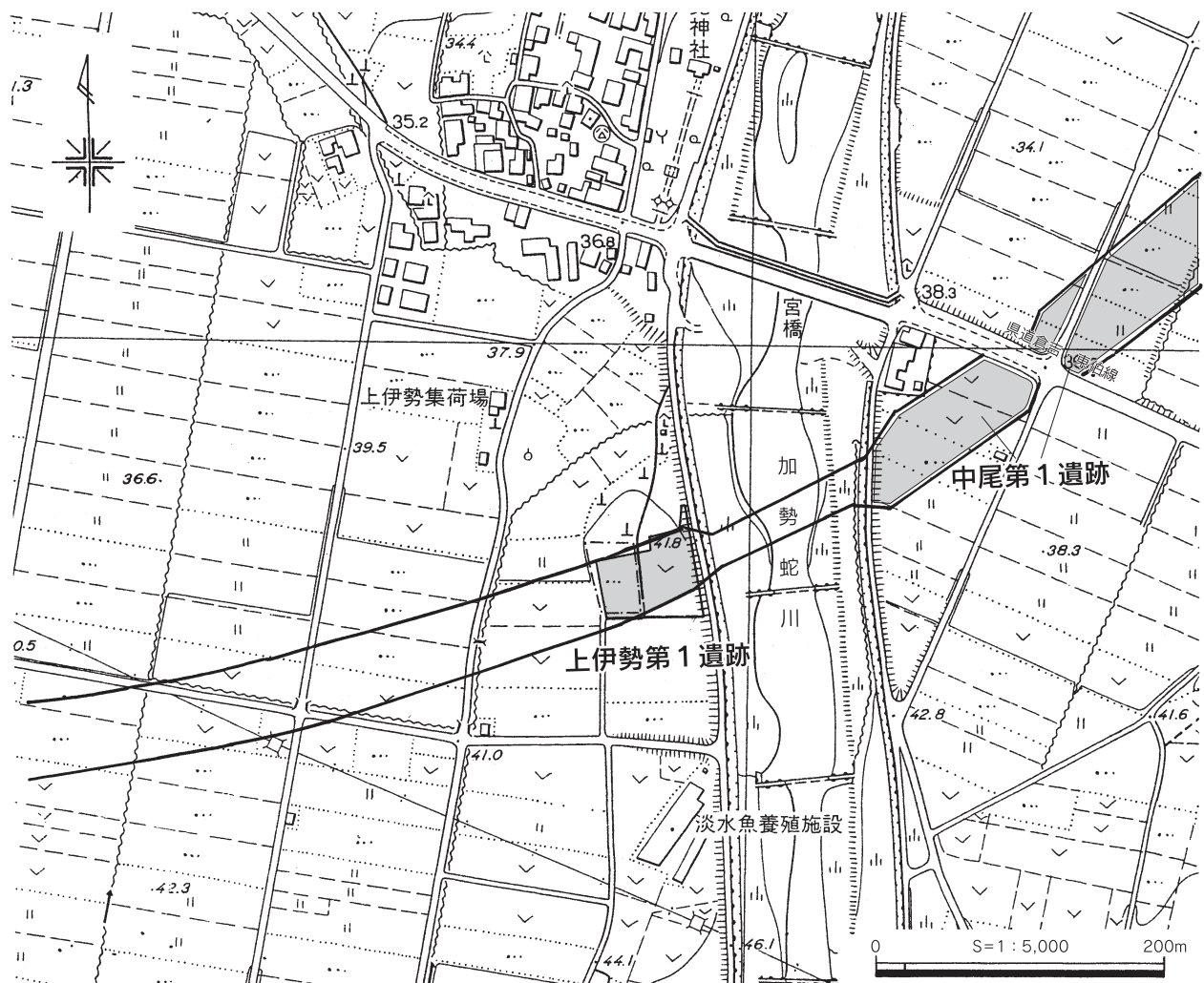
### 第1節 調査の概要

#### 1. 遺跡の概要

上伊勢第1遺跡は、東伯郡琴浦町大字上伊勢字東松山ほかに所在する。

ここは海岸線から直線距離で2kmほど離れた場所に位置しており、すぐ近くには県道倉吉・東伯線が通っている。また、本遺跡から東へ1kmほど離れた低丘陵上には八橋郡衙の推定地があり、そこには大高野遺跡や斎尾廃寺跡といった古代の官衙遺跡や寺院が所在している。なお、本報告書に収載した三保第1遺跡は、本遺跡から西へ1kmほど離れている。

遺跡の周辺は扇状地が広がっており、比較的平坦な地形となっている。この扇状地は、加勢蛇川や洗川、そこからのびる支流によって形成されたものであり、これらの河川の間には微高地が形成され



第1図 上伊勢第1遺跡位置図

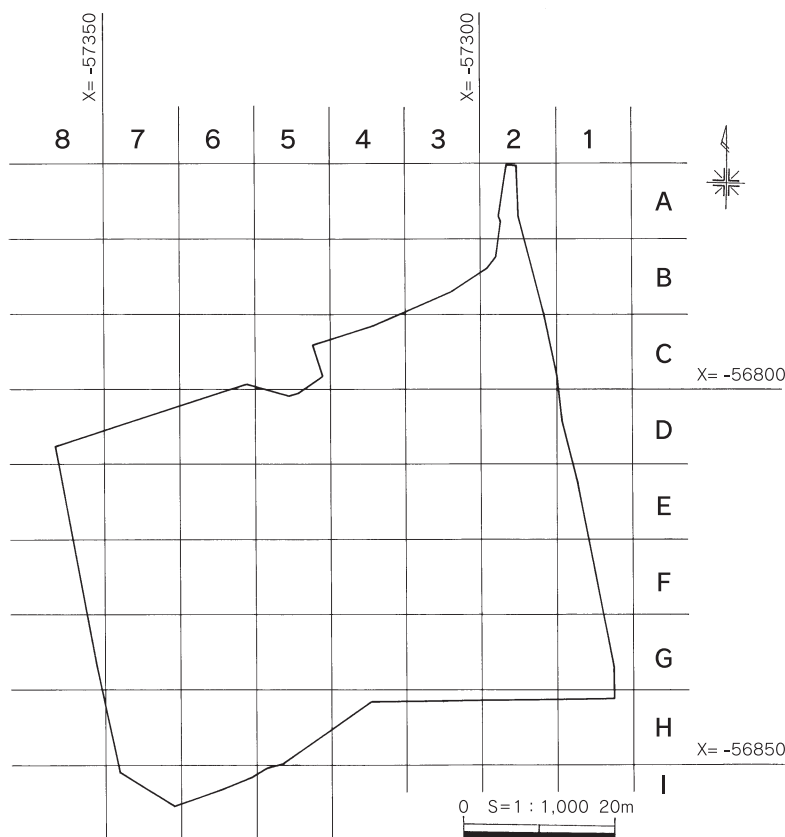
ている。本遺跡もこのようにして形成された微高地上に立地している。なお、遺跡のすぐ東側には、加勢蛇川が流れており、調査区の地形は加勢蛇川へ向かって緩やかに下るものとなっている。

この周辺はすでに圃場整備がなされており、区画された耕作地となっている。圃場整備前の状況は条里地割が残っており、圃場整備以前に撮影された航空写真でもその状況が確認できる。なお、調査区の中央と西側を南北に流れる溝12~14はこれに関連するものと考えられる。

さて、調査であるが、旧東伯町教育委員会が実施した確認調査によって、古墳時代の竪穴住居と遺物包含層が黒ボク上面で確認されていることから、本遺跡が古墳時代の集落遺跡であるとの認識をもって調査することとなった。調査は効率化を図るため、重機によって遺構検出面の上面までを掘り下げ、その後、人力による調査を行うこととなった。重機による掘り下げは、本来ならば黒ボク上層までとなるはずであるが、調査期間が短く、また、黒ボク上面での遺構検出は困難であり、遺物の出土量も希薄であるとのことから、遺構検出の容易な漸移層までを重機で掘り下げ、調査を行うこととなった。しかし、重機による掘り下げが終盤にさしかかった時点で、調査区西側から溝2に伴う遺物がまとまって出土した。このため重機による掘り下げを黒ボク上面までとすることになった。

人力による調査は4月26日から開始した。まず、調査区内に10m間隔で杭を打ち込み、その東西軸を東からアルファベット、南北軸を北から算用数字で示し、第2図のようなグリッドを設定した。つづいて、このグリッドの線に沿うようにしてトレンチを入れ、土層の堆積状況や遺構・遺物の分布状況を把握することにした。その後、漸移層から黒ボク上面において検出作業を行った。

検出の結果、古代~中世の掘立柱建物2棟、土坑3基、墓3基、溝4条、畠、耕作痕を確認した。このうち耕作痕は調査区全体に認められ、また、これらの遺構は古墳時代以前の遺構を切っていた。



第2図 グリッド設定図

このため、当初の予定では1面であった遺構面を2面に切り替えて調査を行うこととなった。

6月17日には空中写真撮影を行い、第1遺構面の調査が終了した。なお、畠の状況を把握するため、土壌分析や軟X線分析を行った(第5章参照)。

第2面遺構面の調査は空撮終了後直ちに開始した。調査の結果、縄文時代のたわみ状遺構1基、弥生時代前期の竪穴住居3棟、掘立柱建物1棟、たわみ状遺構2基、古墳時代前期~後期の竪穴住居6棟、掘立柱建物4棟、土坑9基、方形土坑5基、溝11条、硬化面1面、焼土面1面、畦畔状遺構1面を確認した。このうち、弥生時代前期の竪穴

住居3は、焼失住居の可能性があるものであり、ここから出土した炭化材の樹種同定や年代測定を行った。また、土器についても良好な資料を得ることができたため、胎土分析を行った（第5章参照）。

7月には調査区内にあった電柱が移設されたため、南西側の調査に取り掛かることとなり、16日には重機による掘り下げを開始した。重機による掘り下げは、それまでの調査成果を踏まえ、畠の耕作土上層の灰色系のシルト層までとした。調査の結果、畠2面、耕作痕3面を確認した。なかでも下層の畠1の残存状況は良好であり、畝の状況が明確に分かるものであった。8月21日には現地説明会を実施し、縄文時代～中世の遺構・遺物の検出状況の説明、テント内では三保第1遺跡も含めた出土遺物や写真パネルの展示を行い、100名ほどの見学者で賑わった。9月1日には高橋学氏、宮路淳子氏、深瀬亜紀氏に畠の現地指導を受けた。9日には空中写真撮影を行い、10日には調査が終了した。



写真図版1 畠1表面剥ぎ取り風景



写真図版2 現地説明会風景

表1 新旧遺構対照表

新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名
竪穴住居1	SI6	土坑6	SK20	溝7	SD95
竪穴住居2	SI8	土坑7	SK21	溝8	SD92
竪穴住居3	SI5	土坑8	SK13	溝9	—
竪穴住居4	SI1	土坑9	SK19	溝10	SD93
竪穴住居5	SI2	土坑10	SK1	溝11	SD91
竪穴住居6	SK4	土坑11	SK2	溝12	SD1
竪穴住居7	SI3	土坑12	SK3	溝13	SD90
竪穴住居8	SI4	方形土坑1	SK18	溝14	SD5
竪穴住居9	SI7	方形土坑2	SK15	溝15	SD6
掘立柱建物1	SB6	方形土坑3	SK17	たわみ1	SI10
掘立柱建物2	SB1	方形土坑4	SK16	たわみ2	たわみ4
掘立柱建物3	SB8	方形土坑5	—	たわみ3	SI9
掘立柱建物4	SB5	墓1	集石1	硬化面	硬化面
掘立柱建物5	SB7	墓2	SX1	焼土面	焼土
掘立柱建物6	SB4	墓3	SX2	畦畔状遺構	水田
掘立柱建物7	SB2	溝1	SD2	水田	—
土坑1	SK23	溝2	SD4	畠1	畝1
土坑2	SK5	溝3	SD89	畠2	畝2
土坑3	SK7	溝4	SD88	耕作痕1	—
土坑4	SK10	溝5	SD96	耕作痕2	SD7～87、 97～102
土坑5	SK22	溝6	SD94	耕作痕3	



調査終了後、直ちに報告書作成に取り掛かった。報告書の刊行が3月末となっていることから、効率良く整理作業を行うことに努めた。1月5日には遺構のトレース（浄写）が終了し、20日には図版類の作成が終了した。1月31日には原稿が完成し、3月末には報告書が刊行した。

ところで、本報告書に掲載した遺構名であるが、調査時のものと異なっている。これは、検出時と完掘後に遺構の性格が異なるものが存在したことから、改めて遺構名をふり直したためである。この遺構名の対照表は表1に示すとおりである。（玉木秀幸）

## 2. 基本層序（第3図）

調査区内の堆積状況は、おおむね以下のとおりとなっている。まず、圃場整備時に盛られた客土が堆積し（Ⅰ層）、その下面には中世から現代にかけてのシルト層が堆積している（Ⅱ層）。さらに、古代～中世の畠の耕作土とそれを覆う細砂が堆積し（Ⅲ層）、弥生時代前期～古墳時代の遺構・遺物を含む黒ボクが堆積している（Ⅴ層）。このⅢ層とⅤ層の間には、部分的にはあるが、暗褐色系のシルトが堆積している（Ⅳ層）。Ⅴ層以下の堆積は漸移層（Ⅵ層）、弥山軽石層やソフトローム層となっている（Ⅶ層）。これらⅠ～Ⅶ層の概要は以下のとおりである。

Ⅰ層：1～10層までがこれに対応する。圃場整備時の客土と考えられる。

Ⅱ層：11～17層までがこれに対応する。中世以降に堆積した層であり、灰色系の淡い色調を呈するシルト層である。これらの層には酸化鉄の沈着が認められ、調査区北東側の土層断面では水田に伴う畦畔状遺構を確認できたことから、水田の耕作面と考えられる。また、この層には厚さ10cm以下の薄い灰白色系の細砂層が幾らか認められる。この細砂層は飛砂の可能性がある。

Ⅲ層：18～48層までがこれに対応する。古代～中世の畠の耕作土ないしは畠を覆う砂である。畠を覆う砂は、飛砂の可能性が考えられる。

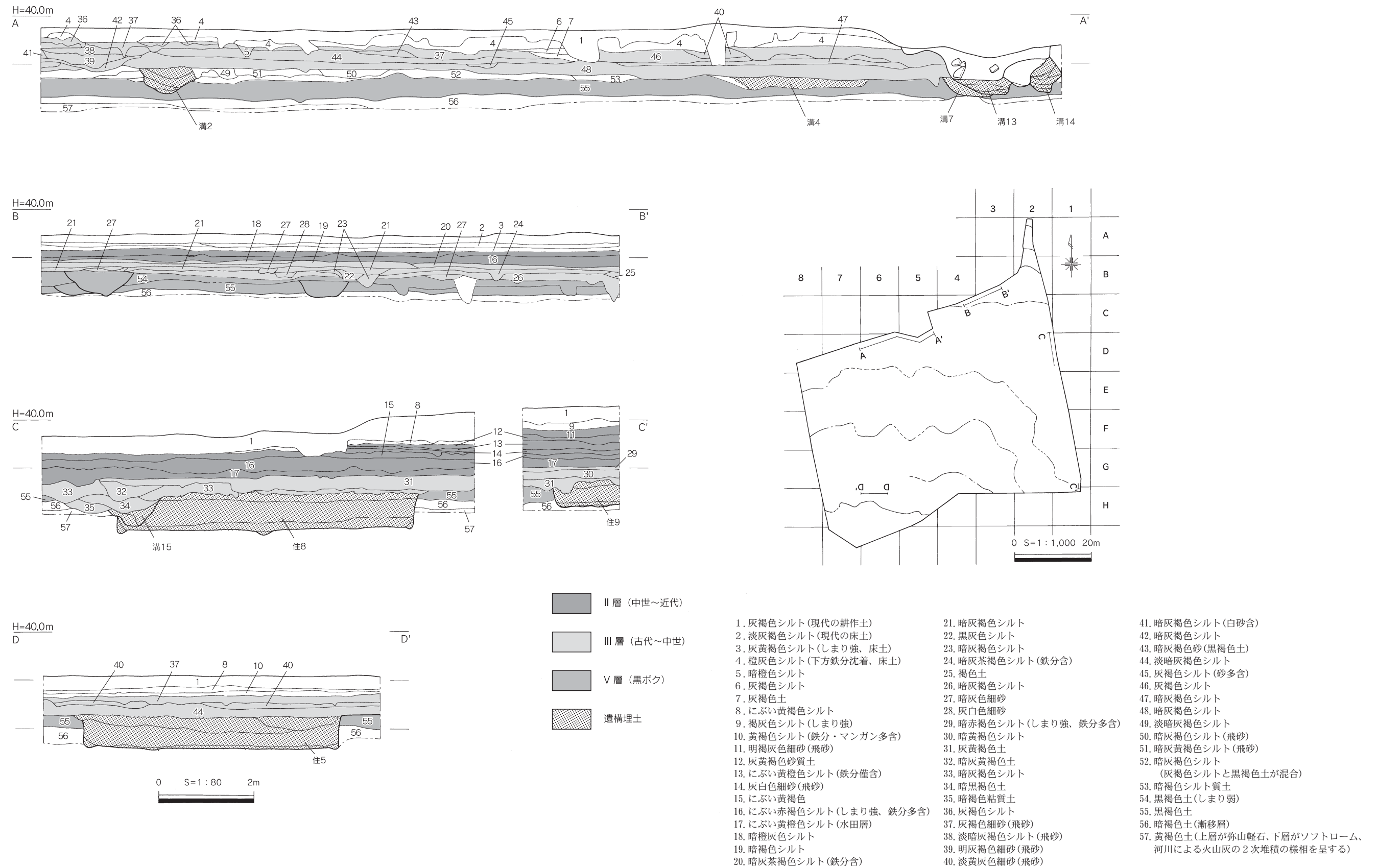
Ⅳ層：49～53層までがこれに対応する。暗灰褐色系のシルト層であり、黒ボク上面に堆積した砂が土壌化した様相を呈する。これらは飛砂の可能性が考えられる。この層は調査区全体には認められず、北東側において分布している。古墳時代前期の溝2が切っていることから、これ以前のものと考えられる。この層の上面は古墳時代前期の検出面といえる。

Ⅴ層：54・55層がこれに対応する。いわゆる黒ボクであり、弥生時代前期の遺構・遺物を包蔵する層である。この層の上面が弥生時代～古墳時代後期の遺構検出面である。ところで、54層はブロック状の堆積状況を示した層であり、また、この上面には畦畔状遺構を検出していることから、耕作土であった可能性が考えられる。

Ⅵ層：56層がこれに対応する。いわゆる漸移層であり、黒ボクとソフトローム層の間に位置する層である。縄文時代早期の遺構検出面である。

Ⅶ層：上面には弥山軽石層が堆積し、その下はソフトローム層となっている。ソフトローム層には一辺3cmほどの軽石が含まれており、沖積作用によってこの層が形成されたものと考えられる。

（玉木）

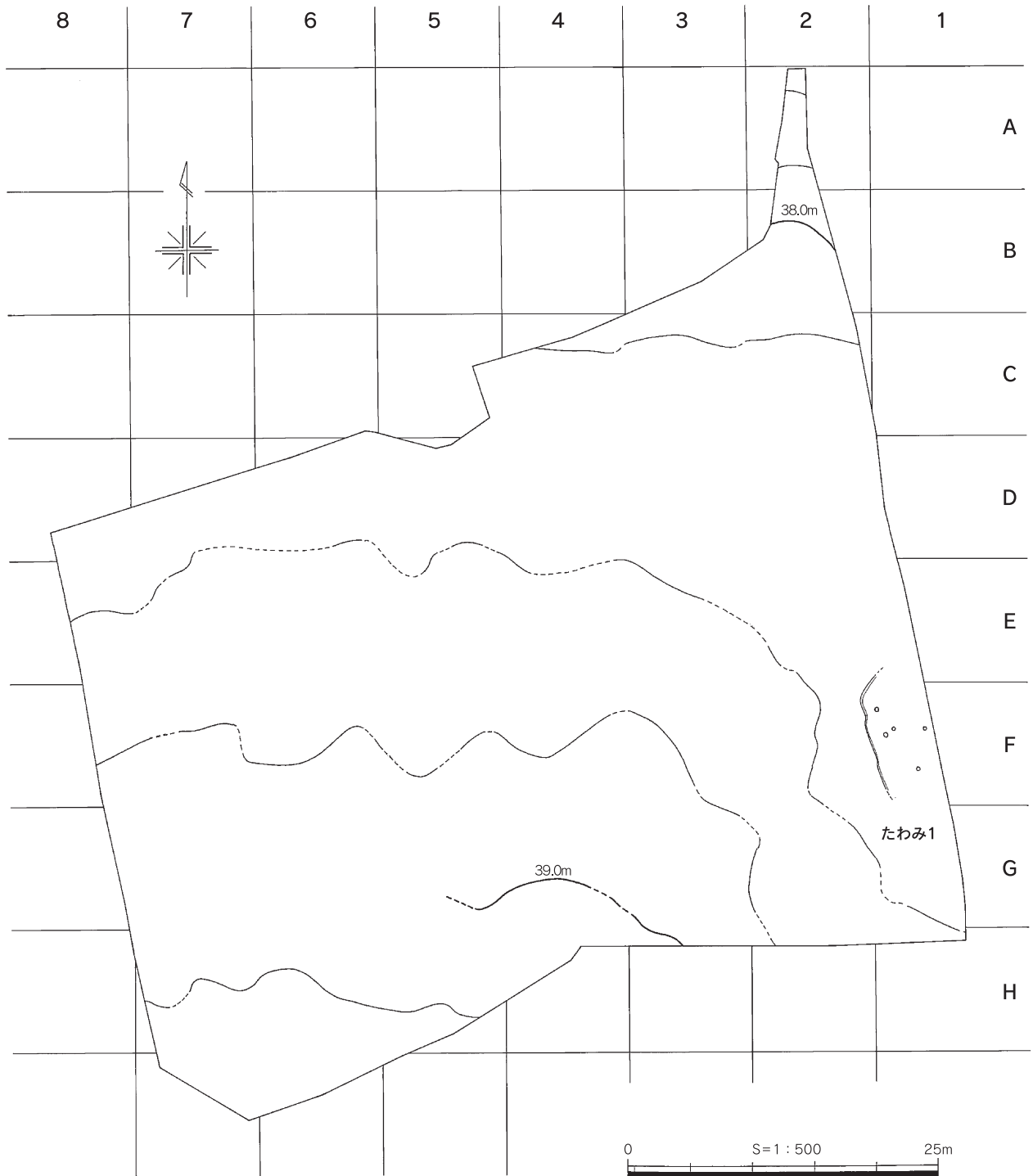


第3図 調査区内土層断面図

第2節 縄文時代の遺構・遺物

1. 概要

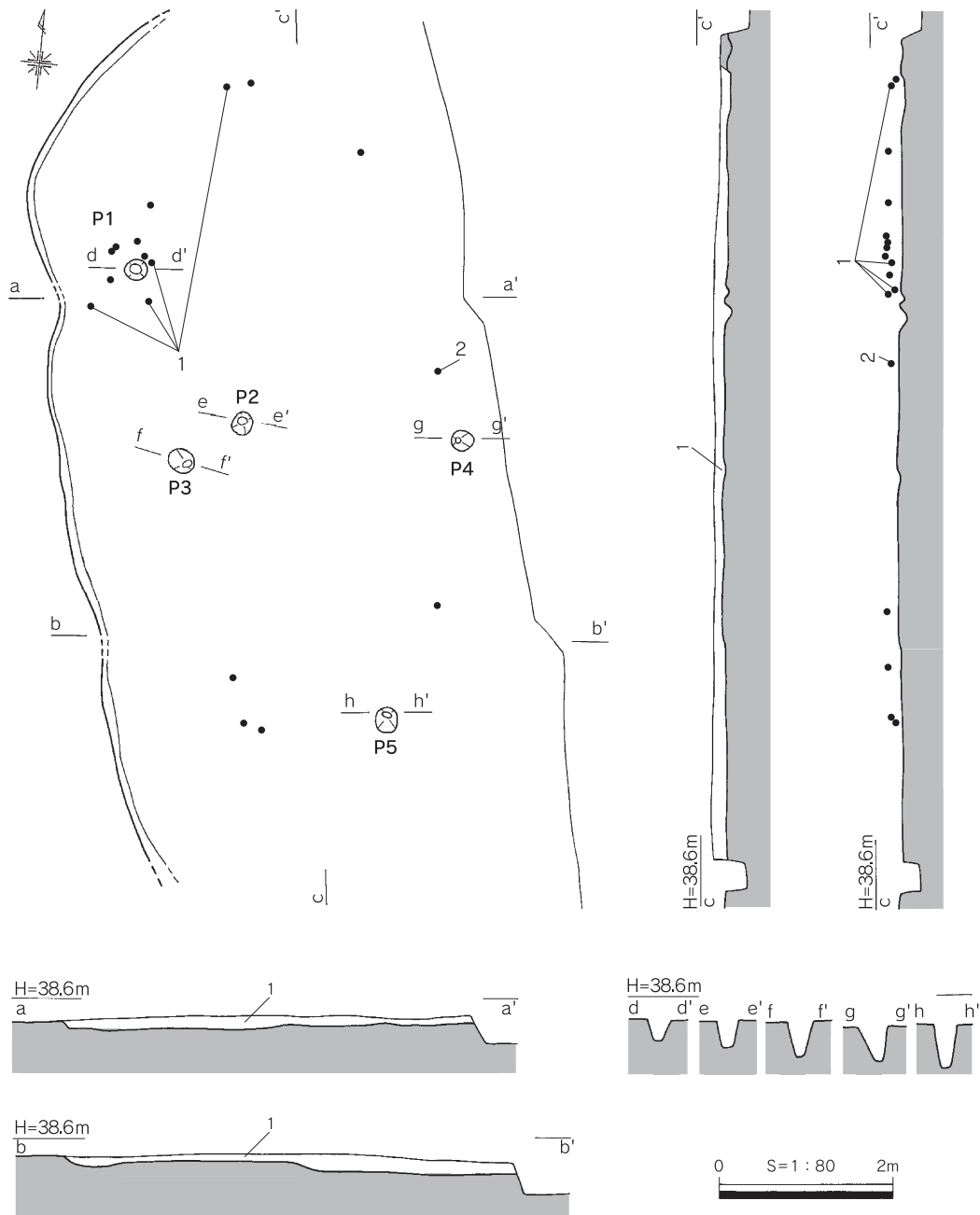
縄文時代の遺構は、たわみ状遺構1基を確認した。たわみ1は、弥生時代前期の遺構・遺物の集中



第4図 縄文時代遺構配置図

する調査区東端に位置しており、漸移層上面で検出した。この遺構は、高山寺式の特徴を示す土器を伴うことから、早期後半の時期が考えられるものである。この他に調査区内では早期の遺構・遺物は確認されていないことから、この遺構が単独で存在していた可能性が考えられる。しかし、遺構が調査区の東端に位置すること、その立地が北東へと下る緩斜面上であることから、調査区東端から加勢蛇川にかけて遺構・遺物が存在する可能性も考えられる。

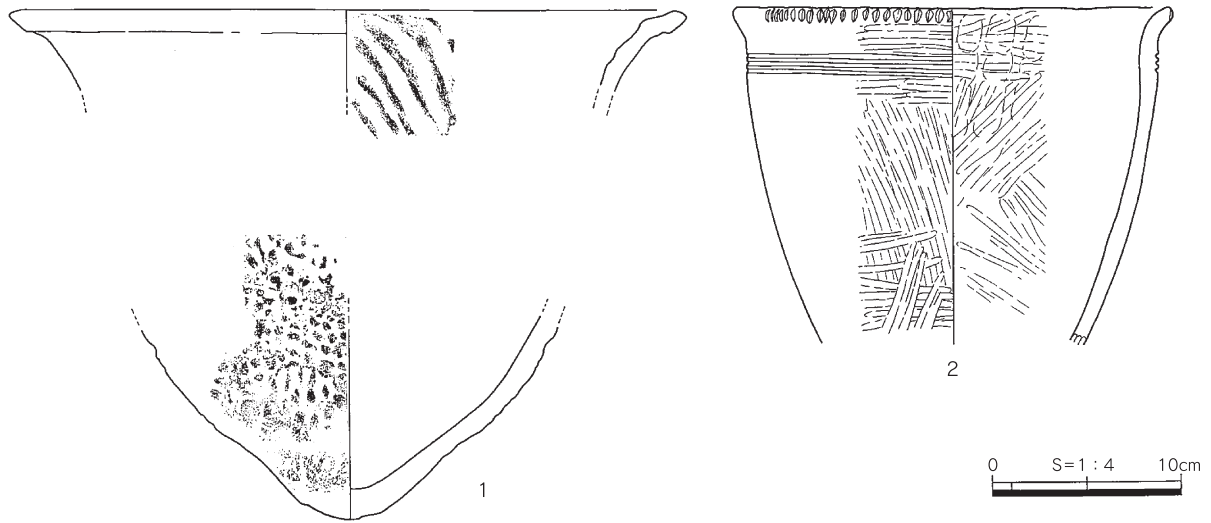
遺物は、たわみ1に伴う土器のほかに、晩期の土器が数点出土したにすぎなかった。 (玉木)



1. 黒褐色土(しまり強、黄白色粒僅含)

第5図 たわみ1





第6図 たわみ1出土遺物

2. たわみ

たわみ1 (第5・6図、PL.2・13)

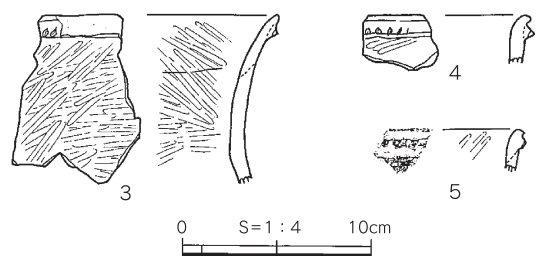
調査区東端のF1グリッド中に位置し、調査区を北東方向へと下る緩斜面上に立地する。検出面は黒ボクを除去した漸移層上面である。

遺構の形状・規模は、東側が調査区外へと伸びており、南側がたわみ3によって切られているため不明である。検出面からの深さは16cmを測る。底面は漸移層までとなっており、標高38.3mである。また、底面は比較的平坦であるが、硬化した部分は認められなかった。ここからは径20～32cm、深さ24～49cmの平面形が円形を呈するピット5基を確認した。これらのピットは配置に規則性が認められず、柱痕跡も確認できなかったことから、柱穴とは判断し難いものであった。埋土は黒ボクとほぼ同質の黒褐色土であるが、黒ボクやたわみ2の埋土に比べやや淡いものとなっていた。

遺物は、早期の深鉢1、弥生時代前期の甕2が出土した。1は遺構の北西側、底面付近でまとまって出土した。外面には楕円文、口縁部内面には斜行沈線を施し、底部は尖底となっている。2は付近に弥生時代の遺構が存在することから、そこから混入したものと考えられる。遺構の時期は、1が高山寺式の特徴を示すことから、早期後半頃と考えられる。(玉木)

3. 遺構に伴わない遺物 (第7図、PL.15)

晩期の土器を数点確認したのみである。このうち図化できたものは、鉢3～5である。これらは、調査時に確認することができず、整理作業時において初めて確認できたものである。いずれも口縁部に刻目突帯がめぐるものである。時期は晩期後半頃と考えられる。(玉木)

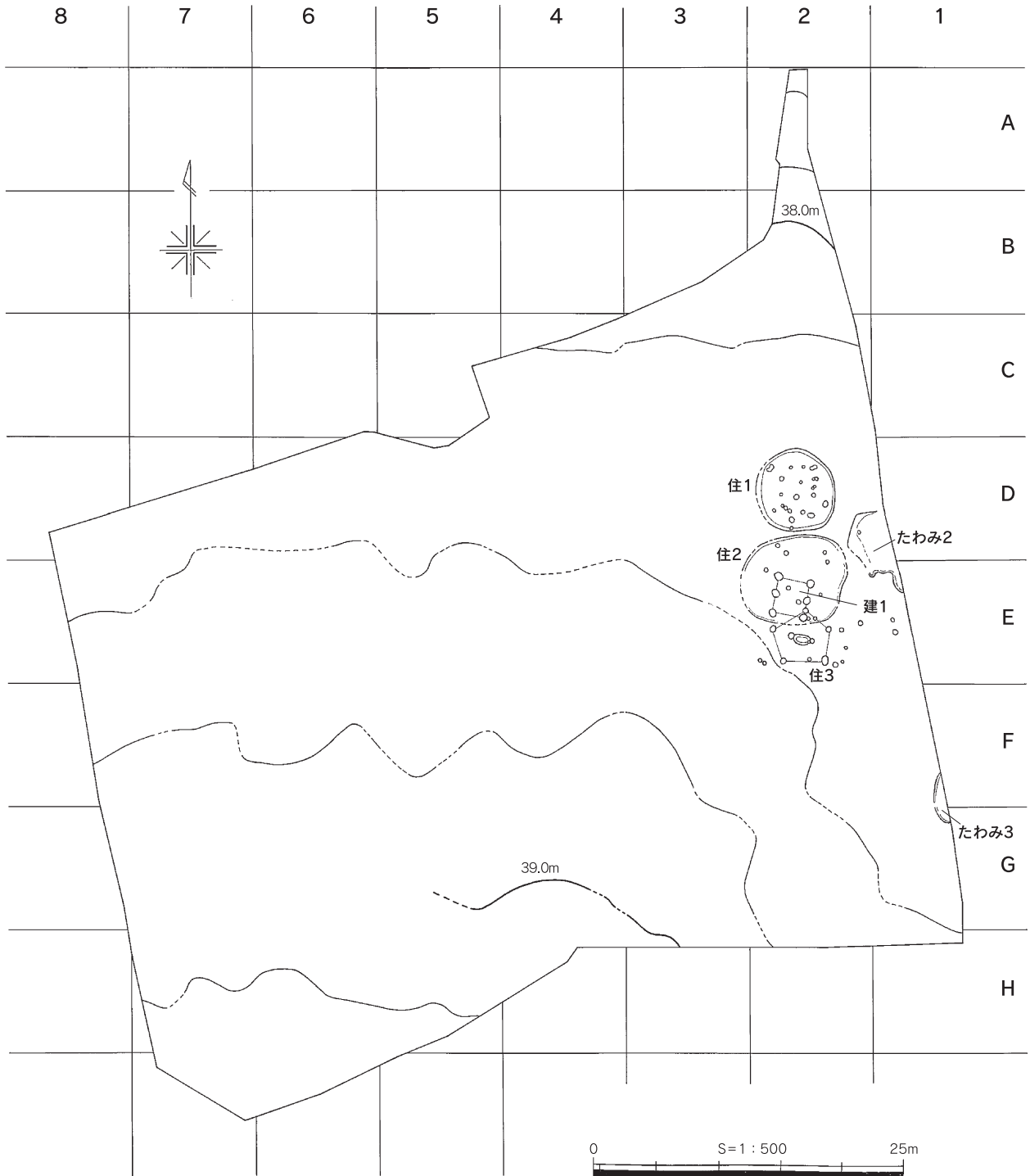


第7図 縄文時代遺構外出土遺物

### 第3節 弥生時代の遺構・遺物

#### 1. 概要

弥生時代の遺構・遺物は、前期のものが主体となっており、その他の時期のものとしては、中期の



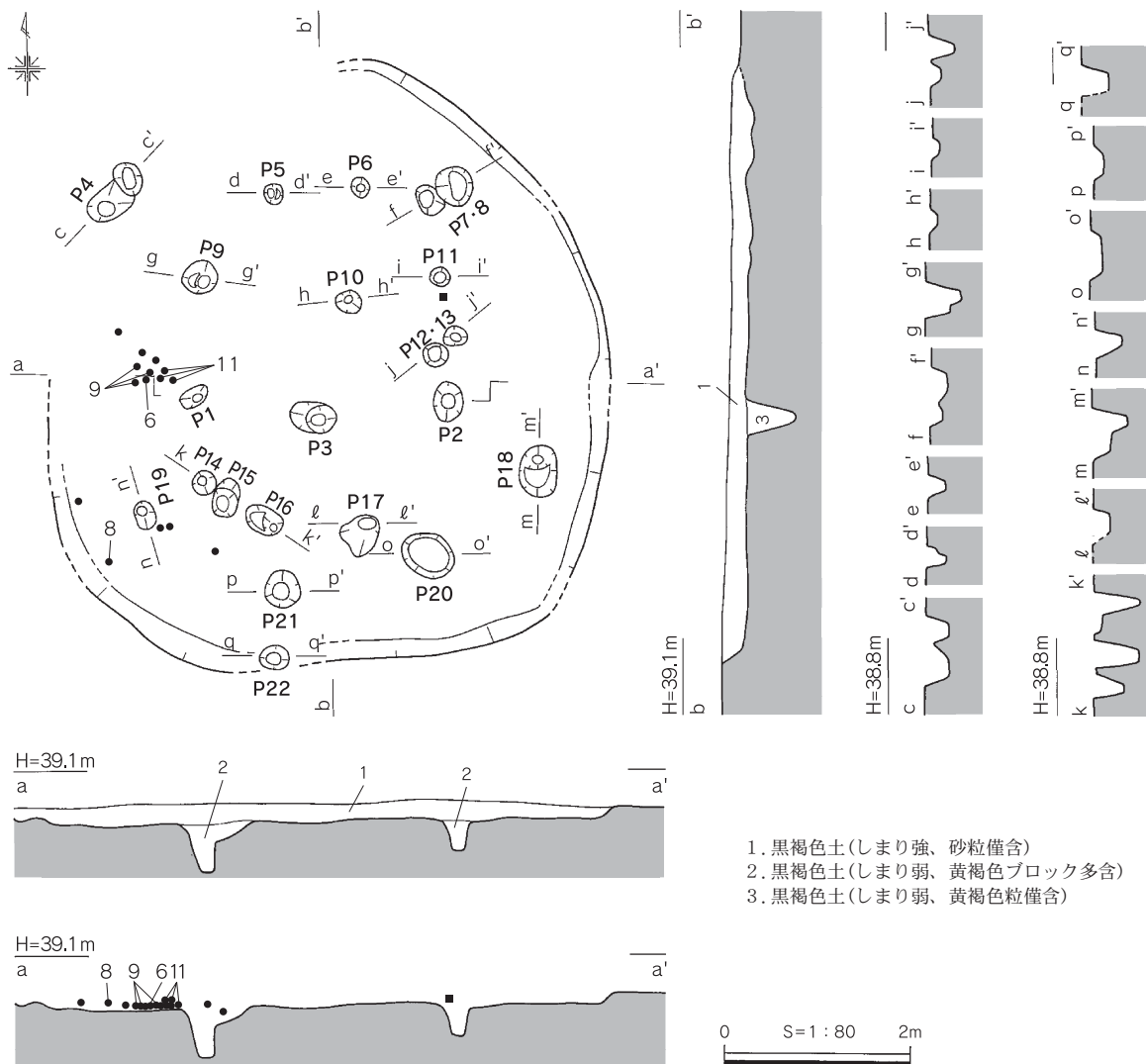
第8図 弥生時代遺構配置図

遺物がわずかに認められるにすぎなかった。確認した遺構・遺物は、ほぼ全てが調査区東側で検出されていることから、ここを中心に前期の集落が展開していたと考えられる。また、調査区は加勢蛇川へ向かって緩やかに傾斜する地形となっていることから、調査区外にもこの集落が続く可能性が高い。

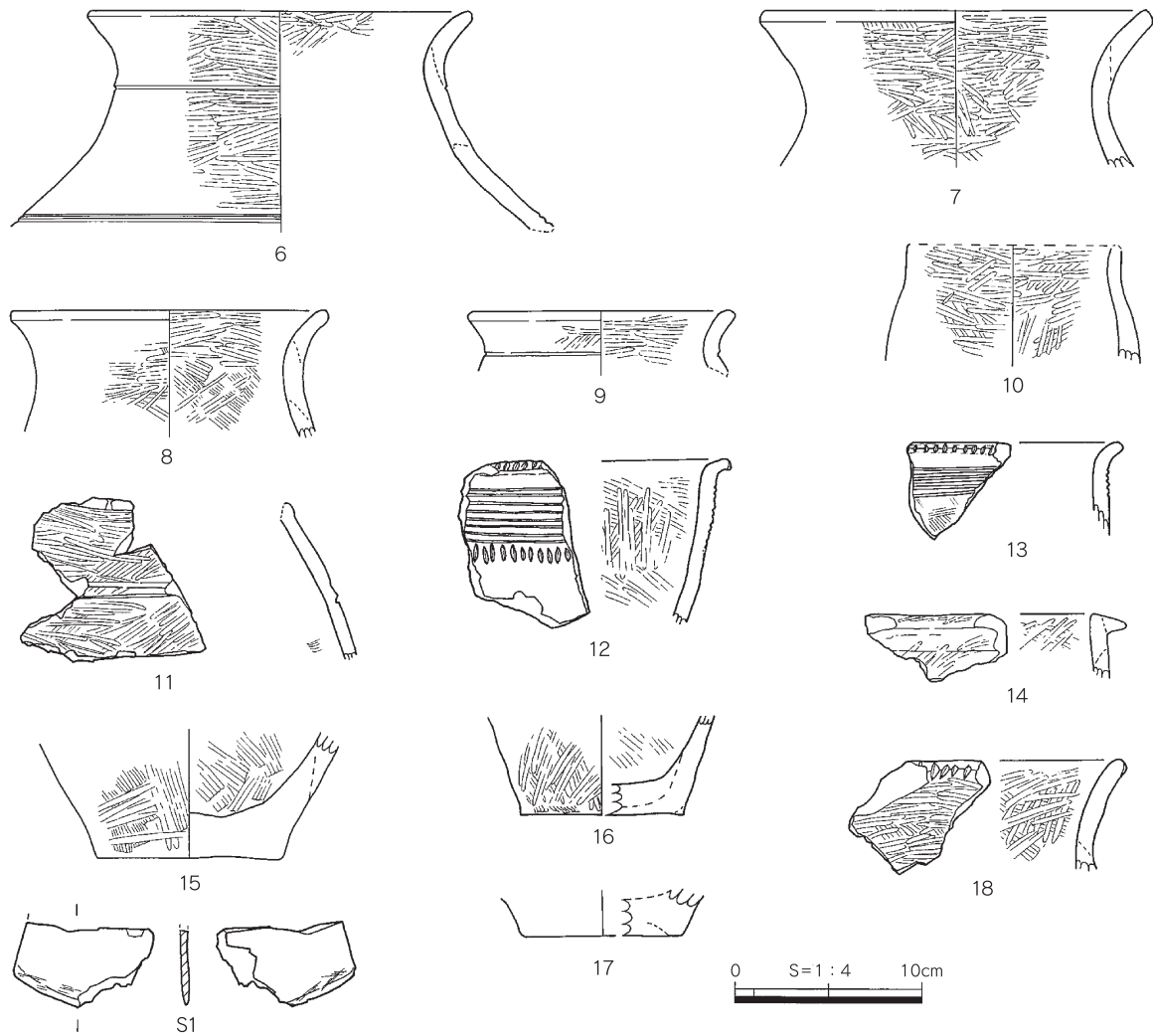
確認した遺構は前期の竪穴住居3棟、掘立柱建物1棟、たわみ状遺構2基である。このうち竪穴住居3は焼失住居の可能性があり、床面からは片面に被熱した痕跡のある打製石斧S8や炭化材が出土している。なお、この炭化材については、年代測定や樹種同定を行っている（第5章参照）。

遺物は、前期のものが大半を占めている。このうち、口縁部が「く」の字状に折れ曲がる如意状口縁をもつ甕と、逆「L」字状の口縁をもつ甕が出土している。これらの胎土に違いが認められるのかを調べるために胎土分析を行った（第5章参照）。

ところで、今回調査した結果、前期の遺構は黒ボク中に掘り込み面があるものと考えられる。また、遺構の掘り方は、浅いもので黒ボク中、柱穴を除く深いものでも漸移層までとなっていた。このため、漸移層上面で遺構検出をした場合、その大半が消失しているものと思われる。今回の調査では漸移層上面で遺構検出を行ったため、確認できなかった遺構が多く存在するといえよう。（玉木）



第9図 竪穴住居1



第10図 竪穴住居1出土遺物

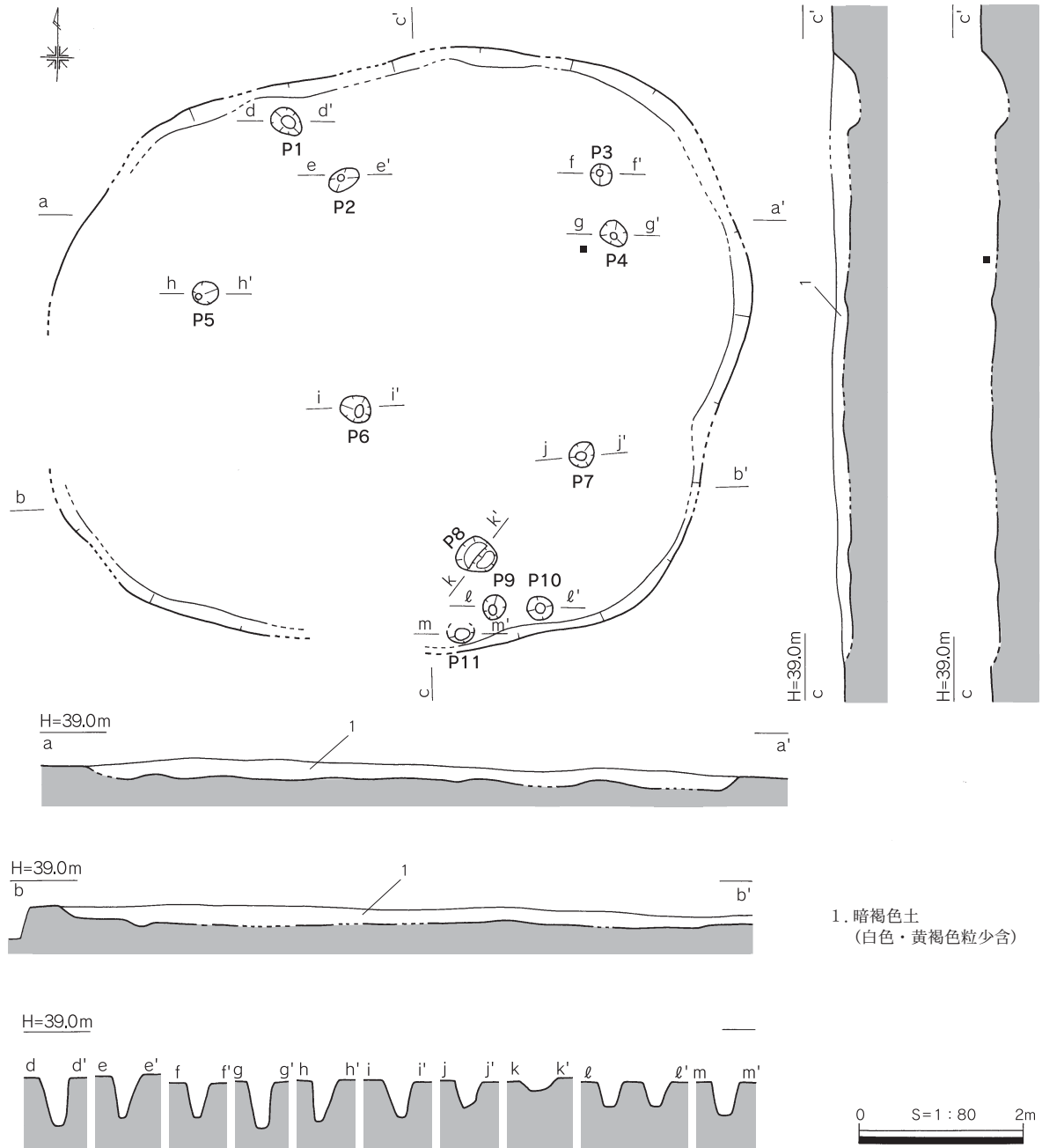
## 2. 竪穴住居

### 竪穴住居1 (第9・10図、PL.2・13)

調査区東側のD2グリッド中に位置しており、竪穴住居2の北側に隣接する。遺構の検出面は、黒ボク下面から漸移層上面である。本遺構の周辺において、遺物がまとまって出土したことから、精査を重点的に行ったところ、不明瞭ながらも平面形を捉えることができた。また、平面形を明確に捉えるためトレンチを複数入れ、断面を明確にすることとした。しかし、遺構の埋土が黒ボクに起因する黒褐色土であり、検出面である黒ボクとは砂粒の含有量の違いしか認められなかったことから、平面形を明確にすることができなかった。

遺構の形状・規模は不明瞭なものであったが、確認できた状況から、長軸6.4m、短軸6m、床面積30.3㎡あまりの不整形な円形を呈するものと推測できる。検出面からの深さは24cm、床面の標高は38.4mであり、掘り込みは漸移層までであった。床面はほぼ平坦であったが、硬化した部分は認められなかった。ここからはピットを23基確認した。これらのピットのうち、柱穴と考えられるものはP1～3の3基である。これらは径16～42cm、深さ42～50cmを測り、平面形が楕円形を呈する。



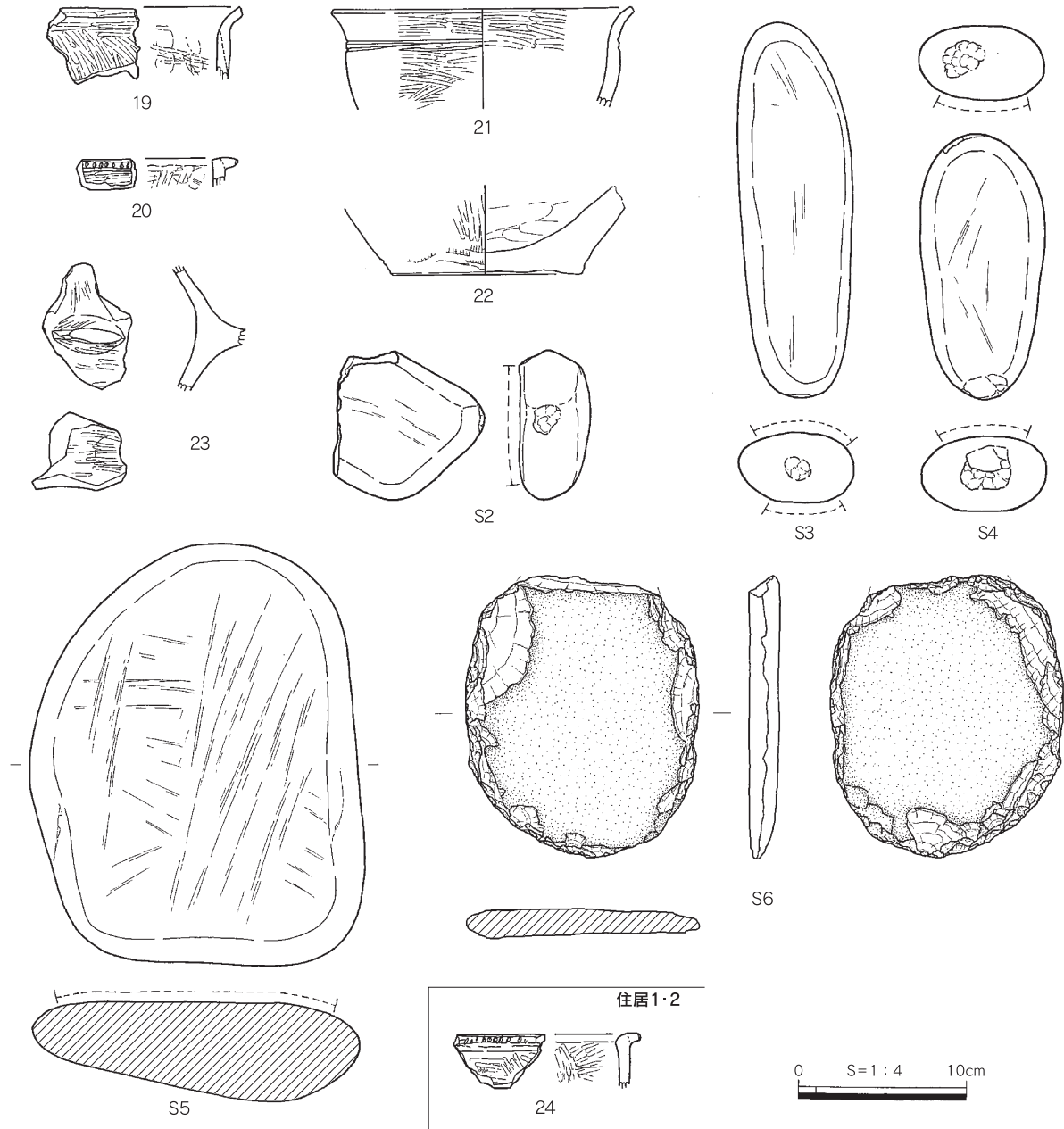


第11図 竪穴住居 2

遺物は弥生土器や石器が出土している。このうち11は胴部に削り出し突帯のつく壺であり、S1は磨製石包丁である。時期は清水編年のI-2~3期、弥生時代前期後半頃と考えられる。

竪穴住居 2 (第11・12図、PL. 2・14)

調査区東側のE2グリッド中に位置する。竪穴住居1の南側に隣接し、竪穴住居3や掘立柱建物1と重複する。切り合い関係から、最も古いものが本遺構であり、以後、掘立柱建物2、竪穴住居3の順に建てられたと考えられる。遺構の検出は黒ボク下面から漸移層上面で行った。竪穴住居1と同様、遺構の埋土が黒褐色土であり、検出面と同質であるため、遺構の全体像を捉えることが困難であった。遺構の形状・規模は不明瞭なものであったが、確認できた状況から判断すると、長軸8.8m、短軸7.3



第12図 竪穴住居1・2出土遺物

m、床面積46.2㎡あまりの不整形な楕円形を呈するものと推測される。検出面からの深さは20cmを測り、床面の標高は38.5m、掘り込みは漸移層までとなる。床面は若干凹凸があるものの比較的平坦であるが、硬化した部分は認められなかった。床面からはピットを11基確認したが、柱穴と考えられるものは確認できなかった。このため本遺構はたわみの可能性も考えられる。

遺物は弥生土器や石器が出土した。このうち24は遺構検出中に出土したものであり、竪穴住居1のどちらに帰属するのかわ不明である。時期は清水編年のI-3期、弥生時代前期後葉と考えられる。

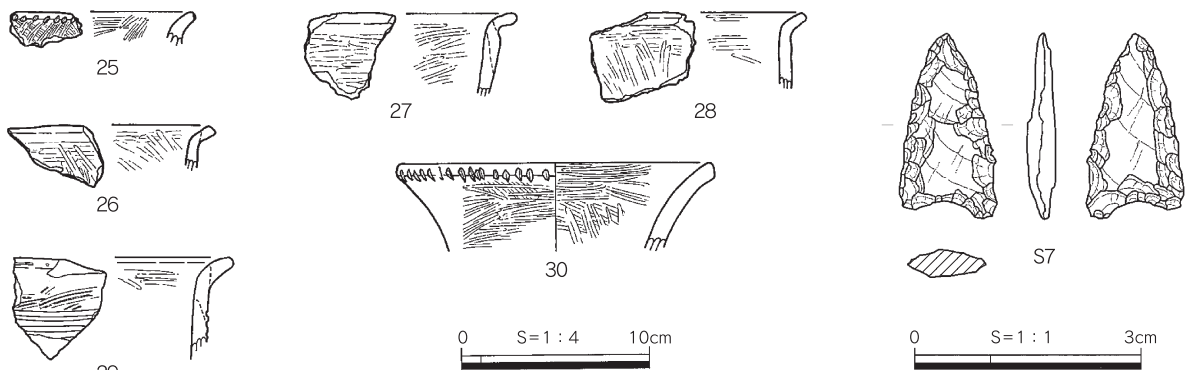
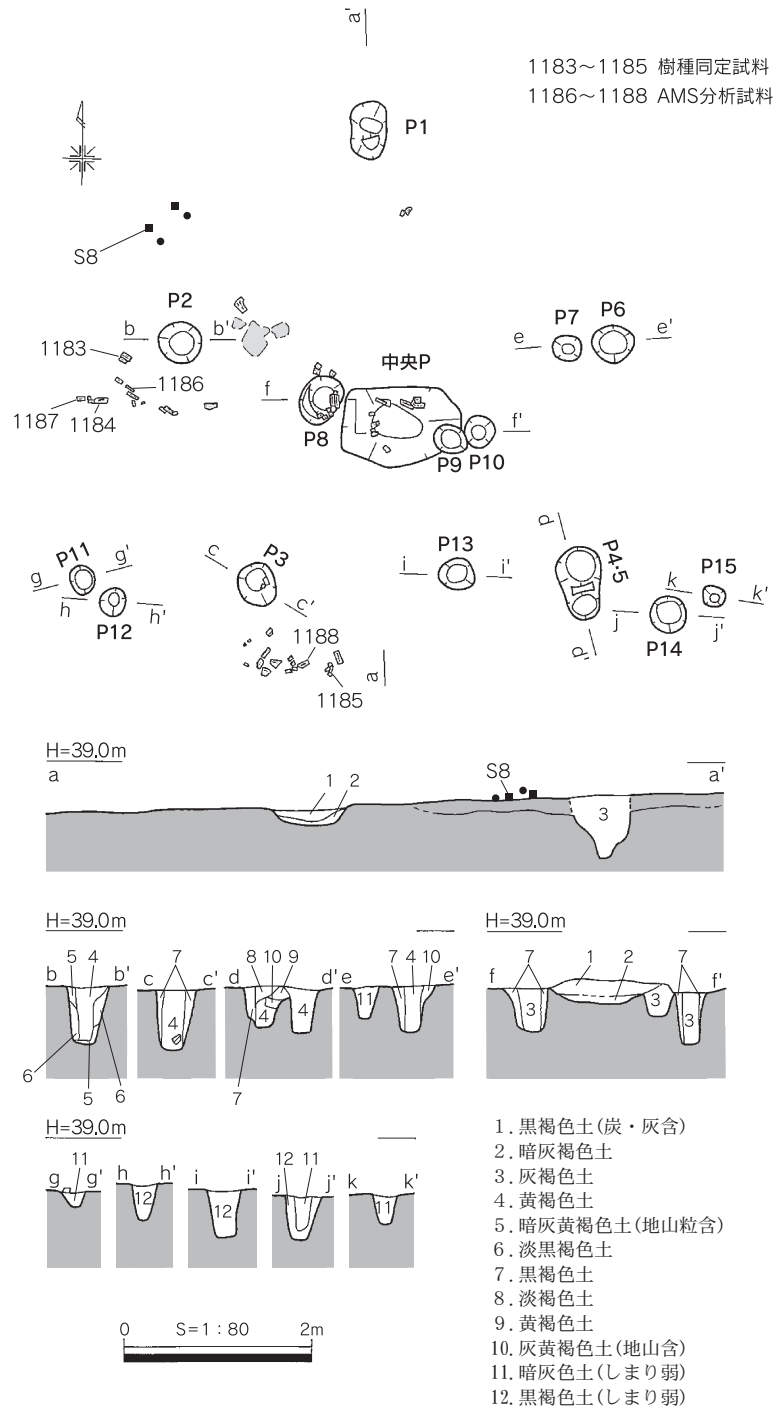
### 竪穴住居3（第13・14図、PL.2・14・15）

調査区東側のE2グリッド中に位置しており、竪穴住居2と重複し、中世の墓3によって切られている。ここは、漸移層付近まで重機で掘り下げた場所であり、埋土の大半が消失していた。検出時に

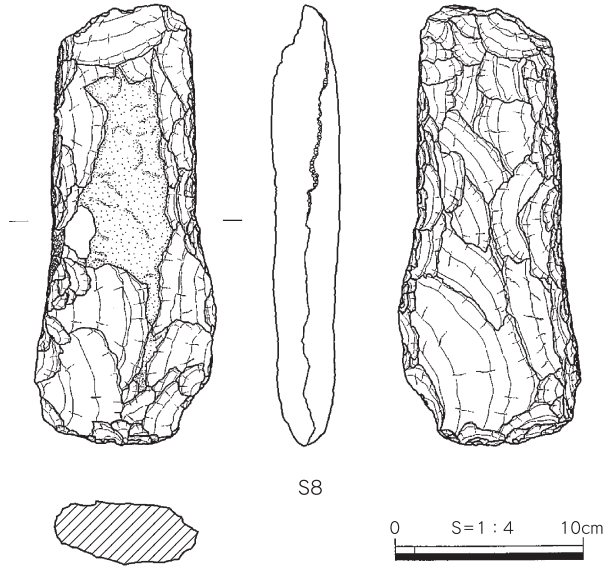
はすでに床面付近の炭が散っていた。遺構の広がりはある程度把握できたものの、平面形を明確に捉えることはできなかった。

遺構の形状・規模は不明である。床面は標高38.6mであり、竪穴住居2の上面に位置している。床面からはピット15基を確認した。このうち柱穴と考えられるものはP1～6・8・10の8基であり、これらは径32～64cm、深さ44～68cm、平面形が円形ないしは楕円形を呈するものである。これらの柱穴のうち、支柱穴と考えられるものは、P1～3・5・6の5基であり、その柱間隔は270～348cmを測る。なお、P2・3・5・6・8・10では径16～24cmほどの柱痕跡を確認した。さらに、P4の上面には淡褐色土が堆積しており、柱穴を掘り直した時に埋められたものと考えられる。

また、この住居の中心にはP8とP10に挟まれた中央ピットがある。規模は長軸128cm、短軸83cm、深さ16cmを測り、平面形は不整形な方形を呈する。埋土中からは炭・灰が多量に出土した。



第13図 竪穴住居3・出土遺物

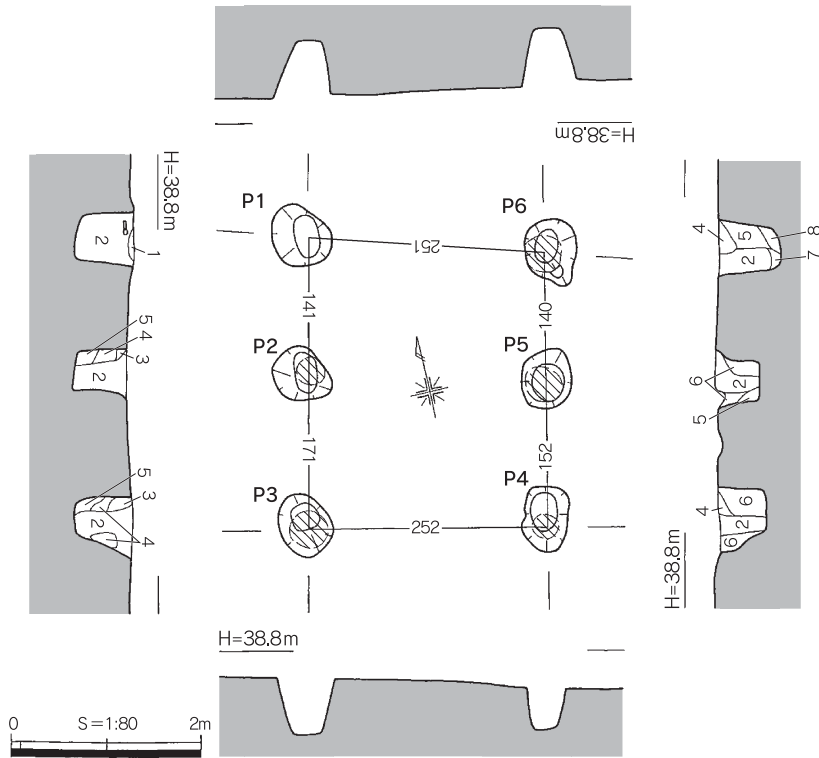


第14図 竪穴住居3出土遺物

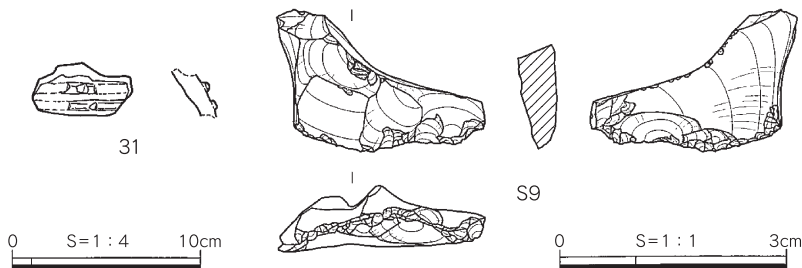
床面からは、焼土とともに炭化材が検出された。炭化材が中央ピットに向かい放射状に倒れていたため、焼失住居の可能性が考えられる。これらの樹種はニガキ、クスノキ、ヤマグワであった(第5章参照)。遺物は25~30、S7・8が出土した。S8は被熱の痕跡があり、廃絶時のものと考えられる。時期は年代測定の結果、 $2250 \pm 30 \sim 2440 \pm 30$ BPであった(第5章参照)。(玉木)

3. 掘立柱建物

掘立柱建物1 (第15図、PL.2)



- 1. 黒褐色土(黄褐色ブロック少含)
- 2. 暗褐色土(しまり弱、黄褐色ブロック少含)
- 3. 暗褐色土(しまり強、黄褐色ブロック少含)
- 4. 暗褐色土(しまり強、黄褐色ブロック多含)
- 5. 暗褐色土(しまり弱、黄褐色ブロック僅含)
- 6. 暗褐色土(しまり弱)
- 7. 黄褐色土(しまり弱、1層少含)
- 8. 黄褐色土(しまり弱)



第15図 掘立柱建物1・出土遺物

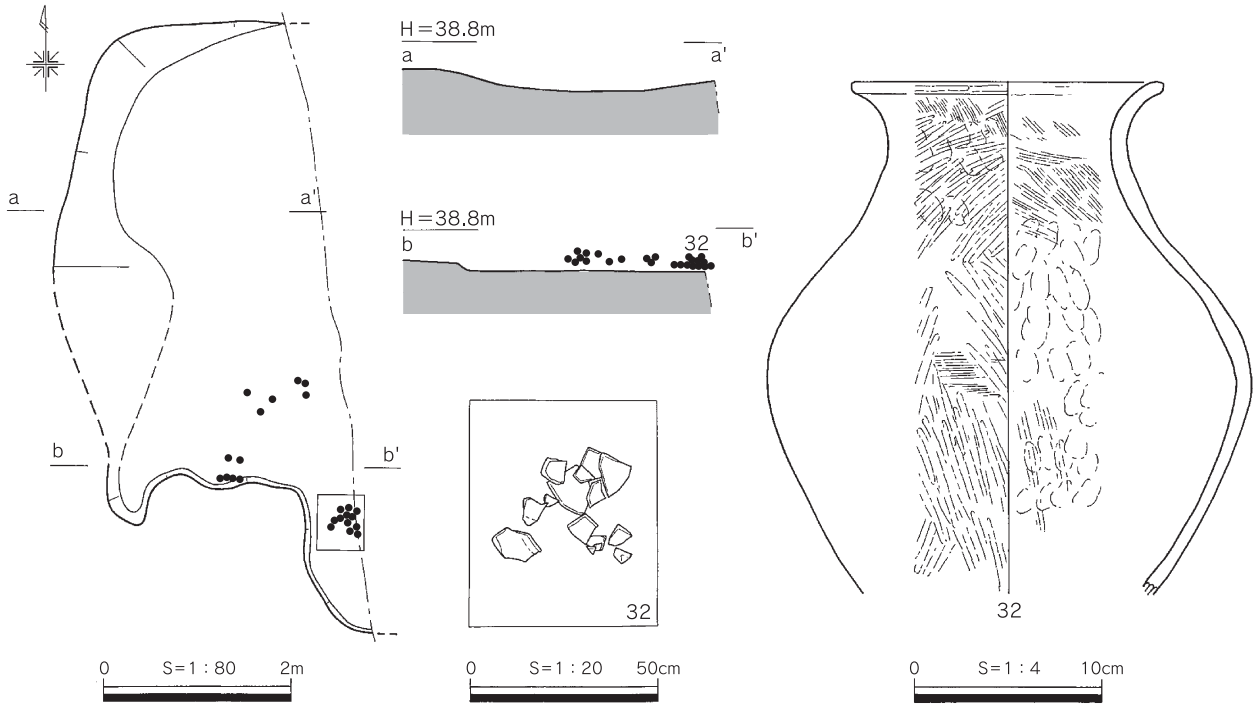
E2グリッドの北側に位置する。竪穴住居2を切る。黒ボクの下面の竪穴住居2の埋土上面で検出した。

建物の形状は長方形で桁行2間、梁間1間である。規模は桁行が約3.1m、梁間が約2.5mである。主軸は、 $N-10^{\circ}-E$ をとる。柱穴の掘り方は、検出面での平面形は円形を呈し、断面形は「U」字状である。P2~6に関しては柱痕が残っており、土層断面図中の埋土2が柱痕に相当する。土層断面の観察から柱痕の直径は15~25cmである。

P1から甕の胴部31、P4からは黒曜石製のスクレイパーS9が出土している。清水編年のI-3期に相当する。

遺構の時期は出土遺物や竪穴住居2との切り合い関係から弥生時代前期後葉と考える。(浅田康行)





第16図 たわみ2・出土遺物

#### 4. たわみ

##### たわみ2 (第16図、PL.15)

D 2～E 2グリッドにあり、竪穴住居1の東側に位置する。漸移層上面で検出した。検出規模は長軸約6m、短軸約3mで、検出面から底面までの深さは10cmである。埋土は暗灰褐色土の単層で、弥生土器片を包含している。当初は住居として扱っていたが、明瞭な掘り込みが見られないこと、平面形がいびつであることから、くぼみ状の部分に遺物が堆積したものと考え、たわみ状の遺構とした。

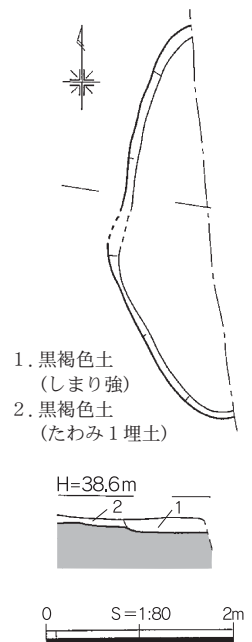
32は壺である。緩やかに「く」字状に外反する口縁部を持つ。内外面に赤彩の痕跡が残る。これは清水編年のI-2期のものである。

本遺構の時期は出土遺物から弥生時代前期中葉である。

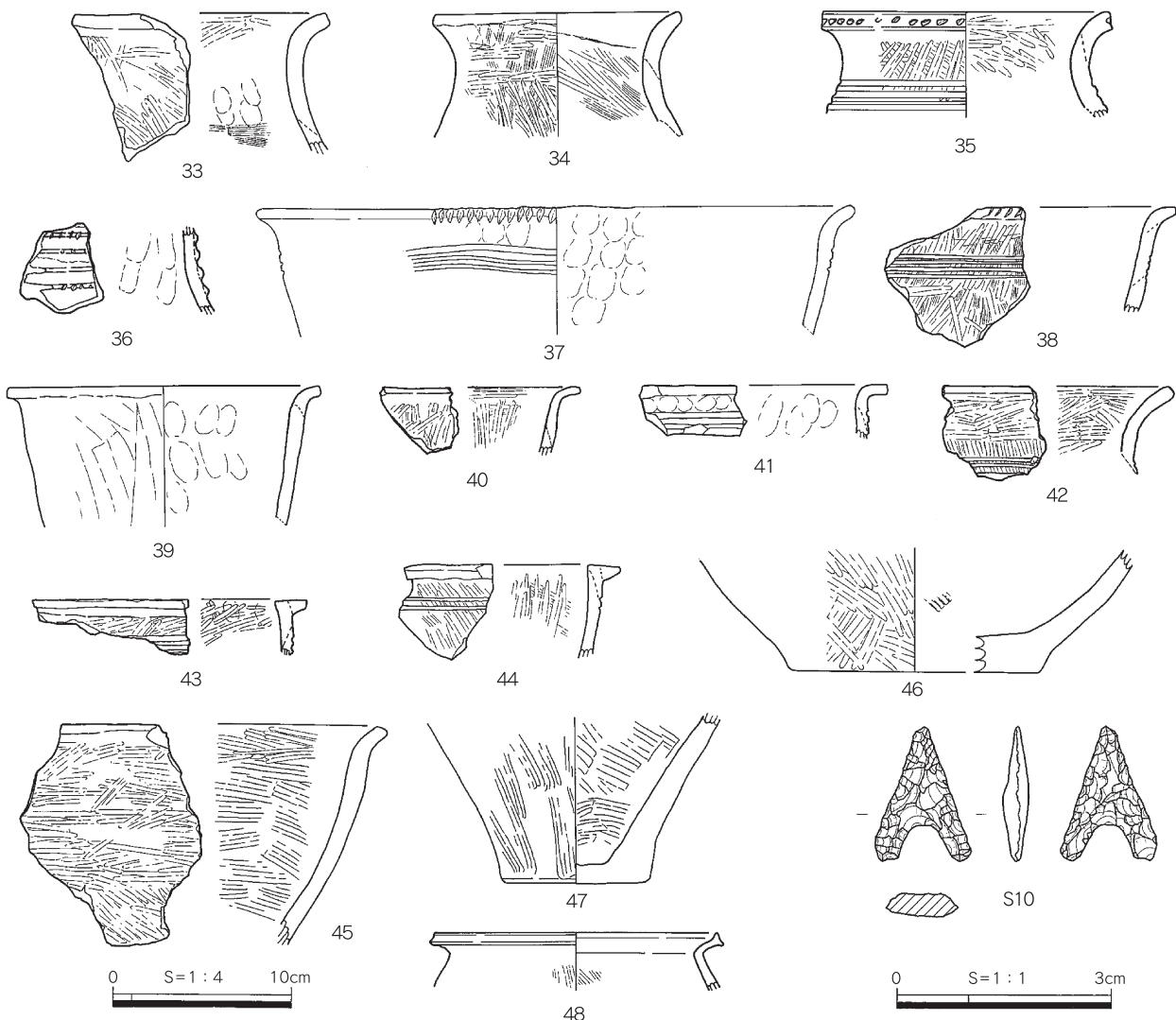
##### たわみ3 (第17図)

F 1グリッドの調査地東壁際に位置する。漸移層上面で検出した。規模は長軸約4m、短軸約1mである。検出面から底面までの深さは10cmである。埋土は黒褐色土の単層である。たわみ2と同様、当初は住居として扱っていたが明瞭な掘り込みが見られないこと、平面形がいびつであることから、たわみ状の遺構とした。

遺物がないため、詳細な時期については不明であるが、たわみ2と同じ面で検出していることから、弥生時代前期頃が想定される。(浅田)



第17図 たわみ3



第18図 弥生時代遺構外出土遺物

5. 遺構に伴わない遺物 (第18図、PL.14・15)

33～36は壺である。これらのうち33～35は緩やかに外反する口縁部を持つものである。33は外傾接合からなり、外面に条痕を施した後ヘラミガキを施す。内面は条痕を施す。内外面ともに赤彩の痕跡がわずかに残る。34は外傾接合からなり、外面にはハケメ後ヘラミガキ、内面にはナデ後ハケメを施す。35は口唇部に刺突文を施し、頸部には4条以上の沈線を施す。36は壺の胴部と思われ、外面に4条以上の刻目貼付突帯を施す。37～44は甕の口縁部である。37は口唇部に刻目を施す。38は口唇部に刻目を、胴部には4条の沈線を施す。40は外傾接合からなり、外面にハケメ後ヘラミガキを施し、内面にはヘラミガキを施す。41は、口縁部下には2条以上の沈線を施す。43・44は逆「L」字状の口縁部を持つものである。胴部には2条以上の沈線を施す。43には外面に赤彩痕が残る。45は鉢である。外面にヘラミガキ、内面にはヘラミガキおよび条痕を施す。内面に赤彩痕が残る。46は壺の底部、47は甕の底部である。これらはおおむね清水編年のⅠ-2～3期のものである。48は甕の口縁部である。清水編年のⅢ-2期のものである。S10は黒曜石製の石鏃であり、最大長19mm、最大幅13.5mm、重さ0.9gを測る。(浅田)

第4節 古墳時代の遺構・遺物

1. 概要

古墳時代の遺構・遺物は、旧東伯町教育委員会による確認調査の際に竪穴住居4や遺物包含層が確



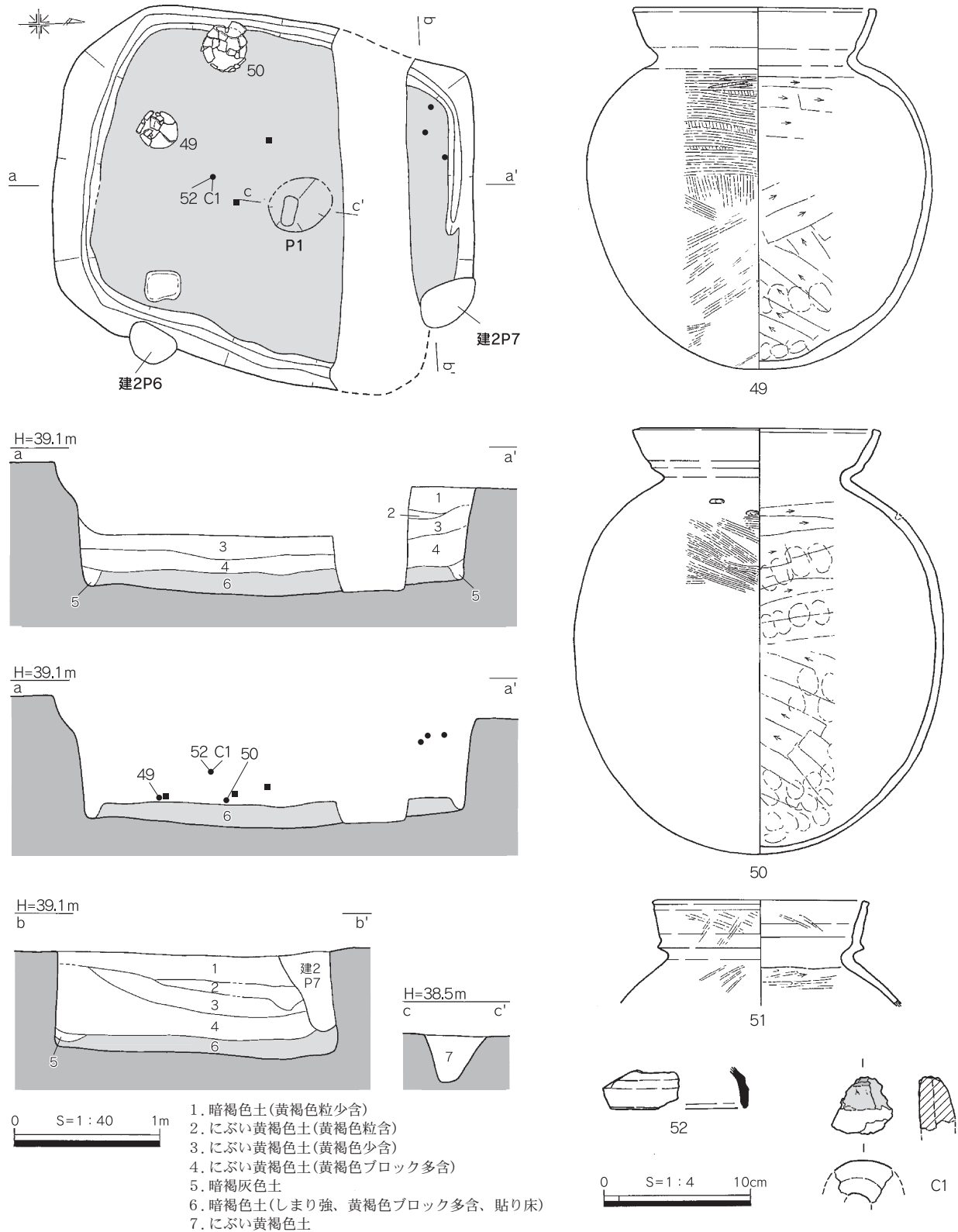
第19図 古墳時代遺構配置図



第20図 古墳時代主要遺構配置図



認められたことから、調査前においてその存在が明らかであった。本来の遺構の検出面は、古代～中世の耕作土を除去した黒ボク上面であるが、ここでは遺構の確認が困難であるとの判断がなされたため、検出の比較的容易な漸移層上面まで重機で掘り下げてから調査を行うこととなった。しかし、重機による表土剥ぎも終盤、全体の2/3が終了した時点で黒ボク上面から溝2の遺物がまとまって出土したため、当初の調査計画を変更してここまですを残し、調査を行うこととなった。



1. 暗褐色土(黄褐色粒少含)
2. にぶい黄褐色土(黄褐色粒含)
3. にぶい黄褐色土(黄褐色少含)
4. にぶい黄褐色土(黄褐色ブロック多含)
5. 暗褐色土
6. 暗褐色土(しまり強、黄褐色ブロック多含、貼り床)
7. にぶい黄褐色土

第21図 竪穴住居4・出土遺物

確認した遺構は、前期～後期にかけての竪穴住居6棟、掘立柱建物4棟、土坑9基、方形土坑5基、硬化面1面、焼土面1面、溝11条、畦畔状遺構1面である。これらは調査区全体に分布しており、また、調査区の南側に接した民有地からも土師器や須恵器が出土することから、この周辺一帯の微高地上には前期～後期にかけての集落が営まれていたと想定できる。なお、調査区東側で遺構が希薄になっているのは、後世の削平や表土剥ぎによって遺構が消滅したためと思われる。（玉木）

## 2. 竪穴住居

### 竪穴住居4（第21図、PL.3・16）

調査区北西側のE7グリッドに位置する。トレンチが住居の中心部分にかかっていたため依存状態は良くなかった。東側に位置する掘立柱建物2に切られていることから、住居4が先行する。

遺構の規模は長軸2.5m、短軸2.1m、床面積4.7㎡を測り、平面形は隅丸方形を呈する。検出面からの深さは65cmを測り、床面の標高は38.1mであった。床面はソフトロームまで掘り込まれていた。床面から黄褐色と暗褐色の混合土で固くしまった貼り床がほぼ全面にわたって検出されており、この厚さは8cm程度であった。また、壁に沿って幅8～14cm、深さ約12cmの壁溝がほぼ全周していた。

床面には主柱穴に相当するものを確認することはできなかった。貼り床除去後に、住居のほぼ中央から長軸44cm、短軸36cm、深さ約32cmを測るピットを確認したが、本住居にともなうものかどうかは不明である。また、住居の周辺においても柱穴の検出をこころみたが確認できなかった。

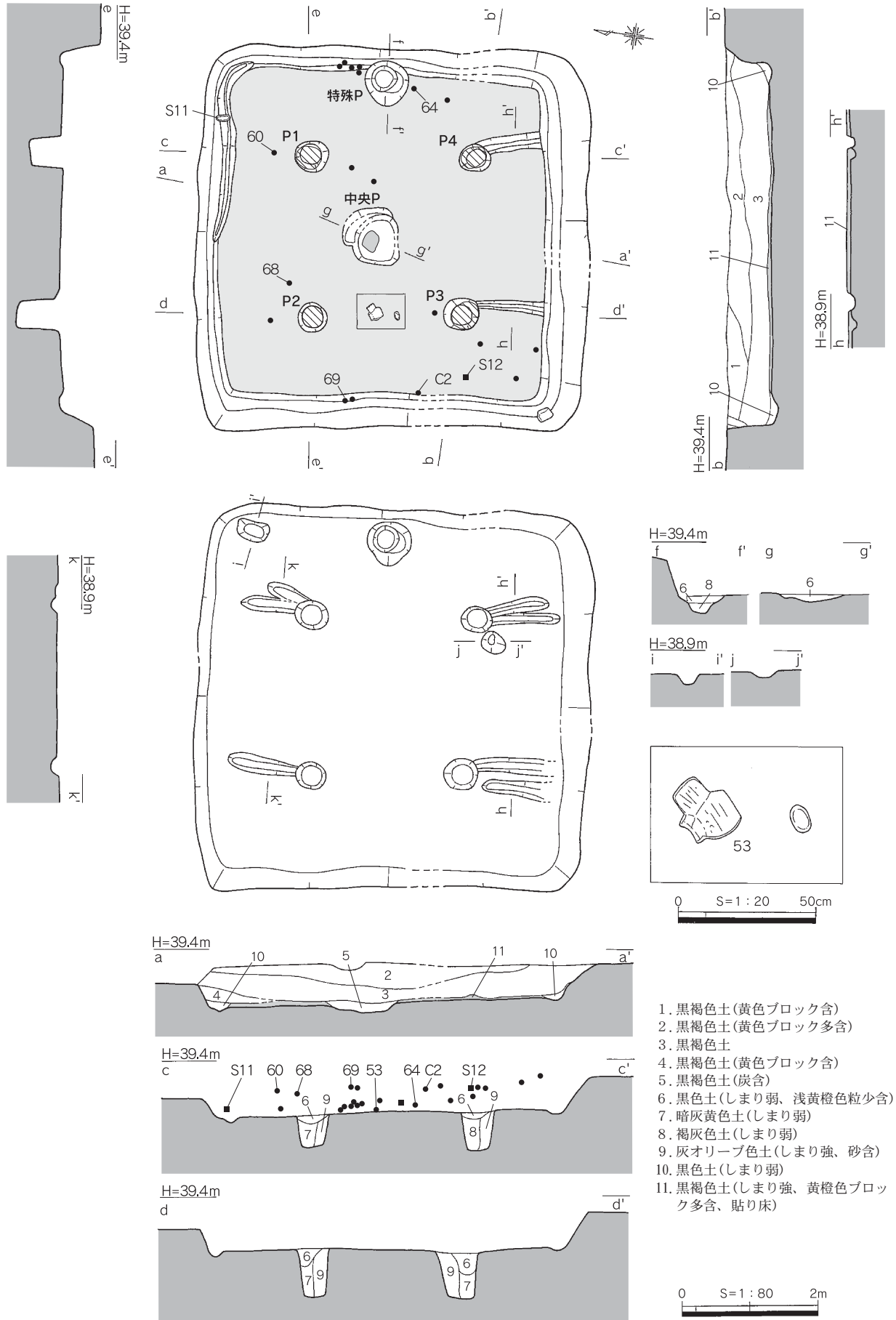
埋土は、黒ボクに起因する暗褐色土やにぶい黄褐色土であり、これらはレンズ状の堆積状況を示している。このことから、自然堆積によって埋没したものと考えられる。

出土遺物は土師器や須恵器、羽口などがあり、49～52、C1を図示した。このうち49・50は床面直上から、51・52、C1は埋土中からの出土である。49・50はほぼ完形になる甕であり、「く」の字に折れ曲がる口縁部をもち、肩部に刺突文を施すものである。51は複合口縁の甕、52は須恵器の坏蓋である。49・50が天神川IV～V期の特徴を示すことから、時期は古墳時代中期前葉に相当すると思われる。（前島ちか）

### 竪穴住居5（第22・23図、PL.3・16・17）

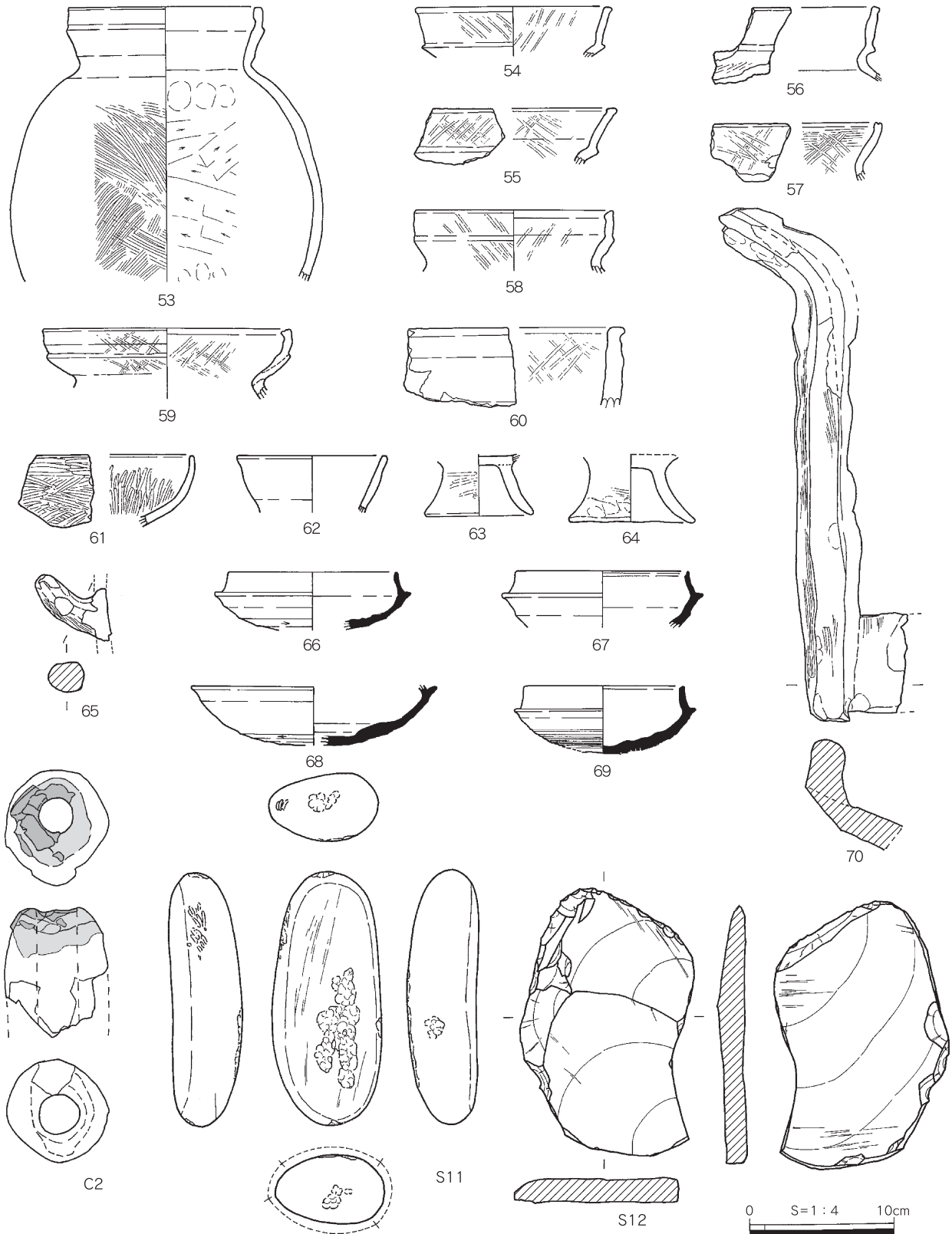
調査区南側のG6グリッド中に位置し、北東隅が溝10と接する。遺構の検出は畠1の耕作土を除去した黒ボク上面で行った。埋土は黒ボクに起因する黒褐色土であるが、地山ブロックを含んでいたため遺構の検出は容易であった。

遺構の規模は、長軸5.7m、短軸5.5m、床面積21.4㎡を測り、平面形は方形を呈している。主軸はN-5°-Wである。検出面からの深さは60cm、床面の標高は38.6m、掘り込みはソフトロームまでである。床面には黒ボクと地山掘削土による貼り床が全面に認められ、その周囲には幅24cm、深さ12cmほどの壁溝がめぐる。主柱穴は4基確認されており、いずれも径40cmほどの柱痕跡が認められる。これらの柱間距離は2.4mほどである。柱穴の掘り方は径44～50cmほどの楕円形を呈しており、深さ48～62cmを測る。P3・4からは壁溝に接続する幅20cm、深さ10cmほどの溝がのびている。床面中央には長軸82cm、短軸62cm、深さ24cmほどの不整形な中央ピットが認められ、この底面は被熱により赤色化していた。床面東側では壁溝を切るような形で掘り込まれた径66cm、深さ10cmほどの円形を呈し



- 1. 黒褐色土(黄色ブロック含)
- 2. 黒褐色土(黄色ブロック多含)
- 3. 黒褐色土
- 4. 黒褐色土(黄色ブロック含)
- 5. 黒褐色土(炭含)
- 6. 黒色土(しまり弱、浅黄橙色粒少含)
- 7. 暗灰黄色土(しまり弱)
- 8. 褐灰色土(しまり弱)
- 9. 灰オリーブ色土(しまり強、砂含)
- 10. 黒色土(しまり弱)
- 11. 黒褐色土(しまり強、黄橙色ブロック多含、貼り床)

第22図 竪穴住居 5



第23図 竪穴住居5出土遺物

た特殊ピットを検出した。貼り床除去後には、柱穴からのびる幅20cm、深さ10cmほどの溝4条、ピット2基を確認した。

遺物は、53～70、S11・12、C2などが出土した。53、S11は床面付近から、他は埋土の上層から



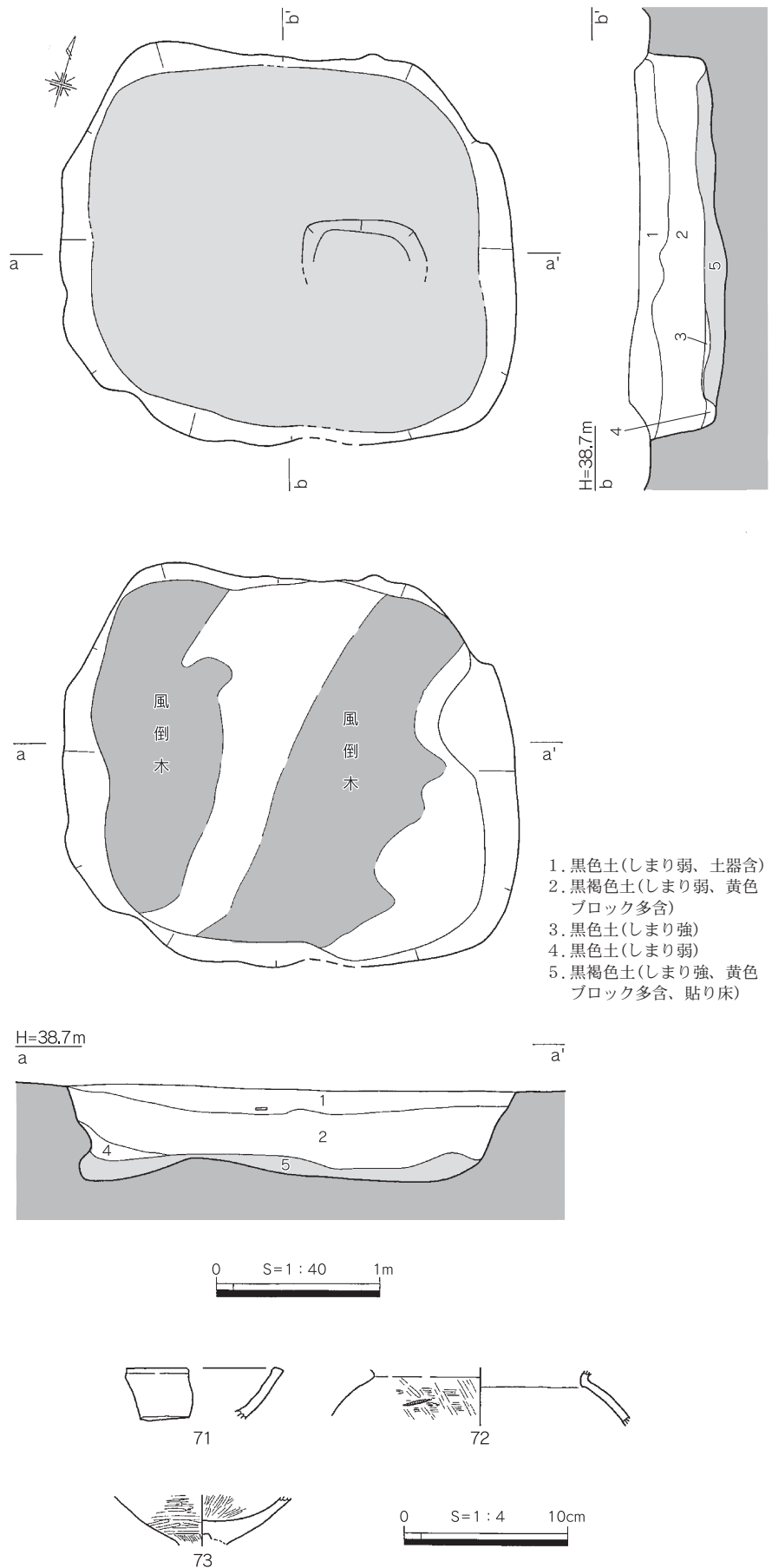
中層にかけての出土である。時期は、53が天神川X期、八橋IV期の特徴を示すことから、古墳時代後期前葉と考えられる。

**竪穴住居 6**  
(第24図、PL. 3)

調査区北側のC4グリッド、竪穴住居7の北側約10mに位置している。上面は古代～中世の耕作痕2によって切られていた。遺構の検出は漸移層上面で行った。

遺構の形状・規模は、長軸2.8m、短軸2.4m、床面積4.7㎡あまりの隅丸方形を呈しており、主軸はN-13°-Wである。床面までの深さは40cm、床面の標高は38m、掘り込みはソフトロームまでである。床面には黒ボクと地山掘削土による厚さ12cmほどの貼り床が全面にわたって認められた。また、南側では壁に沿うようなかたちで幅20cm、深さ6cmほどの溝を検出し、中央のやや東側においては一辺75cm、深さ4cmほどのピットを確認した。さらに貼り床を除去すると、底面には風倒木の痕跡が認められた。

遺物は埋土中から71～73が出土した。71・72は



第24図 竪穴住居 6・出土遺物

甕である。72の肩部には櫛状工具による刺突文が施されている。73は高坏の坏部である。これらの遺物は遺存状況が悪いため不明瞭であるが、天神川IV～V期の特徴を示すものと考えられる。遺構の時期は、遺物が床面から浮いた状況で出土したため明確にすることができないが、前期後半頃には廃絶していたものと考えられる。(玉木)

### 竪穴住居7 (第25～27図、PL. 3・17～20)

調査区中央やや北東側のD4・E4グリッドに位置する。遺構検出は黒ボク上面で行った。

遺構の規模は、長軸6.4m、短軸5.6m、床面積33.9㎡を測る。形状は隅丸方形を呈し、主軸方向はN-22°-Eである。検出面からの深さは65cmを測り、床面の標高は37.8mであった。床面はソフトローム層まで掘り込まれていた。また、壁に沿って、幅15～18cm、深さ約8cmの壁溝がほぼ全周していた。

床面からは、P1～4の4基の支柱穴を確認した。柱穴の規模は径34～44cmを測り、平面形は円形を呈する。床面からの深さは64cmを測り、掘り方はソフトロームまで掘り込まれていた。このうちP1・3からは径23cmの柱痕跡を確認した。また、P3の埋土の堆積状況から、柱を据えた後に2回に分けて埋め戻されたことが確認された。P1～4の柱間距離は、2.9～3.0mであった。

また同じく床面から、幅0.8～1.4cm、深さ2cmほどの溝を確認した。このうちの1条はP4から北東方向に向かって湾曲してのびており、もう1条は南北方向に直線的にのびていた。

さらに、住居のほぼ中央からは中央ピットを検出した。中央ピットは二段掘りとなっており、上段は長軸100cm、短軸72cm、深さ10cmを測る長方形、下段は径40cm、深さ47cmを測る円形を呈するものであった。この埋土は2層にわかれ、上層は土器を多く含んだ黒褐色土、下層は地山ブロックを多く含む暗褐色土であった。

そのほかにはP5～9の5基のピットを確認した。P5～9は、規模が径22～58cm、深さ12～20cmを測り、平面形は円形ないしは楕円形を呈するものであった。ピットの深さは柱穴に比べて浅く、また、その配置状況にも規則性が認められないことから、性格については不明である。

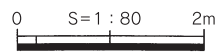
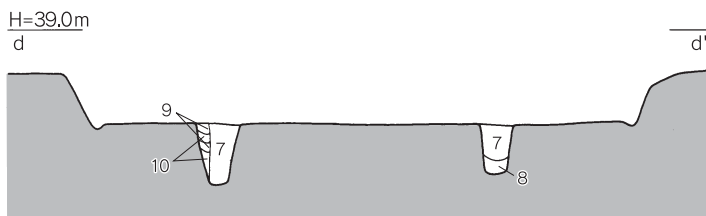
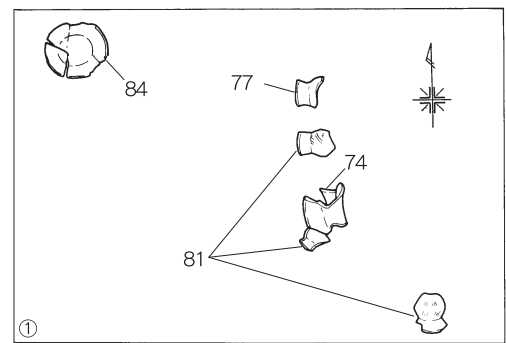
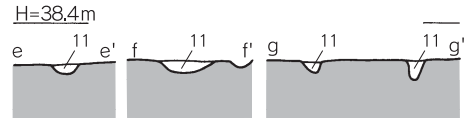
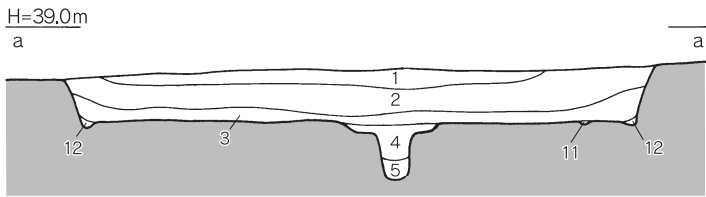
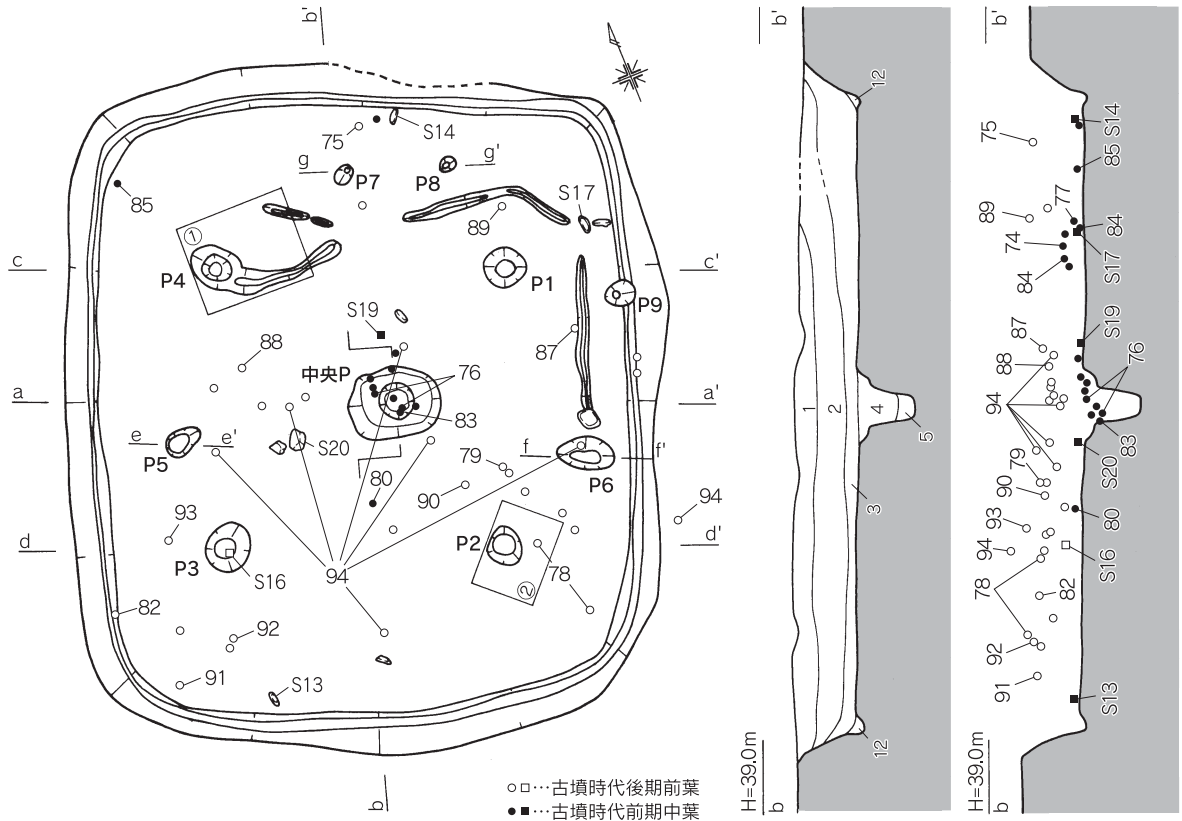
埋土は黒ボクに起因するものであり、3層に分層することができた。これらの層はレンズ状の堆積を示すことから、自然堆積によって埋没したのものと考えられる。また、埋土の上層からは古墳時代後期の遺物が、下層では古墳時代前期の遺物が出土しており、住居廃絶後、後期の段階まで窪地であったことがうかがえる。

遺物は、第25図の断面図で示したように、埋土下層から出土したものと上層から出土したものの大きく2つに分かれる。先にも述べたとおり、下層が古墳時代前期の遺物であり、上層が古墳時代後期の遺物である。土師器や須恵器、石器が出土しており、このうち74～94、S13～20を図示した。これらは上層と下層で時期が異なるため、下層、上層の順に述べていく。

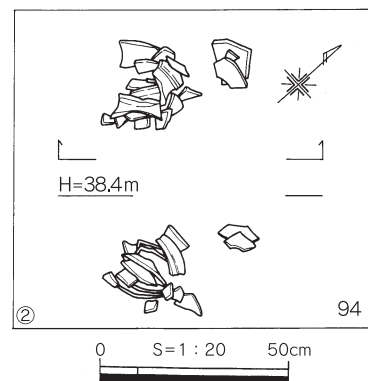
下層からは74・76・77・80・81・83～85、S13～15・17・19が出土した。このうち、床面直上から出土したものは76・83・84、S13・17・19・20である。76は複合口縁の甕であり、床面から中央ピット内の埋土上層にかけて出土した。口縁部下端はにぶく突出し、口縁部端部に平坦面をもつ。肩部外面



写真図版3 竪穴住居7 遺物出土状況



- |                           |                  |
|---------------------------|------------------|
| 1. 褐灰色土(しまり強)             | 9. にぶい黄褐色土       |
| 2. 灰黄褐色土(しまり強、粗砂含)        | 10. 黒褐色土         |
| 3. 暗褐色土(黄褐色ブロック含)         | 11. 灰褐色土         |
| 4. 黒褐色土(しまり強、黄褐色ブロック・土器含) | 12. 暗灰黄色土(黄褐色粒含) |
| 5. 暗褐色土(しまり弱、黄褐色ブロック多含)   |                  |
| 6. 黒褐色土(しまり強、黄褐色粒含)       |                  |
| 7. 褐灰色土(しまり強、黄褐色粒少含)      |                  |
| 8. にぶい黄褐色土(しまり弱、黄褐色粒少含)   |                  |

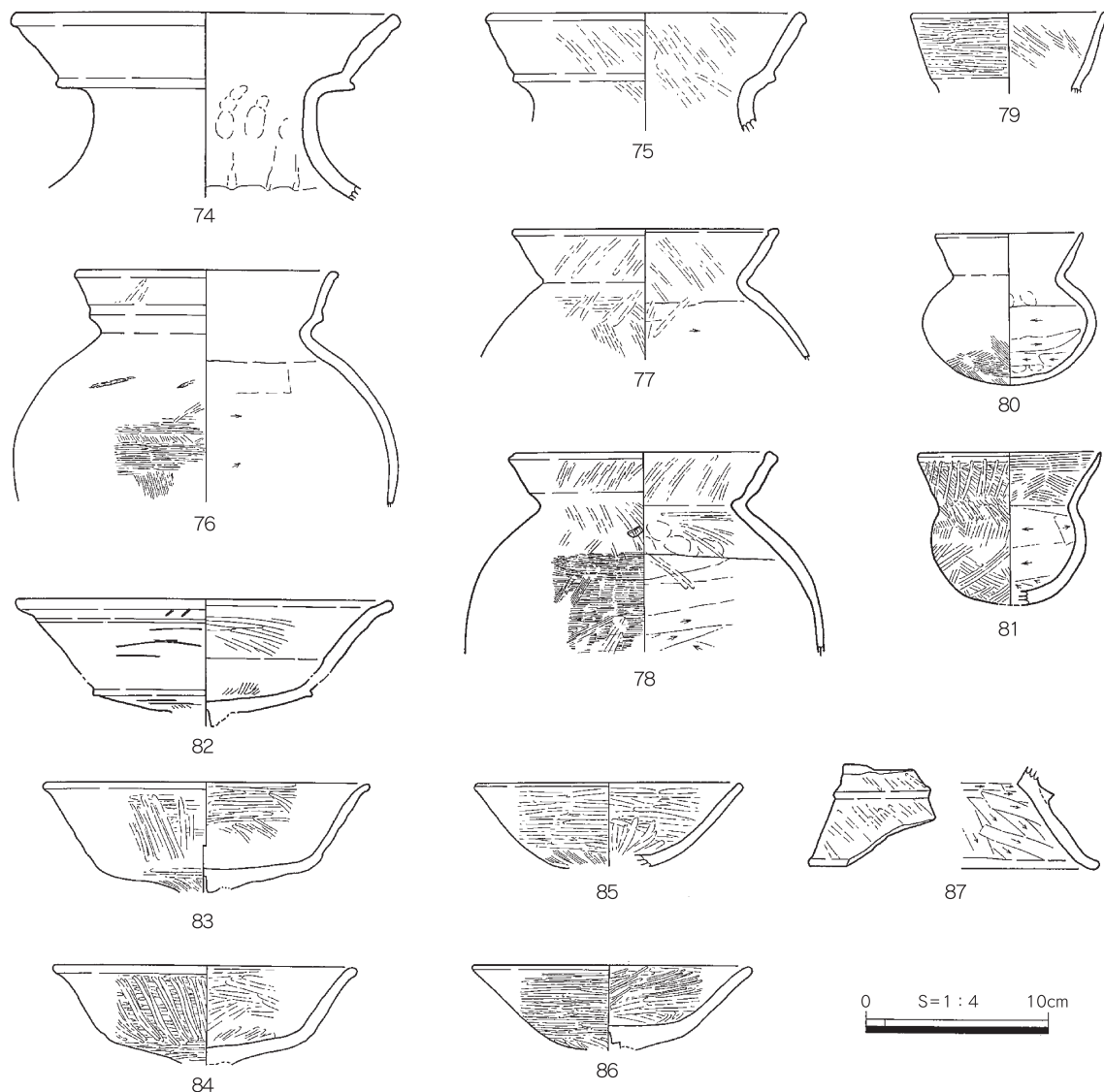


第25図 竪穴住居 7

に刺突文を施文し、胴部外面には煤が付着する。83・84は高坏の坏部である。83は口唇部を丸くおさめるものであり、外面には赤色顔料を塗布した痕跡が認められる。また、内外面には煤が付着している。84はP4付近において、口縁部が上を向いた状態で出土した。口唇部は83と同様、丸くおさめる。下層の遺物は天神川Ⅲ期の特徴を示しており、古墳時代前期中葉のものと思われる。

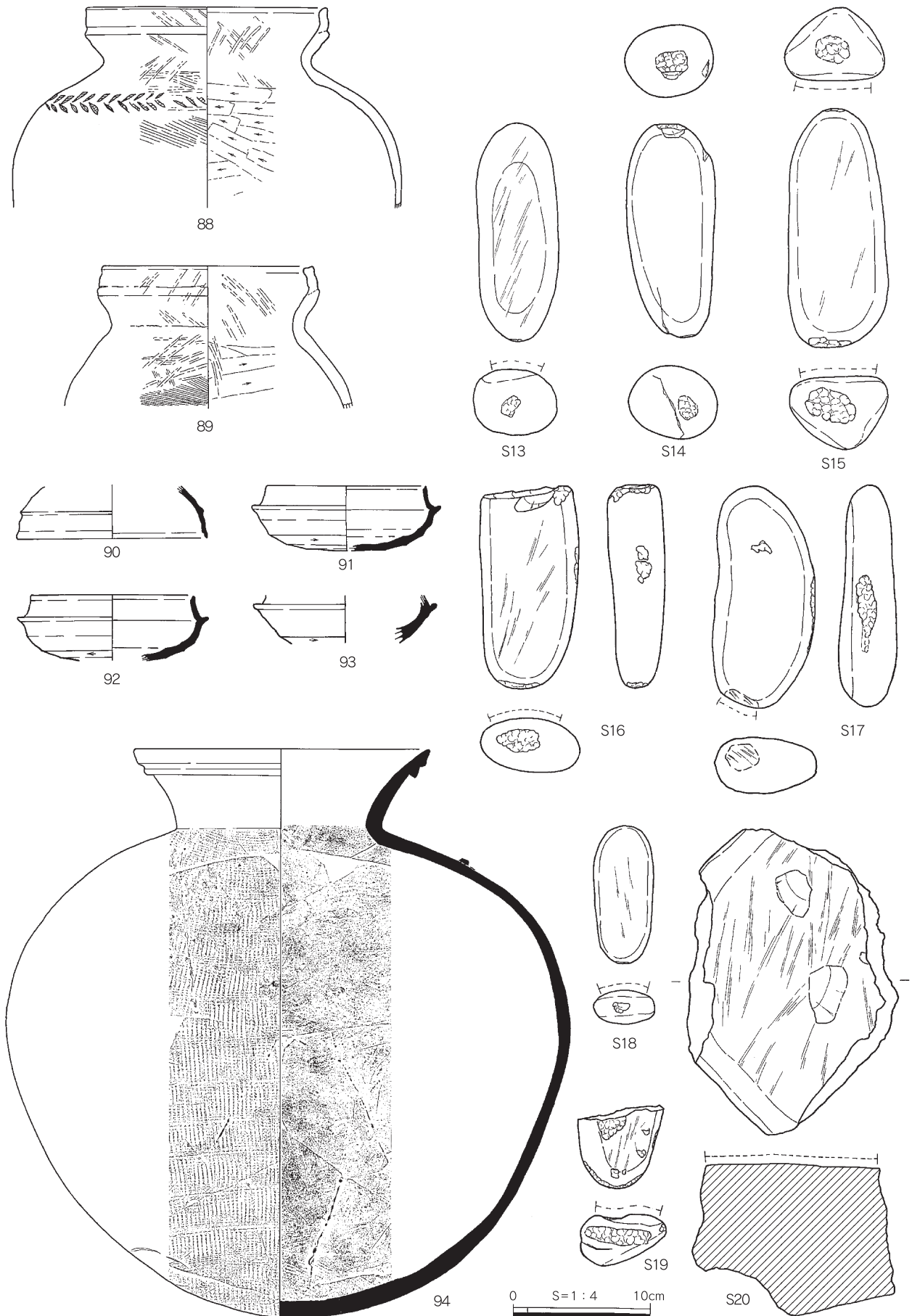
上層からは、75・78・79・82・87～94、S16が出土した。94は須恵器の甕であり、ほぼ完形となるものである。住居の南東側において折り重なり合うようにして出土した。なお、この甕の破片の一部は溝5からも出土している。頸部はゆるやかに外反しており、口縁部は下方へ屈曲する。口縁部にはヨコナデを施し、胴部外面には平行タタキ、内面には同心円状の当て具痕が残る。口縁部から肩部にかけて自然釉がかかる。上層の遺物は、天神川Ⅹ期、八橋Ⅳ・Ⅴ期の特徴を示すことから、古墳時代後期前葉のものと思われる。

遺構の時期であるが、下層から出土した遺物が古墳時代前期中葉であることから、前期中葉には廃絶されたものと考えられる。また、上層から出土した遺物が後期前葉のものであることから、前期中葉に住居としての機能を失った後、なかば窪地状に埋没した後期の段階で土器が流入したと考えられ



第26図 竪穴住居7出土遺物①





第27図 竪穴住居7 出土遺物②

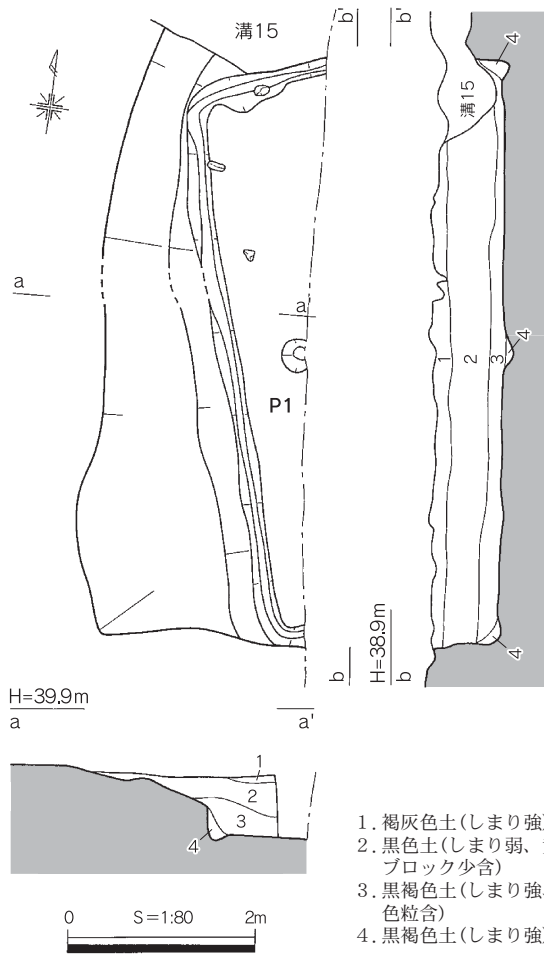
る。なお、上層から出土した須恵器の甕94の破片が、住居の西側に位置する溝5からも出土しており、溝5が機能していた段階までここが窪地であったものといえよう。(前島)

竪穴住居8 (第28図、PL. 3・19)

調査区東側のD2グリッド、竪穴住居6の東側約20mに位置している。遺構の北側は中世の溝15によって切られており、東側は調査区外へのびている。また、住居の西側には不整形な段が幅6mの範囲にわたり検出されている。

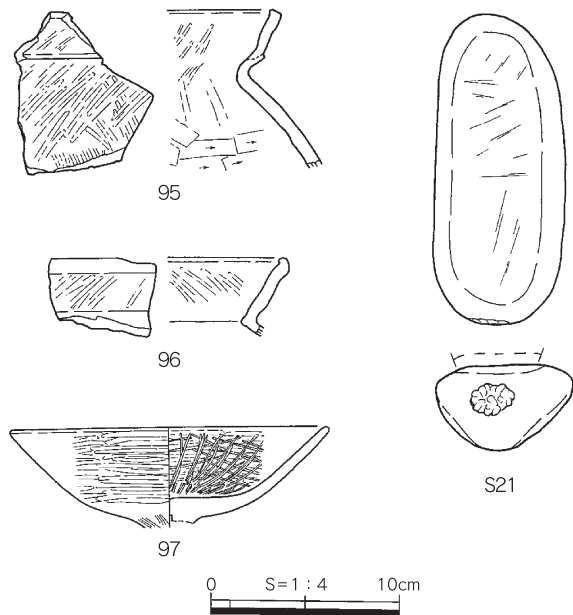
遺構の形状・規模はその大部分が調査区外へと伸びており、全体像は不明瞭である。確認できた状況から判断すると、1辺6.1mほどの方形を呈するものと推定される。床面積の復元値は37㎡ほどであり、主軸はN-20°-Wと考えられる。検出面からの深さは70cmを測り、床面の標高は37.8m、掘り込みはソフトルームまでとなっている。床面に貼り床は貼られていないが、比較的硬化していた。柱穴は確認されておらず、径33cm、深さ10cmほどのP1を確認したのみである。また、床面の周囲には幅20cm、深さ10cmほどの壁溝がめぐる。

出土遺物には土師器の甕95・96、高坏97、敲石S21などが出土している。このうち、S21は床面からの出土である。これらの遺物の時期は天神川IV~V期と考えられるため、この住居の埋没時期は古墳時代前期後葉以前と考えられる。(玉木)



竪穴住居9 (第29図、PL. 3)

H1グリッドの調査地南東隅に位置する。漸移層上面で検出した。調査区境に位置しているため、検出できたのは遺構の北西隅部分だけである。遺構の主体部は調査区外へ続いている。検出した規模は南北約1.6m、東西約0.8mである。平面形は、



第28図 竪穴住居8・出土遺物

検出した部分から隅丸方形を呈するものと考えられる。床面には地山層の黄褐色土を多く含む黒褐色土で貼り床が施されていた。検出面から床面までの深さは最大72cmを測り、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。検出した範囲においては、床面上に壁溝および、ピットを確認することはできなかった。

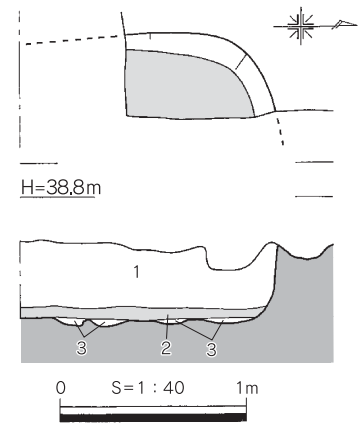
遺物が皆無のため詳細な時期については不明だが、他の竪穴住居と同じ検出状況であることから、古墳時代と考えられる。(浅田)

### 3. 掘立柱建物

#### 掘立柱建物 2 (第30図、PL. 4)

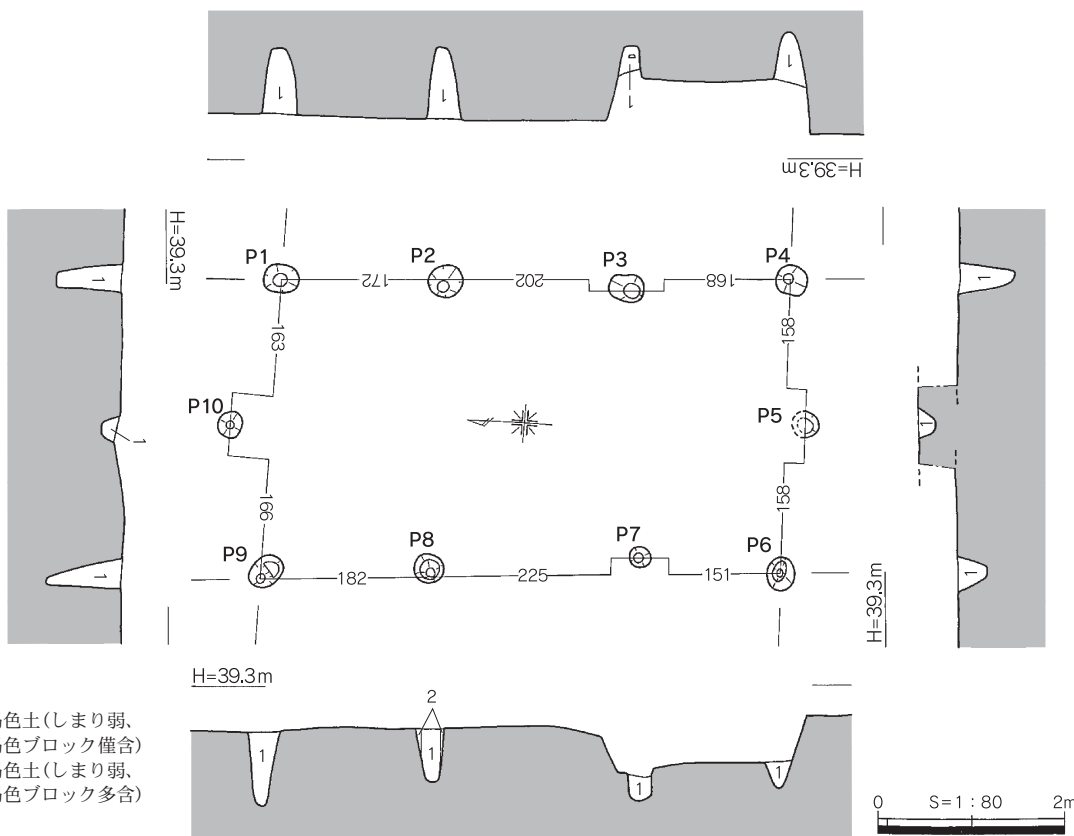
調査区西側のE7グリッド中に位置しており、竪穴住居4と溝2を切っている。遺構の検出は黒ボク上面で行った。遺構の埋土が黒ボクに比べて若干明るく、また、柱の裏込め土に地山ブロックが含まれているため、検出は比較的容易であった。

桁行3間、梁間2間の南北に長い掘立柱建物である。棟方向はほぼ南北を示すが、 $N-4^{\circ}-W$ と若干西に振れている。規模は桁行5.6m、梁間3.3m、床面積 $18.5\text{m}^2$ を測る。柱穴の平面形は円形を呈しており、規模は径22~40cm、検出面からの深さ20~110cmを測る。これらの柱穴のうち、P8では径20cmほどの柱痕跡を確認している。桁行の柱通りはほぼ一直線であるが、梁間はやや雑然としてお



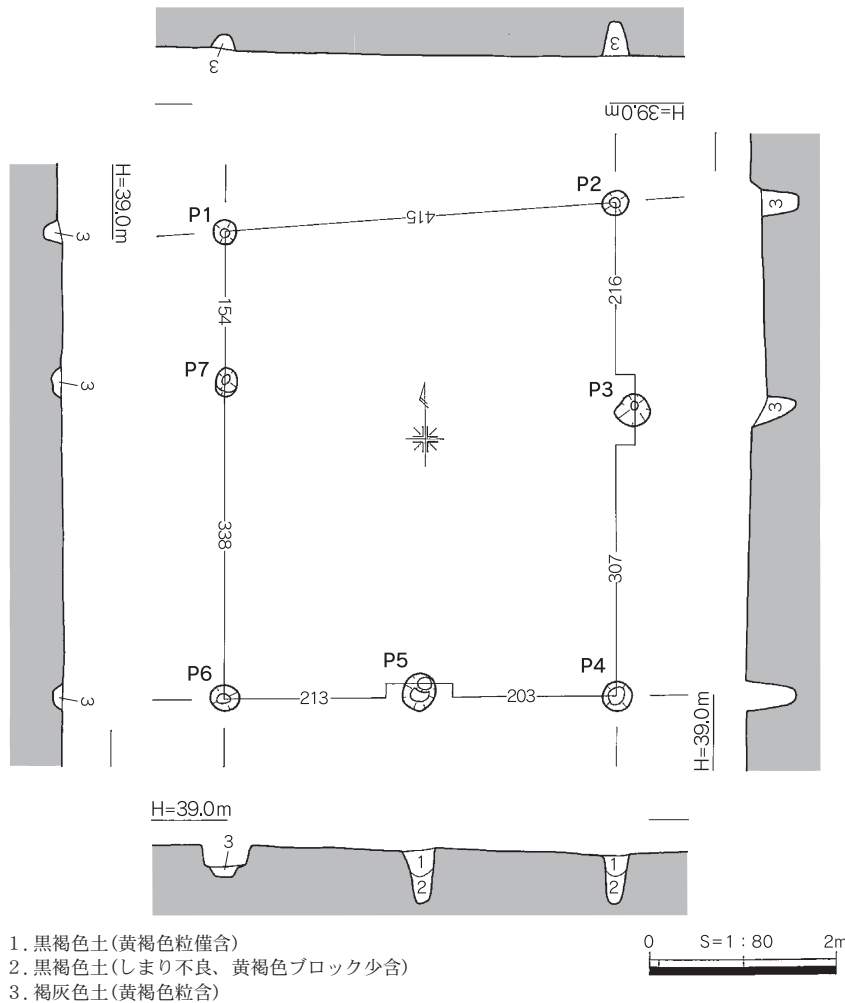
- 1. 黒褐色土(しまり弱、黄白色粒僅含)
- 2. 黒褐色土(しまり強、黄褐色ブロック多含、貼り床)
- 3. 黒褐色土(しまり弱、黄白色粒含)

第29図 竪穴住居 9



- 1. 黒褐色土(しまり弱、黄褐色ブロック僅含)
- 2. 黒褐色土(しまり弱、黄褐色ブロック多含)

第30図 掘立柱建物 2



第31図 掘立柱建物3

調査区北西側のE7グリッドに位置する。検出は黒ボク上面で行った。本遺構の北側と西側は、トレンチにかかるため遺存状態は良くない。桁行2間、梁間2間の掘立柱建物と思われ、規模は桁行5.2m、梁間4.1m、面積21.4m<sup>2</sup>を測る。棟方向はN-0°-Eで南北方向を示し、掘立柱建物2と平行している。平面形は南北に長い方形を呈しているが、ひずみが認められる。柱穴の掘り方は円形を呈し、径34cm程度を測る。検出面からの深さは、遺存状態の良い東側で48~58cmを測り、ソフトロームまで掘り込まれていた。柱痕跡は確認されなかった。

出土遺物はなく、時期を特定することはできないが、掘立柱建物2と検出状況や棟方向、埋土の堆積状況が同じであることから、ほぼ同時期のものと考えられる。(前島)

掘立柱建物4 (第32図、PL.4)

調査区中央のF4グリッド中、竪穴住居7の北側約6mに位置する。検出は漸移層上面で行った。桁行2間、梁間2間の方形を呈する掘立柱建物である。棟方向はN-11°-Wと西に振れている。規模は桁行3.7m、梁間3.4m、床面積12.6m<sup>2</sup>を測る。柱穴の平面形は円形を呈しており、規模は径26~44cmを測る。検出面からの深さは40~68cmであり、掘り込みはソフトロームまでとなる。

時期は、遺物が出土しておらず不明瞭であるが、古墳時代のものと考えられる。(玉木)

掘立柱建物5 (第33図、PL.4)

G1グリッドの西側に位置する。方形土坑2・4を切る。黒ボク下面から漸移層上面で検出した。

り、P5・10が外側へ張り出している。また、このP5・10は、他のもの比べて掘り込みが非常に浅いことから、別の機能を有していた可能性が考えられる。

埋土中からは遺物が出土しておらず、時期を特定することができなかった。しかし、竪穴住居4、溝2との切り合い関係から、古墳時代中期以降のものと考えられる。(玉木)

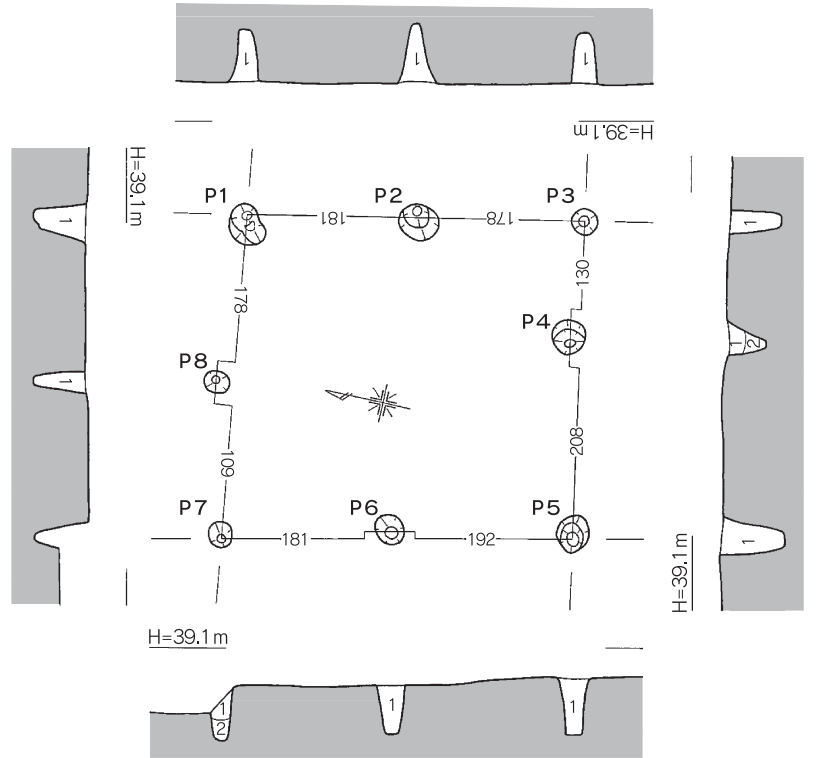
掘立柱建物3 (第31図、PL.4)

調査区北西側のE7グリッドに位置する。検出は黒ボク上面で行った。本遺構の北側と西側は、トレンチにかかるため遺存状態は良くない。桁行2間、梁間2間の掘立柱建物と思われ、規模は桁行5.2m、梁間4.1m、面積21.4m<sup>2</sup>を測る。棟方向はN-0°-Eで南北方向を示し、掘立柱建物2と平行している。平面形は南北に長い方形を呈しているが、ひずみが認められる。柱穴の掘り方は円形を呈し、径34cm程度を測る。検出面からの深さは、遺存状態の良い東側で48~58cmを測り、ソフトロームまで掘り込まれていた。柱痕跡は確認されなかった。



桁行2間、梁間1間の掘立柱建物である。平面形は長方形で、規模は桁行が約5m、梁行が約3.6mである。主軸は座標北に対し $N-13^{\circ}-E$ に振る。柱穴の掘り方の平面形は円形を呈し、断面形は「U」字状である。P1・3～6に関しては柱痕跡が残っており、土層断面図中の埋土1が柱痕跡に相当する。土層断面の観察から、柱の直径は15～25cmである。埋土8は暗褐色土でしまりがよく、堆積の様子から裏込め土と思われる。

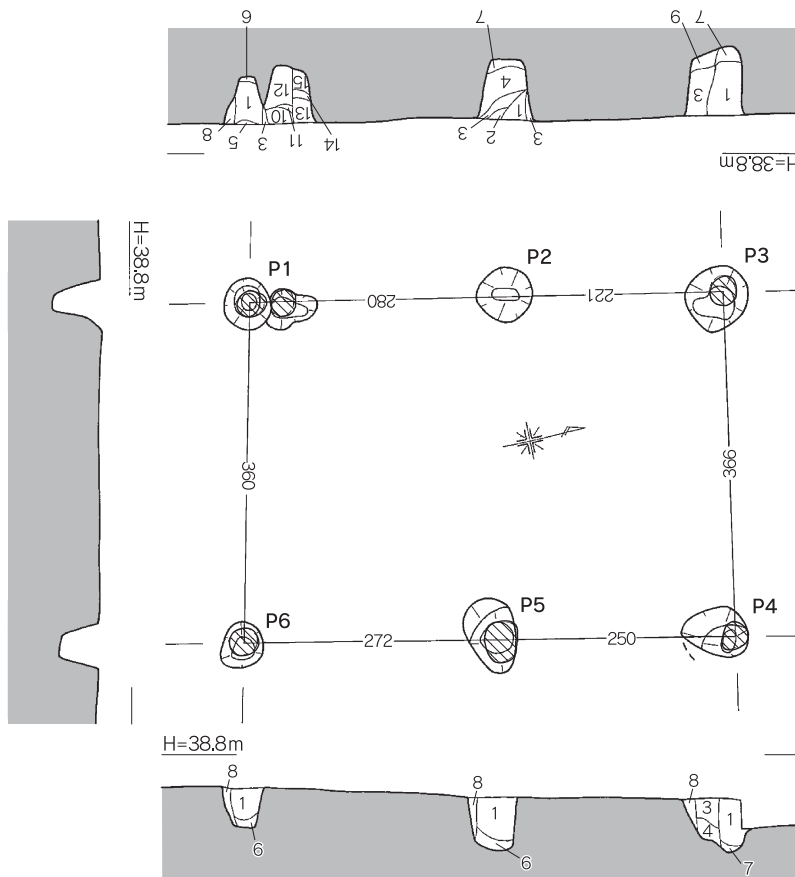
遺物は出土していない。そのため本遺構の時期を特定す



- 1. 黒褐色土(しまり強)
- 2. 黒褐色土(浅黄色ブロック多含)

0 S=1:80 2m

第32図 掘立柱建物4



- 1. 黒褐色土(しまり弱)
- 2. 暗褐色土(しまり強、黄褐色土少含)
- 3. 暗褐色土(しまり強、黄褐色土多含)
- 4. 暗褐色土(しまり弱)
- 5. 暗褐色土(しまり強、黄褐色土多含)
- 6. 黒褐色土(しまり強、黒褐色土多含)
- 7. 黄褐色土
- 8. 暗褐色土(しまり強)
- 9. 黄褐色土(しまり弱)
- 10. 黒褐色土(黄褐色ブロック多含)
- 11. 黒褐色土(黄褐色ブロック少含)
- 12. 黒褐色土(黄褐色ブロック僅含)
- 13. 黒褐色土(黄褐色ブロック少含)
- 14. 暗褐色土(黄褐色ブロック少含)
- 15. 暗褐色土(黄褐色ブロック多含)

0 S=1:80 2m

第33図 掘立柱建物5

ることはできないが、検出面が竪穴住居8と同じ状況であることや方形土坑との切り合い関係から、古墳時代前期以降が想定される。(浅田)

#### 4. 土坑

##### 土坑1 (第34図、PL.4)

調査区北西側のF7グリッドに位置する。平面形は不整形な楕円形を呈する。規模は長軸140cm、短軸69cm、深さは23cmを測る。底面は平坦である。壁面は、東側では垂直に立ち上がるが、北西側ではわずかに掘り込まれた袋状を呈する。遺物は出土しておらず、時期・性格ともに不明である。

##### 土坑2 (第34図、PL.4)

調査区北側のD7グリッドに位置する。土坑の中央部分にトレンチがかかっていたため遺存状態は良くない。平面形は遺存状況から隅丸長方形を呈すると思われる。規模は長軸153cm、短軸約114cm、検出面からの深さは56~70cmを測る。底面には凹凸があり、またここから深さ5cm程度の浅いピットを検出した。遺物は出土しておらず、時期・性格ともに不明である。

##### 土坑3 (第34図、PL.5)

調査区北西側のF6グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長軸104cm、短軸89cm、検出面からの深さ54cmを測る。底面は平坦であり、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。遺物は出土しておらず、時期・性格ともに不明である。

##### 土坑4 (第34図、PL.5)

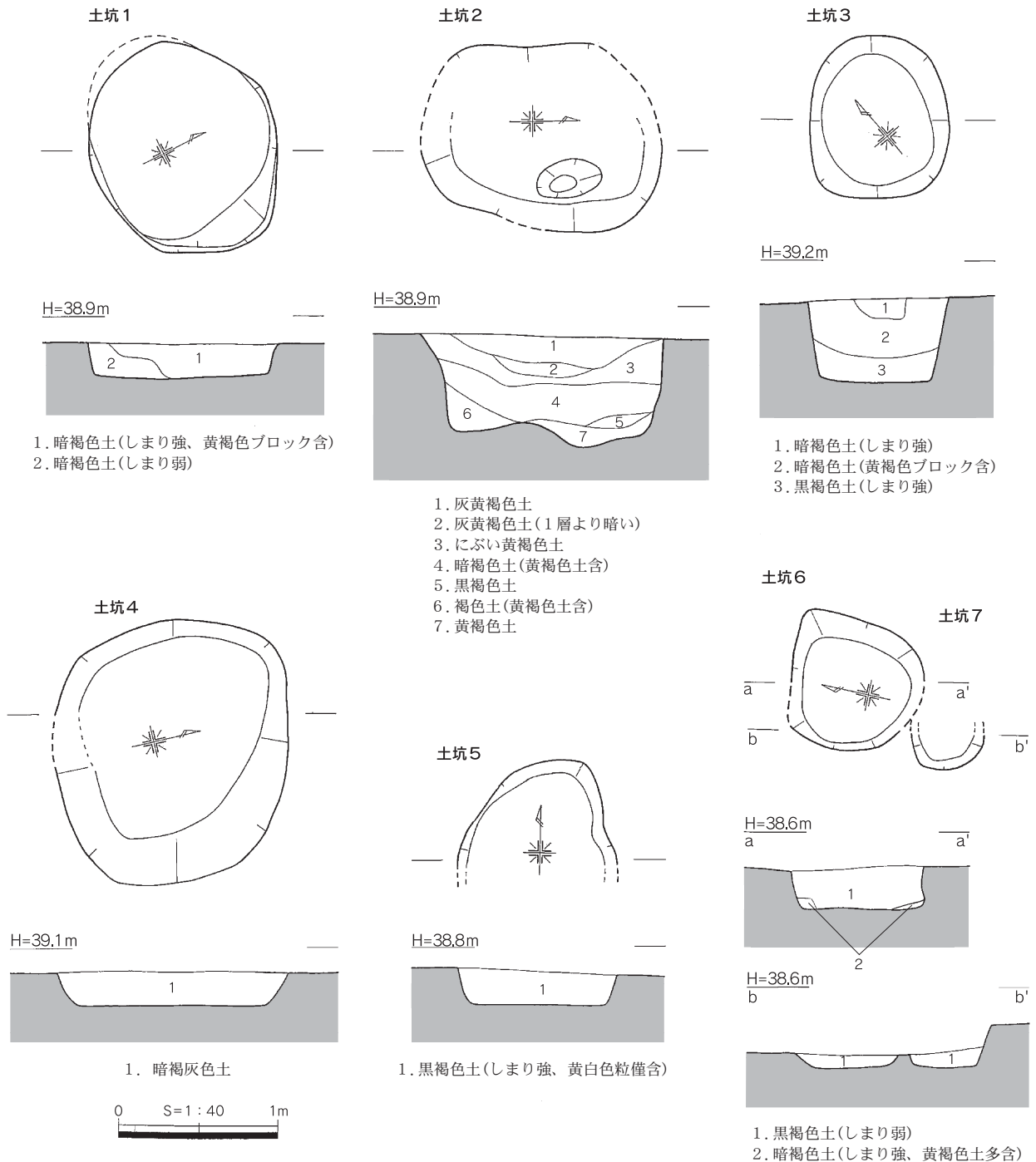
調査区中央のF5グリッドに位置する。平面形は不整形な楕円形を呈する。規模は長軸164cm、短軸152cm、検出面からの深さ22cmを測る。底面は平坦であり、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。遺物は出土しておらず、時期・性格ともに不明である。

##### 土坑5 (第34図、PL.5)

調査区南東側のH2グリッドに位置する。遺構の南側はサブトレンチにより消失している。残存状況から、平面形は円形を呈すると思われる。規模は幅110cm、深さ22cmを測る。底面は平坦であり、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。遺物は出土しておらず、時期・性格ともに不明である。

##### 土坑6・7 (第34図、PL.5)

調査区南東側のG2グリッドに位置する。両土坑の西側半分は、試掘トレンチによる削平をうけたため、遺構の底面が残る程度で遺存状態は良くない。また、遺構が切りあう部分にはトレンチがかかるため、両者の新旧関係は不明である。土坑6は、平面形は不整形な円形を呈する。底面は平坦であり、壁面は垂直に立ち上がる。土坑7は、土坑6の南西側に位置するもので、遺存する壁面から平面形は円形を呈すると思われる。底面は平坦であり、壁面は垂直に立ち上がる。遺物は出土しておらず、時期・性格ともに不明である。(前島)



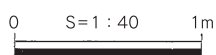
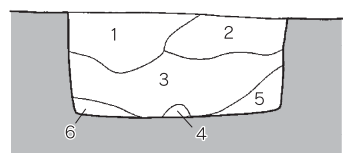
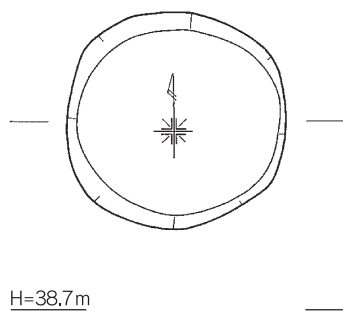
第34図 土坑1～7

土坑8 (第35図、PL.5)

G1グリッドの北西側に位置する。黒ボク下面から漸移層上面で検出した。方形土坑2を切る。平面形は円形を呈する。規模は径116cm、深さは56cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面にはピットは確認できなかった。埋土は主に暗褐色土で、断面の観察から自然堆積したものと思われる。

遺物は弥生土器の甕が出土している。98は逆「L」字状の口縁部を持つもので、口唇部に刻目を施す。清水編年のI-3期のものである。これは埋没時に混入したものと思われる。

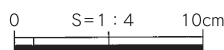
時期は竪穴住居9の検出状況および方形土坑との切り合い関係から古墳時代のものと考えられる。



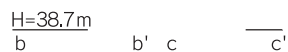
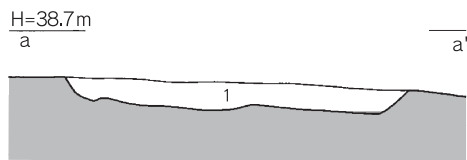
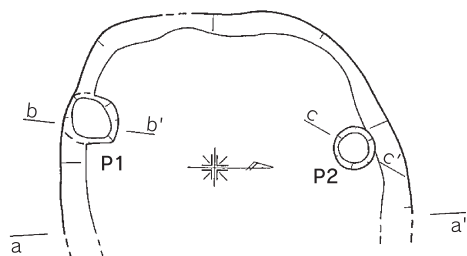
1. 暗褐色土(黄褐色粒多含)
2. 暗褐色土(黄褐色粒含)
3. 暗褐色土(しまり弱、黄褐色粒僅含)
4. 暗褐色土(しまり弱、黄褐色土多含)
5. 暗褐色土(しまり強)
6. 暗褐色土(しまり弱、黄褐色土含)



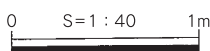
98



第35図 土坑8・出土遺物



1. 暗褐色土(黄白色粒少含)
2. 黒褐色土(黄褐色粒含)



第36図 土坑9

性格は不明である。

### 土坑9 (第36図、PL.5)

G1グリッドに位置する。黒ボク下面から漸移層上面で検出した。調査区境であるため、西側部分のみの検出であり、東側は調査区外へと続いている。規模は長軸1.8m、短軸1.2mを測り、平面形は方形を呈する。検出面からの深さは最大14cmである。壁面は外側に傾斜して立ち上がる。南北の壁面直下にピットを検出した。径20~30cm、深さは30~34cmである。埋土は黒褐色の単層で、柱痕跡は認められなかった。土坑に関連するものと考えられるが、その性格は不明である。

遺物は出土していない。時期は、土坑8と同じ検出状況であることから、古墳時代のもと考えられる。(浅田)

### 5. 方形土坑

#### 方形土坑1~5 (第37図、PL.6)

C3、G1~2グリッドに位置する。方形土坑5については、調査区北側の壁面での断面のみの検出である。平面形は方形を呈し、規模は一辺が1.3~1.6mである。底面はほぼ平坦で、検出面から底面までの深さは6~30cmである。それぞれの土坑から底面上にピットが1~2基検出された。土坑に関連するものと思われるが、性格は不明である。全ての土坑が軸をほぼ北にそろえるようにつくられており、意図的に配置されていることがうかがわれる。

遺物は方形土坑2から甕の口縁部99が出土している。これは天神川II期のものである。

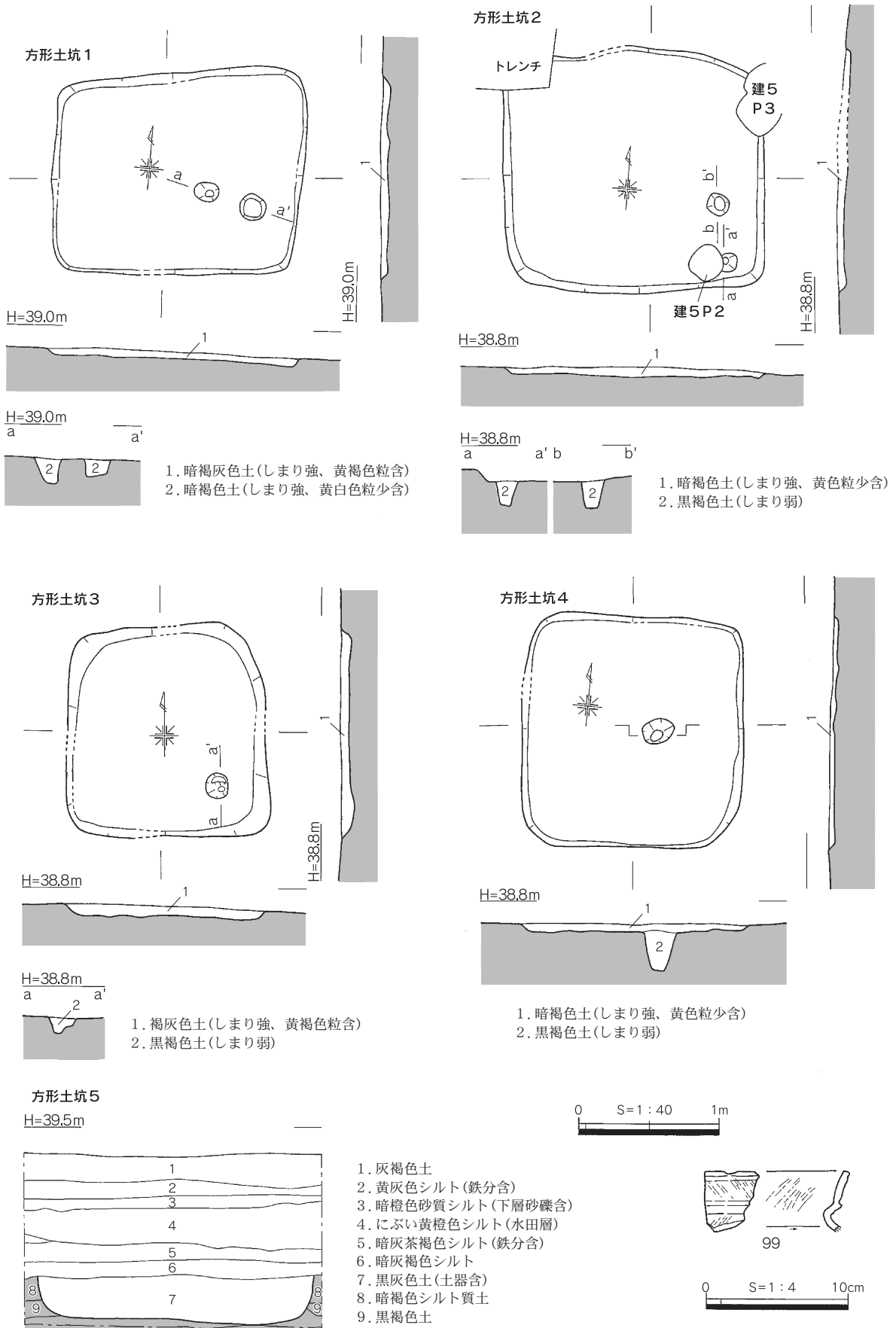
これらの時期は、出土遺物から古墳時代前期のもと考えられる。性格については不明である。(浅田)

### 6. 硬化面 (第38図)

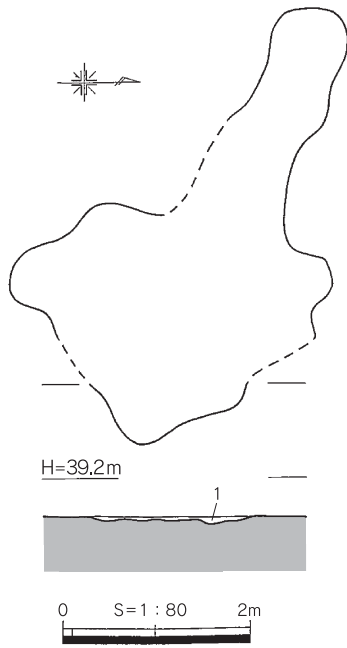
調査区南側のG3グリッド中にあり、溝11の上面に位置している。本遺構は、溝11の検出時に漸移層上面で確認したものである。ただし、検出面は直上まで重機によって掘削されているため、この遺構が硬化面のみの存在であったのか、上面に何らかの構造を有していたのかは不明である。

硬化面は、東西約4.9m、南北約3.4mの範囲で確認さ





第37図 方形土坑1～5・出土遺物



1. 暗褐色土(しまり強、黄褐色粒少含)

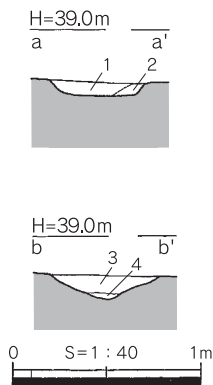
第38図 硬化面

## 8. 溝

### 溝1 (第20・40図)

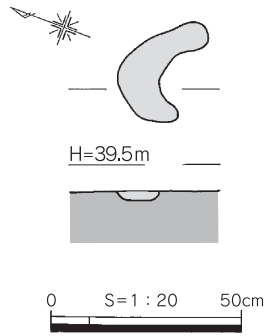
調査区北西側のE5～8グリッドに位置する。重機により、検出面である黒ボク上面まで掘り下げているので遺存状態は良くない。検出時において、後述する溝2・4・5・7に切られていることが確認されたことから、これらの溝に先行すると考えられる。また、この溝付近に溝3が存在するが、遺存状態が良くないことから両者の新旧関係は不明である。

東西方向へほぼ直線的にのびるもので、溝4・5・7と直交し、溝8・10と平行する。残りが悪い



1. 灰白色砂質土(しまり強)  
2. 黄白色砂質土(しまり強)  
3. 暗褐色砂質土(しまり強)  
4. 暗褐色砂質土(砂礫多含)

第40図 溝1



第39図 焼土面

れている。厚さは4cmほどであり、検出面の標高は38.8mである。遺物は出土しておらず時期は不明であるが、溝11の上面にあることから、古墳時代後期以降と考えられる。(玉木)

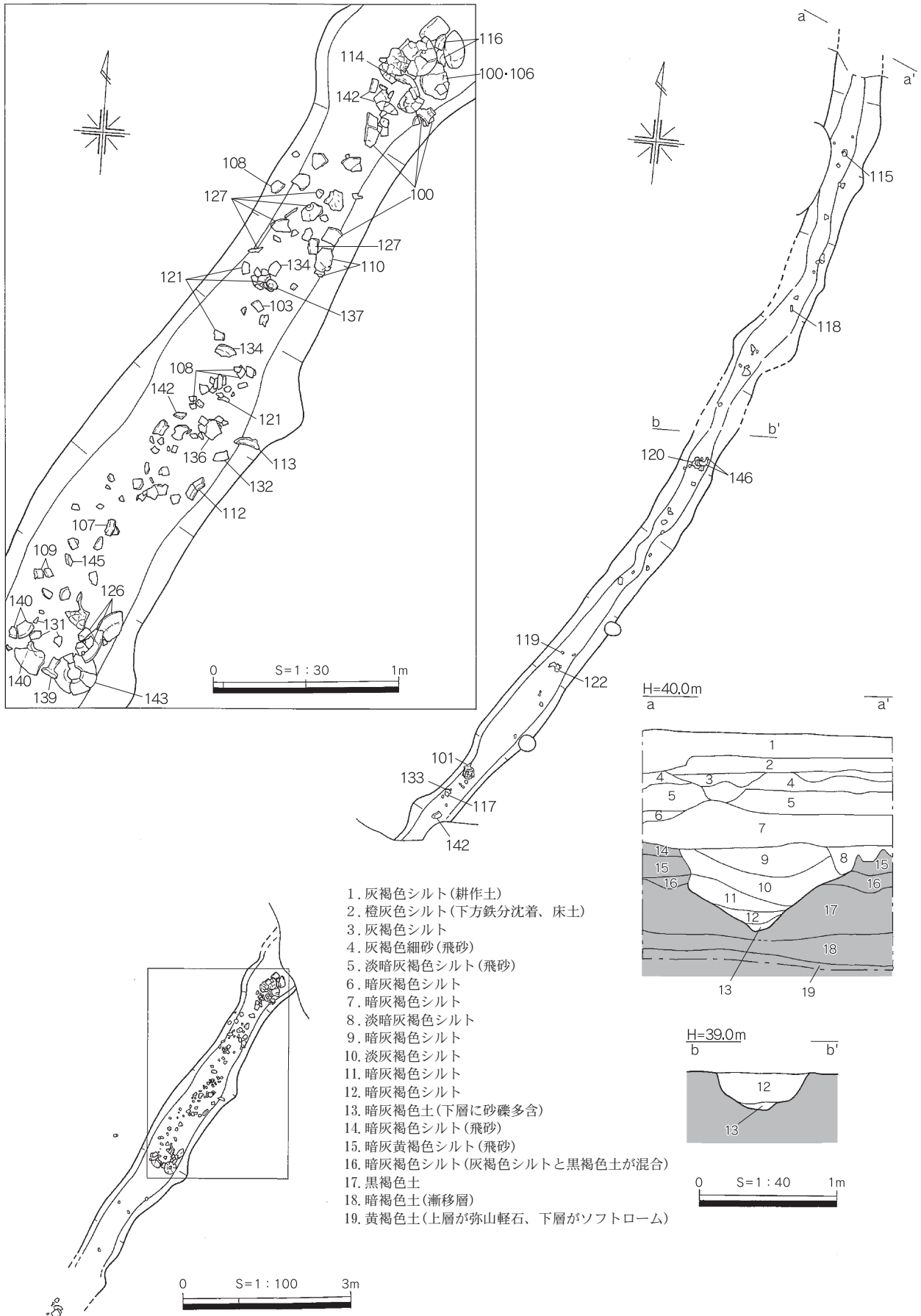
### 7. 焼土面 (第39図)

調査区南西側のI7グリッド中に位置しており、黒ボク上面で検出した。焼土面は長軸30cm、短軸10cmの小範囲において確認できた。遺構の周辺からは遺物が出土しておらず、時期を特定できないが、検出した層位から古墳時代のもと考えられる。(玉木)

### 溝2 (第41～44図、PL.7・19～25)

調査区北西側のD6・E7・F8グリッドに位置する。表土剥ぎ中に遺物が集中して出土したことで確認された溝である。重機によって遺構上面まで掘り下げているので残存状態は良くない。南西から北西方向に向かつてほぼ直線的にのび、後述する溝3と平行している。

北東側は調査区外にのびており、北西側は、後世の攪乱を受けているため、掘り方を確認することができなかった。規模は、幅86cm、検出面から

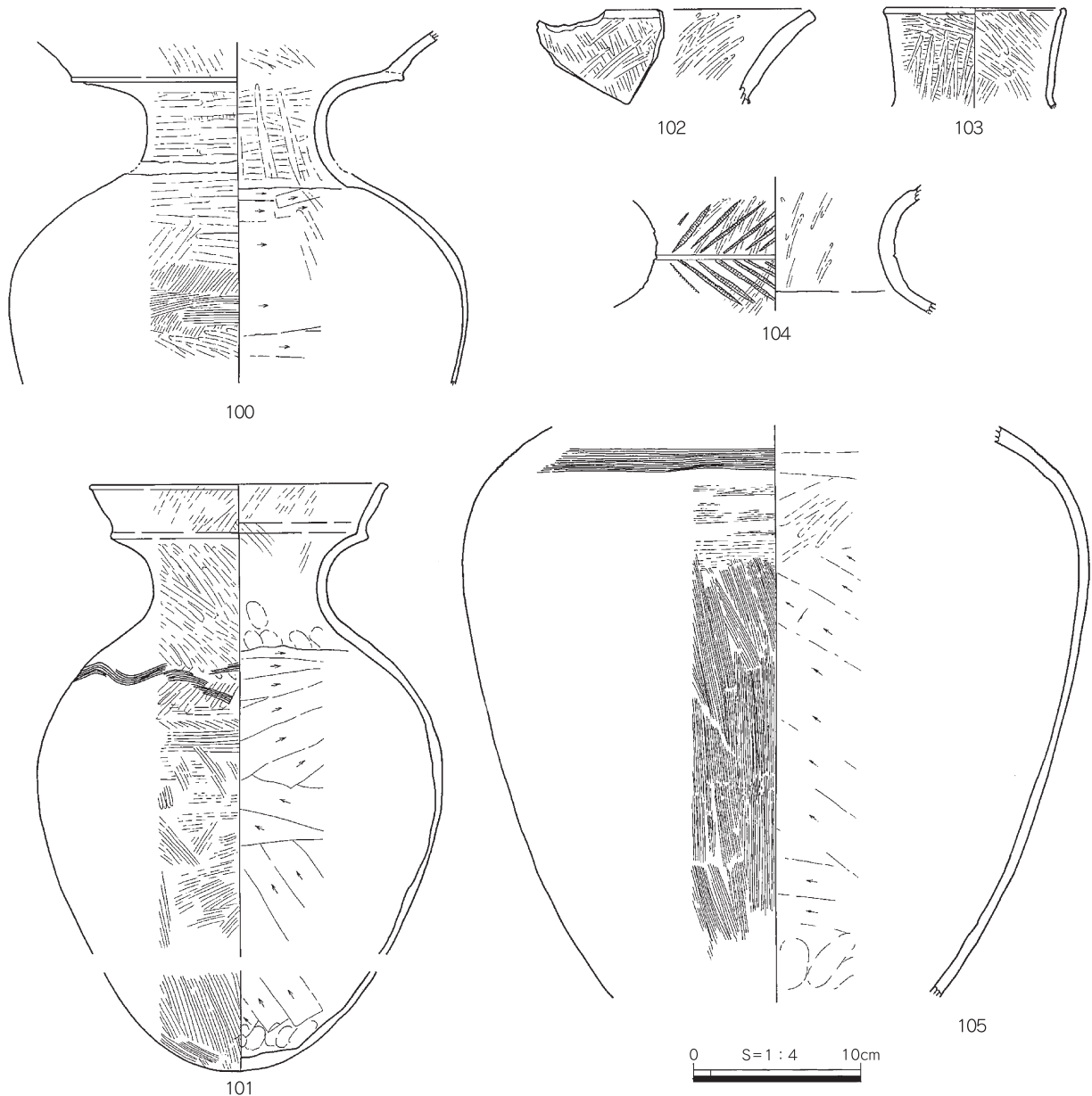


第41図 溝2

の深さ61cmを測り、掘り込み面は黒ボク～漸移層までであった。断面形は「U」字状を呈する。

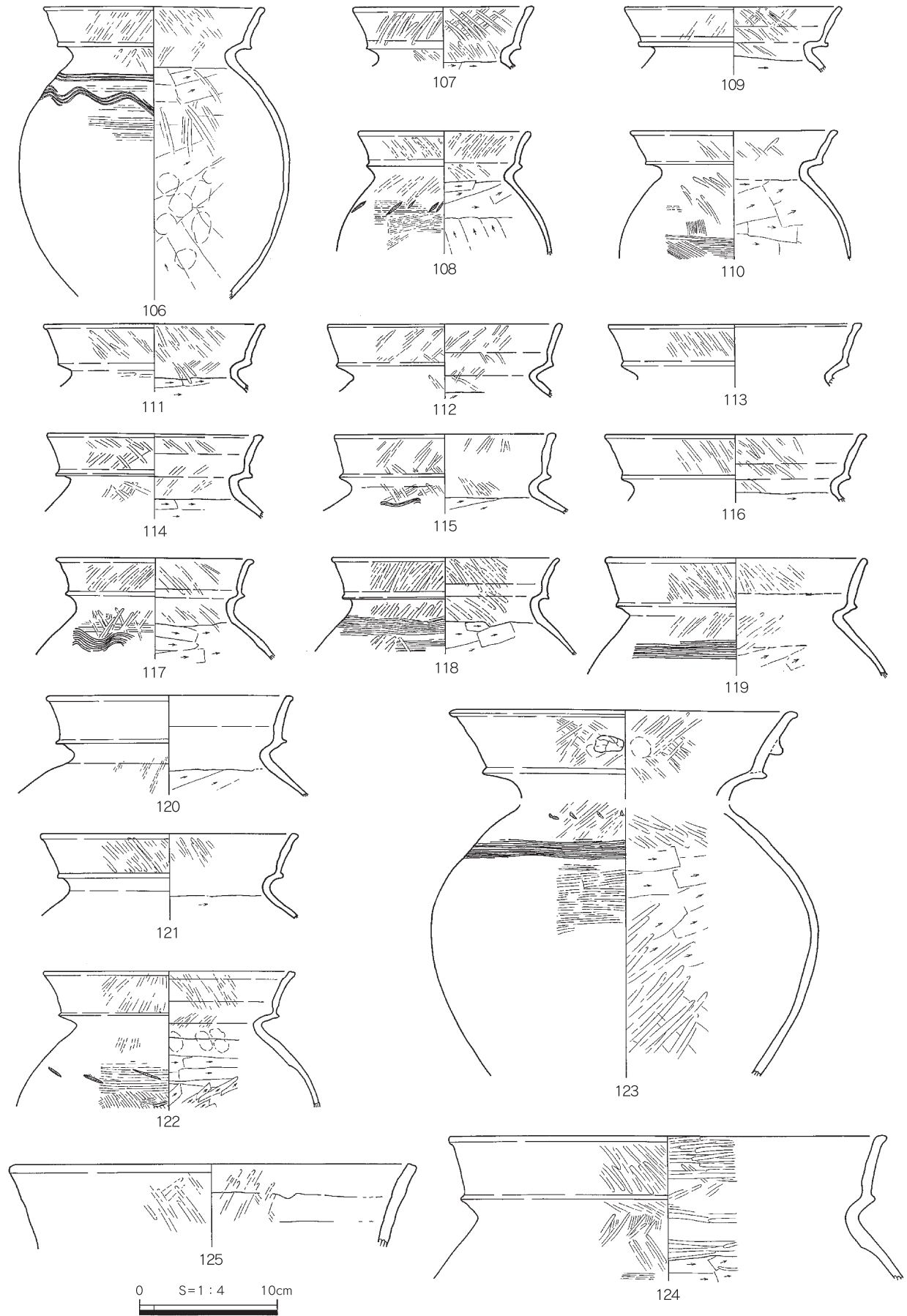
埋土は暗灰褐色シルトが主体となり、これらは5層に分層できた。これらの層のうち、最下層のものには砂礫が多く含まれることから、流水のあったことがうかがえる。しかし、第41図の遺物出土状況図で示したように、同一個体となる遺物が比較的近い位置から出土していることから、流水の影響はさほど受けなかったと思われる。

遺物はすべて底面から出土した。出土した遺物のうち100～146を図示した。100・101・104・105は壺、106～124は複合口縁の甕、125は鉢、126～134は高坏、135～137は低脚坏である。138は小型丸底壺、139は小型器台、140～147は鼓形器台である。遺物は第41図で示したように溝の全体から出土しており、とくに南西側では顕著に認められた。これらはまとめて出土していることから、一括性の高いものといえる。時期は天神川Ⅱ～Ⅲ期、古墳時代前期前葉と思われる。 (前島)

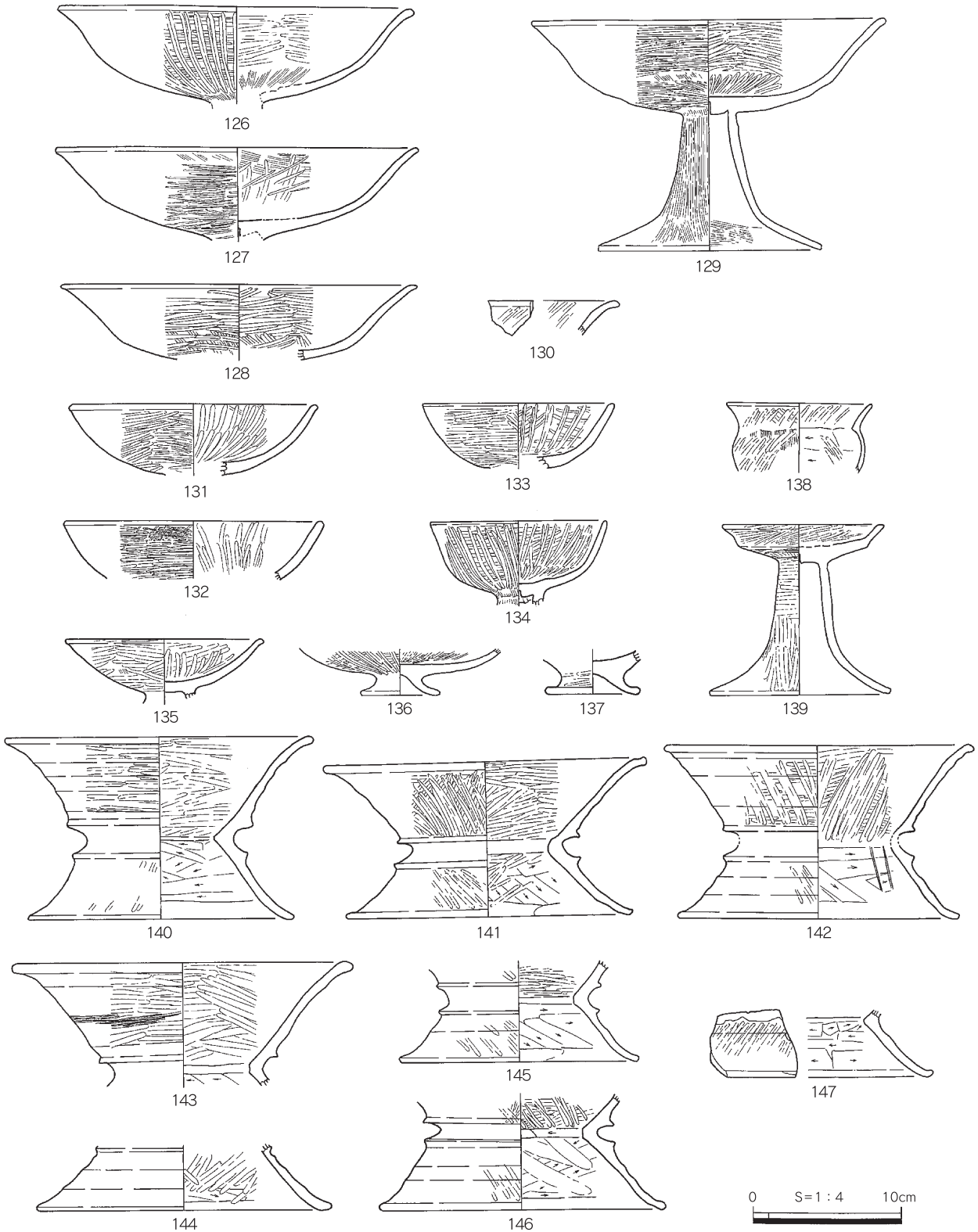


第42図 溝2出土遺物①





第43図 溝2出土遺物②



第44図 溝2出土遺物③

溝3～6 (第20・45・46図、PL. 8・24)

溝3～6は調査区中央に位置し、黒ボク上面で検出した。このうち溝3～5は互いに重複し、また、溝1を切っている。切り合い関係から、溝3が最も古く、溝4・5の順に新しくなる。

溝3は南東から北東へ直線的にのびる溝であり、溝2と平行する。規模は幅182cm、深さ28cmを測り、断面形は不整形ながらも逆台形を呈する。遺物は出土しておらず時期の特定はできない。

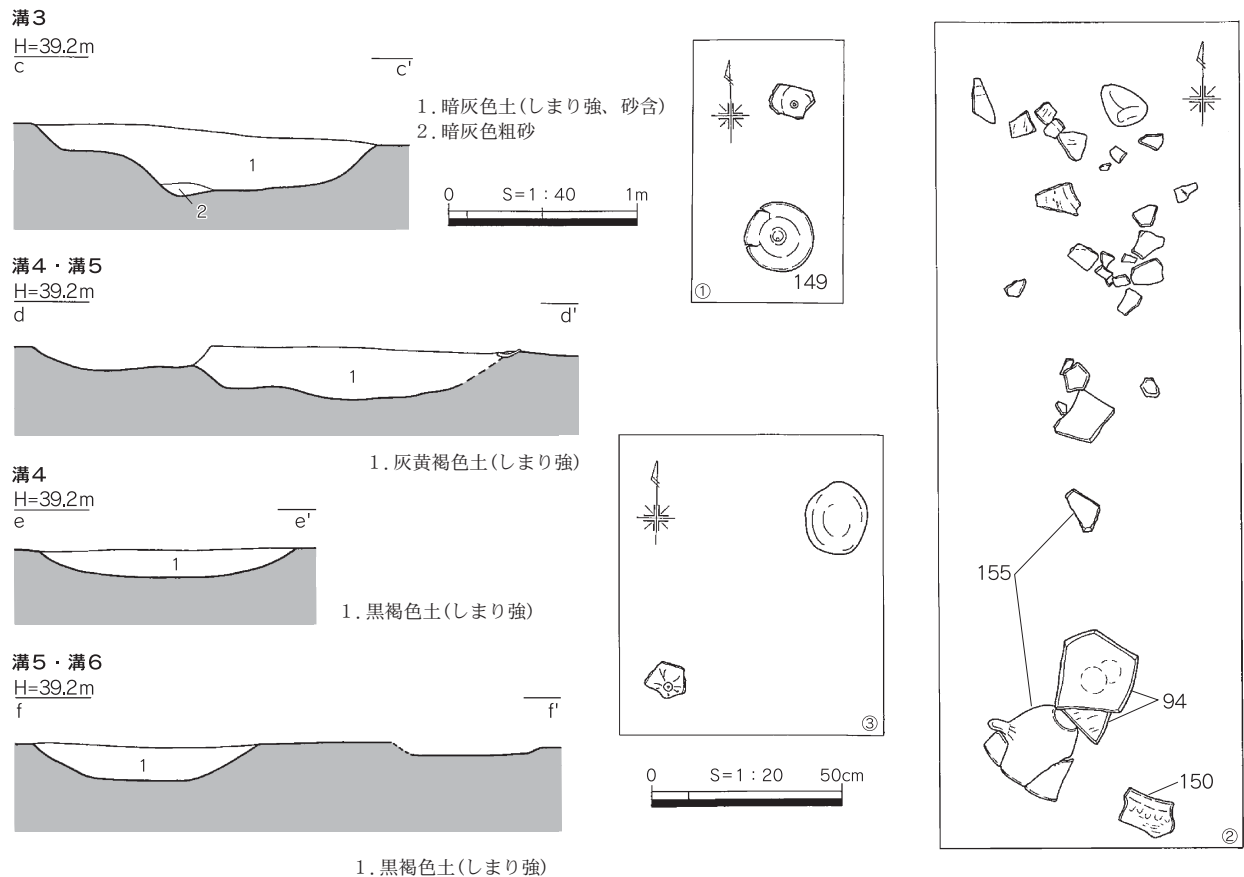
溝4は西から東にのびた後、ほぼ直角に折れ曲がり、北へと伸びる。規模は幅132cm、深さ12cmを測り、断面形は皿状を呈する。遺物は土師器や石器が出土している。149は底面から出土しており、S22は混入したものと見える。時期は古墳時代中期と考えられる。

溝5は南から北へやや蛇行しながらも直線的にのびる溝であり、溝4と重複しながらも並走する。規模は幅166cm、深さ27cm、断面形は皿状を呈する。出土遺物は土師器、須恵器である。出土した須恵器のうち甕の破片は竪穴住居7から出土した94と接合している。遺構の時期は、遺物が天神川X期、八橋IV期の特徴を示すことから、古墳時代後期前葉と考えられる。

溝6は溝4とほぼ平行に流れるたわみ状の溝である。規模は、幅76cm、深さ6cmを測り、断面形は皿状を呈する。遺物は149の破片が出土しており、時期は溝4とほぼ同じと考えられる。

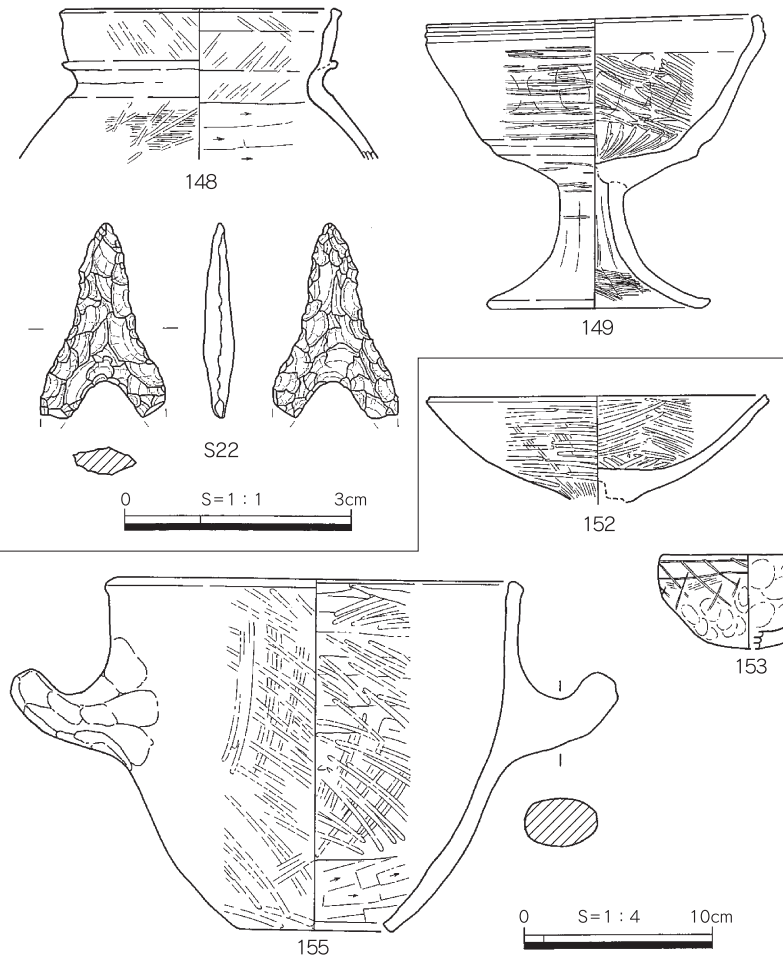
溝7（第47図、PL.8・24）

調査区中央に位置しており、検出面は黒ボク上面である。南北方向へほぼ直線的にのびており、古代の溝13と重複する。規模は幅約90cm、深さ約40cmを測り、断面形は逆台形ないしは皿状を呈する。遺物は土師器、須恵器、石器が出土している。時期は八橋V期、古墳時代後期前葉と考えられる。

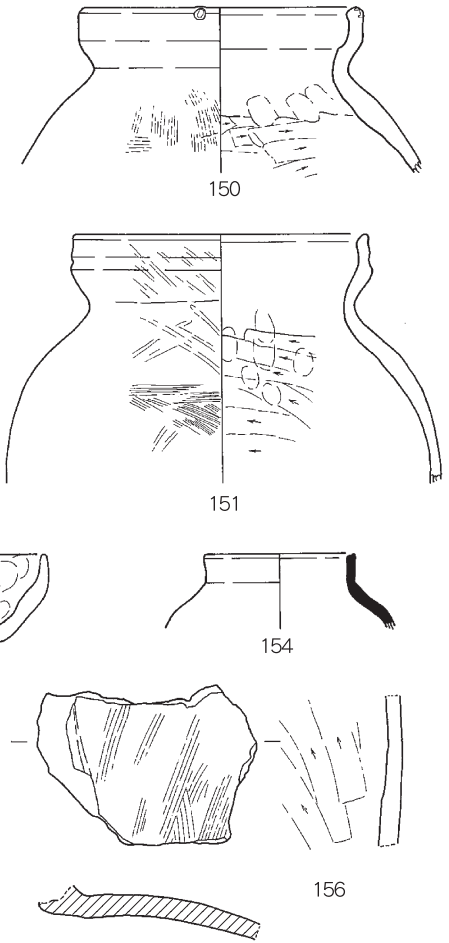


第45図 溝3～6

溝4



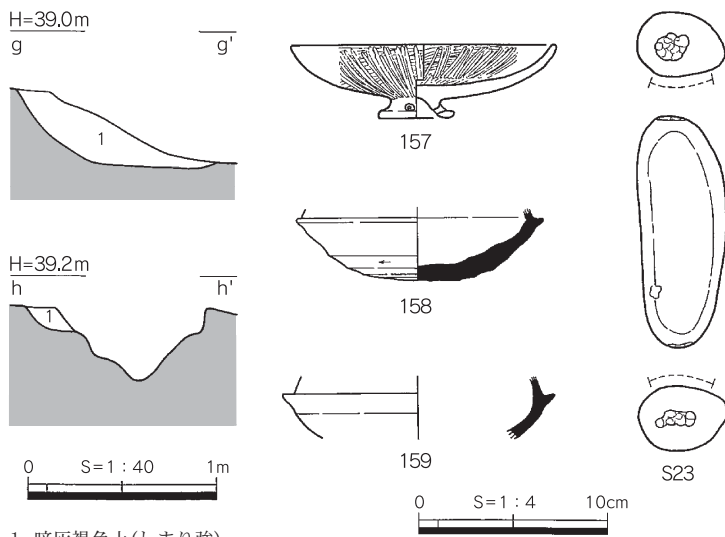
溝5



第46図 溝4・5出土遺物

溝8～10 (第48図、PL.24・25)

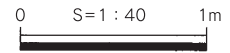
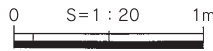
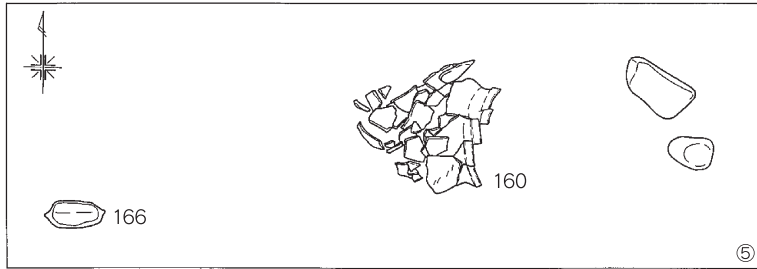
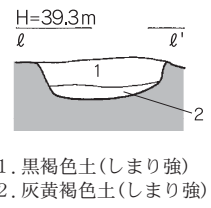
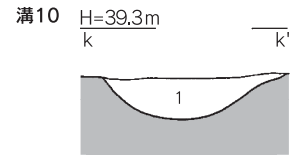
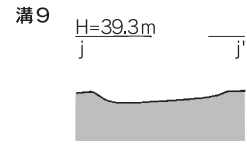
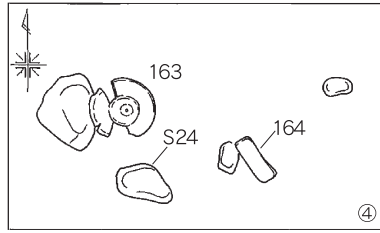
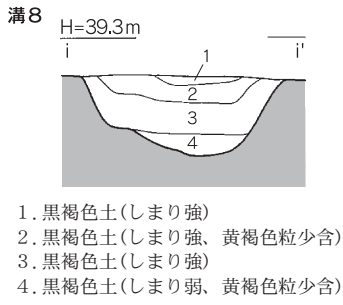
溝8～10は調査区南西側に位置し、黒ボク上面で検出した。溝8は西から東へ直線的にのびる溝である。規模は幅106cm、深さ45cmを測り、断面形は不整形な逆台形を呈する。出土遺物は、土師器、須恵器、石器が出土している。160・163・164・166・S24は底面から、他は埋土中からの出土である。また、167は埋土上層から出土しており、上層からの混入と考えられる。遺構の時期は、底面からの出土遺物が天神川X期、八橋IV・V期の特徴を示すことから、古墳時代後期前葉と考えられる。



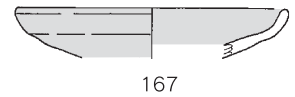
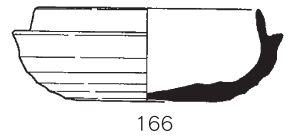
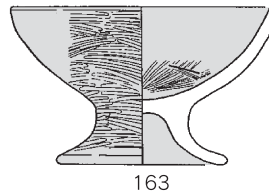
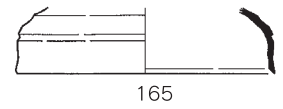
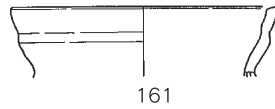
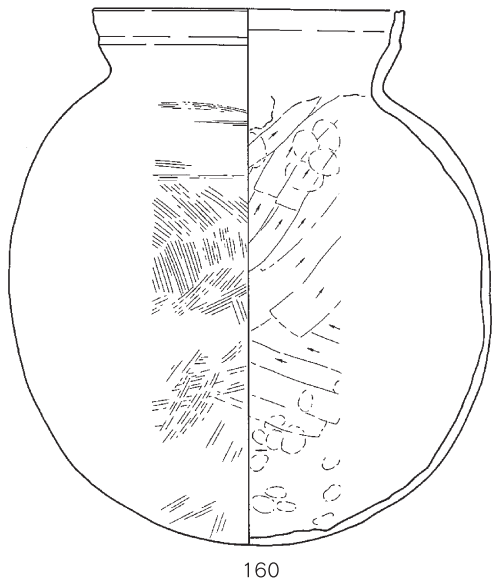
1. 暗灰褐色土(しまり強)

第47図 溝7・出土遺物

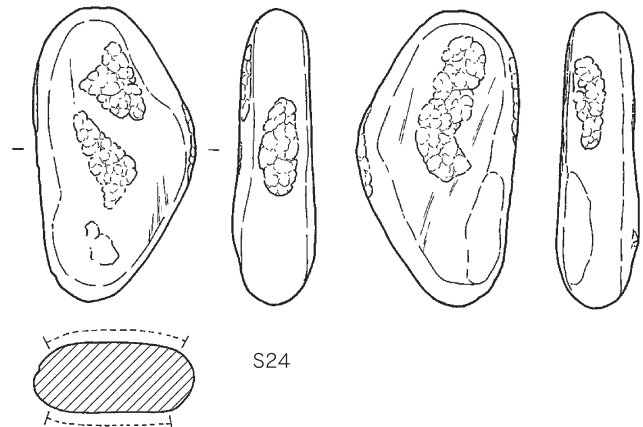
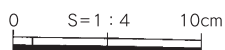
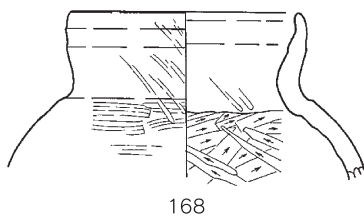
溝9は、蛇行しながらも溝8と平行して流れる溝である。規模は幅70



溝8

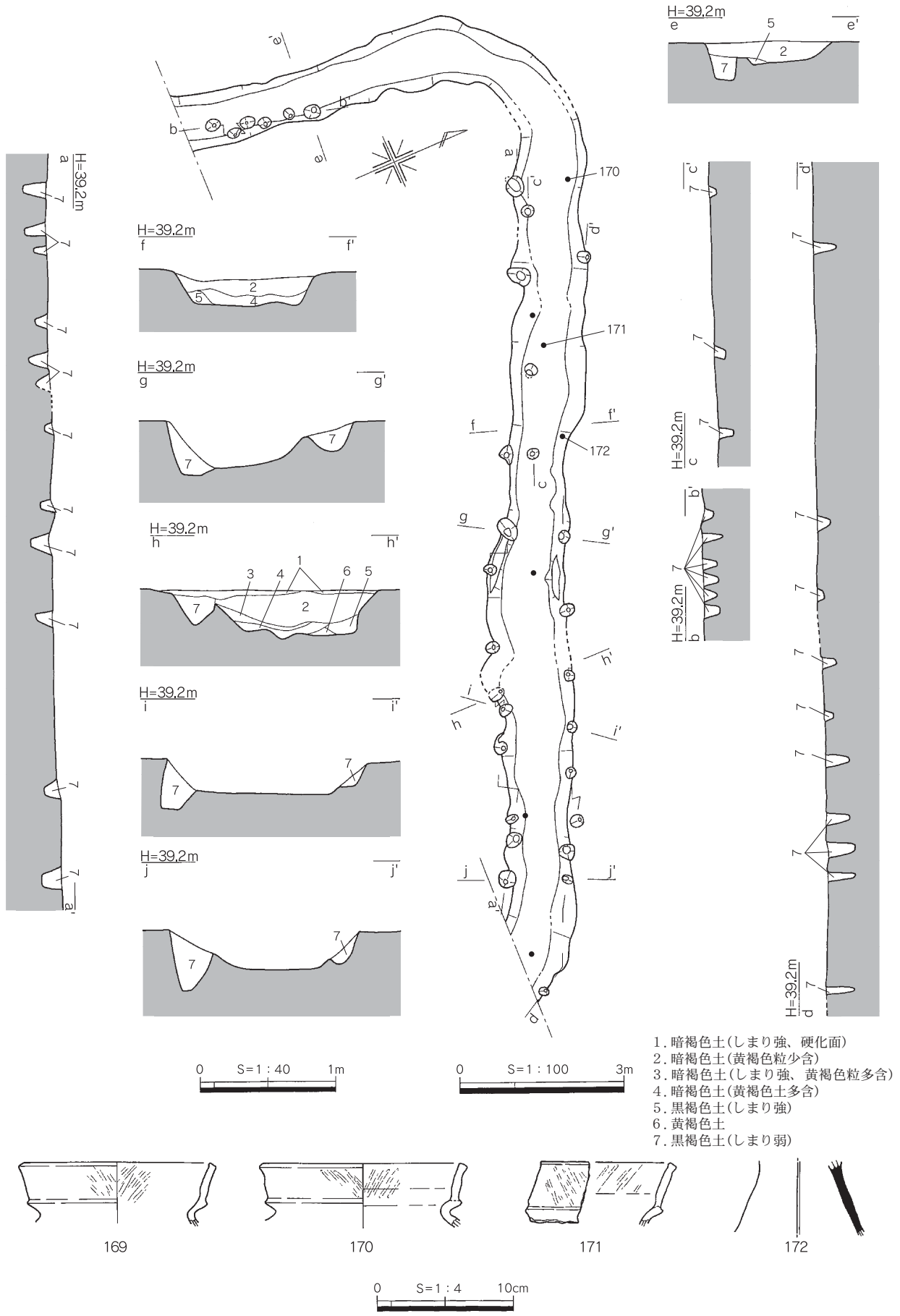


溝10



第48図 溝8~10・出土遺物





第49図 溝11・出土遺物

cm、深さ6cmを測り、断面形は皿状を呈する。遺物は出土しておらず、時期の特定はできない。

溝10は西から東側へ直線的に流れる溝であり、溝8・9と平行する。規模は幅96cm、深さ20cmを測り、断面形は逆台形ないしは皿状を呈する。遺物は168が出土している。時期は、168から天神川X期、古墳時代後期前葉と考えられる。(玉木)

**溝11 (第49図、PL.9・25)**

G2～4グリッドに位置しており、わずかに北東側に傾斜する緩斜面上に立地する。黒ボク下面から漸移層上面で検出した。南東から北西に向かって直線的にのびており、G4グリッド杭

の付近で南側へ「L」字状に屈曲する。グリッド杭までは、等高線に対してほぼ平行になっているが、屈曲部分からは等高線に対して垂直になる。検出した規模は全長22.5m、最大幅1.4m、深さ20～34cmを測る。断面は「U」字状ないし皿状を呈する。底面には硬化面およびピットは認められなかった。

掘り込み面の肩部および溝壁面と底面の接する部分において、ピットが検出された。ピットの平面形は円形を呈し、断面は「V」ないし「U」字状である。規模は直径15～30cm、深さ10～15cmである。これらのピットは、溝の走行に合わせて列状に並んでおり、また断面の形状が「V」字状になるものもあることから杭痕と思われる。

溝の断面の観察や埋土の堆積の様子から、水流があった痕跡は認められなかった。本遺構の性格としては、土地を区切る区画溝としての可能性が考えられるが、詳細は不明である。

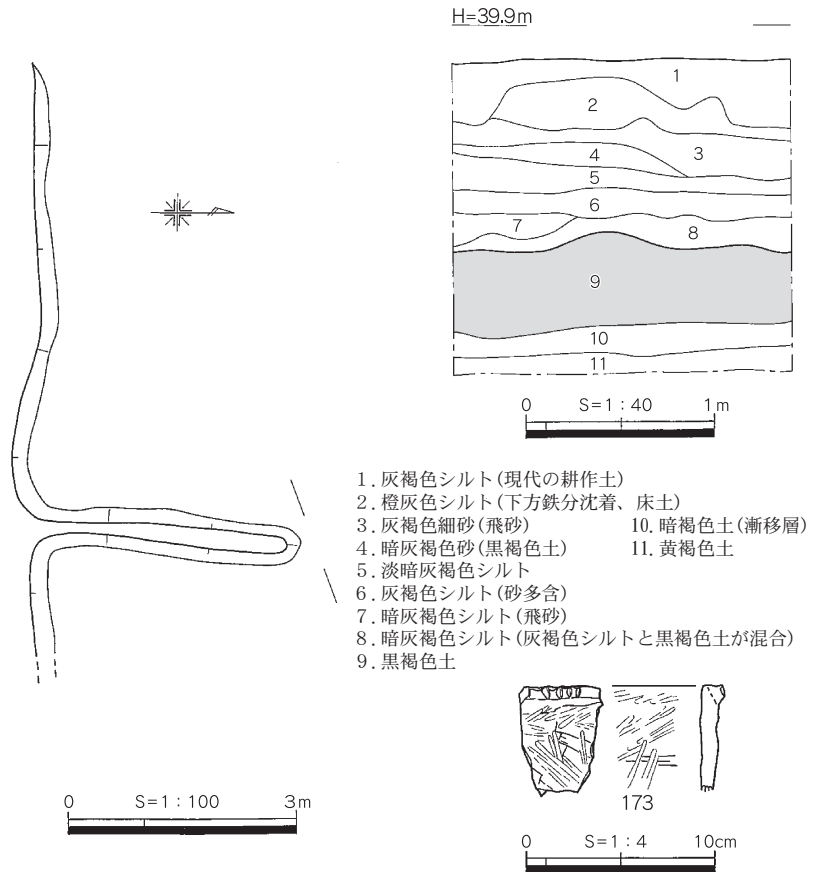
遺物は土師器や須恵器が出土している。169～171は土師器甕の口縁部である。172は須恵器高坏の脚部である。2方向以上の透かし穴をもつ。

本遺構の時期は出土遺物から、古墳時代後期のものである。(浅田)

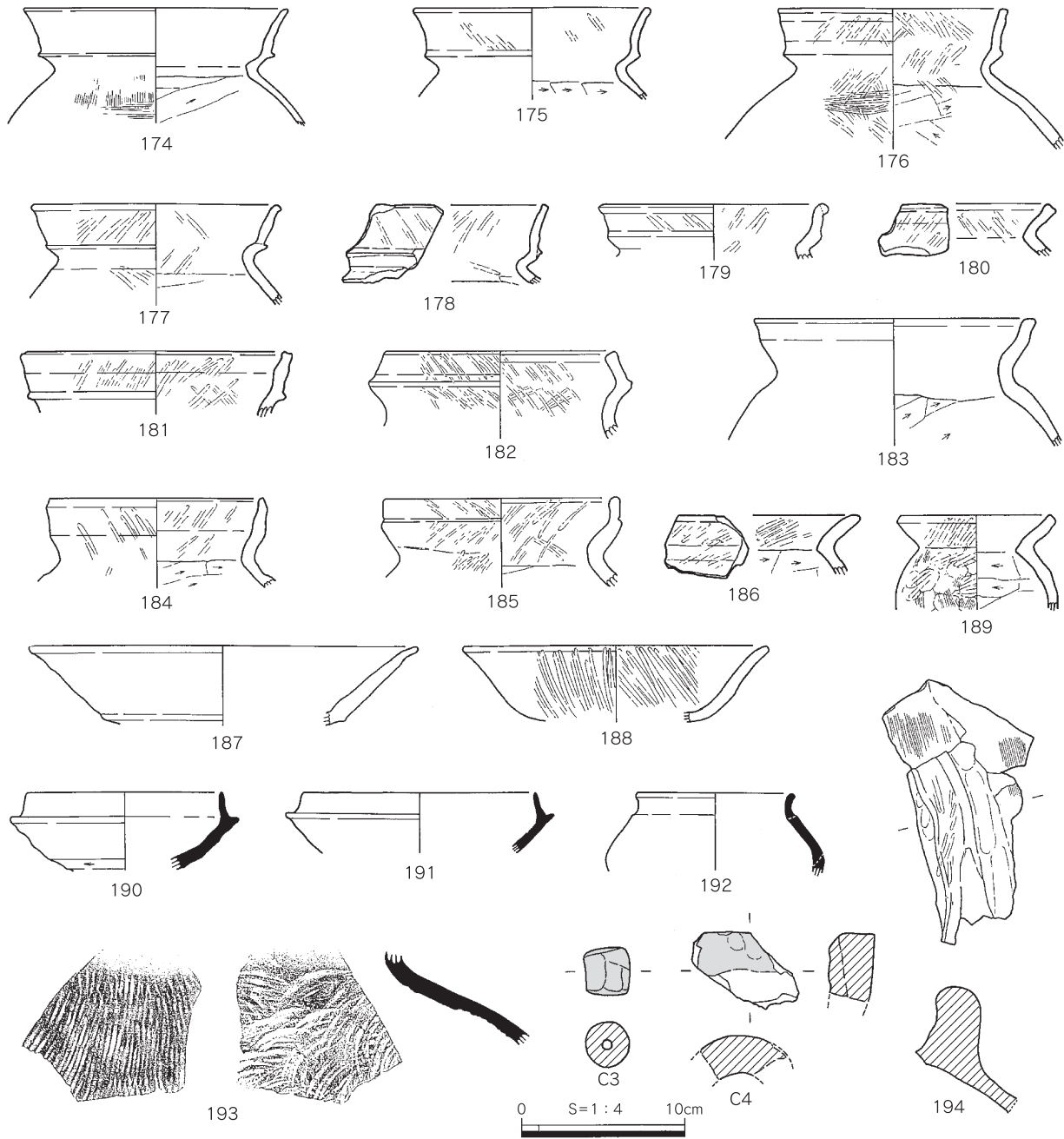
**9. 畦畔状遺構 (第50図)**

調査区北側、D6グリッド中に位置している。黒ボク上層にあたる暗灰褐色シルトを徐々に掘り下げたところ、畦畔状の高まりを確認した。しかし、遺構の周辺は、黒ボク上面まで重機によって掘り下げられており、残りが悪く、全体の状況・性格は不明である。

東西6m、南北3mほどを検出した。畦畔状の高まりは、幅50cm、高さ20cmを測り、底面の標高は38.7mとなっている。ところで、遺構の地山は黒褐色土となっているが、その上層部において、土が



第50図 畦畔状遺構・出土遺物



第51図 古墳時代遺構外出土遺物

ブロック状に堆積している状況を看取できた。このため、ここで耕作などの土を掘り返す行為が行われていたものと考えられることができる。

遺物は、暗灰褐色シルト中から、173が出土している。これは、検出状況から混入したものと考えられる。時期は、ここが溝2の下層にあたることから、古墳時代前期以前と考えられる。(玉木)

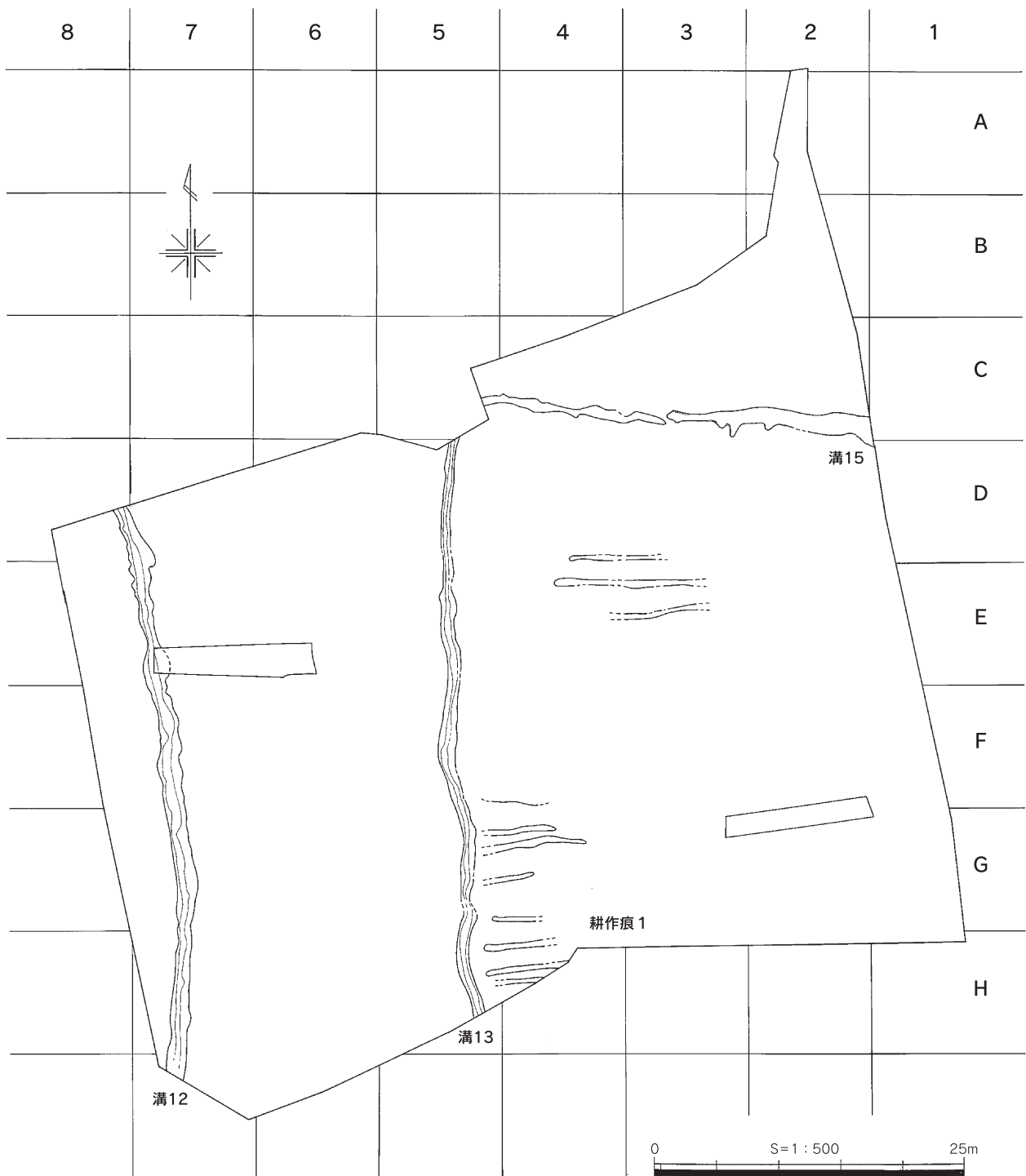
10. 遺構に伴わない遺物 (第51図、PL.25)

古墳時代前期～後期までの土師器、須恵器、土製品を確認した。これらの大部分は確認した遺構に伴う時期のものである。174～186は甕、187・188は高坏、189は小型丸底壺、190・191は坏身、192は短頸壺、193は甕、194は移動式竈、C3は土玉、C4は轡の羽口である。(玉木)

第5節 古代以降の遺構・遺物

1. 概要

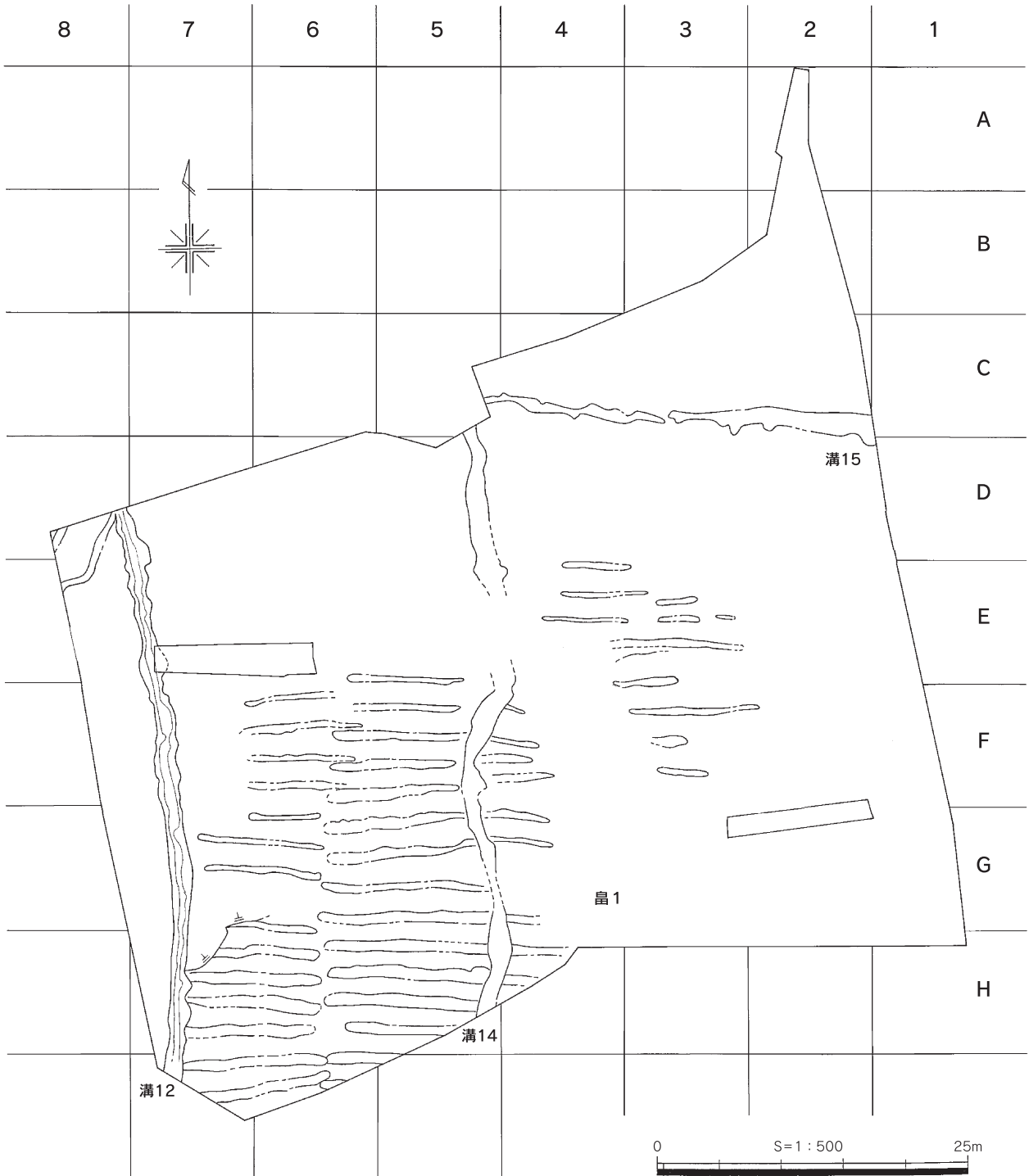
当該期の遺構・遺物は、古墳時代前期の溝2の確認により、当初の調査計画を変更し、黒ボク上面



第52図 古代以降遺構配置図①

までを残したことによって初めて検出されるに至った。つまり、古代以降の遺構は、その掘り込みの大半が黒ボクまでのものであり、当初の調査計画どおり漸移層上面を遺構検出面とした場合、存在していた遺構の大半が消失してしまい、また、運良く遺構が残ったとしても残存状況が非常に悪く、遺構の検出が非常に困難なため、最低でも黒ボク上面で遺構の検出しない限りは大部分の遺構を確認できなかったのである。

遺構の検出は、基本的に黒ボク上面から漸移層上面にかけて行った。ただし、第1節でも述べたが、

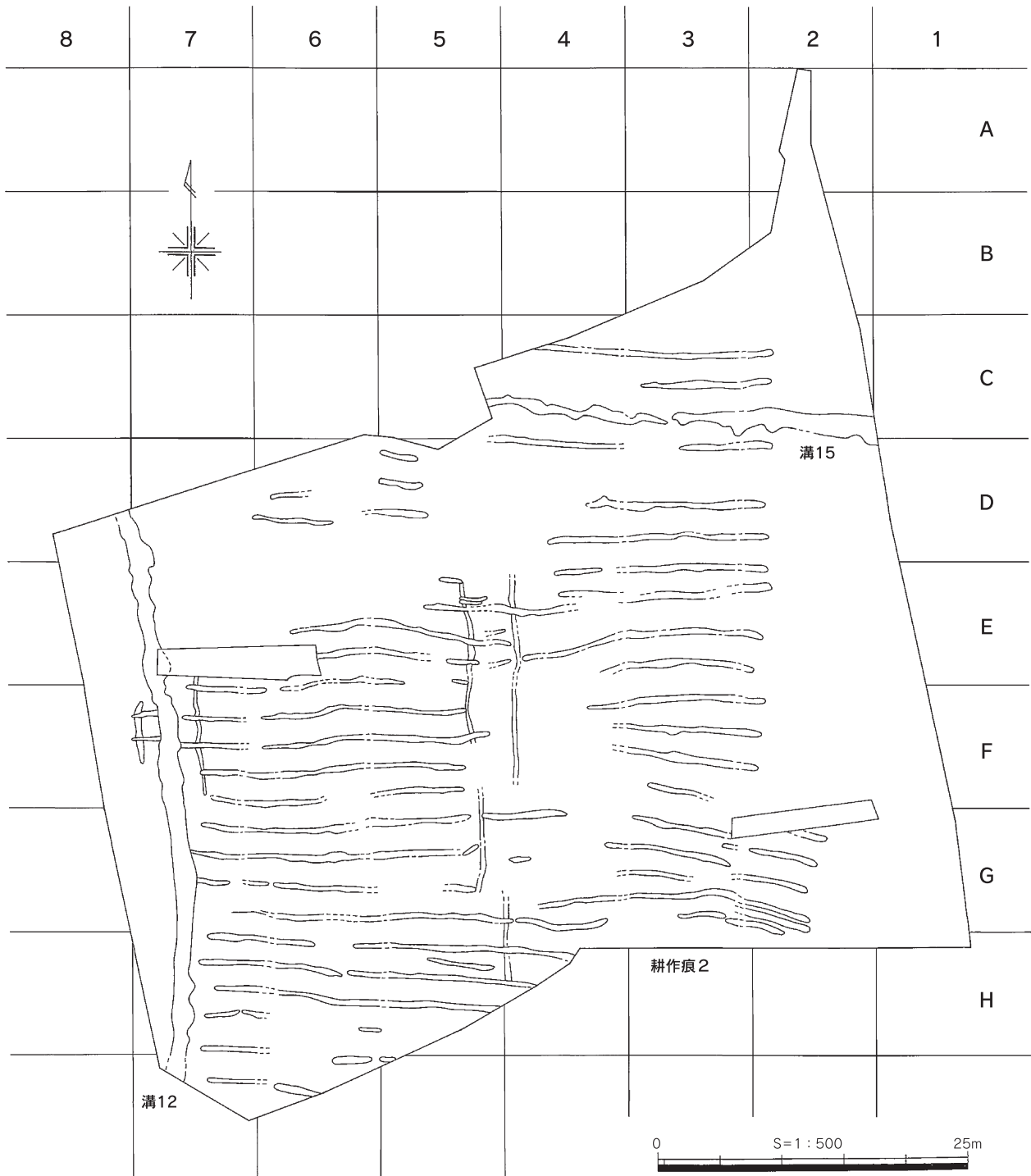


第53図 古代以降遺構配置図②



調査区南西側のH5～7、I6・7グリッドでは、調査も中盤の7月16日から新たに表土剥ぎを行うこととなったため、これまでの遺構の検出状況を踏まえて、重機による掘削を灰色系のシルト層までとし、そこから徐々に掘り下げを行い、調査を進めていくこととした。このため、それまで残りが悪く、判然としなかった遺構がかなり良好な状態で検出することができ、また、複数の時期の遺構が一面で検出されたために雑然としていた遺構の新旧関係のある程度整理することができたのである。

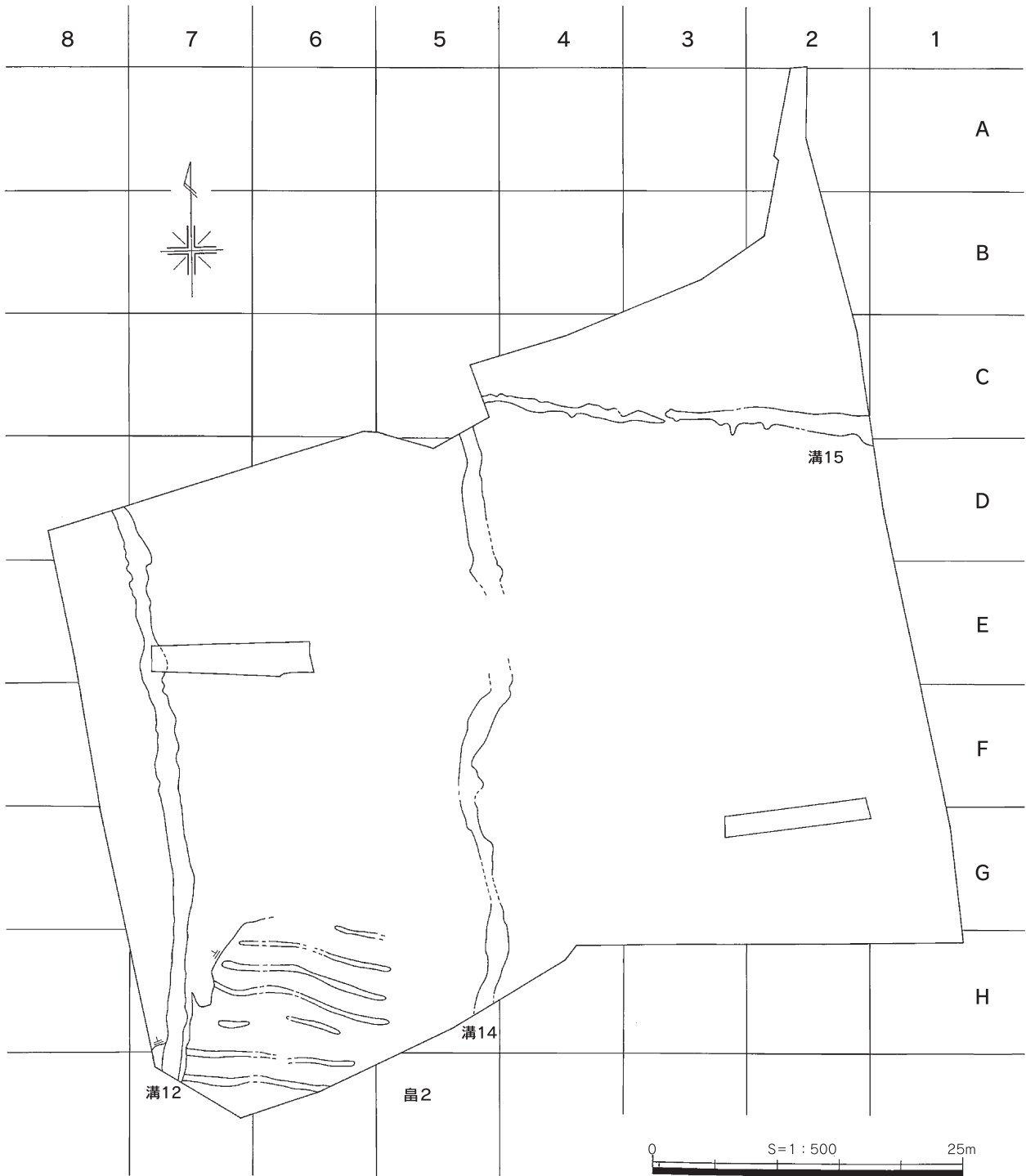
遺構は、掘立柱建物2棟、土坑3基、墓3基、溝4条、畝2面、畝に伴う耕作痕3面などを確認し



第54図 古代以降遺構配置図③

た。また、土層観察から水田に伴う畦畔状の高まりを調査区北東側で確認した。これらの遺構は古代～中世、一部は近世まで続くものであり、かなりの時期幅がある。このため、複数の段階を経てこれらの遺構が形成されたといえる。しかし、前述の通り、調査の中盤までは複数の時期の遺構を同一面で確認していたため、遺構の形成段階を明確に捉えることができず、H5～7、I6・7グリッドの調査によって、第52～57図のような遺構の変遷を復元することができたのである。

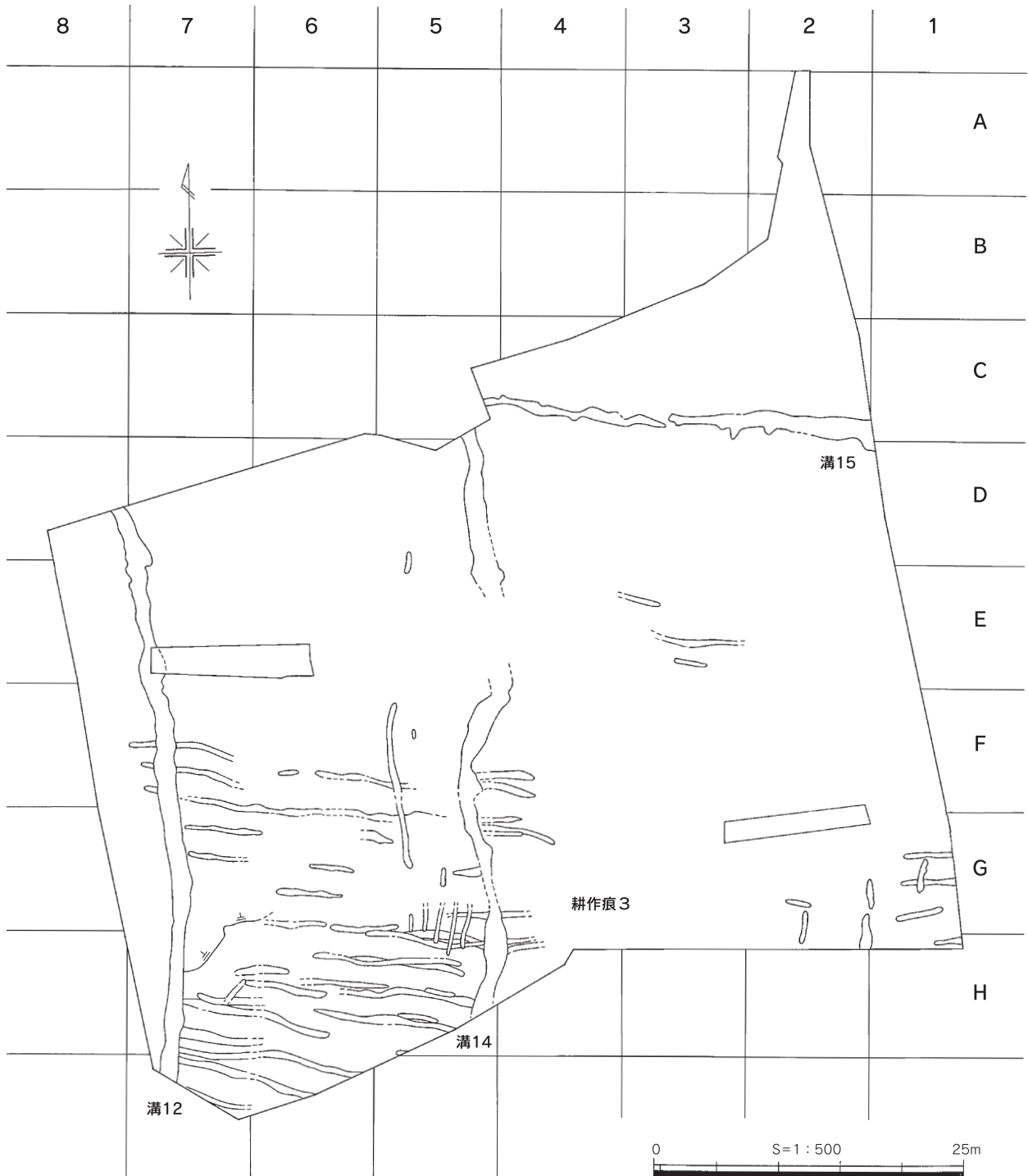
これらの図面のうち最も古いものは第52図であり、第54・53・56・55・57図の順に新しくなる。



第55図 古代以降遺構配置図④

変則的な順序となっているのは、第53・54図、第55・56図がそれぞれ畠とそれに伴う耕作痕といった関係にあり、畠→耕作痕の順に掲載したためである。

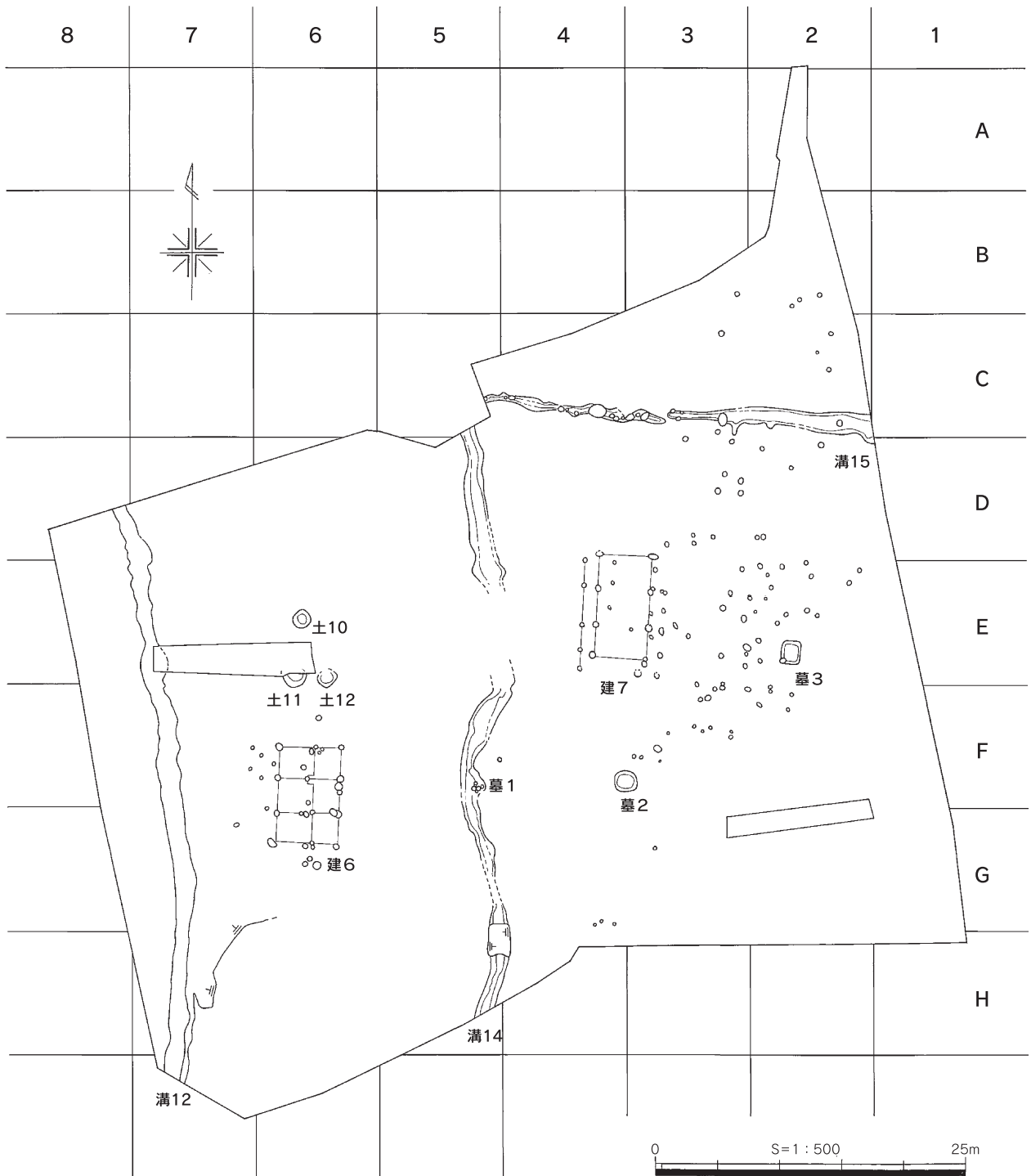
さて、遺構の状況であるが、古墳時代後期までは集落であったが、古代になると状況が一変し、耕地となるようである。ここでは畠1・2が確認されており、畠1の方が古く、畠2が新しい。これらの畠の下層からは、耕起の痕跡と考えられる耕作痕が調査地全面にわたり確認されている。また、この付近には、条里に関係すると考えられる溝12・13が確認されていることから、これらの畠が条里と



第56図 古代以降遺構配置図⑤

関連していた可能性が高いといえる。

中世になると、集落が営まれるようになり、掘立柱建物や土坑、墓、溝などを確認している。これらの遺構の配置は、ほぼ古代の地割に即したものと考えられ、古代の地割がこの時点でも踏襲されていたものと推察される。なお、この地域の圃場整備前の航空写真をみると、条里の地割が残っており、この地割が溝12、13・14とほぼ重なり合うことから、現代に至るまで古代の地割が踏襲されてきたと考えられる。この集落廃絶後は、造成が行われ水田となっていく。(玉木)



第57図 古代以降遺構配置図⑥

## 2. 掘立柱建物

### 掘立柱建物6（第58図、PL.9）

調査区西側のF6・G6グリッド中、土坑11・12の南側約5mに位置しており、畠1、耕作痕2・3を切っている。検出面は黒ボク上面であり、畠1、耕作痕2・3と同一面で確認した。

桁行3間、梁間2間の南北に長い総柱建物である。棟方向はほぼ南北を示すが、 $N-4^{\circ}-E$ と若干東に振れている。規模は桁行8m、梁間5.2m、床面積41.6㎡を測る。柱穴の平面形は円形を呈し、規模は径23～56cm、深さは42～90cmを測る。底面の深さはほぼ一定であり、ソフトロームまで掘り込まれている。これらの柱穴から柱痕跡は認められなかった。また、P4の埋砂中からは、一辺15cmほどの石が出土している。柱通りはほぼ揃っており、桁行、梁間ともに直線的であった。

埋砂中からは遺物が出土しておらず、時期の特定ができないが、周囲の遺構の状況から、中世のものと考えられる。なお、この周囲にはこの建物と同一の埋砂、平面形、規模の柱穴が散見されることから、この建物に伴う付属施設ないしは別の建物が存在していた可能性が考えられる。

### 掘立柱建物7（第59図、PL.9）

調査区中央のE4グリッド中、溝14の東側約8mに位置し、畠1、耕作痕1～3を切っている。埋砂は灰黄褐色細砂であり、掘立柱建物6と同質であることから、ほぼ同時期のものと考えられる。検出面は黒ボク上面であり、畠1や耕作痕1～3と同一面で確認し、かなり雑然としていた。

桁行3間、梁間1間の南北に長い側柱建物である。棟方向は $N-4^{\circ}-E$ とほぼ南北を示し、掘立柱建物6と平行する。規模は桁行8.4m、梁間4.3m、床面積36.1㎡を測る。柱穴の平面形は円形を呈し、規模は径32～56cm、検出面からの深さは21～28cmを測る。底面の深さはほぼ一定であり、漸移層～ソフトロームまで掘り込まれている。これらの柱穴のうちP1～6・8では、やや丸みをもった柱穴底面に灰黄褐色細砂を敷き、これをつき固めた後に、円形の扁平な石1～2個を水平になるようにして置き、その上に柱を据えた状況を観察することができた。

この西側には、建物に関連すると思われる柵列が確認されている。柱穴は5基確認しており、その平面形は円形を呈し、規模は径21～28cmを測る。検出面からの深さは21～52cmと一定ではない。また、柱間距離は1.6～3.1mとばらきがある。柱通りは揃っており、直線的である。

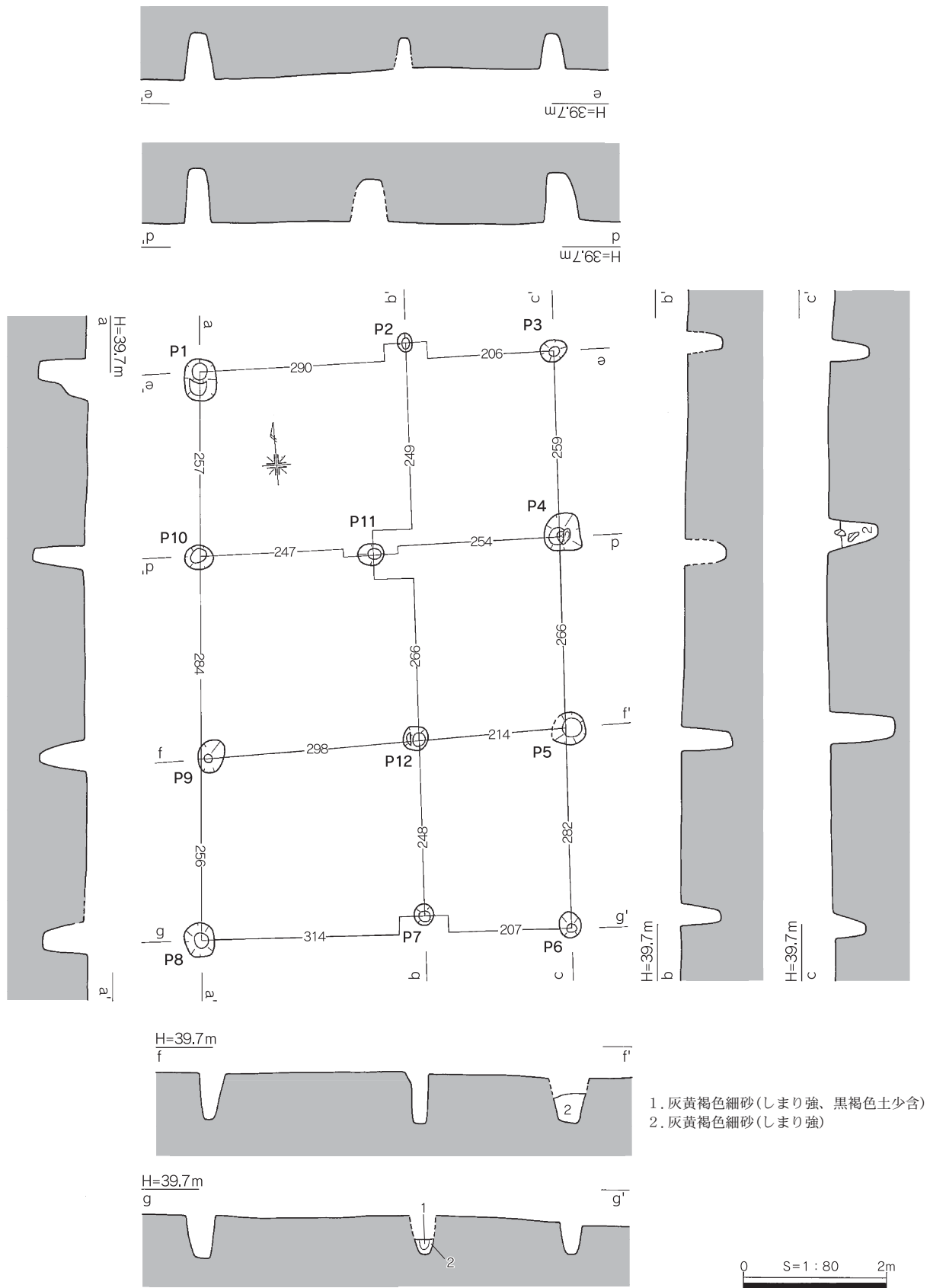
遺物は図示できなかったが、掘り方の埋砂から須恵器片1点が出土している。時期は出土遺物が小片で明確にすることができないが、周囲の状況から中世と考えられる。なお、この東側や北側にはこの建物と同一の埋砂をもったピットが散見されることから、この建物に伴う付属施設ないしは、別の建物が数棟存在していた可能性が考えられる。 (玉木)

## 3. 土坑

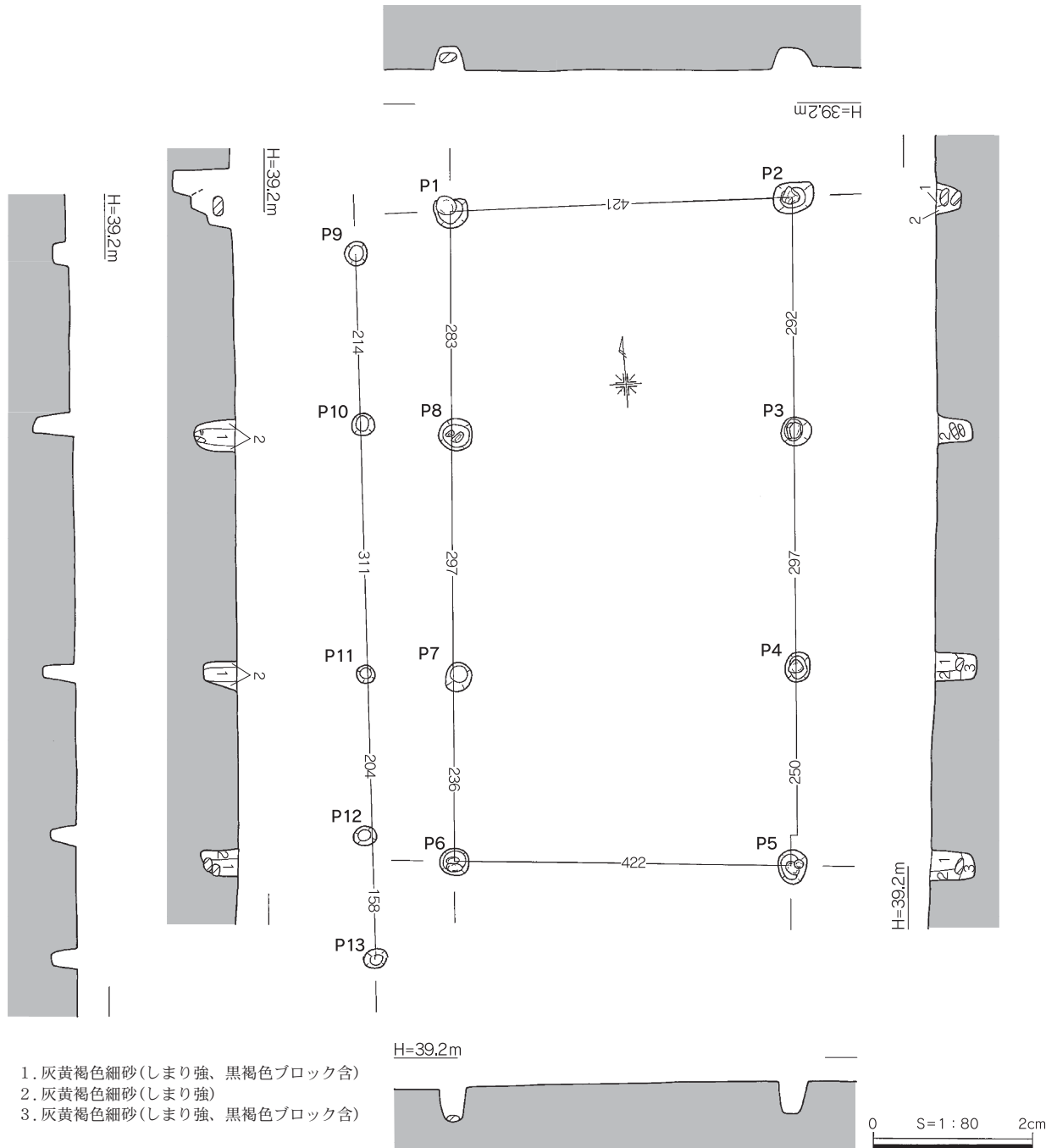
### 土坑10（第60図、PL.10）

調査区西側のE6グリッド中、土坑11・12の北側約5mに位置している。規模は径134cm、検出面からの深さ25cmを測り、平面形は円形、断面形は皿状を呈する。遺構の掘り込みは漸移層までである。





第58図 掘立柱建物6



第59図 掘立柱建物 7

遺物は出土しておらず時期の特定はできないが、遺構の埋砂や周囲の状況から掘立柱建物6・7、土坑11・12とほぼ同時期のものと考えられる。

土坑11 (第61図、PL.10)

調査区西側のF6グリッド中、土坑12の西側に近接している。本遺構は、試掘調査のトレンチによってその半分が消失しており、形状・規模ともに不明瞭である。確認できた範囲から判断すると、規模は径184cm、検出面からの深さ60cmを測り、平面形は円形を呈するものと考えられる。断面形は逆台形を呈し、底面は漸移層まで掘り込まれている。遺物は、底部糸切りの皿195、受け口状の口縁部を

もつ鍋196が出土している。時期はこれらの遺物から13世紀頃と考えられる。

### 土坑12 (第62図、PL.10)

調査区西側のF 6 グリッド中、土坑11の東側に近接している。遺構の一部はサブトレンチにより消失している。規模は径156 cm、検出面からの深さ40cmを測り、平面形は円形、断面形は逆台形を呈する。埋土中から土器の小片が数点出土したのみであり、時期を明確にすることができないが、埋土の状況や遺構の形状などから土坑11とほぼ同時期のものと考えられる。 (玉木)

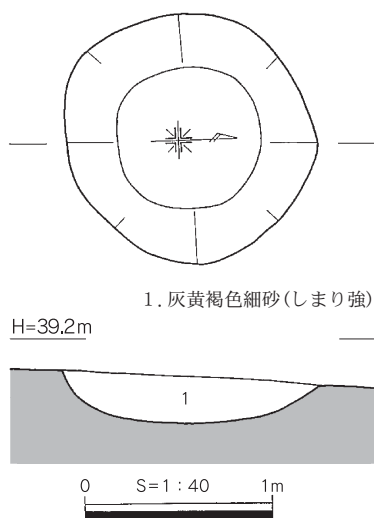
## 4. 墓

### 墓 1 (第63図、PL.10・27)

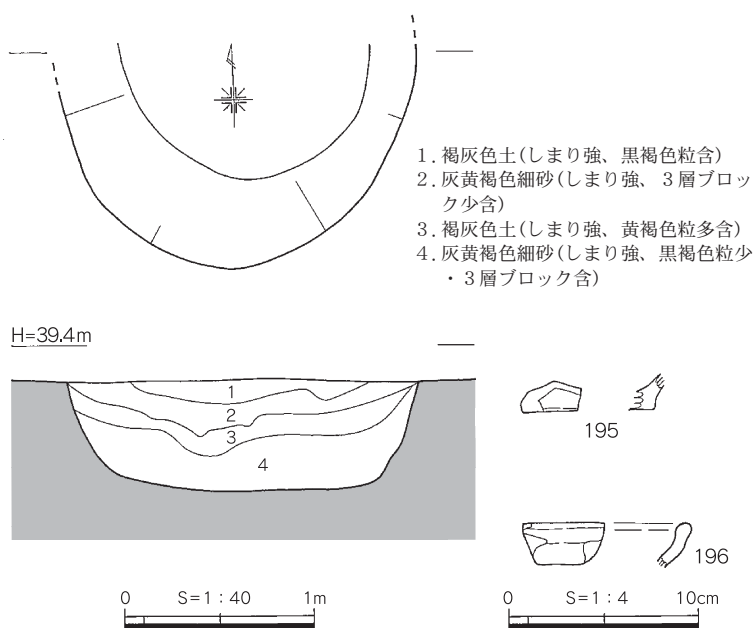
調査区中央、F 5 グリッド中に位置しており、溝14と重複する。明瞭な掘り方はなく、いびつな底面に10~40cmほどの礫が検出された。遺物は、碗197、釘M 1、永楽通寶 (初鑄1408年) M 2 が出土している。

### 墓 2 (第64図、PL.10・27)

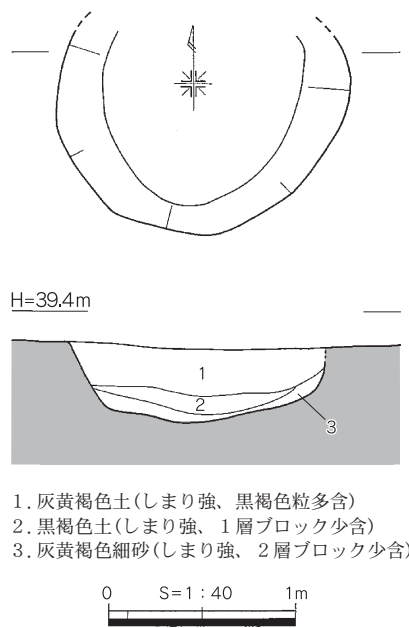
調査区南側、F 4 グリッド中、掘立柱建物7の南側約10mに位置している。重機で漸移層まで掘り下げたため残りが悪い。長軸172cm、短軸136cmの楕円形を呈した墓であり、深さ110cmを測る。底面にはやや凹凸が認められ、土坑内には8~50cmほどの礫が詰まっていた。遺物は底部糸切りの小皿198や椀199、敲石S25が出土した。時期は13世紀頃と考えられる。



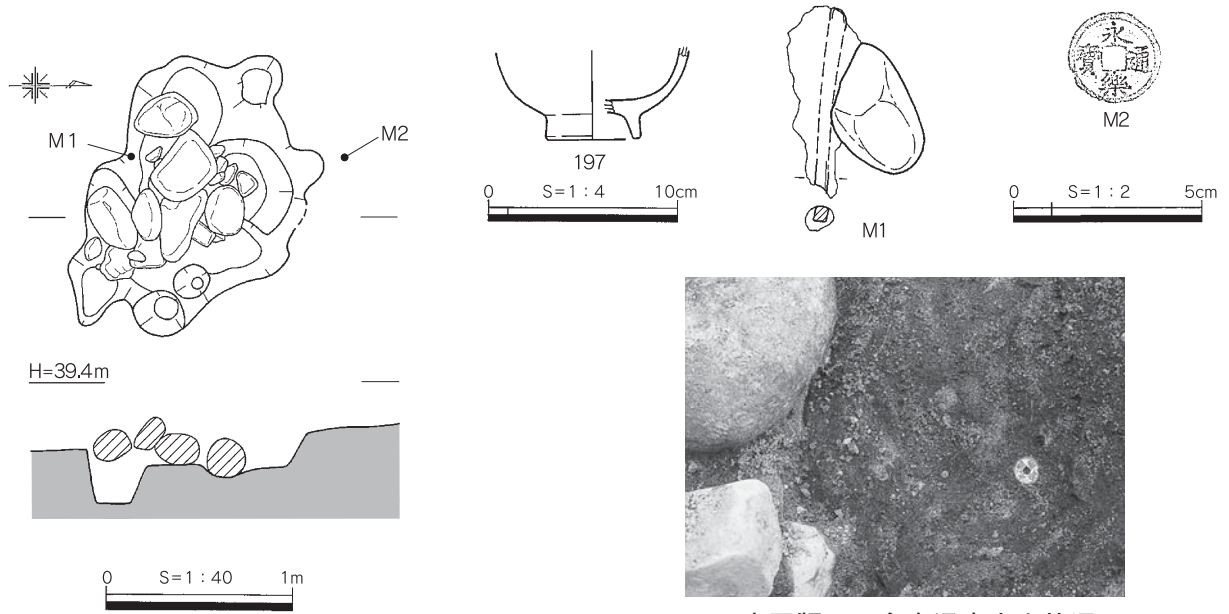
第60図 土坑10



第61図 土坑11・出土遺物

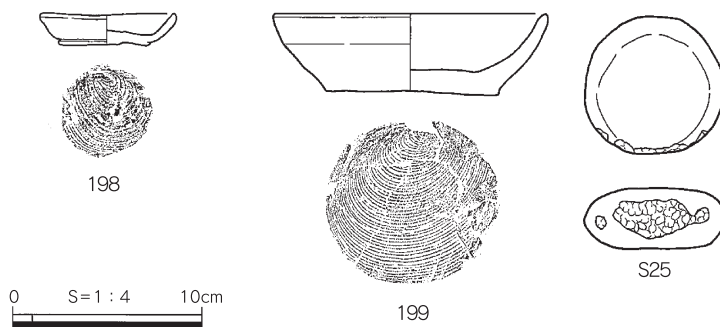
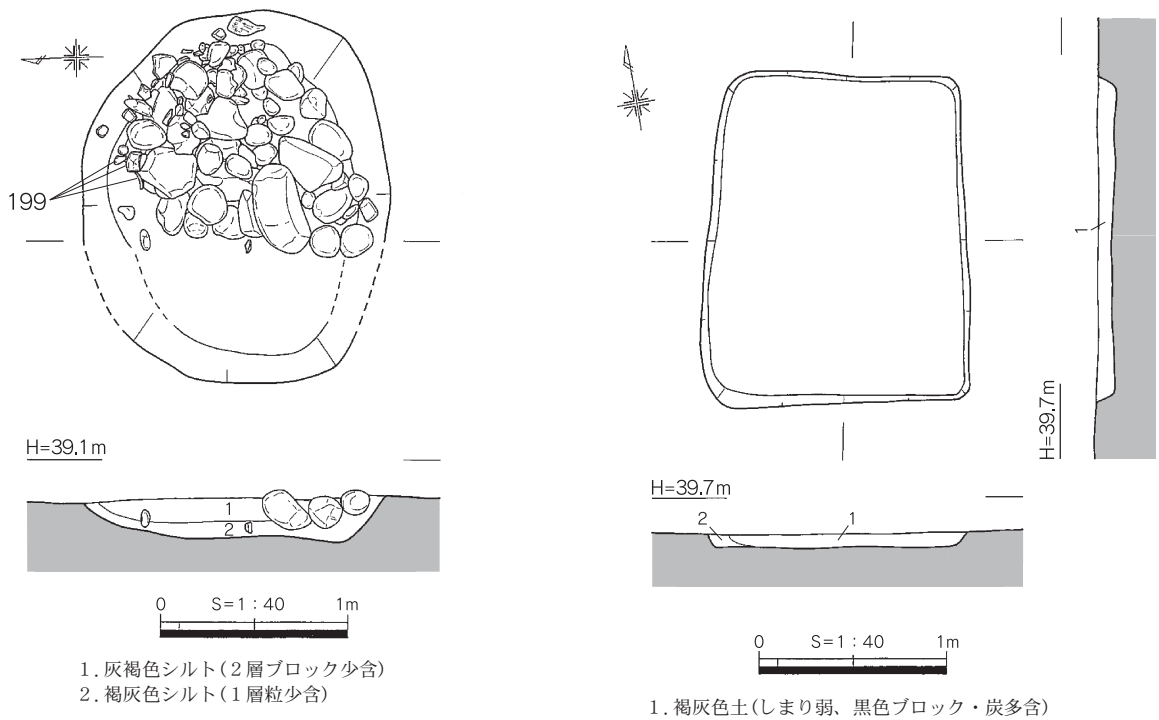


第62図 土坑12

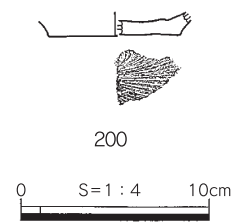


写真図版4 永楽通寶出土状況

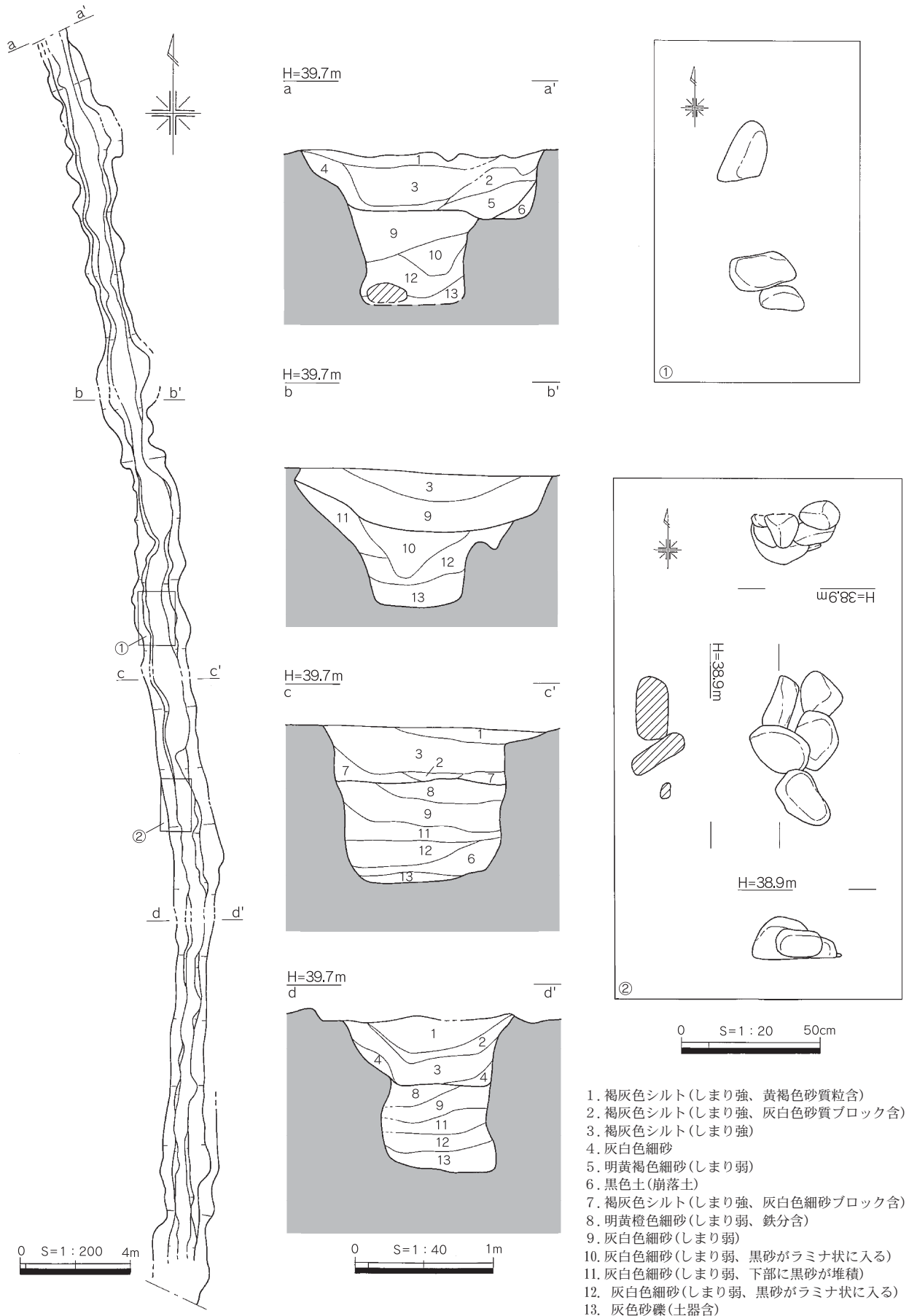
第63図 墓1・出土遺物



第64図 墓2・出土遺物

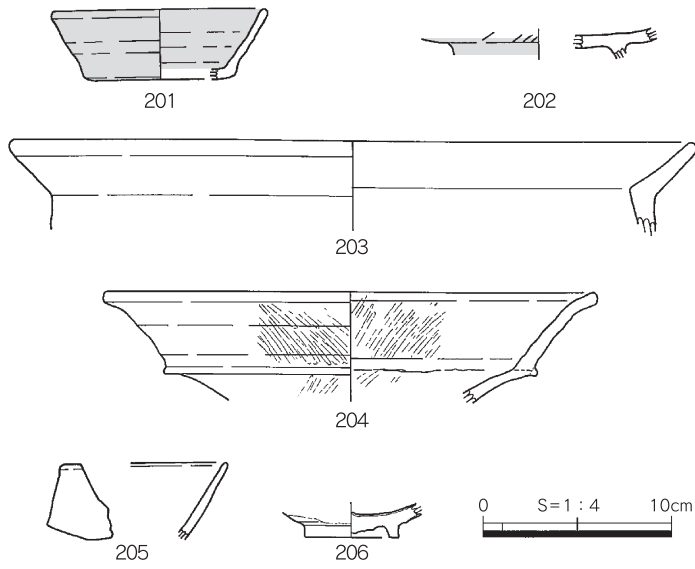


第65図 墓3・出土遺物



第66図 溝12





第67図 溝12出土遺物

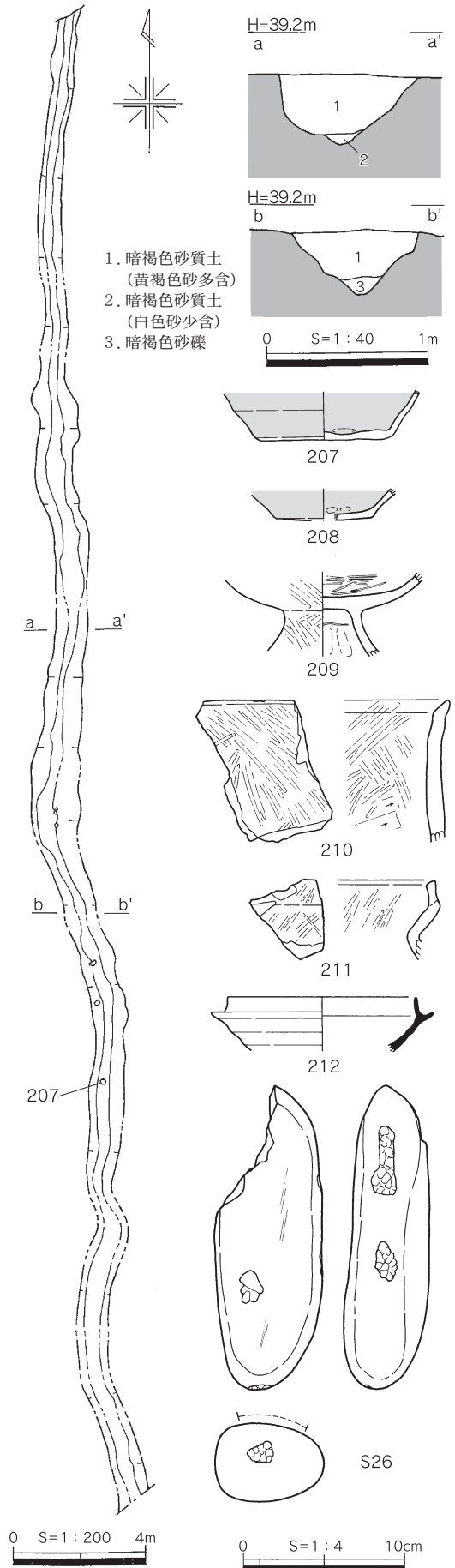
墓3 (第65図、PL.10)

調査区東側、F2グリッド中に位置しており、竪穴住居3を切っている。長軸172cm、短軸136cmの方形を呈した墓であり、深さ8cmを測る。遺物は底部糸切りの小皿200が出土している。墓2と同時期のものと考えられる。  
(玉木)

5. 溝

溝12 (第66・67図、PL.11・26)

調査区西端に位置する南から北へ流れており、条里に関連すると考えられる溝である。溝はほぼ直線的にのびているが、d-d'付近でやや西側に屈曲している。一度砂によって埋没した後、これと重複するように掘り直しが行われている。断面形は段状をなしているが、新旧の溝が重なり合った結果そうなったのであり、本来は、ともに箱型を呈するものである。規模は、下層の溝で幅80~120cm、検出面からの深さ110cm、上層の溝で幅108~183cm、検出面からの深さ36cmを測る。なお、下層の溝は、底面に砂礫層が堆積し、溝の側面も抉られているため、水の流れが比較的急であったものと考えられる。また、底面には礫がかためて置かれている場所があり、水の流れを塞ぎ止めるために使用したものと想定でき、こ



第68図 溝13・出土遺物

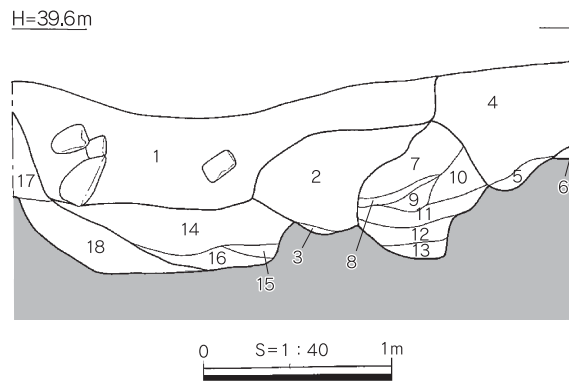
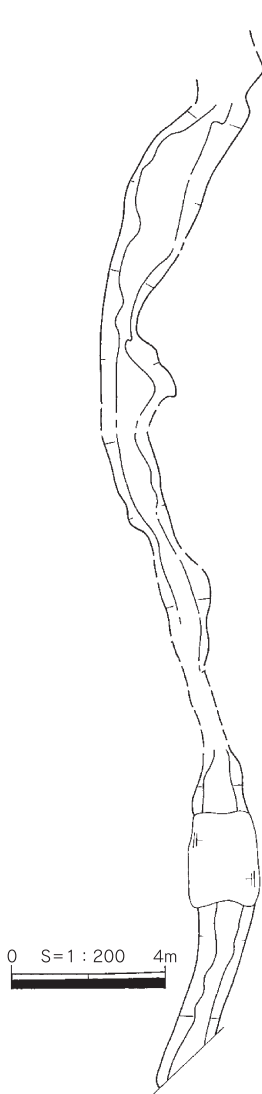
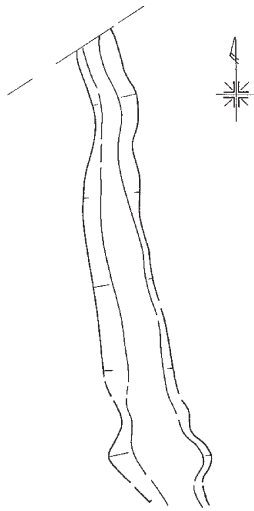
の溝が用水路として機能していた可能性が考えられる。

遺物は201～203が底面付近から、他は上層から出土している。時期は、伯耆国庁2段階、9世紀頃と考えられる。(玉木)

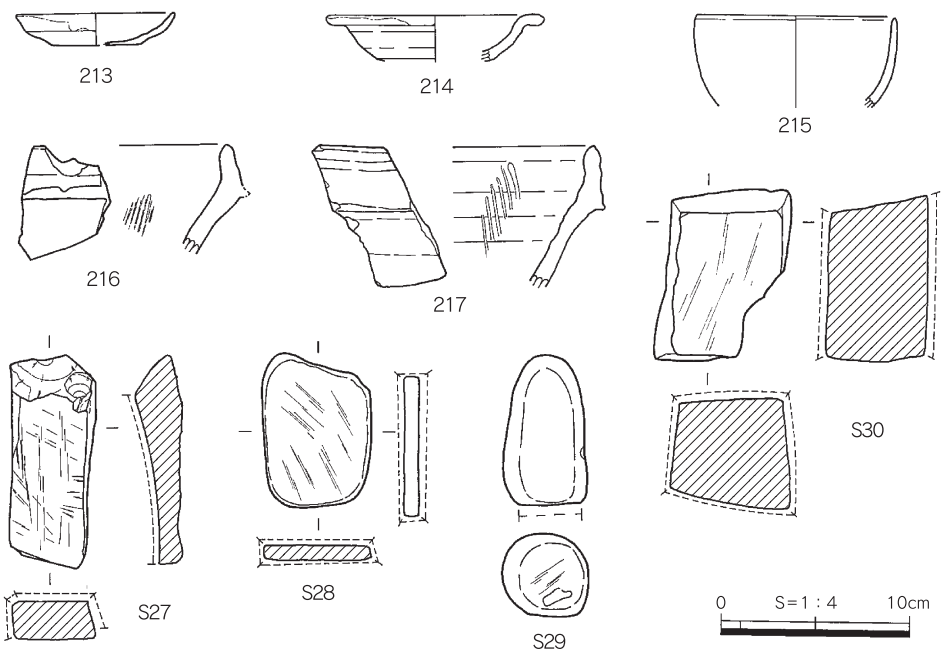
溝13 (第68図、PL.11・26)

調査区中央にあり、畠1の耕作土除去後に検出した。南北方向へ直線的にのびており、溝7を切る。規模は幅1.4m、深さ40cmほどを測る。断面形は「U」字状ないしすり鉢状を呈し、埋土は暗褐色の砂質層からなる。最下面には砂礫層が堆積し、水路として機能していたと考えられる。

遺物には土師器、須恵器、石器などが出土している。このうち、207～210がこの時期のものと考えられ、他は混入したものといえる。時期は、伯耆国庁2段階、9世紀頃と考えられる。(浅田)



- 1. 灰褐色シルト (現代の用水路)
- 2. 黄灰色粘質砂 (近世以降の溝)
- 3. 黄灰色砂礫層 (近世以降の溝)
- 4. 黄灰色シルト (黒ボク含、近世以降の溝)
- 5. 黄灰色砂礫 (近世以降の溝)
- 6. 暗黄灰褐色シルト (近世以降の溝)
- 7. 灰黄色細砂
- 8. 暗黄灰色砂
- 9. 灰白色砂
- 10. 淡黄灰色砂
- 11. 灰白色砂
- 12. 淡灰褐色シルト
- 13. 淡灰褐色砂礫
- 14. 灰色砂 (溝13)
- 15. 灰褐色シルト (溝13)
- 16. 灰色砂 (溝13)
- 17. 暗灰褐色シルト
- 18. 暗灰褐色シルト (溝7)



第69図 溝14・出土遺物

溝14 (第69図、PL.11・26)

調査区中央に位置しており、南から北へ蛇行しながら流れる溝である。溝13の一部を切っており、また、それ以降の溝によって切られている。遺構の検出は漸移層上面で行っており、残りが悪い。規模は幅80cm、深さ30cmを測る。遺物は灯明皿213・214、碗215、備前焼の播鉢216・217、砥石S27～30が出土している。これらの遺物から、時期は中世～近世と考えられる。

ところで、調査区中央には本遺構のほかにも溝7・13、現在に至るまでの溝、現在の用水路が若干ずれながらも同じ方向に流れている。このことから、この地域では古墳時代後期以来、同じところに水路が継続して存在していたことが分かる。

溝15 (第70図、PL.11・26)

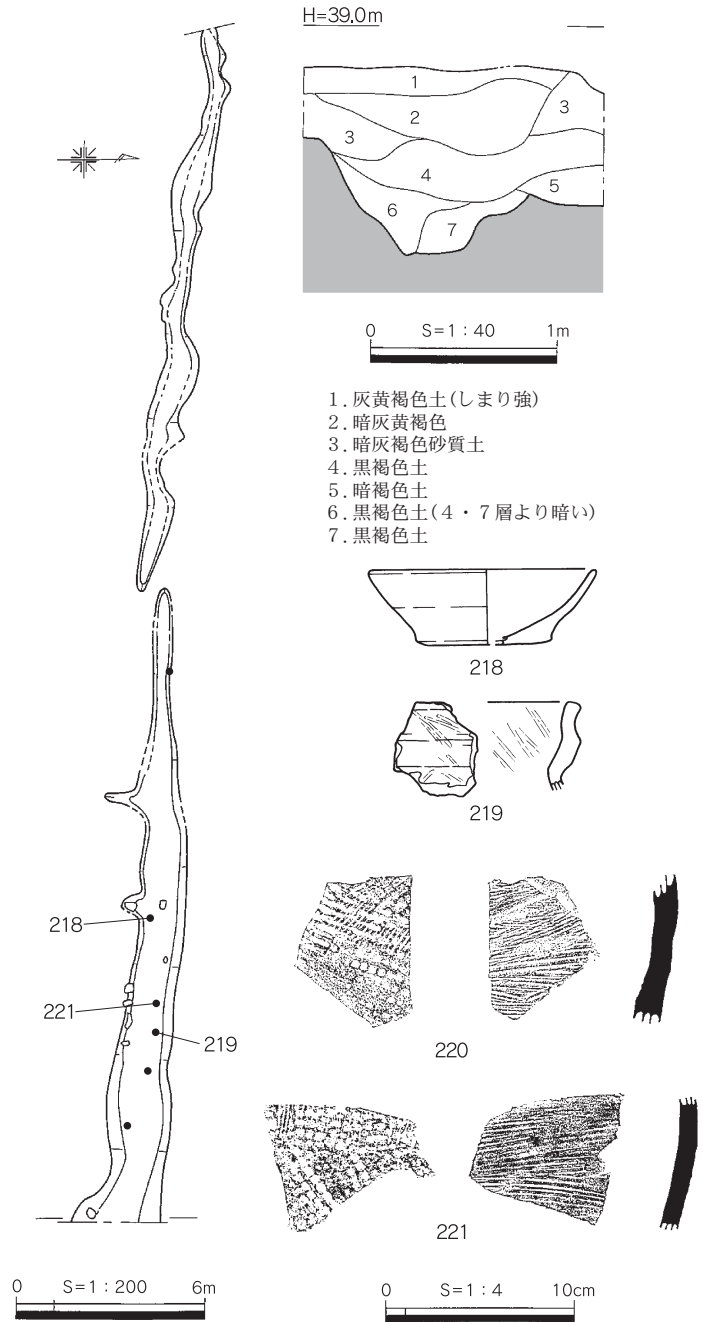
調査区北東側に位置しており、西から東へ直線的に流れる溝である。遺構の検出は漸移層上面で行っており、残りが悪い。規模は幅95cm、検出面からの深さ30cmを測る。断面形はいびつな逆台形を呈しており、底面は流水によるものなのか凹凸が認められる。

遺物は底面からやや浮いた状態で、底部へラ切りの坏218、土師器甕219、外面に格子状のタタキ後カキメ、内面にカキメを施す須恵器甕220・221、鉄滓などが出土している。時期は中世と考えられる。

6. 水田 (第71図)

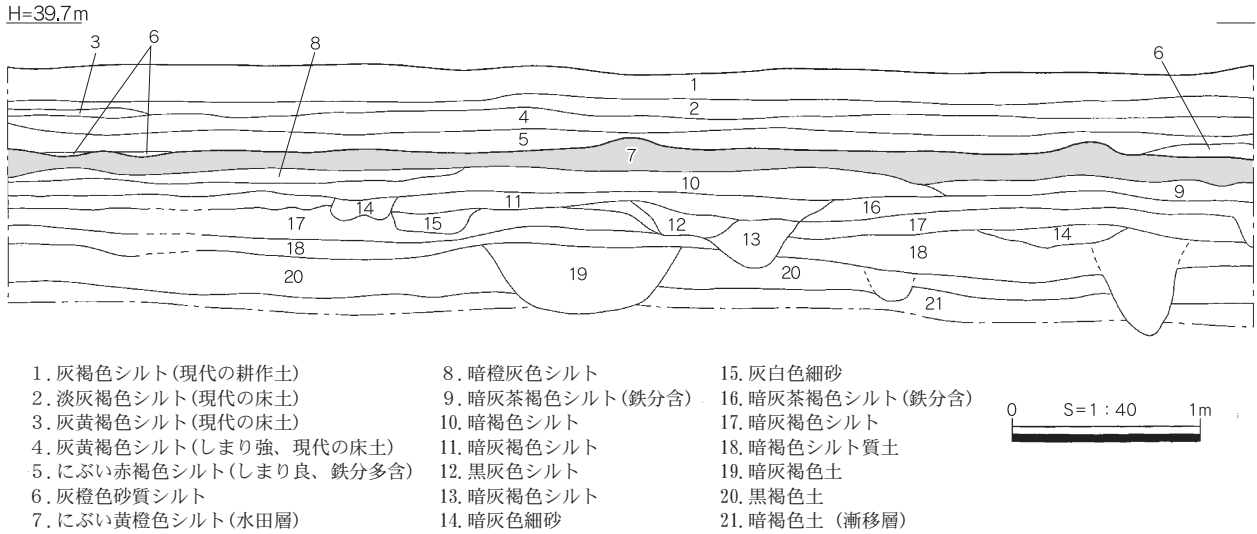
本遺構は、漸移層まで重機によって掘り下げたため、平面では捉えることができず、調査区北東側の土層観察によって畦畔状の高まりが確認されたために明らかとなった遺構である。

水田面の標高は39mであり、ほぼ水平となっている。畦畔状の高まりは2箇所確認されており、その規模は幅35～42cm、高さ5～10cm、間隔は2.4mを測る。水田の耕作土はシルト層からなり、酸化鉄の沈着によってにぶい黄橙色を呈している。この耕作土は、溝14よりも東側で確認されていること



第70図 溝15・出土遺物

(玉木)



第71図 水田土層断面図

から、調査区の比較的低い部分において水田が形成されていたものと思われる。

水田の耕作土の下層は、畠の耕作土と考えられる暗橙灰色～暗灰褐色シルトとなっている。これらの上面は比較的平坦となっており、調査区東壁の土層断面では畠の耕作土を造成し、平坦面をつくり出している状況を観察することができた。このことから、畠が廃絶した後に、大規模な造成が行われ、水田が形成されるに至ったものと考えられる。

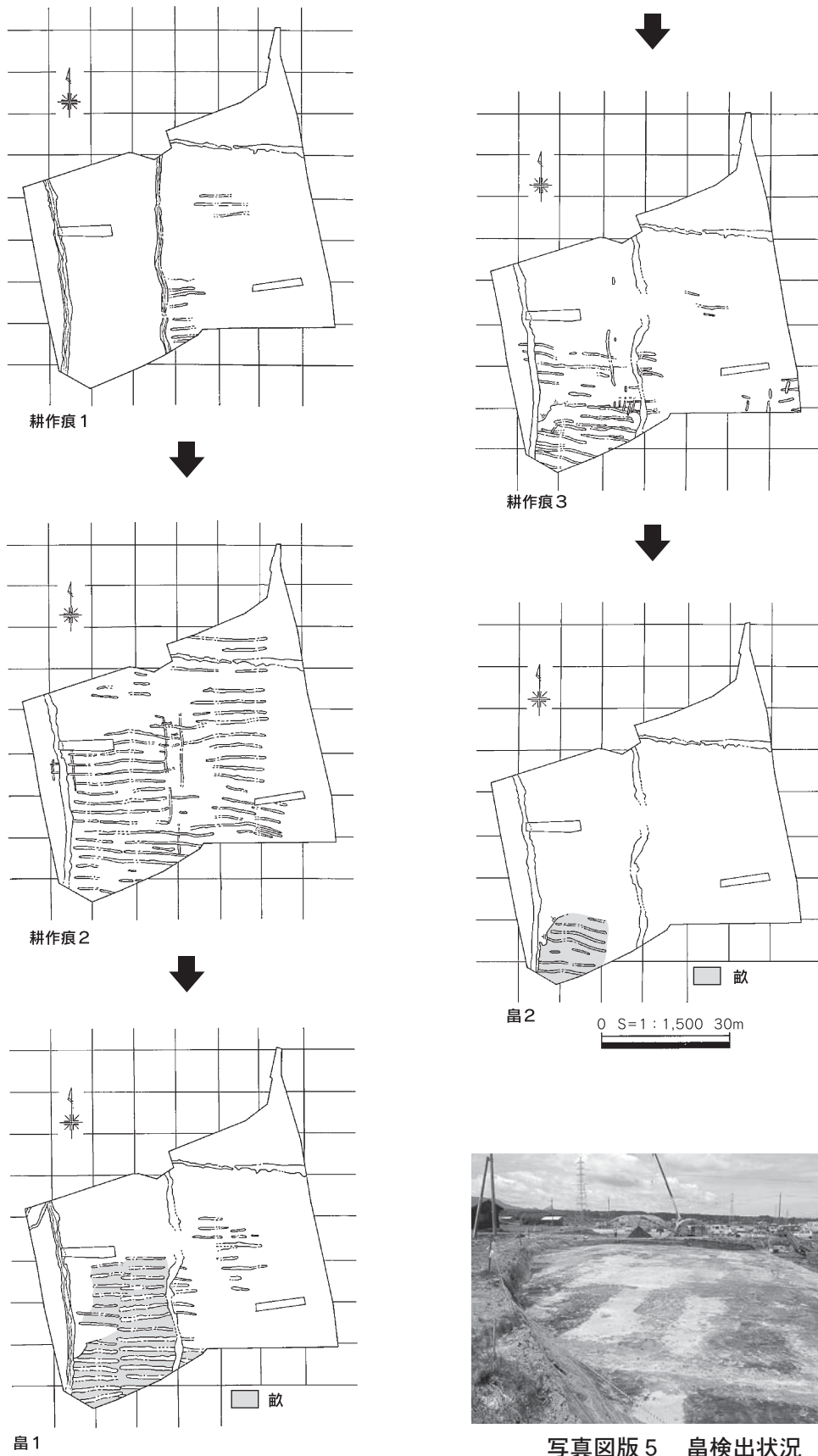
さて、この水田の時期であるが、遺物が出土しておらず明確にはできない。しかし、古代～中世にかけての遺構・遺物が水田の下層に存在することから、中世以降のものと考えられる。(玉木)

## 7. 畠

畠は調査区全面に渡って検出された。概要でも述べたが、重機によって黒ボク上面ないしは漸移層上面まで掘り下げた箇所が大半を占め、調査の当初、弥生時代から中世に至るまでの遺構・遺物が同一面で検出されることとなり、その新旧関係を判断することが非常に困難であった。とくに、この畠に伴う畝間や耕作痕の切り合い関係が複雑であり、漠然と3種類の溝が切り合っている状況を捉えたにすぎず、また、この性格も畠に伴うものと考えていたのであるが、明確に決定できるものではなかった。しかし、調査区南西側のH5～7、I6・7グリッドの調査によって、遺構の形成順序や性格が明らかとなったのである。

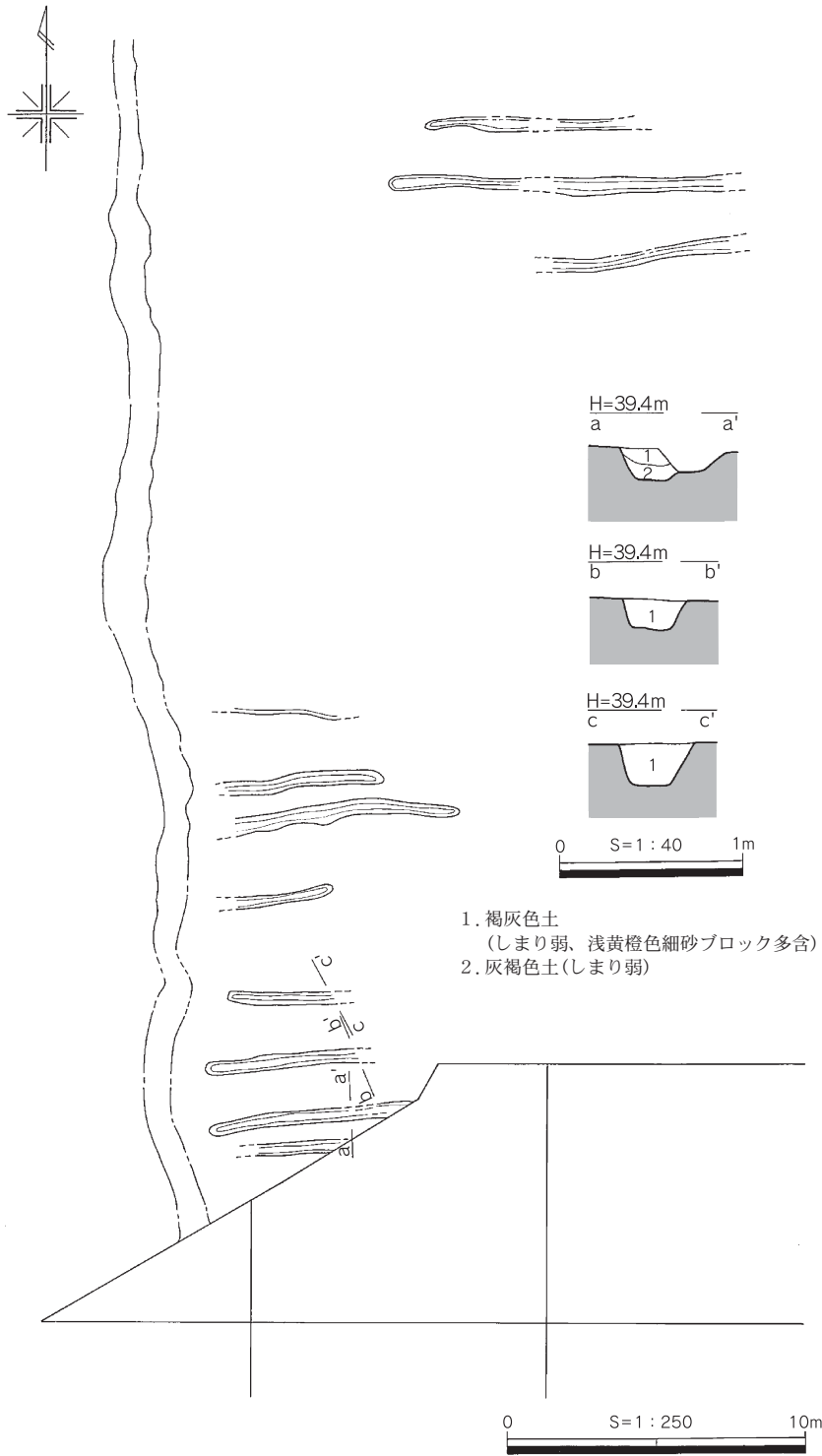
第72図は、畠の変遷を示したものである。この変遷図や第52～56、73～75、77図は調査終了後に畝間や耕作痕の埋土・埋砂の質や色調をもとに整理・復元したものである。若干、不明な箇所もあるが、おおむねこの通りに捉えることができる。

さて、畠の変遷であるが、まず、耕作痕1が形成される。その後、畠が形成されたと考えられるが、その痕跡は平面や断面で捉えることができず、後世の耕作によって削平されたものと考えられる。つづいて耕作痕2が掘られ、畠1が形成されることとなる。この畠1であるが、この上面には大量の細砂が堆積しており、これによって一旦、この地域における生産活動が中止されたものと考えられる。この生産活動中止後、新たに耕作痕3が掘られ、畠2が形成されることとなる。その後、調査区の東側では造成が行われ、水田が行われるようになり、現代に至るものと考えられる。



第72図 畠変遷図





第73図 耕作痕 1

分を掘り下げてしまったため、その一部のみの確認となった。

畠の状況をその最も残りの良い北東側から概観すると、直線的な畠であり、整然としたものであった。規模は幅2.2~2.5m、高さ15~30cmを測り、断面形は台形を呈している。畠の方向は、耕作痕1とほぼ同じく東西方向を示しており、調査区の地形とはやや異なる。畠の長さは、畠が断片的にしか残っていないため不明瞭であるが、20mほどであったと考えられ、東西方向に約20mの間隔で畠が連なっていた状況を想定することができる。

### 耕作痕 1 (第73図、PL.12)

調査区中央で部分的に確認し、畠1の耕作土を除去した黒ボク上面で検出した。溝13と直交し、直線的にのびる数条の溝で構成されている。規模は幅30~40cmを測り、断面形は逆台形を呈している。検出面からの深さは30cmを測り、掘り込みは黒ボク中で終わっている。溝の間隔は1~3mとばらつきが認められるが、おおむね2m間隔で掘られているものと考えられる。埋土は褐灰色土に浅黄橙色細砂が大量に混じるものであり、溝13の埋土に近いものであった。

遺構の時期は、埋土中から遺物が出土しておらず不明瞭であるが、埋土の状況などから判断して、溝13よりもやや新しいものと考えられる。

### 畠 1 (第74・78図、PL.12)

調査区中央と南西側において確認され、本来ならば、細砂ないしはシルト層除去後に検出されるべき遺構である。調査区全体にわたり良好な状態で畠を確認できたはずであるが、重機により遺構の大部



第74図 畠1



第75図 耕作痕 2

畝の上面や畝間には淡黄色細砂が厚く堆積する状況を確認しており、砂によって埋没した後、生産活動が一旦中止となったものと考えられる。なお、このような砂の堆積は、調査区内で所々認められており、その供給源、すなわち、洪水砂であるのか、飛砂であるのかを確認するため粒度分析や円磨度分析を行っている（第5章参照）。

また、畝の上面には、径3～10cm程度の円形の痕跡が認められており（写真図版6）、この正体を明らかとするために、軟X線分析を行った。また、ここで何が生産されていたのかを判断するため、花粉分析やプラントオパール分析をはじめとする土壌分析や軟X線分析を行った（第5章参照）。

さて、この遺構の時期であるが、耕作土中から出土した遺物のうち最も新しいものが伯耆国庁2段階に相当するものと考えられ、9世紀以降のものといえる。また、この畝の廃絶後に形成される中世の集落が13世紀頃と考えられることから、それ以前のものともいえる。

#### 耕作痕2（第75・78図、PL.12）

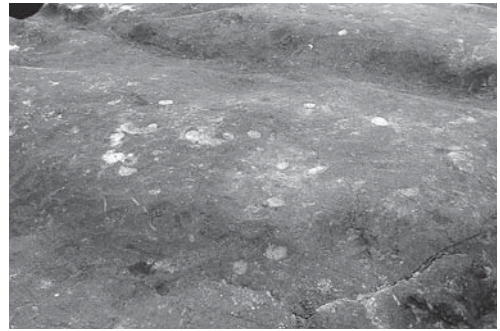
調査区のほぼ全体にわたって確認しており、畝1の耕作土を除去した黒ボク上面～漸移層上面で検出した溝群である。畝1の畝とほぼ同方向へ直線的にのびており、畝1の畝間と部分的に重複している。溝12・13の付近には、これを挟むようにして、また、東西にのびる溝と直交するあたりで2条1対の溝が掘られている。

なお、調査区東側では、これらの溝を確認できなかった。これは、単に溝が掘られていなかったのか、表土剥ぎの際に消滅したのか判断し難いが、溝の深さが比較的深く削平されたとは考え難く、また、土層観察から溝の断面を確認できなかったことから、前者の可能性が高いものと思われる。しかし、ここは層位的な調査が行われていない箇所であり、断言はできない。

溝の規模は、幅30～40cmを測り、断面形は逆台形を呈する。検出面からの深さは30cmほどであり、黒ボク～漸移層までを掘り込む。溝の間隔はおおむね2～2.5mとなっている。溝の長さは、溝の全体を確認できたところがなく判断し難いが、南北方向にのびる溝に挟まれた区間を一つの単位とするのならば、22～30mの範囲に収まるものと想定できる。

埋土は褐灰色土であり、畝1の耕作土と同質となっている。また、溝のうち幾つかの底面には凹凸が顕著に認めるものがあつた（写真図版7）。この凹凸は、この溝が耕作痕という遺構の性格上、鋤などによる農具の痕跡ではないかと想定される。

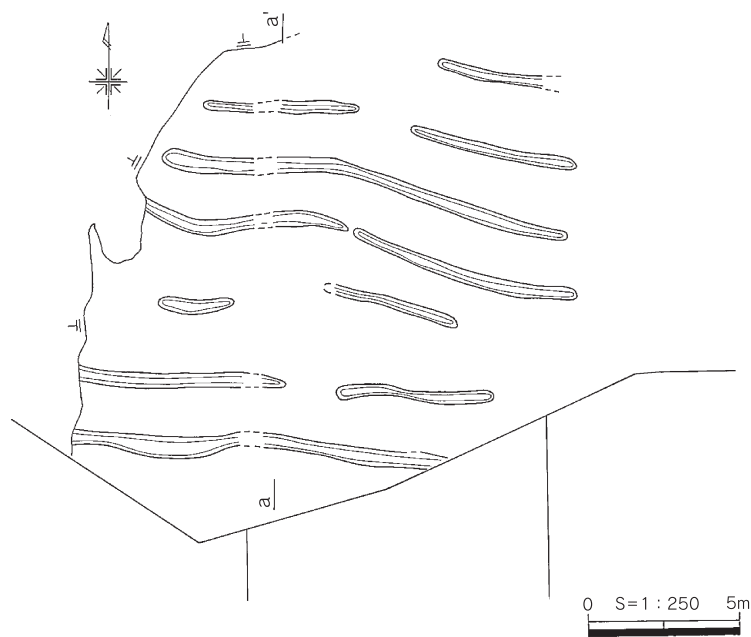
さて、この遺構の時期であるが、耕作痕という遺構の性格上、畝1を形成する前に行われた行為の痕跡であることから、畝1とほぼ同時期のものと捉えることができる。



写真図版6 畝の上面の様子



写真図版7 耕作痕2の底面の状況



第76図 畠2

## 畠2 (第76・78図、PL.12)

調査区南西側に位置しており、重機による表土剥ぎの際、シルト層を掘り下げた直後に確認した。重機により遺構上面まで掘り下げたため残りが悪く、畝間のみを検出となった。また、確認できた範囲が限定的であり、遺構の広がりをも明確にすることができなかった。しかし、この畠に伴うと考えられる耕作痕3の広がりから、調査区全体にわたり畠2が形成されていたものと考えられる。

畠は東西方向へ直線的にのびるものと、これよりもやや北に振り、a-a'付近で屈曲するものの2種類が認められた。これらは複数で一つのまとまりをなすものと考えられるが、確認範囲が限定的であることから、これらのまとまりの単位を明確にすることはできなかった。規模は、幅2~2.5mを測る。この畠の耕作土は、暗灰黄色シルトであり、下層の耕作痕3の状況などから、畠1の耕作土とその上層の細砂が混ざり合って形成されたものと考えられる。畝間に堆積していた埋砂は、明黄褐色細砂であり、掘立柱建物6・7や土坑10~12、墓2などの埋砂とほぼ同質であった。

耕作土や埋砂中から遺物が出土しておらず、時期を特定することができないが、遺構の検出状況や埋砂の状況などから判断して、畠1以降のものであり、掘立柱建物6や土坑10~12、墓2以前、すなわち、13世紀以前のものであると考えられる。

## 耕作痕3 (第77・78図)

調査区南西側で集中して確認しており、畠1の上面に堆積する細砂層除去後に検出した。これらの溝は、調査区全体において断片的に認められることから、この全面に掘り込まれていたものと考えられる。これらの溝には、畠1・2とほぼ同方向である東西にのびる溝と、これらと直交し南北にのびる溝の2種類が認められた。切り合い関係から、東西にのびる溝が先行するものと考えられる。

東西にのびる溝は、畠1の畝間をはずすようにして掘られており、効率よく耕起が行われた状況をうかがうことができる。これらの溝は、やや蛇行しながらのびており、また、部分的にはあるが螺旋状に交錯している箇所も確認された。規模は幅41~60cmを測り、断面形は逆台形を呈する。検出面からの深さは20cmを測り、畠1の耕作土から黒ボク中にかけて掘り込まれていた。埋土は畠1の上面を覆う細砂~粗砂を主体とするものであり、この中に畠1の耕作土が部分的に混ざるものである。

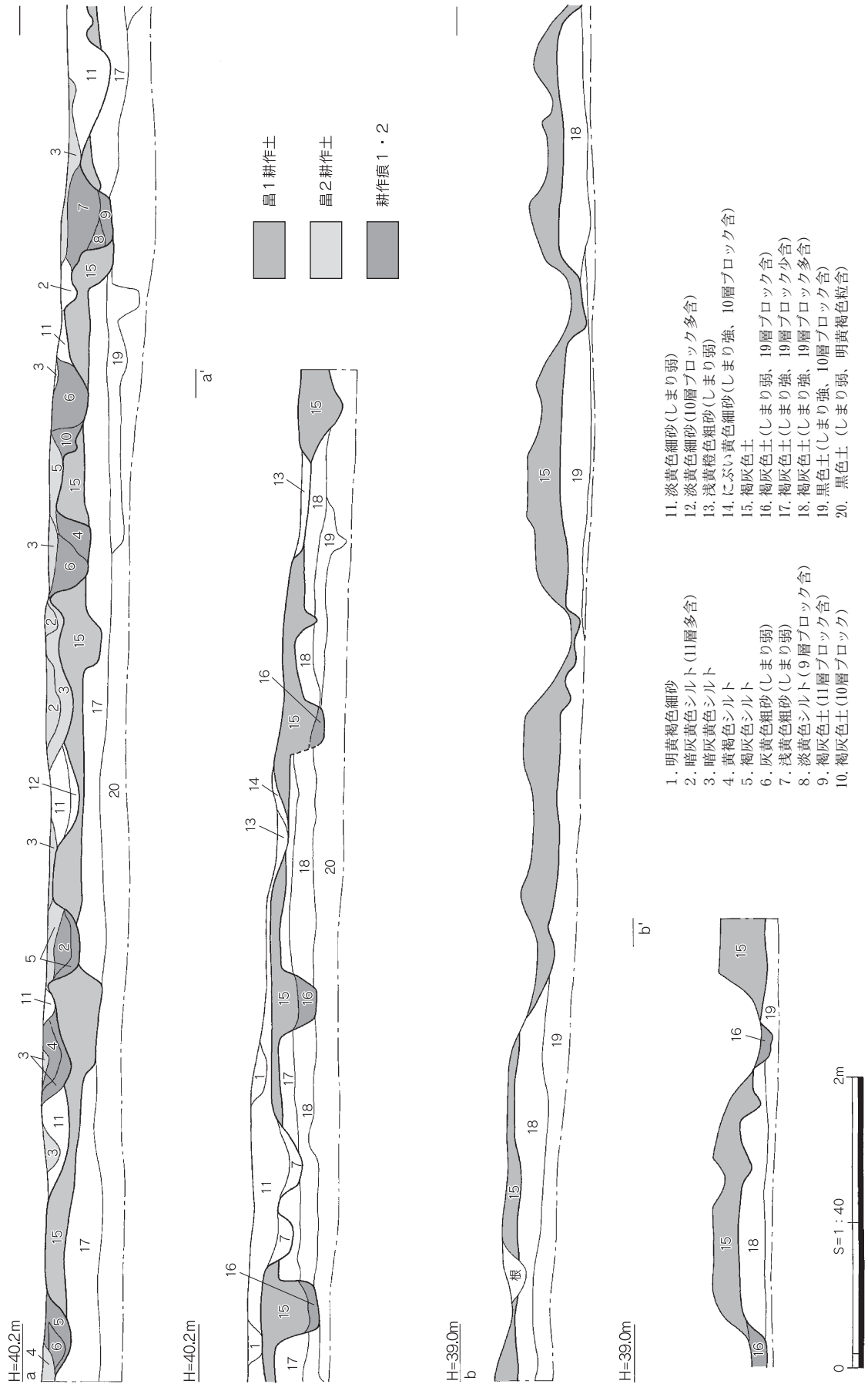
南北にのびる溝は、その検出数が少なく、全体像が判然としない。規模は幅20cmほどを測り、断面形は逆「U」字状を呈する。この埋土も南北にのびる溝とほぼ同じ傾向を示している。

さて、この遺構の時期であるが、耕作痕という遺構の性格上、畠2を形成する前の行為であり、こ





第77図 耕作痕 3



第78図 畠1・2、耕作痕2・3土層断面図

のことを考慮に入れると、畠2とほぼ同時期のものと捉えることができる。

(玉木)

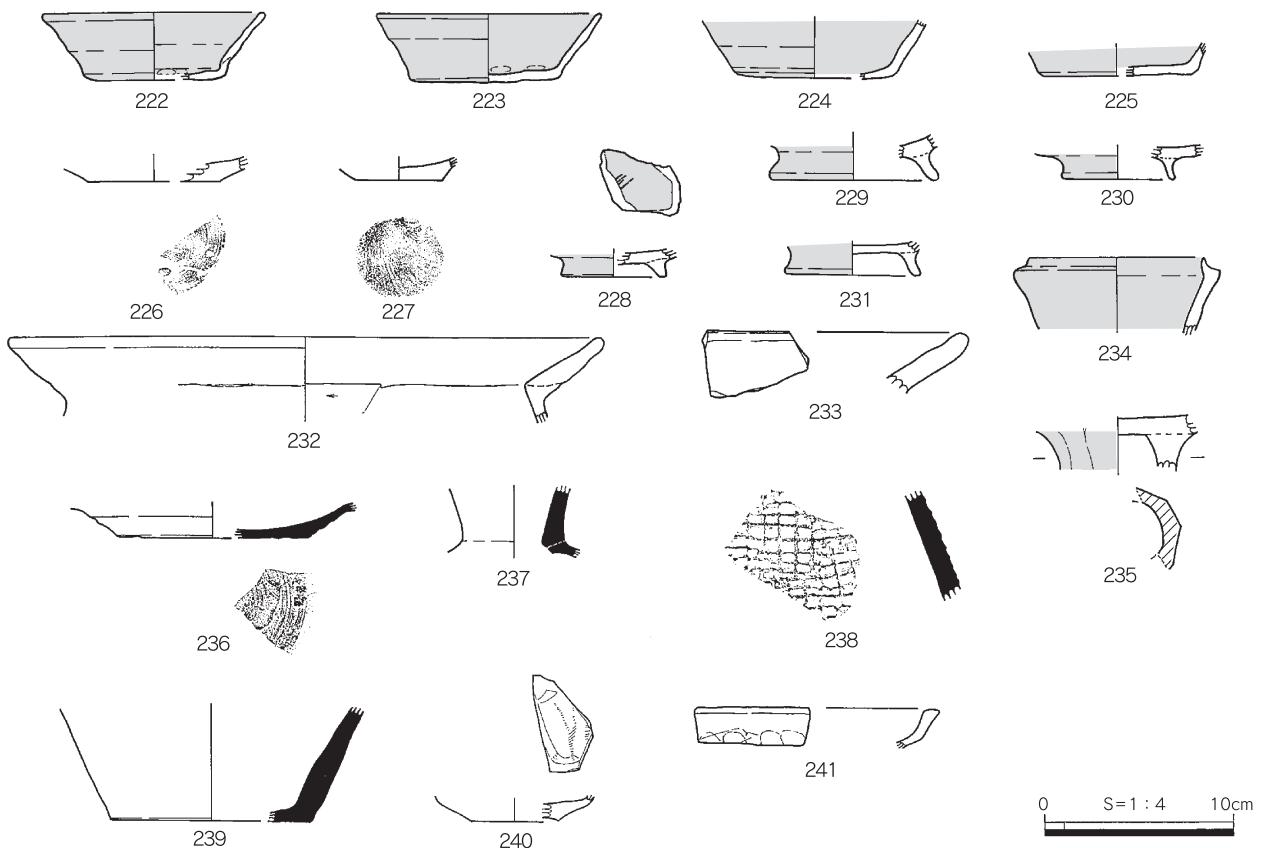
### 8. 遺構に伴わない遺物 (第79図、PL.26・27)

遺物は、古代に属するものが主に耕作土中から出土している。また、中世から近世に属するもののは大半は、調査区中央の溝13・14付近において、重機による表土掘り下げ時に取り上げたものである。このため、出土層位については不明瞭であるが、溝14やそれ以降に造られた溝の埋砂中に帰属するものと考えられる。なお、240は調査区北東側のシルト層、241はピットからの出土である。

222～235は土師器であり、このうち222～225は、底部ヘラ切り後、内側から指によって押圧が加えられるといった、底部押圧技法の認められる坏である。内外面にはナデ、ヨコナデが施され、赤色顔料が塗布される。226・227は坏ないしは皿の底部であり、糸切りの痕跡が認められる。228～231は坏の高台部であり、いずれも赤色顔料を塗布する。また、228の坏部内面には、暗文が部分的に認められる。234は壺であり、狭い肩部から短い口縁部が真っ直ぐに立ち上がる。内外面ともにナデを施し、赤色顔料を塗布する。235は高坏の脚部であり、外面に面取りをなし、赤色顔料を塗布する。

236～239は須恵器である。このうち236は坏であり、底部に糸切りの痕跡が認められる。237は瓶類の頸部、238は甕の胴部、239は壺の底部である。240は青磁の皿であり、内面にヘラや櫛による文様が施される。241は瓦質の鍋である。

(玉木)



第79図 古代以降遺構外出土遺物

## 第6節 小結

調査の結果、縄文時代のたわみ状遺構1基、弥生時代の竪穴住居3棟、掘立柱建物1棟、たわみ状遺構2基、古墳時代の竪穴住居6棟、掘立柱建物4棟、土坑9基、方形土坑5基、硬化面1面、焼土面1面、溝11条、畦畔状遺構1面、古代～中世にかけての畠2面、耕作痕3面、溝2条、中世の掘立柱建物2棟、土坑3基、墓3基、溝2条、中世以降の水田を確認し、上伊勢第1遺跡が縄文時代～中世の集落、古代～中世の畠、中世以降の水田であることが判明した。以下、調査の成果について、時代ごとにまとめていく。

**縄文時代** 縄文時代の遺構・遺物は少なく、遺構としては早期のたわみ1が確認されているにすぎなかった。たわみ1からは、早期後半の高山寺式の範疇に収まる外面に楕円文、口縁部内面に斜行沈線を施した押型文土器が出土した。また、早期以外の遺物としては、晩期の突帯文土器が数点出土するのみであった。

**弥生時代** 弥生時代になると集落が営まれるようになる。ここでは、前期後半～中期中葉の遺構・遺物を確認した。このうち主体となるものは前期後半であった。遺構は前期後半の竪穴住居、掘立柱建物、たわみ状遺構が検出された。これらの遺構のうち、竪穴住居3は中央ピットの両端に柱穴をもち、床面に5本の柱穴をめぐるものであった。また、竪穴住居3は焼失住居と考えられるものであり、床面からは炭や焼土とともに表面に被熱を受けた石斧S8が出土した。ここから出土した炭化材の年代測定を行ったところ、 $2250 \pm 30 \sim 2440 \pm 30$  BP という結果が得られた（第5章参照）。

遺物は前期後半～中期中葉の弥生土器や石器が出土した。このうち注目されるものとして、磨製石包丁S1がある。S1は遺跡周辺において農耕が行われていた状況を示す資料となり注目される。中期中葉以降の遺構・遺物は確認されておらず、古墳時代にかけて集落は断絶するものと考えられる。

**古墳時代** 古墳時代になると再びこの地に集落が営まれるようになる。遺構は前期～後期までの竪穴住居、掘立柱建物、土坑、方形土坑、硬化面、焼土面、溝、畦畔状遺構を確認した。これらの遺構は調査区全体に認められ、また、遺跡周辺の耕地では土師器・須恵器が採集されていることから、遺跡の立地する微高地全体に集落が展開していたものと考えられる。

遺物は前期～後期の土師器や石器が出土した。このうち溝2から出土した土師器は、天神川Ⅱ～Ⅲ期の一括性の高いものであり、古墳時代前期における一括資料として注目される。

**古代以降** 古代になると状況が一変し、耕地となる。ここでは9～13世紀頃の畠2面、畠に伴う耕作痕3面を確認した。確認した遺構のうち、畠1は砂に覆われており、良好な状態で畝を検出することができた。また、これらの遺構は耕作痕1→耕作痕2→畠1→耕作痕3→畠2といった順序で形成されており、当時の土地利用の状況や農業技術を知ることができ注目される。

畠の廃絶後、中世の集落が形成されるようになり、掘立柱建物2棟、土坑3基、墓2基などが確認された。これらの遺構のうち、掘立柱建物2棟は棟方向が同一であり、その構造が総柱建物と側柱建物と異なっていることから、主屋とその付属施設であった可能性が考えられる。また、掘立柱建物2の付近には、屋敷墓と考えられる墓2・3が検出されている。

この集落廃絶後、調査区東側を中心に大規模な造成が行われるようになる。その後、水田が形成されるようになり、最近の景観に近い状況になっていくものと考えられる。（玉木）

土器観察表 1

挿図 No.	掲載 No.	掲載遺構名	調査時遺構名	器種	種類	計測値 (cm)			調整	色調	胎土	備考
						口径	器高	底径				
6	1	たわみ <sub>1</sub>	SI10	深鉢	縄文	*34.4			外面：楕円文 内面：ナデ	灰白色	密、白色粒含	外面に楕円文、口縁部内面に斜行沈線文
	2			甕	弥生	*22.8			外面：口縁部ナデ、胴部ヘラミガキ 内面：ハケメ→ナデ→ヘラミガキ	にぶい黄橙色	密、石英・橙色粒・砂礫含	口唇部に刻目、胴部に3条の沈線、外面に煤付着
7	3	遺構外		鉢	縄文				内外面：ヘラミガキ	褐灰色	密、砂粒多含	口縁部に刻目付貼付突帯
	4		鉢	縄文				外面：ヘラミガキ 内面：ナデ、ヘラミガキ（器面磨減し不明瞭）	にぶい黄橙色	密	口縁部に刻目付貼付突帯	
	5		鉢	縄文				内外面：ヘラミガキ	黒褐色	密	口縁部に刻目付貼付突帯	
10	6	住居1	SI6	壺	弥生	*20.0			外面：ヘラミガキ 内面：口縁部ヘラミガキ、以下器面剥離し不明	にぶい黄橙色	密、石英・長石多含	頸部に1条と2条の沈線
	7			壺	弥生	*20.2			外面：ハケメ→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	にぶい黄橙色	密、石英・長石含	外傾接合、外面に赤彩痕残る
	8			壺	弥生	*16.0			外面：ハケメ→ヘラミガキ（器面磨減し不明瞭） 内面：ハケメ→ヘラミガキ	にぶい黄橙色	密、石英・橙色粒含	外傾接合、内外面に赤彩痕残る
	9			壺	弥生	*12.2			外面：ナデ→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	橙色	密、砂粒含	頸部に1条の沈線、外傾接合、外面に煤付着
	10			無頸壺	弥生	*11.3			外面：ヘラミガキ 内面：ナデ→ヘラミガキ	にぶい黄橙色	密、砂粒含	内外面に黒斑
	11			壺	弥生				外面：ヘラミガキ 内面：ナデ、ハケメ	にぶい褐色	密、石英・砂粒含	肩部に削出突帯2条
	12			甕	弥生				外面：器面磨減し不明 内面：ハケメ→ヘラミガキ	黄橙色	密、石英・長石含	胴部に8条の沈線、内外面赤彩痕残る
	13			甕	弥生				外面：ハケメ→ナデ 内面：ナデ（器面磨減し不明瞭）	淡黄色	密、長石少含	胴部に5条の沈線
	14			甕	弥生				内外面：ヘラミガキ	にぶい黄橙色	密、石英・橙色粒含	口縁部逆L字状、内傾接合
	15			底部	弥生			*9.6	外面：ハケメ→ヘラミガキ 内面：ハケメ	にぶい褐色	密、石英・長石含	外傾接合
16	底部	弥生			*8.8	外面：ハケメ→ヘラミガキ 内面：ハケメ→ナデ	にぶい黄橙色	密、石英・長石含				
17	底部	弥生			*8.4	外面：ナデ（器面磨減し不明瞭） 内面：器面剥離し不明	にぶい黄橙色	密、砂粒含				
18	鉢	弥生				内外面：ハケメ→ヘラミガキ	にぶい黄橙色	密、砂粒含	内面に黒斑			
12	19	住居2	SI8	甕	弥生				内外面：ヘラミガキ（内面器面磨減し不明瞭）	にぶい黄	密、砂粒含	外傾接合、外面に煤付着
	20			甕	弥生				内外面：ヘラミガキ	明赤褐色	密、石英・長石含	口縁部が逆L字状、口唇部に刻目
	21			鉢	弥生	*17.7			外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ、ナデ	橙色	密、砂粒含	頸部に2条の沈線、外面に黒斑
	22			底部	弥生			*5.2	外面：ハケメ→ナデ→ヘラミガキ 内面：ナデ	橙色	密、石英・長石・雲母多含	
	23			把手	弥生				外面：ハケメ→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ（器面剥離し不明瞭）	にぶい黄橙色	密、石英多含	外耳状の突起部
	24	住居1・2	SI6・8	甕	弥生			外面：ハケメ→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	にぶい黄橙色	密、砂粒含	口縁部逆L字状	
13	25	住居3	SI5	甕	弥生				内外面：ヘラミガキ	灰褐色	密、石英・長石多含	口唇部に刻目
	26			甕	弥生				外面：ハケメ→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	灰黄色	密、石英・長石多含	外傾接合
	27			甕	弥生				外面：ハケメ→ヘラミガキ 内面：条痕→ヘラミガキ	暗灰黄色	密、石英多含	外傾接合
	28			甕	弥生				内外面：ヘラミガキ（器面磨減し調整不明瞭）	にぶい黄橙色	密、石英多含	外傾接合
	29			甕	弥生				外面：ナデ、条痕 内面：ナデ、ヘラミガキ	浅黄色	密、砂粒含	外傾接合、胴部に3条以上の沈線、内外面に黒斑
	30			鉢	弥生	*15.0			外面：ハケメ→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	淡黄色	密、砂粒多含	口唇部に刻目
15	31	建物1	SB6	甕	弥生				内外面：ナデ	灰黄褐色	密、石英・長石・橙色粒含	胴部に2条の刻目付貼付突帯
16	32	たわみ <sub>2</sub>	たわみ <sub>4</sub>	壺	弥生	*27.7			外面：ハケメ→ヘラミガキ 内面：ハケメ→ナデ、ヘラミガキ	浅黄褐色	密、砂粒多含	内外面に赤彩痕残る
18	33	遺構外	黒褐色土	壺	弥生				内外面：ハケメ→ヘラミガキ	浅黄褐色	密、砂粒多含	外傾接合、内外面に赤彩痕残る
	34		耕作溝SD19	壺	弥生	*13.6			外面：ハケメ→ヘラミガキ 内面：ナデ→ハケメ	橙色	密、石英・長石・橙色粒含	外傾接合
	35			壺	弥生	*16.0			内外面：ヘラミガキ	橙色	密、石英・長石含	頸部に3条以上の沈線
	36		黒褐色土	壺	弥生				内外面ともに器面磨減し調整不明	橙色	密、石英多含	頸部に4条以上の刻目付貼付突帯



土器観察表 2

挿図 No.	掲載 No.	掲載遺構名	調査時遺構名	器種	種類	計測値 (cm)			調整	色調	胎土	備考
						口径	器高	底径				
18	37	遺構外		甕	弥生				外面：口縁部ナデ、胴部ヘラミガキ 内面：ナデ→ヘラミガキ	にぶい黄橙色	密、石英・長石含	口唇部に刻目、外傾接合、胴部に煤付着
	38		甕	弥生				外面：ハケメ→ヘラミガキ 内面：器面磨滅し不明	にぶい赤褐色	密、石英・長石・角閃石含		
	39		甕	弥生	*17.6			外面：板状工具によるナデ 内面：ナデ	にぶい橙色	密、砂礫含	外傾接合、外面に煤付着	
	40		黒褐色土	甕	弥生			外面：ハケメ→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	にぶい赤褐色	密、長石多含	外傾接合	
	41			甕	弥生			内外面：ナデ	にぶい黄橙色	密、白色粒含	外傾接合	
	42		黒褐色土	甕	弥生			外面：条痕→ヘラミガキ 内面：ナデ、ヘラミガキ	淡黄色	密、砂粒多含	胴部に3条以上の沈線、外傾接合、外面に赤彩痕残る	
	43			甕	弥生			内外面：ナデ→ヘラミガキ	にぶい黄橙色	密、石英・長石・橙色粒含	口縁部が逆し字状、胴部に3条以上の沈線、内傾接合、外面に赤彩痕残る	
	44			甕	弥生			内外面：ハケメ→ヘラミガキ	橙色	密、砂粒含	外傾接合、外面に煤付着	
	45		黒褐色土	鉢	弥生			外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ、条痕	浅黄橙色	密、砂粒含	内面に赤彩痕残る	
	46		黒褐色土	底部	弥生		*14.0	外面：ヘラミガキ 内面：ハケメ→ナデ	浅黄橙色	密、石英・長石・橙色粒含		
47	黒褐色土	底部	弥生		*9.3	外面：条痕→ヘラミガキ 内面：条痕	にぶい黄橙色	密、石英・長石多含				
48		甕	弥生	*15.8		外面：口縁部ナデ、胴部ハケメ→ナデ→ヘラミガキ 内面：口縁部ナデ、胴部ハケメ→ヘラミガキ	にぶい橙色	密、石英少含	内外面に赤彩痕残る			
21	49	住居 4	SI 1	甕	土師	15.7	24.8	外面：口縁部ハケメ→ナデ、肩部ハケメ→ナデ、ミガキ、胴部ハケメ→ナデ 内面：口縁部ナデ、胴部ヘラケズリ	にぶい黄橙色	密、石英・長石含	肩部に刺突文、外面に煤付着、赤彩痕残る	
	50			甕	土師	*15.8	29.3	外面：ハケメ→ナデ 内面：口縁部ナデ、胴部ヘラケズリ	にぶい黄橙色	密、石英・長石含	肩部に刺突文、外面に煤付着、赤彩痕残る	
	51			甕	土師	*14.0		外面：口縁部ハケメ→ミガキ、ナデ、肩部ハケメ→ナデ、ミガキ 内面：口縁部ミガキ、ナデ、胴部ケズリ→ミガキ	にぶい黄橙色	密	外面肩部に黒斑、全体に煤付着	
	52			坏蓋	須恵			内外面：ヨコナデ	灰色	密		
23	53	住居 5	SI 2	甕	土師	*12.2		外面：口縁部ナデ、肩部ハケメ→ナデ、胴部ハケメ 内面：口縁部ナデ、胴部ヘラケズリ (内外面ともに器面磨滅し不明瞭)	灰白色	密、石英・長石含	外面胴部下半に煤付着	
	54			甕	土師	*13.4		内外面：ミガキ、ナデ (器面磨滅し不明瞭)	浅黄橙色	密	外面に赤彩痕残る	
	55			甕	土師			外面：ハケメ→ミガキ 内面：ミガキ、ナデ	浅黄橙色	密		
	56			甕	土師			内外面：器面磨滅し調整不明	浅黄橙色	密		
	57			甕	土師			外面：ミガキ、ナデ 内面：ハケメ→ナデ、ミガキ	浅黄橙色	密、石英僅含		
	58			甕	土師	*13.6		内外面：ナデ、ミガキ	浅黄橙色	密、石英多含		
	59			甕	土師	*16.9		内外面：ミガキ、ナデ	浅黄橙色	密、石英多含	外面に煤付着	
	60			鉢	土師			外面：ナデ (器面磨滅し調整不明瞭) 内面：ミガキ、ナデ	浅黄橙色	密	口唇部に赤彩痕残る	
	61			脚付椀	土師			内外面：ヘラミガキ	にぶい褐色	密	赤彩痕残る	
	62			小型丸底壺	土師	*9.6		内外面：ハケメ→ナデ (器面磨滅し調整不明瞭)	浅黄橙色	密		
	63			脚部	土師		7.2	外面：ハケメ→ナデ 内面：ナデ (内外面ともに器面磨滅し調整不明瞭)	浅黄橙色	密、石英・長石少含		
	64			脚部	土師			内外面ともに器面磨滅し調整不明	浅黄橙色	密、石英・長石・橙色粒少含	内面に赤彩痕残る	
	65			甕	土師			外面：ハケメ→ナデ	灰褐色	密、石英・長石少含	把手部	
	66			坏身	須恵	*13.6	4.0	外面：ヨコナデ、底部回転ヘラケズリ 内面：ヨコナデ	灰白色	密	左回転のロクロ、断面はにぶい赤褐色	
67	坏身	須恵	*11.8		内外面：ヨコナデ	にぶい黄褐色	密	焼成不良				
68	坏身	須恵			外面：ヨコナデ、底部回転ヘラケズリ 内面：ヨコナデ、底部仕上げナデ	灰白色	密、石英・長石含	右回転のロクロ				
69	高坏	須恵	*10.8		外面：ヨコナデ、底部カキメ 内面：ヨコナデ、底部仕上げナデ	灰色	密	三方向の透かし穴				
70	甕	土師			外面：ハケメ→ナデ 内面：ヘラケズリ	浅黄橙色	密、石英少含					

土器観察表 3

挿図 No.	掲載 No.	掲載 遺構名	調査時 遺構名	器種	種類	計測値 (cm)			調 整	色 調	胎 土	備 考
						口径	器高	底径				
24	71	住居6	SK4	甕	土師				外面：煤付着のため不明 内面：ミガキ、ナデ	黒褐色	密	外面に煤付着
	72			甕	土師				外面：ハケメ→ナデ→ミガキ 内面：ヘラケズリ→ナデ、ミガキ (内外面ともに器面磨減し不明瞭)	橙色	密、砂粒含	肩部に刺突文
	73			高坏	土師				外面：ハケメ→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	橙色	密	赤彩痕残る
26	74	住居7	SI3	壺	土師	*20.8			内外面ともに器面磨減し調整不明	淡黄色	密	
	75			壺	土師	*17.0			内外面：ミガキ、ナデ	にぶい 橙色	密、石英・長 石含	外面に煤付着
	76			甕	土師	*13.8			外面：口縁部ナデ、肩部ハケメ→ナデ、 ミガキ、胴部ハケメ 内面：口縁部ナデ、胴部ヘラケズリ (内外面ともに器面磨減し不明瞭)	淡黄橙 色	密、石英・長 石・砂粒含	胴部に刺突文、外面胴部に煤 付着
	77			甕	土師	*14.6			外面：口縁部ミガキ、ナデ、肩部ハケメ →ナデ、ミガキ 内面：口縁部ミガキ、ナデ、肩部ケズリ →ミガキ	にぶい 黄橙色	密、長石・石 英含	外面に煤付着
	78			甕	土師	*13.8			外面：口縁部ミガキ、ナデ、肩部ハケメ →ナデ、ミガキ 内面：口縁部ミガキ、ナデ、胴部ヘラケ ズリ→ミガキ	にぶい 黄橙色	密、石英・砂 粒多含	肩部に刺突文、外面に煤付着、 赤彩痕残る
	79			小型 丸底壺	土師	*10.6			外面：ヘラミガキ 内面：ハケメ→ナデ	にぶい 黄橙色	密	外面に煤付着
	80			小型 丸底壺	土師	8.0	8.4		外面：底部ハケメ 内面：胴部ヘラケズリ (内外面ともに器面磨減し調整不明瞭)	橙色	密、石英・砂 粒含	
	81			小型 丸底壺	土師	10.2	8.4		外面：口縁部ハケメ→ナデ→ミガキ、胴 部ハケメ、→ナデ、ミガキ 内面：口縁部ハケメ→ナデ、胴部ヘラケ ズリ→ナデ	にぶい 黄橙色	密	外面底部に黒斑
	82			高坏	土師	*20.6			外面：ハケメ→ナデ→ヘラミガキ (器 面磨減し不明瞭)	淡黄色	密	外面口縁部に刺突文
	83			高坏	土師	*17.8			外面：ハケメ→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	浅黄橙 色	密	
	84			高坏	土師	*16.2			外面：ハケメ→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ (器面磨減し調整不明 瞭)	橙色	密	
	85			高坏	土師	14.4			外面：ハケメ→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	橙色	密	内外面に煤付着
	86			高坏	土師	15.2			外面：ハケメ→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	にぶい 黄橙色	密	内外面に煤付着、赤彩
	87			鼓形 器台	土師				外面：ミガキ、ナデ 内面：ヘラケズリ→ミガキ	橙色	密	
27	88			甕	土師	*15.6			外面：口縁部ミガキ、ナデ、肩部ハケメ →ミガキ、ナデ、胴部ハケメ→ナデ 内面：口縁部ミガキ、ナデ、胴部ヘラケ ズリ	にぶい 黄橙色	密、石英・長 石・砂粒含	肩部に刺突文→ナデ、外面に 煤付着
	89			甕	土師	*17.4			外面：口縁部ミガキ、ナデ、肩部ハケメ →ナデ、ミガキ 内面：口縁部ミガキ、ナデ、胴部ヘラケ ズリ→ミガキ	にぶい 黄橙色	密、石英・砂 粒少含	内外面口縁部に煤付着
	90			坏蓋	須恵	*13.9			内外面：ヨコナデ	灰白色	密	焼成不良
	91			坏身	須恵	11.8	4.8		外面：ヨコナデ、底部回転ヘラケズリ 内面：ヨコナデ、底部仕上げナデ	灰色	密、砂粒・長 石含	
	92			坏身	須恵	*11.9			外面：ヨコナデ、底部回転ヘラケズリ 内面：ヨコナデ、底部仕上げナデ	青灰色	密	右回転のロクロ
	93			坏身	須恵				外面：ヨコナデ、底部ヘラケズリ 内面：ヨコナデ	暗青灰 色	密	左回転のロクロ
	94			甕	須恵	21.5	41.7		外面：ヨコナデ、タタキ 内面：ヨコナデ、当て具痕	灰色	密	外面に自然釉葉がかかる
28	95	住居8	SI4	甕	土師				外面：口縁部ミガキ、ナデ、肩部ハケメ →ナデ、ミガキ 内面：口縁部ミガキ、ナデ、肩部ナデ→ ミガキ、胴部ヘラケズリ→ミガキ	にぶい 黄橙色	密	
	96			甕	土師				外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、胴部ヘラケズリ	浅黄橙 色	密	外面に黒斑
	97			高坏	土師	16.6			外面：ハケメ→ナデ→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	橙色	密	
35	98	土坑8	SK13	甕	弥生				外面：条痕→ヘラミガキ 内面：器面磨減し不明	にぶい 橙色	密、石英・長 石含	口縁部逆し字状、口唇部に刻 目
37	99	方形 土坑2	SK15	甕	土師				外面：ミガキ、ナデ 内面：口縁部ミガキ、ナデ、胴部ヘラケ ズリ、ミガキ	にぶい 黄橙色	密、石英少含	

土器観察表 4

挿図 No.	掲載 No.	掲載遺構名	調査時遺構名	器種	種類	計測値 (cm)			調整	色調	胎土	備考	
						口径	器高	底径					
42	100	溝 2	SD 4	壺	土師				外面：口縁部ミガキ、ナデ、頸部～胴部ハケメ→ミガキ、ナデ 内面：口縁部ミガキ、ナデ、頸部ミガキ、胴部ヘラケズリ→ミガキ	にぶい黄橙色	密、石英・長石・橙色粒含	内外面に黒斑、口縁部・胴部に赤彩痕残る	
	101			壺	土師	*17.5			外面：口縁部ミガキ、ナデ、頸部ハケメ→ナデ、ミガキ、胴部ハケメ→ナデ 内面：口縁部～頸部ナデ、ミガキ、胴部ヘラケズリ→ミガキ	にぶい黄橙色	密、石英・長石含	肩部に波状文、内面底部に指頭圧痕、外面下半に煤付着	
	102			壺	土師					内外面：ナデ、ミガキ	にぶい黄橙色	密、石英・長石含	内外面に赤彩痕残る
	103			直口壺	土師	*10.4				外面：ハケメ→ミガキ 内面：ミガキ	にぶい黄橙色	密	
	104			壺	土師					外面：ミガキ、ナデ 内面：ミガキ、ナデ、ヘラケズリ→ミガキ	にぶい黄橙色	密	頸部に1条の沈線、刺突文、内面に赤彩痕残る
	105			胴部	土師					外面：肩部ハケメ→ナデ、胴部ハケメ→ナデ、ヘラケズリ→ミガキ、ナデ	橙色	密、石英・長石含	肩部に11条の平行沈線、外面肩部に赤彩の痕跡残る
43	106	溝 2	SD 4	甕	土師	*15.2			外面：口縁部ミガキ、ナデ、肩部ハケメ→ナデ、ミガキ、胴部下半ナデ 内面：口縁部ミガキ、ナデ、胴部ヘラケズリ→ミガキ	にぶい黄橙色	密、石英・長石含	肩部に3条の平行沈線、波状文、内面胴部下半に指頭圧痕、外面胴部下半に煤付着、赤彩痕残る	
	107			甕	土師	*12.8			外面：ミガキ、ナデ 内面：ミガキ、ナデ、ヘラケズリ	にぶい黄橙色	密、石英・長石含	外面に煤付着、内面に黒斑	
	108			甕	土師	*12.2			外面：口縁部ミガキ、ナデ、胴部ハケメ→ミガキ 内面：口縁部ミガキ、ナデ、胴部ヘラケズリ→ミガキ	浅黄橙色	密	外面肩部に刺突文、外面に煤付着	
	109			甕	土師	*15.4			外面：口縁部ミガキ、ナデ、肩部ミガキ 内面：口縁部ミガキ、ナデ、胴部ヘラケズリ	灰黄褐色	密、石英・長石含	外面口縁部に煤付着	
	110			甕	土師	*14.0			外面：口縁部ミガキ、ナデ、肩部ハケメ→ナデ、ミガキ、胴部ハケメ→ナデ 内面：口縁部ミガキ、ナデ、胴部ヘラケズリ→ナデ (器面磨滅し不明瞭)	灰黄色	密、石英・長石含	外面胴部に煤付着	
	111			甕	土師	*15.6			外面：ミガキ、ナデ 内面：ミガキ、ナデ、ヘラケズリ	にぶい黄橙色	密、石英・橙色粒含	外面に煤付着	
	112			甕	土師	*16.4			外面：口縁部ミガキ、ナデ、肩部ミガキ 内面：口縁部ミガキ、ナデ、胴部ヘラケズリ	にぶい黄橙色	密	外面に煤付着	
	113			甕	土師	*17.2			外面：ミガキ、ナデ 内面：ナデ (器面磨滅し不明瞭)	浅黄橙色	密、砂粒含	外面に煤付着	
	114			甕	土師	*14.8			外面：口縁部ミガキ、ナデ、肩部ミガキ 内面：口縁部ミガキ、ナデ、胴部ヘラケズリ	灰黄褐色	密、石英・長石含	内外面に煤付着	
	115			甕	土師	*15.0			外面：口縁部ミガキ、ナデ、肩部ハケメ→ナデ、ミガキ 内面：ミガキ、ナデ、ヘラケズリ	黄橙色	密、砂粒含	肩部に波状文、外面に煤付着	
	116			甕	土師	*18.6			外面：ミガキ、ナデ 内面：口縁部ミガキ、ナデ、胴部ヘラケズリ (内外面ともに器面磨滅し不明)	灰白色	密		
	117			甕	土師	*14.0			外面：口縁部ミガキ、ナデ、肩部ハケメ→ミガキ 内面：口縁部ミガキ、ナデ、胴部ヘラケズリ→ミガキ	黄橙色	密、石英少含	4条の波状文、外面に煤付着、赤彩痕残る	
	118			甕	土師	*16.4			外面：口縁部ミガキ、ナデ、肩部ハケメ→ミガキ 内面：口縁部ミガキ、ナデ、胴部ヘラケズリ→ミガキ	にぶい橙色	密	肩部に9～11条の平行沈線、内外面に赤彩痕残る	
	44			119	溝 2	SD 1・4	甕	土師	*18.3			外面：口縁部ミガキ、ナデ、肩部ミハケメ→ナデ、ミガキ 内面：ミガキ、ナデ、ヘラケズリ→ミガキ	にぶい黄橙色
120		甕	土師	*17.4					外面：口縁部ナデ、肩部ハケメ→ナデ 内面：口縁部ナデ、肩部ヘラケズリ (内外面ともに器面磨滅し調整不明瞭)	にぶい黄橙色	密	内外面に煤付着	
121		甕	土師	*18.0					外面：ミガキ、ナデ (器面磨滅し不明瞭) 内面：ミガキ、ナデ、ヘラケズリ	灰白色	密		
122		甕	土師	*18.0					外面：口縁部ミガキ、ナデ、肩部ハケメ→ナデ→ミガキ 内面：口縁部ミガキ、ナデ、胴部ヘラケズリ→ナデ、ミガキ	にぶい橙色	密、石英・長石多含	外面に煤付着	
123		SD 4	甕	土師		*24.3			外面：口縁部ミガキ、ナデ、肩部ハケメ→ミガキ、ナデ、胴部ハケメ→ミガキ 内面：口縁部ミガキ、ナデ、胴部ヘラケズリ	にぶい黄橙色	密、石英・長石含	口縁部に突起、肩部上半に刺突文、8～11条の平行沈線、外面胴部に煤付着	
124			甕	土師		*30.2			外面：口縁部ミガキ、ナデ、肩部ハケメ→ナデ、ミガキ 内面：口縁部ミガキ、ナデ、肩部ヘラケズリ→ミガキ	にぶい黄橙色	密、石英・長石・砂粒含	外面に煤付着	
125			鉢	土師		*28.2			外面：ナデ、ミガキ 内面：ミガキ	橙色	密、石英・長石多含	内外面に赤彩痕残る	
126			高坏	土師		23.6			内外面：ハケメ、ヘラミガキ	褐灰色	密、石英・砂粒含	内外面に赤彩痕残る	
127	高坏	土師	24.2			外面：ハケメ→ナデ、ヘラミガキ 内面：ハケメ→ヘラミガキ	にぶい橙	密、石英・長石含	赤彩				
128	高坏	土師	*23.3			外面：ハケメ→ナデ→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	にぶい黄橙色	密、砂粒含	内面に黒斑				

土器観察表5

挿図 No.	掲載 No.	掲載 遺構名	調査時 遺構名	器種	種類	計測値 (cm)			調 整	色 調	胎 土	備 考
						口径	器高	底径				
44	溝2	SD4		高坏	土師	24.0	15.7	15.1	外面：坏部ハケメ→ヘラミガキ、脚部ハケメ 内面：坏部ヘラミガキ、脚部ナデ、ハケメ	にぶい黄橙色	密	坏部内面に黒斑
				高坏	土師				内外面：ヘラミガキ	浅黄橙色	密	
				高坏	土師	*16.2			外面：ヘラミガキ 内面：ハケメ→ナデ→ヘラミガキ	灰黄色	密、砂粒含	口縁部に煤付着
				高坏	土師	*16.8			内外面：ヘラミガキ	灰黄褐色	密、石英・長石含	
				高坏	土師	*12.4			外面：ヘラミガキ 内面：ハケメ→ヘラミガキ	浅黄橙色	密	外面に黒斑
				高坏	土師	*11.8			外面：ハケメ→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	にぶい黄橙色	密	内外面に赤彩痕残る
				低脚坏	土師	*12.8			外面：ハケメ→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	にぶい黄橙色	密、砂粒含	
				低脚坏	土師			*5.2	内外面：坏部ヘラミガキ、脚部ナデ	にぶい黄橙色	密	内面脚部に赤彩痕残る
				低脚坏	土師			*6.0	外面：ヘラミガキ、ナデ 内面：坏部ヘラミガキ、脚部ナデ	にぶい黄橙色	密、石英含	煤付着
				小型丸底壺	土師	*9.9			外面：口縁部ナデ→ミガキ、ハケメ→ミガキ 内面：口縁部ミガキ、胴部ヘラケズリ→ミガキ	黄橙色	密	外面に赤彩痕残る
				小型器台	土師	10.8	11.6	*12.1	外面：ハケメ→ミガキ 内面：坏部ミガキ、脚部ナデ、ハケメ	にぶい橙色	密、石英・長石・橙色粒含	脚部内面器面磨滅し調整不明
				鼓形器台	土師	*19.8	*12.3	*17.4	外面：上半ナデ→ヘラミガキ、下半ミガキ、ナデ 内面：上半ヘラミガキ、下半ヘラケズリ→ミガキ、端部ナデ (器面磨滅し不明瞭)	にぶい褐色	密、石英・長石少含	内外面に赤彩痕残る
				鼓形器台	土師	*21.6			外面：上半ナデ→ヘラミガキ、下半ミガキ、ナデ 内面：上半ヘラミガキ、下半ヘラケズリ→ミガキ、端部ナデ	にぶい黄橙色	密、石英・長石含	内外面端部に赤彩痕残る
				鼓形器台	土師	*20.0	11.8	*18.2	外面：ナデ→ヘラミガキ 内面：上半ヘラミガキ、下半ヘラケズリ、端部ナデ (内外面ともに器面磨滅し不明瞭)	淡黄色	密、石英・砂粒含	
				鼓形器台	土師	*21.2			外面：ミガキ 内面：上半ミガキ、下半ヘラケズリ	褐灰色	密、石英・長石含	上半に平行沈線、内面に赤彩痕残る
				鼓形器台	土師				外面：ミガキ→ナデ 内面：ヘラケズリ→ナデ、ミガキ、端部ナデ	にぶい黄橙色	密、石英・橙色粒含	内面に黒斑
				鼓形器台	土師	*15.8			外面：ナデ→ミガキ 内面：上半ヘラケズリ→ミガキ、下半ヘラケズリ、端部ナデ	にぶい黄橙色	密、石英・長石・橙色粒含	内面に赤彩痕残る
鼓形器台	土師			*18.6	外面：ハケメ→ナデ 内面：上半ヘラミガキ、下半ヘラケズリ→ナデ、ミガキ	にぶい黄橙色	密、石英・長石含	内外面に赤彩痕残る				
鼓形器台	土師				外面：ナデ、ミガキ 内面：ケズリ→ナデ、端部ナデ	黄橙色	密、石英・長石含	内外面に煤付着、外面に赤彩痕残る				
46	溝4	SD88	甕	土師	*14.0			外面：口縁部ミガキ、ナデ、肩部ハケメ→ナデ、ミガキ 内面：口縁部ナデ、肩部ヘラケズリ→ナデ	にぶい黄橙色	密	内面に黒斑、外面に赤彩痕残る	
		SD88・94	高坏	土師	17.6	15.4	*11.0	外面：ナデ→ヘラミガキ、脚部面取り→ミガキ (器面磨滅し不明瞭) 内面：坏部ナデ、ナデ→ヘラミガキ、脚部シボリ、多角形状のハケメ、端部ナデ	橙色	密、石英多含	口縁部に2条の沈線	
	溝5	SD96	甕	土師	*14.3			外面：口縁部：ハケメ→ナデ、肩部ハケメ→ナデ 内面：口縁部ハケメ→ナデ、胴部ヘラケズリ	浅黄橙色	密、石英・長石・橙色粒多含	口縁部に刺突文、外面に煤付着	
		SD96・SK9	甕	土師	*15.0			外面：口縁部ナデ、肩部ハケメ→ナデ、胴部ハケメ 内面：口縁部ナデ、胴部ヘラケズリ (内外面ともに器面磨滅し不明瞭)	灰白色	密、石英多含		
			高坏	土師	*17.8			内外面：ハケメ→ヘラミガキ	にぶい浅黄橙色	密、石英少含	外面に煤付着、内外面に赤彩痕残る	
			手捏ね	土師	*9.1	5.1		外面：ハケメ→ナデ 内面：ナデ、ミガキ	灰褐色	密、砂粒少含	口縁部にヘラ描沈線文	
			短頸壺	須恵	*7.9			内外面：ヨコナデ	灰色	密	外面に自然釉がかかる	
			甗	土師	*21.0		8.0	外面：ハケメ→ヘラミガキ、ナデ 内面：ヘラケズリ→ミガキ、ナデ	橙色	密、石英・長石多含		
	甗	土師				外面：条痕→ナデ 内面：ヘラケズリ	明赤褐色	密、長石・礫含	外面に煤付着			
47	溝7	SD95	低脚坏	土師	*14.0	3.9	4.0	内外面：ヘラミガキ、脚部ナデ	橙色	密	赤彩	
		SD90・95	坏身	須恵				外面：ヨコナデ、底部回転ヘラケズリ 内面：ヨコナデ、底部仕上げナデ	灰白色	密	焼成不良	
			坏身	須恵				内外面：ヨコナデ	灰色	密	外面に自然釉がかかる	

土器観察表 6

挿図 No.	掲載 No.	掲載 遺構名	調査時 遺構名	器種	種類	計測値 (cm)			調 整	色 調	胎 土	備 考
						口径	器高	底径				
48	160	溝 8	SD92	甕	土師	16.4	28.6		外面：口縁部ナデ、肩部～底部ハケメ→ナデ 内面：口縁部ナデ、胴部ハラケズリ (内外面ともに器面磨減し調整不明瞭)	にぶい 橙色	密、石英・長 石含	外面胴部に煤付着
	161			甕	土師	*14.0			内外面ともに器面磨減し調整不明	橙色	密、石英含	外面に煤付着
	162			高坏	土師				外面：ハケメ→ハラミガキ 内面：坏部ハラミガキ、脚部ハラケズリ	浅黄橙 色	密、石英・長 石少含	
	163			脚付椀	土師	*13.8	8.5	8.3	外面：ハケメ→ハラミガキ 内面：ハラミガキ、脚部ナデ	赤褐色	密、砂粒僅含	赤彩
	164			羽釜	土師				外面：ナデ	橙色	密、砂粒含	外面に煤付着
	165			坏蓋	須恵	*13.7			内外面：ヨコナデ	灰色	密、長石含	
	166			坏身	須恵	*11.7	5.0		外面：ヨコナデ、底部回転ハラケズリ、 ナデ 内面：ヨコナデ、底部仕上げナデ (内外面ともに器面磨減し調整不明瞭)	灰色	密、長石少含	右回転のロクロ、焼成不良
	167			皿	土師	*14.1			内外面：ナデ	浅黄橙 色	密	赤彩
168	溝10	SD93	甕	土師	*12.0			外面：口縁部ナデ、肩部ハケメ→ナデ (器面磨減し不明瞭) 内面：口縁部ナデ、胴部ハラケズリ	にぶい 黄橙色	密、石英多含	外面肩部に煤付着、内面に赤 彩痕残る	
49	169	溝11	SD91	甕	土師	*13.7			内外面：ミガキ、ナデ	明黄褐 色	密	内外面に煤付着
	170			甕	土師	*14.3			内外面：ミガキ、ナデ (器面磨減し調整 不明瞭)	にぶい 橙色	密、石英・長 石含	
	171			甕	土師				内外面：ミガキ、ナデ	浅黄橙 色	密	
	172			高坏	須恵				内外面：ヨコナデ	暗青灰 色	密、長石少含	脚部に2方向以上の透かし穴
50	173	畦畔	水田	甕	弥生			外面：条痕→ナデ、ハラミガキ 内面：ナデ、ハラミガキ	明赤褐 色	密、石英・長 石多含		
51	174	遺構外	黒褐色 土	甕	土師	*16.0			外面：口縁部ナデ、頸部ハケメ→ナデ 内面：口縁部ナデ、肩部ハラケズリ→ハ ラミガキ	浅黄橙 色	密、砂粒含	内面に赤彩痕残る
	175		遺構外	甕	土師	*14.5			外面：口縁部ミガキ、ナデ 内面：口縁部ミガキ、ナデ、胴部ハラケ ズリ→ミガキ	浅黄橙 色	密	
	176		甕	土師	*14.0			外面：口縁部ミガキ、ナデ、肩部ハケメ →ミガキ 内面：口縁部ミガキ、ナデ、胴部ハラケ ズリ→ミガキ	にぶい 黄褐色	密、石英・長 石含	外面に煤付着	
	177		耕作溝 SD69	甕	土師	*14.7			外面：ミガキ、ナデ 内面：口縁部ナデ、胴部ハラケズリ (器面磨減し不明瞭)		密	外面に煤付着し、色調不明
	178		耕作溝 SD77	甕	土師				外面：ミガキ、ナデ 内面：口縁部ミガキ、ナデ、胴部ハラケ ズリ (内外面ともに器面磨減し調整不明瞭)	にぶい 黄橙色	密、砂粒少含	
	179		甕	土師	*13.0			内外面：ミガキ、ナデ	明赤褐 色	密、石英少含		
	180		甕	土師				内外面：ミガキ、ナデ	橙色	密		
	181		耕作土	甕	土師	*15.6			内外面：ミガキ、ナデ	にぶい 黄褐色	密	
	182		耕作土	甕	土師	*14.0			内外面：ミガキ、ナデ	黒褐色	密、石英・長 石含	内外面に煤付着
	183		甕	土師	*16.8			内面：胴部ケズリ (内外面ともに器面磨 減し不明)	淡黄色	密、石英・長 石多含		
	184		甕	土師	*13.2			外面：ミガキ、ナデ 内面：口縁部ミガキ、ナデ、胴部ハラケ ズリ	浅黄橙 色	密、石英少含		
	185		耕作土	甕	土師	*14.4			外面：口縁部ナデ 内面：ナデ、ミガキ、胴部ハラケズリ	橙色	密、石英・長 石含	外面に煤付着
	186		甕	土師				外面：ミガキ、ナデ 内面：口縁部ミガキ、ナデ、胴部ハラケ ズリ	黒色	密	外面に煤付着	
	187		高坏	土師	*23.6			内外面ともに器面磨減し調整不明	赤橙色	密		
188	高坏	土師	*18.4			内外面：ハラミガキ	にぶい 赤褐色	密	内外面に赤彩痕残る			
189	遺構外	小型 丸底壺	土師	*9.0			外面：口縁部ハケメ→ナデ→ミガキ、胴 部ハケメ→ミガキ 内面：口縁部ナデ、ミガキ、胴部ハラケ ズリ	にぶい 黄橙色	密			
190	遺構外	坏身	須恵	*11.8			外面：ヨコナデ、底部回転ハラケズリ 内面：ヨコナデ、底部仕上げナデ	灰色	密、石英・長 石含	右回転のロクロ		
191	耕作土	坏身	須恵	*16.6			内外面：ヨコナデ	灰色	密			



土器観察表7

挿図 No.	掲載 No.	掲載遺構名	調査時遺構名	器種	種類	計測値 (cm)			調整	色調	胎土	備考		
						口径	器高	底径						
51	192	遺構外	SD1	短頸壺	須恵	*9.7			内外面：ヨコナデ	灰色	密	外面に自然釉がかかる		
	193		SD4	甕	須恵				外面：タタキ 内面：当具痕	赤灰色	密	外面に自然釉がかかる		
	194		耕作溝	竈	土師				外面：ハケメ、ナデ 内面：ヘラケズリ	にぶい黄橙色	密、石英少含	外面に赤彩痕残る		
61	195	土坑11	SK2	皿	土師				内外面：ヨコナデ	浅黄橙色	密	底部糸切り		
	196			鍋	瓦質				内外面：ヨコナデ	灰色	密			
63	197	墓1	集石1	碗	磁器			*4.7		灰白色	密	内外面に浅黄色釉がかかる		
64	198	墓2	SX1	皿	土師	7.1	1.7	4.6	内外面：ヨコナデ	橙色	密、橙色粒含	底部回転糸切り		
	199			椀	土師	14.4	4.3	9.1	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ、底部仕上げナデ	灰白色	密	内外面に煤付着、底部回転糸切り		
65	200	墓3	SX2	皿	土師			*7.0	内外面：ヨコナデ	にぶい黄橙色	密	底部回転糸切り		
67	201	溝12	SD1	坏	土師	*11.0			*6.9	内外面：ナデ	にぶい黄橙色	密	底部押圧、赤彩	
	202			皿	土師					内外面：ナデ、ヘラミガキ	にぶい黄橙色	密、砂粒含	赤彩	
	203			甕	土師	*35.8				外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、胴部ヘラケズリ (内外面ともに器面磨滅し調整不明瞭)	にぶい黄橙色	密、石英・長石・赤色粒・雲母多含	外面に煤付着	
	204			壺	土師	*25.9					内外面：ハケメ→ナデ、ミガキ	浅黄色	密、石英・長石・橙色粒含	
	205			碗	磁器						内外面：ヨコナデ	灰白色	密	内外面に白色釉がかかる
	206			碗	磁器					*2.9	外面：ヘラケズリ	にぶい黄橙	密	内外面に緑色釉がかかる
68	207	溝13	SD90	坏	土師				*8.6	内外面：ナデ	淡黄色	密	底部押圧、ヘラ切り後ナデ、赤彩、外面に黒斑	
	208			坏	土師				*6.0	内外面：ナデ	橙色	密	底部押圧、ヘラ切り、赤彩	
	209			脚付椀	土師						外面：ヘラミガキ（器面磨滅し調整不明瞭） 内面：ヘラミガキ、脚部ナデ	明黄褐色	密、石英・砂粒含	外面に赤彩痕残る
	210			鍋	土師						外面：ナデ、ミガキ 内面：ケズリ→ナデ、ミガキ	橙色	密、石英・長石多含	
	211			甕	土師						内外面：ミガキ、ナデ	橙色	密、石英少含	
	212			坏身	須恵	*11.6					内外面：ヨコナデ	灰色	密	
69	213	溝14	SD5	灯明皿	磁器	*8.4	*1.7	*4.7	内外面：ヨコナデ	明赤灰色	密	底部回転糸切り、内面に暗赤灰色釉がかかる		
	214			灯明皿	磁器	*11.0			外面：ヨコナデ、底部回転ヘラケズリ 内面：ヨコナデ	灰赤色	密	内面に赤黒色釉がかかる		
	215			碗	磁器	*10.4				内外面：ヨコナデ	浅黄橙色	密	内外面ともに灰白色釉がかかる	
	216			播鉢	備前					内外面：ヨコナデ	灰赤色	密	櫛描放射状線、Ⅳ期	
	217			播鉢	備前					内外面：ヨコナデ	橙色	密	櫛描放射状線、Ⅴ期	
70	218	溝15	SD6	坏	土師	*11.9		7.2	外面：器面が風化し調整不明瞭 内面：ナデ	灰白色	密、石英・橙色粒少含	底部ヘラ切り		
	219			甕	土師				外面：ミガキ、ナデ 内面：ハケメ→ミガキ、ナデ	橙色	密、石英・長石・雲母少含			
	220			甕	須恵				外面：格子タタキ→ハケメ 内面：ハケメ	灰色	密			
	221			甕	須恵				外面：格子タタキ→ハケメ 内面：ハケメ	灰色	密、長石・灰色粒含			
79	222	遺構外	SI1	坏	土師	*11.5	3.6	*7.6	内外面：ナデ	にぶい黄橙色	密	底部押圧、赤彩		
	223		拡張区・耕作溝	坏	土師	*11.8	3.7	7.5	内外面：ナデ	明赤褐色	密、石英・長石含	底部押圧、ヘラ切り、板目痕残る、赤彩		
	224		坏	土師				*14.0	内外面：ナデ	にぶい黄橙色	密	赤彩		
	225		坏	土師				*8.6	外面：ナデ、底部ヘラケズリ 内面：ナデ	にぶい黄橙色	密	底部押圧、赤彩		
	226		皿	土師				*7	内外面：ヨコナデ	明赤褐色	密	底部回転糸切り		
	227		皿	土師				*4.5	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ、底部仕上げナデ	浅黄橙色	密	底部回転糸切り、内外面に赤彩痕残る		

## 土器観察表 8

挿図 No.	掲載 No.	掲載 遺構名	調査時 遺構名	器種	種類	計測値 (cm)			調整	色調	胎土	備考
						口径	器高	底径				
79	228	遺構外	耕作溝 SD75	高台	土師			*5.1	外面：ナデ 内面：ヘラミガキ	にぶい 黄褐色	密	内面に暗文、赤彩
	229			高台	土師			*8.8	外面：ナデ 内面：ヘラミガキ	にぶい 橙色	密	赤彩
	230		耕作土	高台	土師			*6.0	外面：ナデ 内面：器面磨減し調整不明	浅黄橙 色	密	外面に赤彩痕残る
	231		耕作土	高台	土師			*7.2	外面：ナデ 内面：ヘラミガキ	にぶい 黄褐色	密	赤彩
	232		耕作土	甕	土師	*31.2			外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、胴部ヘラケズリ	にぶい 黄褐色	密、砂粒少含	外面に煤付着
	233			甕	土師				内外面：ナデ	黒色	密	外面に煤付着
	234			短頸壺	土師	*8.6			内外面：ナデ	明赤褐 色	密	赤彩
	235			高坏	土師				外面：ケズリ 内面：坏部ヘラミガキ	浅黄橙 色	密	赤彩
	236		耕作溝 SD79	坏	須恵			*9.9	内外面：ヨコナデ	暗青灰 色	密、砂粒少含	底部回転糸切り
	237			壺	須恵				外面：ヨコナデ 内面：ナデ	灰白色	密	内外面に自然釉がかかる
	238			甕	須恵				外面：格子タタキ 内面：ナデ	灰色	密	内外面に自然釉がかかる
	239			壺	須恵			*8.6	内外面：ヨコナデ	灰色	密	
	240		遺構外	皿	青磁					オリ ブ灰	緻密	オリブ緑色の釉がかかる
241		P12	鍋	瓦質				内外面：ナデ	黒褐色	密		

## 土製品観察表

挿図 No.	掲載 No.	掲載 遺構名	調査時 遺構名	器種	計測値 (cm)				重量 (g)	色調	胎土	備考
					最大長	最大幅	最大厚	孔径				
21	C 1	住居 4	SI 1	羽口						灰白色	密、砂粒少含	外面にガラス質付着
23	C 2	住居 5	SI 2	羽口		7.2		3.5		灰黄褐色	密、長石・橙色粒少含	外面に鉄・ガラス質付着
51	C 3	遺構外		土玉	2.9	2.6	2.6	0.6	22.0		密	赤彩
	C 4		黒褐色土	羽口						灰黄褐色	密、長石・橙色粒含	外面にガラス質付着

## 金属製品観察表

挿図 No.	掲載 No.	掲載 遺構名	調査時 遺構名	器種	計測値 (cm)			重量 (g)	材質	備考
					最大長	外/内径	最大厚			
63	M 1	墓 1	集石 1・ SD 5	釘					鉄	錆により石が付着する
	M 2			銭		2.4/2.1	0.1	2.9	銅	永楽通寶

石器観察表

挿図 No.	掲載 No.	掲 載 遺構名	調 査 時 遺 構 名	器 種	計 測 値 (cm)			重 量 (g)	材 質	備 考
					最大長	外/内径	最大厚			
10	S1	住居1	SI6	磨製石包丁	4.0	7.1	0.4	19.6	砂質粘板岩	刃部に光沢あり
12	S2	住居2	SI8	敲石	8.7	8.9	4.2	474.0	角閃石安山岩	
	S3			敲石	22.4	6.9	4.2	1098.0	角閃石安山岩	
	S4			敲石	15.8	7.4	4.5	685.0	角閃石安山岩	
	S5			台石	25.1	19.5	5.9	4580.0	角閃石安山岩	
	S6			石鍬		13.9	1.9		板状安山岩	刃部に磨滅顕著
13	S7	住居3	SI5	石鏝	2.5	1.3	0.4	1.0	安山岩	凹基式
14	S8		SI5・6	打製石斧	23.6	9.7	3.7	957.9	板状安山岩	片面に被熱の痕跡あり
15	S9	建物1	SB6	スクレイパー	2.9	4.1	1.3	7.4	黒曜石	
18	S10	遺構外		石鏝	1.9	1.5	0.4	0.5	黒曜石	凹基式
23	S11	住居5	SI2	敲石	17.6	7.5	5.1	951.0	角閃石安山岩	
	S12			磨石	18.0	11.3	1.8	562.0	板状安山岩	
27	S13	住居7	SI3	敲石	16.0	6.0	4.8	704.0	角閃石安山岩	
	S14			敲石	15.7	6.6	5.3	758.0	角閃石安山岩	
	S15			敲石	17.5	7.3	5.3	925.0	角閃石安山岩	
	S16			敲石	14.5	7.2	4.0	675.0	角閃石安山岩	
	S17			敲石	16.3	7.4	4.2	697.0	角閃石安山岩	
	S18			敲石	10.2	4.9	2.4	170.0	角閃石安山岩	
	S19			敲石	5.8	6.0	3.0	142.0	角閃石安山岩	
	S20			台石	22.5	15.3	11.3	5700.0	角閃石安山岩	
28	S21	住居8	SI4	敲石	16.4	7.0	4.5	814.0	角閃石安山岩	
46	S22	溝4	SD88	石鏝			0.4		安山岩	凹基式
47	S23	溝7	SD90・95	敲石	12.3	4.6		280.0	細粒花崗岩	
48	S24	溝8	SD92	敲石	15.7	8.5	4.4	657.0	角閃石安山岩	被熱の痕跡あり
63	S25	墓2	SX1	敲石	7.4	7.3	3.2	232.0	細粒花崗岩	
68	S26	溝13	SD90	敲石	18.8	6.7	4.9	723.0	細粒花崗岩	
69	S27	溝14	SD5	砥石	12.1	4.5	2.5	162.0	流紋岩質凝灰岩	
	S28			砥石	8.2	5.9	8.0	62.0	流紋岩	
	S29			磨石	8.0	4.3	4.5	219.0	細粒花崗岩	
	S30			砥石	9.1	6.4	5.9	553.0	流紋岩質凝灰岩	

## 第4章 三保第1遺跡

### 第1節 調査の概要

#### 1. 遺跡の概要

三保第1遺跡は、鳥取県東伯郡琴浦町大字三保一本木に存在する。当地域は琴浦町東部を北流する加勢蛇川と洗川によって形成された広大な扇状地上にあり、遺跡は洗川中流域の東岸に位置している。上伊勢第1遺跡からは西方約1kmの場所にある。

調査区は標高約38.8～39.5mの平坦地にあり、周囲は集落や水田、耕作地に囲まれている。調査前の状況は、圃場整備による造成が行われており、水田および芝畑として利用されていた。

当遺跡では弥生時代前期から古墳時代中期にかけての遺構面を確認し、竪穴住居2棟、集石8基、土坑8基、溝6条を検出した。

旧東伯町教育委員会の試掘トレンチ調査の成果を踏まえ、上層の黒灰色土、赤褐色砂質土は重機で



第1図 三保第1遺跡位置図

除去し、その下の暗褐色土上面を遺構面として検出作業をすることにした。1・2区については未買地があったため、3・4区の調査から始めることにした。なお、4区については、調査区の範囲と試掘トレンチが重なっており、また洗川の氾濫によるものと考えられる砂層の堆積しか認められず、遺構・遺物の分布が見込めないことから、試掘トレンチ内の精査をもって調査を終了することにした。



写真図版1 4区調査風景

4月20日から調査を開始し、3区からは土坑1基を検出した。試掘トレンチにおいて竪穴住居1棟が確認されており、また暗褐色土より2層下の暗褐色土上面で遺構面が存在することも確認した。このため、2面調査として発掘を行うことになった。4月26日～30日には、未買地であった1・2区の表土剥ぎを行い、調査に着手した。また、3区が当初の計画よりも狭かったことが判明したため拡張することになり、3区拡張部分の表土剥ぎも行った。この間危険を伴うことから作業員の稼働を中止した。5月6日から調査を再開し、各調査区壁際にトレンチを入れて遺構面の確認を行った。2区の表土除去中において、赤褐色砂質土と暗褐色土の間に植物もしくは生痕を検出した。

1区第1遺構面からは竪穴住居1、溝1、2を検出した。第2遺構面での遺構・遺物は確認されなかった。3区第1遺構面で竪穴住居2を検出し、第2遺構面では集石群を検出した。

2区は5月20日から調査に着手し、第1遺構面から溝4条、土坑5期、集石1基を確認した。6月24日より第2遺構面検出の掘り下げを行い、集石1基、土坑3基を確認した。6月30日には全ての調査を終了した。

なお、6月4日には東伯小学校の児童が遺跡見学に訪れた。遺跡の説明を聞いたほか、実際に遺物に触れたり、遺構を間近で見たりした。本発掘調査が今後の児童の、歴史学習において興味や関心を深めるための一助となれば幸いである。



写真図版2 東伯小学校児童見学風景

本報告書中では調査時の遺構名を変更して掲載している。新旧遺構名の対照については表1に示すとおりである。

(浅田康行)

表1 新旧遺構対照表

新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名
竪穴住居1	SI2	土坑7	SK1	集石8	集石7
竪穴住居2	SI1	土坑8	SK9	溝1	SD1
土坑1	SK3	集石1	集石8	溝2	SD7
土坑2	SK8	集石2	集石4	溝3	SD5・6
土坑3	SK7	集石3	集石6	溝4	SD2
土坑4	SK2	集石4	集石5	溝5	SD3
土坑5	SK5	集石5	集石3	溝6	SD4
土坑6	SK6	集石6・7	集石1・2	—	—



2. 基本層序 (第2～4図)

遺跡内の埋土の堆積状況は第3・4図に示すとおりである。1～3区までの堆積状況はほぼ共通している。4区は洗川による氾濫の影響を受けているものと思われ、砂層が厚く堆積している。

調査区の堆積状況は黒灰色土および青灰色砂質土が堆積し、その下に赤褐色砂質土がある。ここまでの層をI層として扱った。その下には大山北麓に広く分布する黒ボク層があり、さらにその下には明黄褐色を呈する弥山軽石層が堆積する。黒ボクは3層に分層でき、上から順に暗褐色土、黒褐色土、暗褐色土の順に堆積する。また、黒ボク層と弥山軽石層の間には暗褐色土と弥山軽石層との中間にあたる暗黄褐色土(漸移層)がある。主要層の堆積状況や各層の性質は、上伊勢第1遺跡や昨年度調査された中尾第1遺跡と類似している。

暗褐色土上面を第一遺構面(古墳時代中期)とし、暗褐色土上面を第二遺構面(弥生時代前期)とした。調査区内の最終遺構確認面は暗褐色土上面である。

主要堆積層の概要は以下のとおりである。

I層：1層は黒灰色土で、現代の耕作土である。平均して50cmほどの厚さである。古墳時代中期の土師器を多く包含する。

2～3層は赤灰色砂質土、赤褐色砂質土であり、耕作土に対応する床土と考えられる。10cm前後の堆積で、しまりはとてもよくきめは粗い。土師器を包含する。

II層：黒ボク層であり、3層に分層できる。

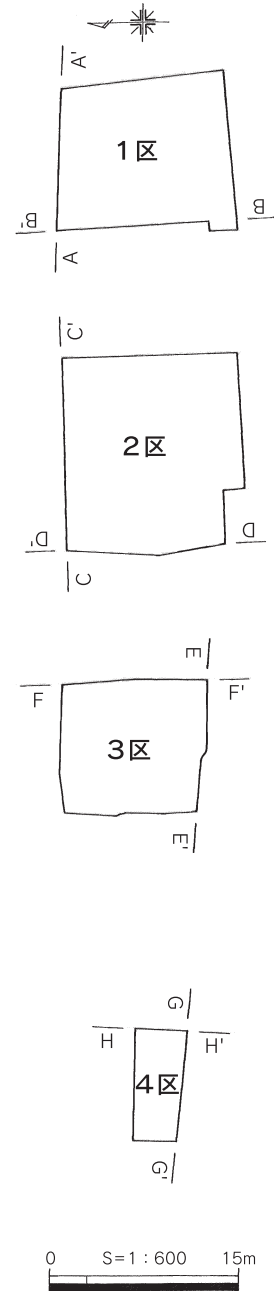
4層は暗褐色土であり、30cm程度の堆積である。上面は後世の耕作による削平を受けており、本来はもう少し厚く堆積していたものと考えられる。この層は1mm以下の白色粒子を含み、炭化物がわずかに混じる。古墳時代中期の遺構面であり、上面から竪穴住居や土坑、溝を検出した。弥生土器片や黒曜石剥片をわずかに包含する。

5層は黒褐色土で、40cm程度の堆積である。粘質が強く、黒ボク層の中で最も黒味が強い。弥生土器を多く包含し、炭化物がわずかに混じる。弥生時代前期の包含層である。わずかではあるが縄文土器を含む。

6層は暗褐色土で、平均して40cm前後の厚さである。当遺跡における基盤層であり、弥生時代前期の遺構面である。上面から集石群や土坑を検出した。

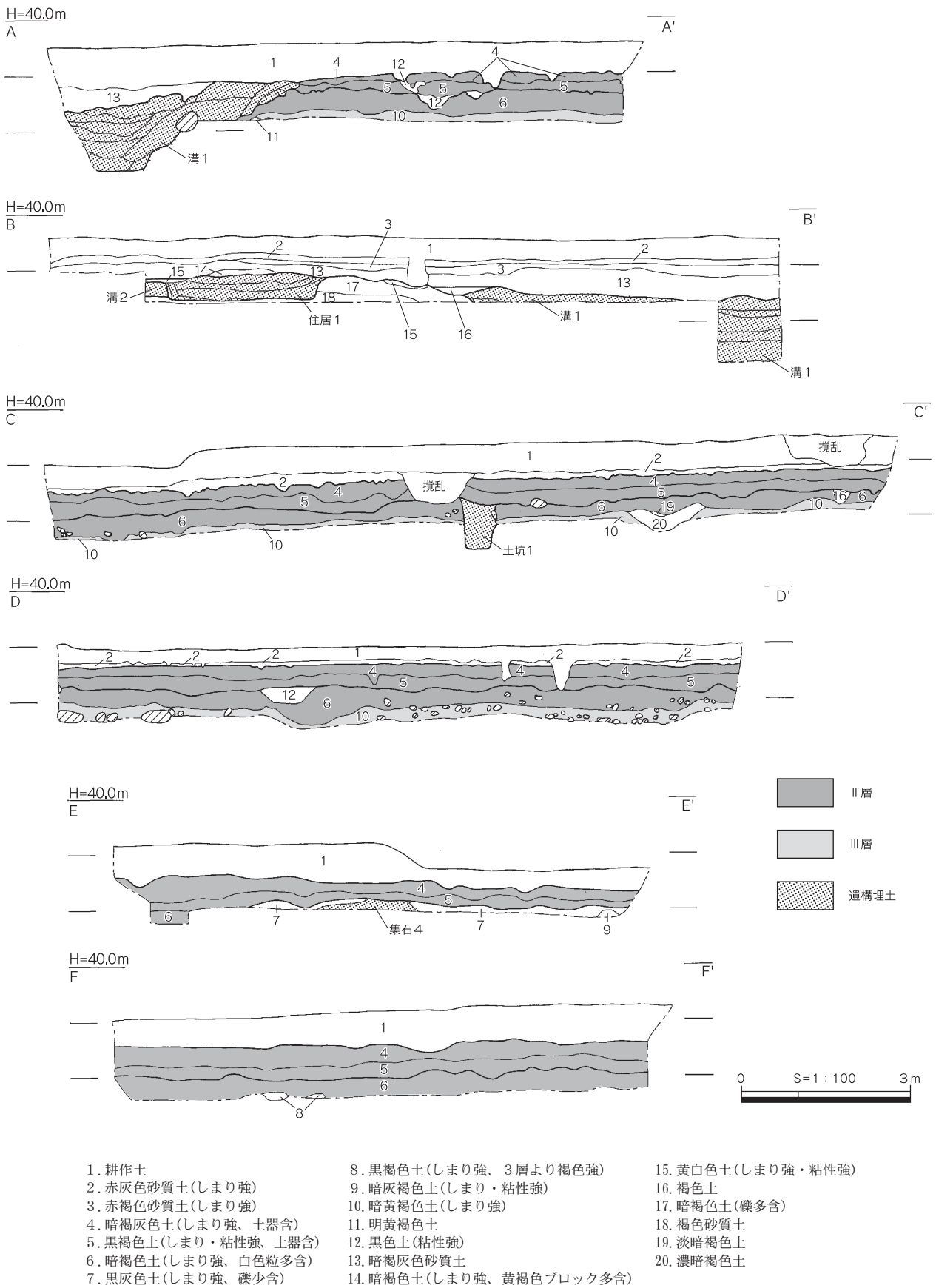
III層：10層は暗黄褐色土で、20cm前後の堆積である。暗褐色土と弥山軽石層に対する漸移層である。しまりがよく、明黄褐色土ブロックが少し混じる。5～10cmの礫を少し含む。

IV層：11層は明黄褐色土で、弥山軽石層である。しまりがよく、10～20cm大の礫を多く含む。

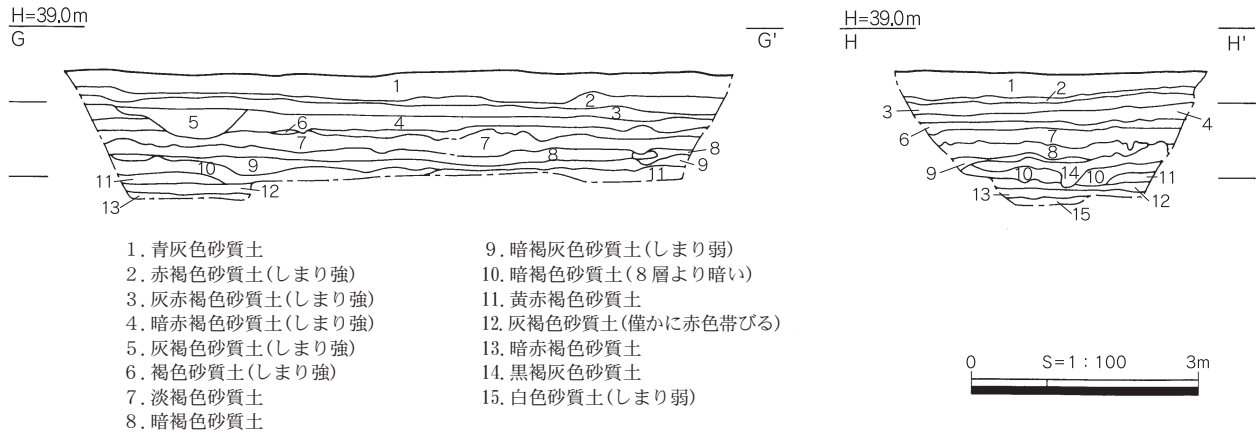


第2図 土層断面位置図

(浅田)



第3図 1～3区土層断面図



第4図 4区土層断面図

## 第2節 縄文時代の遺物

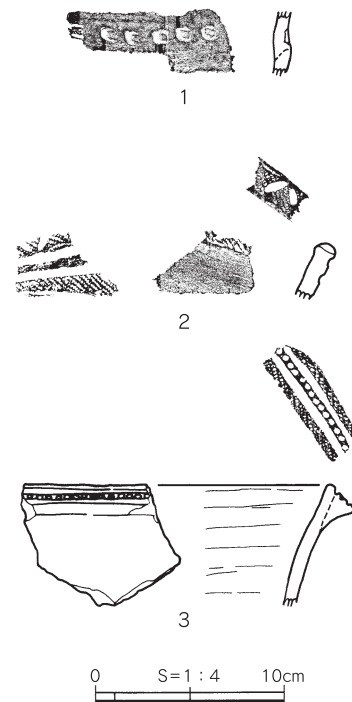
### 1. 概要

1～3区で数点の縄文時代中期から後期前葉にかけての土器が出土している。いずれも弥生時代の包含層である黒褐色土からの出土であり、多数の弥生時代前期の土器に混じて出土した。

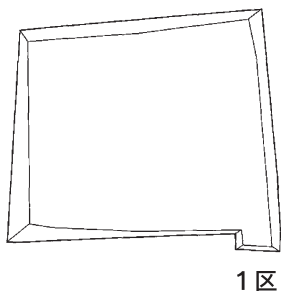
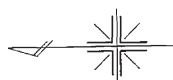
調査時において、暗褐色土以下の層については各区にトレンチを入れることにより、遺構・遺物を包含しないことが確認できた。よって、暗褐色土上面を最終遺構確認面として扱った。しかし、今回の調査では遺構を検出することはできなかったものの、わずかではあるが縄文土器が出土している。このことから、暗褐色土上面において、縄文時代中期～後期の遺構面でもあった可能性が考えられ、調査区外に縄文時代の遺構が存在することが十分に予想される。(浅田)

### 2. 遺構に伴わない遺物(第5図、PL.38・40・41)

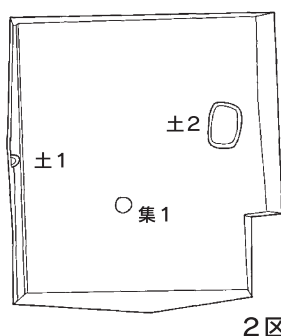
1は3区からの出土で、鉢の胴部と思われる。内外面ともにナデを施す。外面にはナデ後に竹管による刺突文を施す。船元式の範疇に収まるもので、縄文時代中期に相当する。2は1区からの出土である。深鉢の口縁部で、波状口縁をなすものと思われる。口唇部や口縁部外面には縄文後に沈線文を施す。内面は口縁部上端まで縄文が及んでいる。下端はヘラミガキを施す。布勢式に属するもので、縄文時代後期前葉のものである。3は2区からの出土で、深鉢の口縁部である。外面を肥厚させわずかに外反する。口唇部分に2条の沈線を施す。沈線間には刺突文、その外側には縄文を施す。内面は板状工具によるナデを施す。縄文時代後期前葉のものである。(浅田)



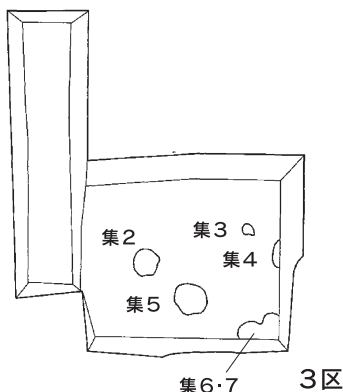
第5図 縄文時代遺構外出土遺物



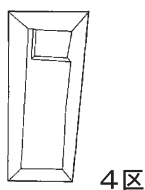
1区



2区



3区



4区



第6図 弥生時代遺構配置図

### 第3節 弥生時代の遺構・遺物

#### 1. 概要

遺構は暗褐色土上面で検出し、土坑2基、集石7基を調査した。遺物は1～3区においておもに黒褐色土から出土している。1区においては、遺物が1点出土したのみで遺構は検出されなかった。また、4区においては包含層が存在せず、遺物・遺構ともに皆無であった。(浅田)

#### 2. 土坑

##### 土坑1 (第7図、PL.28)

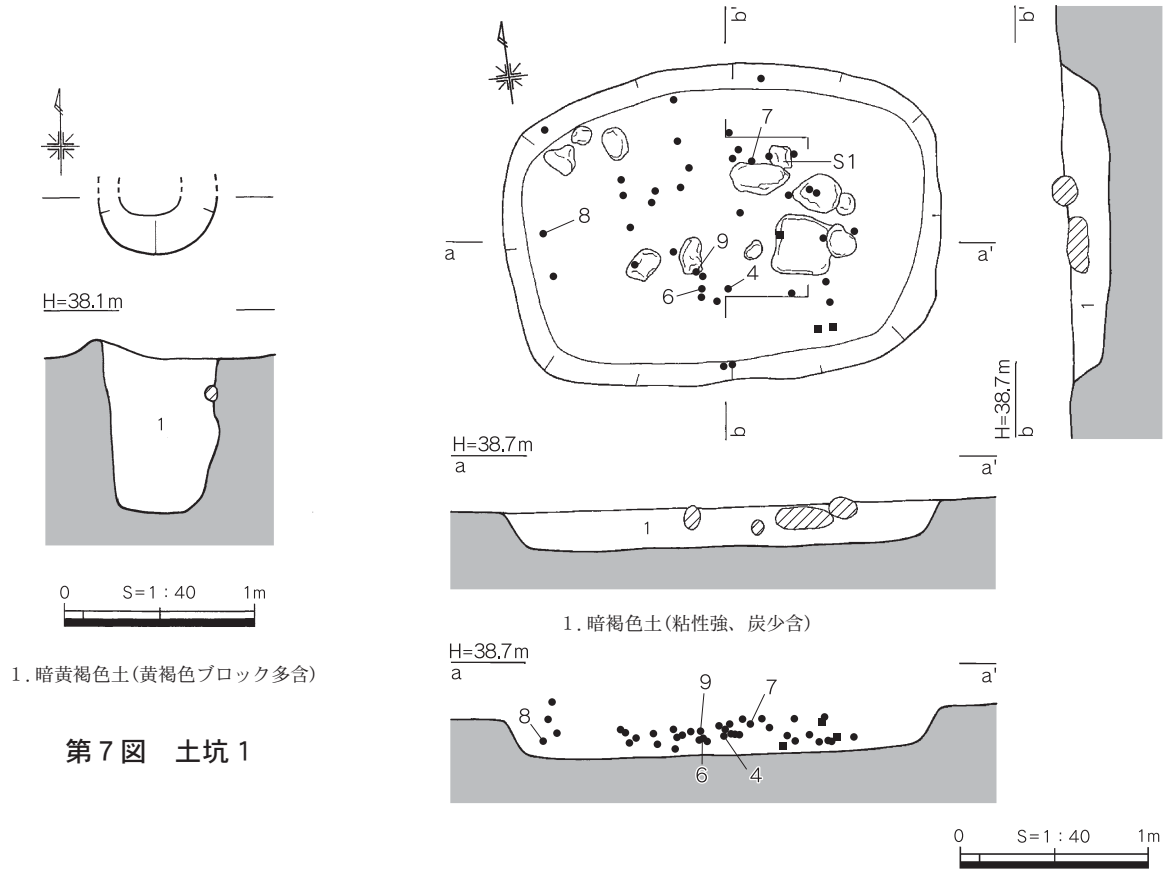
2区の北端にあり、サブトレンチ掘り下げ中に検出した。調査区境にあるため、南側半分の検出である。北側は調査区外へ続いている。平面形は、検出した部分の形状から円形を呈するものと思われる。規模は直径64cmを測る。検出面からの深さは最大41cmを測る。断面は「U」字状を呈し、壁面はわずかに外側に傾斜して立ち上がる。形状から落とし穴が考えられるが、詳細は不明である。

本遺構の時期については、遺物が出土しなかったため詳細な時代を特定することはできないが、掘り込み面が弥生時代前期の遺構面であるため、本遺構の時期もこれに相当するものと思われる。

##### 土坑2 (第8図、PL.28・34)

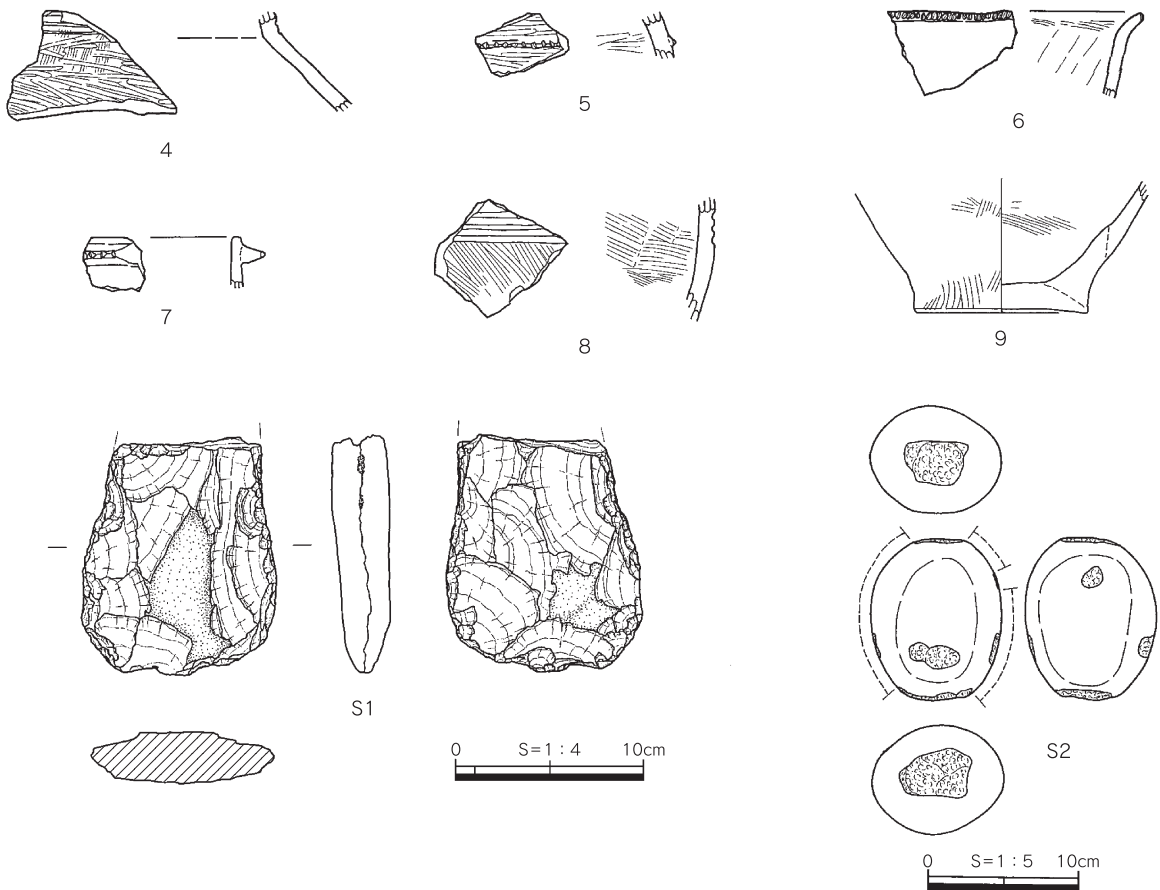
2区の南側に位置する。黒褐色土の除去後に検出した。平面形は方形を呈し、規模は長辺2.0m、短辺1.2mを測る。底面はほぼ平坦で、壁面はわずかに外側に傾斜して立ち上がる。検出面からの深さは最大で19.6cmである。埋土は暗褐色土の単層で、粒状の炭化物を含む。中央やや東よりに径約10～30cmの礫が比較的まとまって検出され、そこを中心に甕の底部9や壺の胴部、鉢の口縁部等多数の土器片が出土した。礫に混じり、石鍬S1、敲石S2や黒曜石も出土している。

礫には人為的に組まれた形跡は見られないが、ある程度のまとまりをもって検出されていること、埋土に粒状の炭化物がみられること、平面形が方形であることから埋葬施設の可



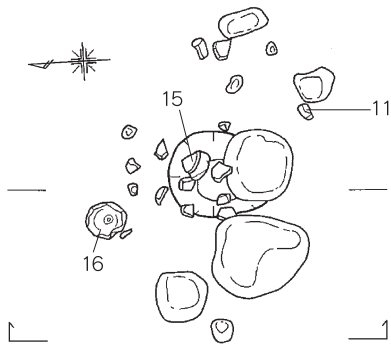
1. 暗黄褐色土(黄褐色ブロック多含)

第7図 土坑1

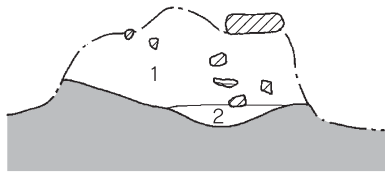


第8図 土坑2・出土遺物

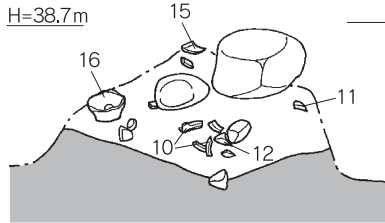




H=38.7m

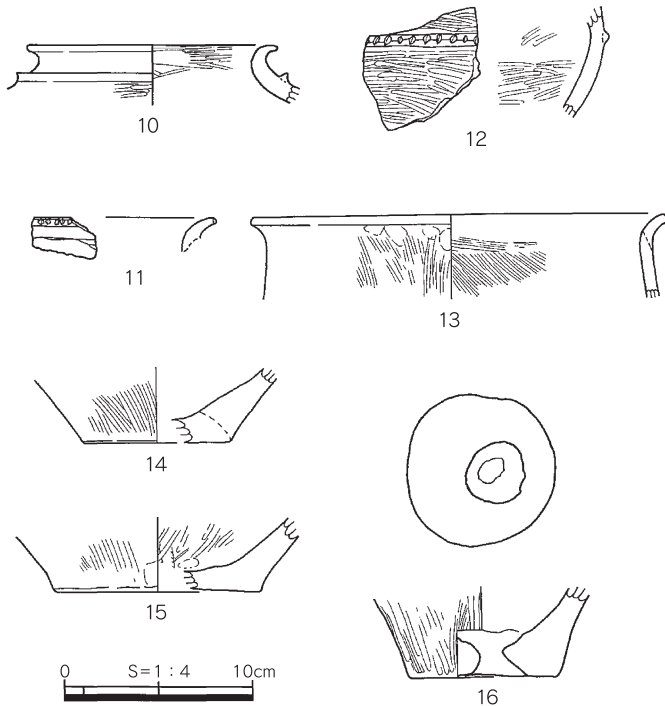


H=38.7m



0 S=1:20 50cm

- 1. 黒褐色土(砂粒・炭少含)
- 2. 黒褐色土(砂粒僅含、1層より暗い)



第9図 集石1・出土遺物

能性が考えられる。

出土遺物は弥生土器や石器などが出土した。4・5は壺の胴部である。4は沈線を3条施す。外面ハケメ後ヘラミガキ、内面はナデを施す。5は外面に刻目のある貼付突帯を施す。6～9は甕である。6は口唇部に刻目を施す。7は口縁部に断面三角形の刻目のある貼付突帯を施すものである。8は頸部にナデ後に3条以上の沈線を施す。これらの遺物はおおむね清水編年のI-3期のものである。

本遺構の時期は出土遺物から、弥生時代前期後葉と考えられる。(浅田)

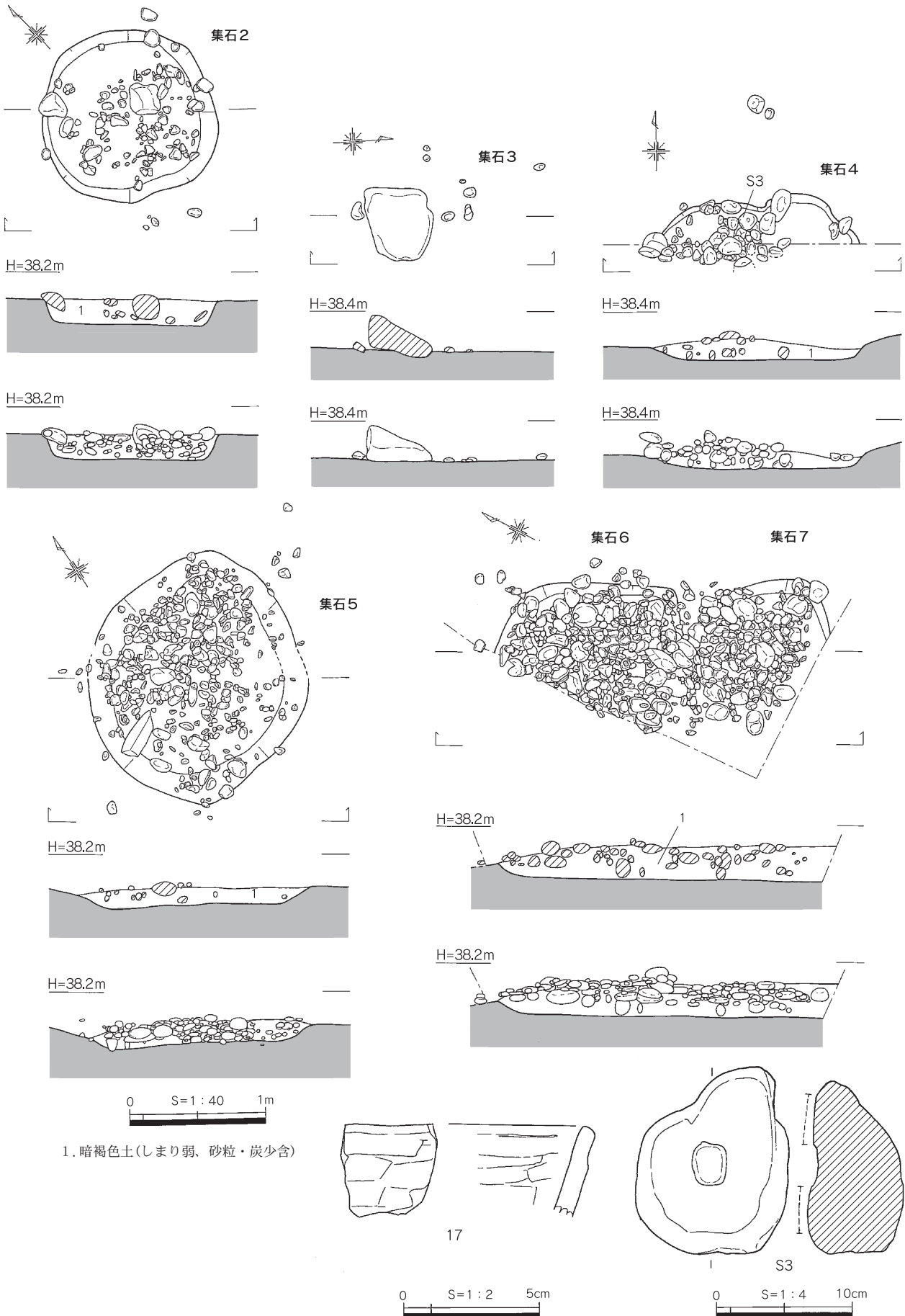
### 3. 集石

#### 集石1 (第9図、PL.28・34)

2区の西側に位置する。本遺構の埋土は遺構の検出面である黒褐色土と酷似しており、見分けることが困難であり、その大部分を掘り下げてしまった。よって集石の形成面を正確に把握することはできなかった。わずかに残っていた埋土は黒褐色土で、炭化物の粒子が少量含まれていた。埋土中からは人頭大の礫とともに土器片がまとまって出土した。埋土を全て除去した後に、土坑状のわずかな落ち込みを確認することができた。礫には火を受けた痕跡は認められなかった。

出土遺物10は壺の口縁部で、頸部に断面三角形の貼付突帯を持つものである。12は壺の胴部と思われ、外側に刻目のある貼付突帯を施す。11・13～16は甕である。このうち11は口唇部分に刻目を施す。16は底部である。焼成後に穿孔が施される。外面はハケメ後ヘラミガキを施す。14・15は共に底面にヘラケズリが施される。これらの土器は清水編年のI-3期のものである。

本遺構の性格は、全体を正確に検出することができなかったため不明瞭であるが、礫の上下から多数の土器が出土していること、埋土に炭化物を含むことから埋葬施設の可能性を考えることができる。



第10図 集石 2～7・出土遺物

時期は、出土遺物から弥生時代前期後葉のものである。

#### 集石 2 (第10図、PL.28)

3区の中央やや北よりに位置する。暗褐色土上面で検出した。ほぼ円形を呈する土坑の中に3～15cm大の川原石が集められていた。集石の形態は円形を呈する。礫除去後の落ち込みの規模は径約130cm、検出面からの深さは約18cmを測る。埋土は遺構検出面に似た暗褐色土で、わずかに炭化物を含む。礫には火を受けた痕跡は認められない。

3区から検出された集石の中では土坑状の落ち込みが最も明瞭なものであった。礫と礫との隙間は他の集石に比べ比較的広く、礫の集められ方は平面的で礫の数も他のものより少なめであり、規則性も見られない。遺物は黒曜石が3点出土している。いずれも小片であり、図示するには至らなかった。

時期としては、周囲から弥生時代前期後葉の土器が出土していることから、本遺構の時期もこれに相当するものと考ええる。

#### 集石 3 (第10図、PL.28)

3区の南東側に位置する。集石 2と同様、暗褐色土上面での検出である。他の集石と形態が大きく異なり、他の集石がほぼ同じ大きさの川原石を集めて形成されているのに対し、本集石は長軸53cm、短軸47cmを測る不整形を呈する礫を中心に、その周囲に数個の小礫が散らばって形成されている。中心にある礫は集石群の中で最も大きなものである。また、他の集石は礫が落ち込みの中に納まるように集められているのに対し、本遺構は暗褐色土上面に大きな礫が据え置かれている点でも大きく異なる。礫の周辺において精査を行ったが、掘り方は確認できなかった。周囲の小礫については意図的な配置といえるような状況を見出すことはできなかった。しかし中心に据えられている礫については、集石 2、5～7までの距離がそれぞれ5mとほぼ同じであること、また他の集石が形成する緩やかな円の中心付近に位置していることなどから、この位置に意図的に配置されたものと考えられる。遺物は出土していないが、周囲の状況から時期は弥生時代前期後葉頃と考える。

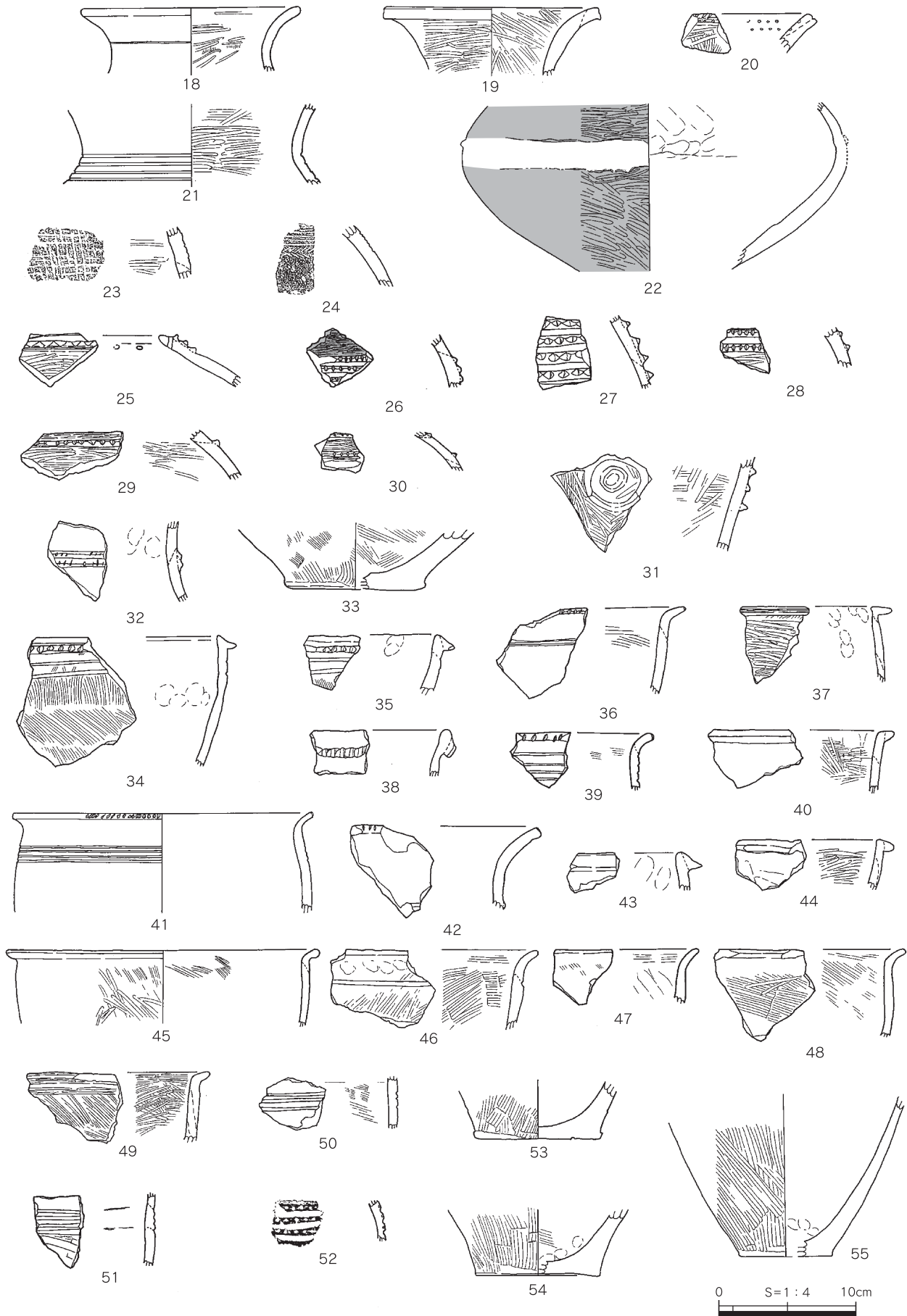
#### 集石 4 (第10図、PL.28・34)

3区の南側の壁面で検出した。北端部だけの検出であり、主体部分は調査区の南側に続いているものと思われる。集石 3の南西約1mの場所に位置し、径4～18cmの川原石で形成される。集石の平面形は検出部分から特定することはできない。また、集石の形態は検出された部分において規則性は認められない。礫に火を受けた痕跡は認められない。

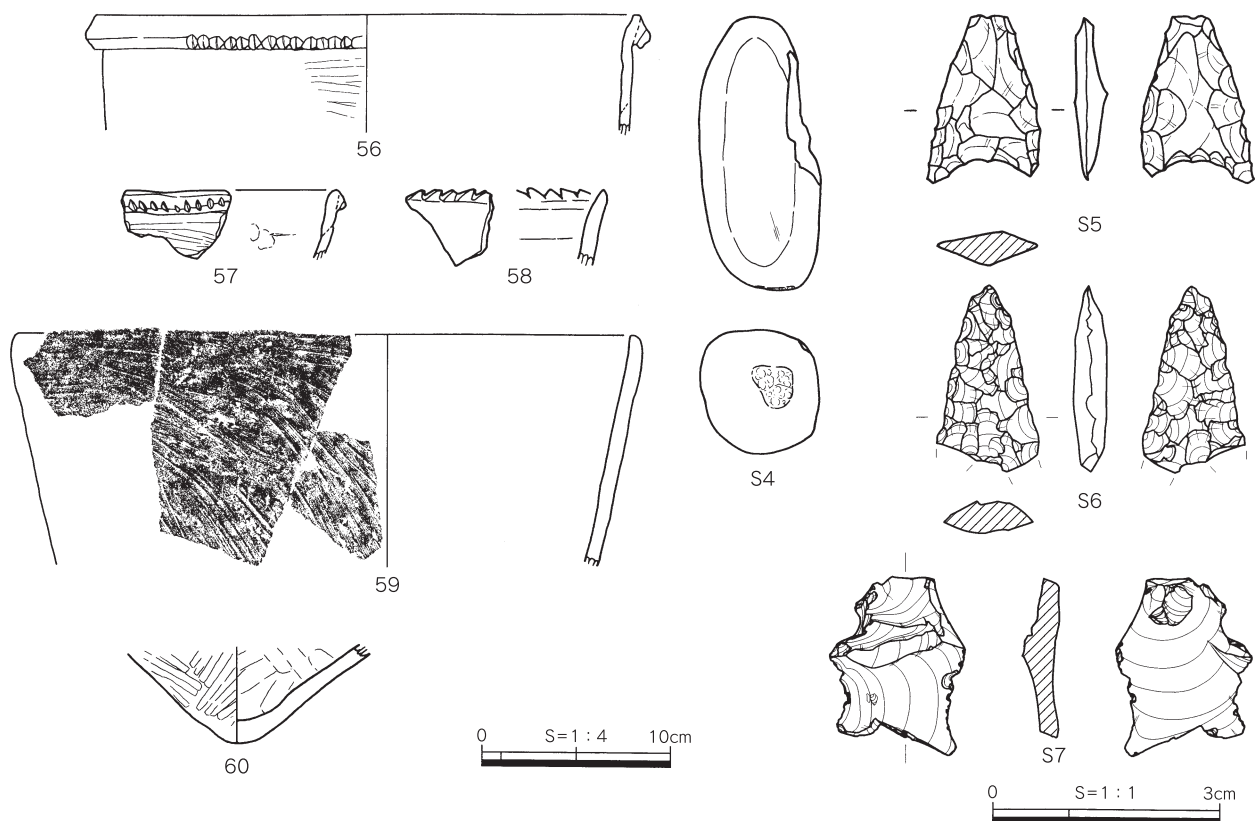
集石を形成する礫の中に凹石 S3 が含まれていた。石材は角閃石安山岩である。形は卵型を呈し、大きさは長径14.5cm、短径11.1cm、最大厚6.9cmを測る。窪み部分は方形を呈し、大きさは長軸3cm、短軸2.5cm、最大深0.4cmである。窪みのある面には使用した痕跡が見られる。その他に遺物は出土していない。本集石の時期は集石 2と同様、弥生時代前期後葉頃と考える。

#### 集石 5 (第10図、PL.29)

3区の中央やや西よりにあり、集石 2の南西側約2mの場所に位置する。他の集石と同様、暗褐色土上面で検出した。5～30cm大の川原石で形成される。埋土は集石 2と同様に遺構検出面と酷似して



第11図 弥生時代遺構外出土遺物①



第12図 弥生時代遺構外出土遺物②

いるため、集石検出時には掘り方を確認できなかった。礫を全て除去した後に土坑状の落ち込みを確認することができた。落ち込みの平面形は楕円形で、規模は長軸1.8m、短軸1.6mである。検出面からの深さは最大9.4cmを測る。集石の形態は楕円形を呈する。礫の組み方には前述の集石同様、規則性は認められず、礫に火を受けた痕跡は認められない。

遺物は、底面付近から鉢の口縁部17が出土した。如意状の口縁で外内面に条痕を施し、端部は丸くおさまる。時期は縄文時代晩期から弥生時代前期の範疇に収まるものである。

本遺構の時期としては出土遺物が少なく、詳細に特定することはできないが、この遺構の周囲から出土している土器のほとんどが弥生時代前期後葉に属するものであることから、本集石もこの時期に相当するものとする。

### 集石6・7（第10図、PL.29）

3区の南西隅に位置する。調査区際での検出であるため、南端および西端は調査区外へと続く。

2基の集石には礫の積み方や形状に大きな違いは無く、明瞭な境目は見られなかったが、中央付近がくびれており、この部分で2基の集石が重なっているものと考えられる。規模が大きく、形態が楕円形を呈する方を集石6、小規模で円形を呈する方を集石7とした。両遺構とも3～20cm大の川原石で形成され、礫の集め方には規則性は見られず、礫には火を受けた痕跡は認められない。

2基とも明瞭な掘り方は認められず、全ての礫を除去した後にわずかに落ち込みが確認できる程度である。

遺物は出土していないが、時期としては、他の集石と検出面や形状が同じであることから弥生時代



前期後葉頃のものとする。

(浅田)

#### 4. 遺構に伴わない遺物 (第11・12図、PL.39・40・41)

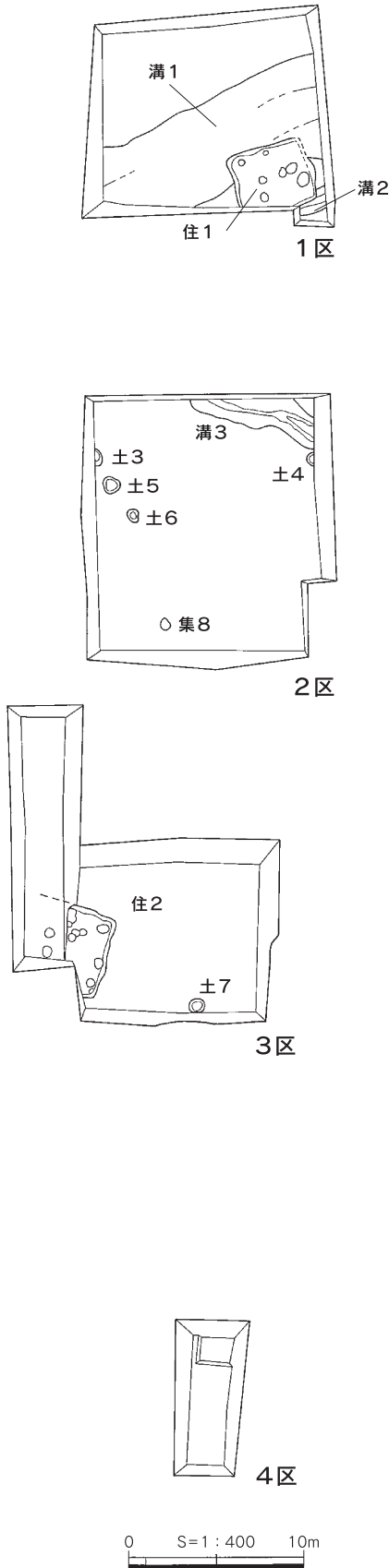
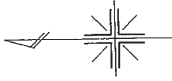
大半のものが黒褐色土層からのもので、2・3区での出土が主である。全ての器種を通して、断面が三角形を呈する貼付突帯を口縁部や頸部に持つものが多く見られる。また、口縁端部や突帯部分には必ずといってよいほど刻目が施される。頸部や胴部には多条化した沈線が入り、沈線間にも刻目が施されるものもある。こうした特徴は清水編年のI-3期と同様の傾向を示すものである。時期は弥生時代前期後葉と考えられる。

18~31は壺形土器である。18は外反した口縁部に1条の沈線がめぐり、口縁端部は丸くおさまる。20は口縁部で、口唇部に沈線の後に刻目を施し、内面には竹管による刺突文を施す。21は頸部で下部に4条の沈線を施す。22は胴部で、外面に赤彩を施し、貼付突帯が剥離した痕跡が見られる。23は胴部と思われ、外傾接合からなる。外面にはナデを施した後に、横方向の沈線後、縦方向に沈線を施す。内面には条痕を施す。24は胴部で、貝殻腹縁による羽状文と4条の沈線を施す。25~31は貼付突帯を持つものである。25は無頸壺の口縁部と思われる。口縁部上端に穿孔が施され、その下に貼付突帯を3条施す。外面には一部赤彩を施した痕跡が認められる。26~30は胴部と考えられるもので、2~3条の刻目のある貼付突帯が施されるものである。これらの内26・29・30は外傾接合からなる。26には一部赤彩が施される。31は胴部と思われ、外面には突帯をわらびて状に付ける。部分的に赤彩の痕跡が残る。調整は外面にヘラミガキ、内面にハケメ後ナデがなされ、その後更にヘラミガキを施す。

34~56は甕形土器である。34~38・40・43・44は貼付突帯を持つものである。34・35は外傾接合からなるもので、口縁部に刻目のある貼付突帯を施し、頸部には2条の沈線を施す。調整はともに外面にハケメ、内面にナデを施す。37・40は外傾接合からなるもので、口縁部は粘土貼付による。39は口唇部に刻目を施し、頸部には沈線を施す。42は口唇部に刻目、頸部には貼付突帯を持つ。43・44は口縁部が粘土貼付によるもので、調整はともに外面にナデを施す。45は外傾接合からなり、調整は内面がハケメ後ナデ、外面にはハケメ後ヘラミガキが施される。46も外傾接合からなり、頸部に1条の沈線を施す。口縁部には押圧痕が目立つ。49は外傾接合からなり、調整は外面には条痕が内面にはヘラミガキを施す。50は胴部と考えられるもので、沈線を3条施す。調整は内外面ともにハケメ後ナデが施される。52は外面に4条以上の沈線を施し、沈線間には刺突文を施す。53・54・55は甕と考えられるものの底部である。このうち55は外傾接合によるものである。外面は板状工具によるハケメが施される。内面はナデを施し、底面付近には指頭圧痕が目立つ。

57~60は鉢形土器である。57は内傾接合によるもので、口縁部に刻目のある貼付突帯を持つ。外面には条痕を、内面にはナデを施す。58は口縁部であり、口唇部に「V」字状の深い刻目が入る。調整は内外面ともにナデを施す。59は口縁部から胴部にかけてのものである。外傾接合によるもので、調整は外面には条痕、内面にはナデが施される。60は底部である。外面には条痕、内面はナデを施す。石器で図示しえたものは4点のみである。S4は敲石である。石材は細粒花崗岩で、全長14.6cm、最大幅5.3cmを測る。S5・6は石鎌であり、このうちS5はサヌカイト製の凹基式の鎌である。S6は黒曜石製のもので、基端部を欠損しているもののS5と同じ種類のものと思われる。S7は黒曜石の薄片である。

(浅田)



第13図 古墳時代遺構配置図

## 第4節 古墳時代の遺構・遺物

### 1. 概要

遺構は1～3区にかけて暗褐色土上面で検出し、竪穴住居2棟、溝3条、土坑5基、集石1基を調査した。遺物は黒灰色土・赤灰色砂質土・赤褐色砂質土から出土している。

1区で検出した溝1については、北側と南側の調査地境に幅1mに渡るトレンチを設定し、底面まで掘り下げ自然流路であることを確認した。また、トレンチ設定範囲において遺物は皆無であった。このため調査は行わないこととなり、上端の範囲およびトレンチ部分で検出した底部と土層断面の観察をもって調査を終了した。（浅田）

### 2. 竪穴住居

#### 竪穴住居1（第14図、PL.29・35）

1区の南西隅に位置する。本来の検出面である暗褐色土と遺構の埋土が酷似していたため、暗褐色土上面ではこれを検出することができず、この下層である黒褐色土中で確認した。本遺構の北西側が調査区外にのび、南西側が後述する溝1に設定したトレンチに切られるため、その全体像は明確ではない。しかし、遺存する住居の状況から、平面形は方形を呈するものと思われる。

規模は長軸4.6m、短軸3.4m、床面積12.7㎡を測る。検出面からの深さは38cmであり、床面の標高は38.4mを測る。周囲には、幅7～15cm、深さ8cm、断面形が「U」字状を呈する溝がめぐる。床面には、厚さ約1cm程度の炭層が広がっていた。また、この炭層を除去したところ、住居中央部から南東側にかけて、厚さ約6cm程度の貼り床が確認された。この貼り床は、地山ブロックを多く含んでおり、硬化していた。

貼り床を除去した後、床面からP1～6のピットを確認した。このうち、P1・2は、その形状・規模から柱穴と考えられる。平面形が円形を呈し、規模は径30～46cmを測る。検出面からの深さ38cmを測り、掘り込み面は暗黄褐色

土までであった。なお、P 2からは径16cmを測る柱痕跡を確認している。柱穴間の距離は1.2mを測る。

P 3はP 2の南側に位置するピットである。規模は径54~66cmを測り、平面形は不整形な円形を呈している。埋土はP 4と同質である。P 4はいわゆる特殊ピットであり、住居南側の壁際に位置している。規模は径68~72cm、深さ20cmを測り、平面形は不整形な円形ないしは方形を呈している。埋土は黄褐色ブロックを多く含む暗黄褐色土である。P 5・6は、径30~40cm、深さ10cmほどを測り、平面形が円形を呈するピットである。柱穴であるP 1・2に比べて浅く、配置も不規則であることから用途は不明である。

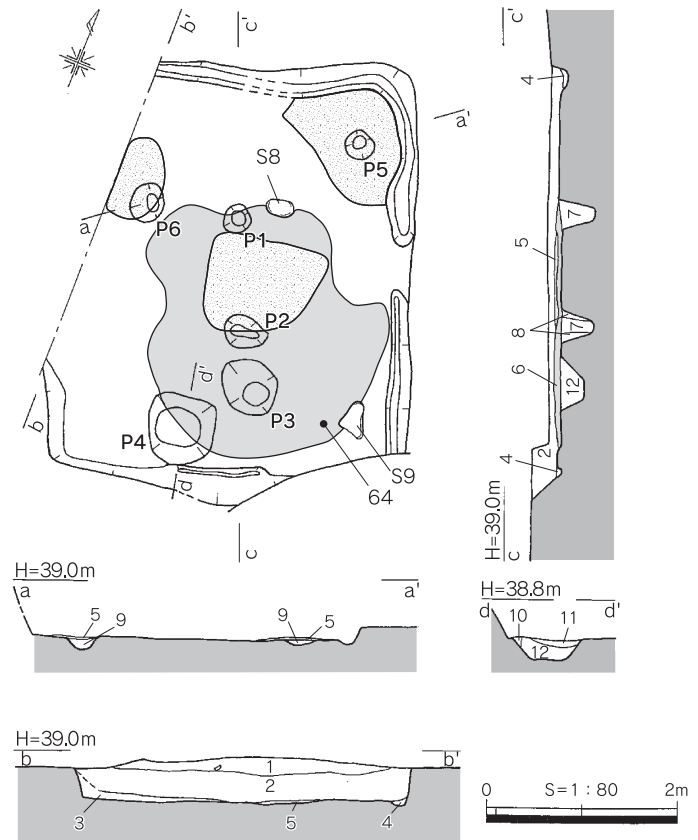
先にも述べたように、本住居は、貼り床除去後にP 1・2といった柱穴やP 4といった特殊ピットが検出されており、建て替えがあったと考えられる。

埋土中から、土師器や須恵器、石器が出土した。このうち、61~66、S 8・9を図示した。これらの遺物のうち、床面直上から出土したのは、土師器62・64、石器S 8・9である。62は甕の口縁部、64は高坏の脚部、S 8は安山岩の磨石、S 9は台石である。

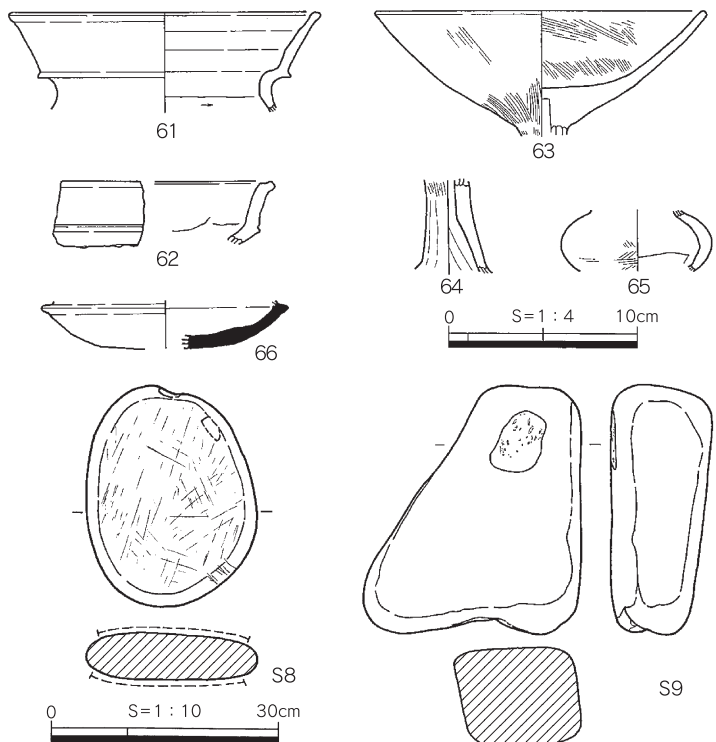
土師器61・63・65、須恵器66はいずれも埋土中からの出土である。流れ込みによる可能性が高く、本遺構の時期を直接判断するものではないと考える。

さて、遺構の時期であるが、出土遺物が天神川Ⅷ期の特徴を示すことから、古墳時代中期後葉と考えられる。

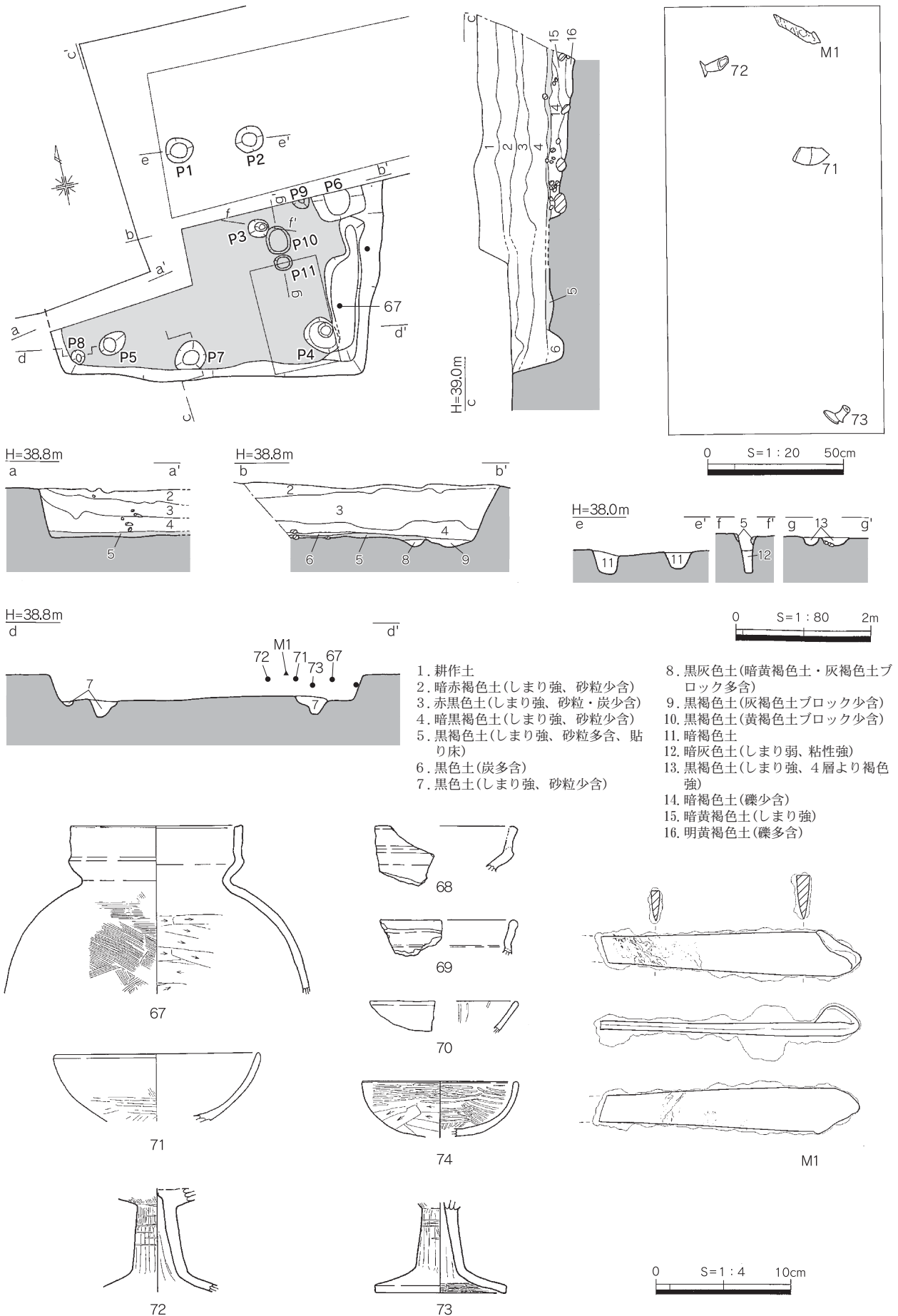
(前島)



- |                    |                      |
|--------------------|----------------------|
| 1. 褐色土(礫・土器含)      | 7. 暗灰褐色土             |
| 2. 暗褐色土            | 8. 暗褐色土(黄褐色ブロック含)    |
| 3. 褐色土             | 9. 暗褐色灰土             |
| 4. 暗黄灰褐色土(砂礫含)     | 10. 暗褐色土(2層より褐色強)    |
| 5. 黒褐色土(粘性強、炭多含)   | 11. 暗黄褐色土(黄褐色ブロック少含) |
| 6. 暗黒褐色土(しまり強、硬化面) | 12. 暗黄褐色土(黄褐色ブロック多含) |



第14図 竪穴住居1・出土遺物



第15図 竪穴住居2・出土遺物

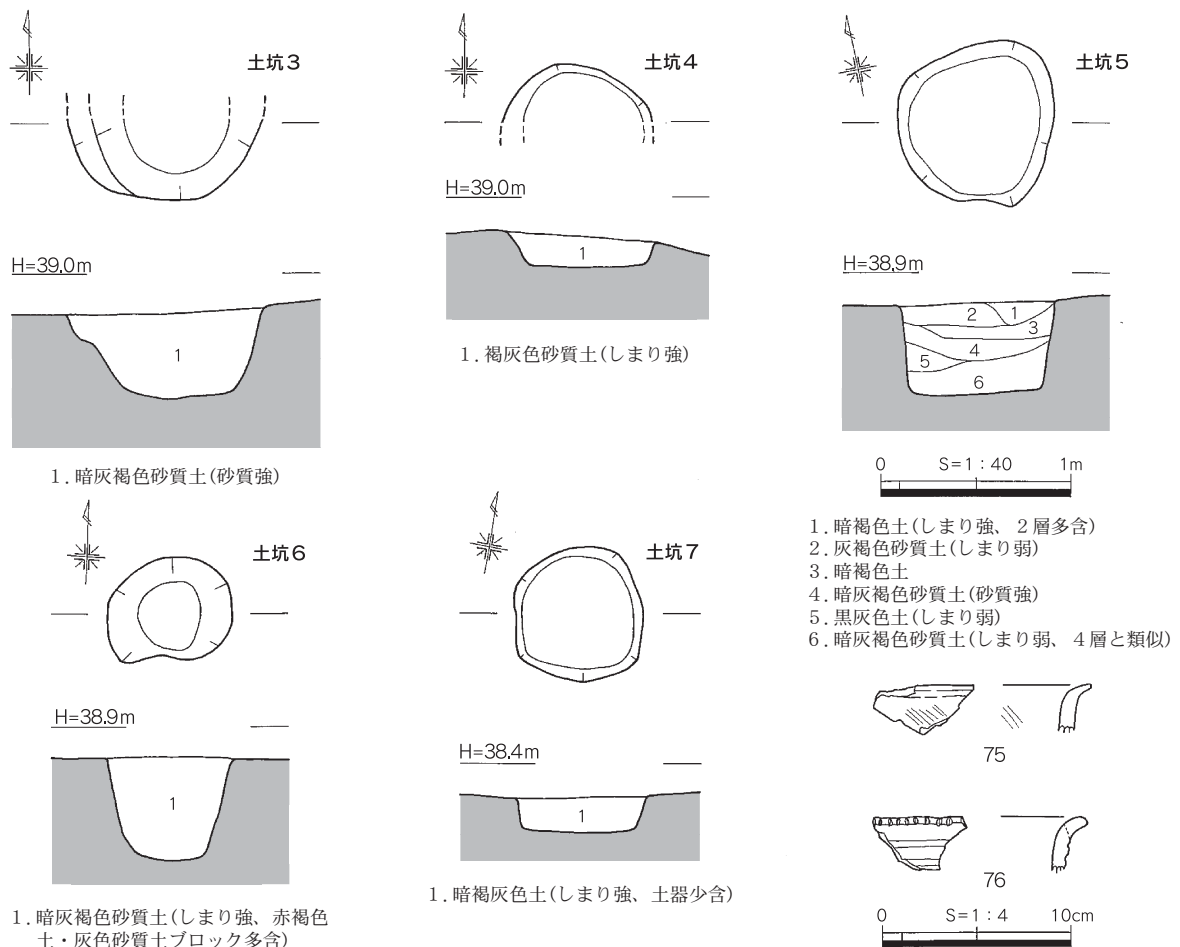
竪穴住居 2 (第15図、PL29・35・42)

3区の北側に位置する。検出した範囲は竪穴住居の南側半分である。北側は町のトレンチにより消失していた。北西側は調査区外のため、不明である。

平面形は検出した部分から、方形を呈するものと考えられる。検出した規模は一辺約2.2m、床面積6.9㎡以上を測る。床面には貼り床が施され、その厚さは平均して5cmである。検出面からの深さは、最も残りのよい東側で70cmを測る。ピットは全部で11基確認した。このうち、支柱穴と考えられるものはP1～3である。その並び方から4本柱の住居であったと思われる、4本目の柱穴は調査区外に存在するものと考えられる。柱穴のうちP3では断面調査時に埋土の上部に径約20cm、深さ約20cmの大きさの空洞部分を確認した。柱穴の上縁部分には縁取りするように貼り床がやや盛り上がって残っていた。これは柱材が腐食したために生じた空洞と考えられる。

P6は西側壁面際にある。平面形が方形で断面がすり鉢状を呈し、特殊ピットと思われる。また、P4・5・7はその位置から支柱穴と考えられる。P9～10は貼り床除去後に検出した。本遺構に伴うものであるかは不明である。

遺物は、甕67～69、高坏70～73が出土している。69は甕の口縁部であり、72は高坏の脚部である。ともに外面には赤彩が施される。これらは天神川Ⅷ～Ⅸ期のものである。M1は直刃鎌である。刃部はよく使い込まれており、磨り減ってやや湾曲している。また、刃部表面には木質が付着している。本遺構の時期は出土遺物から古墳時代中期後葉である。(浅田)



第16図 土坑3～7・出土遺物



### 3. 土坑

#### 土坑3 (第16図、PL.30)

2区の北側調査地境に位置しており、北側は調査区外へと続いている。暗褐灰色土上面で検出した。平面形は、方形もしくは六角形を呈するものと思われる。検出面からの深さは43cmを測る。遺物は出土しておらず時期の特定はできないが、検出状況や周囲の状況等から判断して古墳時代中期後半頃と考えられる。

#### 土坑4 (第16図、PL.30)

2区の南側の調査地境にあり、溝3の西側に位置する。南側は調査区外へと続く。平面形は、検出した部分の状況から円形を呈するものと思われる。壁面は外側にわずかに傾斜して立ち上がる。検出面からの深さは最大で17cmを測る。遺物は出土しておらず、時期を特定できないが土坑3と同様、古墳時代中期後半のものと思われる。

#### 土坑5 (第16図、PL.30)

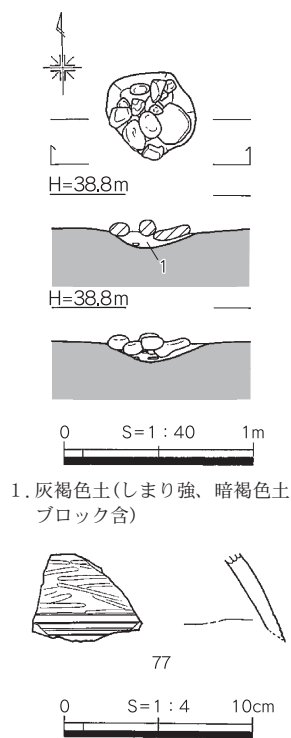
2区の北側にあり、土坑3の南西側に位置する。平面形は不整形円形を呈し、底面は平坦である。規模は最大径が90cm、検出面からの深さは40cmを測る。埋土は互層状に堆積しており、埋め戻された可能性がある。遺物は出土しておらず、時期を特定できないが土坑3と同様、古墳時代中期後半のものと思われる。

#### 土坑6 (第16図、PL.30)

2区の北側にあり、土坑5の南西側に位置する。平面形は不整形な円形を呈し、断面は「U」字状を呈する。底面は平坦である。規模は最大径が67cm、検出面からの深さは55cmを測る。遺物は出土しておらず、時期を特定できないが土坑3と同様、古墳時代中期のものと思われる。

#### 土坑7 (第16図、PL.30)

1区の西側に位置し、暗褐灰色土上面で検出した。平面形は円形を呈する。検出規模は径68cm、検出面から底面までの深さ17cmである。埋土中から甕の口縁部75・76が出土した。これらは弥生時代前期のもので、埋没過程で混入したものと思われる。本遺構の時期は土坑3と同様、古墳時代中期頃と思われる。(浅田)

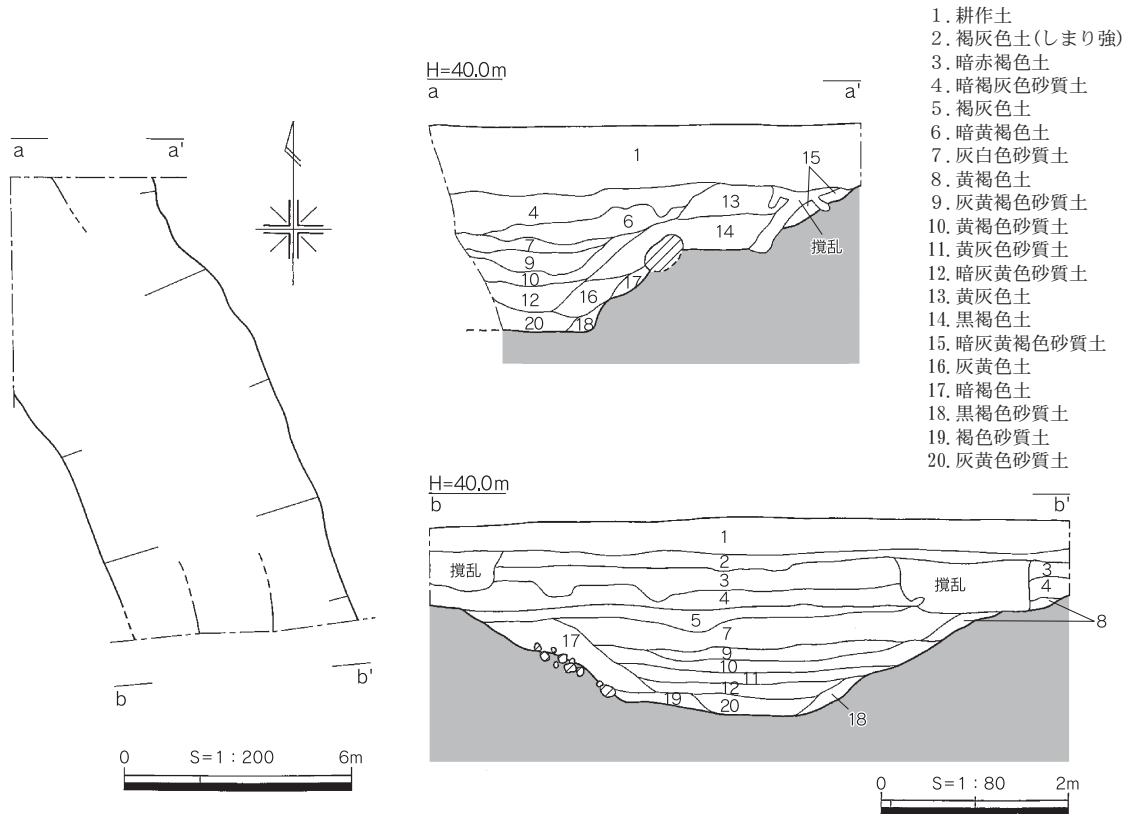


### 4. 集石

#### 集石8 (第17図、PL.30)

#### 第17図 集石8・出土遺物

2区の西側に位置する。暗褐灰色土上面で検出した。径約80cmの不整



第18図 溝 1

円形を呈する落ち込みに、5～20cmの石が13個積み重ねられて形成される。配石に規則性は認められない。礫には火を受けた痕跡は確認されなかった。

埋土から土器片が4点出土している。このうち図示できたものは1点である。77は壺の胴部であり、外面には沈線を4条以上施す。弥生時代のものであり、これは本遺構形成時に混入したものである。本遺構の時期は、検出面や周囲の状況から古墳時代中期のものと考えられる。(浅田)

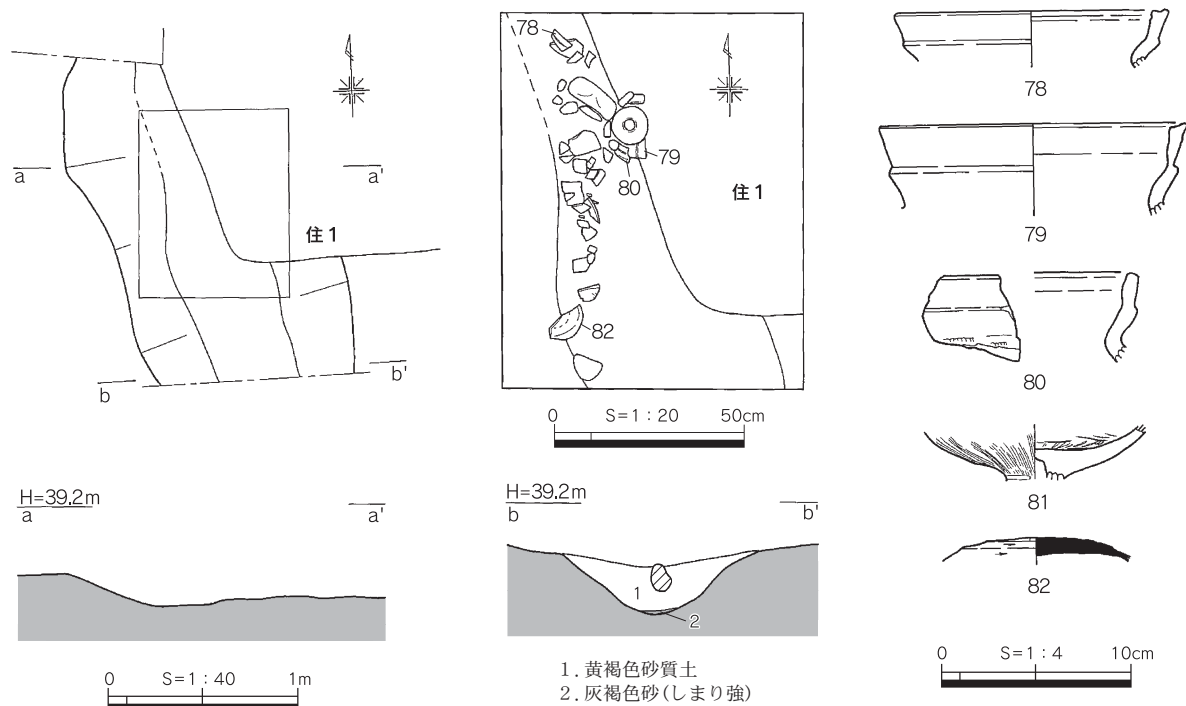
## 5. 溝

### 溝 1 (第18図、PL.29・31)

1区の中央に位置しており、重機によって黒灰色土を除去した直後に検出した。調査区南東壁際と北西壁際にトレンチを入れたところ、遺物が出土しなかったため自然河道であると判断し、断面形態と埋土の堆積状況の把握、範囲確認のみの調査を行った。

溝は調査区を南東方向から北西方向に貫いており、13.4mほどを確認した。ほぼ直線的にのびているが、南東側から約8.0mの地点で西方向にゆるく湾曲する。規模は幅5.8m、検出面からの深さは2.1mを測る。断面形は幅広な「U」字形をなす。

埋土は灰白色、黄灰色、褐色系の砂質土を主体としたものである。これらは15層に分層できた。このうち第7層は最も厚く堆積しており、最大36cmを測る。これに対して、7層以下の第9～12層の堆積は薄く、また、褐色と灰黄色の砂質土が互層状に水平堆積をなす状況を観察することができた。さらに下層の第18～20層では、5～15cm大の礫が多く含まれており、水の流れが比較的急であったことがうかがえる。なお、埋土中からは遺物は出土しなかった。



第19図 溝2・出土遺物

遺構の時期であるが、遺物が出土しておらず、特定することが困難である。しかし、遺構の上面は竪穴住居1によって切られていることから、少なくとも古墳時代中期以前には埋没していたものと考えられる。

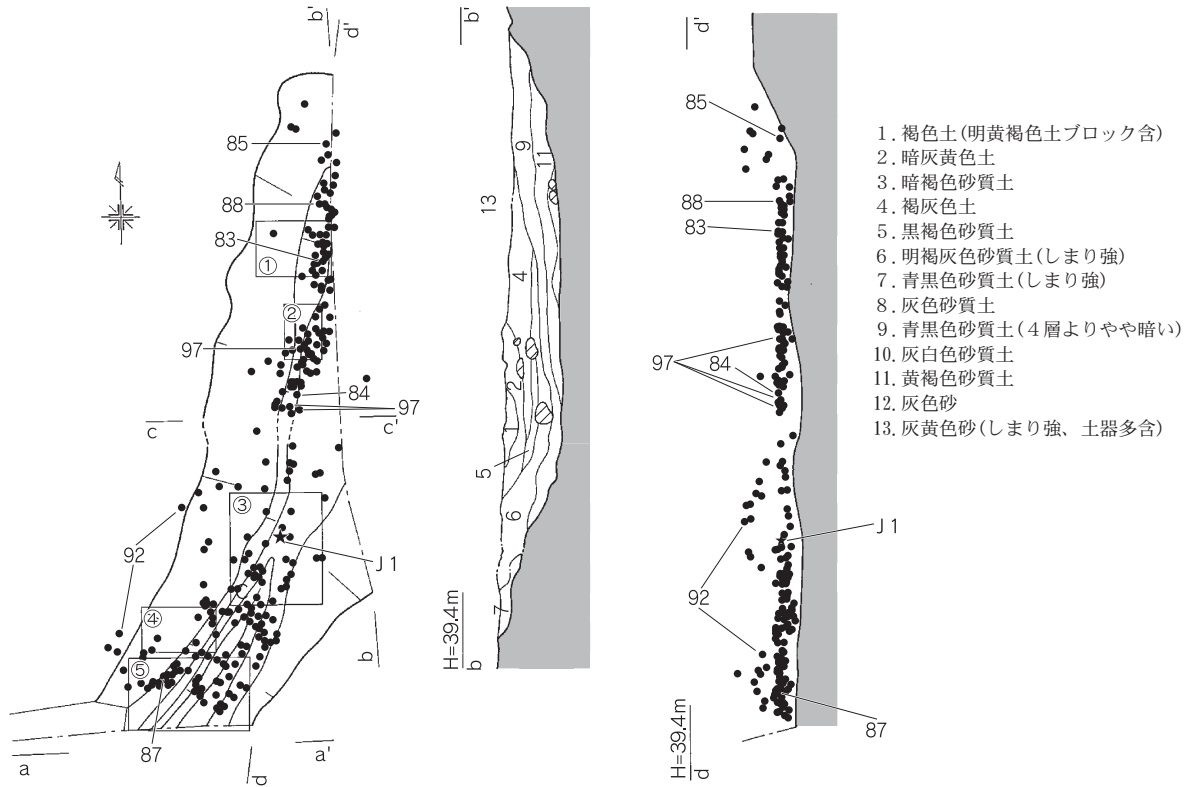
#### 溝2 (第19図 PL.31・35)

1区南西隅の拡張部分に位置している。本遺構は、暗褐灰色土を掘り下げ中に、調査区南西壁際から遺物が折り重なるようにまとまった状態で出土したことから、調査区外に遺構が存在する可能性がある判断し、一部拡張して調査することとなった。この結果、拡張部分において溝の肩部を確認することとなった。遺構の検出面は暗褐灰色土上面である。

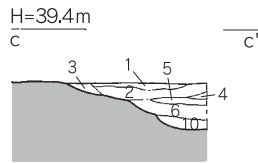
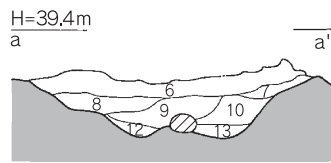
南東から北西方向にほぼ直線的にのびる溝である。その両端が調査区境に接しており、調査区の北西側と南東側へのびるものと思われる。竪穴住居1と重複関係にあるが、両者の遺存状態が悪いことから、新旧関係を明確にすることはできなかった。また、出土遺物も竪穴住居1のものと同様時期を示しているため、これを判断することができなかった。

規模は、幅1.2m、検出面からの深さ25cmを測り、1.7mほどを検出した。断面形は「U」字状を呈しており、底面は暗褐色土まで掘り込まれていた。埋土は黄褐色砂質土を主体としたものである。これらは2層に分層できる。また、底面付近では灰褐色砂質土に砂礫が混入する状況を観察できたことから、流水があったものと考えられる。

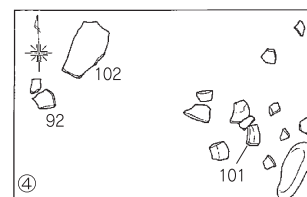
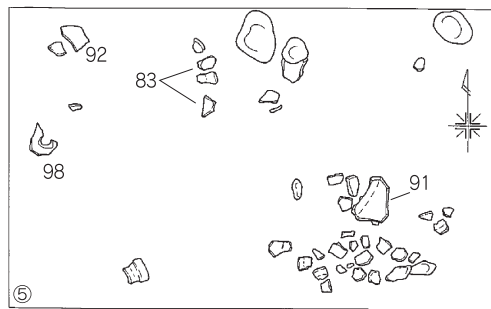
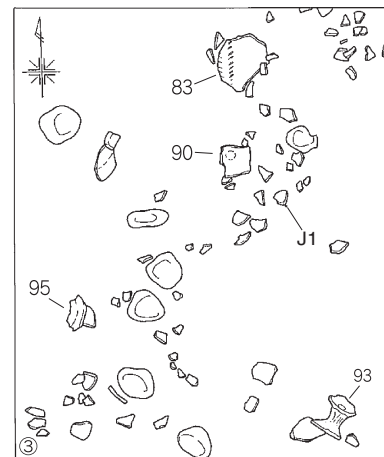
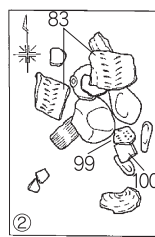
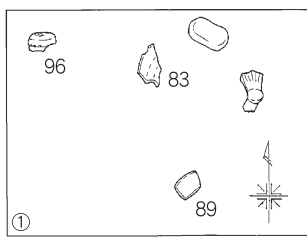
遺物は土師器と須恵器が出土している。これらは、すべて床面付近から出土したものであり、このうち78~82を図示した。78~80は土師器の甕である。78・79は、口縁部が外傾して立ち上がるものである。口唇部はやや凹みながらも平坦となり、内側に肥厚する。また、下端部は鈍く突出する。内外面にはナデ調整を施している。78の外面には煤が付着しており、内面には黒斑を有する。79の内外面



1. 褐色土(明黄褐色土ブロック含)
2. 暗灰黄色土
3. 暗褐色砂質土
4. 褐灰色土
5. 黒褐色砂質土(しまり強)
6. 明褐灰色砂質土(しまり強)
7. 青黒色砂質土(しまり強)
8. 灰色砂質土
9. 青黒色砂質土(4層よりやや暗い)
10. 灰白色砂質土
11. 黄褐色砂質土
12. 灰色砂
13. 灰黄色砂(しまり強、土器多含)

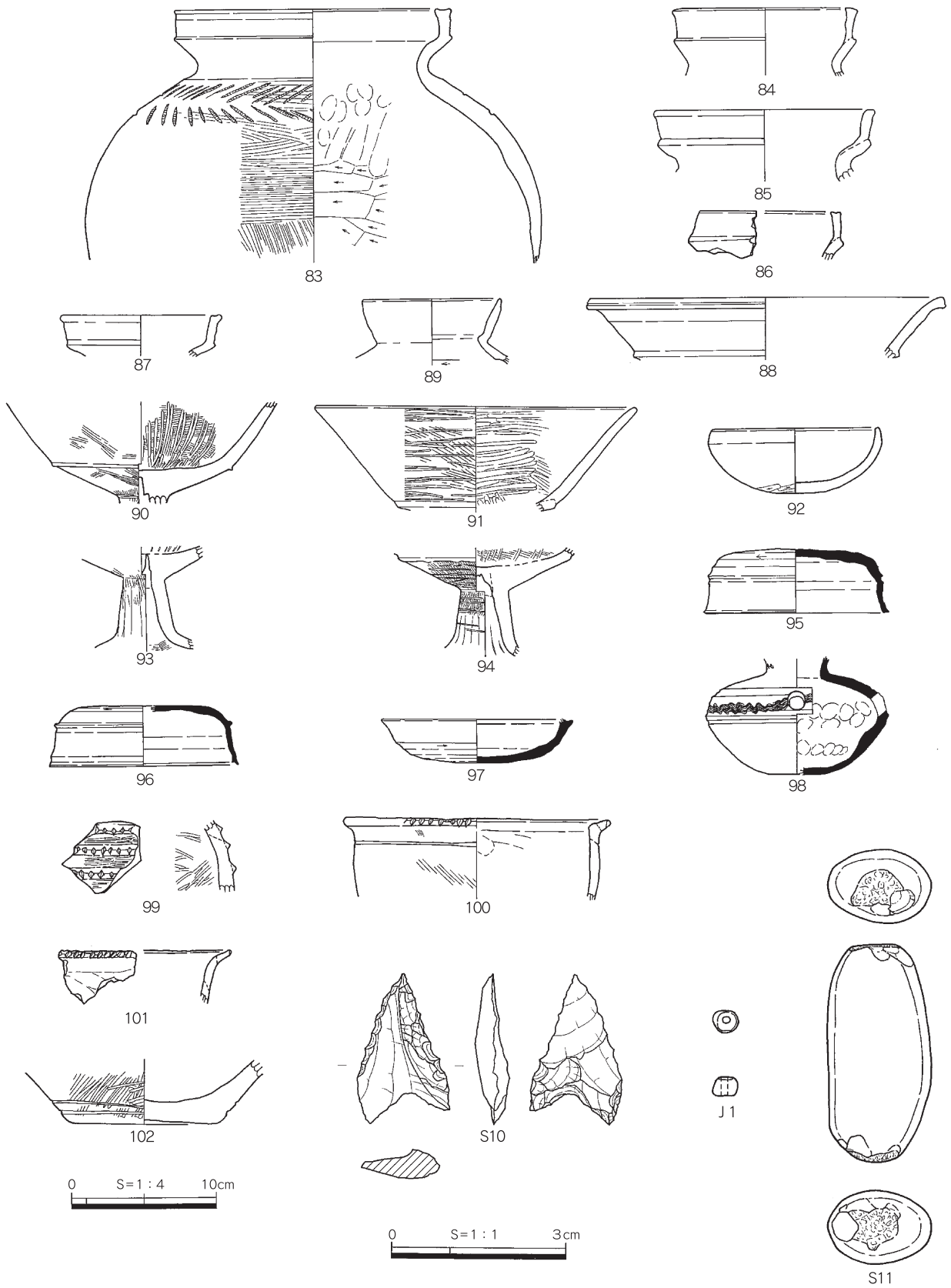


0 S=1:80 2m



0 S=1:20 50cm

第20図 溝3



第21図 溝3出土遺物



には煤が付着している。80は口縁部が若干外湾して立ち上がり、下端が鈍く突出している。口唇部には平坦面をもつ。81は高杯の坏部であり、竪穴住居1との境から出土した。外面にはハケメ、内面には放射状のヘラミガキを施している。82は須恵器の坏蓋である。天井部には回転ヘラケズリを行っており、その後頂上部において手持ちヘラケズリを施している。天井部の内面にはヨコナデ後仕上げナデを施す。

さて、遺構の時期であるが、出土遺物が天神川Ⅷ期の特徴を示すことから、古墳時代中期後葉の範疇に収まるものと思われる。

### 溝3 (第20・21図 PL.32・36・37)

2区南西隅に位置しており、暗褐灰色土上面で検出した。確認できた範囲が6.9mと全体の一部分であるため、遺構の全体像を明確に捉えることができなかった。

南西から北東方向に向かってほぼ直線的にのびる溝である。溝は調査区外へのびているが、すぐ東側の1区においては確認することができなかったため、1区と2区の間を通っているものと考えられる。規模は、幅1.5～2.2mを測り、南西側から北東側に向かって次第に広がっていく。検出面からの深さは68cmを測り、掘り込みは黒褐色～暗褐色土であった。断面形は幅の広い「U」字状を呈しているが、一段落ち込んだ状態となっている。また、底面には明瞭な凹凸が認められる。

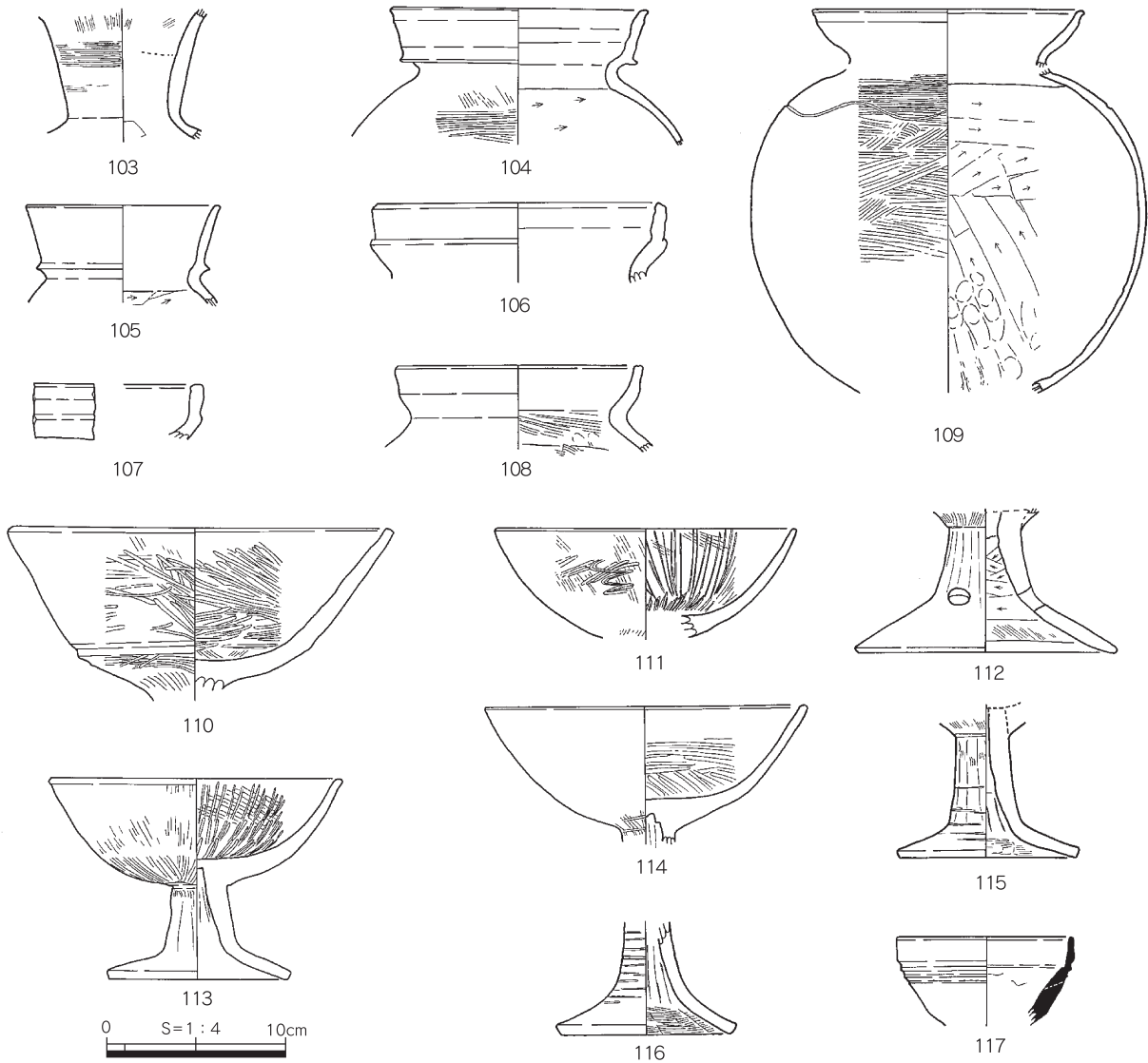
埋土は褐色土を主体としたものであり、13層に分層することができた。このうち、埋土の中層にあたる5・6・9・11層では黒褐色土と褐色土が互層状に堆積しており、流水によって自然に堆積したものと考えられる。また、底面の凹みに堆積していた12・13層からは、砂礫や土器片が多く出土した。

遺物は、第20図で示したように、溝の全体にわたって出土している。同一個体となる遺物が比較的近い位置から出土していることから、比較的緩やかな水の流れであったと想定される。また、出土遺物には土師器の他に弥生土器が含まれている。これは、溝が弥生時代の包含層を切って形成され、そこから流れ込んだものと考えられる。

出土遺物には弥生土器、土師器、須恵器、石器、玉類などがある。このうち、83～102、S10・11、J1を図示した。83～92は土師器であり、83～87は甕である。83は口縁部が垂直に立ち上がり、口唇部が平坦で内面が肥厚している。肩部の外面には刺突文をめぐらせている。89は直口壺、88は鼓形器台、90・91・93・94は高杯である。92は椀であり、底部外面に手持ちヘラケズリを施している。95～98は須恵器であり、95・96は坏蓋である。口唇部には明瞭な段ないしは稜が認められ、口縁部はやや外湾しながらも高く立ち上がる。天井部との境には明瞭な稜がつく。天井部は平坦であり、全体の2/3の範囲において回転ヘラケズリを施している。97は坏身であり、底部の2/3において回転ヘラケズリを施している。98は甗であり、頸部と肩部において波状文を施している。また、外面には自然釉がかかっている。99～102は弥生土器である。99～101は甕であり、99は胴部に刻目を施す貼付突帯をもつ。100・101は如意状の口縁部をもつものであり、口唇部に刻目を施す。また、100の頸部には沈線が一条めぐる。S10は石鏃、J1は青色を呈するガラス製の小玉である。

さて、遺構の時期であるが、遺物が天神川Ⅷ期の特徴を示すことから、古墳時代中期後葉頃と考えられる。

(前島)



第22図 古墳時代遺構外出土遺物

6. 遺構に伴わない遺物（第22図、PL.38・39）

1～3区の黒灰色土・赤灰色砂質土・赤褐色砂質土で出土している。これらの遺物は古墳時代前期から中期後葉のものである。103は直口壺で、口縁上部外面は縦方向のハケメ、下部は横方向のハケメ後ナデを施す。内面はナデを施し、頸部には横方向にヘラケズリを施す。104～109は甕である。104・105は外面ナデ、内面には口縁部にナデ、胴部にヘラケズリを施す。106・107は内外面ともにナデを施す。109は外面口縁部に横ナデ、胴部上半にハケメ、下半にハケメ後ナデを施す。内面口縁部に横ナデ、胴部にヘラケズリを施す。110～116は高坏である。この内110は坏部で、屈曲部分にわずかな稜のくびれをとどめる。112は脚部で、3ヶ所に円形の透かし穴を持つ。113は坏部外面にハケメ後ナデ、脚部にはハケメ後面取りを施す。坏部内面にはハケメ後放射状の暗文風のヘラミガキを施す。117は須恵器で直口壺の口縁部である。内外面ともに横ナデを施し、外面に3条の沈線を施す。

（浅田）

## 第5節 その他の時期の遺構

### 1. 概要

遺構は全て2区で検出し、溝3条、土坑1基、畝を確認した。溝4～6は赤褐色砂質土除去後に検出し、土坑8は黒褐色土除去後に検出した。いずれも遺物を包含せず、詳細な時期は不明である。(浅田)

### 2. 土坑

#### 土坑8 (第24図)

2区の南側、調査地境付近に位置する。暗褐色土上面で、土坑の底面部分を検出した。本来の掘り込みは上の層からと思われるが、土坑の埋土が黒褐色土と酷似しており、本来の掘り込み面を検出することができなかった。

平面形は円形で、規模は直径50cm、検出面からの深さは10cmである。底面には直径20cm、深さ6cmのピットがある。底面ピットを持つことから落とし穴が想定される。

時期は遺物が出土せず、また掘り込み面も確認できなかったため不明である。(浅田)

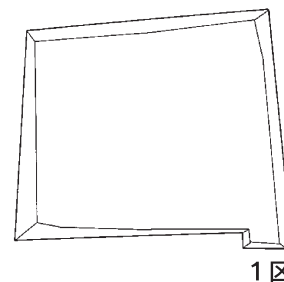
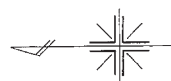
### 3. 溝

#### 溝4 (第25図、PL.33)

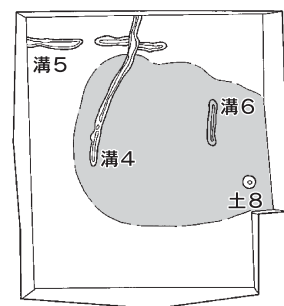
2区のほぼ中央に位置する。溝5を切る。東西方向にのび、東側は調査地外へと続く。検出規模は全長8.2m、幅約30cm、検出面からの深さ約8cmである。用途、時期については不明である。

#### 溝5 (第25図、PL.33)

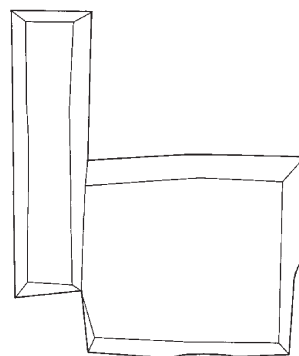
2区の東側、やや北よりに位置する。溝4に切られる。南北方向にのびており、北側は調査地外に続く。規模は、全長7.2m、幅約20cm、検出面からの深さ約2cmである。溝4に切られるものの、形状や埋土が似ており、溝4とほぼ同じ時期のものとする。



1区

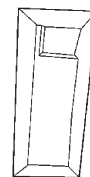


2区



3区

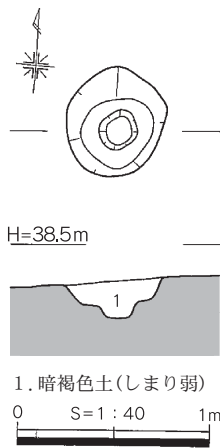
植物痕もしくは足跡の範囲



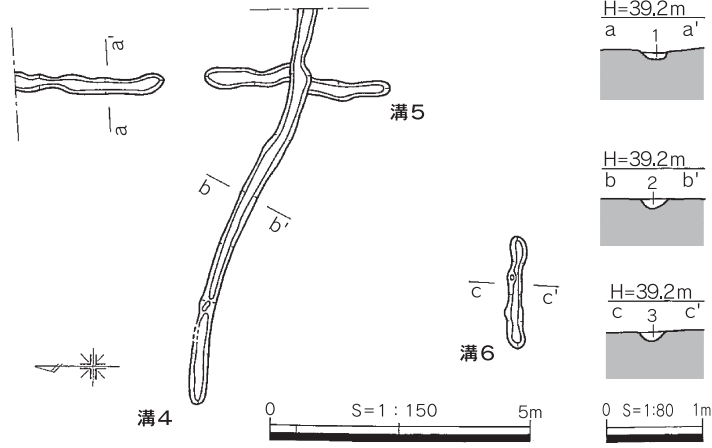
4区

0 S=1:400 10m

第23図 遺構配置図



第24図 土坑 8



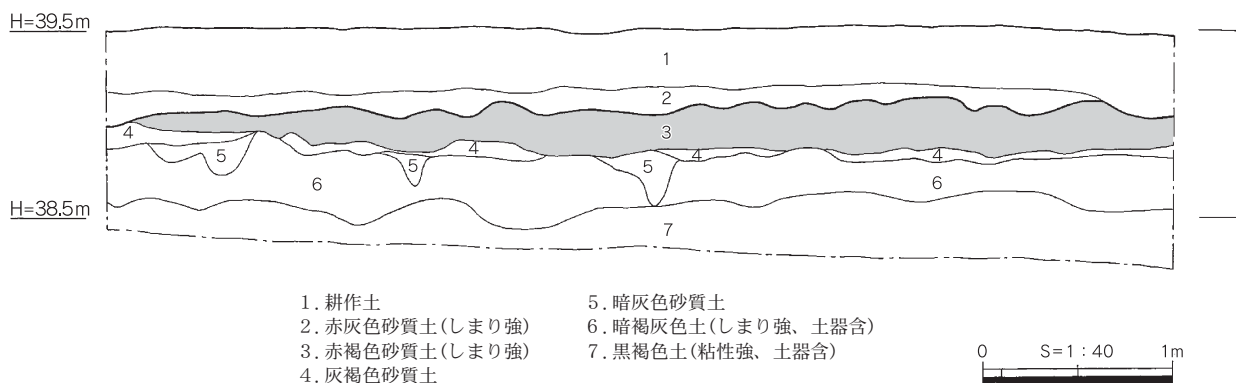
第25図 溝 4～6

溝 6 (第25図、PL.33)

2区の南側、調査地境付近に位置する。溝4・5と同じく赤褐色砂質土除去後に検出した。検出規模は全長2.2m、幅23cm、検出面からの深さ約3cmである。埋土が溝4と同じであるため、溝4と同時に存在したものと考えられる。用途は不明である。(浅田)

4. 畝 (第23・26図、PL.33)

2区の掘り下げ終了時に調査区南側壁面の土層断面を精査したところ、赤褐色砂質土上面において30～40cmの間隔で、幅約6mに渡り凹凸面が連続して続いていることが確認できた。また、掘り下げ作業中においては、赤褐色砂質土中に褐灰色を呈し、径約5～8cmの円形状を呈する植物の株痕のようなものが点々と分布する部分を確認していた。この分布域と南側壁面で確認できた凹凸面が層位的に一致することから、凹凸面は畝、円形状のものが点在する部分を畝の可能性のあるものとして考えた。畝跡として報告されているものの中には、検出面において見られる円形状の痕跡は、栽培されていた植物の株や耕作動物等の足跡とされる例もある。本遺構にあつては、植物株や足跡を裏付けるような明確な情報は得られなかった。遺物は皆無であり、時期については不明である。(浅田)



第26図 畝土層断面図

## 第6節 小結

三保第1遺跡の発掘調査は一般国道9号（東伯中山道路）の改築工事に伴い、平成16年度に実施したものである。調査の結果、縄文時代から古墳時代に至るまでの遺構・遺物を確認した。検出した遺構・遺物は全て1～3区のものである。4区は当遺跡の西側を流れる洗川もしくはその支流の影響を受けたものと思われる砂層が堆積する。そのため遺物包含層は存在せず、遺構・遺物は皆無であった。よって以下に、1～3区を中心に調査結果を時代順にまとめて述べることにする。

**縄文時代** 遺構は検出されず、遺物のみの確認である。鉢もしくは深鉢と思われる破片が数点出土している。船元式もしくは布勢式に属するもので、縄文時代中期～後期前葉のものである。調査区の外に遺構が存在する可能性が考えられる。

**弥生時代** 前期後葉の遺構・遺物を確認した。遺物は鉢や甕を主とし、口縁部端部に刻目を持つもの、胴部に刻目のある貼付突帯を伴うものなどが出土している。遺構は土坑2基、集石7基を調査した。このうち、2区で検出した土坑2、集石1は埋葬施設と考えられるものである。埋土には炭化物が含まれている。また、人頭大の礫に混じり土器が多数出土している。3区からは、川原石を塊状に集めた集石が6基確認された。それぞれの集石は環状に配置されている。2区の埋葬施設と合せ、一連の墓域を形成するものと考えられる。詳細は第6章第2節に述べているので、そちらを参照されたい。昨年度調査された同時期中尾第1遺跡の土坑墓と合せ、東伯者における前期の墓制を考える上で注目される遺構である。周辺地域での今後の資料の増加がまたれる。

**古墳時代** 竪穴住居2棟、溝3条、土坑5基、集石1基を確認した。遺物は土師器や、須恵器、直刃鎌、ガラス製の小玉などが出土している。遺構・遺物の時期は前期から中期後葉のものである。2・3区で確認した溝2・3は水流のあったことが確認でき、底面からは多数の土師器片が出土している。ガラス製の小玉は溝3からの出土である。出土した遺物は全て破砕面がシャープで、水流によるローリングを受けた形跡は認められなかった。このことから、これら遺物は出土場所からさほど遠くない上流域で溝の中に投棄されたものと考えられ、調査区の外においても当時代の遺構が分布していることが指摘できる。この時代にあっては、集落が形成されていたことが考えられる。

**その他の時代** 溝3条、土坑1基、畠を確認した。遺物が出土していないため、いずれも詳細な時期については不明である。溝は重複する部分があるものの、同一検出面であることより、ほぼ同時期に存在した可能性がある。性格については不明である。畠については赤褐色砂質土上面において植物ないしは足跡と考えられる円形または楕円形の痕跡を確認した。また、2区南壁において畝と考えられる凹凸面が明瞭に観察できた。土坑は最終遺構確認面上において、底部部分のみ確認した。掘り込み面を確認することはできなかった。底面にピットを持つことから落とし穴の可能性があるが、詳細については不明である。

今回の調査では、当遺跡周辺地域においては類例の少ない沖積平地における弥生時代～古墳時代の遺構を確認することができた。これは丘陵部において確認されている、同時期の三保遺跡や笠見第3遺跡、久蔵峰北遺跡等の集落との関係や集落の変遷について比較検討できる貴重な情報を得ることができたといえる。また、県内において不明な点の多い、弥生時代前期における墓制を考える上で貴重な資料を得ることもできた。

（浅田）



土器観察表 1

挿図 No.	掲載 No.	区	掲載 遺構名	調査時 遺構名	器種	種類	計測値 (cm)			調 整	色 調	胎 土	備 考
							口径	器高	底径				
5	1	3区	遺構外	黒褐色土	鉢	縄文				内外面：ナデ	鈍黄橙色	密、砂粒含	胴部に刺突文
	2	1区			深鉢	縄文				外面：縄文 内面：ヘラミガキ	鈍黄橙色	密、砂粒含	外面、口唇部に縄文→沈線文
	3	2区			深鉢	縄文				外面：口唇部縄文、ナデ、 内面：板状工具によるナデ	灰黄褐色	密、砂粒含	
8	4	2区	土坑2	SK8	壺	弥生				外面：ハケメ→ヘラミガキ 内面：ナデ	鈍橙色	密、石英・長石少含	外面に沈線3条以上
	5				壺	弥生				内外面：ヘラミガキ	明褐色	密、石英多含	外面に刻目付貼付突帯
	6				甕	弥生				外面：ナデ 内面：ハケメ→ナデ	鈍褐色	密、砂粒含	口唇部に刻目
	7				甕	弥生				内外面：ナデ	浅黄橙色	密	口縁部に刻目付貼付突帯
	8				甕	弥生				内外面：ハケメ	灰黄褐色	密、石英・長石多含	頸部に沈線3条以上、外面に煤付着
	9				甕	弥生			8.9	内外面：ハケメ→ナデ	橙色	密、礫含	内面に煤付着
9	10	2区	集石1	集石8	短頸壺	弥生	*12.8			内外面：ナデ、ヘラミガキ	鈍橙色	密、砂粒僅含	頸部に貼付突帯
	11				甕	弥生				内外面：ナデ	鈍褐色	密、石英含	口唇部に刻目、頸部に沈線1条以上
	12				壺	弥生				内外面：ヘラミガキ	鈍褐色	密、砂粒含	外面に刻目付貼付突帯
	13				甕	弥生	*22.4			外面：ハケメ→ナデ 内面：口縁部ナデ、胴部ハケメ	鈍褐色	密、石英多含	外面に煤付着
	14				甕	弥生		*7.6		外面：ハケメ、底面ケズリ 内面：ナデ	鈍橙色	密、石英・橙色粒少含	
	15				甕	弥生		*10.7		外面：ハケメ→ナデ 内面：ナデ→ヘラミガキ	灰黄褐色	密、石英含	内外面に煤付着
	16				甕	弥生		7.9		外面：ハケメ→ヘラミガキ 内面：ナデ	鈍橙色	密、石英・長石多含	底部焼成後に穿孔
10	17	2区	集石5	集石3	鉢	弥生			内外面：条痕	鈍黄橙色	密		
11	18	2区	遺構外	黒褐色土	壺	弥生	*16.0			外面：ナデ 内面：ハケメ→ナデ→ヘラミガキ	橙色	密、石英含	
	19			暗褐色土	壺	弥生	*16.0			内外面：ヘラミガキ	明赤褐色	密、石英・砂粒多含	
	20			黒褐色土	壺	弥生				外面：ハケメ→ナデ→ヘラミガキ 内面：ナデ	鈍黄橙色	密、石英含	口唇部に沈線刻目、内面に刺突
	21				壺	弥生				外面：器面が風化し調整不明 内面：ヘラミガキ	橙色	密、石英・長石含	
	22				壺	弥生				外面：ヘラミガキ 内面：ナデ	鈍赤褐色	密、石英多含	外面に赤彩
	23			3区	黒褐色土	壺	弥生				外面：ナデ 内面：条痕	鈍黄橙色	密、砂粒含
	24	壺	弥生					外面：ヘラミガキ 内面：ナデ	鈍褐色	密、石英・長石含	外面に貝殻復縁による施文		
	25	2区	黒褐色土	無頸壺	弥生				外面：ヘラミガキ 内面：ナデ	橙色	密、石英・橙色粒多含	口縁部に貼付突帯3条、穿孔、赤彩	
	26			壺	弥生				外面：ヘラミガキ 内面：ナデ	鈍褐色	密、砂粒含	外面に刻目付貼付突帯3条、赤彩、外傾接合	
	27		黒褐色土	壺	弥生				内外面：ナデ	鈍褐色	密、石英・橙色粒少含	胴部に刻目付貼付突帯	
	28			壺	弥生				外面：ヘラミガキ 内面：ナデ	鈍赤褐色	密、砂粒少含	外面に刻目付貼付突帯	
	29			壺	弥生				内外面：ヘラミガキ	鈍褐色	密、石英含	外面に刻目付貼付突帯、外傾接合	
	30		3区	黒褐色土	壺	弥生				外面：ヘラミガキ 内面：ナデ	鈍褐色	密、砂粒含	外面に刻目付貼付突帯、外傾接合
	31	2区	黒褐色土	壺	弥生				外面：ヘラミガキ 内面：ハケメ→ナデ→ヘラミガキ	鈍黄橙色	密、石英・橙色粒含	貼付突帯、内外面に赤彩	
	32			壺	弥生				内外面：ナデ	明赤褐色	密、石英多含	胴部に刻目付貼付突帯	
	33			壺	弥生		10.3		内外面：ハケメ→ナデ	鈍黄褐色	密、石英・長石含		
34			黒褐色土	甕	弥生				外面：ハケメ 内面：ナデ	鈍黄褐色	密、石英・橙色粒含	頸部に沈線2条、外面に煤付着、外傾接合	
35			甕	弥生					外面：ハケメ 内面：ナデ	鈍黄褐色	密、石英・橙色粒僅含	口縁部に刻目付貼付突帯、頸部に沈線2条、外面に煤付着、外傾接合	
36			甕	弥生					外面：ナデ 内面：ハケメ→ナデ	鈍黄褐色	密、石英・砂粒含	頸部に沈線2条、外傾接合	

土器観察表 2

挿図 No.	掲載 No.	区	掲載遺構名	調査時遺構名	器種	種類	計測値 (cm)			調整	色調	胎土	備考	
							口径	器高	底径					
11	37	3区	遺構外	黒褐色土	甕	弥生				外面：ハケメ→ヘラミガキ 内面：ナデ	鈍橙色	密、石英・長石・橙色粒多	口縁部粘土貼付、外面に煤付着、外傾接合	
	38			黒褐色土	甕	弥生		3.3		外面：ナデ 内面：ナデ	鈍黄褐色	密、砂粒含	口縁部に刻目付貼付突帯、外面に煤付着	
	39				甕	弥生				外面：ナデ 内面：ハケメ→ナデ	灰黄褐色	密	頸部に沈線4条以上、外面に煤付着、外傾接合	
	40			2区	黒褐色土	甕	弥生				外面：ナデ 内面：ヘラミガキ	鈍黄褐色	密、石英含	口縁部粘土貼付、外面に煤付着、外傾接合
	41					甕	弥生	*22.0			外面：ハケメ→ナデ 内面：ナデ	鈍黄褐色	密、礫含	口唇部に刻目、頸部に沈線3条
	42					甕	弥生				器面摩滅し調整不明	鈍橙色	密、石英・長石多含	口唇部に刻目、頸部に貼付突帯
	43	3区		黒褐色土	甕	弥生				内外面：ナデ	鈍黄褐色	密、石英僅含	口縁部粘土貼付	
	44				甕	弥生				外面：ナデ 内面：ヘラミガキ	鈍橙色	密	口縁部粘土貼付、外傾接合	
	45	2区		暗褐色土	甕	弥生	*23.0			外面：ハケメ→ヘラミガキ 内面：ハケメ→ナデ	鈍褐色	密、砂粒多含	外面に煤付着、外傾接合	
	46			黒褐色土	甕	弥生				外面：ハケメ→ナデ 内面：ナデ	鈍黄褐色	密、石英・橙色粒少含	頸部に沈線1条、外面に煤付着、外傾接合	
	47				甕	弥生				内外面：ハケメ→ナデ	浅橙色	密、石英・橙色粒含	外面に煤付着	
	48				甕	弥生				外面：口縁部ナデ、胴部ハケメ→一部ヘラミガキ 内面：ハケメ→ナデ	鈍黄褐色	密、石英・雲母・砂粒含	外面に煤付着	
	49			3区	暗褐色土	甕	弥生				外面：ヘラミガキ、条痕 内面：ヘラミガキ	鈍黄褐色	密、石英・橙色粒含	外傾接合
	50					甕	弥生				外面：ナデ 内面：ハケメ→ナデ	鈍黄褐色	密、石英含	胴部に沈線3条
	51	2区		暗褐色土	甕	弥生				外面：条痕 内面：ナデ	鈍橙色	密、石英含	頸部に沈線3条、外面に煤付着、外傾接合	
52			甕	弥生				内外面：ナデ	浅黄橙	密、石英少含	外面に沈線4条以上、沈線間に刺突文			
53	1区		暗褐色土	甕	弥生		*9.2		外面：ハケメ、外面底部：ナデ 内面：ナデ	橙色	密、石英含			
54	2区		甕	弥生		9.0		外面：ハケメ 内面：ハケメ→ナデ	鈍い橙色	密、石英・長石多含	内面に煤付着			
55		黒褐色土	甕	弥生		6.8		外面：ハケメ 内面：ナデ	鈍褐色	密、石英・長石含	外傾接合			
12	56	2区	黒褐色土	甕	弥生	*28.6			外面：条痕 内面：ナデ	灰褐色	密、砂粒多含	口縁部に刻目付貼付突帯、内傾接合		
	57		深鉢	弥生				外面：条痕 内面：ナデ	鈍黄褐色	密、石英・橙色粒含	口縁部に刻目付貼付突帯、内傾接合			
	58	3区	暗褐色土	深鉢	弥生				内外面：ナデ	鈍黄褐色	密、砂粒含	口唇部に刻目		
	59		黒褐色土	深鉢	弥生				外面：条痕 内面：ナデ	灰黄褐色	密、砂粒多含	外面に煤付着、外傾接合		
	60		2区	黒褐色土	深鉢	弥生			外面：条痕 内面：ナデ	灰黄褐色	密、石英・橙色粒・礫多含			
14	61	1区	住居1	SI 2	甕	土師	*16.0			外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、肩部ヘラケズリ	浅黄褐色	密、長石少含		
	62				甕	土師				内外面：ナデ	鈍橙色	密、長石・橙色粒少含	外面に煤付着	
	63				高坏	土師	*17.2			内外面：ハケメ→ナデ	橙色	密、石英・長石少含		
	64				高坏	土師				外面：ハケメ→面取り	橙色	密		
	65				小型丸底壺	土師				外面：ハケメ→ナデ 内面：ナデ、ヘラケズリ	浅黄褐色	密	外面に赤彩	
	66				坏身	土師	13.2			外面：ヨコナデ、ナデ 内面：ヨコナデ→底面仕上げナデ	灰色	密		
15	67	3区	住居2	SI 1	甕	土師	*12.6			外面：口縁部ナデ、肩部ハケメ→ナデ、胴部ハケメ 内面：口縁部～肩部ナデ、胴部ヘラケズリ	鈍褐色	密、石英・長石多含		
	68				甕	土師				内外面：ナデ	鈍黄褐色	密	外面に煤付着	
	69				甕	土師				内外面：ナデ	浅黄褐色	密	外面に赤彩	
	70				高坏	土師				外面：ナデ 内面：放射状の暗文風ミガキ	橙色	密		
	71				高坏	土師	*14.5			外面：ハケメ→ナデ→ヘラミガキ 内面：器面剥離し調整不明瞭	橙色	密		

土器観察表3

挿図 No.	掲載 No.	区	掲載 遺構名	調査時 遺構名	器種	種類	計測値 (cm)			調 整	色 調	胎 土	備 考
							口径	器高	底径				
15	72	3区	住居2	SI 1	高坏	土師				外面：ハケメ→面取り→ヘラミガキ 内面：ハケメ	鈍黄褐色		外面に赤彩
	73				高坏	土師			9.6	外面：ハケメ→面取り→ヘラミガキ 内面：ハケメ	鈍橙色	密	
	74				椀	土師	*11.3			外面：ケズリ→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	橙色	密	
16	75	3区	土坑7	SK 1	甕	弥生				内外面：ハケメ→ナデ	鈍黄橙色	密、石英・橙 色粒含	
	76				甕	弥生				内外面：ナデ	灰黄色	密、石英多含	口唇部に刻目、頸部に沈 線3条以上、外傾接合
17	77	2区	集石8	集石7	壺	弥生				外面：ヘラミガキ 内面：ナデ	橙色	密、石英・橙 色粒含	外面に沈線4条以上、外 傾接合
19	78	1区	溝2	SD 7	甕	土師	*14.4			内外面：ナデ	灰黄色	密	外面煤付着
	79				甕	土師	*16.3			内外面：ナデ	鈍黄褐色	密、石英少含	内・外面に煤付着
	80				甕	土師				外面：口縁部ナデ、頸部ハケメ→ ナデ 内面：ナデ	浅黄橙色	密、石英少含	
	81				高坏	土師				外面：ハケメ 内面：放射状の暗文風ミガキ	橙色	密	
	82				坏蓋	須恵				外面：回転ヘラケズリ 内面：ヨコナデ→一部仕上げナデ	灰色	密	
21	83	2区	溝3	SD 5	甕	土師	*17.0			外面：口縁部ナデ、肩部～胴部ハ ケメ 内面：ナデ→ケズリ	鈍黄橙色	密、石英・砂 粒含	肩部に貝殻復縁による刺 突文
	84			SD 6	甕	土師	*11.4			内外面：ナデ	鈍黄褐色	密、石英多含	
	85			SD 5	甕	土師	*14.2			内外面：ナデ	鈍黄褐色	密、石英・長 石多含	外面に煤付着
	86			SD 5	甕	土師				内外面：ナデ	鈍黄褐色	密、石英少含	外面に煤付着
	87			SD 6	甕	土師	*10.3			内外面：ナデ	鈍黄褐色	密、石英少含	外面に煤付着
	88			SD 6	鼓形 器台	土師	*24.4			内外面：ナデ	鈍黄褐色	密、石英少含	
	89			SD 6	壺	土師	*9.4			外面：ナデ 内面：ナデ→ケズリ	鈍橙色	密、石英少含	外面に煤付着
	90			SD 5	高坏	土師				外面：ハケメ→ナデ 内面：ハケメ→ヘラミガキ	橙色	密、砂粒少含	
	91			SD 5	高坏	土師	*21.7			外面：ハケメ→ナデ→ヘラミガキ 内面：ハケメ→多角形状のヘラミ ガキ	鈍橙色	密、石英僅含	
	92			SD 5	椀	土師	*11.3	4.6		外面：ナデ、底部手持ちヘラケズ リ 内面：ナデ	鈍黄褐色	密、石英・長 石含	
	93			SD 5	高坏	土師				外面：ハケメ→面取り 内面：坏部ヘラミガキ、脚部ハケ メ	鈍赤褐色	密	
	94			SD 5	高坏	土師				外面：坏部ハケメ→ヘラミガキ、 脚部ハケメ→面取り→ヘラミガキ 内面：坏部ハケメ→ヘラミガキ	鈍赤褐色	密、長石・橙 色粒少含	外面に赤彩
	95			SD 5	坏蓋	須恵	*12.8	4.4		外面：回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面：ヨコナデ→仕上げナデ	灰色	密	左回転のロクロ、断面は 赤灰色
	96			SD 6	坏蓋	須恵	13.0	4.2		外面：回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面：ヨコナデ	灰色	密	左回転のロクロ、断面は 赤灰色
	97			SD 5・6	坏身	須恵	*13.2	3.0		外面：ヨコナデ、回転ヘラケズリ 内面：ヨコナデ→底面仕上げナデ	暗灰色	密、砂粒僅含	左回転のロクロ
	98			SD 5	甕	須恵				内外面：ナデ	灰色	密	頸部・胴部に波状文、断 面は赤灰色
	99			SD 5	甕	弥生				内外面：ヘラミガキ	鈍橙色	密、石英・長 石少含	胴部に刻目付貼付突帯、 外傾接合
	100			SD 5	甕	弥生	*17.9			外面：ハケメ→ナデ 内面：ナデ	鈍黄褐色	密	口唇部に刻目、頸部に沈 線1条、外傾接合
101	SD 5	甕	弥生				内外面：ナデ	褐灰色	密、石英僅含	口唇部に刻目、外傾接合			
102	SD 6	壺	弥生			*9.5	外面：ハケメ→ナデ→ヘラミガキ 内面：ナデ	鈍黄褐色	密、石英・長 石多含	外面に沈線2条			
22	103	2区	遺構外	暗褐灰色 土	壺	土師				外面：タテハケメ・ヨコハケメ→ ナデ 内面：ナデ	鈍橙色	密、石英多含	
	104	1区	遺構外	暗褐灰色 土	甕	土師	*13.6			外面：口縁部ナデ、肩部ハケメ→ ナデ 内面：口縁部ナデ、胴部ケズリ	鈍黄褐色	密	外面に煤付着
	105				壺	土師	*11.4			外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、胴部ケズリ	橙色	密	外面に煤付着

## 土器観察表 4

挿図 No.	掲載 No.	区	掲 載 遺構名	調査時 遺構名	器種	種類	計 測 値 (cm)			調 整	色 調	胎 土	備 考
							口径	器高	底径				
22	106	1区	遺構外	暗褐色土	甕	土師	*15.7			内外面：ナデ	鈍橙色	密、石英・橙 色粒僅含	外面に煤付着
	107				甕	土師				内外面：ナデ	灰黄褐色	密、石英僅含	
	108				甕	土師	*13.0			外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、胴部ハケメ	鈍橙色	密、石英・橙 色粒僅含	外面に煤付着
	109				甕	土師	*15.0			外面：口縁部ナデ、胴部上半ハケ メ、下半ハケメ→ナデ 内面：ケズリ	鈍黄褐色	密、石英・砂 粒含	外面に煤付着、波状沈線
	110				高坏	土師	*20.9			内外面：ハケメ→ナデ→ミガキ	橙色	密、石英僅含	
	111	3区			高坏	土師	*16.5			外面：ハケメ→ナデ→一部ヘラミ ガキ 内面：ハケメ→ナデ→放射状の暗 文風ミガキ	明赤褐色	密	
	112				高坏	土師		14.6		外面：ハケメ→面取り→ナデ 内面：ケズリ、ハケメ→ナデ	鈍黄褐色	密	3箇所に円形の透かし穴
	113	1区			高坏	土師	*16.2	11.3	*9.9	外面：坏部ハケメ→ナデ、脚部ハ ケメ→面取り 内面：坏部ハケメ→放射状の暗文 風ミガキ	橙色	密、石英少含	
	114				高坏	土師	*18.0			外面：坏部器面剥離し調整不明、 脚部ハケメ→ヨコミガキ 内面：縁部器面剥離し調整不明、 ヘラミガキ	鈍黄褐色	密、石英少含	
	115				高坏	土師			9.3	外面：ハケメ→面取り→ヘラミガ キ 内面：ハケメ→ナデ	鈍橙色	密	
	116				高坏	土師			9.4	外面：ナデ→ヘラミガキ 内面：ハケメ	鈍橙色	密	
	117				攪乱土	直口壺	須恵	*9.6			内外面：ヨコナデ	青灰色	密

## 石器観察表

挿図 No.	掲載 No.	区	掲 載 遺構名	調査時 遺構名	器 種	計 測 値 (cm)			重 量 (g)	石 材	備 考
						最大長	最大幅	最大厚			
8	S 1	2区	土坑 2	SK 8	石鎌	12.8	10.4	3.1	524.7	板状安山岩	
	S 2				敲石	10.9	8.6	7.2	933.0	角閃石花崗岩	表裏面に磨りの痕残る。
10	S 3	3区	集石 4	集石 5	凹石	13.8	11.1	7.5	1420.0	角閃石安山岩	上面には、磨り痕顕著に残る。
12	S 4	3区	遺構外	暗褐色土	敲石	14.7	6.6	6.1	830.0	細粒花崗岩	
	S 5			3区	石鎌	2.1	0.4	1.4	1.3	安山岩	凹基式
	S 6	2区		2区	石鎌	2.5	1.4	0.5	1.2	黒曜石	凹基式か？
	S 7			黒褐色土	剥片	7.2	5.4	1.5	35.8	黒曜石	
14	S 8	1区	住居 1	SI 2	磨石	29.4	22.5	6.2	6570.0	角閃石安山岩	
	S 9				台石	33.2	28.8	13.1	17200.0	角閃石安山岩	
21	S 10	2区	溝 3	SD 6	石鎌	2.6	1.6	0.6	1.2	安山岩	
	S 11			SD 5	敲石	15.1	7.2	5.1	710.0	細粒花崗岩	

## 玉観察表

挿図 No.	掲載 No.	区	掲 載 遺構名	調査時 遺構名	器 種	計 測 値 (cm)			重 量 (g)	材 質	備 考
						最大長	最大幅	最大厚			
21	J 1	2区	溝 3	SD 6	小玉		0.5	0.3	0.1	ガラス	中心部分に径1.5mmの穿孔、青色。

## 金属製品観察表

挿図 No.	掲載 No.	区	掲 載 遺構名	調査時 遺構名	器 種	計 測 値 (cm)			重 量 (g)	材 質	備 考
						最大長	最大幅	最大厚			
15	M 1	3区	住居 2	SI 1	鎌	19.5	3.2	1.0	173.0	鉄	直刃鎌 刃部に木質付着。

## 第5章 自然科学分析

### 第1節 放射性炭素年代測定

上伊勢第1遺跡の竪穴住居3は、出土遺物から弥生時代前期後葉から中期前葉にかけてのものである。また、この竪穴住居は、焼土や垂木として使用されていたと考えられる炭化材が検出されており、焼失住居と考えられるものであった。このため、竪穴住居3はこの時期の実年代を知るための良好な試料となり得るものと考えられた。そこで、この竪穴住居から出土した炭化材の年代測定を行うこととした。測定は、株式会社加速器分析研究所に委託して行った。

#### 算出方法

- (1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用している。
- (2) BP年代値は、1950年からさかのぼること何年前かを表している。
- (3) 付記した誤差は、標準偏差（ $1\sigma$ ）に相当する年代で、以下のように算出している。  
複数回（通常は4回）の測定値において $\chi^2$ 検定を行い、測定値のばらつきが小さい場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、ばらつきが大きい場合には不偏分散の平方根（標準偏差）と統計誤差から求めた値を比較して大きい方を誤差としている。
- (4)  $\sigma^{13}\text{C}$ の値は、通常、質量分析計を用いて計測するが、AMS測定の場合には、同時に測定される $\delta^{13}\text{C}$ の値を用いることもある。  
 $\sigma^{13}\text{C}$ 補正をしない場合の同位対比および年代値を参考として掲載している。

同位対比は、いずれも基準からのずれを千分偏差（‰）で表したものである。

$$\sigma^{14}\text{C} = [(^{14}\text{A}_S - ^{14}\text{A}_R) / ^{14}\text{A}_R] \times 1000 \quad \dots\dots (1)$$

$$\sigma^{13}\text{C} = [(^{13}\text{A}_S - ^{13}\text{A}_{\text{PDB}}) / ^{13}\text{A}_{\text{PDB}}] \times 1000 \quad \dots\dots (2)$$

ここで、 $^{14}\text{A}_S$ ：試料炭素の $^{14}\text{C}$ 濃度： $(^{14}\text{C}/^{12}\text{C})_S$ または $(^{14}\text{C}/^{13}\text{C})_S$

$^{14}\text{A}_R$ ：標準現代炭素の $^{14}\text{C}$ 濃度： $(^{14}\text{C}/^{12}\text{C})_R$ または $(^{14}\text{C}/^{13}\text{C})_R$

$\sigma^{13}\text{C}$ は、質量分析計を用いて試料炭素の $^{13}\text{C}$ 濃度（ $^{13}\text{A}_S = ^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ）を測定し、PDP {白亜紀のペレムナイト（矢石）類の化石}の値を基準として、それからのずれを計算している。

ただし、IAAでは加速器により測定中に同時に $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ も測定しているため、標準試料の測定値との比較から算出した $\sigma^{13}\text{C}$ を用いることもある。この場合には、表中に「加速器」と注記している。

また、 $\Delta^{14}\text{C}$ は試料炭素が $\sigma^{13}\text{C} = -25.0$ （‰）であるとしたときの $^{14}\text{C}$ 濃度（ $^{14}\text{A}_N$ ）に換算した上で計算した値である。（1）式の $^{14}\text{C}$ 濃度を、 $\sigma^{13}\text{C}$ の測定値をもとに次式のように換算している。

$$^{14}\text{A}_N = ^{14}\text{A}_S \times [0.975 / (1 + \sigma^{13}\text{C}/1000)]^2 \quad (^{14}\text{A}_S \text{として} ^{14}\text{C}/^{12}\text{C} \text{を使用するとき})$$

または



$$= {}^{14}\text{A}_S \times [0.975 / (1 + \sigma^{13}\text{C}/1000)] \quad ({}^{14}\text{A}_S \text{として } {}^{14}\text{C}/{}^{13}\text{C} \text{を使用するとき})$$

$$\Delta^{14}\text{C} = [({}^{14}\text{A}_N - {}^{14}\text{A}_R) / {}^{14}\text{A}_R] \times 1000 \text{ (‰)}$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気中の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない $\sigma^{14}\text{C}$ に相当するBP年代値が、比較的良好その貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致している。

${}^{14}\text{C}$ 濃度の現代炭素に対する割合に対するもう一つの表記として、pMC (percent Modern Carbon) がよく使われており、 $\Delta^{14}\text{C}$ との関係は次のようになる。

$$\Delta^{14}\text{C} = (\text{pMC}/100 - 1) \times 1000 \text{ (‰)}$$

$$\text{pMC} = \Delta^{14}\text{C}/10 + 100 \text{ (‰)}$$

国際的な取り決めにより、この $\Delta^{14}\text{C}$ あるいはpMCにより、放射線炭素年代 (Conventional Radiocarbon Age ; yrBP) が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln [(\Delta^{14}\text{C}/1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln (\text{pMC}/100)$$

表1 放射性炭素年代測定結果

IAA Code No.	試料	BP年代および炭素の同位対比
IAAA-40606	試料採取場所 : 上伊勢第1遺跡	Libby Age (yrBP) : 2,440 ± 30 $\sigma^{13}\text{C}$ (‰)、(加速器) = -26.52 ± 0.56 $\Delta^{14}\text{C}$ (‰) = -262.2 ± 3.0 pMC (%) = 73.38 ± 30
	試料形態 : 木炭 試料番号 : No.1(1186)	
#623-1	(参考) $\sigma^{13}\text{C}$ の補正なし	$\sigma^{14}\text{C}$ (‰) = -264.5 ± 2.9 pMC (%) = 73.55 ± 0.29 Age (yrBP) : 2,470 ± 30
IAAA-40607	試料採取場所 : 上伊勢第1遺跡	Libby Age (yrBP) : 2,270 ± 30 $\sigma^{13}\text{C}$ (‰)、(加速器) = -29.03 ± 0.56 $\Delta^{14}\text{C}$ (‰) = -246.1 ± 3.1 pMC (%) = 75.36 ± 0.31
	試料形態 : 木炭 試料番号 : No.2(1187)	
#623-2	(参考) $\sigma^{13}\text{C}$ の補正なし	$\sigma^{14}\text{C}$ (‰) = -252.3 ± 2.9 pMC (%) = 74.77 ± 0.29 Age (yrBP) : 2,340 ± 30
IAAA-40608	試料採取場所 : 上伊勢第1遺跡	Libby Age (yrBP) : 2,250 ± 30 $\sigma^{13}\text{C}$ (‰)、(加速器) = -30.55 ± 0.56 $\Delta^{14}\text{C}$ (‰) = -244.2 ± 3.2 pMC (%) = 75.58 ± 0.32
	試料形態 : 木炭 試料番号 : No.3(1188)	
#623-3	(参考) $\sigma^{13}\text{C}$ の補正なし	$\sigma^{14}\text{C}$ (‰) = -252.8 ± 3.0 pMC (%) = 74.72 ± 0.30 Age (yrBP) : 2,340 ± 30

## 第2節 上伊勢第1遺跡焼失住居跡から出土した炭化材の樹種

鳥取大学農学部 環境樹木学研究室

教授 古川 郁 夫

専攻生 船 橋 晃

### 1. はじめに

弥生時代前期末から中期前葉にかけての竪穴住居3から採取した炭化材3点の樹種について鑑定した結果について報告する。

### 2. 鑑定方法

鑑定試料として持ち込まれた炭化物から土粒子を除去した後、乾燥したうえでSEM検鏡試料とした。検鏡試料は、実体顕微鏡のもとでカミソリを使って割裂し、木口面、柁目面および板目面の3断面を剖出した。それぞれの試料をSEM試料台にカーボン粘着テープで固定し、さらに銀ペーストで導電性を付与したうえで、金属蒸着してから、SEMで観察した。

本鑑定に供試した炭化材は、出土状況から垂木と推定されている。

### 3. 鑑定所見と結果

鑑定結果は表2に示したとおりである。

資料番号1（取上げ番号1183）は、環孔材で、孔圏は多列、孔圏道管の複合は4個以下、孔圏道管径は250 $\mu$ m程度、単穿孔を有す。道管放射組織間壁孔は小さく、多数存在し、孔圏外道管は散在状で複合は少ない。放射組織は同性型で、1-5列、高さは500 $\mu$ m程度。軸方向柔組織は随伴型で周囲状、翼状を呈し、柔細胞は層階状配列であることから、ニガキと判定した（写真1, 2, 3）。

資料番号2（取上げ番号1184）は、散孔材で、100~200 $\mu$ mの道管と小道管が2-4個放射方向に複合し、複合管孔の周りを随伴柔組織が周囲状あるいは翼状に取り囲み、単穿孔で、道管放射組織間壁孔は大きく、しばしば脛状から階段状を呈していた。放射組織は2-3列で、異性Ⅲ型、顕著な油細胞が認められたことから、クスノキ（クスノキ科）と判定した（写真4, 5, 6）

資料番号3（取上げ番号1185）は、環孔材で、孔圏道管径は300 $\mu$ m程度で多列、チロースが存在し、一部複合していた。道管放射組織間壁孔はやや大きく、ときに脛状、孔圏外道管は3個から数個が複合し、散在状、斜状、一部房状に集合していた。放射組織は1-6列の多列で異性ⅡないしⅢ型、高さは1mm程度、顕著な随伴柔組織が認められたことより、ヤマグワと判定した（写真7, 8, 9）。

### 4. 考察

本遺跡から出土した炭化材は少量であったため、住居用樹種の特徴を把握するには至らなかったが、これまでに報告されている鳥取県西部大山北山麓の低丘陵地に存在する弥生時代から古墳時代にかけての竪穴式集落住居に用いられた樹種とほぼ同じ傾向が認められた<sup>(1-11)</sup>。今回の樹種の中には、ニガキといった里山二次林の樹種が混じっており、集落周辺の樹林がかなり二次林化していたことがう

かがわれた。

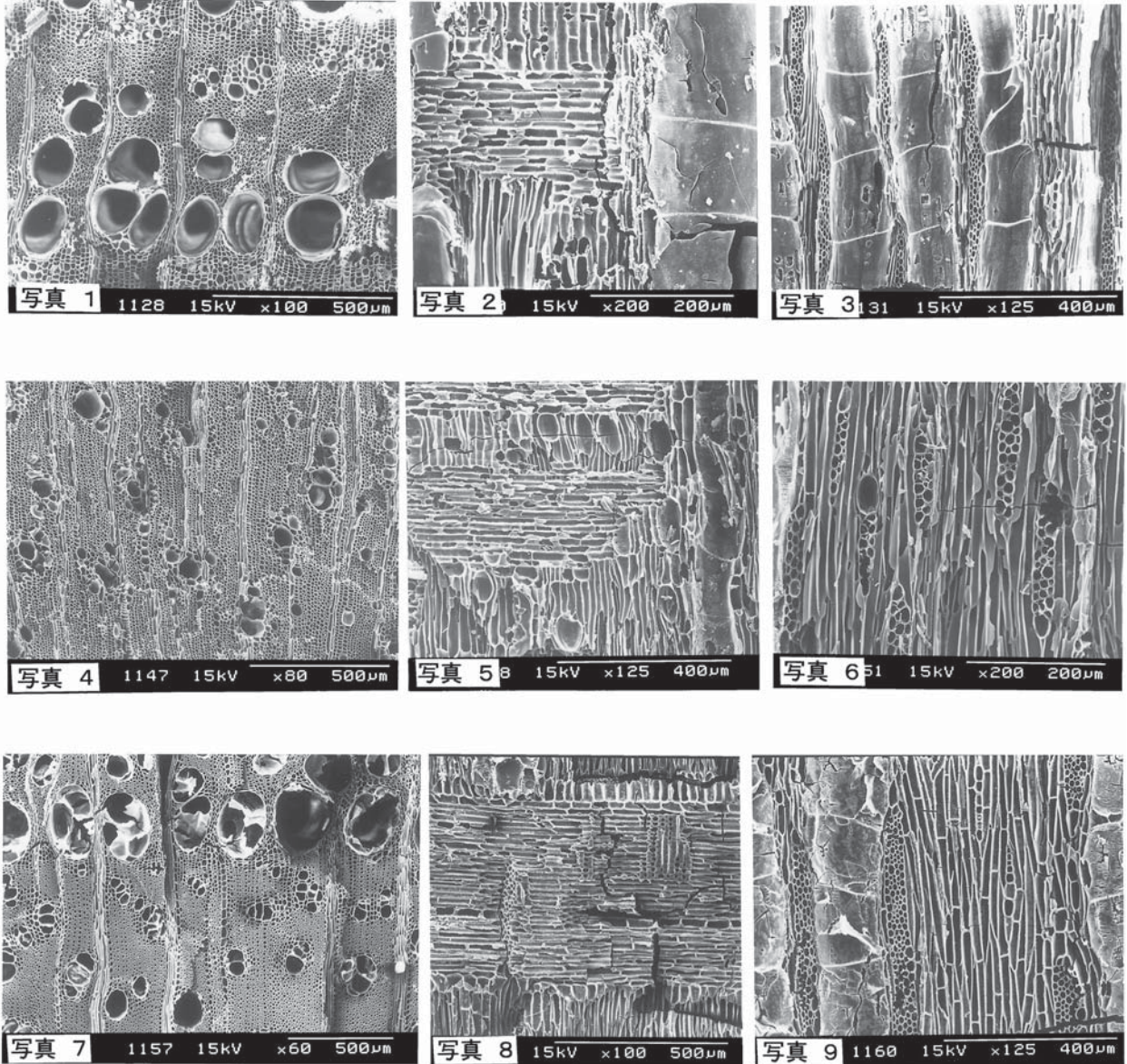
### 参考文献

1. 古川郁夫, 小泉 純, 矢部 浩, 1993, 「南谷大山遺跡住居跡出土木材炭化物の樹種構成」『鳥取県教育文化財団調査報告書32』鳥取県教育文化財団, 269-274p, 図版特論1/1-1/3.
2. 古川郁夫, 矢部 浩, 1994, 「南谷大山遺跡集落住居跡から出土した炭化物の樹種」『鳥取県教育文化財団調査報告書36』鳥取県教育文化財団, 227-230p, 図版特論2/1-2/10.
3. 古川郁夫, 1998a, 「石脇第1遺跡および第3遺跡から出土した炭化材の樹種」『鳥取県教育文化財団調査報告書54』鳥取県教育文化財団, 358-360p, 図版8/1-8/6.
4. 古川郁夫, 1998b, 「小浜ワラ畑遺跡から出土した炭化材の樹種」『鳥取県教育文化財団調査報告書55』鳥取県教育文化財団, 66-67p, 図版2/1-2/4.
5. 古川郁夫, 1999, 「長瀬高浜遺跡Ⅶ内から出土した炭化材の鑑定」『鳥取県教育文化財団調査報告書61』鳥取県教育文化財団, 227-228p, 図版3/1-3/3.
6. 古川郁夫, 2002, 「古市宮ノ谷山遺跡焼失住居跡出土炭化材の樹種」『鳥取県教育文化財団調査報告書78』鳥取県教育文化財団, 185-188p, 図版88-92.
7. 古川郁夫, 船橋 晃, 2003a, 「井岡地中ソネ遺跡焼失住居跡から出土した炭化材の樹種」『鳥取県教育文化財団調査報告書80』鳥取県教育文化財団, 151-153p, 図版80-82.
8. 古川郁夫, 船橋 晃, 2003b, 「妻木法大神遺跡出土材の樹種」『鳥取県教育文化財団調査報告書81』鳥取県教育文化財団, 129-131p.
9. 古川郁夫, 船橋 晃, 2004a, 「笠見第3遺跡焼失住居跡から出土した炭化材の樹種」『鳥取県教育文化財団調査報告書86』鳥取県教育文化財団, 488-494p, 図版181-185.
10. 古川郁夫, 船橋 晃, 2004b, 「古御堂笹尾山遺跡焼失住居跡から出土した炭化材の樹種」『鳥取県教育文化財団調査報告書93』鳥取県教育文化財団, 181-186p, 図版77-83.
11. 古川郁夫, 船橋 晃, 2005, 「化粧川遺跡焼失住居跡から出土した炭化材の樹種」『鳥取県教育文化財団調査報告書98』鳥取県教育文化財団

表2 上伊勢第1遺跡竪穴住居3出土炭化材の樹種

遺構名	試料番号(取上げ番号)	部位	樹種	写真番号
竪穴住居3	1 (1183)	垂木	ニガキ	写真1, 2, 3
	2 (1184)	垂木	クスノキ科	写真4, 5, 6
	3 (1185)	垂木	ヤマグワ	写真7, 8, 9





写真図版 1 上伊勢第 1 遺跡竪穴住居 3 出土炭化材

### 第3節 上伊勢第1遺跡の植物珪酸体

株式会社 パレオ・ラボ  
鈴木 茂

#### 1. はじめに

イネ科植物は別名珪酸植物とも呼ばれ、根より吸収した珪酸分を葉や茎の細胞内に沈積させることが知られている。こうして形成された植物珪酸体（機動細胞珪酸体や単細胞珪酸体など）については藤原（1976）や藤原・佐々木（1978）など、イネを中心としたイネ科植物の形態分類の研究が進められている。また、土壌中より検出されるイネの機動細胞珪酸体個数から稲作の有無についての検討も行われている（藤原1984）。

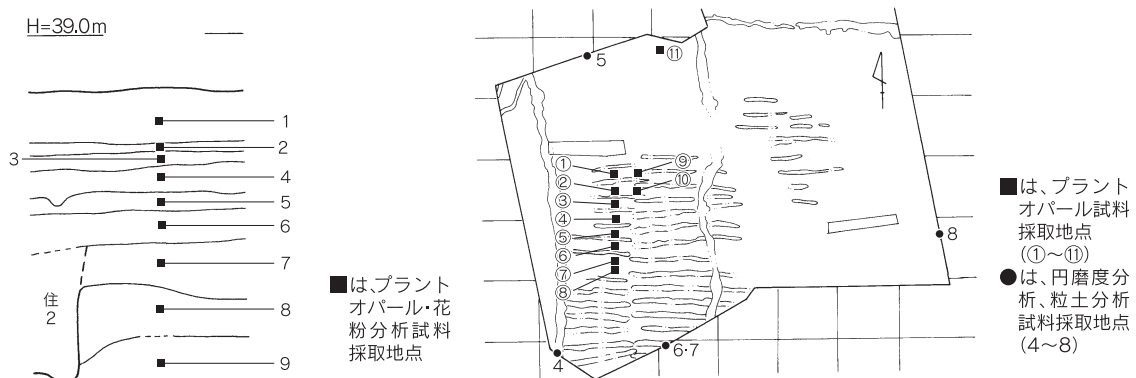
上伊勢第1遺跡の発掘調査では畝状遺構が検出され、この遺構における作物を検討する目的で土壌試料が採取された。また基本土層からもイネ科植生の移り変わりを推定する目的で土壌試料が採取された。以下にはこれらの土壌試料を用いて行った植物珪酸体分析の結果を示し、イネ科植生の変遷および畝状遺構における作物について検討した。

#### 2. 試料と分析方法

分析用試料は基本層序の1層～9層の各層1試料の9点（試料番号は層位番号と同じ）と遺構面（基本層序の6層）より採取された11点の総計20試料である（図1）。

基本層序：試料1（1層）は灰褐色シルト（表土）で、現代まで水田・芝畑・果樹園であった。試料2（2層）はにぶい黄褐色シルト、試料3（3層）は黄褐色シルトで、赤褐色酸化鉄の集積が認められる。試料4（4層）は灰褐色細砂で、出土遺物などから中世～近世と考えられている。試料5（5層）は淡黄灰色細砂（飛砂）、試料6（6層）は淡暗灰褐色シルトで、この6層上面で古代～中世の畠や耕作痕が認められている。また本層は弥生～古代の遺物包含層である。試料7（7層）は黒褐色土（黒ボク）で、時代は弥生～古墳時代と考えられている。試料8は暗褐色土（漸移層）、試料9（9層）は黄褐色土で、青灰色砂岩の小片が点在している。

遺構面試料：採取された11試料（試料番号①～⑪）はいずれも淡暗灰褐色シルトで、多くの試料で



第1図 基本層序土層・遺構面試料採取地点概略図



細根が認められる。

植物珪酸体分析はこれら20試料について以下のような手順にしたがって行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約1g（秤量）をトルビーカーにとり、約0.02gのガラスビーズ（直径約40 $\mu$ m）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20~30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により10 $\mu$ m以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作成し、検鏡した。同定および計数は機動細胞に由来する珪酸体についてガラスビーズが300個に達するまで行った。

### 3. 分析結果

同定・計数された各植物の機動細胞珪酸体個数とガラスビーズ個数の比率から試料1g当りの各機動細胞珪酸体個数を求め（表3）、それらの分布を図2（基本層序）、図3（遺構面試料）に示した。以下に示す各試料の機動細胞珪酸体個数は試料1g当りの検出個数である。

基本層序：上位4層試料と6層からイネの機動細胞珪酸体が検出された。個数としては、少ない試料4でも約27,000個と非常に多く、また上位2試料からはイネの穎部（籾殻）に形成される珪酸体の一部破片も観察されている。さらに連なったイネ型の単細胞珪酸体が4層試料より産出している。なお遺構面（6層）の一部試料からも穎部珪酸体の破片が少量ながら得られている。

イネ以外ではネザサ節型が最も多く、試料6、7では160,000個に達している。クマザサ属型も下位試料で多く検出されており、試料7では100,000個を越えている。またウシクサ族も下位試料で多い傾向がみられる。キビ族は試料6より上位で観察され、最上部試料1では約20,000個と生産量の少ないキビ族としては比較的高い数値を示している。その他、ヨシ属、シバ属などが検出されている。

遺構面試料：全試料からイネの機動細胞珪酸体が検出されており、少ない試料⑩でも約6,000個を示し、多くの試料で10,000個を越えている。また試料①、③からは穎部珪酸体の破片が若干得られている。

イネ以外ではネザサ節型がやはり最も多く、ほとんどの試料で100,000個を越えている。クマザサ属型も多く、試料⑩では200,000個近くに達している。ウシクサ属も多く、クマザサ属型同様に半数近くの試料で100,000個を越えている。キビ族が全試料から得られ、半数近くの試料で10,000個前後とやや多く観察されている。ヨシ属も全試料で認められ、個数は5,000個前後で、試料⑨では10,000個とやや多く得られている。その他ヨシ属などが若干観察されている。

### 4. 作物について

上記したように、遺構面の全試料からイネの機動細胞珪酸体が検出された。検出個数の目安として水田址の検証例を示すと、イネの機動細胞珪酸体が試料1g当り5,000個以上という高密度で検出された地点から推定された水田址の分布範囲と、実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている（藤原1984）。こうしたことから、稲作の検証としてこの5,000個を目安に、機動細胞珪酸体の産出状態や遺構の状況をふまえて判断されている。これに従うと遺構面試料においては5,000個をはるかに越える個数が得られており、検出個数からは稲作が行われていた可能性は高いと判断される。本遺構は畝状を呈しており、その形状から畑作の可能性も考えられ、そうした地点の稲作とすれば陸稲栽培

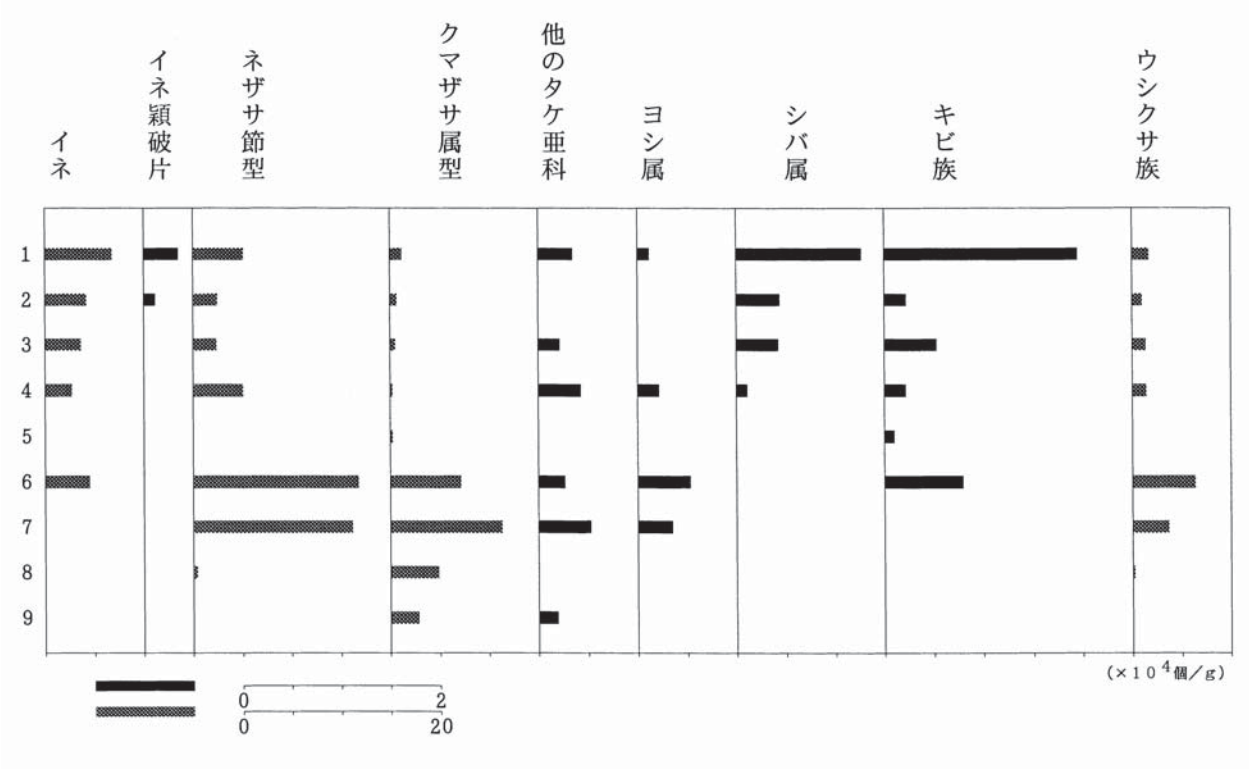
表3 試料1g当たりの機動細胞珪酸体個数

試料 番号	イネ (個/g)	イネ 穎破片 (個/g)	ネザサ 節型 (個/g)	クマザサ 属型 (個/g)	他の タケ亜科 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	シバ属 (個/g)	キビ族 (個/g)	ウシクサ 族 (個/g)	不明 (個/g)
1	67,700	3,400	50,500	11,500	3,400	1,100	12,600	19,500	17,200	10,300
2	41,500	1,100	24,000	6,600	0	0	4,400	2,200	9,800	7,600
3	35,800	0	23,100	5,300	2,100	0	4,200	5,300	13,700	13,700
4	26,700	0	50,200	2,100	4,300	2,100	1,100	2,100	13,900	9,600
5	0	0	0	1,900	0	0	0	1,000	0	1,900
6	44,900	0	167,600	71,300	2,600	5,300	0	7,900	63,400	63,400
7	0	0	161,100	112,600	5,200	3,500	0	0	36,400	46,800
8	0	0	3,500	48,400	0	0	0	0	1,700	15,600
9	0	0	0	27,800	1,900	0	0	0	0	1,900
①	51,900	1,400	113,900	79,300	10,100	4,300	0	10,100	57,700	46,100
②	58,900	0	150,100	113,600	7,000	8,400	0	11,200	50,500	36,500
③	34,000	1,400	165,700	86,900	8,100	2,700	0	8,100	124,900	66,500
④	16,500	0	144,400	79,800	1,400	9,600	0	9,600	86,700	37,100
⑤	25,500	0	97,900	90,800	1,400	4,300	0	7,100	112,100	73,800
⑥	34,200	0	136,900	124,500	2,700	5,500	1,400	8,200	80,700	45,200
⑦	12,000	0	91,800	43,900	0	4,000	0	1,300	54,500	30,600
⑧	16,400	0	123,500	76,900	1,300	2,500	0	3,800	65,500	49,200
⑨	8,600	0	118,900	113,200	2,900	10,000	1,400	2,900	126,100	60,200
⑩	20,500	0	102,300	106,300	1,400	2,700	0	1,400	105,000	65,400
⑪	5,900	0	186,200	199,500	7,400	7,400	0	1,500	128,600	76,900

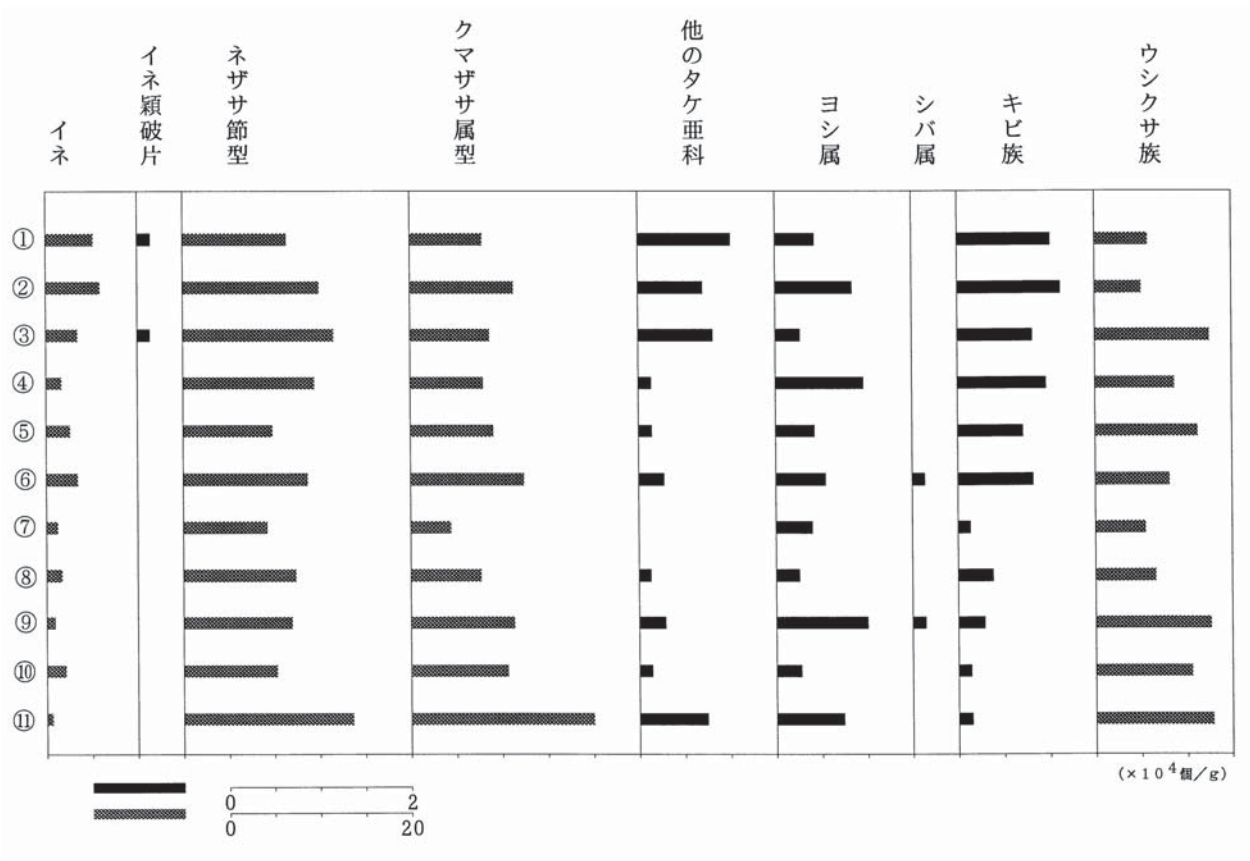
が推察される。またキビ族も半数近い試料で比較的多く検出されており、アワ・ヒエ・キビといったものが栽培されていた可能性も考えられる。しかしながらこれら栽培種とエノコログサやイヌビエなどの雑草類とを区別することは難しい状況であり、現時点では言及できない。また基本層序の6層試料について花粉分析も行われているが、花粉化石は得られていない(第4節参照)。よって上記以外の作物(野菜類など)についても不明である。以上のように畝状遺構においては稲作やキビ族の栽培が畑作として行われていた可能性も考えられるが、これについてはさらに検討が必要であろう。なおキビ族や他の作物の栽培が行われていたとすると肥料などで稲藁が使われることによりイネの機動細胞珪酸体が大量に供給されたことが考えられよう。

## 5. 遺跡周辺のイネ科植物

ネザサ節型が最も多く、特に下位の試料6、7で多産しており、ケネザサと考えられるネザサ節型のササ類が遺跡周辺の開けた日のあたるところに多く生育していたとみられる。また同層準において同じようなところでの生育が考えられるススキやチガヤなどのウシクサ族も多く検出されており、ケネザサーススキ群集といった草地在遺跡周辺に形成されていたとみられる。時代は弥生時代～中世頃と推察される。



第2図 基本層序試料の機動細胞珪酸体分布図



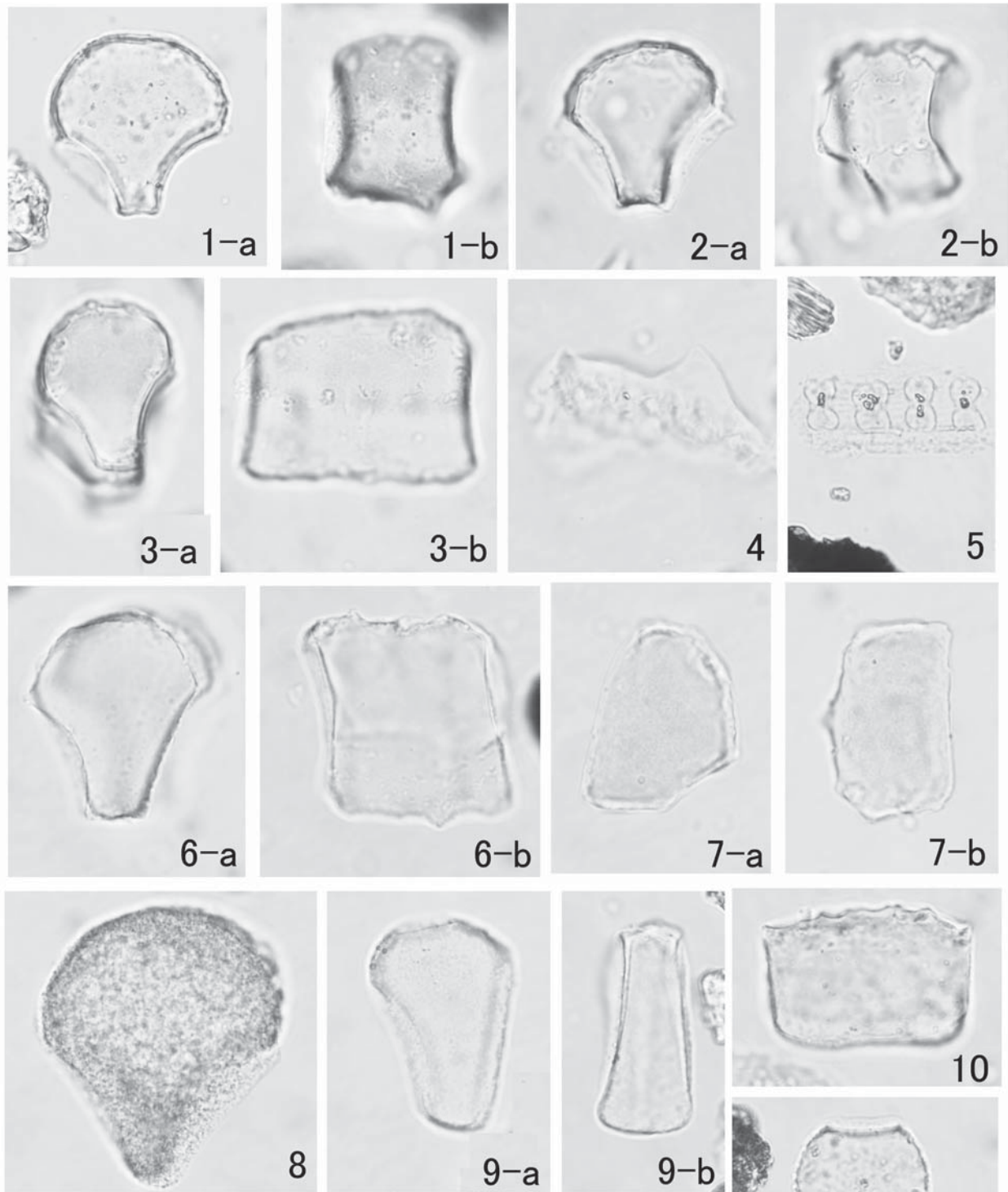
第3図 遺構面試料の機動細胞珪酸体分布図

クマザサ属型も下部試料において多く検出されている。このクマザサ属型のササ類にはチシマザサで代表されるように冷涼な気候下での生育が予想されるササ類とスズダケやミヤコザサといった暖帯上部～温帯に生育するササ類がある。時代から考えると下位層で多いクマザサ属型の一部はこのスズダケやミヤコザサといったササ類と推測される。

6層の遺構面の全試料からヨシ属が検出されている。このヨシ属は池沼や湿地などの水域や、陸域では地下水位の高いところでの生育が考えられる。この6層の時期では稲作（陸稲栽培）が行われるようになった可能性があり、比較的地下水位の高い環境でのもとの耕作が行われていたと推測される。5層は砂層が厚く体積していることから6層堆積期に行われていた耕作は一時期中断したものと思われる。その後、中世～近世の4層堆積期に再び稲作が行われるようになったとみられ、現代の水田へと至るといった変遷が推察される。この稲作地（水田）周辺の畦道などにノシバなどのシバ属が生育するようになり、最上部での多産は芝畑の存在を示唆していることも考えられる。またキビ族についてはその形態からアワ、ヒエ、キビといった栽培種によるものか、エノコログサ、スズメノヒエ、タイヌビエなどの雑草類によるものか現時点での分類は難しい状況ではあるが、上位層のキビ族については稲作にともなう雑草類（イヌビエやタイヌビエなど）の可能性が高いと考える。

#### 引用文献

1. 藤原宏志, 1976, 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1) - 数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法 -」『考古学と自然科学9』15-29p.
2. 藤原宏志, 1984, 「プラント・オパール分析法とその応用 - 先史時代の水田址探査 -」『考古学ジャーナル227』2-7p, 1984.
3. 藤原宏志・佐々木彰, 1978, 「プラント・オパール分析法の基礎的研究(2) - イネ(Oryza)属植物における機動細胞珪酸体の形状 -」『考古学と自然科学11』9-20p.



0.03mm

- 1～3：イネ（a：断面、b：側面） 1：（試料4）、2：（試料6）、3：（試料②）  
 4：イネ穎部破片（試料1）  
 5：イネ型単細胞珪酸体（試料4） No.4  
 6：ネザサ節型（a：断面、b：側面）（試料①）  
 7：クマザサ属型（a：断面、b：側面）（試料①）  
 8：ヨシ属（a：断面、b：側面）（試料②）  
 9：ウシクサ族（a：断面、b：側面）（試料2）  
 10：キビ属（側面）（試料①）  
 11：シバ属（断面）（試料3）

写真図版2 上伊勢第1遺跡の植物珪酸体 (scale bar : 0.03mm)



## 第4節 上伊勢第1遺跡の花粉化石群集

株式会社 パレオ・ラボ

新山 雅 広

### 1. 試料

花粉化石群集の検討は、基本層序（1層～9層）より採取された合計9試料について行った。各試料の簡単な記載は次のとおりである。1層（試料1）は、表土であり、現代まで水田・芝畑・果樹園であった。試料は、灰褐色シルトで根状の植物遺体を含む。2層（試料2）は、にぶい黄褐色シルトで褐鉄鉱が少し認められる。3層（試料3）は、黄褐色シルトで褐鉄鉱が発達する。4層（試料4）は、灰褐色細砂で時代は中世～近世。5層（試料5）は、飛砂であり、淡黄灰色細砂。6層（試料6）は、弥生時代～古代の遺物包含層であり、上面では古代～中世の畠や耕作痕が認められる。試料は、淡暗灰褐色シルト。7層（試料7）は、黒褐色土で時代は弥生時代～古墳時代。8層（試料8）は、暗褐色土（漸移層）。9層（試料9）は、黄褐色土で不鮮明な褐鉄鉱が認められる。なお、これら9試料は、プラント・オパール分析も行われた。

### 2. 方法

花粉化石の抽出は、試料約2～4gを10%水酸化カリウム処理（湯煎約15分）による粒子分離、傾斜法による粗粒砂除去、フッ化水素酸処理（約30分）による珪酸塩鉱物などの溶解、アセトリシス処理（氷酢酸による脱水、濃硫酸1に対して無水酢酸9の混液で湯煎約5分）の順に物理・化学的処理を施すことにより行った。なお、フッ化水素酸処理後、重液分離（臭化亜鉛を比重2.1に調整）による有機物の濃集を行った。プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に攪拌した後マイクロピペットで取り、グリセリンで封入した。検鏡は、プレパラート全面を走査し、その間に出現した全ての種類について同定・計数した。なお、複数の分類群をハイフンで結んだものは分類群間の区別が困難なものである。

### 3. 花粉化石群集の記載

全試料で同定された分類群数は、樹木花粉11、草本花粉14、形態分類で示したシダ植物孢子2である。いずれの試料も十分な花粉化石を産出せず、花粉化石分布図として示すことができなかった。以下に、各試料の花粉化石群集を記載する。

1層（試料1）：樹木花粉は、マツ属(不明)、コナラ亜属、クリ属、グミ属が僅かに産出した。草本花粉は、イネ科、アリノトウグサ属がやや目立ち、アブラナ科、キカシグサ属、ヨモギ属、タンポポ科などがわずかに産出した。

2層（試料2）：樹木花粉は、ツガ属、マツ属(不明)、ハンノキ属、コナラ亜属、アカガシ亜属、クリ属、ブドウ属、ツツジ科、ハイノキ属がわずかに産出した。草本花粉は、イネ科がやや目立ち、カヤツリグサ科、キカシグサ属、アリノトウグサ属、ヨモギ属、タンポポ科などがわずかに産出した。また、シダ植物孢子がやや目立った。

表4 花粉化石産出一覧表

和名	学名	1	2	3	4	5	6	7	8	9
樹木										
ツガ属	<i>Tsuga</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	-
マツ属 (不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	1	2	-	-	-	-	-	-	-
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	-
コナラ属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	1	2	-	-	-	-	-	-	-
コナラ属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	1	1	-	-	-	-	-	-	1
クリ属	<i>Castanea</i>	1	1	-	-	-	-	-	-	-
シイノキ属	<i>Castanopsis</i>	-	-	-	-	-	-	1	-	-
ブドウ属	<i>Vitis</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	-
グミ属	<i>Elaeagnus</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ツツジ科	<i>Ericaceae</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ハイノキ属	<i>Symplocos</i>	-	1	-	-	-	-	-	-	-
草本										
イネ科	Gramineae	22	19	1	2	-	-	-	-	-
カヤツリグサ科	Cyperaceae	2	5	1	-	-	-	-	-	-
ツユクサ属	<i>Commelina</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-
サナエタテ節 - ウナギツカミ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i> -Echinocaulon	-	1	-	-	-	-	-	-	-
アカザ科 - ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ナデシコ科	Caryophyllaceae	2	-	-	-	-	-	-	-	-
アブラナ科	Cruciferae	5	1	1	-	-	-	-	-	-
キジムシロ属 近似種	cf. <i>Potentilla</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-
キカシグサ属	<i>Rotala</i>	2	1	-	-	-	-	-	-	-
アリノトウグサ属	<i>Haloragis</i>	10	2	-	-	-	-	-	-	-
セリ科	Umbelliferae	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	4	9	1	-	-	-	-	-	-
他のキク亜科	other Tubuliflorae	1	1	-	-	-	-	-	-	3
タンポポ亜科	Liguliflorae	5	4	-	3	-	-	-	-	1
シダ植物										
単条型孢子	Monolete spore	8	18	3	4	-	-	-	-	-
三条型孢子	Trilete spore	2	19	2	-	-	-	-	-	-
樹木花粉										
草本花粉	Arboreal pollen	4	11	0	0	0	0	1	0	1
シダ植物孢子	Nonarboreal pollen	56	44	4	5	0	0	0	0	4
花粉・孢子総数	Spores	10	37	5	4	0	0	0	0	0
	Total Pollen & Spores	70	92	9	9	0	0	1	0	5
不明花粉	Unknown pollen	6	9	0	2	0	0	1	0	0

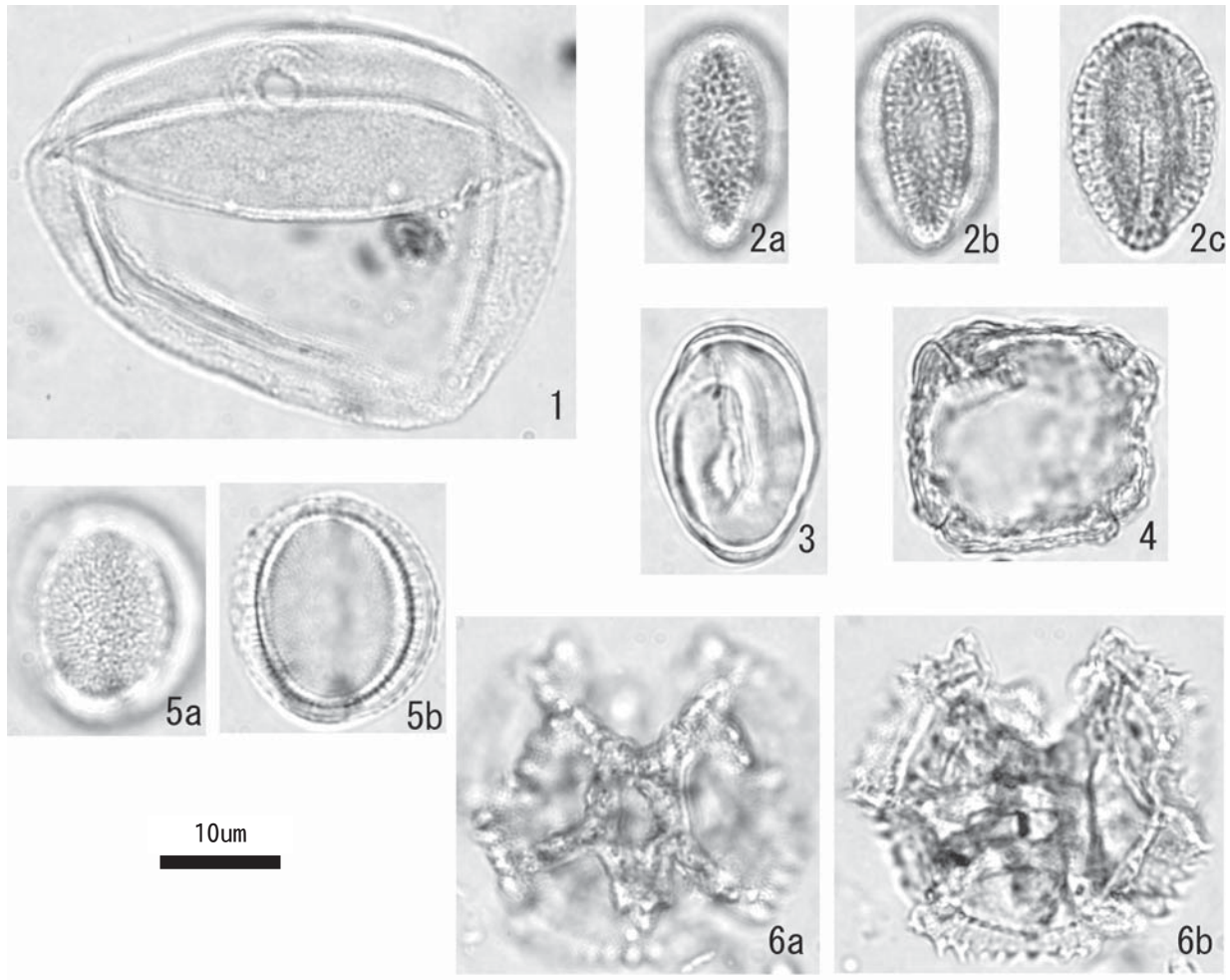
T. - C. はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceaeを示す

- 3層（試料3）：草本花粉のみで、イネ科、カヤツリグサ科、アブラナ科、ヨモギ属がわずかに産出した。
- 4層（試料4）：草本花粉のみでイネ科、タンポポ亜科がわずかに産出した。また、シダ植物の単条型孢子もわずかに産出した。
- 5層（試料5）：花粉・孢子化石は全く産出しなかった。
- 6層（試料6）：花粉・孢子化石は全く産出しなかった。
- 7層（試料7）：樹木花粉のセイノキ属のみがわずかに産出した。
- 8層（試料8）：花粉・孢子化石は全く産出しなかった。
- 9層（試料9）：樹木花粉のアカガシ亜属、草本花粉の他のキク亜科、タンポポ亜科がわずかに産出した。

#### 4. 考察

いずれの試料も十分な花粉化石が産出せず、植生変遷について推定することができなかった。現代まで水田・芝畑・果樹園であった1層（試料1）と2層（試料2）は、他試料に比べると、花粉化石が多く含まれていた。これら2試料の組成を見ると、イネ科がやや目立ち、抽水植物でいわゆる水田雑草のキカシグサ属も産出することから、水田であったことを支持する結果が得られたと言える。また、芝畑であったことを考慮すれば、イネ科は、ススキ、シバといった草地優占種を含む可能性も考えられ、アリノトウグサ属などもそのような人の干渉の強い草地の構成種であったと予想される。果樹園の栽培植物は、花粉組成からは明らかではないが、クリなどを含む可能性が考えられる。また、栽培状況については、産出個数は多くはないが、有用植物を多く含むアブラナ科の栽培の可能性も考えられる。

なお、花粉化石は水成堆積物であれば、良好に保存されるが、土壌のような酸化条件下では、化学的風化により、分解・消失し、更にバクテリアによる蝕害も受ける。検討した試料は、花粉化石の保存状況が悪いことから、少なくとも安定した滞水環境で堆積したものとは考え難く、6層（試料6）、7層（試料7）、8層（試料8）のような黒色土は、土壌の可能性が高いと考えられる。また、5層（試料5）は、砂が非常に卓越しており、花粉化石が流出してしまったと考えられる。



1. イネ科、1層（試料1）、PAL.MN 2133
2. アブラナ科、1層（試料1）、PAL.MN 2134
3. キカシグサ属、2層（試料2）、PAL.MN 2135
4. アリノトウグサ属、1層（試料1）、PAL.MN 2132
5. ヨモギ属、2層（試料2）、PAL.MN 2136
6. タンポポ科、1層（試料1）、PAL.MN 2131

写真図版3 産出した花粉化石



## 第5節 上伊勢第1遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

### 1. はじめに

琴浦町に所在する上伊勢第1遺跡は、大山北東麓を流れる加勢蛇川下流域左岸の沖積平地に位置する。発掘調査では、古墳時代前期とされる溝跡や古代～中世とされる畠跡などが検出されている。これらの遺構を埋積する覆土は、おおむね暗褐色～黒褐色を呈する火山灰土いわゆる黒ボク土であるが、遺構または層位によって、砂層が認められている。発掘調査所見では、調査区内におけるそれらの砂層の層位および分布が限定的であることから、遺構の評価および遺跡の変遷を考える上で、その由来を明らかにすることが課題となっている。

本報告では、上記の砂層および砂質土壌層について、自然科学の手法を用いることにより、その特性を明らかにし、上伊勢第1遺跡周辺域に分布している海岸砂、砂丘砂および河川砂との比較から、その由来を推定する。

### 2. 試料

試料は、比較対照試料の海岸砂、海岸砂丘砂、河川砂がそれぞれ1点ずつ（No.1～No.3）、上伊勢第1遺跡の遺構覆土から採取された試料が5点（No.4～5、第5章第1図参照）の合計8点である。以下に各試料について述べる。

- No.1：上伊勢第1遺跡より北西方約4kmの赤碓漁港付近の海岸で採取された海岸砂。
- No.2：上伊勢第1遺跡より西北西方約10kmの北条町中浜遺跡付近の砂丘で採取された砂丘砂。
- No.3：上伊勢第1遺跡より北方約100mの加勢蛇川左岸の宮橋付近より採取された河川砂。
- No.4：古代以降とされる溝跡の溝12を埋める灰白色細砂層。発掘調査所見では、一気に埋まったような堆積状況を示すとされている。
- No.5：古墳時代前期とされる溝跡の溝2の下位であり、下層が弥生時代前期とされている黒ボク土層の上位に堆積する暗灰黄褐色を呈する砂質土壌層。調査区の北西側に薄く分布しており、発掘調査所見では、時期は古墳時代以前とされ、上限は不明とされている。
- No.6：古代～中世とされる畠遺構の畝間を埋積する砂層の上部を構成する淡黄色細砂層。調査区西側に厚く堆積しており、東側へと行くに従い薄くなり、断片的に認められる程度となる。
- No.7：古代～中世とされる畠遺構の畝間を埋積する砂層の下部を構成する淡黄橙色粗砂層。おもに畠の畝間の底の部分で認められている。
- No.8：調査区東壁上部に認められた灰白色を呈する砂層。主に調査区東側で認められており、発掘調査所見では、中世～近世の時期に相当する層位であると想定しているが、近世以降の可能性もあるとしている。

### 3. 分析方法

砂の特性として、ここでは、砂の粒度分析と砂に含まれる石英粒の円磨度分析を行う。以下に各分



析方法について述べる。

### (1) 粒度分析

粒度分析は、公文・立石編（1998）、上杉（1971、1972）を参考にふるい分け法によって、砂粒径については1/4φごとの分布を求めた。分析行程は以下のとおりである。

試料を105℃で24時間乾燥させた後、一定量（約100g）を四分法により分取する。分取した試料を内径200mm、深さ60mmのふるいに入れてふるい分けを行う。ふるいは1/4φの粒度間隔にそろえ-1.00φから4.00φについてふるい分けを行い、重量を測定する。重量計測は下2桁まで読みとり、得られた結果を重量%（wt%）に換算して表示する。

### (2) 円磨度分析

円磨度分析は、ふるい分けした極細砂について、偏光顕微鏡下にて石英を識別し、その円磨度を公文・立石編（1998）に掲載されているKrumbein（1941）の円磨度印象図（第4図）に従って判別した。円磨度の分布は、各試料につき石英粒250個における各円磨度の粒数の割合を求める。

また同時に、円磨度測定を行った極細砂径の石英粒における、いわゆるパーカッションマークなどの表面構造について電子顕微鏡による観察を行い、砂の由来に関わる指標の一つとした。表面構造については、Mahaney（2002）による記載を参照し、特に明瞭な構造を写真図版として呈示する。

## 3. 結果

### (1) 粒度分析

粒度分析結果を表5、粒度分布加積曲線を第5～12図に示す。自然堆積物であるNo.1～3までの3者においては、それぞれ明瞭な特徴を示す。すなわち、海岸砂のNo.1は、細粒砂に明瞭な粒度のピークがあり、加積曲線の傾斜も急である。また、粗粒砂以上の粒径は非常に少ない。これに対して、河川砂のNo.3は、細礫が突出する粒度分布であり、砂では粗粒砂に粒度のピークがあるものの不明瞭である。また、加積曲線の傾斜は緩やかである。砂丘砂のNo.2は、両者の中間的な様相といえる。粒度のピークは中粒砂～細粒砂であり、比較的明瞭、加積曲線の傾斜は、No.1よりも緩やかであるが、No.3よりも急である。

調査区内より採取された試料は、No.4を除き、いずれもシルト以下の粒径が突出する。これらのうち、No.5、6、8の3点は、ほぼ同様の傾向を示す。すなわち、粒度のピークは細粒砂～極細粒砂にあるが不明瞭であり、中粒砂以上の粗粒側にも分布が広がっている。したがって、加積曲線の傾斜も比較的緩やかである。一方、No.8は、中粒砂から細粒砂に不明瞭なピークがあり、また、上記3点の試料に比べて粗粒側の分布が多く、さらに細礫の割合も高い。加積曲線の傾斜も緩やかである。No.4は、粒度のピークが中粒砂～細粒砂にあり、比較的明瞭である。ピークより粗粒側にも分布が広がるが、加積曲線の傾斜は、上記4試料に比べるとやや急である。

### (2) 円磨度分析

分析結果を表6、円磨度分布のヒストグラムを図13に示す。自然堆積物であるNo.1～3までの3者においては、海岸砂のNo.1と河川砂のNo.3がほぼ同様の傾向を示し、砂丘砂のNo.2のみ異なる傾向を示す。前2者においては、非常に角張った形状（0.1～0.2）がほとんどであり、他の形状は非常に少ない。一方、No.2は、やや角張った形状（0.4）が最も多く、それより角張った形状も円い形状も同程度に分布する。

調査区内より採取された試料は、全てほぼ同様の傾向を示す。すなわち、非常に角張った形状（0.1～0.2）がほとんどであり、他の形状は非常に少ない。

石英粒の表面構造では、No.1にradial fractures（放射状の割れ目）、v-shaped percussion cracks（v字形の打撃痕）が認められ、No.2には風成砂の特徴とされるbulbous edge（丸みを帯びた縁）とv-shaped scars（v字形の傷）があばた状の表面を構成している様相が認められ、さらにNo.3にはv-shaped fractures（v字形の割れ目）が認められた。

調査区内より採取された試料では、No.4にmultiple fractures（複合した割れ目）、No.5にsubparallel linear fractures（ほぼ平行線状の割れ目）、No.6にradial fracturesが認められ、No.7にはv-shaped fractures、No.8にはradial fracturesおよびv-shaped percussion cracksが認められた。

#### 4. 考察

比較対照試料3点の中では、石英粒の円磨度により、砂丘砂と他の2点は、明瞭に識別される。そして、この特性により、調査区内で認められた砂層には、砂丘砂に由来する砂層は存在しない可能性が高いといえる。したがって、調査区内の砂層は、海岸砂または河川砂に由来すると考えられる。ここで、粒度分布を比較すると、調査区内の試料の中に、No.1またはNo.3と粒度分布のヒストグラムの広がり方や加積曲線の傾きなどが一致するというものは認められない。これは、調査区内の試料が採取された堆積層は、砂層とはいえ、対照試料に比べると土壌化した堆積物であり、そのために極細粒砂以下の割合が高くなり、対照試料と粒度分布が一致しないと考えられる。この極細粒砂以下の割合を差し引いて考えてみると、傾向としては、細礫が突出し粗粒砂にピークを持つ河川砂よりも、細粒砂にピークのある海岸砂に近いといえる。また、粗粒砂以上の粒径を含むことは、河川砂の混在も示唆される。特に、No.7は、他の4点に比べると河川砂の混在率（数値的なところは不明であるが）が高い可能性がある。

なお、砂層中に含まれる石英粒の表面構造については、ある特定の環境を示す表面構造はないとも言われている（公文・立石編2002）。しかし、対照試料とした3点にそれぞれ特徴ある構造が認められ、また調査区内の試料には、海岸砂のNo.1や河川砂のNo.2に認められた構造と類似した構造が認められるなど、その由来を考える際の手がかりにはなり得るといえる。

以上、今回の分析結果からは、調査区内の砂層および砂質土壌は、いずれも海岸砂を主体とし、河川砂の混在したものである可能性があると考えられる。ただし、それは、3点の対照試料から推定した可能性であり、例えば、河川砂でも場所によっては、より細粒な粒度分布を示すものがあり、逆に海岸砂でもより粗粒な粒度分布のものがある可能性は十分に考えられる。したがって、今後、より詳細な由来を求めるとすれば、まず、周辺地域における対照試料（海岸砂、砂丘砂、河川砂）の分析例を蓄積することが必要と考えられ、また、鉱物組成などさらに砂層を識別する指標を増やして検討することも必要と考えられる。

#### 引用文献

1. 公文富士夫・立石雅昭編, 1998, 『地学双書29新版 砂屑物の研究法』地学団体研究会, 399p.
2. Mahaney, William C., 2002, Atlas of sand grain surface textures and applications. Oxford University Press, 237p.

3. 上杉 陽, 1971, 「ふるいを用いた粒度分析法の吟味」『地理学評論44』 839-857p.
4. 上杉 陽, 1972, 「粒径頻度分布からみた風成砂・海成砂の諸特徴」『第四紀研究11』 49-60p.

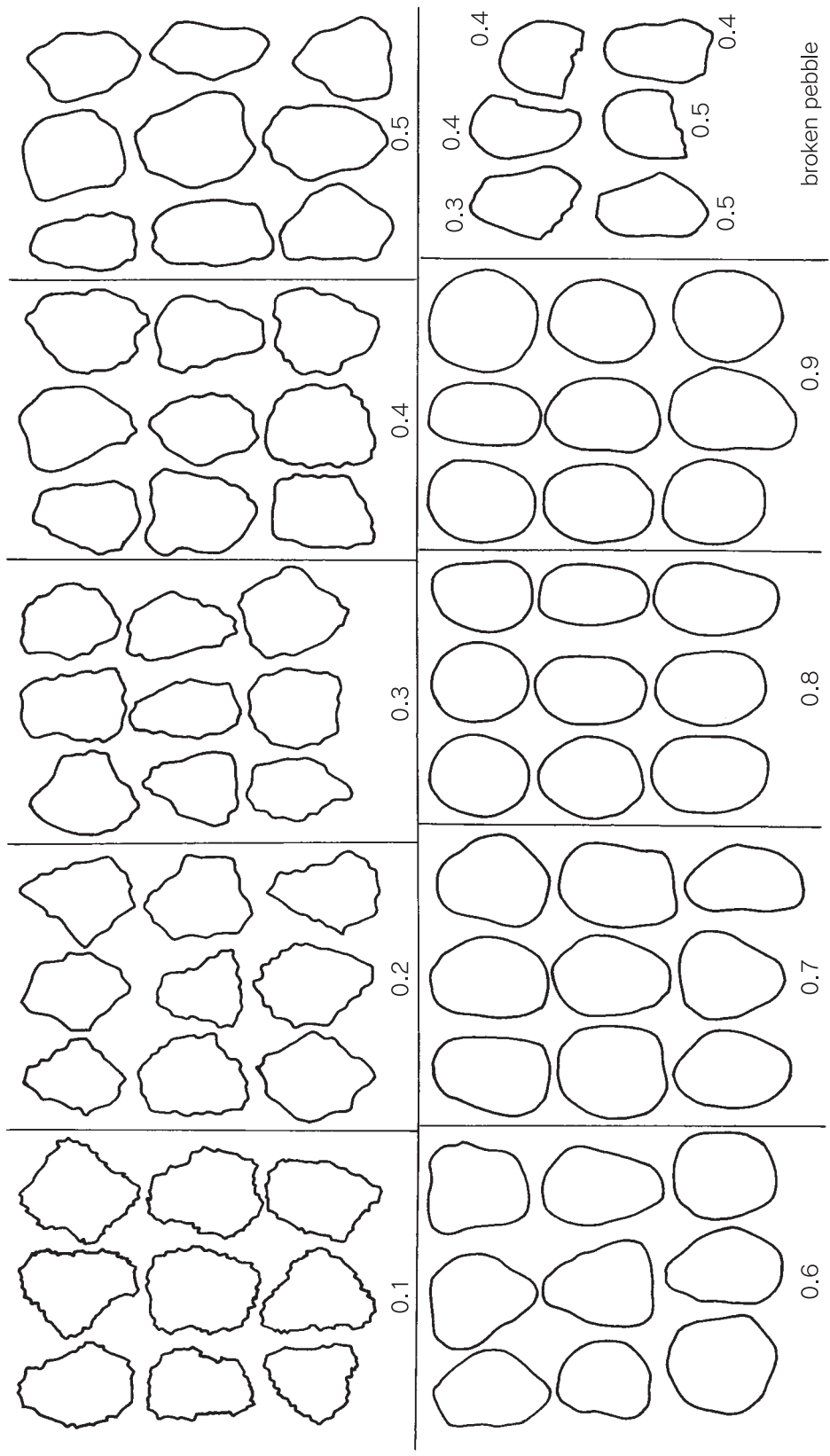
表5 粒度分析結果

試料名	No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 6	No. 7	No. 8
φ粒度								
-1.00>	0.00%	0.03%	25.37%	0.03%	0.00%	0.18%	1.17%	0.10%
-0.75	0.00%	0.07%	3.11%	0.00%	0.00%	0.04%	0.26%	0.02%
-0.50	0.00%	0.13%	4.80%	0.03%	0.01%	0.14%	0.36%	0.04%
-0.25	0.00%	0.30%	4.80%	0.07%	0.00%	0.10%	0.40%	0.04%
0.00	0.00%	0.70%	5.82%	0.20%	0.02%	0.14%	0.61%	0.06%
0.25	0.00%	1.00%	6.94%	0.37%	0.03%	0.22%	1.07%	0.08%
0.50	0.00%	1.23%	7.81%	0.57%	0.06%	0.28%	1.72%	0.16%
0.75	0.00%	2.40%	7.86%	0.97%	0.09%	0.34%	2.17%	0.24%
1.00	0.07%	3.27%	6.27%	1.80%	0.12%	0.54%	2.97%	0.38%
1.25	0.27%	5.36%	5.57%	3.93%	0.21%	0.76%	3.93%	0.46%
1.50	1.03%	8.93%	4.28%	6.93%	0.33%	1.04%	4.63%	0.68%
1.75	3.00%	13.76%	3.86%	12.43%	0.52%	1.58%	4.94%	1.02%
2.00	9.70%	22.73%	3.96%	14.56%	0.97%	3.59%	7.79%	1.64%
2.25	20.07%	17.66%	2.41%	15.16%	1.14%	4.17%	7.16%	1.82%
2.50	24.17%	10.60%	1.89%	15.86%	1.78%	5.75%	6.58%	2.90%
2.75	23.07%	5.26%	1.27%	8.83%	2.67%	11.28%	7.79%	5.55%
3.00	10.23%	2.70%	0.80%	1.50%	3.01%	8.62%	6.13%	7.67%
3.25	2.77%	1.67%	0.85%	5.83%	6.00%	9.76%	5.59%	11.27%
3.50	4.07%	0.47%	0.45%	4.10%	3.31%	5.37%	5.14%	7.49%
3.75	0.67%	0.30%	0.37%	2.00%	3.87%	6.81%	4.39%	9.21%
4.00	0.13%	0.27%	0.25%	1.63%	3.92%	3.83%	2.49%	5.21%
4.00<	0.77%	1.17%	1.27%	3.20%	71.94%	35.46%	22.73%	43.96%
礫 (gravel) [-1.0φ>]	0.00%	0.03%	25.37%	0.03%	0.00%	0.18%	1.17%	0.10%
極粗粒砂 (verycoasesand) [-1.0-0.0φ]	0.00%	1.20%	18.53%	0.30%	0.03%	0.42%	1.62%	0.16%
粗粒砂 (coasesand) [0.0-1.0φ]	0.07%	7.90%	28.88%	3.70%	0.30%	1.38%	7.93%	0.86%
中粒砂 (mediumsand) [1.0-2.0φ]	14.00%	50.78%	17.66%	37.85%	2.03%	6.97%	21.29%	3.80%
細粒砂 (finesand) [2.0-3.0φ]	77.53%	36.22%	6.37%	41.35%	8.60%	29.83%	27.65%	17.94%
極細粒砂 (veryfinesand) [3.0-4.0φ]	7.63%	2.70%	1.92%	13.56%	17.10%	25.77%	17.61%	33.19%
泥 (mud) [4.0φ<]	0.77%	1.17%	1.27%	3.20%	71.94%	35.46%	22.73%	43.96%
平均値 (φ)	2.43	1.86	0.30	2.20	3.82	3.23	2.59	3.49
淘汰度 (sd)	0.45	0.68	1.25	0.78	0.61	0.91	1.25	0.77
歪度 (sk)	0.52	-0.12	0.71	0.36	-2.28	-1.04	-0.54	-1.52

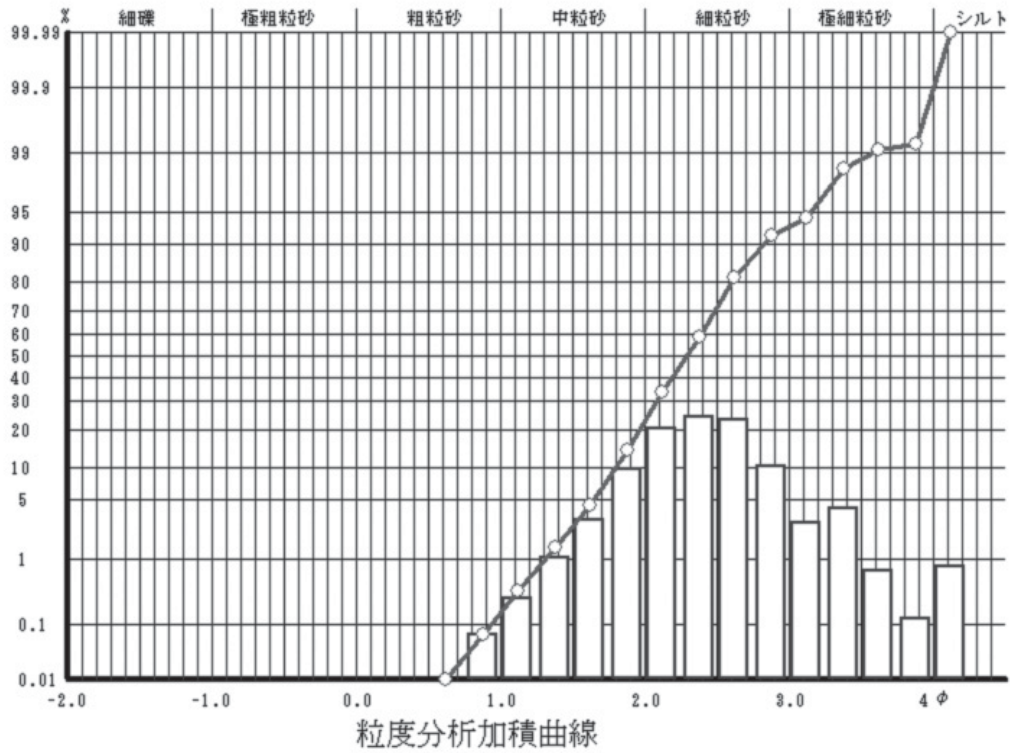
表6 石英の円磨度の頻度分布

試料番号	円磨度									合計
	0.1	0.2	0.3	0.4	0.5	0.6	0.7	0.8	0.9	
No. 1	95	85	38	20	5	4	2	1	0	250
No. 2	14	24	43	70	51	25	13	8	2	250
No. 3	129	85	24	8	3	1	0	0	0	250
No. 4	102	101	34	10	2	1	0	0	0	250
No. 5	167	69	10	2	2	0	0	0	0	250
No. 6	102	90	33	17	5	2	1	0	0	250
No. 7	120	97	25	7	1	0	0	0	0	250
No. 8	153	83	11	2	0	1	0	0	0	250

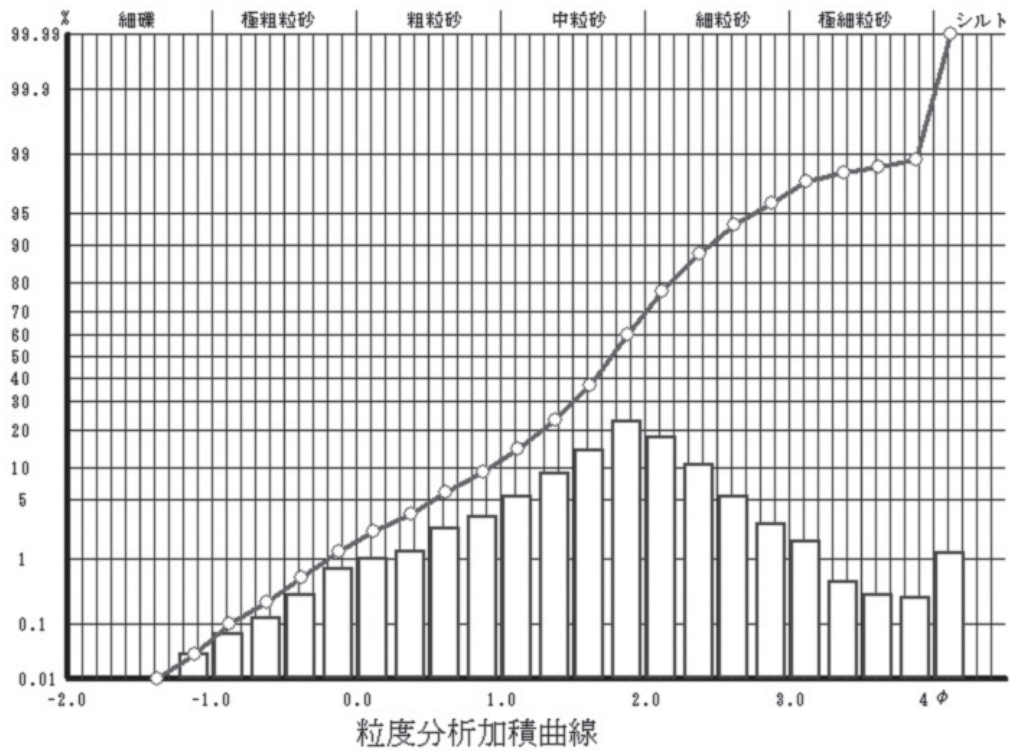
※円磨度の測定には、3φ~4φの極細粒砂を使用した。



第4図 円磨度印象図 Krumbein (1941)

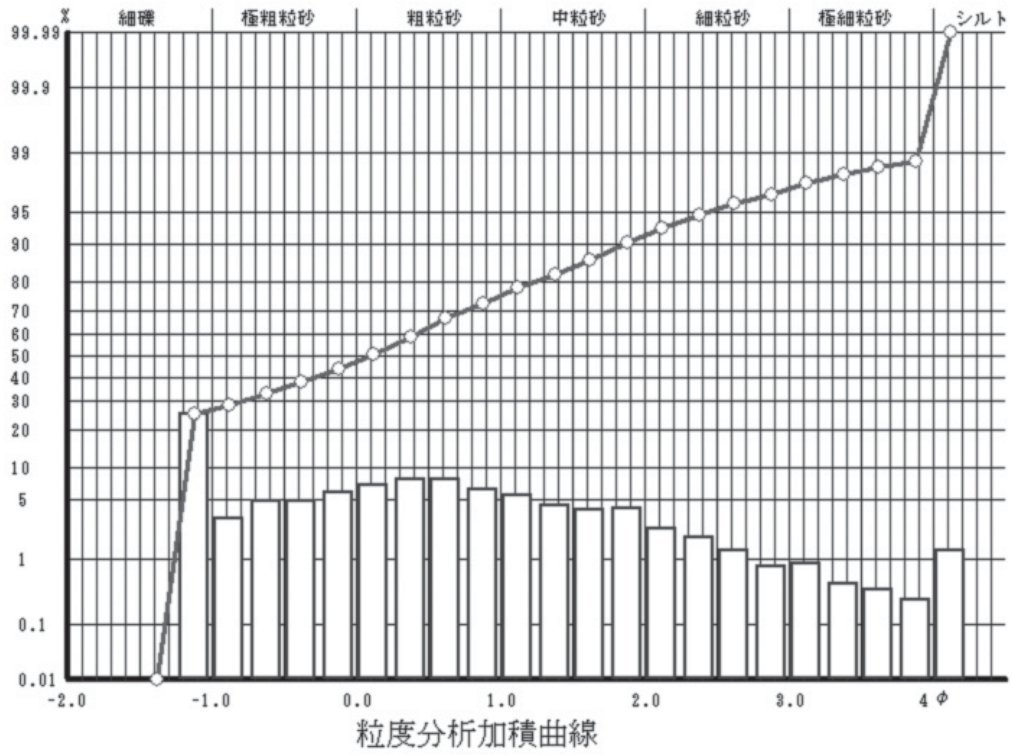


第5図 No. 1 旧赤碕町(海砂)の粒度分布加積曲線

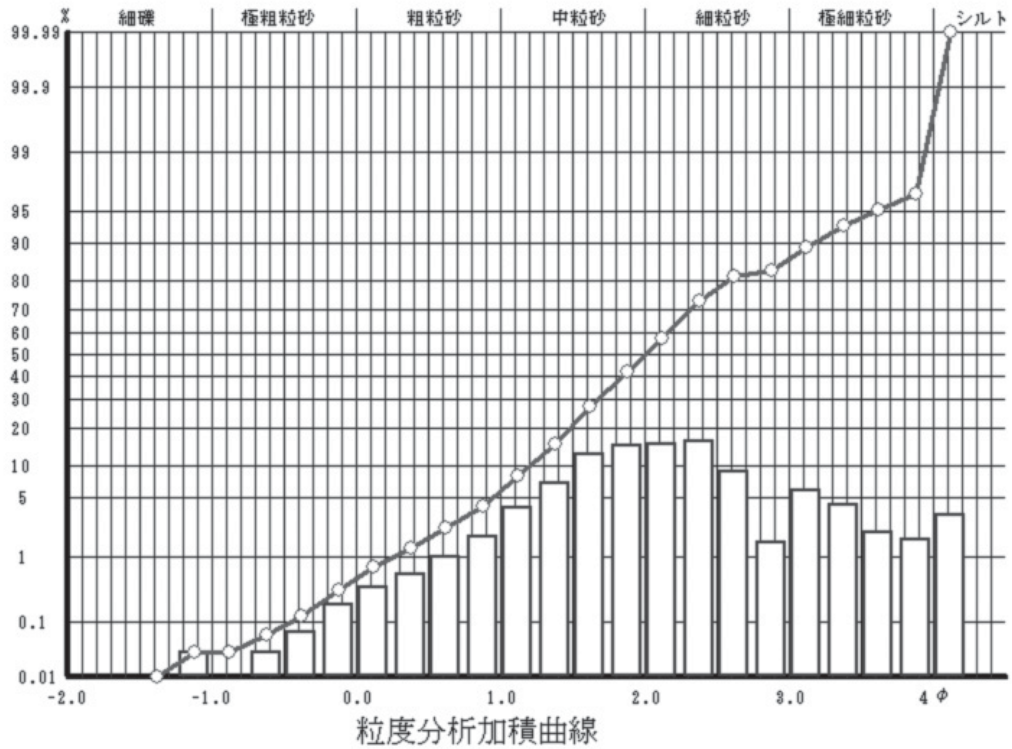


第6図 No. 2 北条町(飛砂)の粒度分布加積曲線

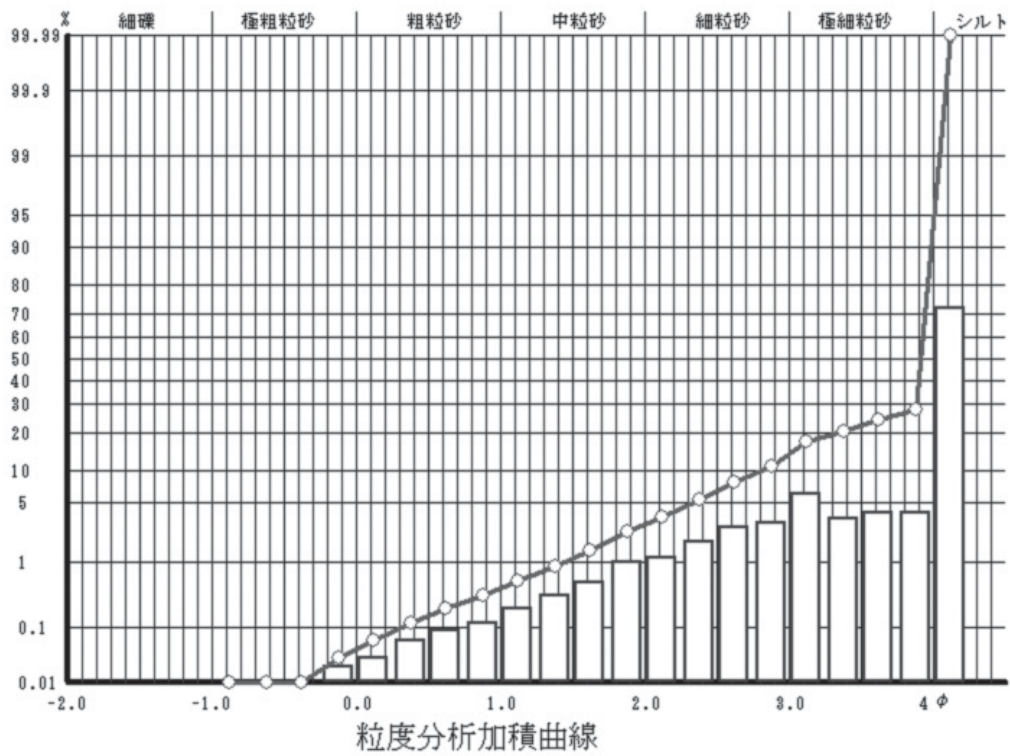




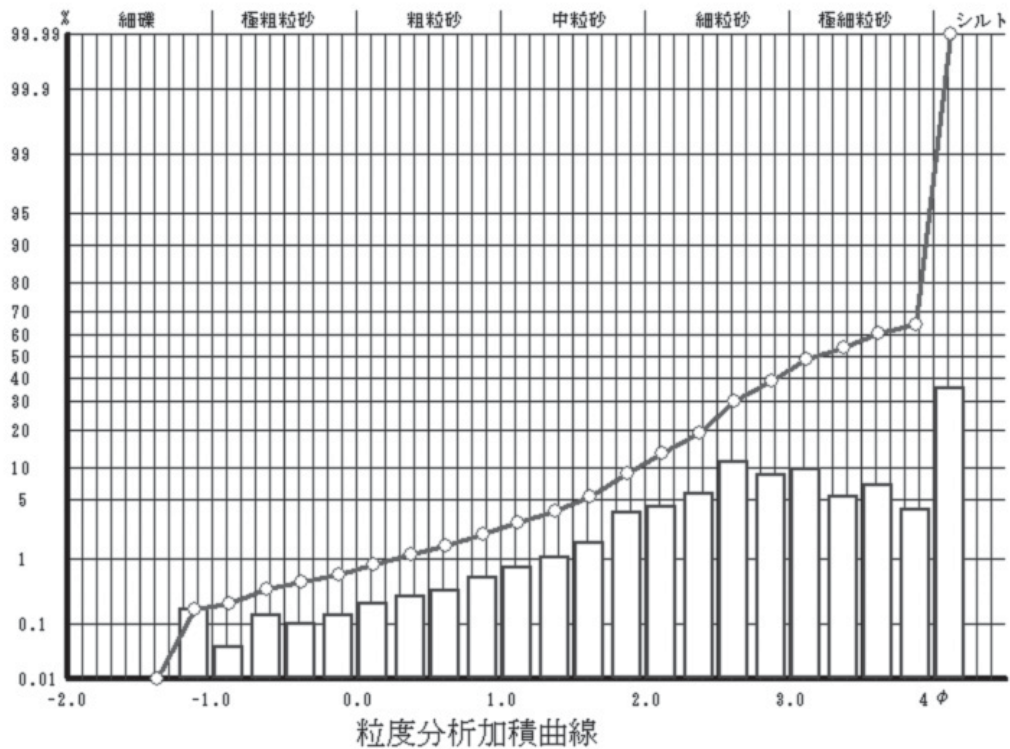
第7図 No. 3 加勢蛇川(川砂)の粒度分布加積曲線



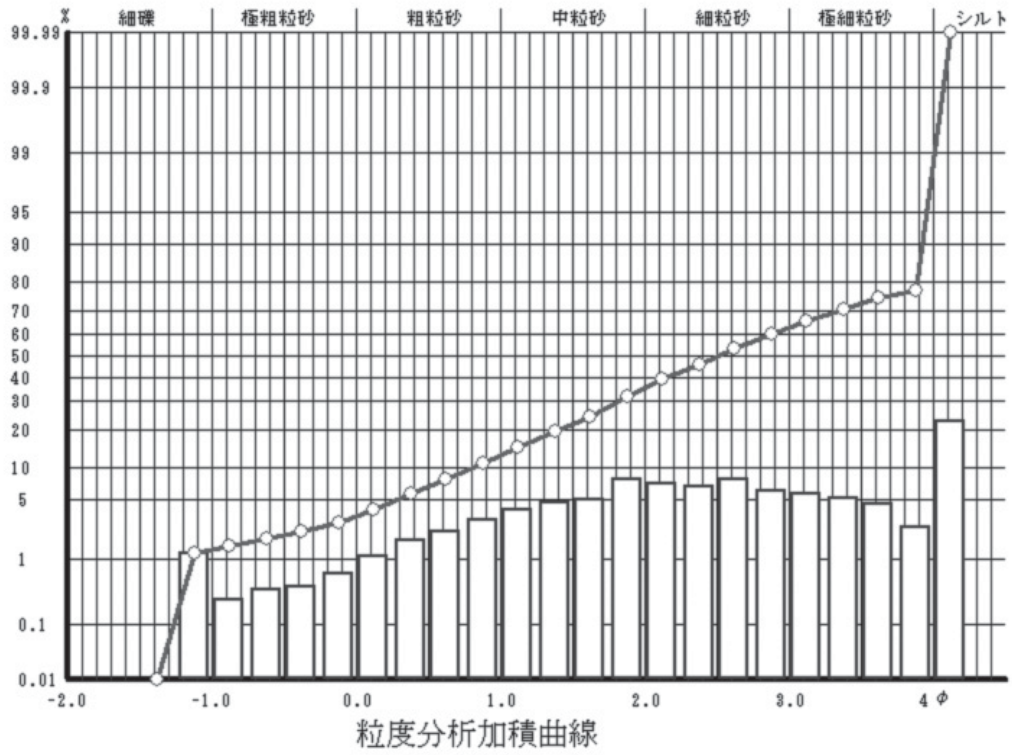
第8図 No. 4 溝12埋砂の粒度分布加積曲線



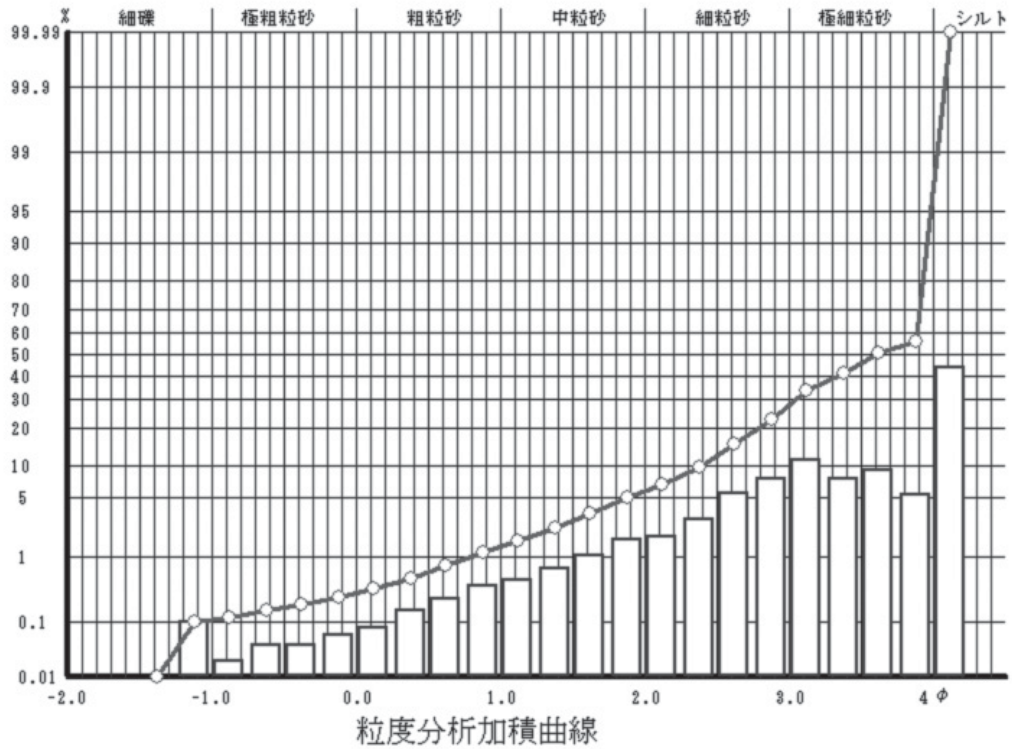
第9図 No.5 溝2～黒ボク間の砂質土の粒度分布加積曲線



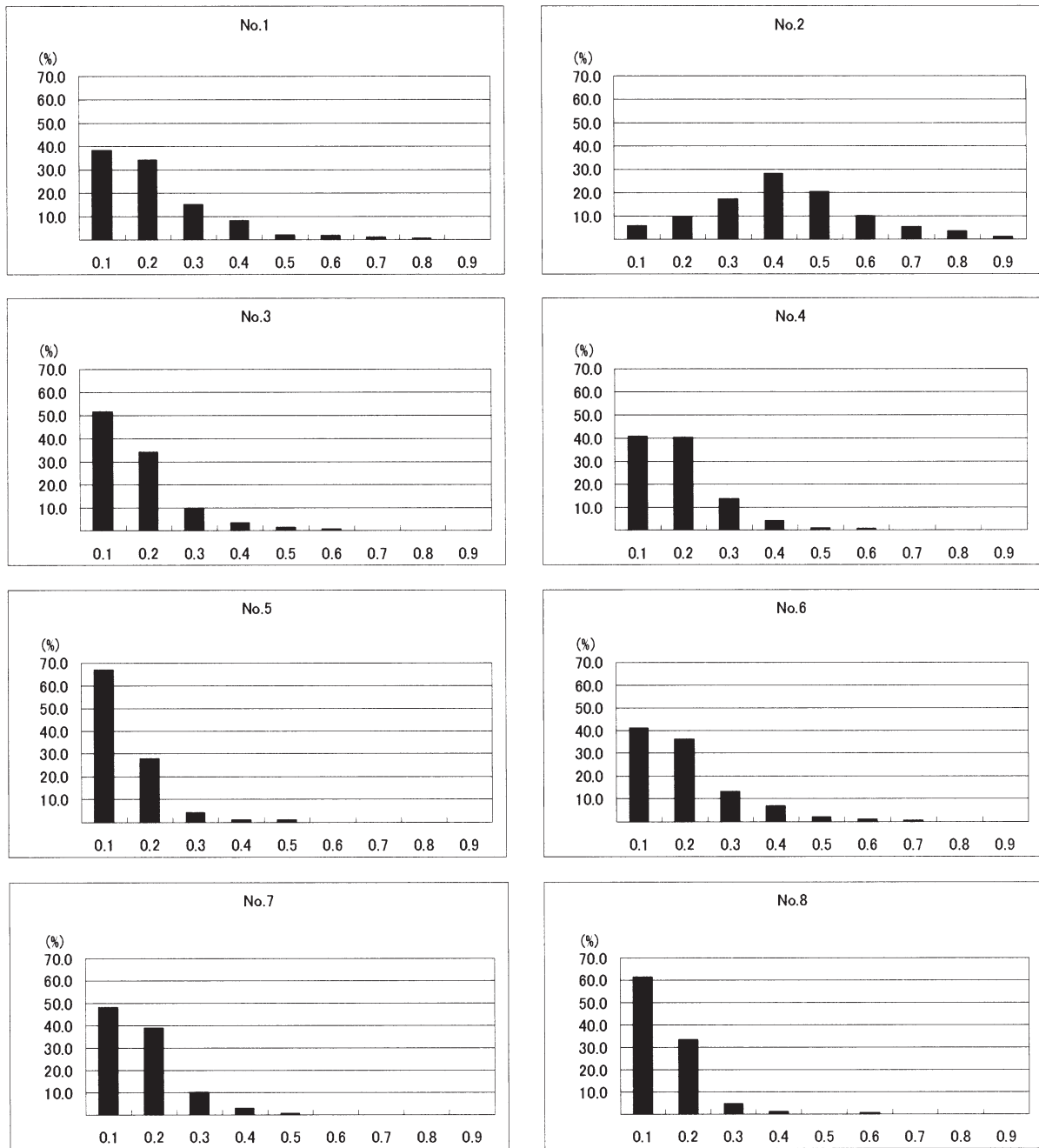
第10図 No.6 畝間埋砂上層の粒度分布加積曲線



第11図 No. 7 畝間埋砂下層の粒度分布加積曲線

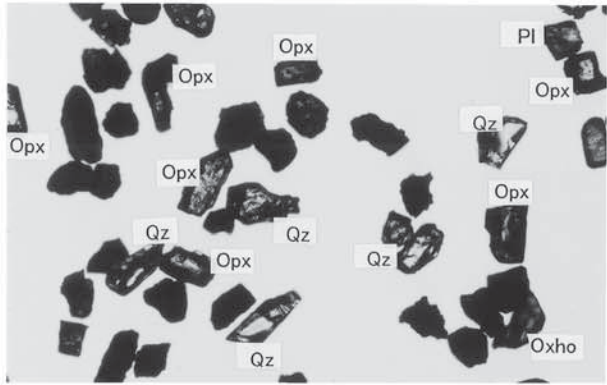


第12図 No. 8 調査区東壁上部砂層の粒度分布加積曲線

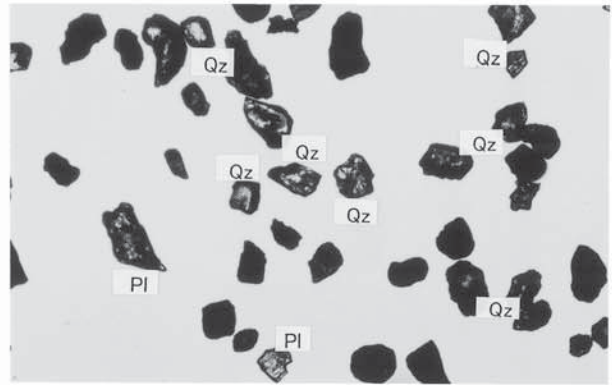


第13図 円磨度のヒストグラム

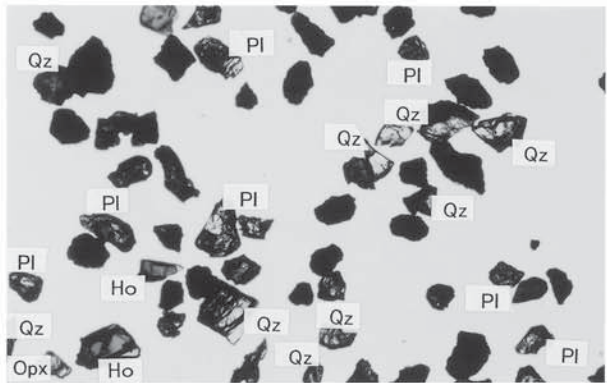




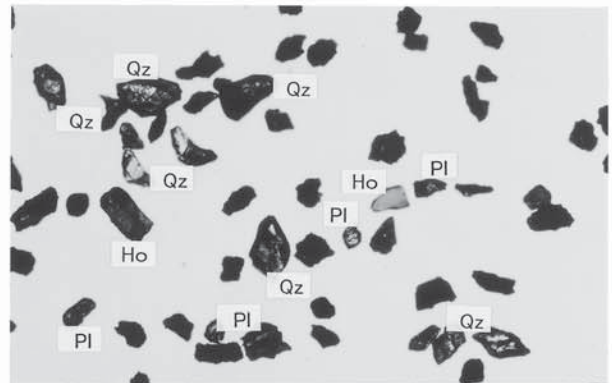
1. No.1 旧赤碕町(海砂)



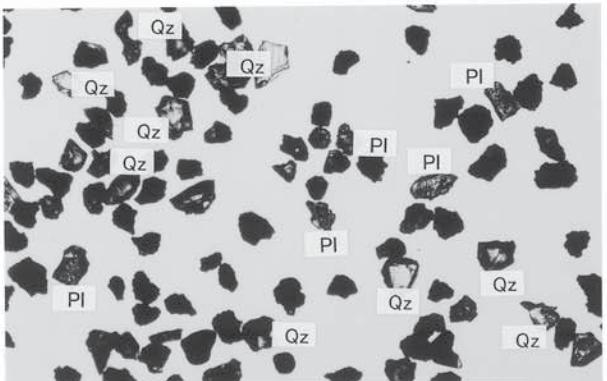
2. No.2 北条町(飛砂)



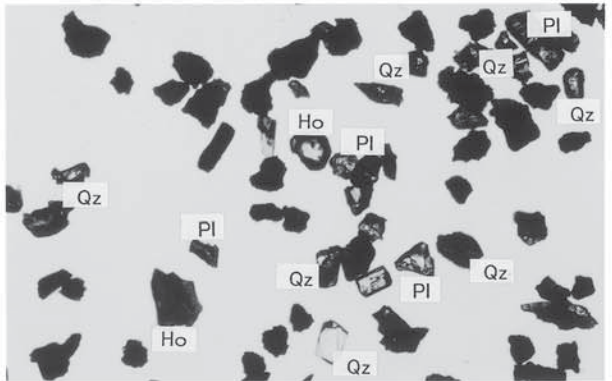
3. No.3 加勢蛇川(川砂)



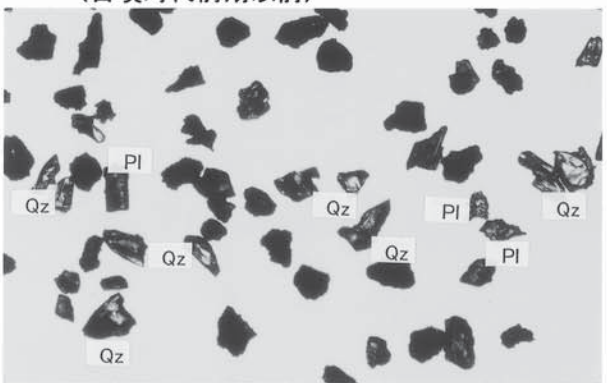
4. No.4 溝12埋砂(古代以降)



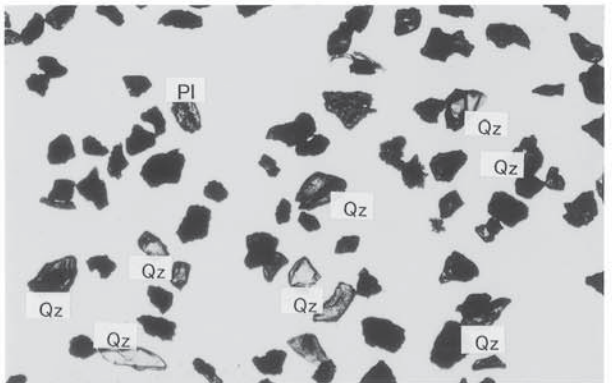
5. No.5 溝2 ~ 黒ボク間の砂質土  
(古墳時代前期以前)



6. No.6 畝間埋砂上層(古代~中世)



7. No.7 畝間埋砂下層(古代~中世)

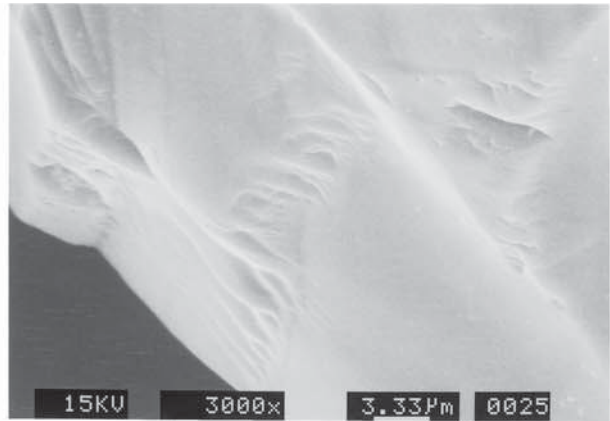
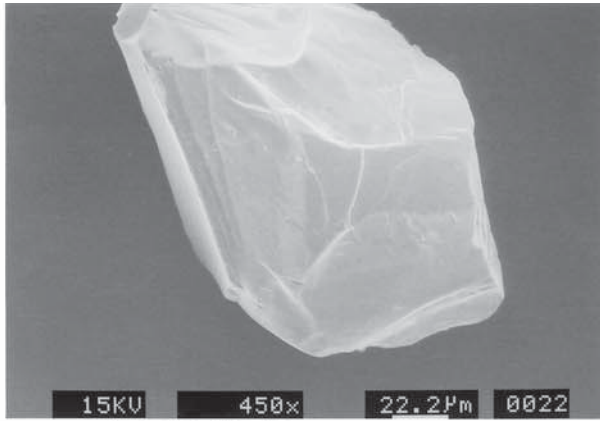


8. No.8 調査区東壁上部砂層

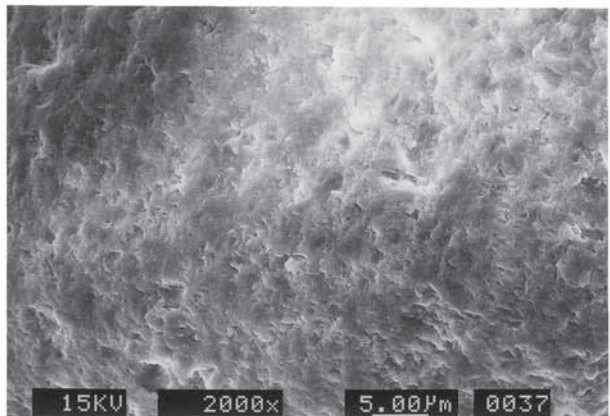
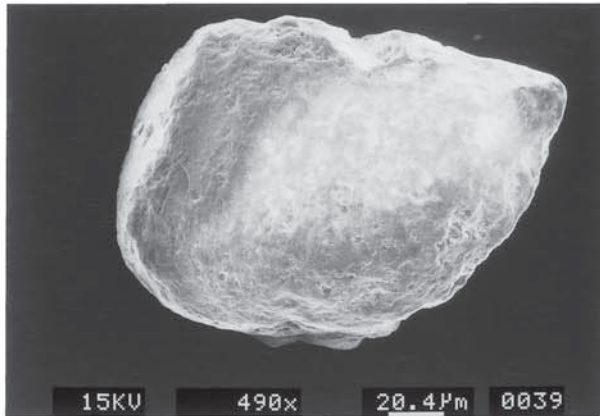
Qz:石英 PI:斜長石 Opx:斜方輝石 Ho:角閃石 Oxho:酸化角閃石 Op:不透明鉱物  
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

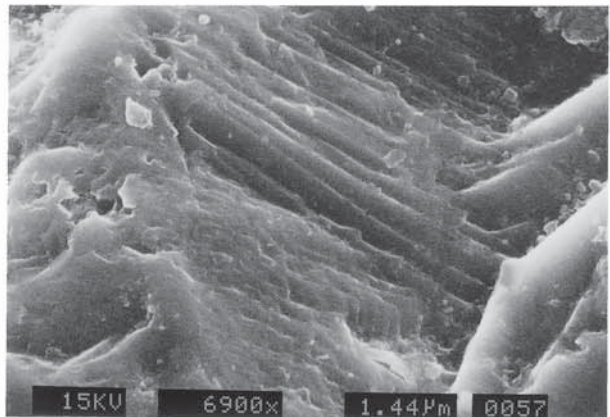
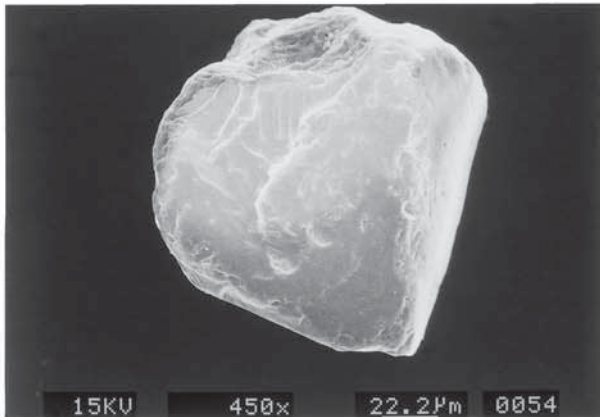




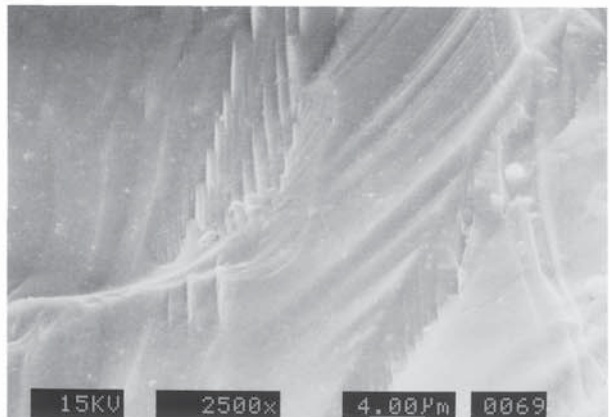
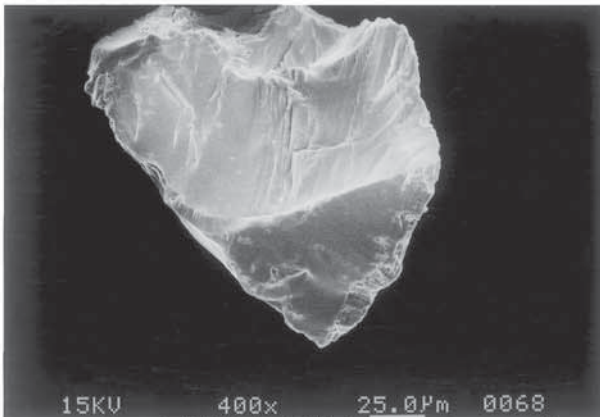
No.1 旧赤碕町(海砂)(radial fractures,v-shaped percussion cracks)



No.2 北条町(飛砂)(bulbous edge,v-shaped scars)

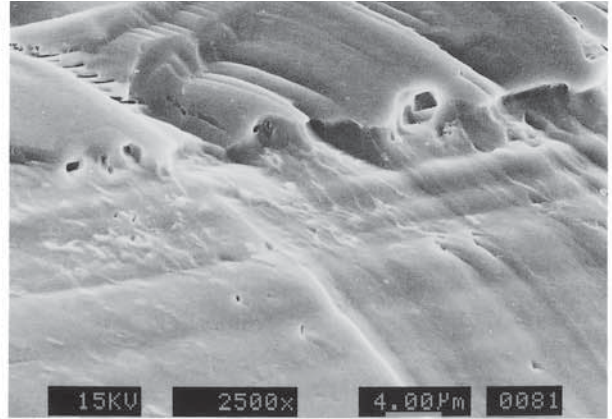
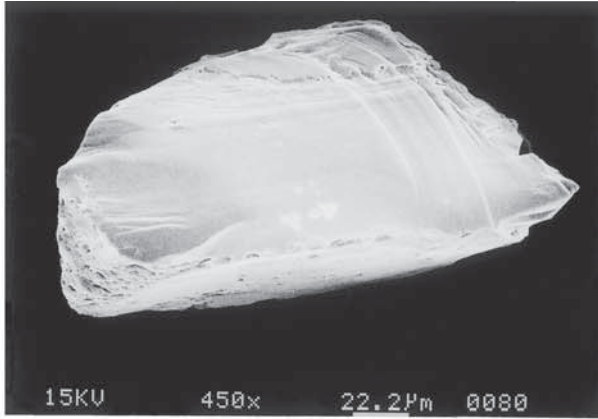


No.3 加勢蛇川(川砂)(v-shaped fractures)

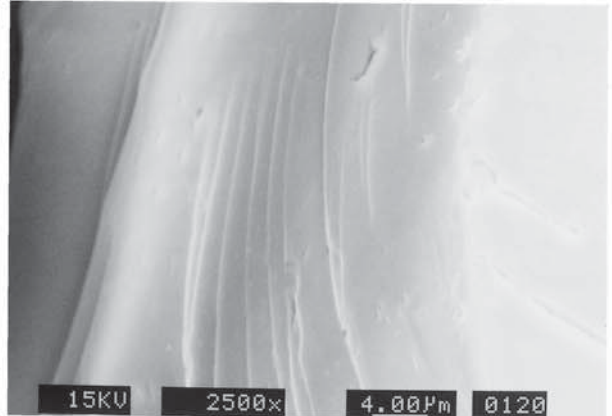
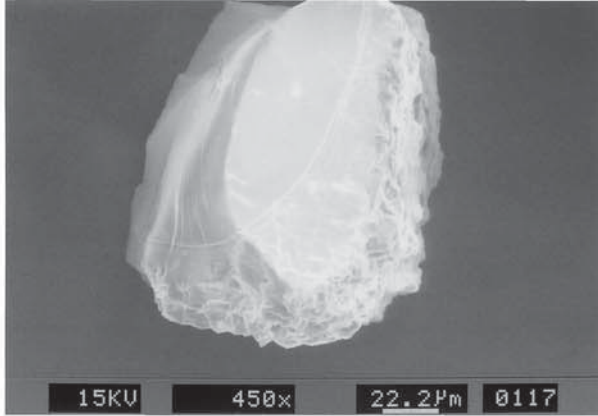


No.4 溝12埋砂(古代以降)(multiple fractures)

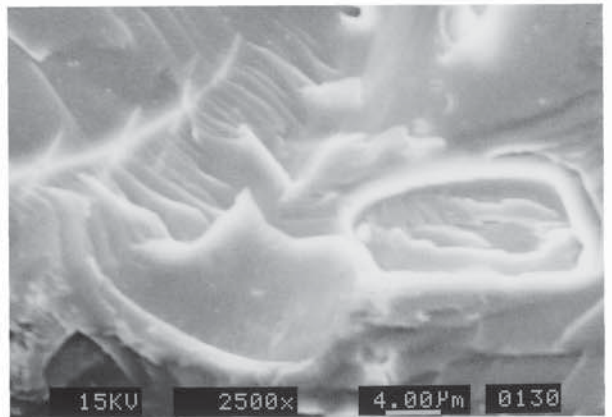
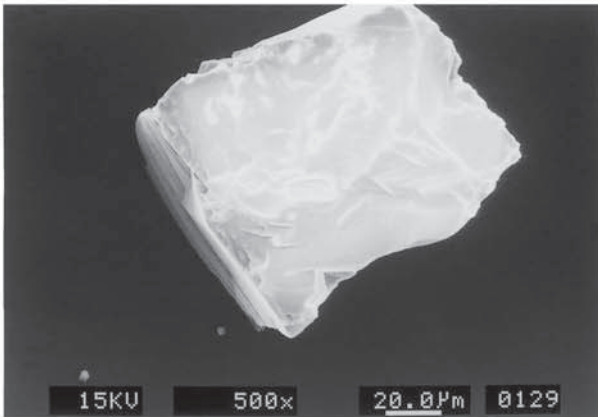
写真図版5 石英粒の電子顕微鏡写真①



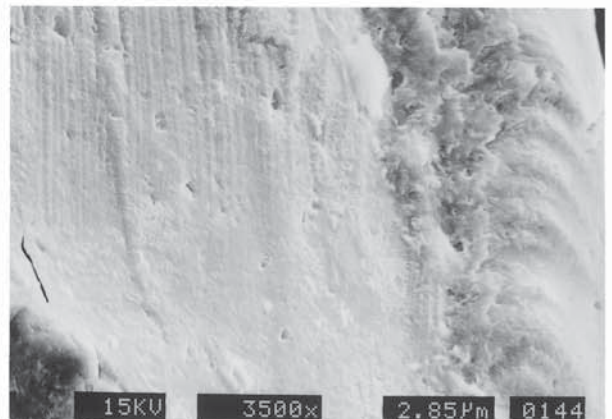
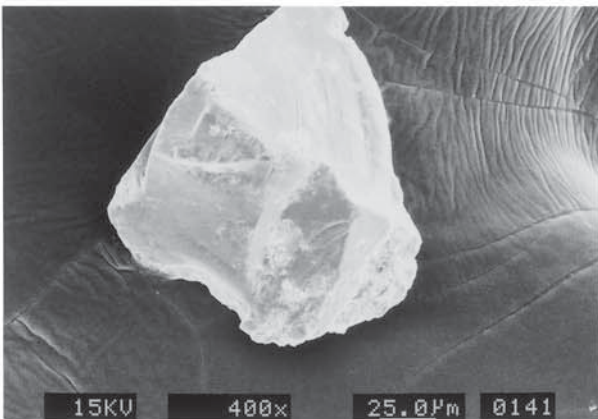
No.5 溝2 ~ 黒ボク間の砂質土(古墳時代前期以前) (subparallel linear fractures)



No.6 畝間埋砂上層(古代~中世) (radial fractures)



No.7 畝間埋砂下層(古代~中世) (v-shaped fractures)



No.8 調査区東壁上部砂層 (radial fractures,v-shaped percussion cracks)

写真図版 6 石英粒の電子顕微鏡写真②



## 第6節 上伊勢第1・三保第1遺跡出土土器の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所

白石 純

### 1. 分析の目的

上遺跡第1・三保第1遺跡から出土した弥生時代前期、弥生時代後期末、古墳時代前期～後期の土器について理化学的な胎土分析を実施し、以下のことについて調べた。

- (1) 上伊勢第1遺跡出土の弥生時代前期の土器で、甕の口縁部形態が如意状と逆「L」字状を呈するものがある。この両者が胎土的に違いがあるかどうか。
- (2) 上伊勢第1遺跡から出土している弥生時代後期末、古墳時代前期～後期の土師器で、器種や時期により胎土が異なるかどうか。
- (3) 上伊勢第1・三保第1遺跡出土の須恵器と八橋第8・9遺跡および鳥越山窯跡群との比較検討。

### 2. 分析方法

分析は、蛍光X線分析法と実体顕微鏡による胎土観察の二つの分析法で検討した。

蛍光X線分析法では、エネルギー分散型蛍光X線分析計（セイコーインスツルメンツ社製SEA2010L）を使用し、胎土中の成分（元素）量を調べた。測定した成分は、13元素でそのうちK（カリウム）、Ca（カルシウム）、Rb（ルビジウム）、Sr（ストロンチウム）などの成分に顕著な違いがあることから、これらの成分を用いて、XY散布図を作成し検討した。

実体顕微鏡による土器表面の観察では、胎土に含まれる砂粒（岩石・鉱物）の種類、大きさ、含有量について調べた。

分析した土器は、表7・8に示した上伊勢第1遺跡40点、三保第1遺跡3点の合計43点である。

### 3. 蛍光X線分析法による分析結果

第14図K-Ca、第15図Sr-Rbの散布図では、上伊勢第1遺跡出土の弥生時代前期土器で、甕の口縁部形態が如意状と逆「L」字状のあいだで胎土に違いがあるかどうか検討した。すると、如意状口縁の試料番号6・7の胎土が異なる以外は、ほぼ一つにまとまった。

第16図K-Ca散布図では、古墳時代初頭～後期の土師器で、器種・時期によりどうなるか検討した。その結果、古墳前期の土器は12（甕）と24（小型丸底壺）以外は一つにまとまった。また、時期ごとによる胎土の比較では、前期と後期が胎土的に類似していたが、中期だけが完全に離れ識別できた。

第17図K-Ca散布図では、上伊勢第1・三保第1遺跡の古墳時代中期～後期の須恵器で、胎土にどのような差異があるか調べた。すると、3つのグループにわかれるようである。それはⅠ類（上伊勢第1の32・33・39・40）、Ⅱ類（上遺跡第1の31・34・35・37・38と三保第1の3）、Ⅲ類（三保第1の1・2）である。

第18図K-Caの散布図では、須恵器の産地推定を試みた。比較した窯跡は、関金町鳥越山窯跡群

である。また、消費地遺跡として八橋第8・9遺跡の須恵器とも比較した。その結果、Ⅰ類は、鳥越山の分布域に入り、Ⅱ類・Ⅲ類は入らなかった。ただ、Ⅱ類は、八橋第8・9のBグループとⅢ類は八橋第8・9のCグループとそれぞれ対応した。

#### 4. 実体顕微鏡観察（肉眼観察）による結果

実体顕微鏡による肉眼観察では胎土に含まれる砂粒の岩石、鉱物の種類を同定した。観察倍率は10倍～30倍で随時観察した。

弥生前期の6は2mm以下の石英、長石、0.5mm以下の角閃石が含まれていた。そして他の土器に比べ角閃石の含有量が多かった。

古墳時代初頭～後期の土器では、3mm以下の石英、長石、0.5mm以下の角閃石・雲母が含まれていた。このうち12（甕）には他の土器に比べ角閃石の含有量が多かった。また、古墳中期の26・27（甕）は3mm以下の石英がほとんどで、少量の長石が含まれる程度であった。

#### 5. まとめ

上伊勢第1・三保第1遺跡出土土器の胎土分析（蛍光X線分析、実体顕微鏡観察）を実施した結果、以下のことが指摘できよう。

- (1) 弥生前期の甕で口縁形態の違いが胎土にもあるかどうか検討したところ差はみられなかった。しかし、試料番号6が他の土器に比べ異なっていた。これは、胎土に含まれる角閃石の含有量が異なっていることが推定された。
- (2) 古墳初頭～後期の土師器の胎土比較では、前期の土器が器種に関係なくほぼ同じ胎土であった。また、後期の甕とも胎土が類似していた。しかし、中期の甕とは、明らかに異なっていた。この中期の甕の砂粒観察をしたところ、角閃石などの有色鉱物が少ないことが確認された。
- (3) 須恵器の分析では、同じ遺跡内で3つの胎土に分類され、鳥越山窯跡群と八橋第8・9遺跡との比較では、Ⅰ類が鳥越山の分布域に入ったが、他は入らなかった。また、Ⅱ類とⅢ類が八橋の須恵器と類似するものがあつた。同じ生産地からの供給かもしれない。

以上のように、限られた生産地試料との比較であるため産地を推定するにはやや無理があり、鳥取県内の産地試料も蓄積し改めて検討する必要がある。

この分析の機会を与えていただいた、鳥取県埋蔵文化財センターの職員の方々には、いろいろご教示いただいた。また、窯跡の分析試料では関金町教育委員会にお世話になった。末筆ではありますが記して感謝いたします。

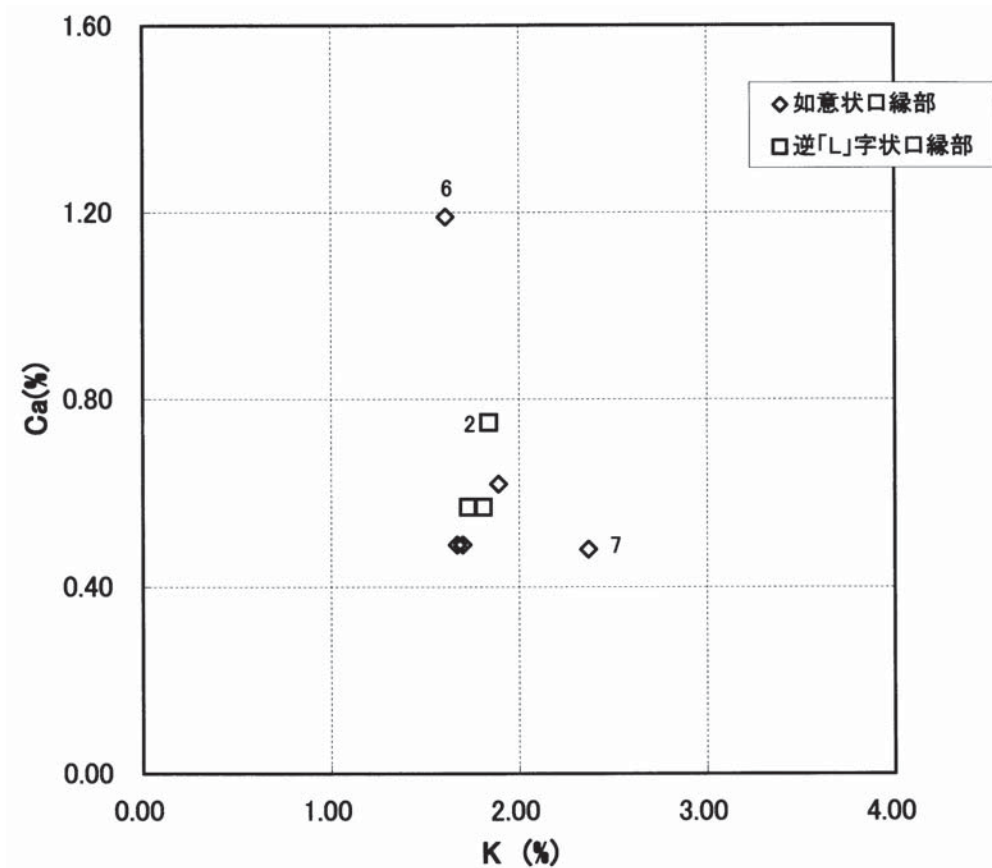
表7 上伊勢第1遺跡出土土器分析値一覧表(%) ただし、Rb・Sr・Zrはppm

試料No.	掲載No.	掲載遺構名	器種	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Rb	Sr	Zr	
1	29	住居3	甕	67.12	1.16	20.37	4.16	0.05	1.91	0.62	2.46	1.89	0.08	172	198	299	
2	24	住居2	甕	61.52	1.03	22.90	7.23	0.09	2.05	0.75	1.95	1.84	0.43	268	213	325	
3	13	住居1	甕	63.80	1.27	22.47	5.29	0.05	2.00	0.49	2.78	1.67	0.02	144	197	357	
4	12		甕	59.01	1.06	26.65	5.26	0.04	2.17	0.49	3.39	1.70	0.04	161	169	318	
5	14		甕	66.81	1.13	20.69	4.31	0.05	1.88	0.57	2.45	1.81	0.12	173	175	312	
6	21	住居2	甕	61.54	1.08	21.82	8.24	0.10	2.09	1.19	2.01	1.61	0.08	150	318	318	
7	37	遺構外	甕	66.40	0.90	22.35	2.75	0.03	1.83	0.48	2.63	2.37	0.07	256	148	408	
8	43		甕	66.02	1.12	20.75	4.87	0.05	1.98	0.57	2.61	1.73	0.05	180	215	334	
9	100	溝2	壺	65.04	1.14	22.90	3.85	0.04	2.06	0.67	2.90	1.20	0.07	167	230	362	
10	118		甕	65.57	1.05	21.99	5.16	0.05	1.85	1.01	1.64	1.35	0.06	165	318	375	
11	114		甕	66.57	0.98	21.52	3.49	0.04	2.02	0.92	2.75	1.38	0.11	165	278	327	
12	110		甕	56.88	1.16	29.00	5.38	0.06	2.23	1.60	2.58	0.88	0.04	72	420	345	
13	124		甕	66.46	1.11	21.23	4.77	0.08	1.81	0.72	2.22	1.33	0.08	126	210	399	
14	126		高坏	63.93	1.23	23.91	3.74	0.06	2.00	0.81	2.94	1.11	0.13	106	239	365	
15	129		高坏	63.96	1.24	24.34	3.46	0.04	2.07	0.74	2.91	1.02	0.06	88	221	415	
16	134		高坏	66.58	1.13	21.52	3.52	0.04	1.93	1.02	2.69	1.29	0.09	134	301	399	
17	132		高坏	64.28	1.11	24.05	4.06	0.04	2.03	0.89	2.35	0.95	0.07	105	264	377	
18	141		鼓形器台	67.04	1.04	22.01	3.30	0.03	1.82	0.78	2.49	1.23	0.12	148	244	326	
19	142		鼓形器台	65.90	1.20	22.72	3.55	0.04	2.02	0.79	2.33	1.17	0.10	102	247	392	
20	146		鼓形器台	63.45	1.10	22.42	5.29	0.05	2.13	0.79	3.25	1.26	0.09	157	228	335	
21	135		低脚坏	65.77	1.02	21.07	4.03	0.05	2.15	1.17	3.20	1.30	0.06	118	374	279	
22	136		低脚坏	67.73	1.08	21.28	3.27	0.05	1.81	0.91	2.27	1.33	0.08	130	286	373	
23	139		小型器台	64.73	1.13	22.41	4.99	0.07	1.81	0.78	2.46	1.41	0.08	131	236	338	
24	138		小型丸底壺	65.78	1.41	22.85	4.95	0.05	1.99	0.35	1.58	0.81	0.09	99	126	425	
25	174		遺構外	甕	65.04	1.09	23.52	3.78	0.04	1.91	0.91	2.31	1.16	0.05	119	317	320
26	49		住居4	甕	68.58	1.12	20.97	3.60	0.04	1.87	0.16	1.83	1.53	0.10	155	73	404
27	50			甕	68.09	1.09	20.01	4.11	0.05	1.98	0.21	2.50	1.52	0.26	203	70	408
28	58		住居5	甕	64.00	1.05	23.34	4.10	0.07	2.18	1.10	2.67	1.25	0.05	114	330	324
29	160		溝8	甕	66.14	1.13	21.84	3.96	0.05	1.87	0.66	2.51	1.60	0.10	159	191	399
30	163			脚付椀	63.06	0.74	22.33	5.60	0.06	2.11	1.02	3.01	1.70	0.11	158	340	309
31	90		住居7	坏蓋	63.51	1.21	23.49	5.67	0.06	2.03	0.25	2.23	1.37	0.03	191	71	363
32	92			坏身	66.97	1.08	18.82	5.98	0.06	1.94	0.69	2.18	1.94	0.11	271	148	370
33	93	坏身		64.14	1.02	22.16	5.09	0.06	2.10	0.60	2.34	2.16	0.10	255	158	392	
34	94	甕		69.03	0.77	16.71	3.24	0.04	2.45	0.37	5.44	1.59	0.14	162	120	277	
35	68	住居5	蓋坏	67.46	0.83	20.02	5.00	0.04	1.89	0.23	2.61	1.57	0.07	201	79	317	
36	67		坏身	52.66	1.39	25.66	13.99	0.13	2.21	0.66	1.82	1.28	0.01	146	136	372	
37	66		坏身	67.07	0.77	19.31	5.31	0.05	1.93	0.20	3.03	2.01	0.07	237	92	353	
38	69		高坏	66.54	0.84	18.72	3.13	0.03	2.51	0.23	5.97	1.75	0.11	164	97	280	
39	166	溝8	坏身	57.76	1.04	25.57	4.66	0.06	2.83	0.62	5.24	1.96	0.03	189	147	383	
40	159	溝7	坏身	60.14	0.92	23.88	7.26	0.11	2.17	0.58	2.62	2.06	0.07	246	151	340	

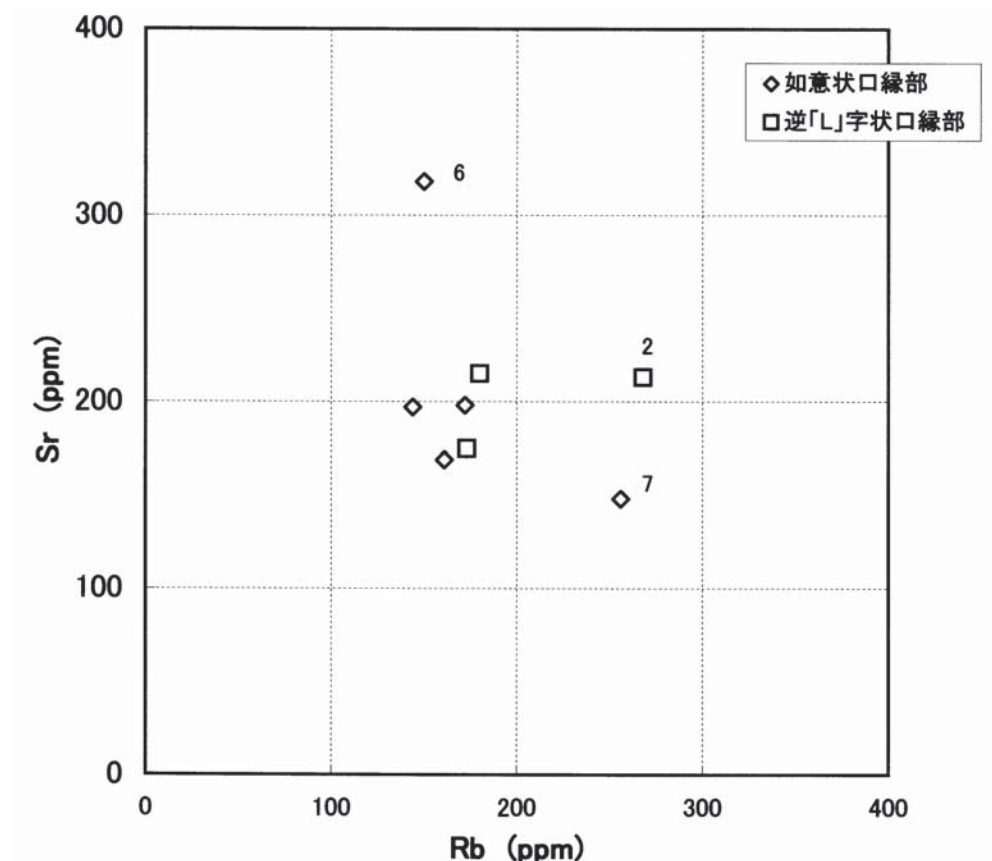
表8 三保第1遺跡出土土器分析値一覧表(%) ただし、Rb・Sr・Zrはppm

試料No.	掲載No.	掲載遺構名	器種	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Rb	Sr	Zr
1	96	溝3	坏蓋	66.82	1.07	20.22	6.09	0.05	1.85	0.06	2.53	1.04	0.12	147	37	407
2	95		坏蓋	66.21	0.98	20.42	6.99	0.05	1.81	0.07	2.12	1.16	0.02	150	28	422
3	98		甕	70.79	0.86	17.25	4.76	0.06	1.78	0.21	2.17	1.77	0.15	217	59	364

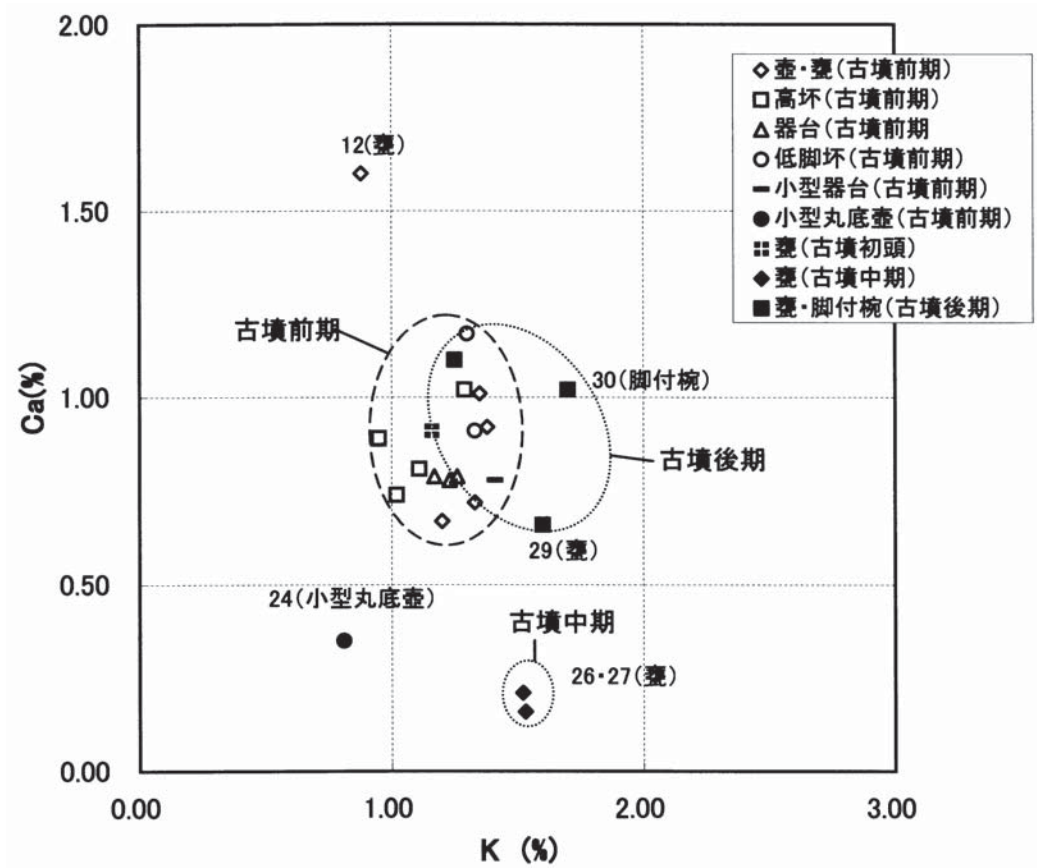




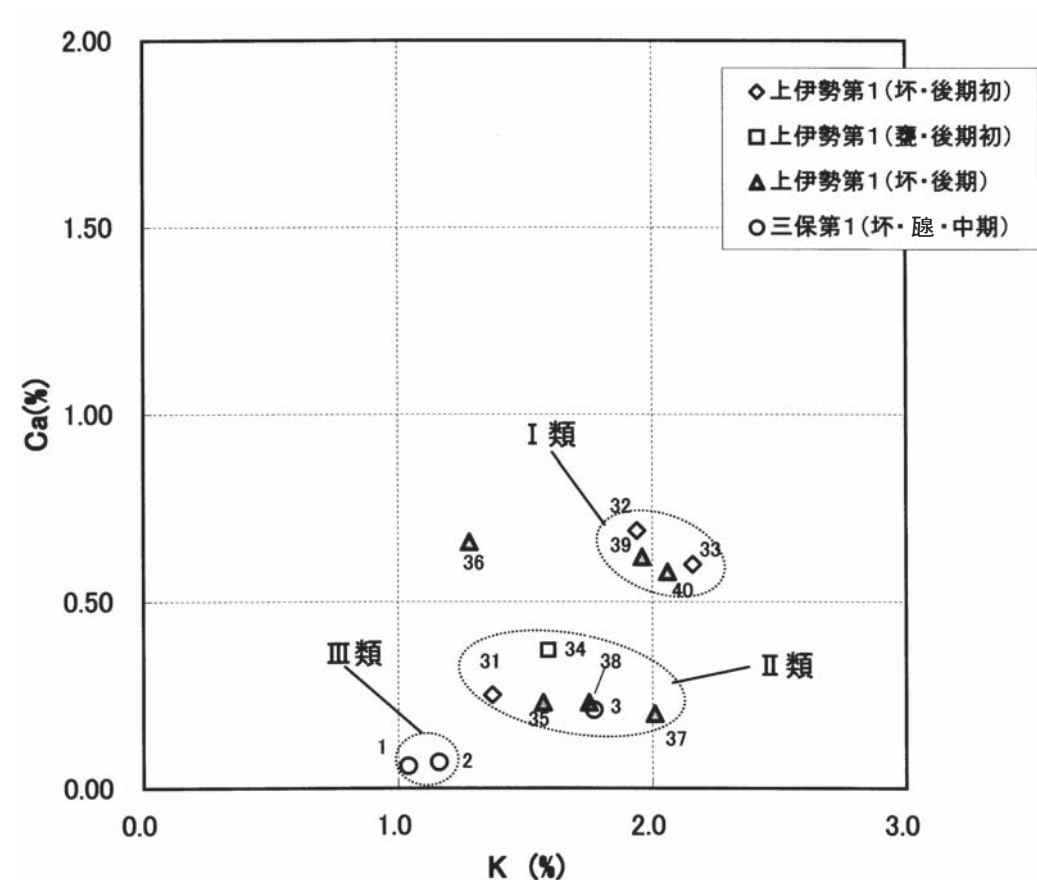
第14図 弥生時代前期甕の口縁形態による胎土の比較 (K-Ca)



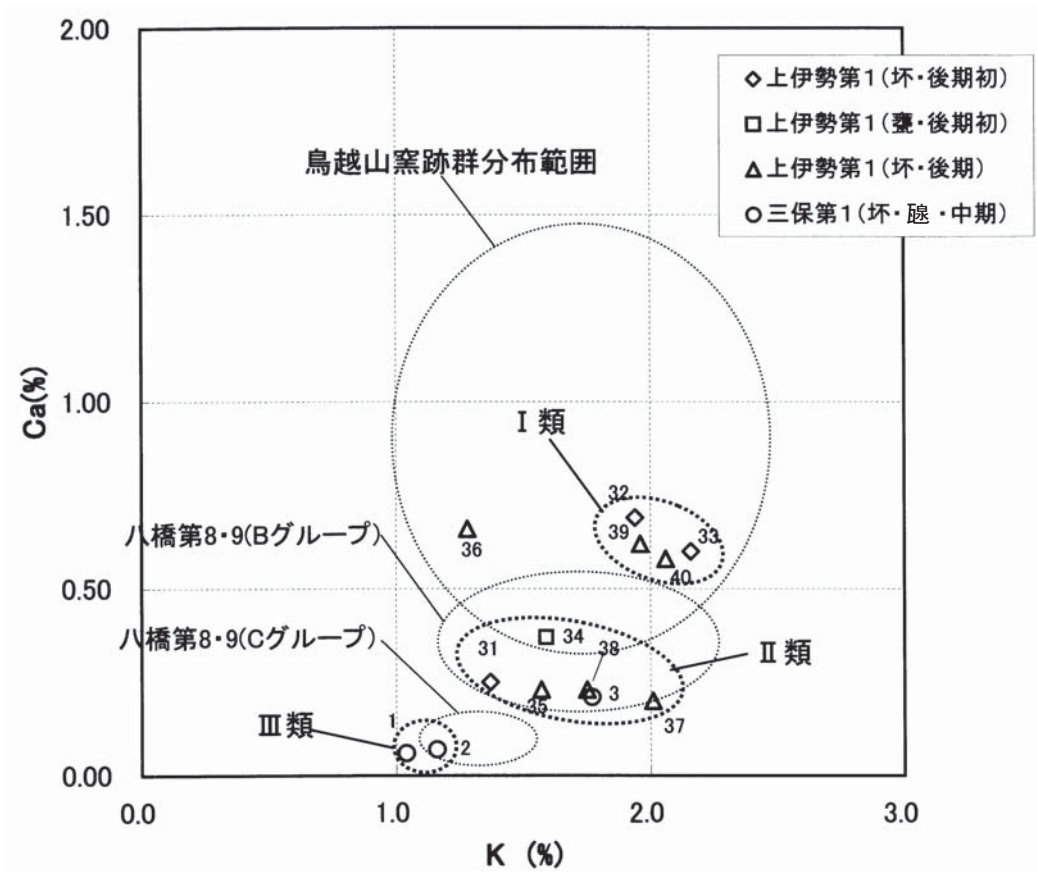
第15図 弥生時代前期甕の口縁形態による胎土の比較 (Rb-Sr)



第16図 古墳時代初頭～後期の器種別による胎土の比較 (K-Ca)



第17図 古墳時代後期 (須恵器) の胎土比較 (K-Ca)



第18図 上伊勢第1・三保第1遺跡出土須恵器の産地推定 (K-Ca)

## 第7節 上伊勢第1遺跡における花粉分析

奈良教育大学 金原正明

古環境研究所 金原正子、岡山邦子

### 1. はじめに

上伊勢遺跡では、平安時代から室町時代の中世の畠の畝が検出され、花粉分析と珪藻分析の環境考古学分析を行い、環境と植生、農耕の復元を試みた。財団法人鳥取県教育文化財団埋蔵文化財センターからは、分析を行う貴重な機会を頂いた。なお、本分析は、文部省科学研究費特定領域研究『中世考古学の総合的研究』「自然科学分析による中世の環境変動の解明と農耕変遷の究明」の一環として行った。

### 2. 試料

試料は、上伊勢遺跡で試料1（弥生前期～古墳後期の黒ボク）、試料2（畠1の耕作土）、試料3（畠1を覆う砂）、以上計3点である。

### 3. 花粉分析

#### （1）原理

種子植物やシダ植物等が生産する花粉・胞子は分解されにくく堆積物中に保存される。花粉は空中に飛散する風媒花植物と虫媒花植物等があり、虫媒花植物に対し風媒花植物は非常に多くの花粉を生産する。花粉は地表に落下後、一部土壤中に留まり、多くは雨水や河川で運搬され水域に堆積する。堆積物より抽出した花粉の種類構成や相対比率から、地層の対比を行ったり、植生や土地条件の古環境や古気候の推定を行う。普通、比較的広域に分布する水成堆積物を対象として、堆積盆単位などのやや広域な植生や環境と地域的な対比に用いられる。考古遺跡では堆積域の狭い遺構などの堆積物も扱い、局地的な植生や環境の復元にも用いられている。

#### （2）方法

花粉粒の分離抽出は、試料に以下の物理化学処理を施して行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- 2) 水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- 4) 水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す。
- 5) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、遠心分離（1500rpm、2分間）の後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島

倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。

（3）分類群

出現した分類群は、樹木花粉2、草本花粉6、シダ植物孢子1形態の計9である。これらの学名と和名および粒数を表9に示す。主要な分類群は写真に示した。また、寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。

以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

クリ、シイ属

〔草本花粉〕

イネ科、カヤツリグサ科、ソバ属、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子

（4）花粉群集の特徴

- 1) 試料1（弥生前期～古墳後期の黒ボク）では花粉総数が非常に少なく、草本花粉のイネ科、カヤツリグサ科、ソバ属、タンポポ亜科、ヨモギ属、樹木花粉のシイ属などが出現する。
- 2) 試料2（畠1の耕作土）では花粉総数が非常に少なく、草本花粉のカヤツリグサ科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属、樹木花粉のクリなどが出現する。
- 3) 試料3（畠1を覆う砂）では、花粉は検出されなかった。

4. 珪藻分析

（1）原理

珪藻は主に水域に生息する珪酸の被殻を有する単細胞植物であり、海水域から淡水域のほぼすべての水域に生活し、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息する。塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じてそれぞれ

表9 花粉分析結果

分類群		1	2	3
学名	和名			
Arboreal pollen	樹木花粉			
<i>Castanea crenata</i>	クリ		1	
<i>Castanopsis</i>	シイ属	1		
-----				
Nonarboreal pollen	草本花粉			
Gramineae	イネ科	4		
Cyperaceae	カヤツリグサ科	1	1	
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属	1		
Lactucoideae	タンポポ亜科	1	7	
Asteroideae	キク亜科		2	
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	10	9	
-----				
Fern spore	シダ植物孢子			
Monolate type spore	単条溝孢子		13	
Arboreal pollen	樹木花粉	1	1	0
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	0	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	17	19	0
Total pollen	花粉総数	18	20	0
-----				
Pollen frequencies of 1 cm <sup>3</sup>	試料1 cm <sup>3</sup> 中の花粉密度	2.5 × 10 <sup>2</sup>	1.4 × 10 <sup>2</sup>	0.0
-----				
Unknown pollen	未同定花粉	1	0	0
Fern spore	シダ植物孢子	0	13	0
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)



表10 珪藻分析結果

分類群	1	2	3
貧塩性種 (淡水生種)			
<i>Achnanthes lanceolata</i>			1
<i>Amphora copulata</i>		1	
<i>Amphora montana</i>		1	
<i>Cocconeis placentula</i>		5	1
<i>Cymbella cesatii</i>	9	12	1
<i>Cymbella leptoceros</i>		8	
<i>Cymbella minuta</i>	3	9	1
<i>Cymbella naviculiformis</i>	1	2	
<i>Cymbella silesiaca</i>	21	133	1
<i>Cymbella sinuata</i>	2	1	1
<i>Cymbella tumida</i>	4	21	
<i>Cymbella turgidula</i>		28	
<i>Diploneis sp.</i>	1	12	
<i>Epithemia adnata</i>		1	
<i>Eunotia minor</i>	3	22	
<i>Eunotia praerupta</i>		3	
<i>Fragilaria capucina</i>		4	
<i>Gomphonema acuminatum</i>		1	
<i>Gomphonema clevei</i>	1	1	
<i>Gomphonema globiferum</i>	2	1	
<i>Gomphonema gracile</i>	1	2	
<i>Gomphonema parvulum</i>	9	12	1
<i>Gomphonema pseudoaugur</i>		1	
<i>Hantzschia amphioxys</i>	1	7	1
<i>Meridion circulare v. constrictum</i>		1	
<i>Navicula contenta</i>		1	
<i>Navicula cuspidata</i>		2	
<i>Navicula elginensis</i>			3
<i>Navicula goeppertiana</i>		1	
<i>Navicula mutica</i>	2	4	
<i>Neidium ampliatum</i>		2	
<i>Pinnularia borealis</i>	2	6	
<i>Pinnularia gibba</i>		2	
<i>Pinnularia interrupta</i>		1	
<i>Pinnularia maior</i>		1	
<i>Pinnularia subcapitata</i>	1		
<i>Pinnularia viridis</i>	1		2
<i>Synedra ulna</i>	2	8	
<i>Tabellaria fenestrata-flocculosa</i>	3	19	
貧-中塩性種 (淡-汽水生種)			
<i>Rhopalodia gibberula</i>	7	43	
合計	76	379	13
未同定	5	9	1
破片	28	165	5
試料 1 cm <sup>3</sup> 中の殻数密度	1.6 × 10 <sup>4</sup>	1.6 × 10 <sup>6</sup>	2.8 × 10 <sup>3</sup>
完形殻保存率 (%)	74.3	70.2	73.7

の種類が固有にまたは許容範囲をもって多重な環境要因に生育する。珪酸の被殻は死後、堆積粒子として堆積物中に残存する。堆積物より検出した珪藻遺骸の種類構成や組成は当時の堆積環境を反映し水域の環境を主とする古環境の復元に用いられる。

(2) 方法

試料には以下の物理化学処理を施し、プレパラートを作成した。

- 1) 試料から 1 cm<sup>3</sup>を秤量する。
  - 2) 10%過酸化水素水を加え、加温し反応させながら、1晩放置する。
  - 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドおよび薬品の水洗を行う。水を加え、1.5時間静置後、上澄みを捨てる。この操作を5、6回繰り返す。
  - 4) 残渣をマイクロピペットでカバーガラスに滴下し乾燥させる。マウントメディアによって封入しプレパラートを作成する。
- プレパラートは生物顕微鏡で600~1500倍で検鏡し、直線視野法により計数を行う。同定・計数は珪藻被殻が100個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

(3) 分類群

試料から出現した珪藻は、貧塩性種 (淡水生種) 39分類群、貧-中塩性種 (淡-汽水生種) 1分類群である。計数された珪藻の学名と個数を表10に示す。また珪藻総数を基数とする百分率を算定したダイアグラムを図19に示す。珪藻分析結果は図に示すように分帯の区分を行った。

以下にダイアグラムで表記した主要な分類群を記す。

〔貧-中塩性種〕

*Rhopalodia gibberula*

〔貧塩性種〕

*Cocconeis placentula*, *Cymbella cesatii*, *Cymbella leptoceros*, *Cymbella minuta*,

*Cymbella silesiaca*, *Cymbella sinuata*, *Cymbella tumida*, *Cymbella turgidula*, *Diploneis* sp., *Eunotia minor*, *Fragilaria capucina*, *Gomphonema gracile*, *Gomphonema parvulum*, *Hantzschia amphioxys*, *Navicula elginensis*, *Navicula mutica*, *Pinnularia borealis*, *Synedra ulna*, *Tabellaria fenestrata-flocculosa*

#### (4) 珪藻群集の特徴

珪藻構成と珪藻組成の変化から、下位より2帯の珪藻分帯を行った。

##### 1) I帯 (試料1、2)

ほとんど貧塩性種(淡水生種)で占められ、貧-中塩性種(淡-汽水生種)がわずかに出現する。貧塩性種(淡水生種)では流水不定性種の*Cymbella silesiaca*が優占し、流水性種で中~下流水性河川指標種群の*Cymbella turgidula*, *Cymbella minuta*や、止水性種で沼沢湿地付着生種群の*Eunotia minor*, *Tabellaria fenestrata-flocculosa*, 止水性種の*Cymbella tumida*などが伴われる。貧-中塩性種(淡-汽水生種)では、*Rhopalodia gibberula*が出現する。

##### 2) II帯 (試料3)

珪藻密度は非常に低く、わずかに検出された珪藻はすべて貧塩性種(淡水生種)で占められた。

### 5. 考察

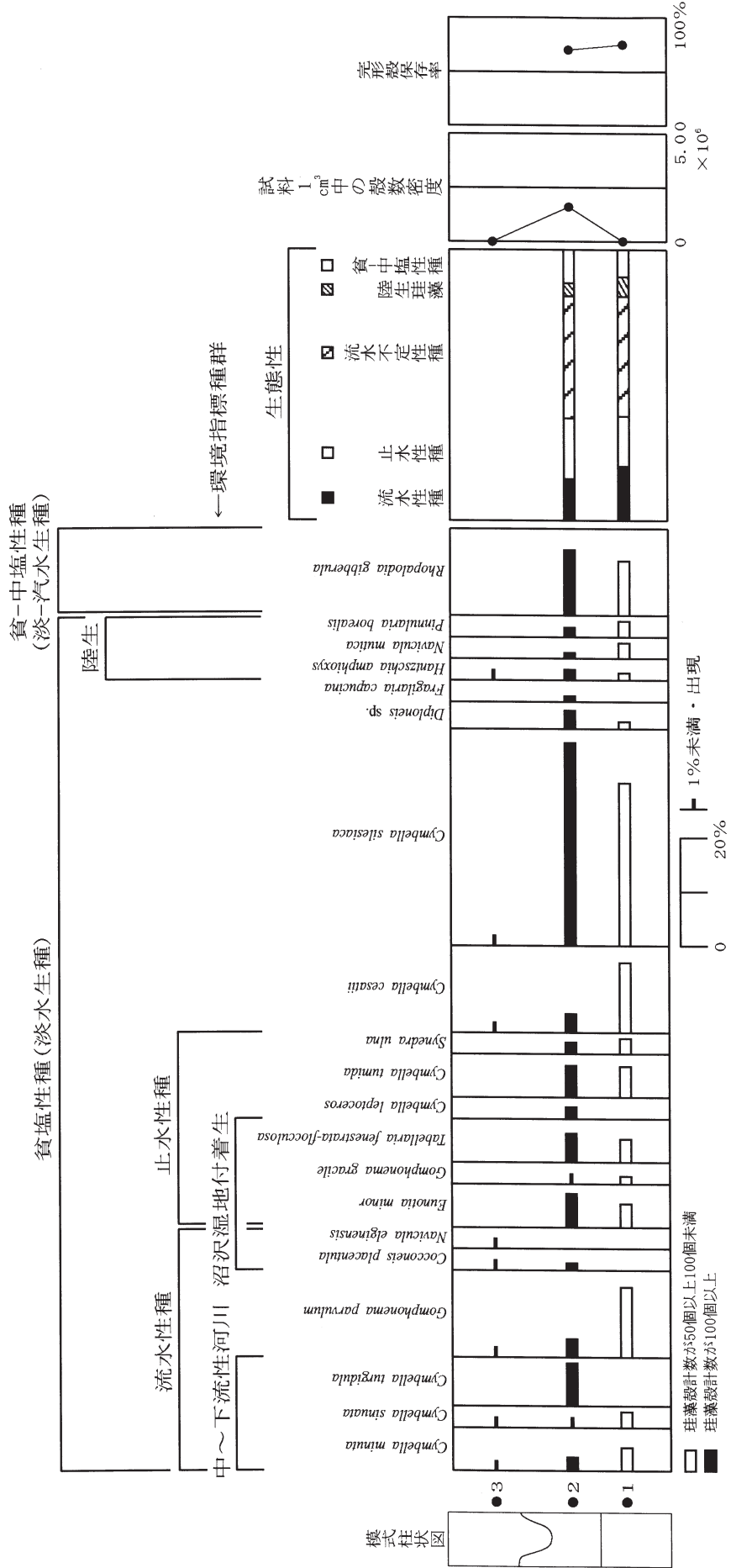
試料1(弥生前期~古墳後期の黒ボク)、試料2(畠1の耕作土)は、花粉群集と珪藻群集の特徴が類似し、上層で耕作土ある試料2(畠1の耕作土)の花粉や珪藻の微細な遺体が、耕作により下層の試料1(弥生前期~古墳後期の黒ボク)に影響を及ぼしたと考えられる。花粉は少ないが、ヨモギ属やタンポポ科などの乾燥を好む人里植物および畑作雑草の性格をもつ草本が生育し、ソバの畑作が行われていた。花粉が少ないため他の栽培植物は不明である。

珪藻では流水不定性種、流水性種、止水性種、貧-中塩性種を主とする水生珪藻が検出され、河川や池沼からの散水灌漑が考えられる。貧-中塩性種が含まれることから、塩分濃度のある生活排水の流れ込む河川や池沼からもたらされたと考えられる。沼沢湿地付着生種群が多く、珪藻の付着した水草がもたらされたとみられ、不自然であり、水草を肥料として用いていた可能性を考えなければならない。

試料3(畠1を覆う砂)は花粉も珪藻もほとんど検出されなかった。

### 6. まとめ

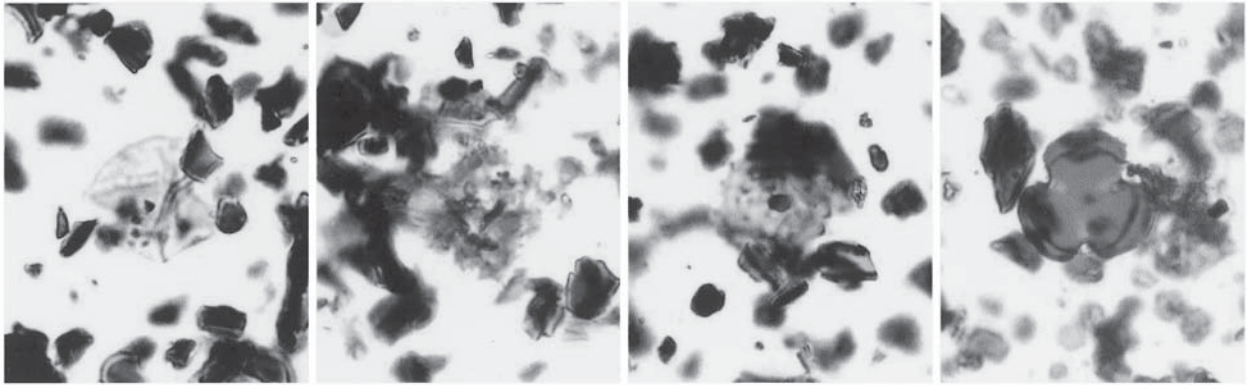
上伊勢遺跡では、平安時代から室町時代かの中世の畠の畝の花粉分析および珪藻分析を行った結果、試料1(弥生前期~古墳後期の黒ボク)および試料2(畠1の耕作土)で、乾燥を好む人里植物および畑作雑草の性格をもつ草本が生育し、ソバの畑作が示唆された。水生珪藻が検出され、河川や池沼からの散水灌漑が考えられ、水草を肥料として用いていた可能性が示唆された。



第19図 上伊勢遺跡における主要珪藻ダイアグラム

## 参考文献

1. 中村純, 1973, 『花粉分析』, 古今書院, 82-110 p.
2. 金原正明, 1993, 「花粉分析法による古環境復原」『新版 古代の日本 第10巻』角川書店, 248-262 p.
3. *Hustedt, F.*, 1937-1938, *Systematische und ologische Untersuchungen uber die DiatomeenFlora von Java, Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition.* Arch. *Hydrobiol.*, *Suppl.* 15, 131-506 p.
4. *Patrick, R. eimer, C. W.*, 1966, The diatom of the United States, vol.1, Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No.13, The Academy of Natural *Siences* of Philadelphia, 644 p.
5. *Lowe, R. L.*, 1974, Environmental Requirements and *pollusion* tolerance of fresh-water diatoms. National Environmental *Reserch. Center*, 333 p.
6. *Patrick, R. eimer, C. W.*, 1975, The diatom of the United States, vol.2, Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No.13, The Academy of Natural *Siences* of Philadelphia, 213 p.
7. *Asai, K. & Watanabe, T.*, 1995, Statistic Classification of *Eplithic* Diatom Species into Three Ecological Groups *relaiting* to Organic Water Pollution(2) *Saprophilous* and *saproxenous taxa*. *Diatom*, 10, 35-47 p.
8. 小杉正人, 1986, 「陸生珪藻による古環境解析とその意義-わが国への導入とその展望-」『植生史研究 第1号』植生史研究会, p.29-44.
9. 小杉正人, 1988, 「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用」『第四紀研究27』 1-20 p.
10. 安藤一男, 1990, 「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用」『東北地理42』 73-88 p.
11. 伊藤良永・堀内誠示, 1991, 「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」『珪藻学会誌6』 23-45 p.



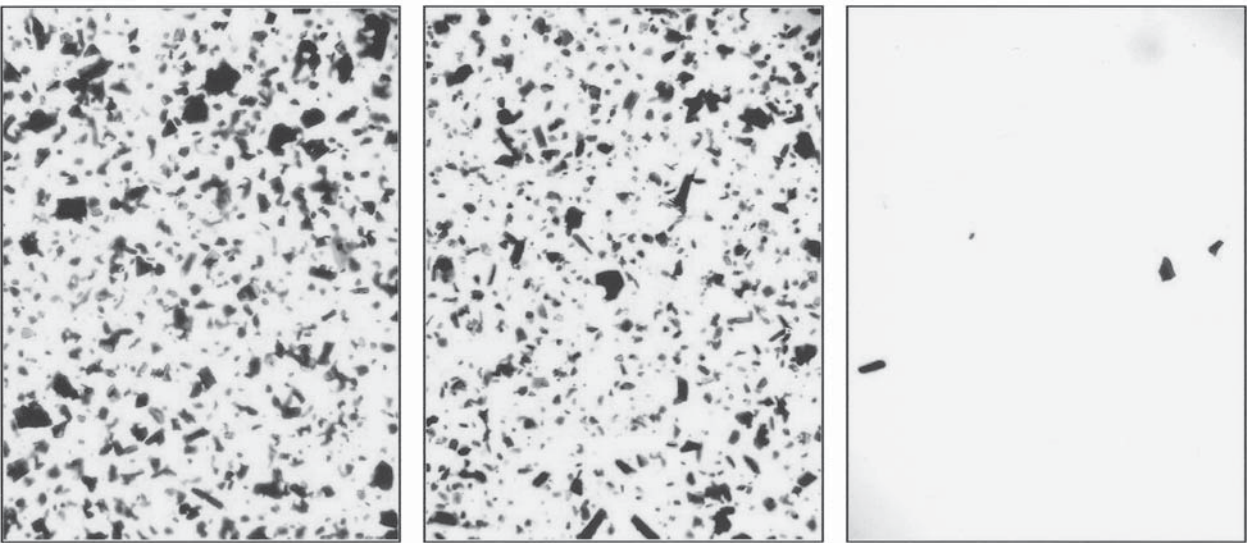
1 イネ科

2 タンポポ科

3 キク科

4 ヨモギ属

—10  $\mu$  m



5 試料①

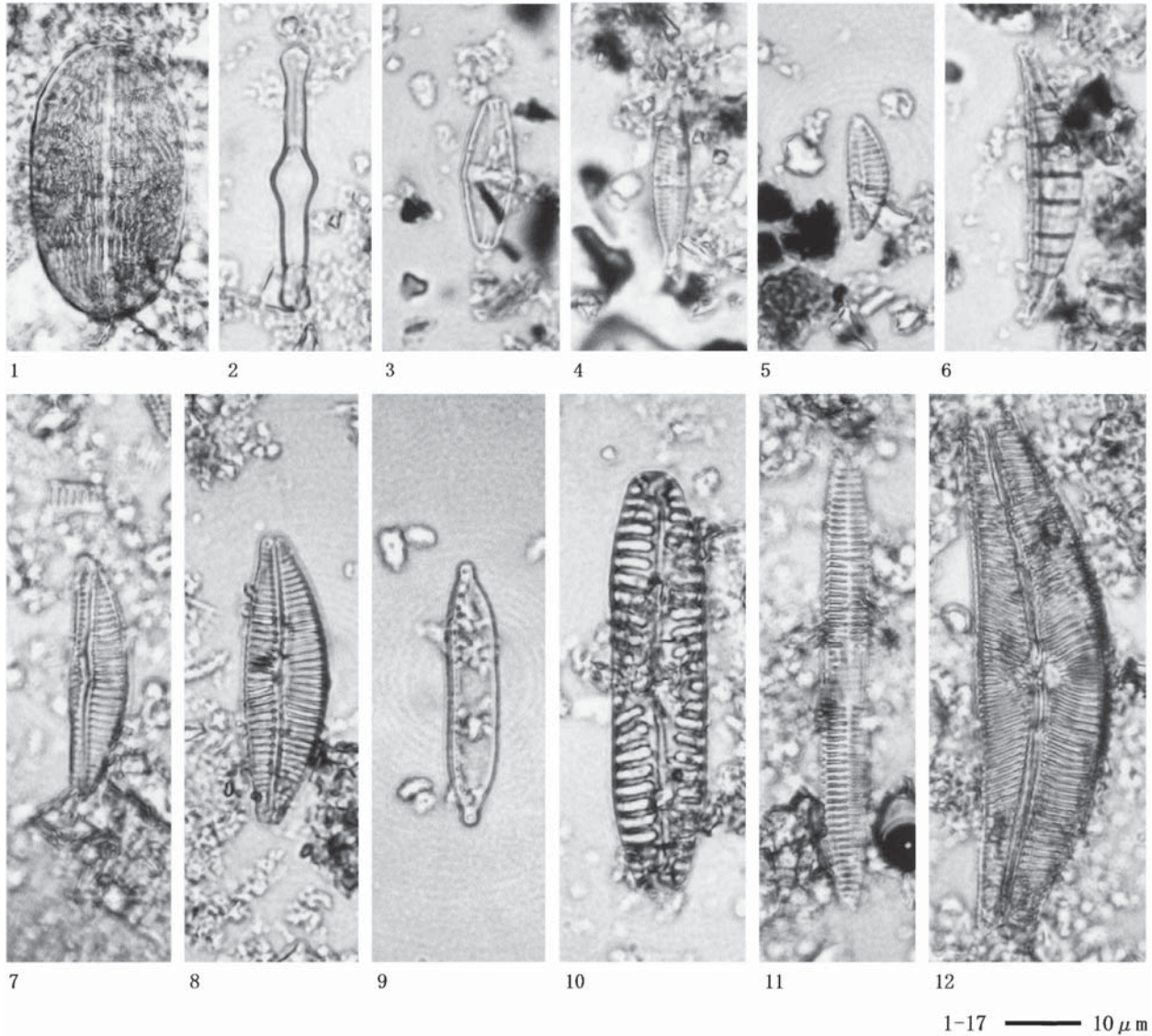
6 試料②

7 試料③

—100  $\mu$  m

写真図版7 上伊勢第1遺跡の花粉





1. *Cocconeis placentula* 2. *Tabellaria fenestrata-flocculosa* 3. *Navicula marina* 4. *Gomphonema parvulum* 5. *Cymbella minuta*  
 6. *Rhopalodia gibberula* 7. *Cymbella silesiaca* 8. *Cymbella turgidula* 9. *Hantzschia amphioxys* 10. *Pinnularia borealis*  
 11. *Synedra ulna* 12. *Cymbella tumida*

写真図版8 上伊勢第1遺跡の珪藻

## 第8節 上伊勢第1遺跡の軟X線分析

立命館大学 高橋 学

## 1. 視点

遺跡をとりまく自然環境や遺跡の土地利用を考察しようとした場合、現在の自然環境を把握した後、過去を復原するという手続きをふむ必要がある。現在の自然環境や土地利用は、過去の復原のための手がかりとして利用できるものの、過去の状況を示しているわけではない。旧石器時代や縄文時代などの研究では、このことはよく理解されている。しかしながら、原史時代や歴史時代を対象とした研究において、このことはしばしば忘れ去られてしまう。しかし、原史時代や歴史時代においても、自然環境は変化しており、そのことを無視して、正確な過去の復原はできない。また、自然環境と人間との関わりを検討することは、単に過去の問題にとどまらず、現在や、未来の問題でもある。また、どのように土地利用されていた場所が、何時、どのような原因で地表面が埋没したのか検討することは、土地開発史や災害史の研究でもある。人間は、どのような土地を選び、どのように開発したのか？さらに、災害にあった場合には、どのように再開発を行なったのか？そのような観点に立った研究が環境考古学である。これまで、環境考古学といえば、花粉分析を用いた植生の復原、気候復原、珪藻分析を用いた水域の環境復原など、あるいは寄生虫卵を用いた疾病や食生活の復原など微化石分析が主流を占めてきた。ここでは、堆積物や土壌層を用いて、過去の土地利用や自然環境の変貌にアプローチしてみたい。

## 2. 上伊勢第1遺跡の地形環境

大山は第四紀はじめに大量の凝灰角礫岩を放出し、広大な裾野をひくコニーデ式火山が形成されたことにより、古期大山が形成された。このとき形成された火山体は北から東にかけてよく残存している。古期大山は、その後、中央部がカルデラとして陥没したが、その際に生じた割れ目に沿って多くの寄生火山が噴出した。弥山（標高1,170m、最高峰：剣ヶ峰1,729m）は、カルデラの中に形成された中央火口丘であり、巨大な溶岩円頂丘をなしている。これが新規大山である。新規大山は、その後の爆裂により山体が破壊される一方、2度にわたって大量の火砕流を噴出し、西半分にあたる緩勾配の裾野を形成した。第1回目の火砕流である名和火砕流は、約3万年前に、第2回目の弥山熱雲は約1.7万年前の噴出である。そして、前者の噴出時に降下した火山灰は中期火山灰、後者のそれは新規火山灰として、鳥取砂丘の編年などに利用されている（PL.43-写真1、PL.44-写真2）。

さて、加勢蛇川は、大山の東側に源を発し、地獄谷などの険しい溪谷や大山滝などいくつかの滝を経て北東流し、法万付近で向きを北に変え二軒屋で日本海に注ぐ。その流長は17.6km、流域面積は34.8km<sup>2</sup>の河川である。加勢蛇川中・下流域では、東岸に古期火山の裾野を刻んだ谷に更新世段丘面・扇状地帯や新規火砕流や開析された平坦面を形成している。他方、西岸には古期火山の裾野を刻んだ谷に扇状地帯が形成されている。この扇状地帯には、圃場整備が実施される以前には条里型土地割が展開していた。また、加勢蛇川の最下流の二軒屋付近には3列ほどの砂堆列が海岸線に沿ってのびており、その間に細く旧潟湖が存在し、かつて湊であったとの説もある。

さて、今回分析対象とした上伊勢第1遺跡は、大山を刻み、北流する加勢蛇川が形成する扇状地帯に位置している。その経緯度は、東経133°42′06″、北緯35°29′14″、現在の標高はおよそ35mを測る。

### 3. 上伊勢第1遺跡の地層観察結果

上伊勢第1遺跡が立地する扇状地帯を、かつて豊島吉則は中位段丘面としていたが、現況の地形や発掘調査によって地層を観察する限りでは、古墳時代以降に属する堆積物が認められることから、完新世段丘Ⅱ面にあたると考えられる（第20図）。

さて、発掘調査の最も東側にあたる地層の断面では、肉眼レベルで7面の地表面が確認できた（PL.45—写真3）。ここでa層と表記したのは、地表面として土壌化作用を受けたことのある地層である。それに対して、b層と表記したのは岩屑であり、地表面になったことはないと考えられる地層である。a層は、植物や人間を含めた動物による生物的攪乱を受けており、そのことが原因で、古代やそれ以前の地層では、炭化物の含有量が多く色が黒いことが多い。この炭化物は、低湿な土地ではヨシ属の、乾燥した土地ではススキやササに起源を持つことが多い。また、古代やそれ以前においては、耕作によって土壌中に空気が入り込むことで、炭化物の分解が進むため、耕土の方が炭化物の含有量が少なくなっていることもある。なお、鉄製農具が普及するまでの間は、耕作土の厚さが5cm程度であることが多い。

他方、中世において完新世段丘Ⅱ面となったところでは、地表面の埋積による更新が進行しないことや、二毛作の普及、根刈りによる藁の利用、さらには施肥が十分でないことなどの理由で、著しく老朽化した耕土となっていることもかなり普遍的にみられる。このような場合、水田耕土が灰白色～乳白色を呈するという共通性が認められる。また、段丘化による灌漑用水の不足により、灌漑用水をあまり必要としない大唐米などの導入など耕作の工夫がなされた可能性がある。さらに、段丘化以前に水田であったところが、畠に地目転換したり、荒野となったりした場合すら考えられる。

中世末以降になると、堆積環境に大きな変化が認められる。その原因のひとつは小氷期の開始による気候の寒冷化である。また、河川のより上流域の開発による土壌侵食の進行によっても、河川の中・下流域に大規模自然堤防が形成される。さらに、これらの原因で大量に土砂が海に流出したり、小氷期の影響で海水準がわずかに低下することで海浜が露出したりし、そこに強い北西季節風が吹くと、海岸砂丘や河畔砂丘が形成されやすくなる。

今回、上伊勢第1遺跡で観察された7面の地表面は、上記のような環境変化を反映している可能性が高い。古墳時代の住居跡など生活の痕跡が確認されたのが7a層上面である。7a層は、著しく炭化物を含む層であり、ササかススキの繁茂する場所が住居域に選ばれ開発されたものと思われる。

これに対して、4a層、4a”層、5a層、5a’層、6a層は耕土として利用された土壌層と考えられる。4a’層は4a層上面から掘り込まれた土坑の埋土である。特に、4a層上面には、ほぼ東西方向にのびる畝状遺構が確認されており、4a’層は畝の盛土である。

1a層は、現在の水田耕土。2a層、3a層も堆積状況や土壌の状態から水田耕土と考えられるが、土壌は老朽化しており、肥沃な水田とは考えられない。また、畝状遺構を被覆する3b層は、淘汰の良い細砂を主体とした地層であり、加勢蛇川の氾濫によってもたらされた大規模自然堤防を構成する砂層と、それが季節風によって飛砂となった河畔砂丘の可能性が考えられる。



#### 4. 上伊勢第1遺跡のピールと軟X線分析

今回、上伊勢第1遺跡の調査にあたり、埋蔵文化財センターは、遺跡の何地点かで、地層の断面や平面の合成樹脂による剥ぎ取りが実施された。そして、剥ぎ取られたサンプル（以下ピールと呼ぶ）の一部については、軟X線写真が撮影された。筆者が、今回、依頼を受けたのは、この軟X線写真の撮影についてであり、遺跡全体の古環境復原ではない。ピールのサンプル地点についても埋蔵文化財センターによって選定されたものである。

さて、考古学の分野では、博物館等に地層の断面などを展示する目的で、これまでピールが作成されてきた。しかし、ピールが最初に考案された堆積学の分野では、ピールは未固結堆積物を固定し、詳細に観察するために用いられた。また、微細な堆積構造や化石の有無を非破壊で調べるため、波長の長い軟X線写真を用いて、堆積構造を分析することも実施されていた。

筆者は、これまでに、発掘現場で地層のサンプリングを行い、それに軟X線を照射することで、試掘段階で旧地表面の認定を行なうことや、土地利用の分析、あるいは旧地表面の埋積環境を明らかにすることを試みてきた。その際、地層が細粒で粘性に富んでいるような場合には、長さ25cm、幅10cm、厚さ5mm～2cmのステンレス製の型抜きを用いて地層をサンプルリングした。厚さが5mmごとに変えてあるのは、そこに含まれる情報の多さや、使用できる軟X線撮影機の機能に対応するためである。サンプルの厚さが薄ければ、そこから得られる情報は少なくなる。しかし、厚すぎるとは、情報が重なりあい過ぎて分析が不可能になるのである。また、サンプルが厚ければ、一般に軟X線の照射量を増やす必要があり、高機能な撮影装置が必要になる。それらを勘案してサンプルの厚さが決定される。ピールを作成する必要があるのは、地層が粘性に乏しく、上記の方法では採取できない場合である。どのような場合にも、ピールとして地層を剥ぎ取ることが最上の方法と考えているわけではない。ピールの作成は、むしろ次善の策である。

今回、上伊勢第1遺跡で採取されたピールは、地層の粘性が高く合成樹脂がしみこみにくい状態であった。したがって、軟X線分析のためにピールを作成することには不向きな堆積物であったといえよう。その結果、採取されたピールの厚さは、1mmないしそれ以下のものであり、そこから読み取れる情報にはかなり制約があったといわざるをえない。

なお、軟X線撮影装置の制約から3mA以下の電流しか使用することができなかった。撮影は、ピールの下に直接シールドされたX線フィルムを置き、50kV×3mA×30秒で行い、現像は自動現像装置を用いて実施した。この軟X線照射量は、何種類かの予備撮影から決定されたものである。フィルムがA4サイズであったため、撮影後に、透過型スキャナーでコンピュータに読み込み、画像処理を行ったり、接合したりした。

第7地点は、遺跡の南壁中央付近の垂直断面である。この垂直断面は、上伊勢第1遺跡でみることのできる基本的な地層が、ほぼそろっている。軟X線写真、特にポジフィルムをみると堆積構造の違いが明瞭に把握できる。たとえば、5a層から7a層にかけて著しくブロック状の土壌構造が発達していることがわかる。岩屑である7b層や4b層には、そのような構造は認められない。このような土壌構造は、安定した草原のような場所にしばしばみられるものであり、人間による耕作などの攪乱が極端に行なわれたとは考えられない。畝状遺構の盛土にあたる4a層では、十分に土壌の攪拌が行なわれているために、ブロック状構造は認められるものの、その粒径は細かく、しかも揃っている。

さらに、老朽化した水田耕土と考えられる3a層、2a層、1a層では、ブロック状構造は粒径がさらに細くなり、ほとんどブロック状構造がわずかにみとめられるに過ぎなくなる。

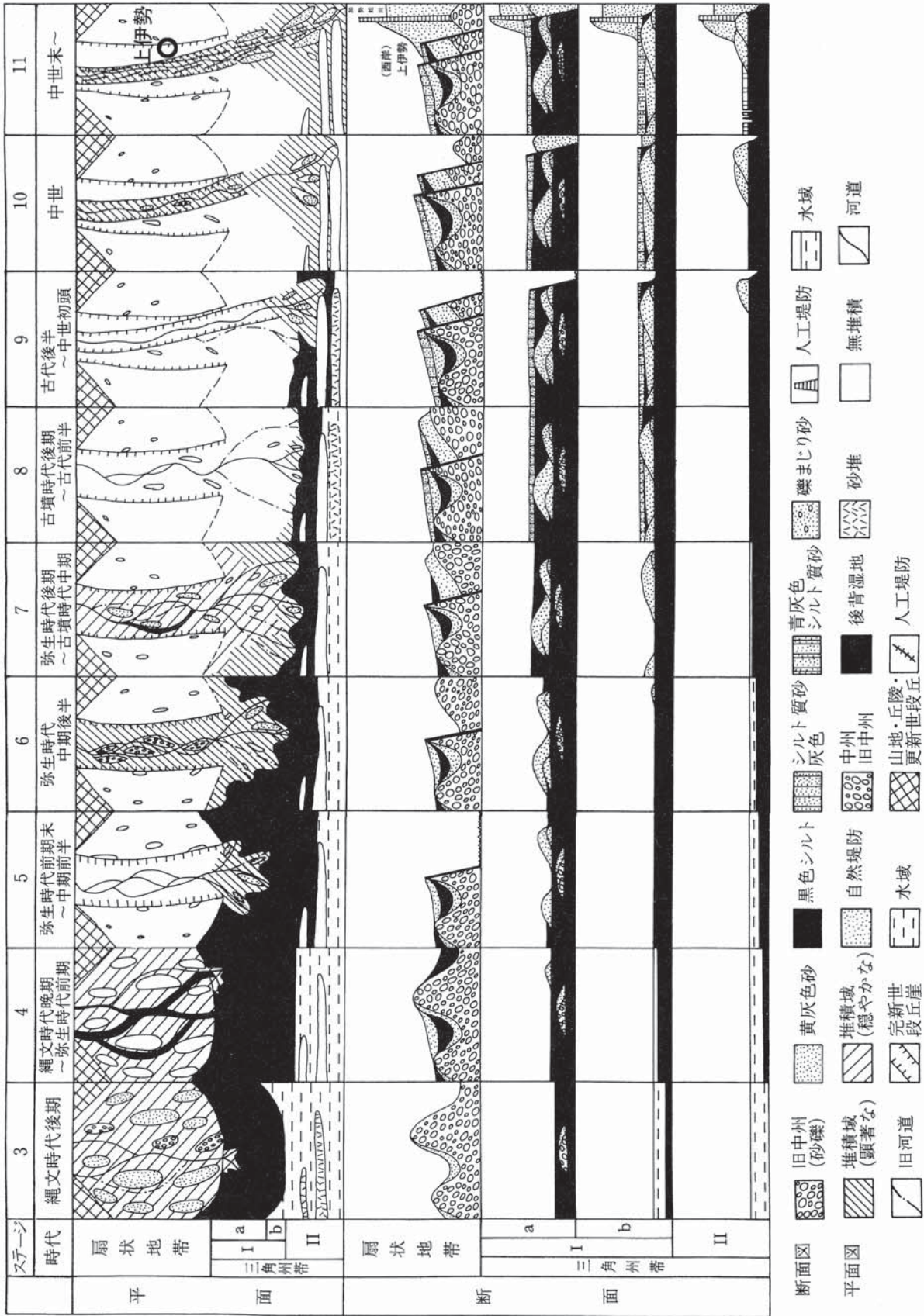
第8地点は、畝状遺構の高まりの表面を、南北に横断するように採取された平面のピールである。この旧地表面には、偶蹄目（おそらくはウシ）の足跡と、ヨシないしはススキではないかとみられるイネ科の生痕が残されていた。この旧地表面は、淘汰の良い細砂層3b層で覆われていた。このことから、3b層堆積直前の土地利用の様子を推測することができる。4a層上面には、整然と東西にのびる畝状遺構が存在し、畝であったと考えられるが、平面では、作物の痕跡は認められなかった。また、ヨシないしはススキではないかと考えられる生痕がみられたこと、さらには偶蹄目が南から北へ畝状遺構を斜めに横断するように歩いた痕跡があることから、畝状遺構が3b層で埋積される直前には、作物が作られていなかった可能性が高いと考えられる。

第9地点は、畝状遺構の高まり部分を垂直方向に横断して採取されたピールである。この地点における軟X線写真には、良く攪拌された土壌が写っている。地層の上面はサンプル採集前にカットされているために問題があるが、少なくともこの上面からはイネの下位根様の生痕が認められる。そして、その生根の間隔は、南北方向におよそ26.7cmと等間隔に並んでいる。畝状遺構の高まりには何の影響も及ぼされていないことから、この地層の上面より上層の水田層から下方にのびているものである可能性も否定できない。

## 5. 結論

今回、採取されたピールや、その軟X線写真を見る限りでは、畝状遺構は作物の存在していない時期に3b層によって、被覆された可能性が高いと考えられる。農閑期に牧、あるいは野となっていた可能性が考えられる。





第20図 縄文時代後期以降における微地形変化

## 第9節 上伊勢第1遺跡から検出された古耕作土の土壤微細形態について

奈良文化財研究所 宮路淳子

### 1. はじめに

上伊勢第1遺跡は、鳥取県琴浦町に所在し、鳥取県教育文化財団埋蔵文化財センターが一般国道9号の改築工事に伴う発掘調査を行った。調査の結果、縄文時代早期の押型文土器、弥生時代前期の竪穴住居跡、古墳時代前期～後期の竪穴住居跡、中世の掘立柱建物2棟、土坑5基、畠跡などが検出されている。

今回分析を行った中世（平安時代末～鎌倉時代）の畠跡は、砂に覆われた良好な保存状態で検出された。畠の上面には、植物の根の痕跡と考えられる直径5～12cmほどの楕円形をした穴も確認されている。畠と畠の間隔は2mある。このような残存状況から、埋没当時の耕作土壌の構造が保たれていることが予想されたため、この中世の畠跡の畠内部、およびその下層から試料を採取し、土壌の微細形態学的な分析を行った。

### 2. 分析の方法

土壌の微細形態学的分析とは、土壌学の分野で創始された方法である。土壌構造を崩すことなく、遺跡に残された過去の履歴を、現地のままの状態で顕微鏡観察を行うことができる分析法であり、考古学の分野へは欧米では1950年代から応用されてきた。

薄片作成は次のような手順で行う。未攪乱な固まりのままの土壌あるいは堆積物を専用の金枠（クビエナ・ボックス）によって採取し、研究室で凍結乾燥後、真空下で樹脂（エポキシかポリエステル）を封入する。固化した土壌ブロックを岩石カッターで切断・整形の後スライド・ガラスに接着し、潤滑油を使いながら20～30 $\mu$ mまで研磨する。現在の薄片のサイズは8×15あるいは8×20cmまで大きくすることが可能となった。この大きさは、日本の平山良治（国立科学博物館つくば植物園）によってさらに30×15cmまで可能となっている。ふつう地質学や土器の胎土分析で使われる薄片のサイズは2.2×4cmであり、比べると格段に大きく、それゆえに考古学的層位や考古学的堆積物に典型的な、粗く微細構造的不均質という構造の研究に大きな価値をもつ。観察には実体顕微鏡および岩石顕微鏡を用い、画像をコンピューターに取り込んで画像解析を行う（第21・22図）。

### 3. 土壌の微細形態

土壌構造とは、土壌中で、砂、シルト、粘土などの一次粒子とそれらが結合してできた二次粒子（団粒）がさまざまに配列して、固相<sup>(i)</sup>部分と孔隙<sup>(ii)</sup>部分をつくっている状態をいう。これは、乾燥によって収縮したり、水をふくんで膨潤したり、植生や土壌動物の影響を受けたりして、しだいに空間的、立体的な配列となり、その特徴を示すようになる。これらは外観上の特徴から、柱状、塊状、板状、粒状などと呼ばれ、土壌分類の基準に用いられている。また、土壌の固相部分の集合状態を表しているため、孔隙率、仮比重、通気性、透水性、保水性、易耕性、耐食性などに密接に関わっている。

試料1は、上伊勢第1遺跡の砂層直下の中世の畠跡から採取した土壌断面である（写真図版9）。グランドマスは、褐色～茶褐色（PPL）の細砂～中砂と鈹物片、炭化物粒の粒状構造をもつ。マトリックスの粒径は小さく全体にほぼ揃っている。また中には鈹物が非常に細かく砕かれた状態で含まれている。こうした構造から、これらは人為的に土壌が攪拌された様子をよく示していると考えられる。また、直線状、円形の孔隙が多い。孔隙の最大径は1mm以下であり、線状の孔隙の長さは10～30mm前後である。ここに見られる孔隙は土壌中に棲息する生物（植物の根や土壌動物）に由来するものと考えられ、生物の活動が活発であった様子を示している。耕作土壌の特徴をよく示しているといえる。

試料2は、畠耕作土下から採取した土壌断面である（写真図版10）（左半面は、試料作成中の段階であり、50 $\mu$ m以上の厚さが残っているため、観察には使用していない）。グランドマスは、試料1と同様に、褐色～茶褐色（PPL）の細砂～中砂と鈹物粒子、炭化物粒子から粒状構造をもつ。粒径は小さく全体にほぼ揃っている。試料1よりもさらに細かな炭化物粒子を多く含む。円・楕円状、直線状、ジグザク状など多様な形状を呈する孔隙が非常に多い。孔隙の最大径は1mm以下であり、線状の孔隙の長さは2～3mmから10mm前後である。元来ペッドを構成する粒土は密であり発達は弱い。未攪乱土壌に特徴的な垂角塊状構造をなす様子から、試料2土壌が試料1ほど人為的な攪乱を受けていないことがわかる。また孔隙はほとんどみられない。

下半部には、黒ボク土の堆積が見られる。黒ボク土は黒色火山灰土でリン酸吸収係数が高く（＝リン酸固定力が大きい）、表層で腐植が多いため物理性良好な風積土である。黒ボク土では団粒がさらに結合して、より高次の団粒構造が形成されている。団粒の形成には、粘土、鉄やアルミニウムの酸化物、有機物などが関与する。団粒内部には微細な毛管孔隙ができ、団粒の外部には径の大きい非毛管孔隙ができるので、保水性、通気性、透水性などの物理性が良好な状態がつけられる。そのため、団粒構造をもつ土壌の生産力は高い。有機物や優良粘土施用は土壌の団粒化を促進させる。

写真図版11・12は、試料1の一部を実体顕微鏡で観察したものである。粒子間の孔隙およびチャンネル構造がよく観察できる。炭化物粒子の内容については不明である。

写真図版13・14は、試料2の黒ボク土の一部を実体顕微鏡で観察したものである。粒子間の孔隙および団粒構造がよく観察できる。炭化物粒子の内容については不明である。

#### 4. 考察

試料1の微細形態は、現世の畠耕作土壌と比較しても間隙率、粒土構成、マトリックスに共通性が多く見られる。また筆者は、これまでに福岡県三沢蓬ヶ浦遺跡（弥生時代前期）（宮路・平山印刷中）、兵庫県若松町遺跡（弥生時代中期）（宮路・平山2001）、群馬県吹屋三角遺跡（古墳時代）（宮路ほか印刷中）、青森県野木遺跡（平安時代）（宮路ほか2000）、宮柴前II遺跡（江戸時代）（宮路ほか2003）などにおいて、畠耕作土壌の微細形態学的な分析を行ってきた。これらの遺跡で示された耕作土壌とも、団粒構造において共通する特徴を多く持つ。

これに対して試料2は、前述の遺跡土壌との比較において、垂角塊状構造をもつという共通点が見られる。今回分析に用いた試料は、砂にパックされた畠遺構から採取した試料であることから、今後、中世遺跡から検出される古耕作土に関する基礎試料とすることができよう。

また試料2の下半部は、黒ボク土の堆積がある（写真図版10）。黒ボク土は前述の通り火山灰土で



リン酸吸収係数が高く、畑地に利用されることが多い。それはこの層が厚く、植物の根が深く伸長できるためである。また水が土中を通る透水性と植物が吸える水を土中に蓄える能力が発達しており、農作業に適しているためである。今回の分析では、黒ボク土の微細構造について、良好な試料が得られた。

今回は、これまで研究対象とされることが少なかった、中世の食料生産の場である畠土壌が良好な状態で検出されていることから、畠微細構造の分析によって、中世の耕作土に関する貴重な基礎的なデータを得ることができた。

今後さらに比較試料を蓄積し、古耕作土・黒ボク土に関するデータベースを構築し、従来調査段階での認識が困難とされてきた古耕作土の調査に寄与できるであろう。

試料採取・分析に便宜を図って頂いた、鳥取県教育文化財団埋蔵文化財センターの皆様には、心より厚く御礼を申し上げます。

\*用語は土壤薄片記載ハンドブック (Bullock, P. et al. 著、平山ほか訳 1989)、土壤肥料用語事典 (藤原ほか編 1998) による。

#### 参考文献

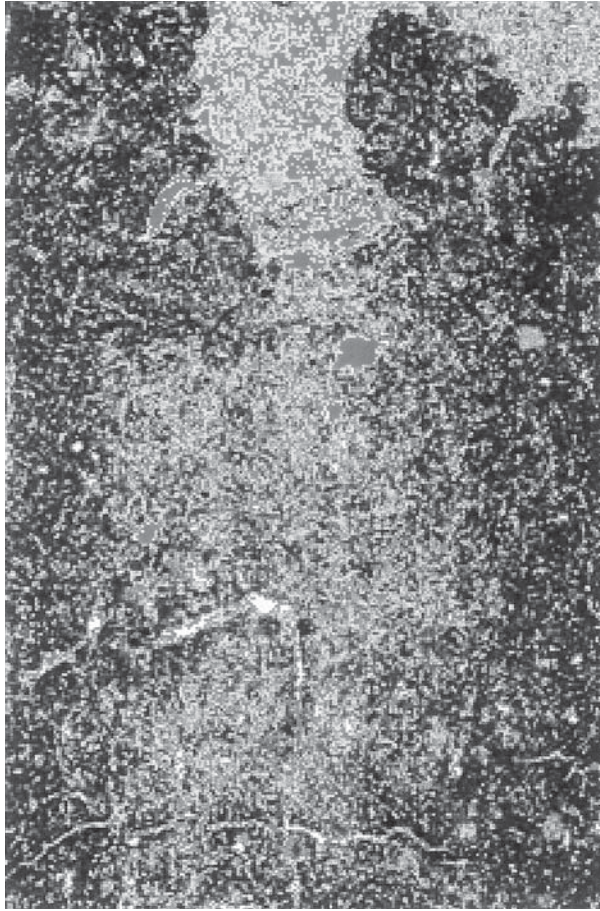
1. Bullock, P. et al. 著、平山良治ほか訳、1989、『土壤薄片記載ハンドブック』博友社
2. Courty, M.A., Goldberg, P. and Macphail, R.I. 1989. *Soils and Micromorphology in Archaeology*. University Press. Cambridge.
2. 藤原俊六郎・安西徹郎・小川吉雄・加藤哲郎編、1998、『土壤肥料用語事典』農文協
3. 宮路淳子・松井章・平山良治、2000、「野木遺跡の畝状遺構の土壤微細形態学的分析」『野木遺跡Ⅲ』青森県教育委員会
4. 宮路淳子・平山良治、2001、「若松町遺跡（第1次調査）畠遺構の土壤微細形態について」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会
5. 宮路淳子・平山良治・百原香織、2003、「宮柴前Ⅱ遺跡から検出された江戸時代のはたけ跡の土壤微細形態について」『宮柴前Ⅱ遺跡発掘調査報告書』伊勢崎市教育委員会
6. 宮路淳子・平山良治「三沢蓬ヶ浦遺跡から検出されたはたけ土壌の微細形態について」『三沢蓬ヶ浦遺跡発掘調査報告書』小郡市教育委員会（印刷中）
7. 宮路淳子・平山良治・百原香織「吹屋三角遺跡（恵久保Ⅱ区）から検出された古耕作土の土壤微細形態について」群馬県埋蔵文化財調査事業団（印刷中）
8. 藤原俊六郎・安西徹郎・小川吉雄・加藤哲郎編1998『土壤肥料用語事典』農文協

註

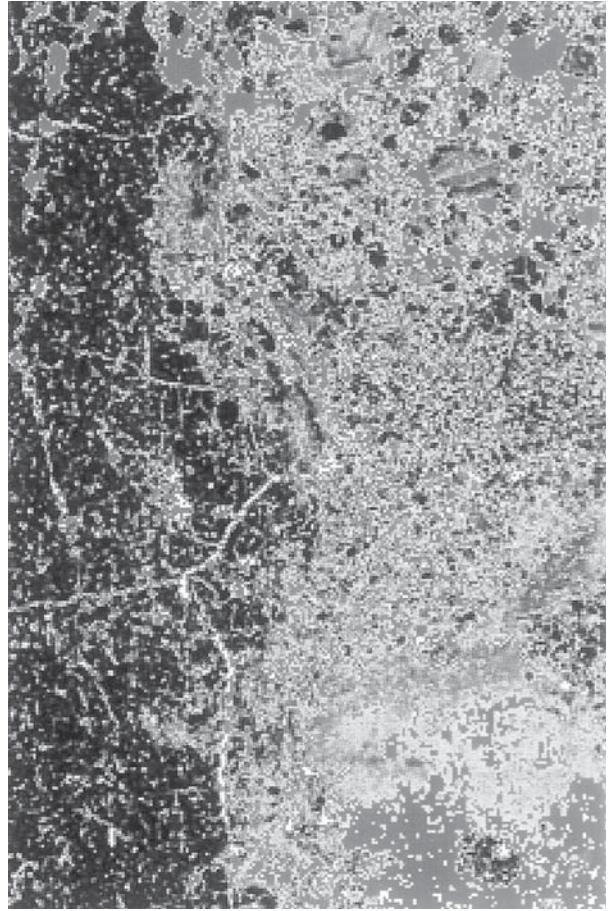
- i 固相は無機成分と有機成分から構成されている。無機成分はケイ素、アルミニウム、鉄、マンガンの酸化物や水酸化物、ケイ酸塩、リン酸塩、硫酸塩、炭酸塩、塩化物などから成り、有機成分は新鮮有機物、腐植物質（腐植酸・フルボ酸・ヒューミン）、非腐植物質（炭水化物、タンパク質、ペプチド、アミノ酸、脂質、有機酸、有機リン化合物など）から成る。土壌の骨格を形作るとともに、作物の生育に必要な養分の供給源であり、肥料成分を保持するなどの重要なはたらきをしている。
- ii 孔隙とは固相間のすきまのことであり、土壌水や土壌空気で満たされている。孔隙の量は土壌の固相以外の部分である液相と気相の和で示される。孔隙の量や大きさは、土壌粒子の集合度、配列のしかた、すなわち土壌構造によって異なり、土壌の通気性、透水性、保水性、根はりの良し悪しと関係している。

孔隙は大きさによって非毛管孔隙と毛管孔隙とに分けられる。非毛管孔隙は比較的大きな孔隙であり、毛管作用（毛管のような微細な穴のあいた管を水面上に立てると、水面が上昇する作用）がないので、水を保持することができない。この孔隙は粗孔隙とも呼ばれる。非毛管孔隙が多いと、通気性や透水性が大きくなる。一方、毛管孔隙は毛管作用の力によって、水を保持できる微細な孔隙である。この孔隙が多いと保水性がよくなり、作物は旱害を受けにくくなる。

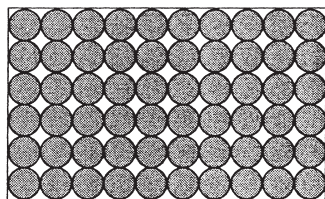




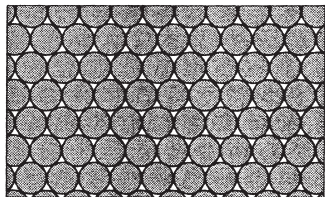
第21図 耕作土の画像解析



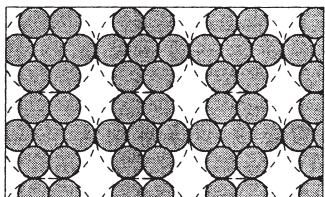
第22図 非耕作土の画像解析



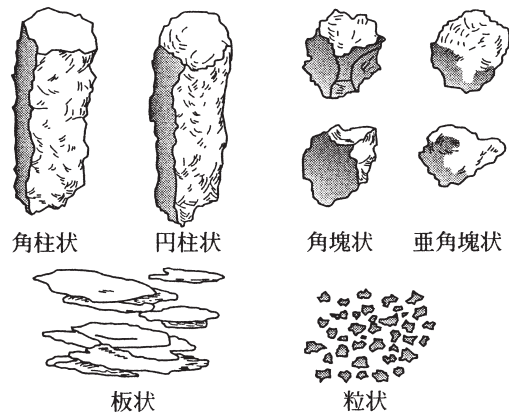
単粒(正列)(孔隙率47.64%)



単粒(斜列)(孔隙率25.95%)



団粒構造(孔隙率61.223%)



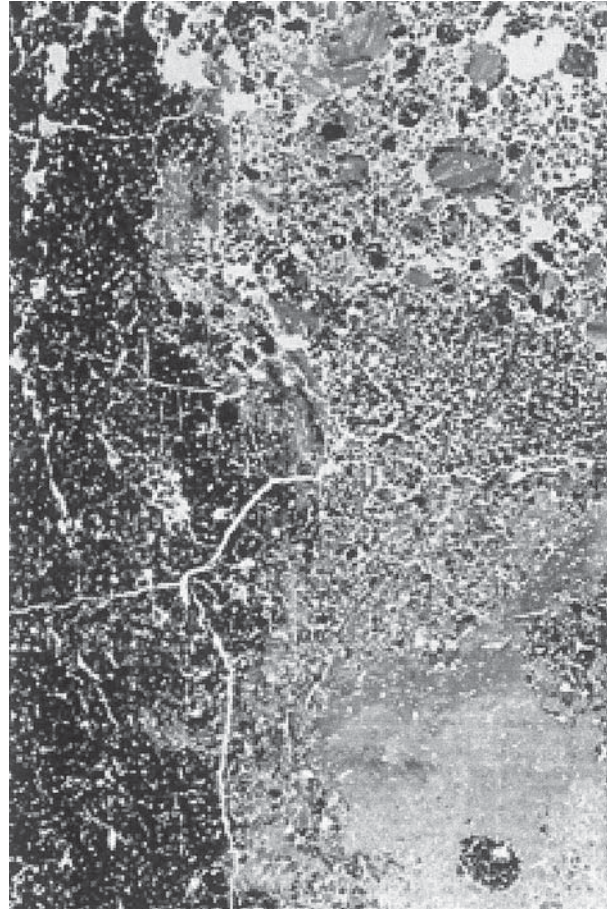
第24図 土壤構造の形状

第23図 土壤粒子の配列と孔隙率

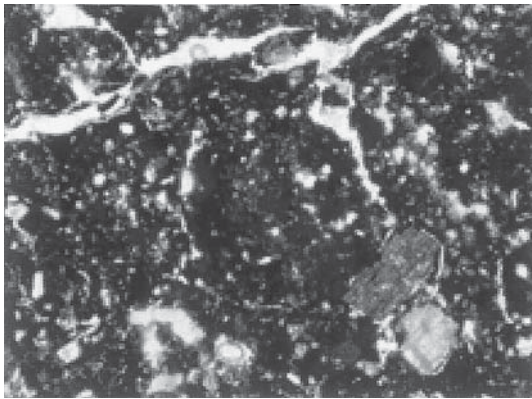




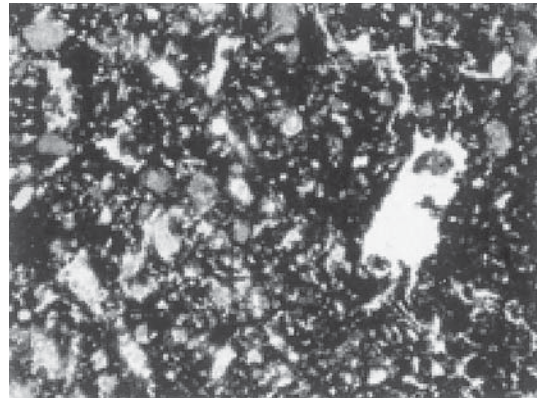
写真図版9 畝の土壌微細形態



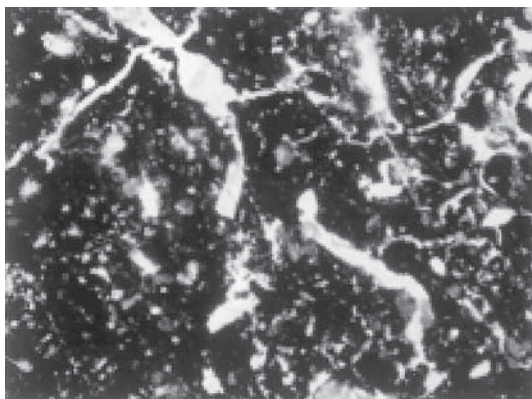
写真図版10 下層および黒ボク土の微細形態



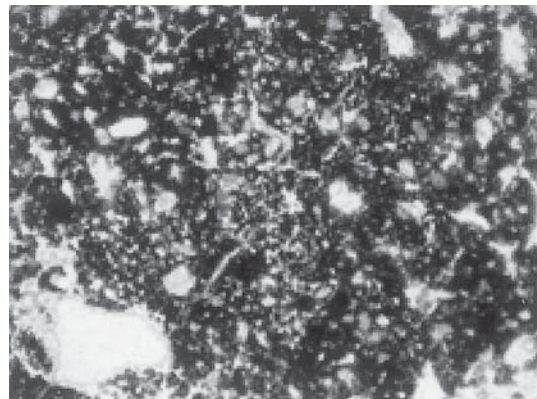
写真図版11 耕作土の微細形態①



写真図版13 黒ボク土の微細形態①



写真図版12 耕作土の微細形態②



写真図版14 黒ボク土の微細形態②



## 第6章 まとめ

### 第1節 調査の成果

本書に収載した上伊勢第1遺跡・三保第1遺跡の調査は、一般国道9号（東伯中山道路）の改築に伴う発掘調査のうち平成16年度に実施したものであり、琴浦町東部の加勢蛇川および洗川によって形成された扇状地のうち、沖積平地における微高地を対象とした調査である。これまで、町の東部では丘陵上の調査が主体となっており、平地の調査例は少なく、旧東伯町教育委員会が実施した逢東第2遺跡<sup>(1)</sup>、昨年度調査した中尾第1遺跡<sup>(2)</sup>などがあるにすぎなかった。このため、今回の調査によって平地における遺跡の様相を知る上で貴重な情報を得ることができた。ここでは調査の成果について、これまでに実施された平地における遺跡、とくに中尾第1遺跡の調査成果と照らし合わせてまとめていくことにする。

#### 縄文時代

縄文時代で遺構が認められるようになるのは早期後半からである。上伊勢第1遺跡では楕円文土器と伴って、たわみ1が検出されている。早期後半以降、晩期に至るまで遺構は認められなくなり、遺物がわずかに出土するのみとなる。中期～後期の遺物は、三保第1遺跡と中尾第1遺跡で数点確認されている。晩期になると遺構・遺物の数が増加していく。中尾第1遺跡A1区では落とし穴、C1・2区では土坑、落とし穴が確認され、土器も一定量出土するようになる。ただし、中尾第1遺跡A1区とC1・2区に位置するA2区、B1・2区ではスクレイパー1点しか出土しておらず、また、上伊勢第1遺跡では突帯文土器が数点、三保第1遺跡では遺物が全く出土していないことから、遺構・遺物の集中する場所は散在的なものであったと推察される。

#### 弥生時代

弥生時代では前期後半～中期中葉の遺構・遺物が確認されている。遺構は上伊勢第1遺跡で前期後半の竪穴住居、掘立柱建物、たわみ状遺構、三保第1遺跡で前期後半の集石、土坑、中尾第1遺跡A1区で中期前葉～中葉の竪穴住居、貯蔵穴、土坑、C2区で前期後半の墓が検出されている。このうち、上伊勢第1遺跡の竪穴住居3は中央ピットの両端に柱穴をもち、その周囲に5基の柱穴を床面に

表1 集落の変遷

	縄文時代					弥生時代			古墳時代			古代				中世			
	早期	前期	中期	後期	晩期	前期	中期	後期	前期	中期	後期	9C	10C	11C	12C	13C	14C	15C	16C
上伊勢第1遺跡	■				■	■	■		■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
三保第1遺跡			■	■	■	■					■	■	■						
中尾第1遺跡A区			■	■	■		■									■	■	■	■
中尾第1遺跡B区													■	■	■	■	■	■	■
中尾第1遺跡C区					■	■	■				■					■	■	■	■

めぐらせることから、石野博信の「北牟田型」<sup>(3)</sup>と考えられる。このような住居は中尾第1遺跡A1区においても中期前葉のものが確認されており、関連性がうかがわれる。また、中尾第1遺跡C2区では、前期後半の礫石使用墓や木棺墓で構成された墓群形態が列状をなす墓11基が確認されており、集落と墓域の関係を知る上での貴重な手掛かりとなるものと考えられる。さらに、三保第1遺跡では環状に配置した集石7基を確認しており、これが集落や墓とどのように関連していくのか注目される。

遺物は特筆されるものに上伊勢第1遺跡の竪穴住居1から出土した磨製石包丁S1、中尾第1遺跡A1区の貯蔵穴1から出土した打製石鍬や炭化米が挙げられる。これらは農耕が行われていた状況を示すものであり、沖積平地において水田や畠などが展開していたものと推察される。

この後、集落が断絶するようであり、中期後葉～後期後葉の遺構・遺物は皆無となる。

## 古墳時代

古墳時代になると、再び活動の痕跡が認められるようになる。最も古い時期ものとしては、上伊勢第1遺跡で弥生時代末葉～古墳時代初頭の土器が出土しており、この時期において活動が行われていたものと考えられる。前期の遺構としては、上伊勢第1遺跡で竪穴住居、掘立柱建物、溝などが認められ、集落が形成されるようになる。ただし、三保第1遺跡では遺物が少なく、中尾第1遺跡では皆無であることから散在的なものであったと推察される。

中期の遺構としては、引き続き上伊勢第1遺跡で竪穴住居、溝などが確認されている。また、三保第1遺跡や中尾第1遺跡C2区でも竪穴住居、溝などが認められるようになり、それまで遺構・遺物の希薄であった地域においても新たに集落が形成されていく。ただし、新たに形成された集落は長く続かないようであり、次の後期に属する遺構・遺物は認められなくなる。

後期の遺構としては、上伊勢第1遺跡で後期前半の竪穴住居、溝、逢東第2遺跡で後期前半の竪穴住居が確認されている。これ以降の遺構・遺物は確認されず、集落は断絶すると考えられる。ただし、上伊勢第1遺跡では条里に関連すると考えられる溝13と重複する溝7、側面に杭列のある用水路と考えられる溝11が確認されていることから、耕地となった可能性も考えられる。

ところで、上伊勢第1遺跡には前期前葉以前の畦畔状遺構がある。検出した範囲が部分的であり、これが水田であったのかは明確でない。仮に水田であったとするのならば、集落形成以前は耕地となっていたということになり、前期以前の土地利用の状況を知る手掛かりとなり注目される。また、畦畔状遺構は砂で覆われており、この一帯が前期前葉以前に災害に見舞われたものと考えられる。

## 古代～中世

古代以降になると、上伊勢第1遺跡で耕地化される。遺構としては9～13世紀の範疇に収まる畠1・2、耕作痕1～3、溝12・13が検出されている。このうち畠1は飛砂によって覆われており、良好な状態で畝を検出した。また、溝（耕作痕3）が掘られ畠2が形成されていく過程を捉えることができ、災害復旧の様子を知ることができた。

さらに、三保第1遺跡においても断面のみであるが畠を確認している。この畠は時期を明確にできないものであったが、畝の上面には上伊勢第1遺跡の飛砂に類似した砂層がわずかに認められることから、ほぼ同時期のものと考えられる。ちなみに、畠の耕作土は両遺跡ともに暗灰褐色系の土であり、これは中尾第1遺跡でも認められ、この沖積平地では耕地化されていたと考えられる。

1947年米軍撮影の空中写真整理番号U624、コース番号J、写真番号485を参考に作成



第1図 条里復元図

ところで、当該遺跡を含む加勢蛇川や洗川流域の沖積平地には、条里地割が残っていたことが岩永実によって指摘されている<sup>(4)</sup>。実際、圃場整備前の空中写真をみると、一町方格の地割が整然と並んでいる状況を看取することができる。この状況を地図上に復元したものが第1図である。この図を概観すると、上伊勢第1遺跡の溝13の上層に位置する溝や中尾第1遺跡A 1・2区の攪乱溝が坪境に相当するものと考えられる。このうち、上伊勢第1遺跡の溝は、重機による表土掘削時において確認されたものであり、溝12・13、さらには中世～近世にかけての溝14と並走ないしは重複するものであった。このため上伊勢第1遺跡の周辺においても条里地割の影響がおよんだ地域であったといえ、確認した畠はこの地割に沿って形成されたものであったと推察される。ちなみに、この条里地割は溝13の時期が9世紀頃となっているため、この頃にはある程度の整備が行われていた可能性が考えられる。

13世紀以降になると、上伊勢第1遺跡、中尾第1遺跡A 1・2区、B 1区で集落が形成されるようになる。その後、上伊勢第1遺跡では水田化し現在に至る。

#### おわりに

調査の結果、琴浦町東部の沖積平地における縄文時代～中世の様相について知ることができ、貴重な成果を得ることができた。また、この一方で幾つかの問題点を認めることがで



写真図版1 調査区外溝検出状況



きた。最後にその問題点について述べておく。

問題点としては古代～中世の遺構を部分的にしか調査できず、古代～中世に至る耕地の状況、中世の集落の様相、それ以降の水田の広がりなどを確認できなかったことが挙げられる。この原因はこの時期の遺構が黒ボクの上層において形成されたものであり、調査の当初、その存在を認識しておらず大半を重機によって掘り下げてしまったことにある。以後、この周辺で調査する時は最低でも現在の耕作土除去後、シルト層から調査を行っていかねばならないと思われる。

このことは、今回調査対象外とされた場所においても同様のことがいえる。これは道路の工事現場において上伊勢第1遺跡の溝12と同じような溝が認められ（写真図版1）、黒ボクや耕作土と考えられる暗灰褐色系の土が良好な状態で堆積しており、条里遺構や畠の残存する可能性が高いものと考えられるからである。

（玉木秀幸）

## 参考文献

1. 大賀靖浩, 1992, 「逢東第2遺跡発掘調査報告書」『東伯町文化財発掘調査報告書25』東伯町教育委員会
2. 玉木秀幸編, 2004, 「中尾第1遺跡」『鳥取県教育文化財団発掘調査報告書90』鳥取県教育文化財団
3. 石野博信, 1990, 「西日本における弥生時代中期の二つの住居型」『日本原始・古代住居の研究』吉川弘文館
4. 岩永実, 1978, 「鳥取県における条里地域の研究（第Ⅱ報）」『鳥取県地誌考』岩永實先生記念論文集刊行会

## 第2節 三保第1遺跡の弥生時代前期の遺構について

三保第1遺跡の2・3区において弥生時代前期のものと考えられる土坑や集石群を確認した。これらの遺構をもとに、ここでは三保第1遺跡の弥生時代前期の様相や集石群の性格について、他地域の類例と比較しながら検討してみたい。

### 集石・土坑の概要

2区では集石1、土坑2が検出された。集石1は埋土中に炭化物が含まれ、拳大～人頭大の石が集められており、多数の土器片が出土している。土坑2は集石1の南東約5mの位置にあり、深さは19.6cm、平面が長軸200cm、短軸120cmの方形を呈する。埋土中には炭化物を含み、数個の人頭大の石と共に土器片がまとまって出土している。これらの遺構は埋葬施設と考えられる。

3区では集石2～7が検出された。このうち集石3は他の集石と形態が大きく異なる。全長54cm、最大幅46cm、最大厚24cmの礫が地表面に据え置かれ、その周辺には拳大の川原石が数個散在している。一方、集石2・4～7は掘り込み面が明瞭ではないものの、わずかな土坑状の落ち込みの中に不規則に多数の川原石を集める点、平面形が円形もしくは楕円形を呈する点、遺物が無い点で共通している。また、集石4は集石3までの距離が他のものに比べ近接しているが、集石2、5～7が等間隔に位置し、集石3までの距離はそれぞれおおむね5mである点でも共通している。全体として、集石3を中心に緩やかな弧を描くように各集石が配置されている。

### 他地域の類例との比較と検討

本遺構と同様に、遺構に配列がみられるものを県内および島根県に求めると、そのほとんどが埋葬

施設としての土坑を伴うものであり、集石だけのものは少数である。また、これらの類例は遺構の配置にいくつかのパターンがみられ、ここでは大きく次のようにまとめた。a：各遺構を集塊状に配置するもの、b：各遺構を環状に配置するもの、c：各遺構を列状に配置するものの3タイプである。aとしてはイキス遺跡（倉吉市）、沖丈遺跡（島根県邑智町）があり、土坑を伴っている。沖丈遺跡は個々の遺構が塊状に礫を集めた集石を持ち、本遺跡の集石の形態と共通する。bには、本遺跡や後ろ谷遺跡（大栄町）があり、後ろ谷遺跡は土坑を伴う。板屋Ⅲ遺跡（島根県頓原町）は土坑を伴わない集石が、集石を伴う土坑墓に合せて確認されている。これは、遺構の形態が非常に近いものとして挙げられる。cは長瀬高浜遺跡（湯梨浜町）がある。土坑を伴い、上部構造として配石を持つ。cとbが融合したものとされるものに中尾第1遺跡（琴浦町）がある。土坑を伴い、上部構造として配石を持つものがある。

本遺跡の集石群は、わずかな落ち込みは認められるものの土坑ほどの掘り込みを持つものとはいえない。また、一つの礫を中心にして環状に集石を配置する点においても類例として挙げた遺跡とは異なる。しかし、2区において埋葬施設が確認されており、集石と埋葬施設が存在する点においては類例と共通する。

### 集石群の性格について

3区の集石群は、集石1と比べると石は小さいものの数が非常に多く、10cm前後のものが大半を占める。その反面、遺物はほとんど見られない。こうした点より3区の集石は埋葬施設の可能性も否定はできないものの、集石1とは性格を異にしたものと考えることができる。

さて、集石の性格としては炉として使われることも考えられるが、本遺跡の集石群においては石に火を受けた痕跡が見られない。また、埋土中に炭化物を含んでいるものの、直接に火の使用を裏付ける痕跡は認められなかった。よって炉としての可能性は考えにくい。また、供献土器や副葬品といった埋葬行為に伴う遺物は出土していない。しかし、2区の埋葬施設との位置関係をみると、3区集石群は集石1・土坑2から西方20～30mの位置にあり、さほど離れてはいない。またこれら2・3区の遺構群と同時期の遺物の出土状況をみると、2区では集石1よりも西側、3区では集石群よりも東側でまとまって出土しており、1区からは出土していない。遺構の検出も2・3区のみで1区からは検出されていない。つまり1区周辺は生活圏として選ばれず、一方2区と3区はひと続きの活動域として利用されていたことがうかがわれる。

こうした点を踏まえると、2・3区の遺構はそれぞれ独立したものとするよりは、相互に何らかの関係を持つものとして捉えられよう。3区で確認した集石群はほとんど遺物を伴わないことから、日常的な活動場所というよりは非日常的な埋葬施設や祭祀的な味合いのある場所として利用されていたとみることができる。類例にみたように、集石は埋葬施設と共に確認されているものが多い。以上の点から、3区集石群は埋葬行為に関係したもので、当遺跡は弥生時代前期において2・3区で検出した土坑・集石群を中心に墓域として機能していたものと考えられる。

ここで一つの疑問が残る。それは1区において、なぜ活動の痕跡が認められないのかという点である。そこで、1区で確認した自然流路である溝1について着目してみたい。遺物が皆無のため、時期については古墳時代中期以前のものとしか確認できていない。しかし仮にこの自然流路が弥生時代前期まで遡るものであるとすれば、1区周辺は河川際ということで生活場所として選ばれなかった可能

性がある。これは、1区で遺物が出土していない理由の一つになるのではないだろうか。

## まとめ

本遺跡の集石群は個々においては不規則に川原石を集めたものであるが、各集石の配置は緩やかな環状を呈するものである。山田康弘によれば、遺構を列状に配置するものは弥生時代に入って新しく成立した墓域構成であり、集塊状・環状に配置するものは縄文時代からの伝統文化を踏襲したものとされている。また、本遺跡の集石の形態と同様に遺構を列状もしくは環状に配置するものが縄文時代にもみられることが小林青樹により指摘されている。このことから本集石群は、縄文的要素を留めつつも弥生的な要素へ変わり始めた過渡期を示す埋葬関連遺構として位置づけることができよう。

ここで、中尾第1遺跡で確認された墓域と本遺跡の墓域に少し触れておきたい。中尾第1遺跡は本遺跡の北東約1.8kmの位置にある。土坑墓が検出されているが、本遺跡の様相を呈する集石は確認されていない。同時期にあって、距離的にも比較的近い位置にあるにも関わらず、この二つの遺跡においては異なる墓制をとっている。それが何に由来するのかは今回の調査結果からは触れることはできないが、大変興味を持たれる部分である。今後の資料の積み重ねによる検討、分析が待たれる。この点で本遺跡は弥生時代前期の墓制を知る上で、大変貴重なものである。また、本県では弥生時代前期の墓制や、平野部での弥生時代の生活に不明な点が多く、これらを知る上で好資料となる存在である。

本遺跡の調査は高速道路の橋脚部分のみの狭い範囲であるため、遺跡の全体像を示すのは難しく、推測の域を脱しえない部分もある。よってここで述べたことは今後の資料の増加と検証の積み重ねをまって随時検討されなければならない。ご批判ご叱責を乞う次第である。 (浅田康行)

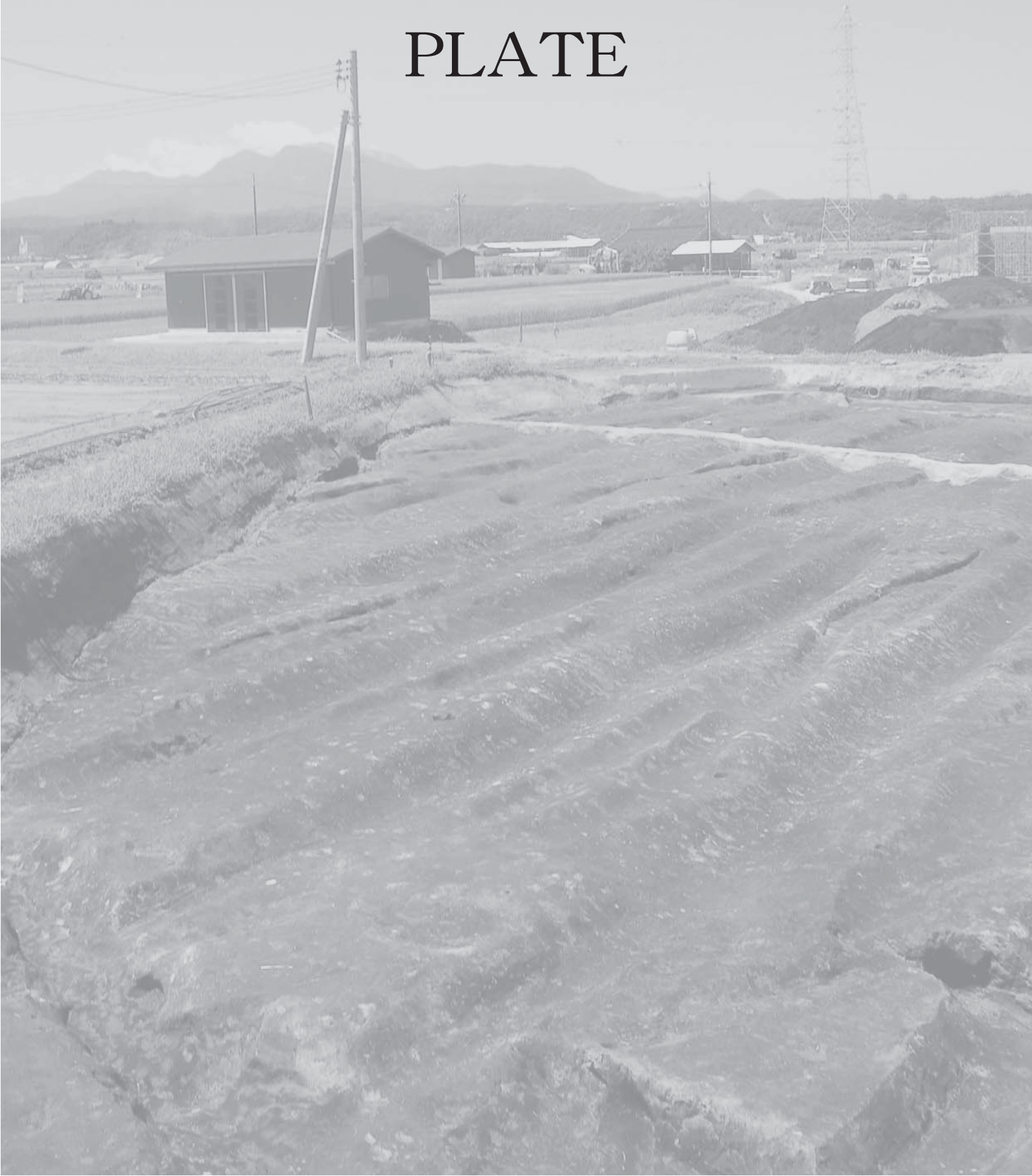
## 参考文献

1. 玉木秀幸編, 2004, 「中尾第1遺跡」『鳥取県教育文化財団報告書90』鳥取県教育文化財団
2. 西村彰滋編, 1982, 「長瀬高浜遺跡発掘調査報告書IV」『鳥取県教育文化財団報告書11』鳥取県教育文化財団
3. 新編倉吉市史編集委員会編, 1996, 『新編倉吉市史 第一巻 古代編』倉吉市
4. 根鈴輝雄編, 1994, 「イキス遺跡発掘調査報告書」『倉吉市文化財調査報告書56』倉吉市教育委員会
5. 馬淵義則編, 1984, 「向野遺跡・後ろ谷遺跡発掘調査報告」『大栄町文化財調査報告書12』大栄町教育委員会
6. 角田徳幸編, 1998, 「板屋Ⅲ遺跡」『志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書5』島根県教育委員会
7. 牧田公平編, 2001, 「沖丈遺跡」『主要地方道川本波多線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』島根県邑智町教育委員会
8. 山田康弘, 2000, 「山陰における弥生時代研究の諸問題」『島根県考古学会誌 第17集』島根考古学会
9. 小林青樹, 2000, 「中四国における初期弥生墓制の変容」『古代吉備 第22集』古代吉備研究会



写真図版

PLATE







1. 上伊勢第1遺跡・三保第1遺跡 調査前遠景（南西から）



2. 上伊勢第1遺跡 縄文時代～古墳時代完掘状況（上空から）



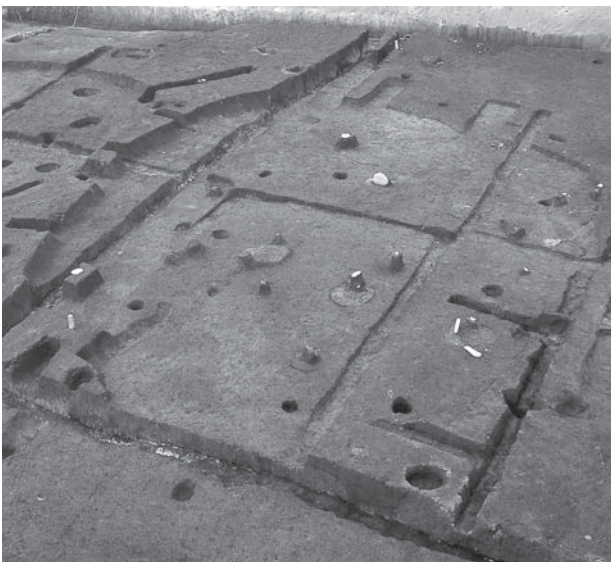
PL.2 上伊勢第1遺跡



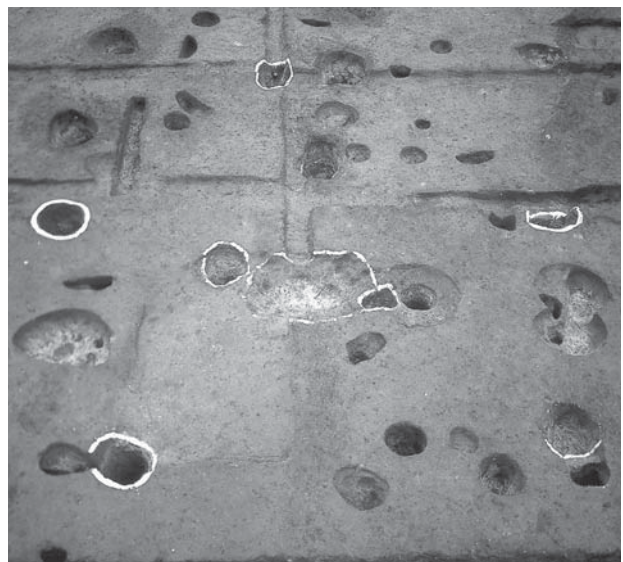
1. たわみ1遺物出土状況（北東から）



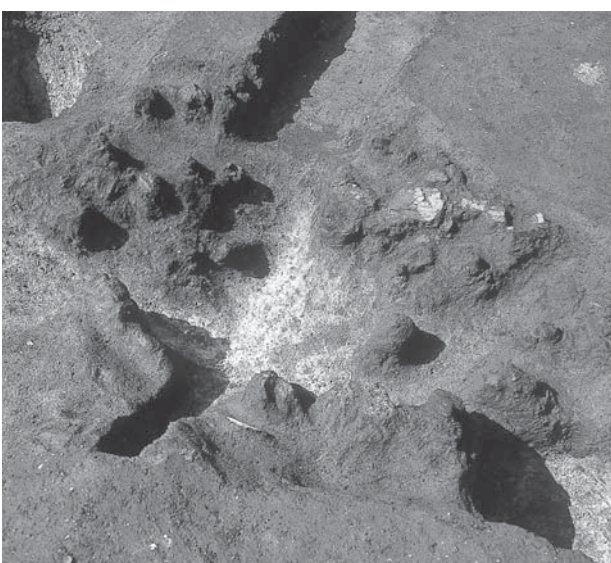
2. 竪穴住居1完掘状況（北西から）



3. 竪穴住居2完掘状況（南西から）



4. 竪穴住居3完掘状況（南から）

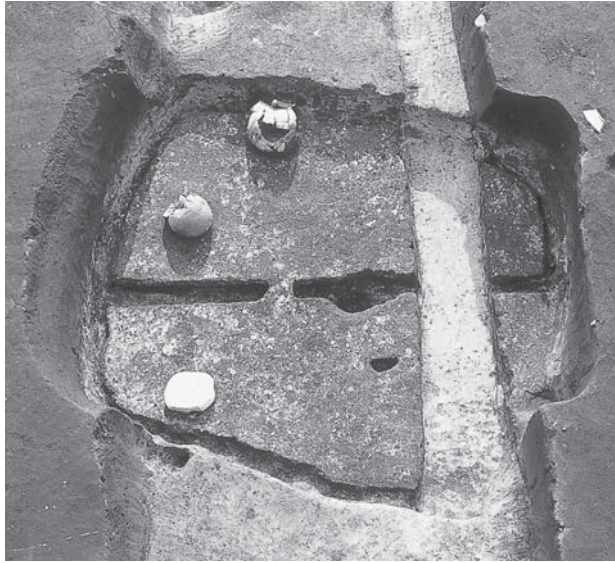


5. 竪穴住居3炭化材検出状況（南から）

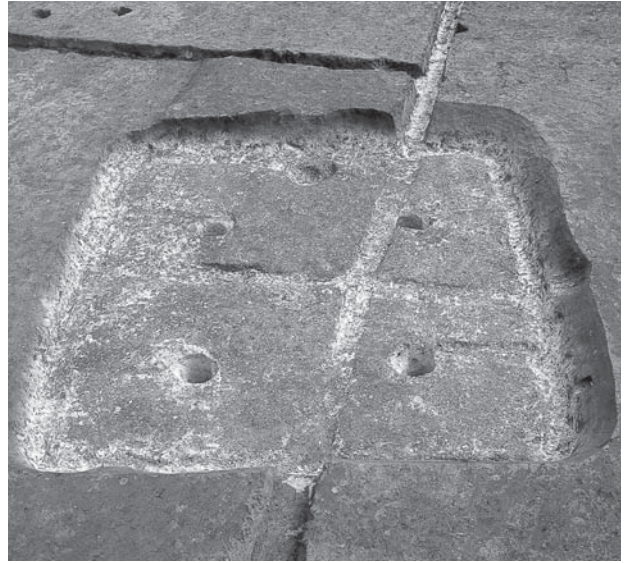


6. 掘立柱建物1完掘状況（西から）





1. 竪穴住居4遺物出土状況（東から）



2. 竪穴住居5完掘状況貼り床除去前（西から）



3. 竪穴住居6完掘状況貼り床除去前（北から）



4. 竪穴住居7完掘状況（南から）



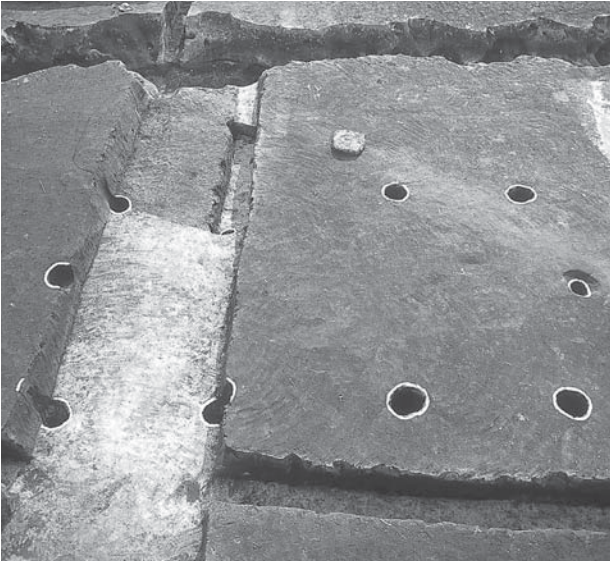
5. 竪穴住居8完掘状況（北から）



6. 竪穴住居9完掘状況（北西から）



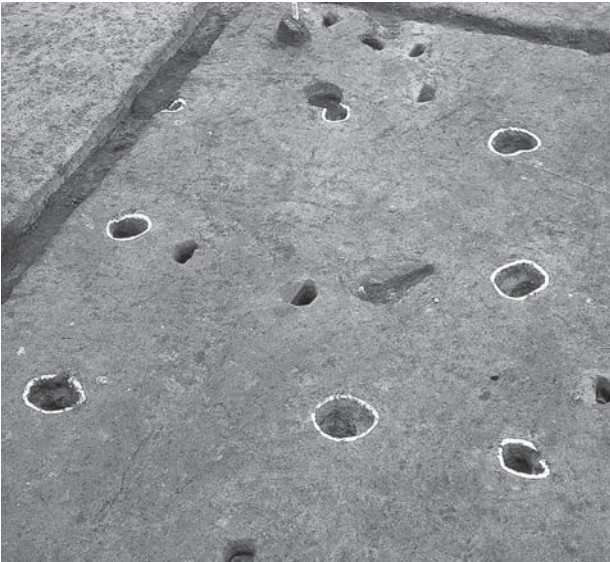
PL.4 上伊勢第1遺跡



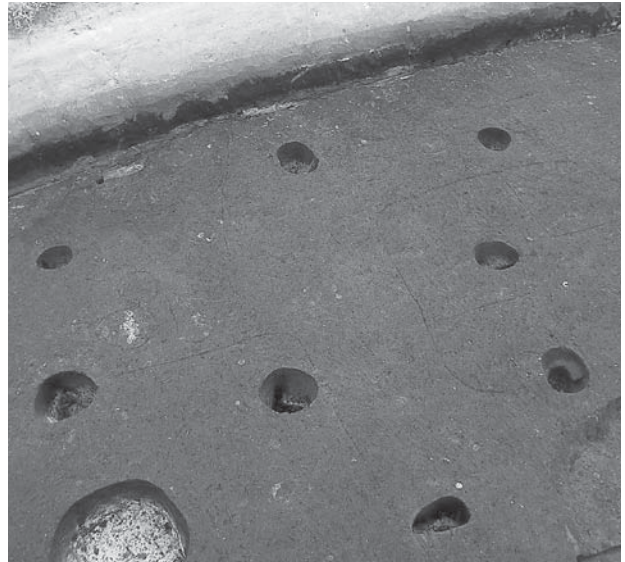
1. 掘立柱建物 2 完掘状況 (東から)



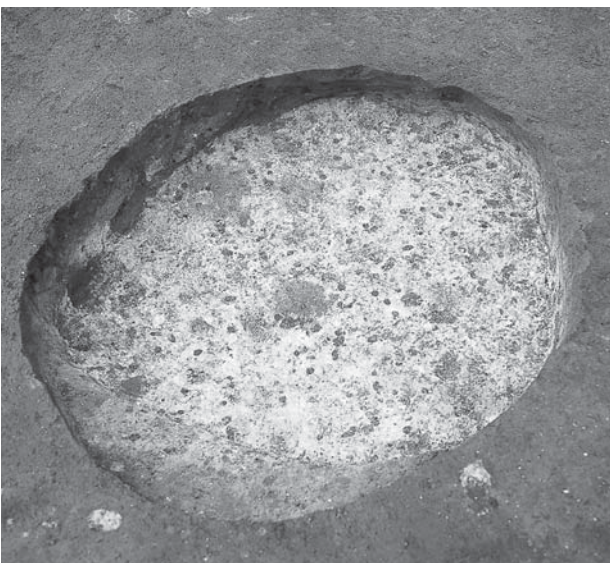
2. 掘立柱建物 3 完掘状況 (北から)



3. 掘立柱建物 4 完掘状況 (南東から)



4. 掘立柱建物 5 完掘状況 (北西から)



5. 土坑 1 完掘状況 (東から)

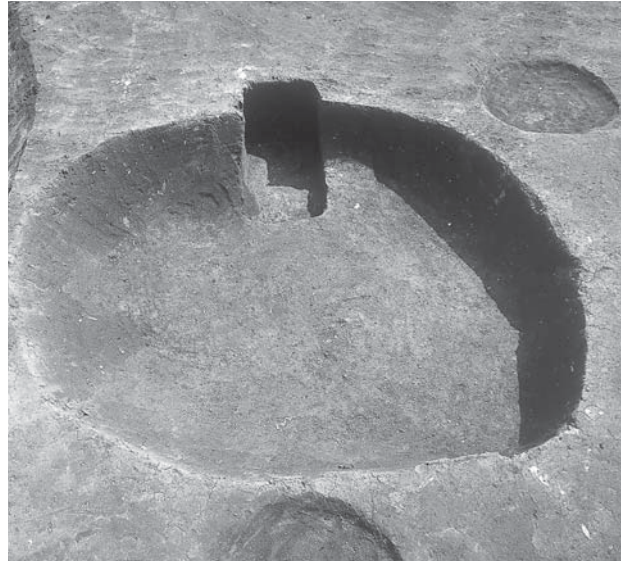


6. 土坑 2 完掘状況 (南から)

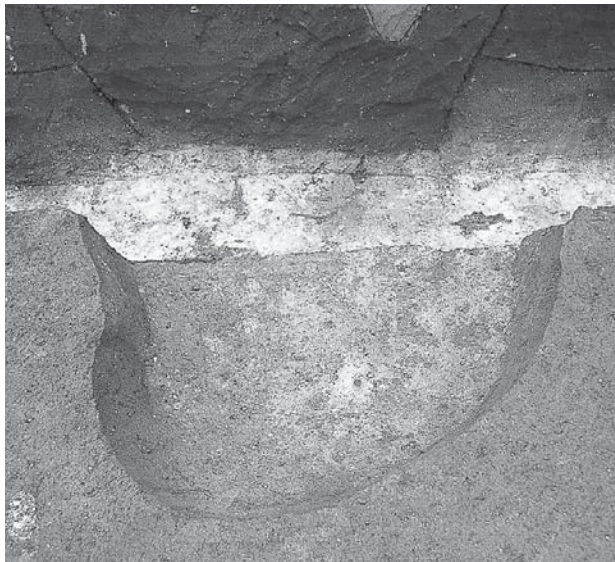




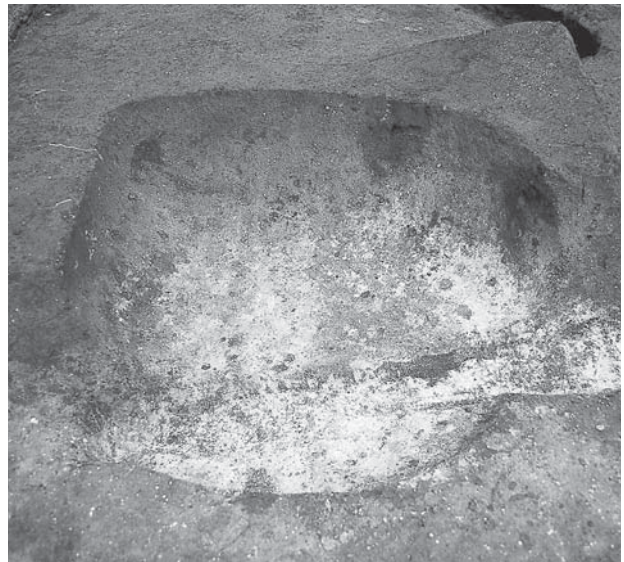
1. 土坑3完掘状況（東から）



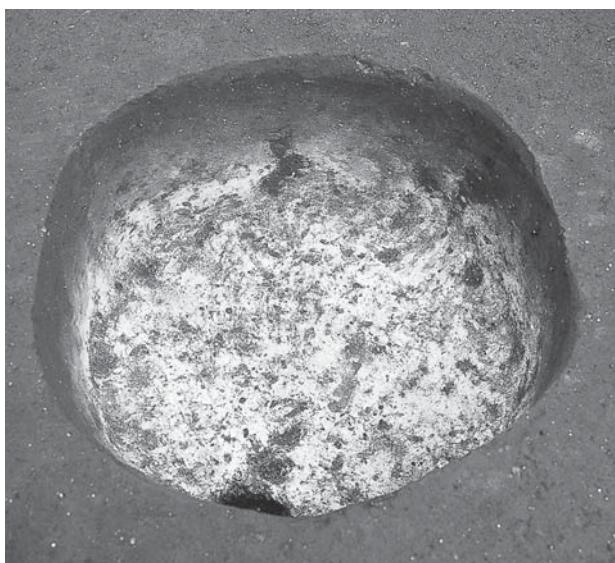
2. 土坑4完掘状況（北から）



3. 土坑5完掘状況（北から）



4. 土坑6完掘状況（西から）



5. 土坑8完掘状況（西から）



6. 土坑9完掘状況（西から）



PL.6 上伊勢第1遺跡



1. 方形土坑 1～4 完掘状況（西から）



2. 調査区西側溝群完掘状況（南東から）





1. 溝2 遺物出土状況（南西から）



2. 溝2 遺物出土状況細部（南西から）



PL.8 上伊勢第1遺跡



1. 溝5～7完掘状況（南から）



2. 溝4遺物出土状況（北から）



3. 溝5遺物出土状況（北東から）

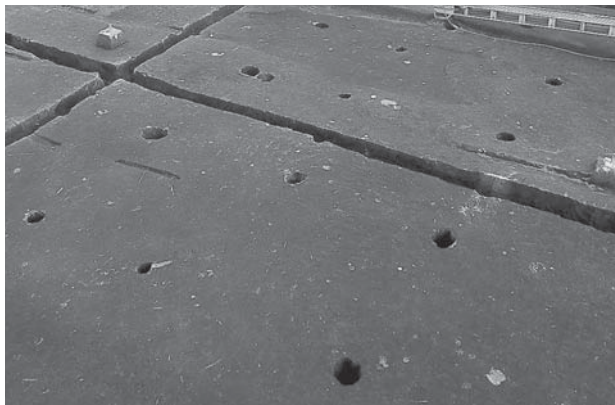




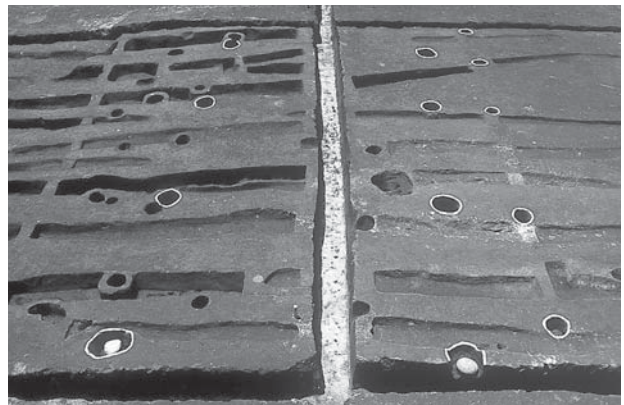
1. 溝11杭跡検出状況（南西から）



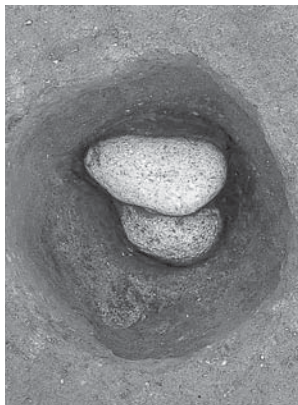
2. 溝11完掘状況（北西から）



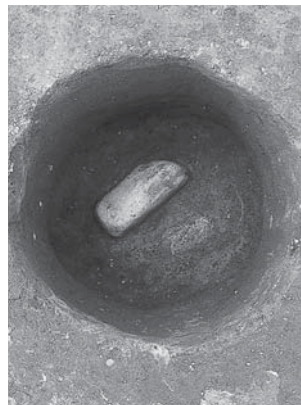
3. 掘立柱建物6完掘状況（北西から）



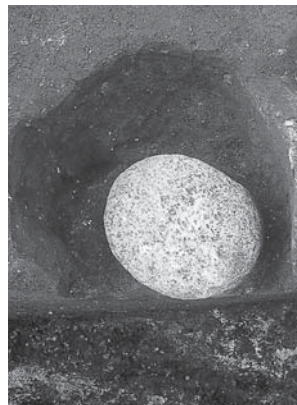
4. 掘立柱建物7完掘状況（北から）



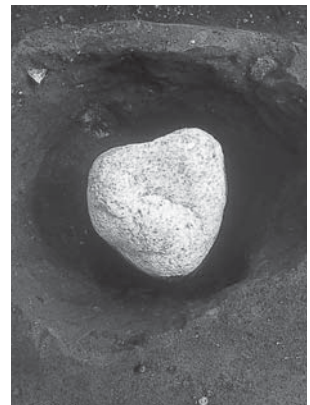
Pit 1（北から）



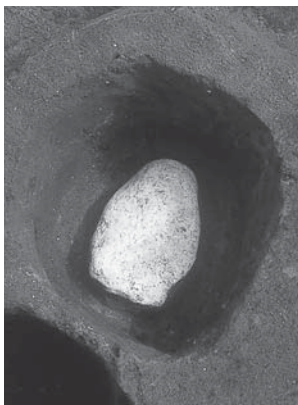
Pit 3（北から）



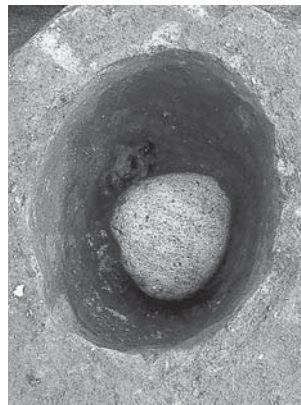
Pit 4（北から）



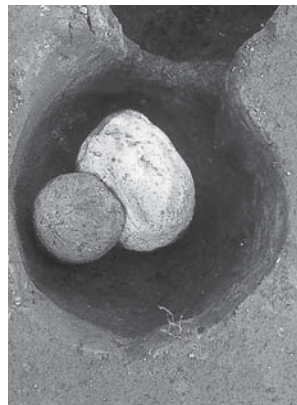
Pit 5（北から）



Pit 6（北から）



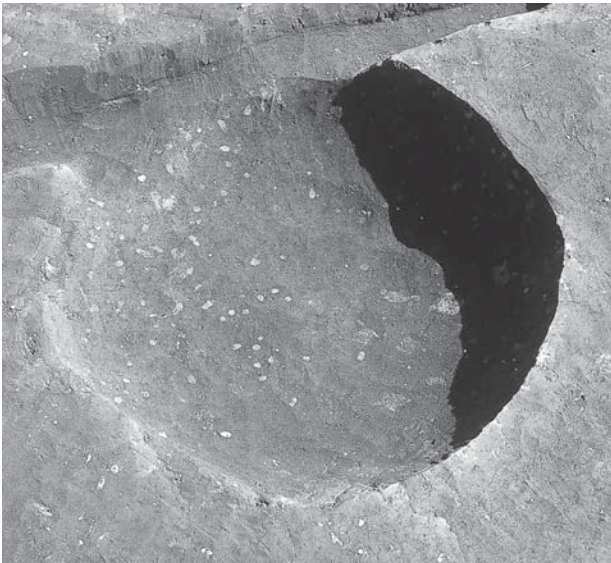
Pit 7（北から）



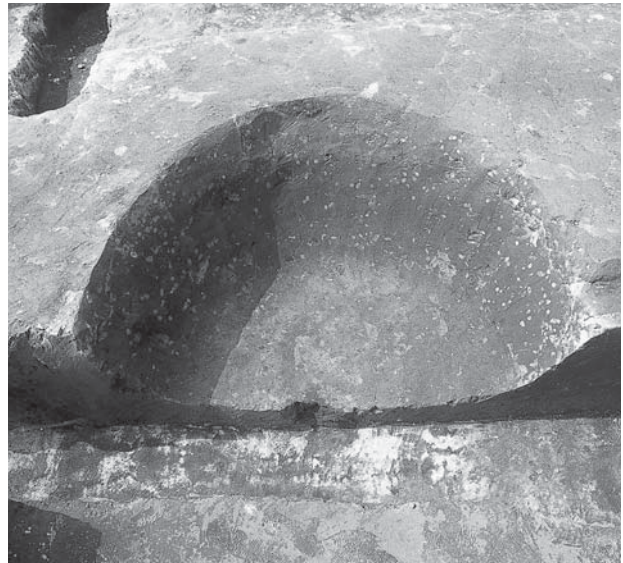
Pit 8（北から）

5. 掘立柱建物7  
Pit内礎板石検出状況





1. 土坑10完掘状況（北から）



2. 土坑11完掘状況（北から）



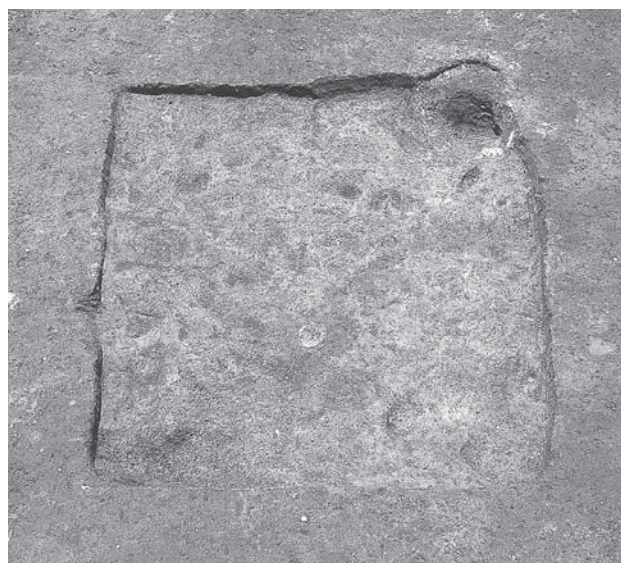
3. 土坑12完掘状況（北西から）



4. 墓1検出状況（北西から）



5. 墓2検出状況（北東から）



6. 墓3完掘状況（北から）

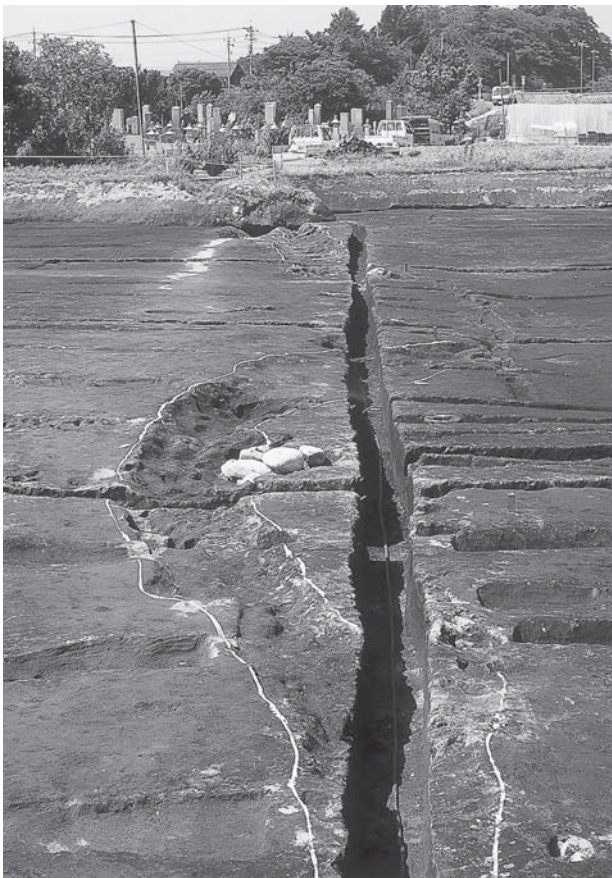




1. 溝12完掘状況（南から）



2. 溝13完掘状況（南から）



3. 溝14完掘状況（南から）



4. 溝15完掘状況（東から）



PL.12 上伊勢第1遺跡



1. 耕作痕1・2完掘状況  
(東から)



2. 畠1完掘状況  
(北西から)



3. 畠2完掘状況  
(東から)



1

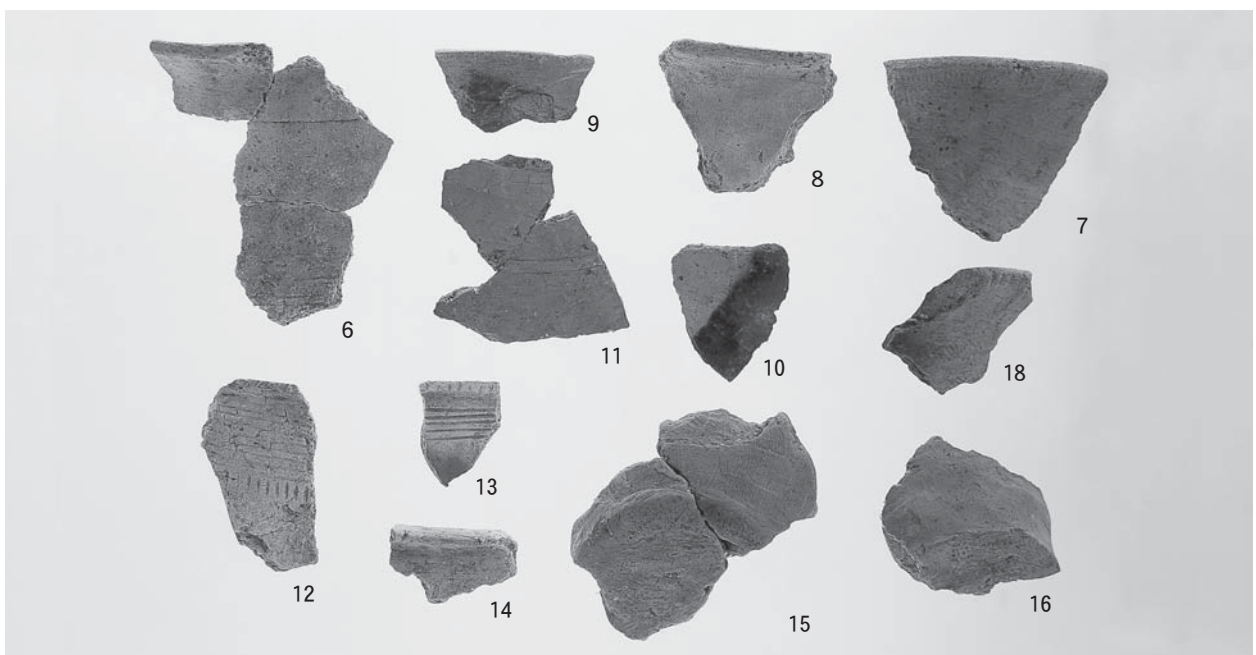


2



S1

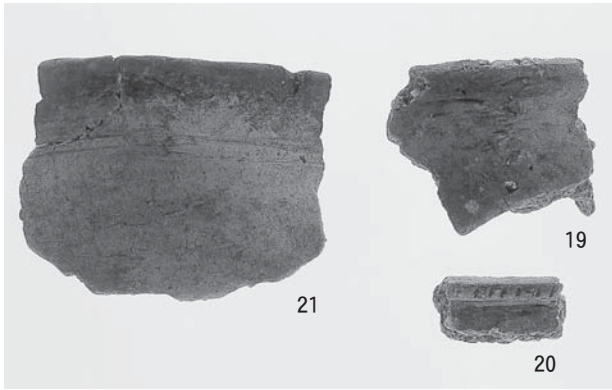
1. たわみ1出土遺物



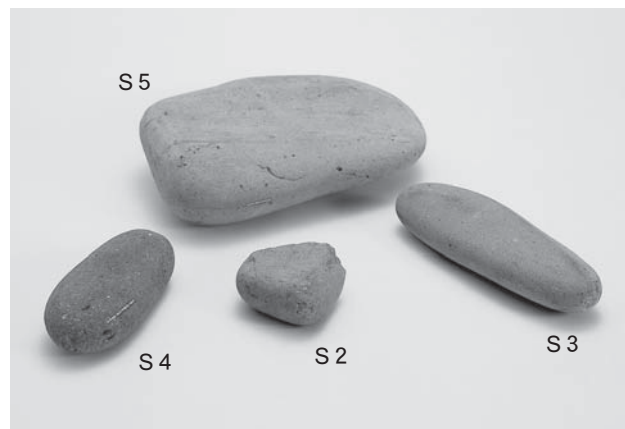
2. 竪穴住居1出土遺物



PL.14 上伊勢第 1 遺跡



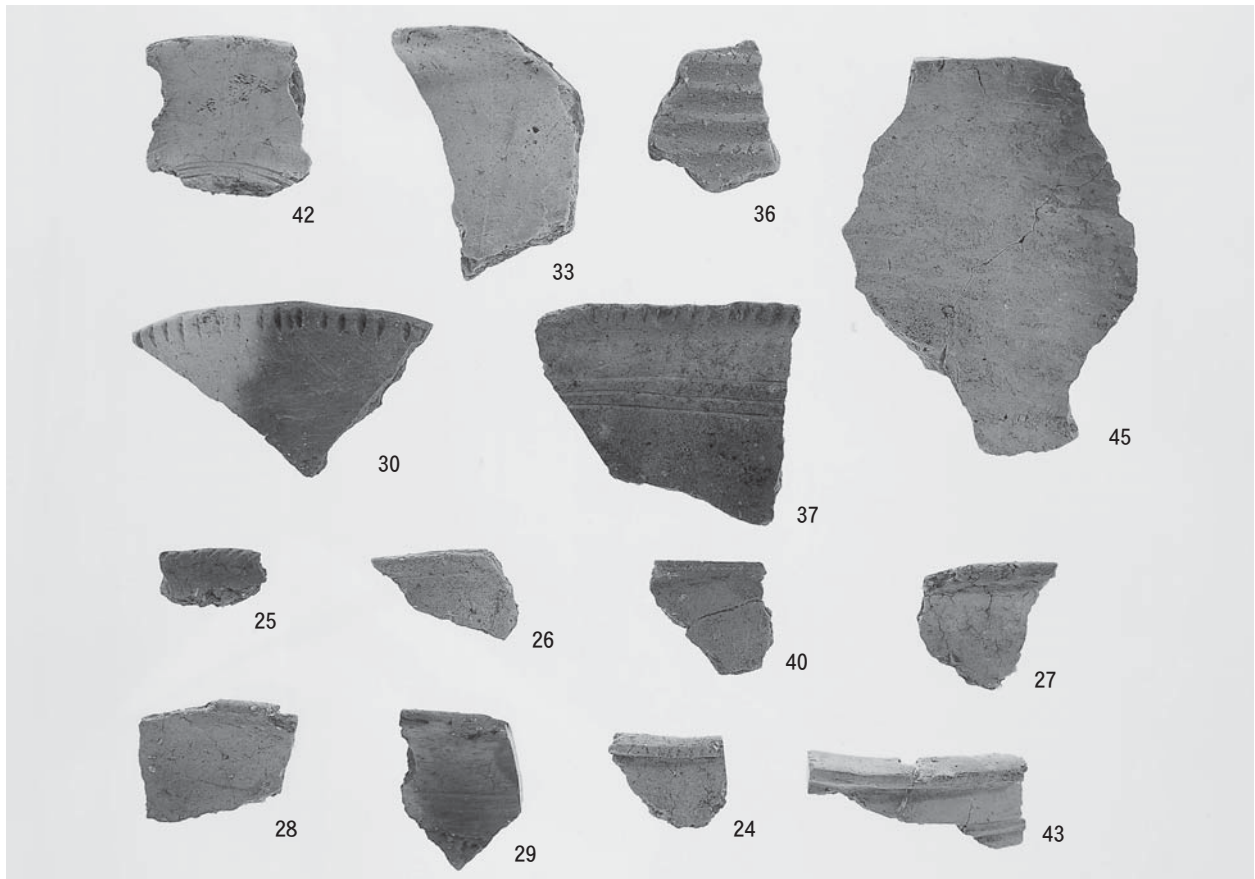
1. 豎穴住居 2 出土遺物



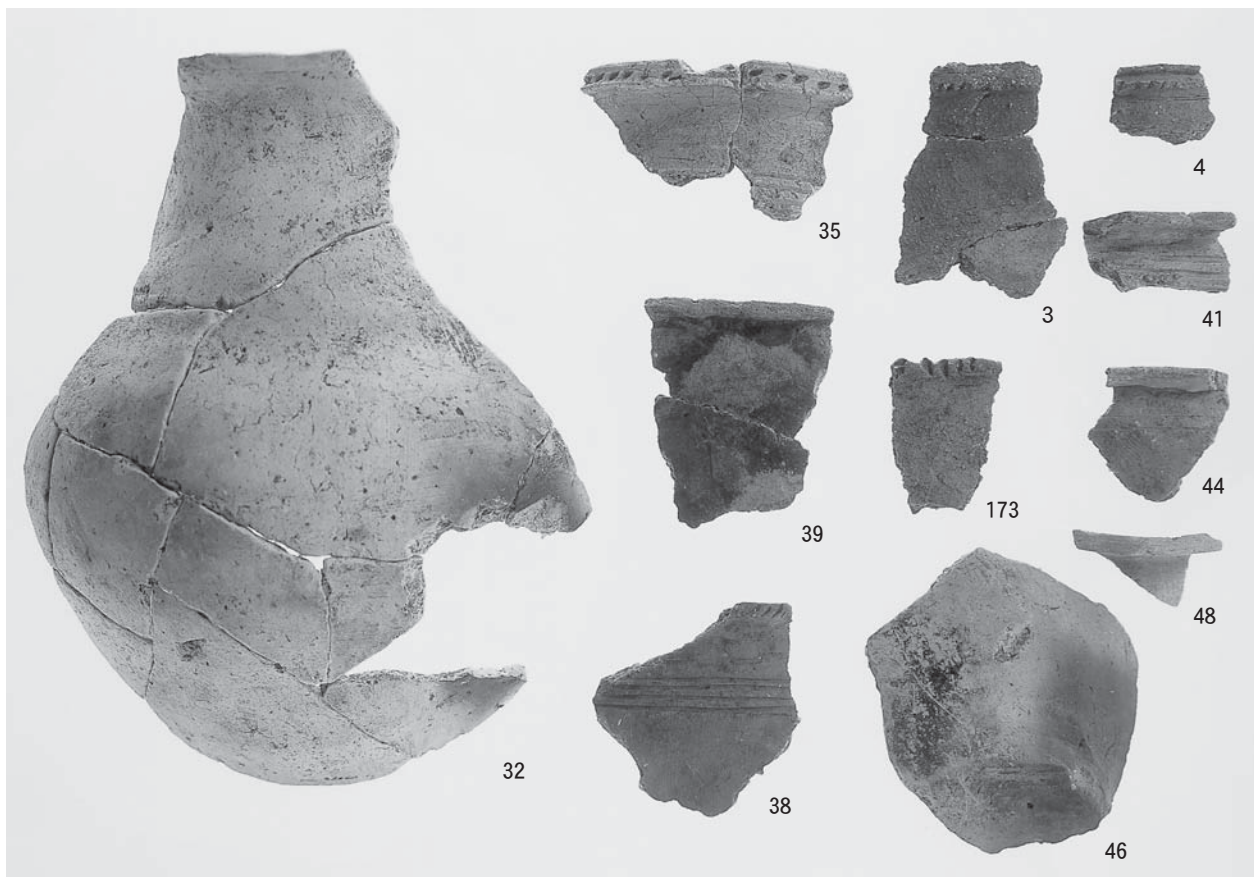
2. 豎穴住居 3 出土遺物

3. 弥生時代遺構外出土遺物





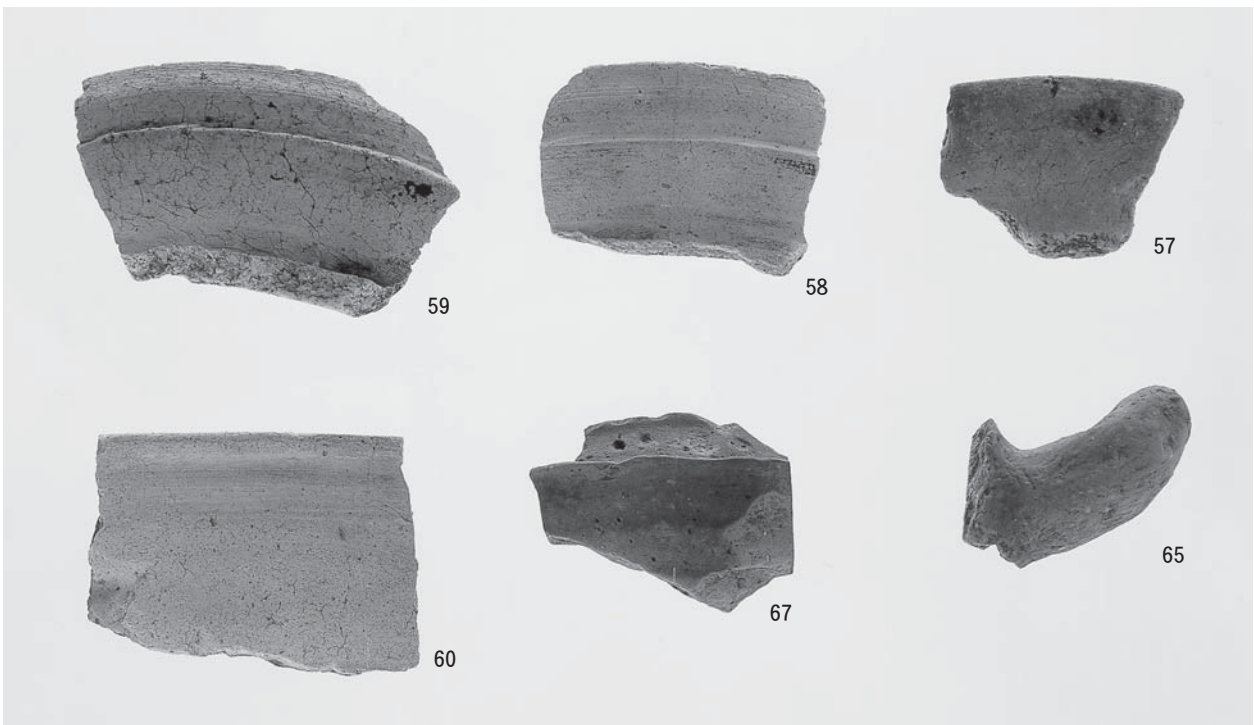
1. 竪穴住居 1～3・遺構外出土遺物



2. たわみ 2・縄文・弥生時代遺構外出土遺物

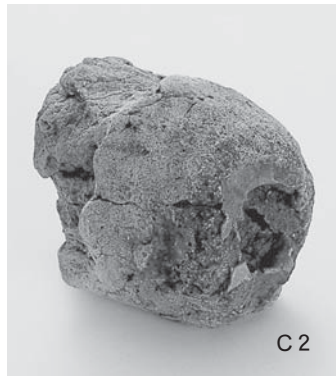


1. 竪穴住居 4 出土遺物

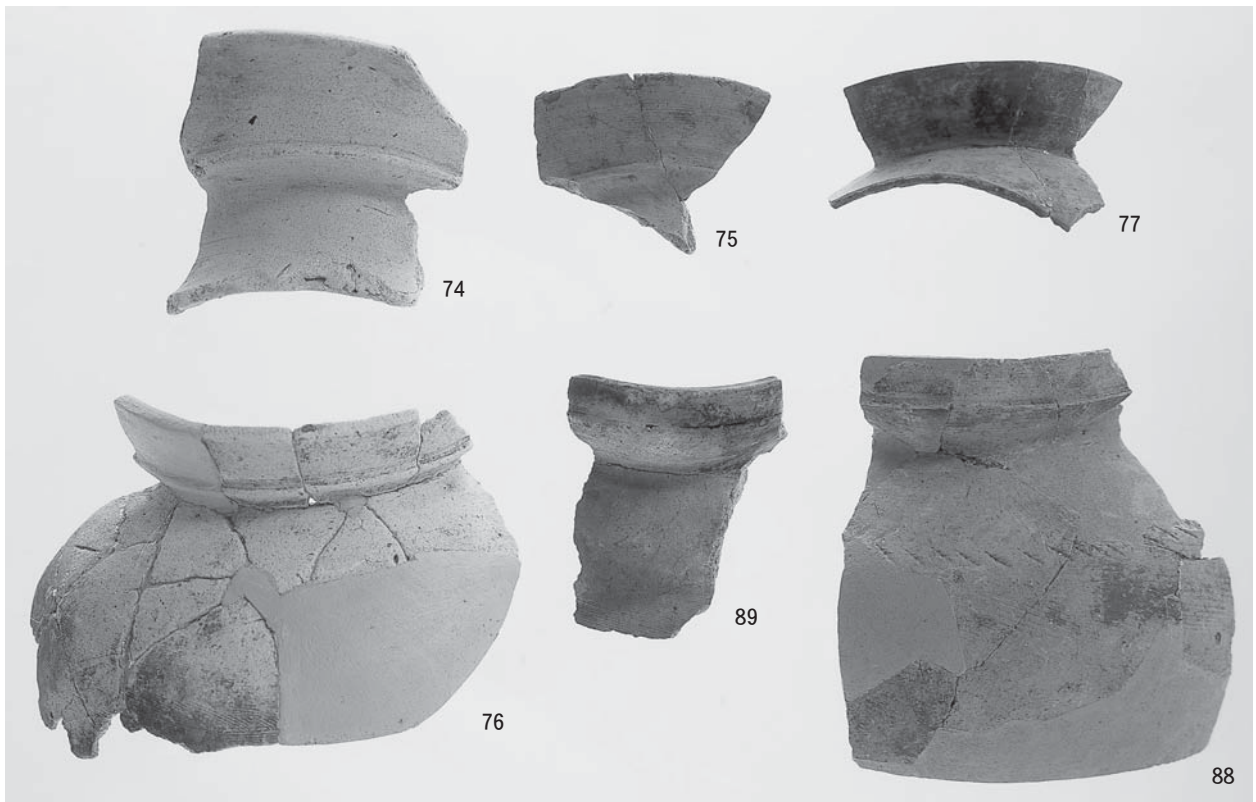


2. 竪穴住居 5 出土遺物



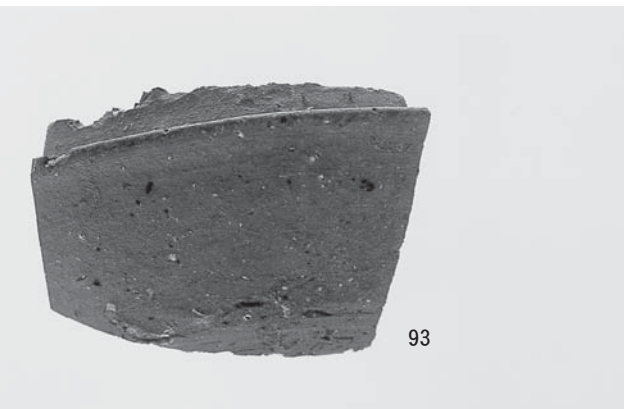
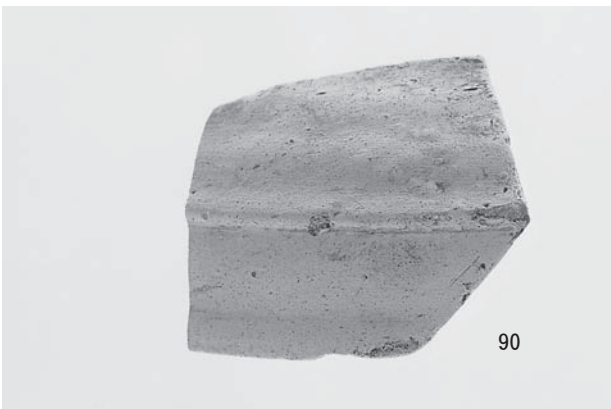


1. 豎穴住居 5 出土遺物



2. 豎穴住居 7 出土遺物

PL.18 上伊勢第 1 遺跡



1. 豎穴住居 7 出土遺物





1. 竪穴住居 7 出土遺物



2. 竪穴住居 8 出土遺物

3. 溝 2 出土遺物

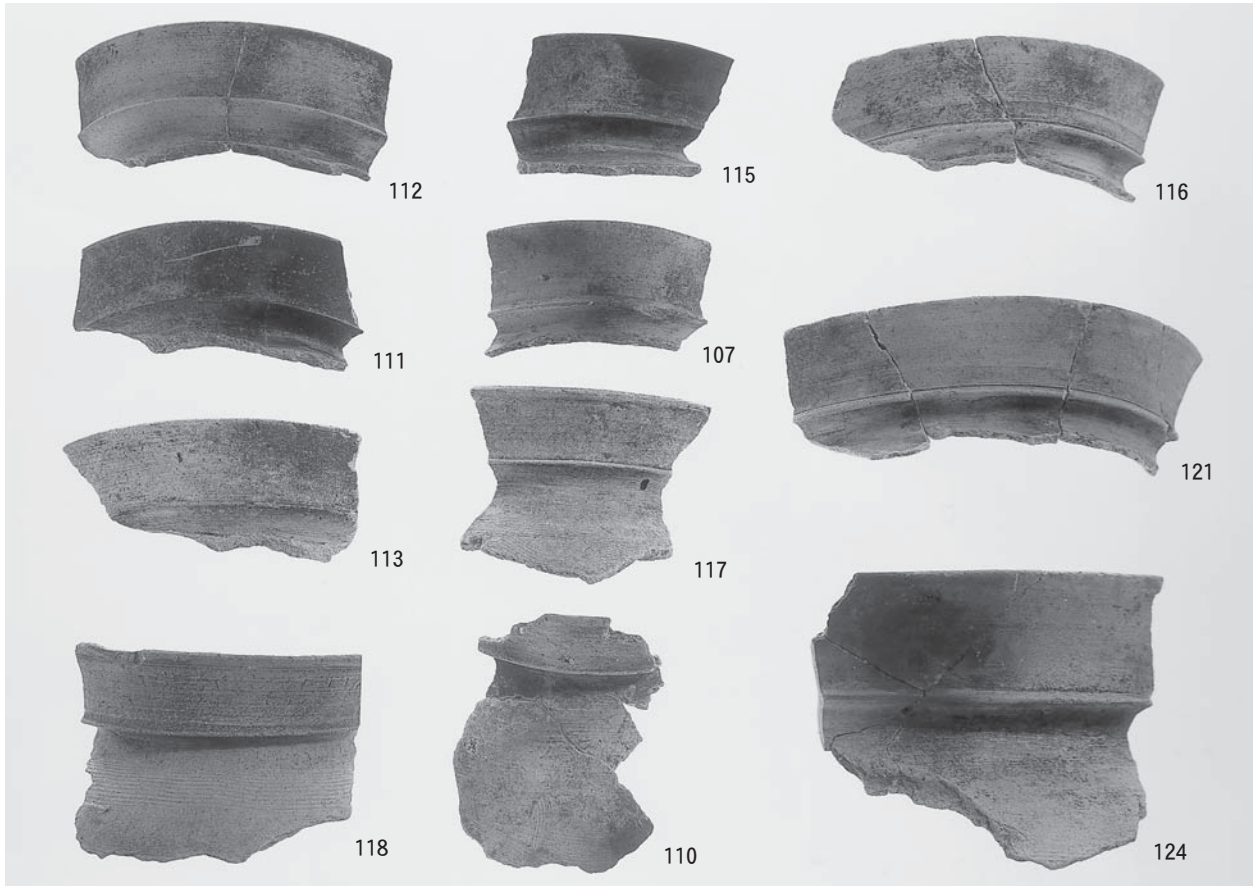


1. 竪穴住居 7 出土土師器



2. 溝 2 出土土師器



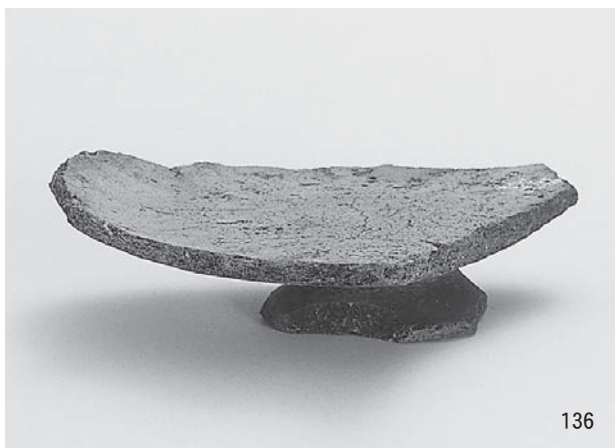


1. 溝2出土遺物



1. 溝2出土遺物





1. 溝2出土遺物

PL.24 上伊勢第1遺跡



129

1. 溝2出土遺物



149

2. 溝4出土遺物



150



152



153



155

3. 溝5出土遺物



157

4. 溝7出土遺物



163

5. 溝8出土遺物



164



166

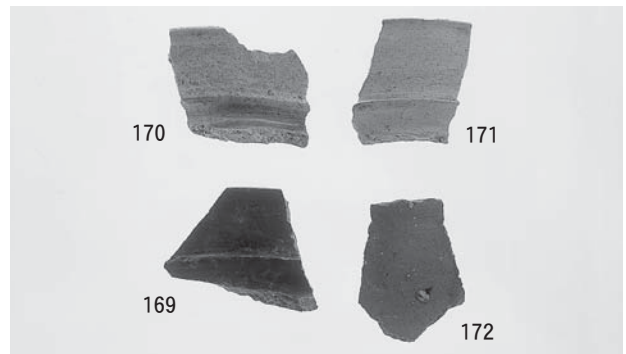


160

1. 溝8出土遺物



168



170

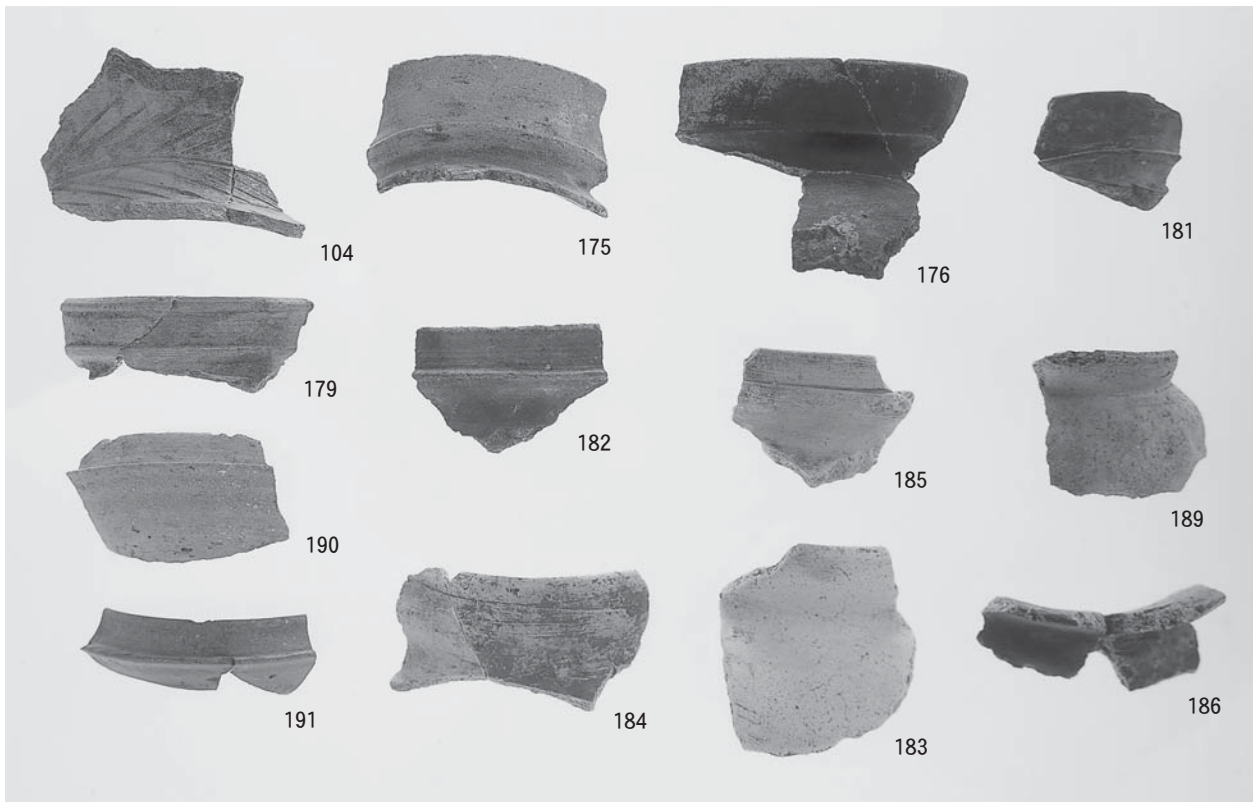
171

169

172

2. 溝10出土遺物

3. 溝11出土遺物



104

175

176

181

179

182

185

189

190

191

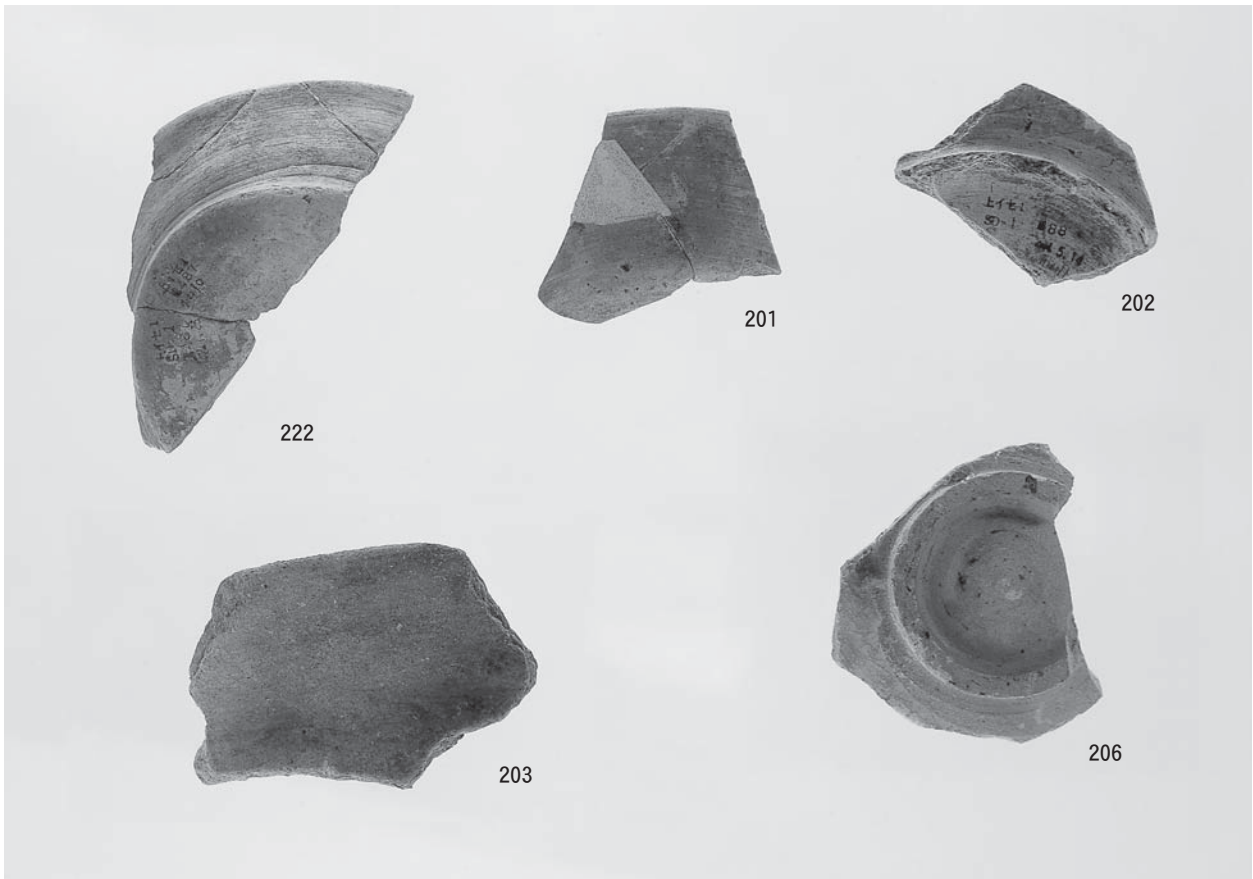
184

183

186

4. 溝2・古墳時代遺構外出土遺物





1. 溝12・古代遺構外出土遺物



207



218

2. 溝13出土遺物



3. 溝14出土遺物



4. 溝15出土遺物

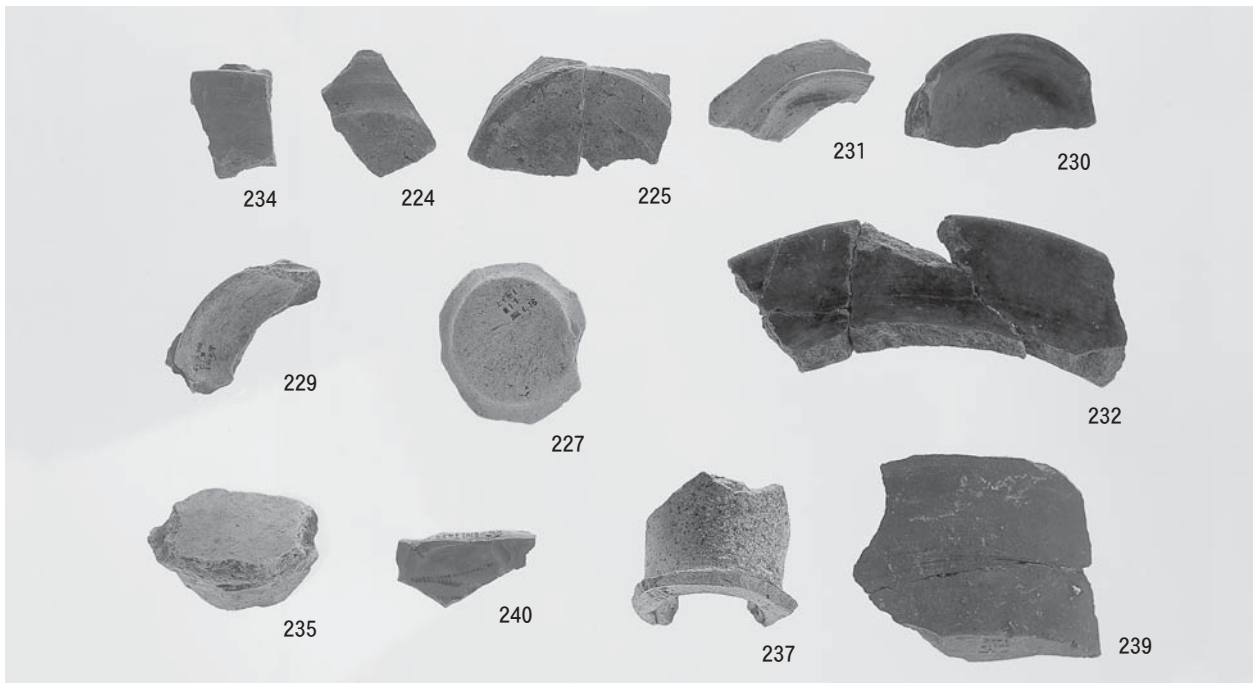




1. 墓 1 出土遺物

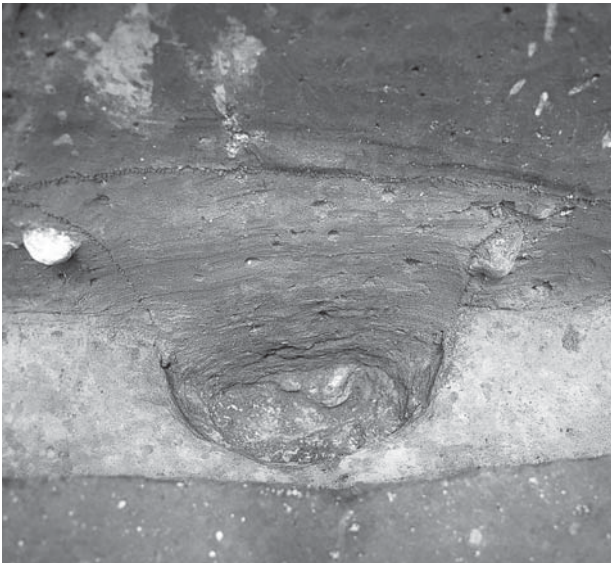


2. 墓 2 出土遺物

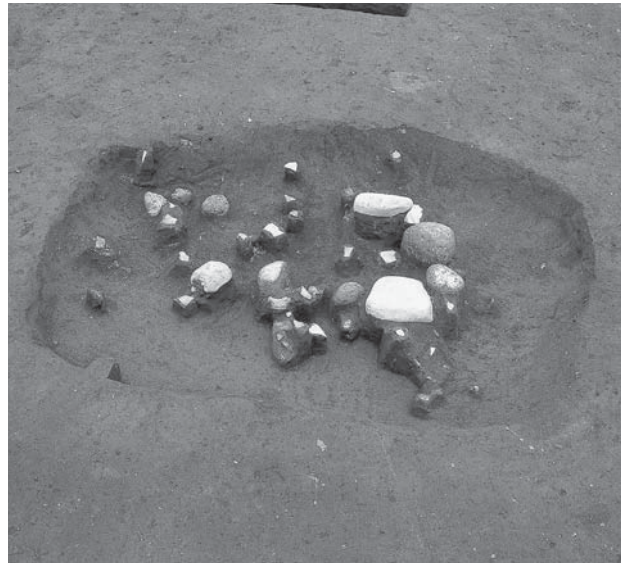


3. 古代遺構外出土遺物





1. 土坑1完掘状況（南から）



2. 土坑2遺物出土状況（南から）



3. 集石1検出状況（南西から）



4. 集石2検出状況（南東から）



5. 集石3検出状況（北から）



6. 集石4検出状況（北から）





1. 集石5 検出状況 (南東から)



2. 集石6・7 検出状況 (南東から)



3. 集石群検出状況 (東から)



4. 溝1・竪穴住居1 検出状況 (西から)



5. 竪穴住居1 完掘状況 (南東から)



6. 竪穴住居2 完掘状況 (南から)

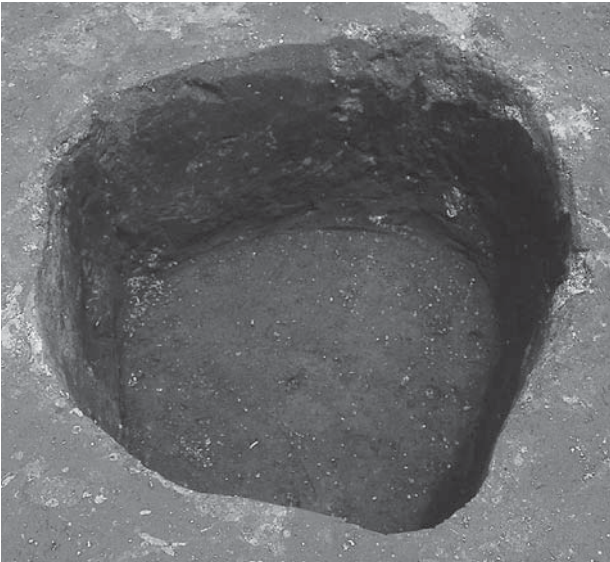




1. 土坑3完掘状況（南から）



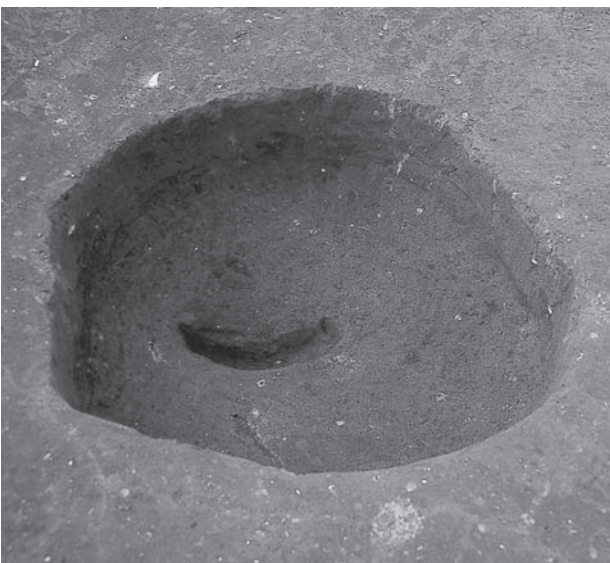
2. 土坑4完掘状況（北から）



3. 土坑5完掘状況（南から）



4. 土坑6完掘状況（南から）



5. 土坑7完掘状況（南から）



6. 集石8検出状況（北から）





1. 溝1底面検出状況  
(北西から)



2. 溝2遺物出土状況  
(東から)



3. 溝2完掘状況  
(南東から)

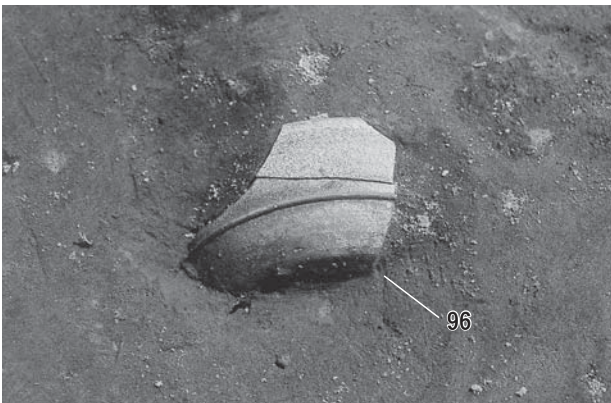




1. 溝3甕出土状況（南から）



2. 溝3甗出土状況（東から）



3. 溝3坏蓋出土状況（北から）



4. 溝3玉出土状況（南西から）

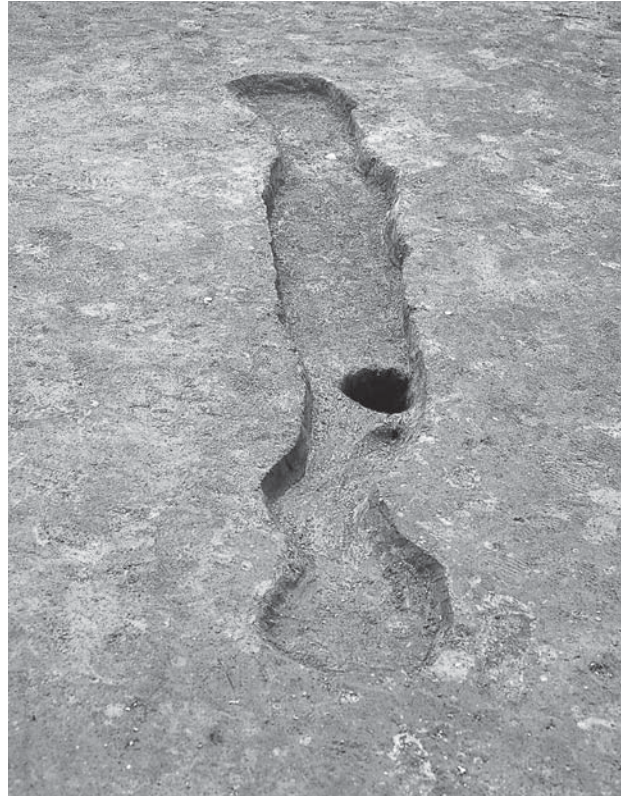


5. 溝3完掘状況（南西から）

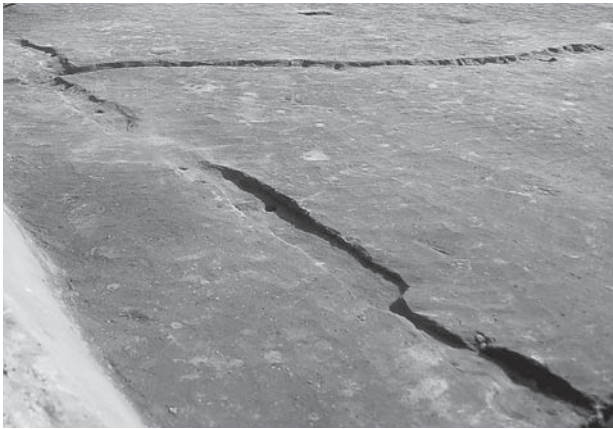




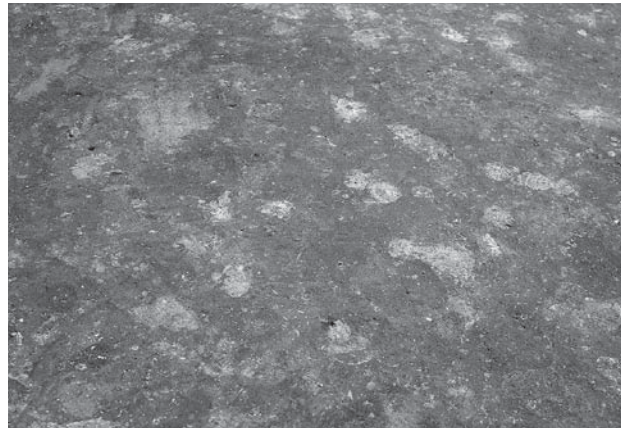
1. 溝4完掘状況（南東から）



2. 溝6完掘状況（東から）



3. 溝4・5完掘状況（北東から）

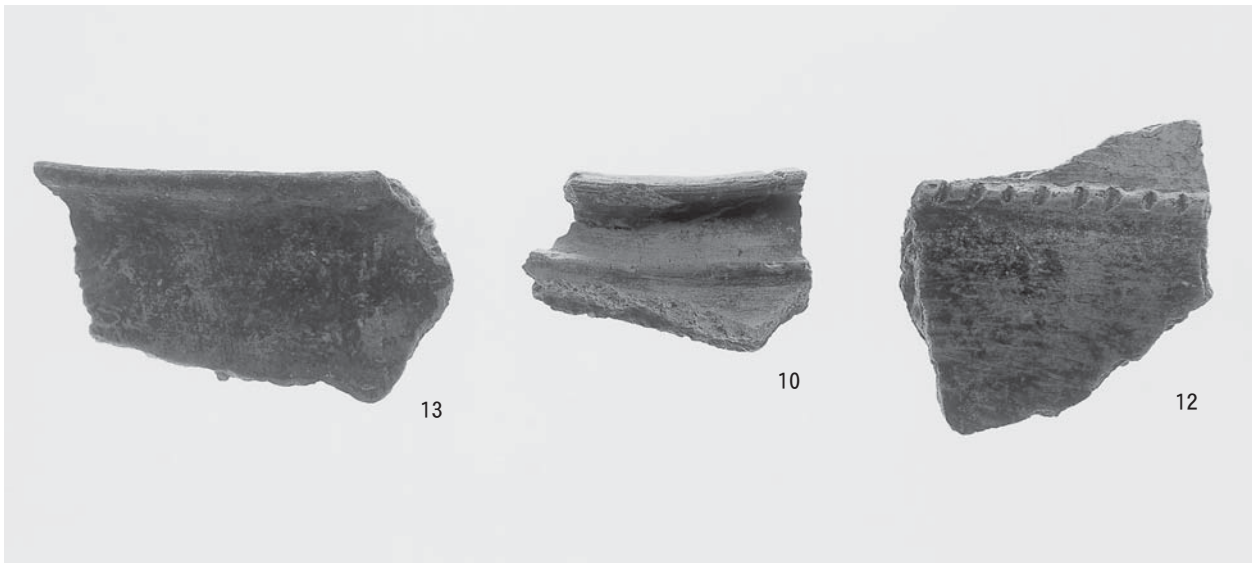


4. 畠耕作土上面の様子（南から）

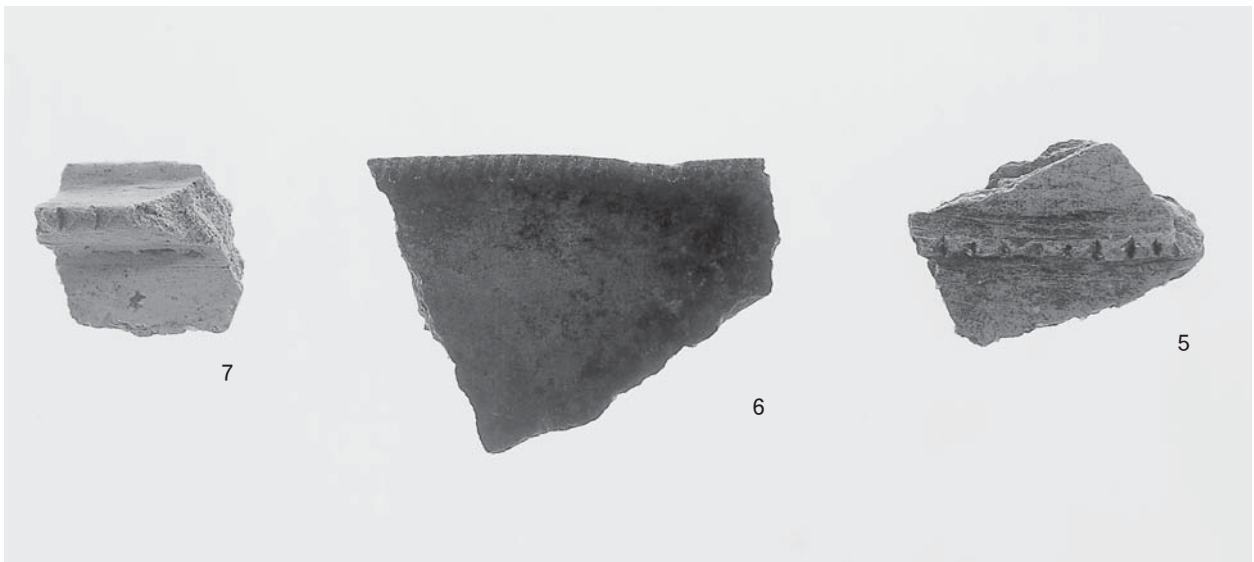


5. 畠土層断面（北から）





1. 集石 1 出土遺物



2. 土坑 2 出土遺物

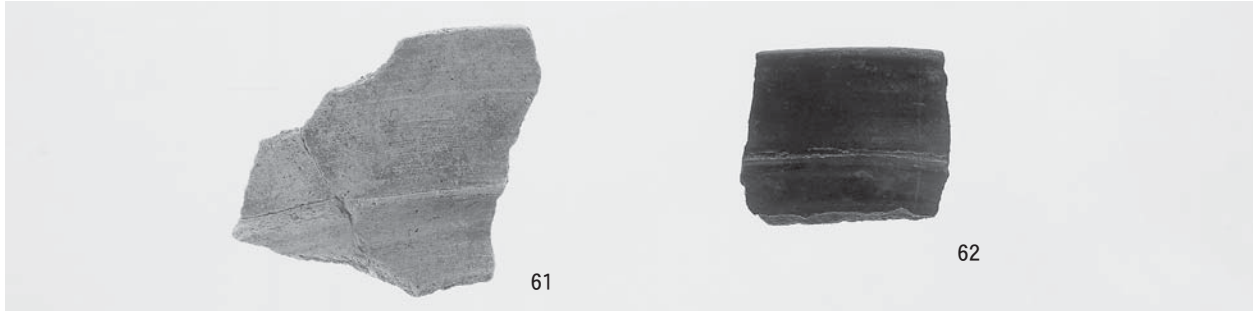


3. 集石 4 出土遺物



4. 土坑 2 出土遺物





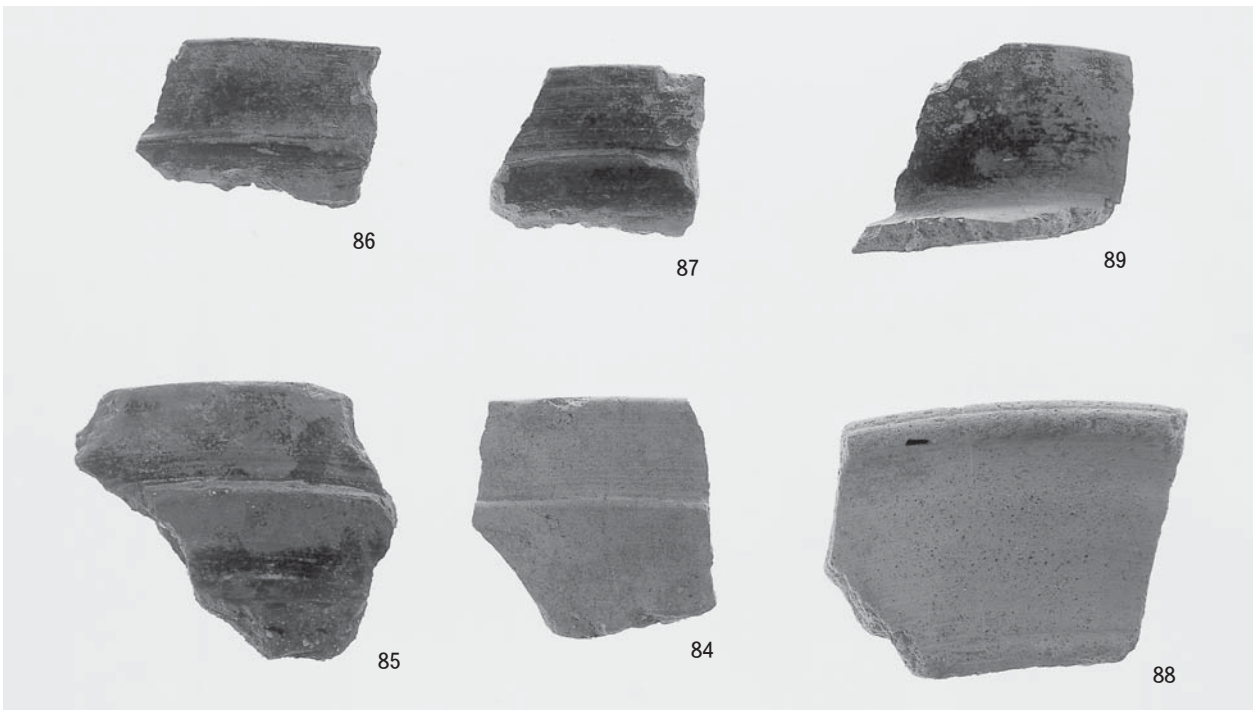
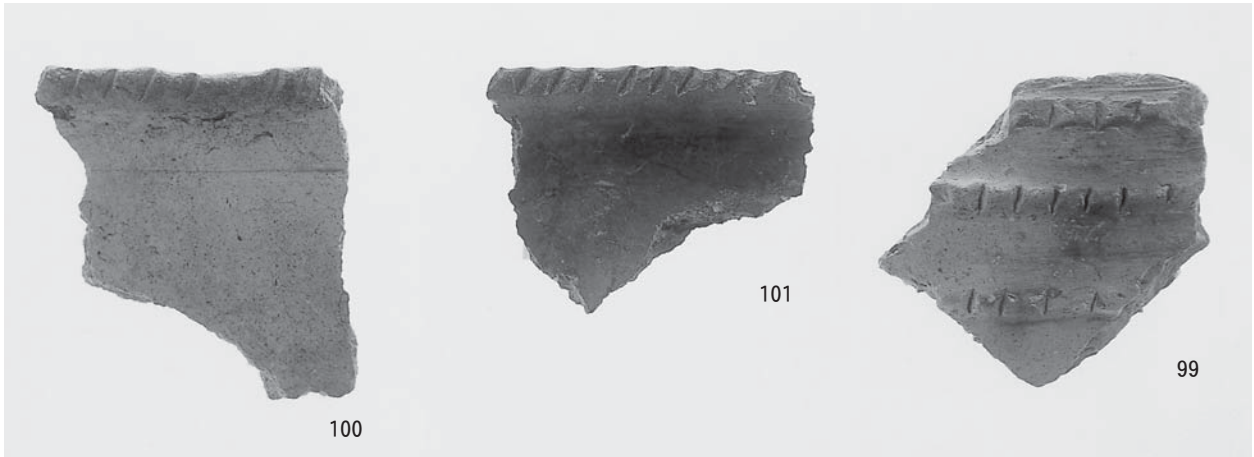
1. 竪穴住居 1 出土遺物



2. 竪穴住居 2 出土遺物



3. 溝 2 出土遺物



1. 溝 3 出土遺物



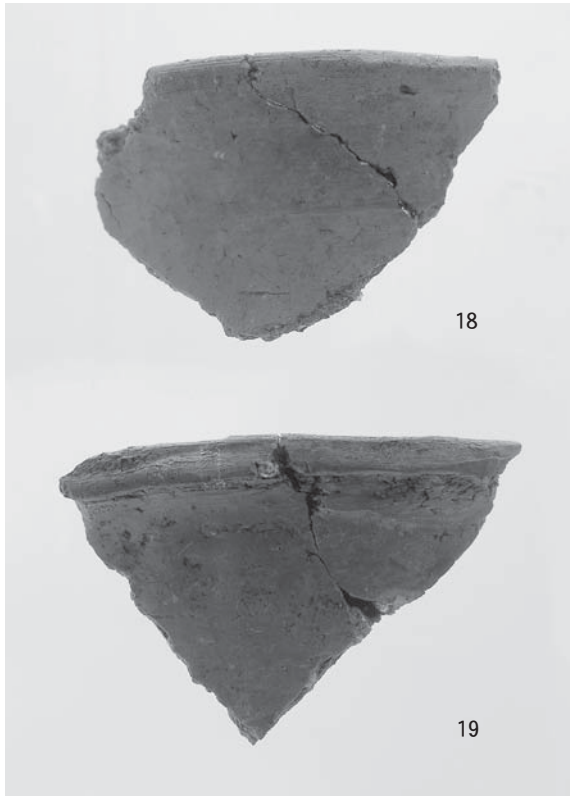
1. 溝 3 出土遺物



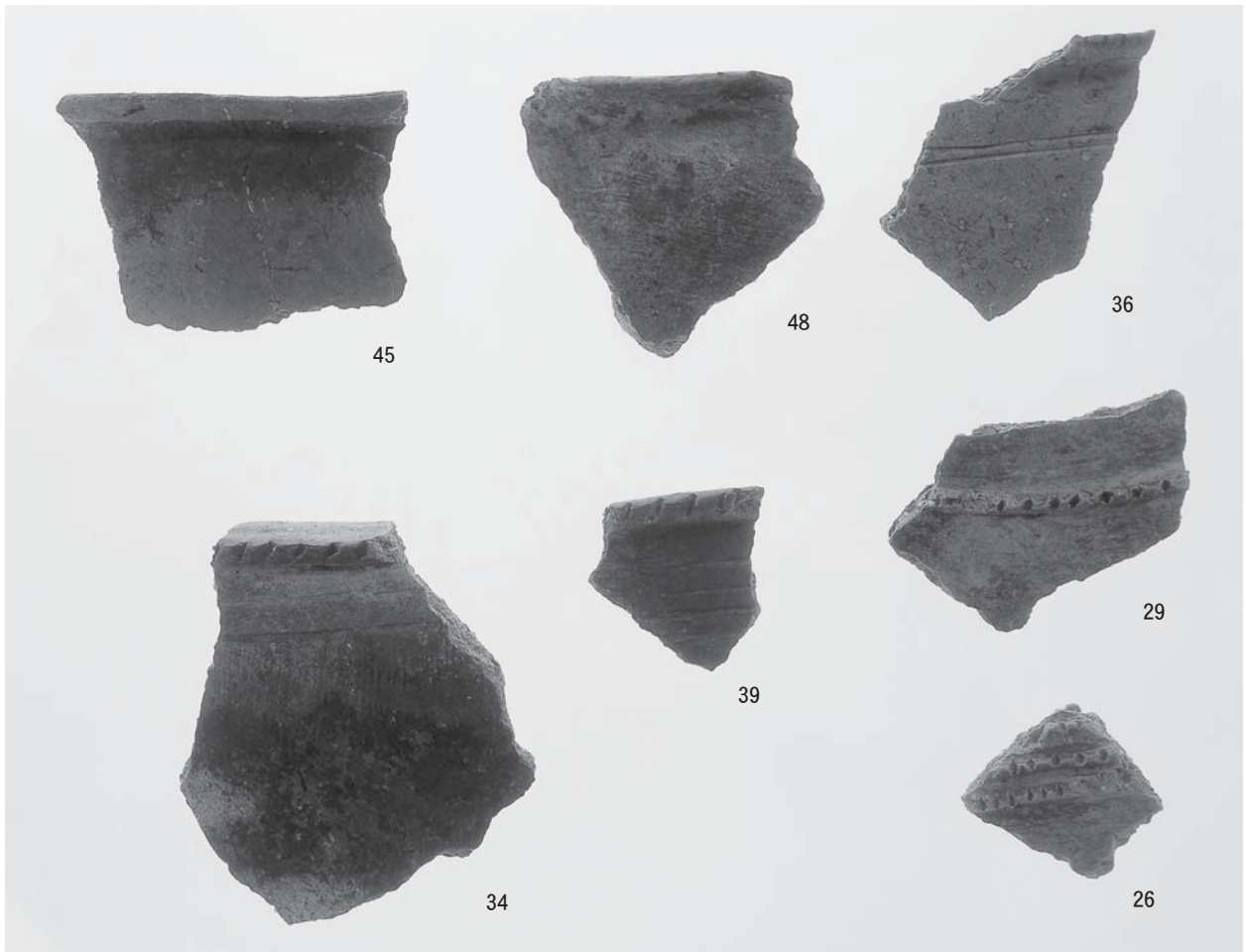


1. 1区遺構外出土遺物（暗褐灰色土）

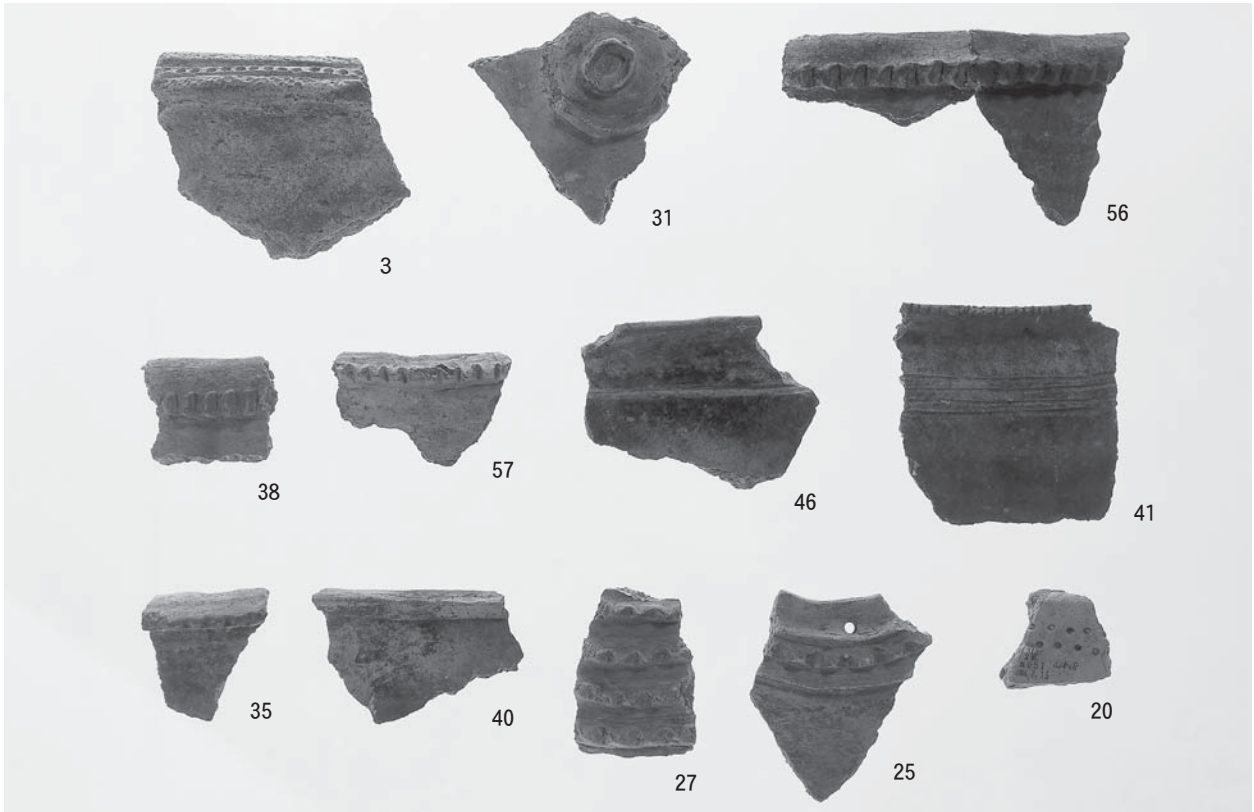




1. 2区遺構外出土遺物（暗褐灰色土）



2. 2区遺構外出土遺物（黒褐色土）



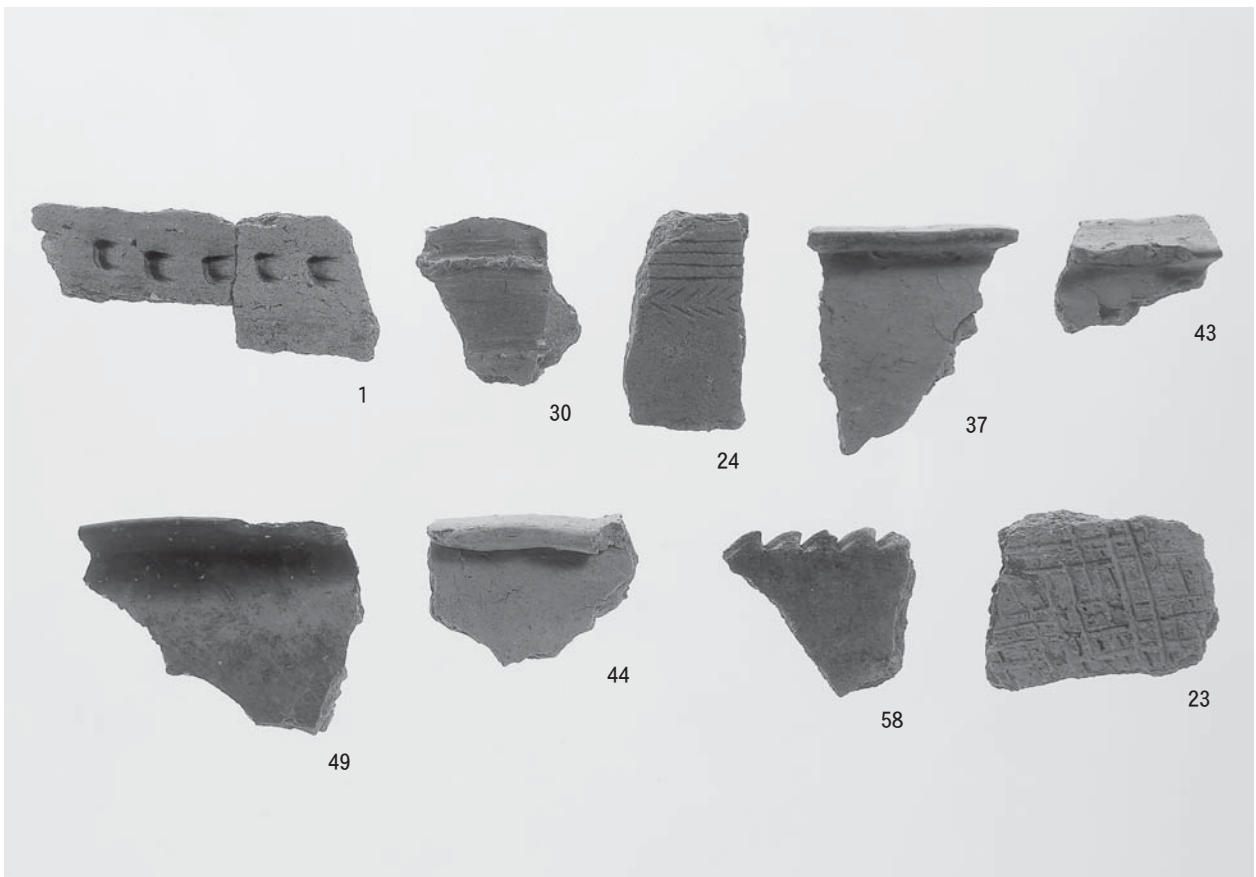
1. 2区遺構外出土遺物（黒褐色土）



2. 溝3・遺構外出土遺物



1. 土坑2・溝3・3区遺構外出土遺物

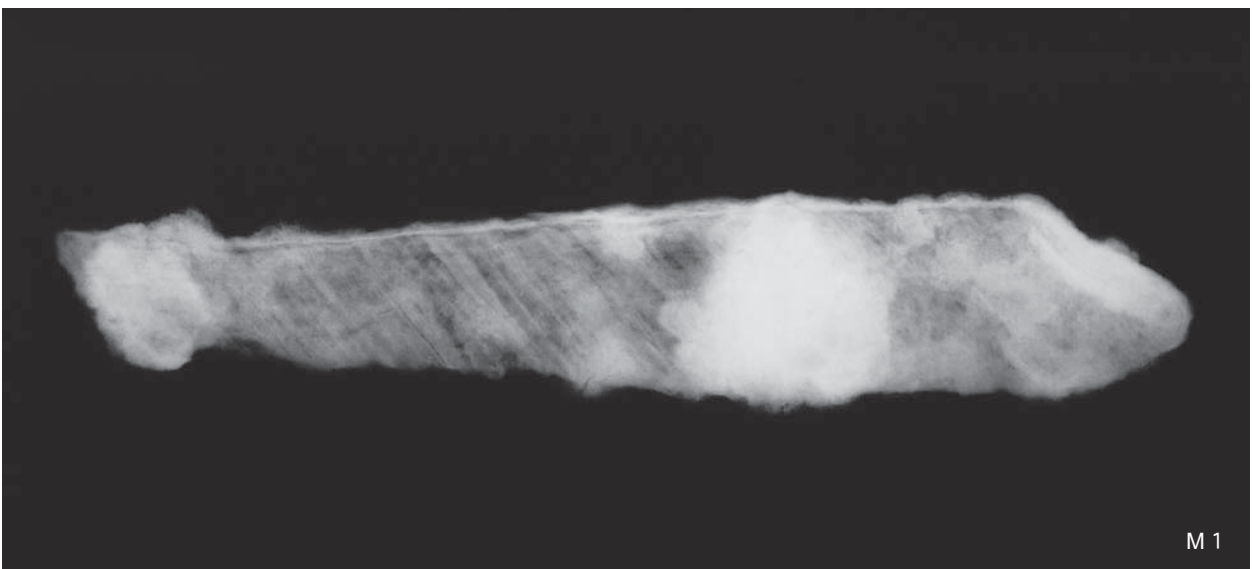


2. 3区遺構外出土遺物





1. 3区遺構外出土遺物



2. 竪穴住居2出土直刃鎌



写真 1 上伊勢第 1 遺跡地域概念図





写真2 上伊勢第1遺跡立体図（方位：北より 高さ：2倍 角度30°）





写真3 上伊勢第1遺跡地質断面

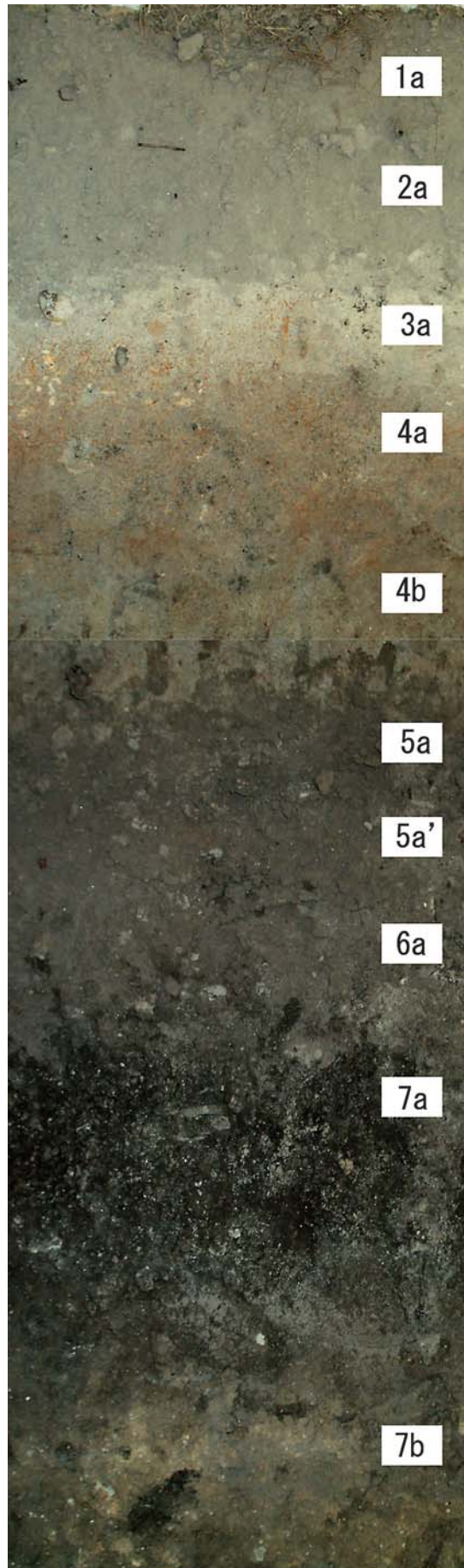


写真4 上伊勢第1遺跡第7地点



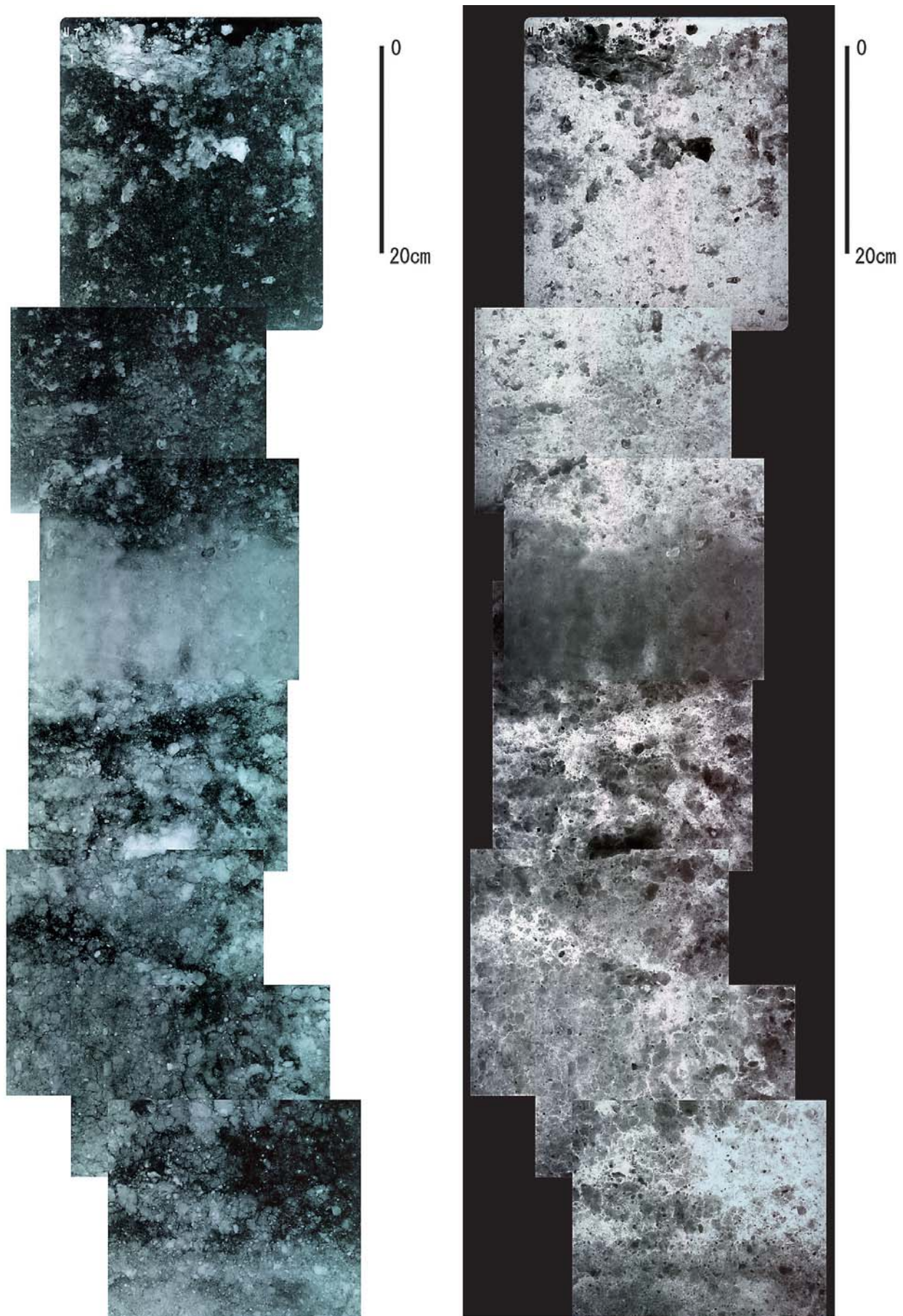


写真5 上伊勢第1遺跡軟X線写真（第7地点断面）





写真6 上伊勢第1遺跡第8地点

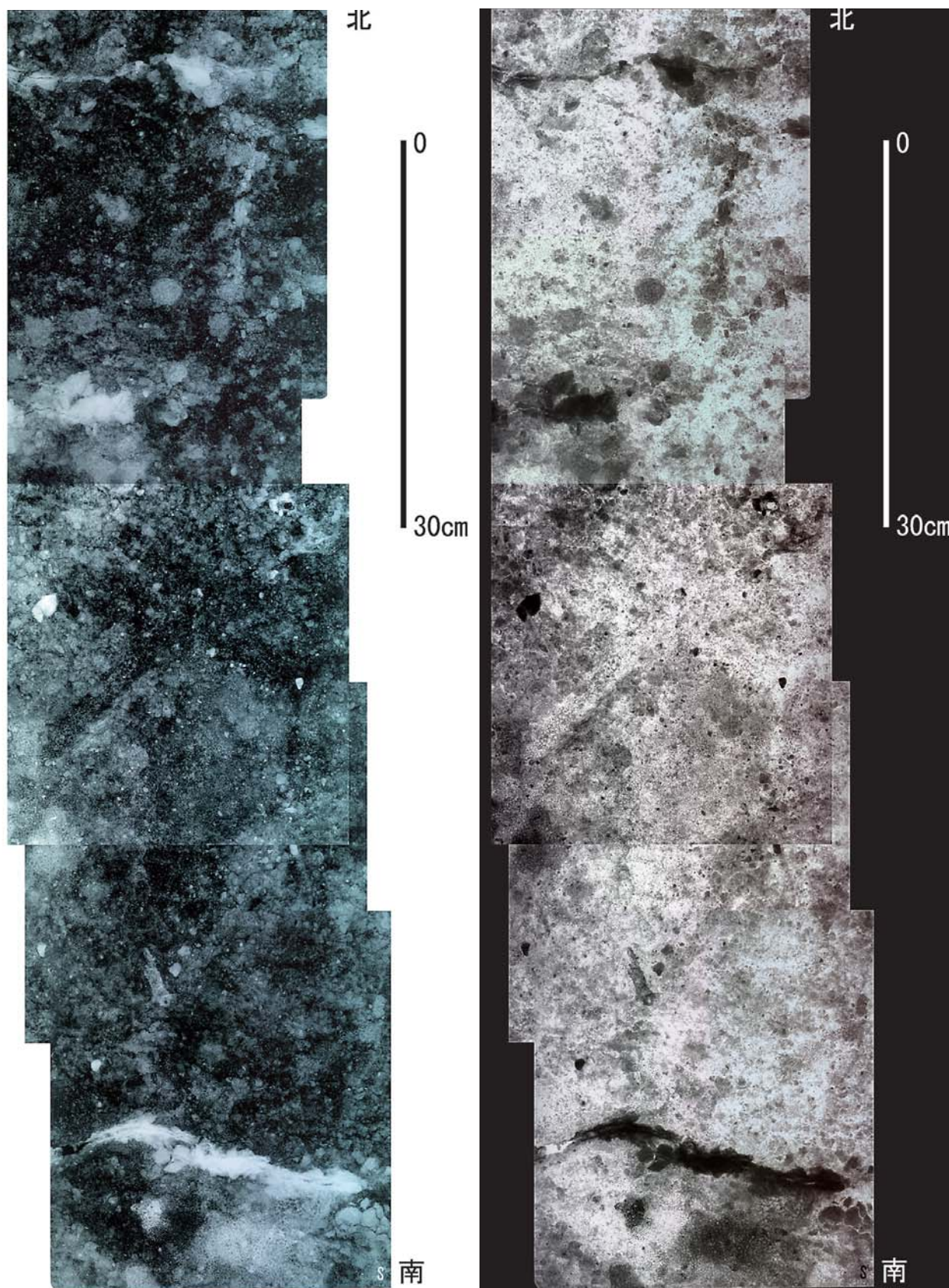


写真7 上伊勢第1遺跡軟X線写真(第8地点平面)



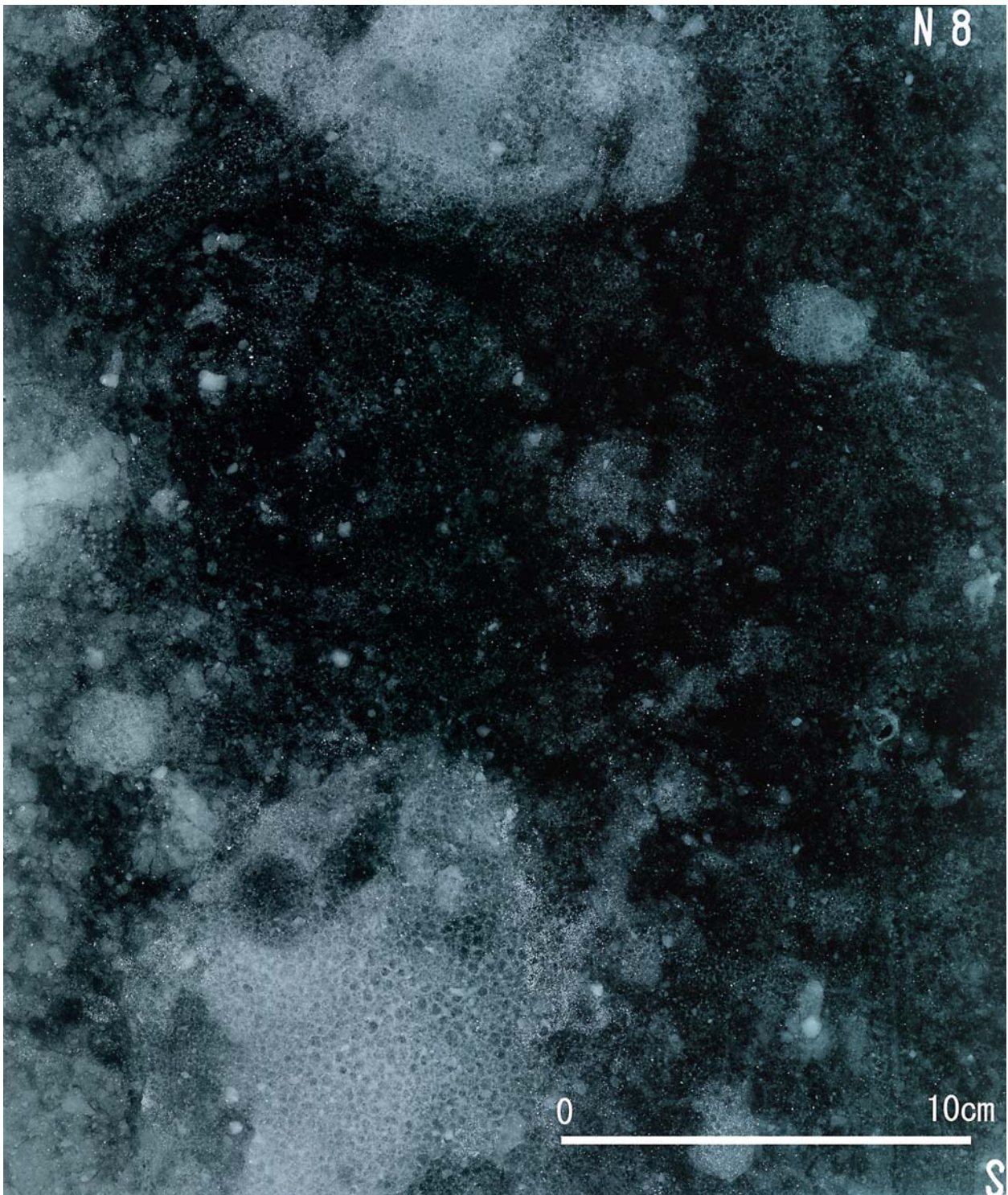


写真8 上伊勢第1遺跡畝状遺構表面の生痕軟X線写真(第8地点平面)





写真9 上伊勢第1遺跡畝状遺構表面の生痕軟X線写真(第8地点平面)





写真10 上伊勢第1遺跡第9地点

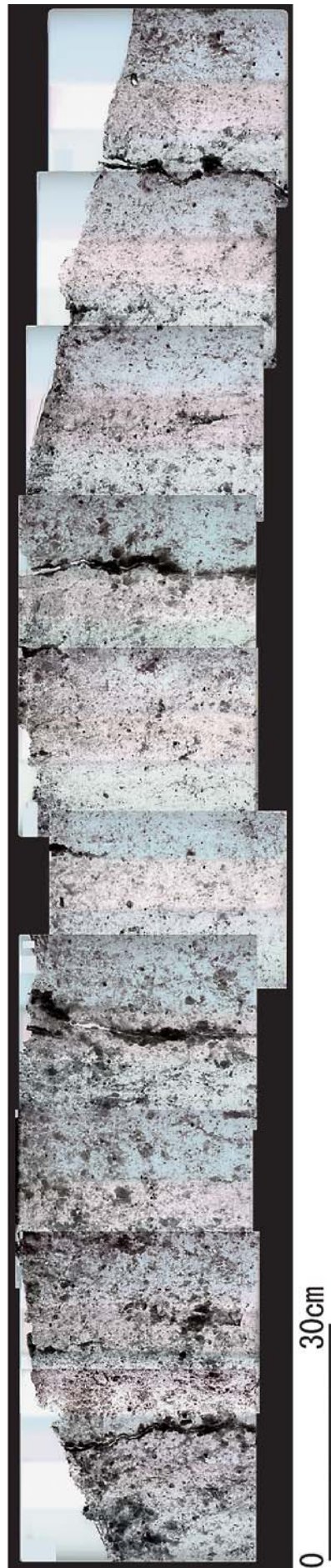
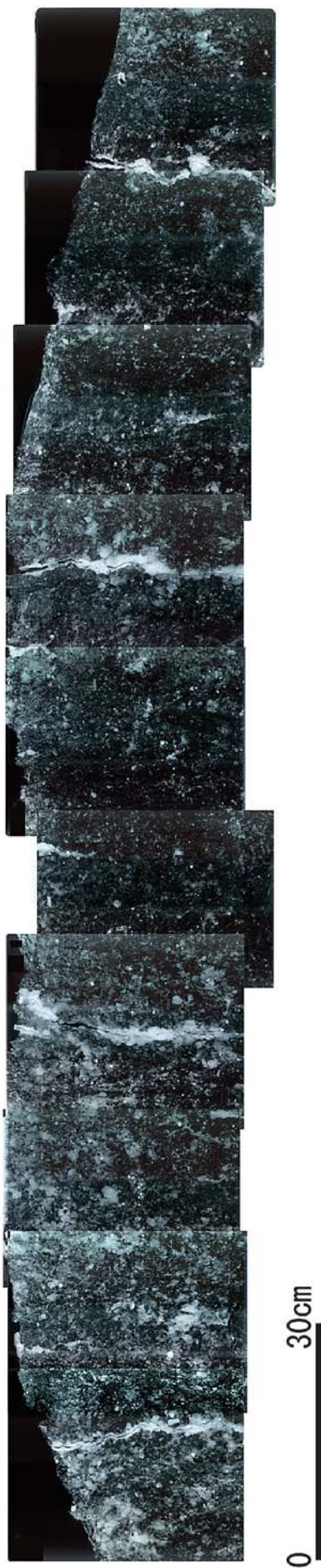


写真11 上伊勢第1遺跡軟X線写真(第9地点断面)



# 報 告 書 抄 録

ふりがな	かみいせだいいちいせき・みほだいいちいせき							
書名	上伊勢第1遺跡・三保第1遺跡							
副書名	一般国道9号（東伯中山道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	Ⅷ							
シリーズ名	鳥取県教育文化財団調査報告書							
シリーズ番号	96							
編集者・著者名	玉木秀幸、浅田康行、前島ちか、牧本哲雄							
編集機関	財団法人鳥取県教育文化財団 埋蔵文化財センター							
所在地	〒680-0151 鳥取県鳥取市国府町宮下1260番地 TEL (0857) 27-6717							
発行年月日	西暦2005（平成17）年3月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かみいせだいいちいせき 上伊勢第1遺跡	とうほくぐんことうらちょうおおあぎ 東伯郡琴浦町大字 かみいせあぎひがしまつやま 上伊勢字東松山 377ほか	31371	303	35° 29′ 14″	133° 42′ 6″	20040304 ～ 20040910	7,253.0㎡	一般国道9号 （東伯中山道路） の改築
みほだいいちいせき 三保第1遺跡	とうほくぐんことうらちょうおおあぎ 東伯郡琴浦町大字 みほあぎいっぽんぎ 三保字一本木293- 1ほか	31371	304	35° 29′ 5″	133° 41′ 30″	20040304 ～ 20040630	1,071.5㎡	一般国道9号 （東伯中山道路） の改築
所収遺跡名	種 別	おもな時代	おもな遺構	おもな遺物		特記事項		
上伊勢第1遺跡	集 落	弥生時代前期	竪穴住居 掘立柱建物	弥生土器・石器		1棟は焼失住居の可能性 がある。		
		古墳時代 前期～後期	竪穴住居・土坑 掘立柱建物・溝	土師器・須恵器・石器		—		
		中 世	掘立柱建物 土坑・墓	土師器・須恵器・磁器		—		
	生 産 地	古代～中世	溝・畠	土師器・須恵器		砂に埋没した畠である。		
三保第1遺跡	集 落	弥生時代前期	集石・土坑	弥生土器・石器		集石を7基確認した。		
		古墳時代 前期～中期	竪穴住居・溝	土師器・須恵器・ ガラス製の小玉		—		
		時期不明	自然流路・ 溝・土坑	—		—		

鳥取県教育文化財団調査報告書96  
一般国道9号（東伯中山道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ  
鳥取県東伯郡琴浦町

**上伊勢第1遺跡  
三保第1遺跡**

発行 2005年3月28日  
編集 財団法人 鳥取県教育文化財団  
埋蔵文化財センター  
〒680-0151 鳥取県鳥取市国府町宮下1260  
電話 (0857) 27-6717  
発行者 財団法人 鳥取県教育文化財団  
印刷 総合印刷出版株式会社